現代日本文學全集



杉浦非水装幀

現代日本詩集
現代日本漢詩集

改造社版

「現代日本詩・漢詩集」目次

現代日本詩集

現代日本詩集

序

明治十五年七月、外山正一、矢田部良吉、井上哲次郎の三氏による「新體詩抄」の刊行は、世に謂ふ新體詩の事實上の發生であつた。爾來八十餘年、日本歌謠を母體として新しく芽ぶいた「詩」は、かつて一國の藝文が數世紀に亙つて經過せる諸々の道程をこの短期間に實踐した。

而して誕生期の革新者の一人が、

「安ゾ知ラン……或ハ大家ノ出ルアリテ其新流義ナルヲ善トシテ一層ノ工夫ヲ加へ、更ニ人心ヲ感ゼシメ、鬼神ヲ泣カシムルノ詩ヲ賦シ出ス」云々。（「新體詩抄」矢田部尚今）

との未來への翹望はまことなりて、詩は正に興隆し「新體」の二字を脱却し、その獨特なる立場と役割とを燦然として認識せしめた。

より良き詩眼詩心を培ふためには詩の變遷、推移、發展の過程の味得するを要する。また如何なる時代の、如何なる詩人が、如何なる詩を愛するかの決定、この約束は詞華集によつて充される。

日本詩壇に於ては或時代または或流派の詞華集は渺しとせぬ。

現代日本詩集は、明治誕生期より大正に至る、詩史に輝ける詩人の詩業を、宗派的狭心を捨てて集成し、時代を序うて體系づけ、一瞰的全景を通覽せしむべき意圖のもとに編纂された。

從つて、一方、史的の事實を重んずると同時に、他方、現今の評價に堪へ得る作品を採錄し、この二點の良き統一を求めた。

現存詩人にあつては、殆ど、その快心の作を各々の自選に俟つた。

「新體詩抄」より採錄されたる數篇の譯詩を見よ。屈山が「自由の歌」を、直文が「孝女白菊の歌」を見よ。或は建樹の「鐵道唱歌」を、飛泉の「戰友」等々を見よ。たとひ其處に幼稚、粗笨、蕪雜の難はあつても、是等の國民歌謠がいかに當代の時代感情のよき代辯者たるかを思へ。ただに詩のみならず、畢竟、凡ての觀照は時代を意識してのみ正しくあり得る。

各作家の人選は愼重に愼重なる考慮を費した。又、配列の順序はもとより年代的であるが、出世作の發表期、出世年代、活躍期を參酌し案配した。然しながらこれらの尺度的嚴密を期することは、到底求むべくして得らるるものでない。

尚ほ既刊本全集にその詩を發表せる藤[illegible]外、北原白秋、[illegible]、藤[illegible]春夫の[illegible]、自然[illegible]、[illegible]いで[illegible]、[illegible]の[illegible]である。

[illegible]は、氏が特に本集のために[illegible]明治大正詩史[illegible]たる[illegible]である。[illegible]によつて[illegible]されたる[illegible]も云ふべき本集に、尚ほ觀照の[illegible]、[illegible]密、しかも詩の如き詩史論を[illegible]ことを喜びたい。

尚ほ著者八十五人の略傳は[illegible]外[illegible]の自記を請うたが編輯の都合上[illegible]した。

詩はその旺んなる興隆の結果、[illegible]にも顧慮なき進出を遂げ、今や散文化しつつある。「詩よ、何處へ行く」の聲が叫ばれつつある現在、過去詩壇の總決算書たり、無二の見本市たる現代日本詩集が、そのための良き[illegible]ば幸である。

終に、[illegible]に關し、[illegible]の[illegible]詩人諸氏、並びに[illegible]氏の寄せられたる好意を多とする。

昭和四年四月



外山ゝ山篇

テニソン氏軽騎隊進撃の詩　高僧ウルゼーの詩

テニソン氏
軽騎隊進撃の詩

其一

一里半なり一里半
並んで進む一里半
死地に乗り入る六百騎
将は掛れの令下す
士卒たるもの身を以て
理非を糺すは分ならず
否をなすべき由ならず
これ命これに従って
死するの外はあらざらむ
死地に乗り入る六百騎

其二

右を望めば大筒ぞ
前も左も又筒ぞ
共に打出す砲聲は
天に轟くいかづちの
響の如く凄まじや
弾丸雨飛の間にも
猛り立ちてぞ進むなる
死地にこそ入れ鰐の口
勇んで乗り入る六百騎

其三

抜けば玉散るやいば[illegible]に
皆もろ共に振りあげて
きら／＼／＼と輝けり
敵陣近く乗り掛けて
大砲方をなで切りす
最と目覚しき働きぞ
烟の中に乗込みて
烈しく陣を破るなり
太刀の早業見ごとなり
敵の軍勢たじ／＼と
遂にさゝふる事ならず
むら／＼ぱっとむらくづれ
馬の頭ぞ立て直す
以前に進みし六百騎
残るはいとゞわづかなり

其四

右を望めば大筒ぞ
左も後も又筒ぞ
共に打出す砲聲は
天に轟くいかづちぞ
弾丸雨飛の其中に

縦横むじん切り靡く
先手より出でて乗り戻す
敵の目より逃れ出で
[illegible]は死の一開門
六百人の其中で
殘るはいとゞわづかなり

其五

あゝ勇ましきものゝふの
よに名高しき其働
手柄は永く傳へなむ
今の人をなど生立ちて
とる年あまた重りて
腰は梓の弓となり
頭に霜を戴きて
孫ひこやしやご多き時
六百人の豪傑が
敵の陣へと乗り入れる
そのふる事を語りなば
末代までも名は朽ちし

高僧ウルゼーの詩

おさらばさらばいざさらば
我が[illegible]の威とひ
[illegible]に別るべし
人の世の[illegible]て
今日は望の芽出しなば
明日は咲きにほふ花盛り
榮に榮重りて
[illegible]を極むれば
愚な彼は思ふ樣
運命[illegible]く熟れなひ
天にも登る龍なりと
悦びいさむおろかさよ
冬や、深く置く霜の
情用捨も荒野原
根までも枯らす霜枯に
運極まりて身の墮落
見るも憐れな有樣は
我が今日の身の上ぞ
永の年月心なく
名譽の海に浮べるは
浮袋にうか／＼と
游ぐ童子に異ならず
丈の立たざる淵に入り
飽まで強き我が意地も
こらへおほせず張り裂けて
驕れはてたる[illegible]に
[illegible]して年寄れる
其の甲斐もなく今ははや
[illegible]零落に渓川
[illegible]
[illegible]らずかし
今に[illegible]に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
此[illegible]
[illegible]
後と思ふ[illegible]して
悪さ悪[illegible]さの[illegible]は
寄するより[illegible]し
女子の[illegible]取るに増す
遂に一滴する時は
天より落つるルシファなり
再び浮ぶ瀬はあらず

矢田部尚今篇

グレー氏墳上感懐の詩　春夏秋冬



グレー氏墳上感懐の詩

山々かすみいりあひの
鐘はなりつゝ野の牛は
徐に歩み歸り行く
耕す人もうちつかれ
やうやく去りて余ひとり
たそがれ時に殘りけり
四方を望めば夕暮の
景色はいとゞ物寂し
唯この時に聞ゆるは
飛び來る蟲の羽の音
遠き牧場のねやにつく
羊の鈴の鳴る響き
猶其外に常春藤しげき
塔にやどれるふくろふの
近よる人をすかし見て
我巣に害をなすものと
訴へむとや月に鳴く
いとあはれにも聲すなり
かしこには楡又こゝに
あらゝぎの木ぞ生茂る
其下かげにうづたかく
苔むす土の覆ひたる
塚に埋もれこの村の
古人長く打眠る
のきの燕もにはとりも
木魂に響く角笛も
あさぼらけにぞなりぬれば
かまびすしくはありつれど
冥土の人の眠をば
覺すことこそなかりけれ
死にたる人のはかなさよ
身を暖むる爐火も
妻のよなべも誰が爲めぞ
愛づるわらべがかたことに
爺の歸りをよろこびて
小膝にすがることもなし
曾てこの世に居りし時は
麥も小麥も其鎌に

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

功名とても浮雲の

過ぐる如きものなれば

この古人の世の樂と

ほれをりするも不運をも

わびしき妻子の暮しをも

笑ふべきにはあらずかし

富貴門閥のみならず

みめうつくしきをとめごも

浮世の名利多けれど

いつか無常の風ふかば

草葉の露もおろかなり

黄泉に入るの外ぞなき

昔にうもれし古人は

墓場の上に寺をたて

あたりまばゆき扉の内に

頌歌の聲に合すなる

樂器の音を聞かずとも

[illegible]

[illegible]

人の尊敬多くとも

[illegible]

つなぎとむべき術はなし

へつらふ人のほめ言も

長き眠は覺すまじ

考へみれば廢れたる

此古墳の古人も

世にすぐれたる英ありて

國を治むる德を具し

詩文の才も多けれど

あらはれずして失せける際

學びの海は廣けれど

わたる船路を知らざれば

心の性は賢きも

身は賤しくて貧なれば

世のほまれをば聞かずして

空しく鄙に終りけり

深き水底求むれば

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

實に此等に埋もれて

業はおとるもハムデンに

詩は拙くもミルトンに

國に寃を擧げずとも

クロムエルにも比ふべき

人のかばねやあるならむ

議院の議士を服さしめ

人のおどしも外に見る

國の安危を身に委ね

高き聲望を民に得る

此等のわざはおしなべて

古人何ぞあづからむ

惠みはひろく及ばねど

又常々のふるまひに

不德もいとゞ少しや

人を殺して王となり

民をなやめて利をあみす
夢にもみまじさることは
まことをかくすそら言に
恥づるを忍ぶ心の苦
且つ巧なる詩文もて
富貴に媚ぶる世のならひ
是は都の弊なれど
未だ此地に及ぼさず

此處に生れて此處に死に
都の[illegible]を知らざれば
其身は[illegible]の花
思ひは清める秋の月
實に厭ふべき世の塵の
心に染みしことぞなき

されど收め[illegible]しなきがらの
しるしの[illegible]側近く
建てし石碑は今もあり
文は拙く[illegible]りざまは
醜しとてもたび人の
憐を催で[illegible]かざらむ

碑面にゑれる名に年齢に
記しゝ文字は拙くも
記念の功は有るぞかし
又有がたき經文の
文句を引きてゑりたるは
人に無常を諭す爲め

誰し此世に生れ來て
程なく死ぬるその時に
別れの惜しきこともなく
浮世の花の[illegible]なば
[illegible]に打捨て、
去り行[illegible]人[illegible]し

眼の[illegible]り止むときは
戀し[illegible]るらむ身のやから
たましひ體を去るときは
いたく慕はむ妻子ども
たとひ燒くとも埋むとも
人の[illegible]ひは消えはせじ

偖又先に古人の
いは[illegible]は書けど余とても
い[illegible]にたの

過ぎ行く後は世の人の
如何せしやと思ひやり
たづぬることも有るならむ

しからむ時は此さとの
頭に霜を重ねたる
老人斯くぞ曰ふたらむ
我儕は彼れが朝早く
昇る旭を見ばやとて
岡に登るを常に見き

又彼[illegible]なる川ばたの
枝[illegible]れし山毛欅の木の
わだかまりたる根の側に
身を横たへて晝いこひ
流るゝ水に打臨み
其常なきを[illegible]こちけむ

又彼處なる[illegible]葉木の
木立の下にさまよひて
かしら傾けうでを組み
知る人なさの數かしさ
とゞかぬ戀の口惜しさ
世の[illegible]

さるにひと日は彼の人を
仆れ！岡にも樹陰にも
絶えて見ることなかりけり
其骸になりぬれど
野にも森にも川邊にも
身をば現はすことぞなき

又其次の朝ぼらけ
屍送る歌きけば
まさしく彼の爲めなりき
君は字を知る人なれば
彼の山櫨の陰にある
碑文を讀みて識りたまへ

碑文

土に枕しこの下に
身をかくしたる若人は
富貴名利もまだ知らず
學びの道も暗けれど
あはれ此世を打捨てゝ
あの世の人となりにけり

仁慈深き人なれば
天も情を懸けけり
憂き人見れば涙ぐむ
(外に施すべきなき故に)
ひとりの友はありしとよ
(外に望みはなかるらむ)

これより外に此人の
善し惡し共になほ深く
尋ぬるとても詮はなし
たましひ既に天に歸し
後の望みをいだきつゝ
神にまかして侍るなり

春夏秋冬

此詩ハ句尾ノ二字ヲ以テ二句ヅヽ韻ヲ踏ミタルモノナリ。例ヘバ「よろこばし。」「暖かし。」ノ如シ。

春は物事よろこばし
吹く風とても暖かし
庭の櫻や桃のはな
よに美しく見ゆるかな
野邊の雲雀はいと高く、
雲井はるかに舞ひて鳴く

夏は木草の葉も茂り
百日紅も咲きにけり
夕暮かけて飛ぶ蟲は
集まり來る軒のきは
人は我家を立出でて
なほ涼むらむさよふけて

秋は尾花にをみなへし
桔梗の花も開くべし
晴れて雲なき青空に
照らす月影明かに
されど何處も同じこと
寂しく見ゆる家の外

冬は雪霜いと深く
冷ゆる手足を暖かく
なさむ爲とて爐火に
近く團居をする時に
風は吹き入る戸のあはひ
外の方見れば銀世界

井上巽軒篇

玉の緒の歌　比沼山の歌



玉の緒の歌

一名人生の歌

眠る心は死ぬるなり
見ゆる形はおぼろなり
あすをも知らぬ我命
あはれはかなき夢ぞかし
などとあはれにいふは惡し
我命こそまことなれ
刹那こそたしかなれ
[illegible]はをはりの無限ならず
人は僅にこの現在と
いふ時から[illegible]こと

人の願は喜か
人の願は悲か
人の願はこれならず
唯怠らずはたらきて
今日よりまさる明日をまて
業は久しく時は馳す
強を[illegible]だも絶えず
鼓の如く撃ち續け
一日々々にあかしなる
死出の旅をぞはやすなる
[illegible]き世の中に
此身を任せて先驅に
なりてます〳〵進むべし

言なき唖となる勿れ
牽かるゝ牛となる勿れ
如何に未來は樂しきも
如何に空しき過去なるも
只に之を打捨ておきて
われを忘れて[illegible]を知り
はたらくべきは今日ばかり
すぐれたる人世に多し
われとても人間に
[illegible]をば斯くならむ
ゆめ怠らず勉めなば
[illegible]く[illegible]む此名をば
[illegible]を世の中に

舟失ひて波の間に
獨り漂ふ我友は
我名を聞きて勇まなむ
我名を聞きて進まなむ
さすれば人は氣を張りて
事業ばかりに心して
如何なる運も事とせず
高きに至れ馳せゆけよ
樂あるぞはたらけよ

比沼山の歌（冒頭の六節）

丹後の比沼の山頂に、
眞井と云へる泉あり。
苔むす巖のあひだより、
沸々出でて玉を吹き、
吹散らしては雪を成し、
又流れては深碧に、
繞り廻りて潭となり、
夏をよそなる水の色。」一

雨後の新緑、立ち圍み、
滴るかと疑はれ、
名をも得知らぬ鳥さへも、
清き聲にて鳴き來る。
渚に咲ける山躑躅花、
燃ゆるばかりのくれなゐの
影をば波に碎かせて、
千々に錦を織りなせり。」二

何處よりかは知らねども、
天女八人水に入り、
さも愉快氣に戯れて、
泳ぐもあれば、跳ぶもあり、
花をかざして歌ふあり、
波を潜りてあさるあり、
又兩人して手をば取り、
引きつ引かれつ笑ふあり。」三

狂ふ天女に激しつつ、
水は縱横ほどばしり、
花の顔、雪の肌、
洗ひ出だせる其樣は、
何に譬へむ、嗚呼牡丹か、
雨を帶びたる海棠か、
露を凝らせる芙蓉花か、
匂ふ櫻か、將た紅梅か。」四

脣赤く齒は白く、
雲とまがふ亂れ髪、
柳葉の眉、花の脣、
秋波の眼、星宿り、
孰れも同じみめかたち、
世に類なき手弱女の
喜ぶ面、あな美しき、
月の如くに輝けり。」五

和奈佐の翁媼、
女が姿を怪みて、
さても不思議や山頂に、
何者ぞとて獨りごち、
泉ほちかく進み寄り、
巖の陰より窺へば、
とはそも如何に、幻か、
天女八人水をあぶ。」六



湯淺半月篇

天地初發　大極殿

天地初發

一

靜なるものにもあるかな、
永遠の黒暗いとふかき
水の面。
水蔽ふ黒暗ふきはらふ
靈風のうちにあやしき
聲すなり。
「人の子よ」とよばれてひとり
おどろけばかさねてよびぬ、
「人の子よ」。
よぶは誰ぞ、神の使か、
羽衣の黄金の袖の
音もせず。
よぶは誰ぞ、神の子等か、
雲鳥は紅錦の裾の
影もなし
見あぐれば黒暗ふく風に
聲ありて三たびよびけり
「人の子よ」。

二

聖靈

「きよからぬ肉の眼をもて、
おろかにも聖靈をみむと
思ふかや。
日の本の歌仙もいまだ
しら雲のうへなる天の
神あそび。
むかし我へブライ人に
きかせたる天地初發の
神樂歌。
汝がために天水地の
三の靈今やうたはむ、
いざやきけ」。

三

天靈

「光あれよ」とエロヒムの

詔ひければ光なりぬ。
いとやはらかし光始なき
常夜の黒暗を射けそめて、
暗にわかるゝ光かな。
みよ、光は晝となり、
くらきは夜となりにけり。
此新らしき光をば
善しとみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第一日の日。

水靈

「元始闇のまかゞなく、
底なしらぬ水の中に
蒼穹あれ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
水の中なる蒼穹の
上と下とに水と水
立分れつゝ、久方の
天つみそらとなりにけり。
空の海にも風たちて、
たゞよふ雲の波間より
みどりみえけり天の原。
此新らしき蒼穹を
善しとみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第二日の日。

地靈

「水あつまりて大地を
あらはれしめよ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
天の下なる水はみな
ひとつ處にあつまりて
大洋とこそなりにけれ。
水の面にあらはれて
乾き初めくる地はみな
高峰とこそはなりにけれ。
「いまぞ野山に草の種、
木の實なれよ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
若草もゆる池のべに
青葉しげれる岡のべに
花はいろ／＼さき出でぬ、
木の實さまざまなり初めぬ。
此新らしき海山を
善しとみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第三日の日。

天靈

「大空にいま光明ありて
晝と夜とを[illegible]てよ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
色あやなしき大空の
みはるかす[illegible]は雲もなく、
いまさしいづる日は初日、
月は新月[illegible]夜、
光と暗をわかちつゝ、
日は日を治め、月は夜を
まもるしるしぞなりにける。
見よ、清き日も、寒き日も、
播種時も、收穫時も
かぞへて知れよ天つ星。
此新らしき光明をば
善しとみたまふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第四日の日。

水靈

「水に魚すめ蒼穹に
鳥とべかし」とエロヒムの

詔ひければ然なりぬ。
波しづかなるわだつみの
海の深みに鯨うき、
岩きりとほし谷間ゆく
川の淺瀬に若鮎とぶ、
ひれふり遊ぶうろくづの
うかぬ淵こそなかりけれ。
たゞよふ雲に嵐ふき
高峰の岩に鷲さけび、
殘る日影に小雨ふり
麓の森に鳩のなく、
はね試むる百千鳥
鳴かぬ空こそなかりけれ。
此新らしき魚鳥を
善しとみたまひ「とく生めよ、
蕃息よ、充滿よ」と殊更に
祝ひ給へるエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第五日の日。

地靈

「大地の面に昆蟲もすめ、
獸もすめ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
深山の小鹿、峰の猿、
斷谷の荒熊、洞の獅子、
岡べの羊、野邊の牛、
小草がくれにはふ蟲の
數もしられず、誰が爲に
これらを創造りたまひけむ、
此美しき大地の
主となるべきものやたれ。
神言きかむとかしこくも
御前にちかくつどひたつ、
諸の子等をばみたまうて、
「いでやわれらに像りて、
人てふものを創造らなむ、
そをば男と女とに
つくりて大地を治むべき
長となさむ」とエロヒムの
詔ひければ然なりぬ。
人の糧なる木々の實の
味うまし鳥獸
たふみどりの草多し。
「人も獸も皆生めよ、
蕃息よ、充滿よ」とエロヒムの
祝したまひぬ。見よ、人は
神の像につくられて、
野山の獸、空の鳥、
海のいろくづこと〴〵く
治むる君となれるかな
此新らしき天地の
萬物をいと善しと
よろこび給ふエロヒムの
大御業こそかしこけれ。
夕となり、朝となりけり、
第六日の日。

四

天靈

エロヒムの
神榮高し、いや高し。
日も、月も、星も
創造りたまひし空を見よ。

水靈

エロヒムの
神意深し、いや深し。
洲も、磯も、島も
創造りたまひし海を見よ。

地靈

エロヒムの
神力廣し、いや廣し。
木も、草も、花も

御造りたまひし山を見よ。

五

崇し、崇し、いや崇し。
高し、深し、いや深し。
天地を造る御業より
やすませ給ふエロヒムの
祝しきよめし日にしあれば、
夕もなく、朝もなかりき、
第七日の日。

大極殿

冷泉橋をたゞひとり
わたる流水の風さむみ。
應天門を過ぎ行けば
石の御階におき初めし
霜うつくしき碧瓦、
大極殿の右左、
蒼龍白虎も高樓の
丹ぬりの軒に朝日さし、
黄金の鴟尾はまばゆくも
晴れたる空にかゞやきぬ。

玉垣つくる神杉の
木の間にちらと紅葉
[illegible]は雲[illegible]の
錦の御衣のうごくなり。
緑にかけたる羽衣の
袖こそみえね女神の
御姿なれや御姿は
天つ乙女にことならず、
かをるもあやし白帯の
花の御帯は竜田姫、
まことに秋の女神なり。

女神は我にいひけらく
「いさやきけかし我友よ、
櫻は一夜蓮は朝、
さかりみじかき世ならずや。
柳に野分、竹に雪、
折られがちなる世ならずや。
野山に木々は多けれど、
楓にまさるものやある。
もし樹を植ゑば汝が庭に
かならず植ゑよ若楓。
春の若葉もめづらしく、
夏は青葉の陰すゞし、
秋は紅葉の色深く、
冬は[illegible]。
一冬は[illegible]閉ざせれば、
[illegible]
落葉[illegible]、
木[illegible]寒き[illegible]
わ[illegible]、
御目をあはれ我[illegible]に
つけなむとするをりしもあれ
平安宮の殿司
八ひら手たかくうつ音に
さめておもへば夢なりき。

山田美妙篇

戰景大和魂　花の雲　つぼすみれ



戰景大和魂

敵は幾萬ありとても、
すべて烏合の勢なるぞ。
烏合の勢にあらずとも、
味方に正しき道理あり。
邪はそれ正に勝難く、
直は曲にぞ勝栗の
堅き心の一徹は
石に箭の立つ例あり、
石に箭の立つ例あり。
などて怖るゝ事やある。
などてたゆたふ事やある。

亂砲亂發百雷の
音凄じく吹く風は
血の臭氣を運來て、
鼻にかぐだに腥き。
思へば死人多からむ。
敵に死人の多からば、
そは好き機よ揉潰せ。
味方に死人多からば、
そは危かり、疾く救へ。
などて怖るゝ事やある。
などてたゆたふ事やある。

風にひらめく聯隊旗、
記紋は昇る旭よ。
旗は飛來る彈丸に
やぶるゝ程こそ譽なれ。
身は日本の兵士よ。
旗にな恥ぢぞ、進めよや。
斃るゝまでも進めよや。
裂かるゝまでも進めよや。
旗にな恥ぢぞ、恥ぢなせぞ。
などて怖るゝ事やある。
などてたゆたふ事やある。

雪を含める朝風に
向つて嘶く馬の聲。
凍ゆる手先取緊めて、
吹きぞ合はする喇叭の音。
是等の響聞く時は
鈍き心もまた勇む。
さるを何ぞや武士が
厭まぬ事の有るべきぞ。

いさゝ陣を乱さむも、
などて怖るゝ事やある、
などてたゆたふ事やある。

こは敵中に囲まれぬ、
衝破して囲を脱づな、
こゝに囲まれたる者は
すべて一騎当千の
苦楽を同にせし者ぞ。
おなじ戰士の戰死は
賜らでも無き者なるよ。
命を安く賣りなせぞ。
なるべき程に高く賣れ
などて怖るゝ事やある。
などてたゆたふ事やある。

星影寒く、夜は更けぬ。
今宵は月も出でざれば、
夜攻あらむも料られじ。
鞍を下すな。馬々に
秣與へて夜を明かせ。
すは聞け、遠砲雷一聲。
すは敵寄せなむ、用意しれ。
味方は小勢なりとても、

これぞ日本男兒ぞ、
などて怖るゝ事やある、
などてたゆたふ事やある。

陣門堅く守りて、
平原十里寂寞し。
砦は危し危なかれ、
それを守れる人もなし。
さらば敵早退けたるよ、
味方は既に立ちたるよ。
げに戰はおもしろや。
さらば進みて[illegible]へ
衝崩さむず、崩さむず。
などて怖るゝ事やある。
などてたゆたふ事やある。

破れて逃ぐるは國の恥。
進みて死ぬるは身の譽れ。
瓦となりて殘るより、
玉となりつゝ碎けよや。
疊の上にて死ぬ事は
武士の爲すべきみちならず、
骸を馬蹄にかけられつ、
身を野晒になしてこそ

世に武士の義とは言はめ。
などて怖るゝ事やある、
などてたゆたふ事やある。

花の雲

（一） 前

ゆかしき みれ の 花の 雲、
見ぬ間に いつか さそはれて、
なきこゝ 頼む 山おろし、
霞の ころも 吹きかへせ
せめては 君が 眼 つ いふ
漏らせ と ばかり しのぶり、
旅みだれ髪 に 玉の 緒 を
よそへて かこつ つれなさ に
月[illegible] きへ も あやまてば、
おさめ に ゆめ の あと も 訪ふ。

（二） 後

ゆかしき みれ の 花の 雲、
君 ゆゑ ならば 頼みて し
とめき も 何か、なには つ の
この 花かげ の ひとしづく、

なさけ の つゆ の ひとしづく、
うけまほしさ の 願ごと も
叶へば 今 は 侘びし 日 を
うらむらさき の 夕がすみ、
沐浴 は 雨 か、いろ さめて
はだへ の かげ を もらす なり。

つぼすみれ

この篇は明治卅三年四月三日の國民の友に出したもので、實は俗語雅語雜交ぜの野心で作ツたもの。が、いくらか謀偵もあり、よし無いともうまく雜交ぜても無かツたことゝてその後出版月評に於て花月子にそれらの趣をも評されました。其仰一々御尤、今になツて一年を經、全く他人の作に對するやうな心を以て「つぼすみれ」を論じて見ればいよ／＼花月子の評、すなはち雜まぜのわるかツたとの趣をも悟り、終にふたたび叉筆を加へました。が、元とが雜交ぜを望んだもの、之れを全く雅調にするにも未練があり、それから重立ツた處だけを改め依然としてやたら漬はやはりやたら漬にして置きました。他日の思ひ出のためとて此篇に限り故さらに原作をも示しました。即ち（　）中の語句はいづれも原作のです。

上

磯 で 摘みたる つぼすみれ
これ 見よがし の 衣紋どめ。
いろ が 黒む を(こ) しほ風 に
たゞ なら 誰 が 吹かれら ぞ。
海人 に なる とも 君 が ため、
いとひ は せねど しかすが に
黒まば 嗤 や 飽きられむ(笑はれむ)。
それ が 苦勞 と しら雲 の
よそ なる 色 も うらやまし。
浪 も しづか に 水 入らぬ
小舟 に ふたり おゝ 嬉し。
笑くぼ 出せ とて 頬 を つく
そさま の 指 の 惡戯 な。
(否な! 笑くぼ を 出せ よ とて
頬 つく 指 の にくらし や。)
出す も はづかし、出さぬ も いや
さて も 辛氣 の 世 の 中 や。
海 は 彌生 の しほ乾時、
むらさき色 の 遠淺 に
水際だちし うきね鳥
かろく ゆられて 五つ 六つ
むつむ ふたり が こひ 中 を
まねて か 小緣 吸ふ 浪 も
しをらし や 船 と 千話喧嘩。

下

漕ぎ 出でし 船 は 歸り こず。
跡 は いづく か しらぬ 火 の
もゆる は 魂 か、あをじろき
其 色 と し も 泣き顔 に
むしれし 雲 の ひま 覗く
月 さへ 冴えて ものすごし。
針 を うゑ たる 狼 の
毛 に し も 似たる 沖 の 色
薄ずみ 揉んで 吼え たてゝ(たつる)
慈悲 も なさけ も あら磯 に
寄せて かへす は 浪 ばかり。
(心 に 慈悲 も あら浪 や
磯 に かへる は 浪 ばかり)
それ を 記念 と ゆふしほ の
渦 も まさご の 千々よろづ
盡きぬ 怨み に 湧き かへる。
比翼連理 の かねごと の
名ごり は 海 の 音 ばかり。
眉 は 遠山、肌 は 雪、
この 世 の 外 に 身 を 化して
弘誓 の 船 か、ごくらく の
下 は 地獄 の うき舟 か?
濱風 くろく 沖 荒れて
[illegible] いと さむく 千鳥 啼く。

小室屈山篇

自由の歌　外交の歌

自由の歌

天には自由の鬼となり
地には自由の人ならむ
自由よ自由や自由
汝と我れがその中は
天地自然の約束ぞ
千代も八千代も末かけて
此世のあらむ限りまで
二人が中の約束を
いかにぞ仇に破るべき
さはさりながら世の中は
月に村雲花に風
まゝにならぬは人の身ぞ

語れば長いことながら
古の羅馬の國と聞く
その人民を自由にし
共和の政治を立てむため
數多の人のうき苦勞
それをも知らで慾のため
我權勢を張らむとて
再び帝位に昇らむと
企てたりしセサルは
その親友の手にかゝり
議院の中に殺されたり
その親友のいふことに
民を奴隷になさむより
寧ろセサルを殺さばや
我の羅馬を愛するは
親友よりも甚し

羅馬の民の望みなら
我身も茲に諸共に
捨つる命はいと易し
佛蘭西國のルイス帝
自由を壓制なさむとて
種々に手段を廻らせど
邪道はいかに正道に
打ちかつことのあるべきぞ
民のいかりは火の如く
又洪水の溢れ來て
岩をも碎く勢ひに
いと畏くも帝王の
黄金をかざす冠は
斷頭機械の上に落ち
あはれはかなくなりけるは
誰を怨みむ壓制の

自業自得といふべけれ
英吉利國の革命も
同じ車の一つ轍
昨日の王は今日の賊
コロンウエルが手に持ちし
自由の旗の招きには
天をも回らす許りにて
チャーレス王を誅戮し
自由の基を立てたりき
北亜米利加の合衆國
もと英國の民なれど
其の端をたづぬれば
自由の人となりたさに
故郷の名殘に氣も止めず
深山荊棘はまだ愚か
人のふみてしこともなき
大海原を打ち渡り
見も知りもせぬ亜米利加へ
植民なせし心根は
いかにあはれに思ふらめ
然るに爺も英吉利の
己れしの綱は離られず
暴君汚吏の壓制に
耐りかねて[illegible]

義兵を擧ぐるときくからに
我後れじと親も子も
死ぬる覺悟で七年の
長の月日の攻め守り
遂に敵をば追ひ拂ひ
目出度く立てし獨立國
ワシントンの名を負へる
都と共に榮えゆく
國のほまれぞ勇ましき
嗚呼彼と云ひこれと云ひ
自由の爲には昔より
數多の人の生き別れ
又死にわかれするものを
我東洋の人ぢやとて
土地にかはりはあるなれど
などか心に變るべき
人の自由といふものは
天地自然の道なるぞ
つとめよ勵め諸ごとよ
卑屈の民と云はるゝな
余此文をかきをはる
時しも春の夢枕
眠りをさます鐘の音の
いとさやかに聞えける

外交の歌

西に英吉利北に魯西亜
油斷な爲せそ國の人
外表に結ぶ條約も
心の底は測られず
萬國公法ありとても
いざ事あらば腕力の
強弱肉を爭ふは
覺悟の前のことなるぞ
嗚呼同胞の兄弟よ
御國に生れし甲斐あらば
盡せや勵め諸共に
まごゝろ込めてつくすべし

落合直文篇

孝女白菊の歌　櫻井の訣別　吉野山



孝女白菊の歌

おのれ、二月の末つ方より病に罹り、絶えて筆とらざりしかば、この歌も、中にてさしおきたり。このたび、ここに來て湯浴みせしに、そのしるしにやあらむ、心地も、やうやう本に復りぬ。さてはとて、強ひて物しつ。されど自らも、飽かぬ節多かり。まいて見む人は如何があらむ。許してよ。折しも、さ夜更けわたり、枕に響く水音いと高し。四月十三日、箱根の山なる萬翠樓にて。

その一

阿蘇の山里秋深けて、
眺め寂しき夕まぐれ、
いづこの寺の鐘ならむ、
諸行無常と告げわたる。」
折しも一人門に出で
父を待つなる少女あり」
年は十四の春淺く、
色香ふくめるその樣は
梅か櫻か分かねども、
末頼もしく見えにけり」
父は先つ日遊獵に出で
今猶おとづれ無しとかや。」
軒に落ちくる木の葉にも、
筧の水の響にも、
父や歸ると疑はれ、
夜な夜な眠る隙も無し。」
分きて雨降るさ夜中は
庭の芭蕉の音しげく、
啼くなる蟲のこゑごゑに
いとど哀れを添へにけり。」
斯かる寂しき夜はなれば
ひとり思ひに堪へざらむ、
菅の小笠に杖とりて
出でて行くこそ哀れなる。」
八重の山路を分け行けば
雨はいよいよ降りしきり、
さらぬも重き袖の露、
あはれ幾たび絞るらむ。」
俄かに空の雲晴れて
月の光はさし添へど、
父を慕ひて迷ひ行く
心の闇には效ぞ無き。」
遠く彼方を眺むれば
ともし火一つぞ微見ゆる。
いづこの里か分かねども
それを知るべにたどり行く。」
松杉あまた立ち並び、

あやしき寺のその中に
「讀經のこゑの聞ゆるは
如何なる人の勤行か。」
襖も半破れ崩れ、
庭には人の跡も無く、
月のかげのみ冴えて
梢のあたり蟲ぞ啼く。」
門べに立ちて音なへば
幽かに答ふ聲すなり。」
待つ間ほどなく年若き
少女ひとり出でて來ぬ。
如何に怪しと思ひけむ、
暫し見てあり、此方をば。」
少女はそれと知るよりも、
やがてま近く立ち寄り、
「我れは怪しき者ならず、
父を尋ねて來つるなり。」
「行方や君の知りませば
教へてよかし、その行方。」
少女は姿をよく見れば、
庭へ出で花の蔭に
櫻の木の間に隱れため、
この庵に[illegible]なり。」
由緒心に[illegible]、

少女を奥に誘ひ行き、
ぬしは何處の誰なるか、
詳らに語れ、家も名も。」
折しも風の吹きすさび、
あたりの氣色もの淒く、
軒の梢にむささびの
啼くなる聲さへ聞ゆなり。」
少女はいよいよ堪へ難く、
落つる涙をかき拂ひ、
妾は本は熊本の
或る武士の女なり。」
初めは家も富み榮え、
心ゆたかに有りければ、
月と花とに身を寄せて
樂しく世をば送りにき。」
一年いくさ始まりて、
青き千草も血にまみれ、
吹きくる風はなまぐさく、
砲の響も絶え間無し。」
親は子を呼び、子は親に
別れ別れて彼方此方に
逃げ行くさまは哀れとも
[illegible]
この時家もろともに

阿蘇の奥まで逃れしが、
朧ならねど、朝夕に
聞えし故郷、その空を。」
人の言葉に父上は
賊に與してましますと
聞くよりいとど胸つぶれ、
袖のひる間もあらざりき。」
明け暮れ父を待つほどに、
早くも秋の風立ちて、
雲井の雁は歸れども
音づれだにも無かりけり。」
母は思ひに堪へかねて
病の床に就きしより
日に日に重り行き、
終にはかなく世を去りぬ。」
父の生死も分かぬ間に
母さへ歸らず成りぬれば、
夢に夢見し心地して
思へば今なほ胸にぞ沁む。」
如何にとなれば我が身ぞと
思ひ歎きて有りつるに、
寺の助けか、此寺の僧
情け深くぞ[illegible]。」
[illegible]

ただに[illegible]きて在りけるが、
浮世の習ひと悲みて
この年月は過ぐしたり。」
先つ日遊獵にと出でしより
待てど暮せど歸らねば、
またも心に頼み無く
斯かる山路に尋ね來ぬ。」
妾の氏は本田にて
名は白菊と呼びにけり。」
父は昭利、母は竹、
兄は昭英・その兄は
行ひ惡しく、父上の
怒りに觸れて家出しぬ。」
風の朝も雨の夜も
偲ばぬ時の無きものを、
いづこの空に迷ふらむ、
今なほ行方の分かぬなり。」
是れを聞くより山僧は
俄かに顏の氣色變へ、
物をも言はず、墨染の
袖を絞りて泣き居たり。」
とにも斯くにも此寺に
一夜明せと勸めてし
この山僧の心には

深き思ひや在るならむ。」
少女は其れと知りたるか
はた知らざるか分かざれど、
さすがに[illegible]とも醉みかね、
その夜はそこに假寢せり。」
寝る間ほども無く戸を開けて
あやしく父ぞ入り來たる。
枕べ近くさし寄りて
聲も哀れに涙ぐみ、
我れ誤まりて谷に落ち
今は千尋の底にあり。」
谷は荊棘の生ひ繁り、
出でて來ぬべき道も無し。」
明日だに知らぬ我が命、
せめてはこの世の別れにと、
子を思ふてふ夜の鶴
泣く泣く此處に尋ね來ぬ。」
言葉終らぬその前に、
袖引き留めて、父上と
呼ばむとすれば、跡も無く
窓のともし火影暗し。
夢か現か有らぬかと
思ひ亂れて在るほどに、
あかつき近くなりぬらむ、

[illegible]」

その二

夜もやうやうに明け離れ、
心も何かありあけの
月のひかりの影落ちて、
庭の遣り水音すごし。」
少女は寺を立ち出でて、
まだ物暗き杉むらを
たどりて行けば遠方に
狐の聲も聞ゆなり。」
道の行手の枯尾花
音さやさやに打なびき、
吹き來る風の身に沁みて
寒さもいと増さりけり。」
巖根こごしき山坂を
上りつ下りつ行くほどに、
み山の奥にやなりぬらむ、
人かげだにも見えぬなり。
梢のあたり聞ゆるは
如何なる鳥の聲ならむ、
木隱を走る獸は
熊てふものにやあるならむ。」
ここは高嶺か、白雲の

袖のあたりを過ぎて行く。
わが身を載せて走るかと
思へばいと怖ろしや。」
はるばる四方を見わたせば、
山また山の果ても無し。
父は何處におはすらむ、
返り見すれど效ぞ無き。」
折しも後より擡立てて、
山賊あまた寄せ來り、
逃ぐる少女を引き捉へ、
堅くその手を縛めぬ。」
あな怖ろしと叫べども、
人無き山の奥なれば
山彦ならで外にまた
答へむものも無かりけり。」
山の岸路を折れ廻り、
谷の下道行き通ひ、
伴はれつつ行くほどに
怪しき家に至りける。」
破れかかりたる竹の垣、
頽れ落ちたる岩の壁、
あたりは木木に鎖されて、
外目の影も照りやらず。」
内よりしれもの出で來り、

少女の姿見つるより
めでたき獲物と思ひけむ、
ほ手打ち笑ふ樣憎し。」
かねて設けやしたりけむ、
酒と肴と取り出でて、
飲みつ食ひつする樣は
世にいふ鬼に異ならず。」
頭と思しき者一人、
少女の許にさし寄りて、
汝の此處に捕はれて
來たるは深きえにしなり。
今より我れを夫と頼み、
この世の限り仕へてや。」
我が家に久しく祕め置ける
いとも妙なる小琴あり、
幾千代かけて契りせむ
今日の筵の喜びに
奏でて我れに聞かせてよ、
歌ひて我れを慰めよ。」
假りにも否まむその時は
劍の山に上らせて、
針の林を分けさせて、
辛き憂き目を見せ遣らむ。」
少女は否と思へども、

否み難くや思ひけむ、
泣く泣く小琴を引き寄せて
調べ出でしぞ哀れなる。」
風や梢を渡るらむ、
雁や御空を行くならむ、
軒端を雨や過ぎぬらむ、
岸にや波の寄せ來らむ。」
いとも妙なる調べには
畏き神も舞ひやせむ、
いともめでたき手技には
潜める龍も踊るべし。」
嵯峨野の奥に調べけむ
想夫戀には有らねども、
父の行方を偲ぶなる
心は何か變るべき。」
峯の嵐か、松風か、
尋ぬる人の琴の音か、
ひとり木蔭に佇みて
聞き居し人や誰ならむ。」
尋ぬる人の爪音と
いよいよ心に覺りけむ、
調べの終る折しも折、
斬りて入りしぞ勇ましき。」
刃の光に懼れけむ、

罪に[illegible]も、
斬られて[illegible]者もあり、
逐はれて逃ぐる者もあり。」
斬りて入りにしその人の
姿は其れと分かねども
身に纏ひしは墨染の
衣の袖と知られたり。」
わななく少女の手をば取り、
月のかげさす窓に来て、
「な驚きそ、驚きそ、
我れは汝が兄なるを。」
いさ細やかに語りなむ、
心を静めて聞きねかし。」
父の怒に触れしより
心に思ふ事ありて、
東の都に上らむと
筑紫の海をば船出しぬ。」
荒き波路の旅枕、
重ね重ねて須磨、明石、
淡路の島を漕ぎ廻り、
武庫の浦にぞ泊てにける。」
ここより陸路をたどりしに、
頃は彌生の末なれば
並木のあたり風吹きて、

[illegible]
都に着きしその後は
唯だ文机に寄り居つつ、
朝夕習ひし千千の書、
初めて人の道知りぬ。」
父の恵みを知る毎に、
母の情を知るたびに、
悔しきことのみ多かれば
泣きてその日を送りけり。」
「心あらため仕へむと
ふる里さして帰りしに、
宿の有りし後なれば
その寂しさぞ常ならぬ。」
見わたす限りは野と成りて
昔の影も嵐吹く
尾花が袖も打ちつれ、
露の玉のみ散り乱る。」
此や我が家の跡ならむ、
其や父母の道ならむ、
照らす夕日の影薄く、
巷の柳に鴉鳴く。」
罪み少なき我が身ぞと
思ひ侘ぶれば侘ぶるほど
浮世のことの厭はれて、

[illegible]
[illegible]に
果てなき事のみ続きたれて、
読みゆく文字の数よりも
繁きは袖の涙なり。」
昨夜そなたの尋ね来て、
語る言葉を聞きしとき、
我が嬉しさはそも如何に、
我が悲しさはまた如何に。」
唯だに我が名を名告らむと
思ひしかども、しかすがに
名告りかねたる身のつらさ。
名告るより猶つらかりき。」
おのれを諫め、隠れしを、
道に一事も有りなむと、
汝を追ひ来て今ここに
汝を招くは助けたり。」
そなたを助けし上からは
心に残ることも無し、
この後何の面ありて
父に二たび見えまし。」
彼の世に在りて待たばやと
云ひも果てぬに腰刀
抜く手も見せず一寸ずに

「切らむとすなり、我が腕を。」
少女は見るより膝立てて、
疾くその手を掃ひつつ、
「泣きつ叫びつ恨むる
心の底や如何ならむ。」
折しも空の霜白く、
夜はの嵐の音絶えて、
雲間消え行く月かげに
雁がね遠く鳴きわたる。」

その三

四方に聞ゆる蟲の音も
哀れ弱ると聞く程に、
ありあけ月夜かげ消えて
峯の横雲分れ行く。」
静かに其所を立ち出でて
周邊のさまを眺むれば、
朝の松風聲枯れて
荒れたる庭に霜白し。」
「手をば取られつ取りつして
左に山路を過ぎ行けば、
昨夜の賊の群ならむ、
後よりあまた追ひて來つ。」
山賊それと知りしかば、
早くも少女を逃し遣り、
己れは此處に留まりて、
斬りつ斬られつ戰ひつ。」
繁る林を折れ廻り、
谷の掛け橋うち渡り、
少女は辛く逃げしかど、
後に心や殘るらむ。」
斬られて痛手はおはせぬか、
兄上幸くましませと、
はるかに高嶺をうち眺め、
偲ぶ心ぞ哀れなる。」
道の傍に注連結ひし
小祠はたれを祀るらむ。
涙ながらに額づきて
祈るも哀れ、その神に。」
そこに柴刈る翁あり、
泣くなる少女を見てしより、
如何に哀れと思ひけむ、
此方に近く寄りて來ぬ。」
事の由をば尋ねしに、
まこと悲しき事なれば、
翁は少女を慰めて
我が家に伴ひ歸りけり。」
深く鎖しし柴の門、
半ば破れにし竹の垣、
片山里の靜けさは
晝なほ夜に異ならず。」
木木の木の葉の散り亂れ、
籬の菊の色も無く、
嵐は時雨を誘ひ來て、
蟲の鳴く音もいと寂し。」
父の行方に、兄の身に、
朝夕こころに掛れども、
深き情に絆されて
暫しは其所に留まりぬ。」
隙行く駒の足早く、
一年二年は夢の間に
はかなく過ぎて、また更に
のどけき春は廻りきぬ。」
み山の里の習ひにて
髪も姿も亂せども、
色香は如何でか失せやらむ
あはれ名に負ふ菊の花。」
若菜摘みにとうち群れて
近き野澤に行く道も、
檜の林に一もとの
花の交るが如くなり。」
里の長なる何某は

早くもそれと聞きつらむ、
媒介ひとり訪ねきて
良き契りを勧めしが、
翁は甚く拒みて
乞へるまにまに許したり。」
少女は斯くと聞きしとき、
その胸や如何ならむ、
袖もて涙は掩へども
止めもかねつ、その涙。」
思ひまはせば母上の
この世を去らむその折に、
妾を近く召し給ひ、
云ひ遺されしことぞ有る。」
或る年秋の末つかた、
御墓まうでの帰るさに、
露けき野路を分け来れば
白菊あまた咲き満てり。」
匂へる花のその中に
あはれ泣く子の声すなり。」
斯かるめでたき子だからを
如何なる親か捨てつらむ、
悲しきことにて有りけりと
拾ひ取りしは汝なり。」
菊咲く野べにて遊びたるも

深き契りの有るならむ。
千代に八千代に栄えよと
やがてその名を負はせにき。」
更に告ぐべき事こそ有れ、
汝は絶えて知らざれど
汝の兄とも頼むべく
夫とも云ふべき人こそ有れ。」
早く家出をなしてより
今に行方は分かねども、
この世に在らば帰り来む、
老いたる父もましませば。」
帰り来らむその折は
行末かけて契り合ひ、
夫と云ひ妻と呼ばれつつ、
この世楽しく送りてよ。」
母のいまはの言の葉は
今なほ耳に残りけり。
如何でか教を背くべき、
如何でか教に背かれむ。」
さは云へ此処に来てしより
翁の恵みはいと深し。
とやせむ斯くと人知れず
思ひ惑ふも哀れなり。」
彼れを思ひて泣き沈み、

これを思ひてうち歎き、
思ふ思ひは千々なれど
死ぬる一つに定めてむ。」
折しも媒介入り来り、
少女に贈りしその物は
錦の衣、綾の袖、
目にも眩ゆく見えにけり。
少女の心の悲しさを
あたりの人は知らざらむ。
見つつ翁の、喜べば
隣の媼も来て祝ふ。」
時雨降り来て、照る月の
影も小暗き夜中に
何処をさして行くたらむ、
少女は忍びて家出しぬ。」
村里とほく離れ来て
川風寒き小笹原
死ぬる急ぎて行き行けば
水音すごく咽ぶなり。」
雲井を帰る雁がねも、
小笹をわたる風の音も、
逃ぐる少女の心には
追手とのみや聞ゆらむ。」
橋のたもとに身を隠し、

我が來し方を眺むれば、
遠里小野のともし火の
影より外に影も無し。」
下に流るる川水の
底の心は知らねども、
あはれ悲しきその音は
少女が死をや誘ふらむ。」
死ぬる命は惜まねど、
斯くと知らさむその折は
然こそ歎かめ、父上の。
如何に歎たむ、我が兄は。」
父上ゆるさせ給ひてよ、
兄上恨みなし給ひそ、
この世を我れは先だちて
母の御許に待ちぬべし。」
南無阿彌陀佛と云ひ捨てて、
とばむとすれば、後ろより
待ちて、呼びて引き止めし
人は如何なる人ならむ。」
おぼろ月夜の影暗く
さやかにそれと分かねども、
春秋かけて偲びてし
兄と少女は知りてけり」
夢か現か幻か、

思ひ亂るるさ夜中に
里の笛の吹きすさぶ
笛の音とほく聞ゆなり。」
問ひつ問はれつ來し方を、
聞きつ聞かれつ行末を。
ひと夜語りて明せども
積る言の葉や殘るらむ。」
我がふる里の戀しさに
道を急ぎて歸らむと、
野越え山越え行き行けば
霞たなびき花も咲く。」
日數も幾日ふる雨に
濡れてやつるる旅ごろも、
家に歸りしその折は
五月頃にや有りつらむ。」
山ほととぎす鳴きしきり、
門の橘かをるなり。」
しげる夏草踏み分けて
軒端を近く立寄れば、
昔戀しの露散りて
袖に掛るも哀れなり。」
妻戸押し開け内見れば、
怪しく父はましまして
こなたの顏を如何ならむ、

彼方の嬉しさまた如何に。
父上幸くと音なへば、
子らも幸くと答ふなり。」
事を細かに聞きてより
父も哀れと思ひけむ、
兄のいましめ宥し遣り
妹の操を褒めにけり。」
親子の三人うち集ひ、
過ぎにし事ども語り合ひて、
酌む盃のその中に
嬉しき影も浮ぶらむ。」
計らむすべも有らざれば
疲れ過ちて谷に落ち、
木の實を拾ひ水飲みて、
長き月日を送りにき。」
或日の朝起き出でて
峯のあたりを見上ぐれば、
長く掛れる藤かづら
上に猿の啼き叫ぶ。」
啼くなる聲の何と無く
心ありげに聞ゆれば、
猿の助けと攀ぢ上り、
初めて峯に上り得つ。」
嬉しと四邊を見わたせば

南の[illegible]く、
末代までもかはらじに
蟬の聲のみ聞ゆなり。
浮世の習ひと云ひながら、
浮世の常とは云ひながら、
人の情の盡き果てゝ、
獸に殘るぞ哀れなる。」
父の言葉を聞きたる、
二人の心や如何ならむ。
嬉しと兄の立ち舞へば
樂しと妹も歌ふなり。
千代に八千代と云ひ云ひて
共に喜ぶ折しもあれ、
後ろの山の松の枝に
夕日照りて鶴ぞ啼く。」

櫻井の訣別

青葉しげれる櫻井の
里のわたりの夕まぐれ、
木の下かげに駒とめて
世の行末をつくづくと
偲ぶ鎧の袖の上に
散るは涙か、はた露か。
正成涙を打ち拂ひ、
我が子正行呼び寄せて、
父は兵庫に赴かむ、
彼方の浦にて討死せむ、
汝は此所まで來れども
疾く疾く歸れ、故郷へ。
父上如何にのたまふも
見捨てまつりて我れ一人
如何で歸らむ、歸られむ。
この正行は年こそは
未だ若けれ、もろともに
御供仕へむ、死出の旅。
汝を此所より歸さむは
我が私の爲めならず、
己れ討死なさむには
世は尊氏のまゝならむ、
早く生ひ立ち、大君に
仕へまつれよ、國の爲め。
この一刀は去にし年
君の賜ひし物なるぞ、
この世の別れの形見にと、
汝にこれを贈りてむ、
行けよ、正行、故郷へ、
老いたる母の待ちまさむ。
共に見送り、見返りて、
別れを惜む折りからに、
又も降りくる五月雨の
空に聞ゆる時鳥、
誰か哀れと聞かざらむ、
あはれ血に泣くその聲を。

吉野山

吉野の山の時鳥、
汝も昔を偲ぶらむ。
御陵のあたり來て見れば
夕の風に花ぞ散る、

中西梅花篇

靈魂　出放題　鷗外漁史　須臾の月夜

靈魂

手にむすぶ水にやどりし、月影や、
よどみに浮ぶ、うたかたの、
有るか無きかの、間にぞ住む、
靈魂、
古人その、はかなきは、
あだし野の、露きえずらで、
[illegible]
苦しき海の、[illegible]にて、
浮きつ沈みつ、[illegible]、
たま[illegible]とも何かせむ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

道をまもりて、ひたすらに、
意馬のくるひを、つなぎとめ、
喜怒哀樂を、平らかに、
はかりの如く、[illegible]のごとく、
其の度にかけて、實相の、
心の鏡、[illegible]すまし、
よしあし草の、くさ〴〵に、
うつる姿を、あやまたず、
執着輪廻、せぬときは、
穢土も其のまゝ、極樂ぞ、
心佛衆生、無差別ぞ、
かゝるたのしき其の道の、
まつげの下にあるも猶ほ、
ゆめにも知らじ、悟らずに、
利慾におぼれ、名の爲に、
修羅のちまたに、あらそふに、

阿鼻焦熱の、地獄ぞと、
[illegible]の山人、たふとくも、
權に因果を、[illegible]の[illegible]、
ひき説かれたる、法の門、
彌陀の御國と、說かれしも、
心をたねの、なし、ぞと、
[illegible]るすしら雲、ふみ分けて、
山に入る人、やまにても、
あきらめかねし、其の時は、
何處に行きて何かする、
西や東の、國々に、
教のかずは、品あれど、
みた眞心を、種として、
あしきことをば、遠ざくる、
其のてだてとぞ、知られけり、
あだし教の、みのりとて、

いまに傳ふる、其の中に、
釋子をのぞく、其の外は、
皆こと〳〵く、聖人の、
みたまの説を、立てられき、
すべて斯世に、聖人の、
みたまの説を、立てたるは、
二千四千歳の、前の世に、
人のこゝろの、くらくして、
燈火の無き、其の世には、
父をも知らず、子も分かず、
仁義の道は、更に無く
鳥やけものと、むれ居して、
只、かたくなに、いと強く、
つよき人のみ、富みさかえ、
弱きものこそ、あはれにも、
虐げられつ、棄てられつ、
姥捨山は、今はたゞ、
名のみなれども、其の昔、
かゝりし事の、ありしかも、
夫と救はむが、其のために、
かしこき人の、世に出でて、
人の人たる、斯道を、
立てられしかど、如何にせむ、
おろかな[illegible]、うけがはで、

あしき草のみ、日にましに、
繁りゆきて、今ははや、
八重の織機を、ふるうても、
盡しがたかる、ありさまに、
一しほ心を、いためられ、
たとへに道を、かりそめの、
むくろの失せし、其のあとに、
罪のかず〳〵、むくい來て、
みたまは獨り、くるしみを、
受くるものぞと、説かれしが、
人を導く、もとにして、
染めはじめたる、白絲や、
みだれを爰に、をさめつゝ、
かたくな人を、手引きせし、
さきがけとこそ、知られける、
吾はらからの、おとゞひよ、
吾はらからの、おとゞひは、
いまだねぶりの、さめやらで、
權の教に、さまよふか、
如何ほど説を、たくむとも、
天と唱ふる、天も無く、
地と稱へたる、地もあらじ、
むくろの失せし、其のあとに、
魂魄のみのこる、わけあらじ、

よし有るとも、何かせむ、
世紀のひらけ、そめしより、
二千四千歳に、なりぬれど、
死にし人の、日數へて、
またよみがへり、世にいでて、
魂魄の中なる、ありさまを、
説かれしことも、聞かざれば、
因果三世の、ことわりも、
死にしあとに、あらずして、
現世のことと、知れよかし、
少しまなびの、才あるは、
たとへの文の、おもしろく、
とるまに〳〵、おぼれそめ、
深き旨をば、あやまりて、
みづから心に、得たりとし、
己が所説に、誇ふは、
舌の刃に、斬りたふし、
ひたぶる人を、惑はして、
眞の道と、おもふなる、
人を救はむ、其の爲に、
立ておかれたる、其の道を、
ゆがみし道に、悟らるゝ、
人の心は、已にはや、
まよひの中に、まよへるぞ、

迷ふなと說く、其の人が、
已にまよへば、其をきいて、
悟らるゝ人、またまよふ、
迷へる上に、いゞまよひ、
影にほえたる、門の犬、
一度啼けば、其の聲に、
共吠するに、こゝならじ、
世はとこやみと、なるぞかし、
日にすゝみ、月にひらくる、大御代に、
生れ逢ひたる、われ／＼は、
三千四千歳も、前の世に、
かたくな人を、聞きし、
權の教の、かず／＼に、
まよはせられじ、迷はじと、
思ひ居れども、如何にせむ、
浮世はひろく、人多し、
くしき教に、迷はされ、
吾と我身で、わが智惠の、
光をおほふ、しれ者の、
若しやはあると、藻汐草、
かきつくされぬ、貝多羅の、
其のちり／＼の、そのなかの、
一ひらを茲に、留くものならじ、

出放題

きのふは過ぎぬ、明日は未だし、
　君に若し、
肉あらば、食はせ給へや、
　君に若し、
酒あらば、飮ませ給へや、
　世の中は、
　今日の外、唯現在の今日の外、
明日も明後日も無きものを、
あらば其は、あだなる名のみ、
あらば其は、むなしき名のみ、
　世の中は、
　　唯おもしろきものなるを、
　其おもしろきものとては、
　唯現在の今日のほか、
明日も明後日も無きものを」
　我酒瓶にあり、飮めや人、
　我琴膝にあり、彈けや人、
醉はゞ我、其醉の國に住み、
彈かば我、其音の國に住み、
　住まば我、其醉となり、
　住まば我、其音となり、
其醉の、我なるか、
其我の、醉なるか、
其聲の、我なるか、
其我の、聲なるか、
彼もなく、又我も無き其時は、
夢と見ゝ夢ならじ、
夢ならば其の夢は、
誰も云ふ夢ならで、
夢ならぬ夢ならめ、
夢ア、夢なるかな、
　夢なるかな」
醒めたりと云ふ其人の醉へるは、
醉へりと云ふ其人の醒めたるが如、
是を說かば、非中是あり、
非を說かば、是中非あり、
我馬をもて彼馬を說かむより、
彼馬をもて彼馬を說け、
彼指をもて我指を說かむより、
我指をもて我指を說け、
世の中は、唯一指なるを、
世の中は、唯一馬なるをや」
君見ずや、
天地は笛なるぞ、唯大きなる笛なるぞ、
吹くは抑も何者ぞ、

見えねどもかたちとて、
雲明らかに見えねども、
雨來れば、花うるほし、
雨去れば、雪おもしろし、
迷ふとは如何なるを謂ふと見て、
迷ふなるか、其は能くも得知らねど、
迷ふと云ふ世の中に
迷ふと云ふ世の人の、
夏暑く冬さぶしとぞ云ふ、
其道理は合點けど、
背へど、
おしなめ、押詰むれば、
世の中は、唯一指なるぞ、
世の中は、唯一馬なるぞ、
天地は笛なるぞ、唯大きなる笛なるぞ、
吹くは抑も何者ぞ、
何者とは得知れねど、
絲にあたれば絲に、
竹にあたれば竹に、
金にあたれば金に、
石にあたれば石に、
山に、
河に、
海に、

數へても數へつくせぬ其ものは、
吹きたり吹きあたる其かぜは、
其音は、
幾千萬と數へても數へ盡せぬ物、
世のなかの差別として云へるものを、
是非としも云へるものを、
差別して數へなば、
其を數へつくせぬかごと、
又數へつくされじ一
ふりかへれば、我年は、
かぞふれば、我としは、
四五千年にやなりぬらむ、
進みきたりぬ、我智慧は、
殖えてきたりぬ、我智慧は、
進みきたればこそ、
ふえきたればこそ、
名も無きに名をつけて、
理學、哲學、猫、杓子、
アハヽ、アッ、ハッ、ハ、
我智慧は凄まじ、
わが智慧えらし、
それでこそ理學、哲學、猫、杓子、
唯いろ／＼に名を附けて、
底無き穴にとつ這ひて、

底に、蝙蝠の[illegible]に、
[illegible]は、かはほりに、
迷ひとまどふ迷ふ人、
あはれ／＼、アッ、ハ、ハ、
見來れば、我身自ら[illegible]、
自然の有無をば[illegible]、
まぞ知らぬ、また知らぬ[illegible]、
今は[illegible]に[illegible]ふりて、
アハヽ、アッ、ハッ、ハ、
まだ雨などは降らねども、
四五千年の今日が日まで、
石は石、花は花、竹は竹、
花が石にも咲きはせじ、
竹が花にもなりはせじ、
わからぬものの[illegible]を、
分らぬものに爲せるとは、
アハヽ、アッ、ハッ、ハ、
唯笑へ、笑ふて遊べ、
世の中は、
唯現在の今日の外、
明日も明後日も無きものを、
止れや蝶々、菜の葉へ止れ、
菜の葉があいたら、
よしの先へ止れ、

止るところを忘れなば、
猫に追はれし蝶々の、
荘子は夢にうなされやせむ、

鷗外漁史

しろきは雪か、雲のごと、
照る月影の、池の面に、
亂すこゝろは、苗をやぐ、
日卑曼の圃ゆ、拾てきにし
其の葉裏の、よこに遊ぶ、
眞竹のなかれ、愛にふつし
こゝに移して、綺莫だが、
作禮の池に、たたまくる、
打ちたての、粧を字と、
なしにけるかも、相の擲も、
何をしぬかの、河の瀬に、
うちま打ちたる、忠孝其まを、
命と成すて、曾日とれむ、
其の花片の、いろ／＼を、
見捨き瞼ぬ、たはふれつ、
心の合所に、身を擲きて、
言ふをこゝ／＼、性と何ぶ、

其の世と遊ぶ、たのしみは、
小夜更けて、〱、
憚ねぶりし空を高み、
雲をたかみて、鳴くと云ふ、
かまめの外は、知るよしあらじ、

須磨の月夜

波さへも、
煙に音をつゝまれし、
風無き夜半の須磨の浦、
松のひゞきも靜やぎて、
見渡す沖にひとつぼし、
なさけを知らぬ海面は、
次第にひかりを吞初めて、
いまはすがたも滅々に、
眼を屡叩き打ちわびぬ、
其のありさまを譬ふれば、
壽永のむかし、平ぞくが、
都をしのびしほたれて、
浪のゆら／＼世の中を、
棚無し小舟と啣ちたる、
大宮の風姿もまの當り、

斯くやと思ふをり柄に、
ちぎれ／＼の雲間より、
眞白におつる月のかげ、
淋しき様を見るにつけ、
思ひ出づるは其のむかし、
松を吹く磯風黑み、
海を吹くまつ風くろみ、
浪のおと、
血烟立てゝ打ち寄せし、
平家の武士が討死の、
渚に洒落たる死骸をば、
照し來りしひかりかと、
思へばそゞろ恐毛立ち、
其のまゝ其處に佇めば、
何にさわげるむら千鳥、
撥と立ちしもあはれなり、

大和田建樹篇

鐵道唱歌　妹のかげ



鐵道唱歌

東海道

一　汽笛一聲新橋を
　　はや我汽車は離れたり
　愛宕の山に入りのこる
　　月を旅路の友として

二　右は高輪泉岳寺
　　四十七士の墓どころ
　雪は消えても消えのこる
　　名は千載の後までも

三　窓より近く品川の
　　臺場も見えて波白く
　海のあなたにうすがすむ
　　山は上總か房州か

四　梅に名をえし大森を
　　すぐれば早も川崎の
　大師河原は程ちかし
　　急げや電氣の道すぐに

五　鶴見神奈川あとにして
　　ゆけば横濱ステーション
　湊を見れば百舟の
　　煙は空をこがすまで

六　横須賀ゆきは乘替と
　　呼ばれておるゝ大船の
　つぎは鎌倉鶴が岡
　　源氏の古跡や尋ね見む

七　八幡宮の石段に
　　立てる一木の大鴨脚樹
　別當公曉のかくれしと
　　歴史にあるは此蔭よ

八　こゝに開きし頼朝が
　　幕府のあとは何かたぞ
　松風さむく日は暮れて
　　こたへぬ石碑は苔あをし

九　北は圓覺建長寺
　　南は大佛星月夜
　片瀬腰越江の島も
　　たゞ半日の道ぞかし

一〇　汽車より逗子をながめつゝ
　　はや横須賀に着きにけり
　見よやドックに集まりし
　　わが軍艦の壯大を

一一　支線をあとに立ちかへり
　　わたる相模の馬入川

海水浴に名を得たる
　大磯みえて波すゞし

一二
國府津おるれば馬車ありて
　酒匂小田原とほからず
箱根八里の山道も
　あれ見よ雲の間より

一三
いでてはくゞるトンネルの
　前は山北小山驛
今もわすれぬ鐵橋の
　下ゆく水のおもしろさ

一四
はるかにみえし富士の嶺は
　はや我そばに來りたり
雪の冠雲の帶
　いつもけだかき姿にて

一五
こゝぞ御殿場夏ならば
　われも登山をこゝろみむ
高さは一萬數千尺
　十三州もたゞ一目

一六
三島は近年ひらけたる
　豆相線路のわかれみち
驛には此地の名をえたる
　官幣大社の宮居あり

一七
沼津の海に聞えたる
　里は牛伏我入道
春は花さく桃の頃
　夏はすゞしき海のそば

一八
鳥の羽音におどろきし
　平家の話は昔にて
今は汽車ゆく富士川を
　下るは身延の歸り舟

一九
世に名も高き興津鯛
　鐘の音ひゞく清見寺
清水につゞく江尻より
　ゆけば程なき久能山

二〇
三保の松原田子の浦
　さかさにうつる富士の嶺を
波にながむる舟人は
　夏も冬とや思ふらむ

二一
駿州一の大都會
　靜岡いでて阿倍川を
わたればこゝぞ宇津の谷の
　山きりぬきし洞の道

二二
鞘より拔けておのづから
　草なぎはらひし御劍の
御威は千代に燃ゆる火の
　燒津の原はこゝなれや

二三
春さく花の藤枝も
　すぎて島田の大井川
むかしは人を肩にのせ
　わたりし話も夢のあと

二四
いつしか又も暗となる
　世界は夜かトンネルか
小夜の中山夜泣石
　問へども知らぬよその空

二五
掛川袋井中泉
　いつしかあとに早なりて
さかまき來る天龍の
　川瀬の波に雪ぞちる

二六
この水上にありと聞く
　諏訪の湖水の冬げしき
雪と氷の懸橋を
　わたるは神か里人か

二七
琴ひく風の濱松も
　菜種に蝶の舞坂も
うしろに走る愉快さを
　うたふか磯の波のこゑ

二八
煙を水に横たへて
　わたる濱名の橋の上
たもと涼しく吹く風に
　夏ものこらずなりにけり

二九
左は入海しづかにて
　空には富士の雪しろし

左は遠州洋ちかく
山なす波ぞ砕けちる

三〇
豐橋おりて乘る汽車は
これぞ豐川稻荷道
東海道にてすぐれたる
海のながめは蒲郡

三一
見よや德川家康の
おこりし土地の岡崎を
矢矧の橋に殘れるは
藤吉郎のものがたり

三二
鳴海しぼりの產地なる
鳴海に近き大高を
下りておよそ一里半
ゆけば昔の桶狹間

三三
めぐみ熱田の御やしろは
三種の神器の一つなる
その草薙の神つるぎ
あふげや同胞四千萬

三四
名だかき金の鯱は
名古屋の城の光なり
地震のはなしまだ消えぬ
岐阜の鵜飼も見てゆかむ

三五
父やしなひし養老の
瀧は今なほ大垣を
三里へだてゝ流れたり
孝子の名譽ともろともに

三六
天下の旗は德川に
歸せしいくさの關が原
草むす屍いまもなほ
吹くか伊吹の山おろし

三七
山はうしろに立ち去りて
前に來るは琵琶の海
ほとりに沿ひし米原は
北陸道の分岐線

三八
彥根に立てる井伊の城
草津にひさぐ姥が餠
かはる名所も名物も
旅の徒然のうさはらし

三九
いよ〳〵近く馴れくるは
近江の海の波のいろ
その八景も居ながらに
見てゆく旅の樂しさよ

四〇
瀨田の長橋右に見て
ゆけば石山觀世音
紫式部が筆のあと
のこすはこゝよ月の夜に

四一
粟津の松にことゝへば
答へがほなる風の聲
朝日將軍義仲の
ほろびし深田は何かたぞ

四二
比良の高嶺は雪ならで
花なす雲にかくれたり
矢走にいそぐ舟の帆も
みえてにぎはし湖の上

四三
堅田におつる雁がねの
たえまに響く三井の鐘
夕ぐれさむき唐崎の
松にや雨のかゝるらむ

四四
むかしながらの山ざくら
にほふところや志賀の里
都のあとは知らねども
逢坂山はそのまゝに

四五
大石良雄が山科の
その隱家はあともなし
赤き鳥居の神さびて
立つは伏見の稻荷山

四六
東寺の塔を左にて
とまれば七條ステーション
京都々々と呼びたつる
驛夫のこゑも勇ましや

四七
こゝは桓武のみかどより
千有餘年の都の地

今は雲井の空たかく　あふぐ清涼紫宸殿

四八　東に立てる東山　西に聳ゆる嵐山
かれとこれとの麓ゆく　水は加茂川桂川

四九　祇園清水知恩院　吉田黒谷眞如堂
ながれも清き水上に　君がよまもる加茂の宮

五〇　夏は納涼の四條橋　冬は雪見の銀閣寺
櫻は春の嵯峨御室　紅葉は秋の高雄山

五一　琵琶湖を引きて通したる　疏水の工事は南禪寺
岩切り拔きて舟をやる　智識の進歩も見られたり

五二　神社佛閣山水の　外に京都の物産は
西陣織の綾錦　友禪染の花もみぢ

五三　扇おしろい京都紅・　また加茂川の鷺しらず
みやげを提げていざ立たむ　あとに名殘は殘れども

五四　山崎おりて淀川を　わたる向ふは男山
行幸ありし先帝の　かしこきあとぞ忍ばるゝ

五五　淀の川舟さをさして　くだりし旅はむかしにて
またゝくひまに今はゆく　煙たえせぬ陸の道

五六　おくり迎ふる程もなく　茨木吹田うちすぎて
はや大阪につきにけり　梅田は我をむかへたり

五七　三府の一に位して　商業繁華の大阪市
豐太閤のきづきたる　城に師團はおかれたり

五八　こゝぞ昔の難波の津　こゝぞ高津の宮のあと
安治川口に入る舟の　煙は日夜たえまなし

五九　鳥も翔らぬ大空に　かすむ五重の塔の影
佛法最初の寺と聞く　四天王寺はあれかとよ

六〇　大阪いでて右左　菜種ならざる畑もなし
神崎川のながれのみ　淺黄にゆくぞ美しき

六一　神崎よりはのりかへて　ゆあみにのぼる有馬山
池田伊丹と名にきこし　酒の産地もとほるなり

六二　神戸は五港の一つにて　あつまる汽船のかず〳〵は
亞米利加露西亞支那印度　瀬戸内がよひも交りたり

六三　磯にはながめ晴れわたる　和田のみさきを控へつゝ
山には絶えず布引の　瀧見に人ものぼりゆく

六四　七度うまれて君が代を　まもるといひし楠公の
いしぶみ高き湊川　ながれて世々の人ぞ知る

六五　おもへば夢か時のまに　五十三次はしりきて

[illegible]のやうに身をやつし
　人に[illegible]の夜半の[illegible]

六六　明けなば更に乗りかへて
　西海道を[illegible]まし
天気は明日も[illegible]り
　海にかすむ月の影

妹のかげ

ふるさとのわが屋の、君、
　このごろは、人かた讀みて、
朝夕に、まろびおつらむ、
　あをきみは、さかりすぎぬ、
若竹はいくもと、生ひぬ、
　あなたなつかし、わがふるさと、
あなこひし、わが屋のかきね。
今もなほ、繪手にもちて、
　梅の實を、ひろふいもとの、
おもかげに、みゆるはゆめか、
　目の前に、たつはうつゝか、
いざゆきて、わがやのにはに、
　幼き時の、あそびを、

もろともに、ふたゝびあそばむ、
あなうれし、いそげいもとよ、
　手間も、けふはすぎて、
ならびたる[illegible]、くつわへて、
　野あそびの、みちしるべせよ、
草笛を、わがはやぶりし、
　川原に、小鳥うかゞむ、
いざいそげ、うつゝかゆめか、
すぎさりし、年月とへど、
　こたへせぬ、おもかげたえて、
のこれるは、顔とわかみ、
　たゞ人や、こゝにあそびし、
ふる里にわれや、あそびし、
　玉づさのけふは、くるかと、
わすれては、いまもまつなり。
あのとほくきこゆる、鐘は、
　墓ふかく、眠おくりし、
そのかみの、なごりの聲か、
　雲がくれ、ほのめく星は、
そらになほ、たゞよふ魂を、
　しるべする、やみの光か、

むかしのは、いまにもきこゆ、
あなかなし、わがふるさと、
　都を立て、はや、[illegible]、
旅ゆきし、君がすみかを、
　たづねつゝ、月にたどれど、
こたへなく、日をばめぐりし、
　あなかなし、わがおもひきれ、
ゆき歸は、たれをよぶらむ、



北村透谷篇

楚囚之詩

楚囚之詩

自序

余は遂に一詩を作り上げました　大膽にも是れを書肆の手に渡して知己及び文學に志ある江湖の諸兄に頒たむとまでは決心しましたが、實の處躊躇しました。余は實に多年斯の如きものを作らむことに心を寄せて居ました。が然し、如何にも非常の改革、至大艱難の事業なれば今日までは默過して居たのです。或時は翻譯して見たり、又た或時は自作して見たり、いろ〳〵に試みますが、底事此の篇位のものです。然るに近頃文學社會に新體詩とか變體詩とかの議論が囂しく起りまして、勇氣ある文學家は手に唾して此大革命をやつてのけむと奮發され數多の小詩歌が各種の紙上に出現するに至りました。是れが余を激勵したのです、是れが余をして文學世界に歩み近よらしめたものです。余は此「楚囚の詩」が江湖に容れられる事を要しませぬ、然し、余は確かに信ず、吾等の同志が諸共に協力して素志を貫く心になれば遂には狹隘なる古來の詩歌を進歩せしめて、今日行はるゝ小說の如くに且つ最も優美なる靈妙なるものとなすに難からずと。

幸にして余は尚ほ年少の身なれば、好し此「楚囚の詩」が諸君の嗤笑を買ひ、諸君の心頭を傷くる事あらむとも、尚ほ余は他日是れが罪を償ひ得る事ある可しと信ず。

元とより是れは吾國語の所謂歌でも詩でもありませぬ、寧ろ小說に似て居るのです。左れど、是れでも詩です、余は此樣にして余の詩を作り始めませう。又た此篇の楚囚は今日の時代に意を寓したものではありませぬから獄舍の模樣なども必らず違つて居ます。唯だ獄中にありての感情、境遇などは聊か心を用ひた處です。

明治廿二年四月六日

透谷橋外の僑寓にて

北村門太郎識

第一

曾つて誤つて法を破り
　政治の罪人として捕はれたり、
余と生死を誓ひし壯士等の
　數多あるうちに余は其首領なり、
中に、余が最愛の
　まだ蕾の花なる少女も、
國の爲とて諸共に
　この花婿も花嫁も。

第二

余が髮は何時の間にか伸びていと長し、
前額を蓋ひ眼を遮りていと重し、
肉は落ち骨出で胸は常に枯れ、
沈み、萎れ、縮み、あゝ物憂し、
　歲月を重ねし故にあらず、
　又た疾病に苦む爲ならず、
　浦島が歸鄉の其れにも
　さて似付かふもあらず。
余が口は涸れたり、余が眼は凹し、
曾つて世を動かす辯論をなせし此口も、

曾つて萬古を通貫したるこの活眼も、
はや今は口は腐れたる空氣を呼吸し
眼は限られたる暗き壁を睥睨し
且つ我腕は曲り、足は撓めり。
嗚呼楚囚！ 世の太陽はいと遠し！
噫此は何の科ぞや？
たゞ國の前途を計りてなり！
噫此は何の結果ぞや？
此世の民に盡したればなり！
去れど獨り余ならず、
吾が祖父は骨を戰野に曝せり、
吾が父も國の爲に生命を捨てたり、
余が代には楚囚となりて、
とこしなへに母に離るなり。

第三

獄舍！ つたなくも余が迷入れる獄舍は、
二重の壁にて世界と隔たれり
されど其壁の隙又た穴をもぐりて
逃場を失ひ、馳込む日光もあり、
余の青ざめたる腕を照さむとて
壁を傳ひ、余が膝の上まで歩寄れり。
余は心なく頭を擡げて見れば、
この獄舍は廣く且空くて、
中に四つに分れたる地となり、
四人の罪人が打揃ひて——
曾つて生死を誓ひし壯士等が、
無殘や狹き籠に繫がれて！
彼等は山頂の鷲なりき、
自由に喬木の上を舞ひ、
又た不羈に溪間の水を飮し、
ひとたびは山野に威を振ひ、
慓悍なる熊をおそれしめ、
湖上の毒蛇の巣を襲ひ
世に畏れられたる者なるに
今は此籠中に憂き棲ひ！
四人は一室にありながら
物語する事は許されず
四人は同じ思ひを持ちながら
そを運ぶ事さへ容されず、
各自限られたる場所の外へは
足を踏み出す事かなはず、
たゞ相通ふ者とては
同じ心のためいきなり。

第四

四人の中にも、美しき
我花嫁……いと若き
其の顏の色は消失せて
灰色に曇けて黯しき！
嗚呼余の胸を撃つ
其の物思はしき眼付！
彼は余と故鄕を同じうし、
余と手を携へて都へ上りにき——
京都に出でゝ琵琶湖を後にし
三州の沃野を過りて、濱名に漕ぎ、
富士の麓に出でて函根を越し、
遂に花の都へは着きたりき。
愛といひ戀といふには差あれど、
吾等雙個の愛は精神にあり、
花の美しきは美しけれど、
吾が花嫁の美は、其志操にあり。
梅が枝にさへづる鳥は多情なれ、
吾が情はたゞ赤き心にあり、
彼の柔き手は吾が肩にありて、
余は幾度か神に祈を捧げたり。
されどつれなくも風に妬まれて
愛も望も花も萎れてけり。
一夜の契りも結ばずして
花婿と花嫁は獄舍にあり。
獄舍は狹し
狹き中にも兩世界——

彼方の世界に余の半身あり、
此方の世界に余の半身あり、
彼方が宿か此方が宿か？
余の魂は日夜獨り迷ふたり！

第五

あとの三個は少年の壯士なり
或は東奥、或は中國より出でぬ、
彼等は壯士の中にも余が愛する
眞に勇壯なる少年にてありぬ。
されど見よ彼等の腕の縛らるゝを！
流石に怒れる色もあらはれぬ——
怒れる色！ 何を怒りてか？
自由の神は世に居まさぬ、
とは言へ、猶ほ彼等の魂は縛られず、
磊落に遠近の山川に舞ひつらむ、
彼の富士山の頂に汝の魂は留りて、
雲に駕し月に戯れてありつらむ、
嗚呼何ぞ穢なき此の獄舎の中に、
汝の清浄なる魂が暫時も居らむ！
斯く云ふ我が魂も獄中にはあらずして
日々夜々輕く獄窻を逃伸びつ
余が愛する少女の魂も跡を追ひ
諸共に、昔の花園に舞ひ行きつ
穢なく汚なき地の上にはふバイオレット
其名もゆかしきフォゲットミイナット
其他種々の花を優しく摘みつ
ひとふさは我胸にさしかざし
他のひとふさは我が愛に與へつ
ホッ！ 是は夢なる！
見よ！ 我花嫁は此方を向くよ！
其の痛ましき姿！
嗚呼爰は獄舎
此世の地獄なる。

第六

世界の太陽と獄舎の太陽とは物異れり
此中には日と夜との差別の薄かりき、
何ぜ……余は晝眠る事を慣として
夜の靜なる時を覺め居たりき。
ひと夜。余は暫時の坐睡を貪りて
起き上り、厭はしき眼を强ひて開き
見廻せば暗さは常の如く暗けれど、
なほさし入るおぼろの光……是れは月！
月と認れば余が胸に絶えぬ思ひの種、
借に問ふ、今日の月は昨日の月なりや？
然り！ 踏めども消せども消えぬ明光の
月、
嗚呼少かりし時、曾つて富嶽に攀上り、
近く、其頂に相見たる美しの月
美の女王！ 曾つて又た隅田に舸を投け、
花の懐にも汝とは契をこめたりき。
同じ月ならむ！ されど余には見えず、
同じ光ならむ！ されど余には來らず、
呼べど招けど、もう
汝は吾が友ならず。

第七

牢番は疲れて快く眠り、
腰なる秋水のいと重し、
意中の人は知らず余の醒めたるを……
眠の極樂……尚ほ彼はいと快し
嗚呼二枚の毛氈の寢床にも
此の神女の眠はいと安し！
余は幾度も輕く足を踏み、
愛人の眠を攪さむとせし。
されど眠の中に憂のなきものを、
覺させて、其を再び招かせじ。
眼を鐵窻の方に回し
余は來るともなく窻下に來れり
逃路を得むが爲ならず
唯だ足に任せて來りしなり

[illegible]

そも此家の[illegible]！

第八

想ひは奔る、街を上りて[illegible]

彼山、彼水、彼庭、彼花に余が心は惹れけり、

彼花[illegible]余[illegible]花嫁と

もろともに[illegible]花は[illegible]れにけり、

思へば、余は暇を告ぐる際もなかりしなり。

[illegible]にもあられず、ひそひそ

余は鐵窗の下に身を寄せてぞ

何にもあれ世界の音信のあれかしと

待つに甲斐あり！ 是は何ぞ——？

送り來れるゆかしき菊の香！

余は思はず[illegible]たり、

こは我家の庭の菊の我を忘れで、

遠く西の園まで余を見舞ふなり。

あゝ我を思ふ友

恨むらくはこの香

我手には觸れぬなり。

第九

またいとあまた余は暗く[illegible]

遠く、壁を傳ひて[illegible]る日の光

余は昔の花嫁の方に先づ眼を遣れば、

こは如何に！ 影もなき吾が花嫁！

思ふに彼は他の獄舍に送られけむ、

余も[illegible]の中に移されたりけれ、

こはあはれな[illegible]

何[illegible]

永別の[illegible]をかはす事もかなはざりけむ！

三個の壯士もまた影を留めぬなり、

ひとり此廣間に余を[illegible]たり、

假寢の中に見たる夢の[illegible]なりき、

噫、[illegible]の夢！ 皆な往けり！

往けり、我愛も！

また同盟の[illegible]女も！

第十

倦み來りて、記憶も歳月も皆な去りぬ、

寒くなり暖くなり[illegible]、秋と過ぎぬ、

晴と雨とにも余は感[illegible]を失ひて

今は[illegible]を組む事のみ知りぬ、

聞きも、世界も星辰も皆た盡きて、

余にはあらゆる者皆な、無に歸して、

たゞ寂寞、[illegible]なる呼吸——

生死の間の[illegible]なる、

甘き愛の花嫁も、身を抛ちし國事も

靜かに、もう夢とも又た現ともなく…

[illegible]

[illegible]

第十一

余には日も夜もの區別なし、

これぞ余の倦みたる耳にも聞きし、

曉の鶏やまた時に急ぐ鳥の聲、

とは[illegible]形…[illegible]

し、

いと[illegible]余の[illegible]の木の枕に

窗下に推し當て、眠の[illegible]を

祈れども、またこの[illegible]

下は[illegible]——[illegible]

生きてあり、[illegible]

突如窓を叩いて[illegible]を呼ぶ者あり

あやにくに余は[illegible]花嫁を思出でたり、

弱き體を引立て、[illegible]

この如何に、[illegible]余が[illegible]たり！

[illegible]年月の久しきに、

[illegible]世界の[illegible]

彼は獄舍の中を[illegible]しと思はず、

梁の上梁の下[illegible]自由に[illegible]を伸ばす、

能き友なりせ、こは太陽に[illegible]

我無聊を慰めくれり、獄舎の中を厭はず。
想ひ見る！　此は我花嫁の化身ならずや
嗚呼約せし希望みし事は遂に來らず、
忌はしき形を假りて、我を慕ひ來るとは！
ても可憐な！　余は蟋蟀を去らしめず。

第十二

余には穢なき衣類のみなれば、
是を脱ぎ、蟋蟀に投げ與ふれば、
彼は喜びて衣類と共に床に落ちたり、
余はひ寄りて是を抑ふれば、
蟋蟀は泣けり、サモ悲しき聲にて、
何ぜなれば、彼はなほ自由を持つ身なれば。
恐るゝな！　捕ふる人は自由を失ひたれ、
蟋蟀を捕ふるに……野心は絶えて無ければ。
嗚呼！　是は一の蟋蟀！
余が花嫁は斯る見惡き姿にては！
されど余は彼を逃げ去らしめず、
何ぜ……此生物は余が友となり得れば。
好し……暫時獄中に留め置かむに、
されど如何にせむ？　彼を留め置くには？
吾に力なきに、此一獸を留め置くにさへ？
憐ましや！　なほ自由なり　此獸には。
余は彼を放ちやりたり、
自由の[illegible]……彼は喜んで、
疾く獄舎を逃げ出でたり。

第十三

恨むらくは昔の記憶の消えざるを。
若き昔……其の樂しき故郷！
暗き中にも、回想の眼はいと明るく、
其と見えて其にはあらぬ我が故郷！
雪を戴きし冬の山、霞をこめし溪の水、
よも變らじ其美しさは、昨日と今日、
——我身獨りの行末が……如何に
浮世と共に變り果てむとも！
嗚呼蒼天！　なほ其處に鷲は舞ふや？
嗚呼深淵！　なほ其處に魚は躍るや？
春？　秋？　花？　月？
是等の物がまだあるや？
曾つて我が愛し、共に逍遥せし。
樂しき野山の[illegible]は如何にせし？
摘みし野花？　聽きし溪の樂器？
あゝ是等は余の最も親愛せる友なりし！
有る——無し——の答は無用なり、
常に余が想像には現然たり、
我あらば歸りたし、も一度、
貧しく平和なる昔のいほり

第十四

冬は嚴しく余を惱まし、
壁を穿つ日光も暖を送らず、
日は短し！　しかし夜はいと長し！
寒さ瞼を凍らせて眠りも成らず。
然れども、いつかは春の歸り來らむ、
好し、顧みる物はなしとも、破運の余に。
たゞ何心なく春は待ちわぶる思ひ[illegible]、
余は獄舎の中より春を招きたり、高き窓にし
遂に余は春の來るを告げられたり、
鶯に！　鐵窓の外に鳴く鶯に！
知らず、そこに如何なる樹があるや？
梅か？　梅ならば、香の風に送らる可きに。
美しい声！　やよ鶯よ！
余は飛び起きて、
僅に鐵窓に攀ぢ上るに——
鶯は此響には驚かで。
獄舎の軒にとまれりて、いと靜に！
余は再び疑ひそめたり……此鳥こそ
眞に、愛する妻の化身ならむに。
鶯は余が幽靈の方を振り向きて
飛び去らむとも[illegible]て
再び歌ひ出でたり[illegible]しさ！

余が幾年月の鬱を拂ひて、
卿の美しき衣は神の惠みなる、
卿の美しき調子も神の惠みなる、
神がこの獄舎に足を留めるのも
また神の……是は余に與ふる惠なり
然り！ 神は鶯を送りて、
余が不幸を恩む厚き心なる！
嗚呼夢に似てなほ夢ならぬ、
余が身にも……神の心は及ぶなる。
思ひ出す……我妻は此世に存るや否？
彼れ若し逝きたらむには其化身なり、
我愛はなほ同じく獄裡に呻吟ふや？
若し然らば此鳥こそ彼が靈の化身なれ、
自由、高尚、美妙なる彼の精靈が
この美しき鳥に化せるはことわりなれ、
斯くして、再び余が憂鬱を訪ひ來る——
誠の愛の友！ 余の眼に涙は充ちてけり。

第十五

鶯は再び歌ひ出でたり、
余は其の歌の意を解き得るなり、
百種の言葉を聴き取れば、
皆な余を恩むる愛の言葉なり！
浮世よりか、將た天國より來りしか？

余に[illegible]使とのみ見ゆるなり。
嗚呼さりながら！ 其の慣れたる惡魔
[illegible]中より逃れ來れりとも——
若し然らば……余が同情を憐みて
[illegible]か、余が作たむと思ひて、
島の[illegible]……世に捨てられし此身にも！
鶯よ！ 卿は籠を出でたれど、
余は死に至るまでは許されじ
余を苦しめ、又た笑ましむれど、
[illegible]の歌は、余の不幸を[illegible]ひ得じ。
我花嫁よ……否な鶯よ！
おゝ悲しや、彼は逃げ去れり
嗚呼是れも亦た浮世の[illegible]物なり。
若し我妻ならば、など逃げ去らむ
余を再び此寂寥に打ち捨てゝ、
この慘憺たる墓所に殘して
——暗き、空しき墓所——
其處には腐れたる空氣。
濕りたる床のいと冷たき
余は爰を墓所と定めたり、
生きながら既に葬られたればなり。
死や、汝何時來る？
永く待たすなよ、待つ人を、
余は汝に犯せる罪のなきものを！

第十六

鶯は余を捨てゝ去りぬ、
余は更に快樂に[illegible]たり、
[illegible]は都に如何なるや？
確かに、都は今が[illegible]なる！
斯く余が想像中に[illegible]
久し振にて[illegible]は入り來れり、
遂に余は許されて、
大赦の大慈を感謝せり。
門を出づれば、多くの[illegible]
集ひ、余を迎へ來れり、
中にも余が最愛の花嫁は、
走り來りて余の手を握りたり、
彼が眼にも余が眼にも同じ涙——
又た多數の朋友は喜んで踏舞せり。
先きの可憐き鶯も爰に來りて
再び美妙の調べを、皆なに聞かせたり。

國木田獨歩篇

再會　嬉しき祈　別れ　「こぞの今」　山中　秋の月影　破壞
ゆめうつゝ　若鳥



再會

この世にまた
君と遇ふことあらむとも
思はざりしに
忘れねばこそ面影の
早くも君を見つけぬ　故
浮世の巷に遇ひみれば
君はをさな子背に負ひて
よき母親となられたり。
君と別れにはや四年と
四とせが間
世のうきふしに遇ふ時に
時々君を思ひ出しけり。

我は昔にかはらねど
君は母御となりにけり。
そのをさな子を背に負ひて
玉川の清きほとり
そのふる里に歸り行け。
われは都に
別れし君を思ひつゝ
世のうきふしに
浮世のちまたにさすらはむ
この世にまた
君と遇ふことあらむかも。

嬉しき祈

[illegible]

我にうれしき祈あり
祈に曰く、あゝわが神！
彼女の上を守れかし！
われを見捨てし彼女の上に
肉にも靈にも安きを賜へ
あゝ此祈！
いかにうれしき祈ぞや
人なき[illegible]にたゞ一人
涙とともに祈るなり！

別れ

今日をかぎりの別れとは
夢知らでありき夢にのみ
君に逢瀬を[illegible]し

[illegible]なりにけり。

目も[illegible]になる野末見ゆ
遠山霞む彼方にぞ
人住む里も多からし
其里慕し、[illegible]行く。

人の世[illegible]
逢うては別れ別れては
また逢ふこともあらなくに
別れし人も多からめ。

十歳の後の冬の夜に
君が門の戸[illegible]
せめては内に入れたまへ、
越し方の日を語ること[illegible]
君は彼日を語り[illegible]
吾は彼夜を忍び[illegible]し
梢をわたる風の音は
かたみの涙[illegible]
百歳後の秋の夜の
月は木の間を洩ふとも

[illegible]
[illegible]に
あ[illegible]むて
[illegible]日は
[illegible]吾
[illegible]ことを。

逢うては別れ、別れては
東に西に埋れて、
千代の昔の神世より
はかなき人も多かりき。

逢ふは束の間別れこそ
はてなき恨み此世こそ
戀の嘆きと[illegible]
あらしに曝す草ならむ。

「こその今」

そぼ降る雨の音長く
野末をわたる風遠し
思ひ起すは去年の今

[illegible]

山中

山路たどれば[illegible]見ゆる
[illegible]小川に[illegible]
何[illegible]
[illegible]

秋の月影

秋の月かげ[illegible]ふるは
おの[illegible]
ふりさけ見れば目に涙
露を[illegible]風吹く、

破壊

破壊は悲し
危も悲し
愛の破壊は

これを感ずる
われ人里に深からば
人の涙は
更に清きを。

ゆめうつゝ

昨夜の夢のあやしさを
語りつくさむすべもがな
ゆくへもしらずさすらふは
我身か、あらず、影なるか
暗きをたどるをのこあり
仰げば空の星消えて
常世の闇の光なし
とばかりありて星一つ
とばかりありて二つ三つ
かゞやき出でぬくれなゐに
見る間たちまちむらさきに
我身か、あらず、影なるか
をのゝき立てるをのこあり。
夢をみる／＼夢ならで
我身くすしくなりにけり
心たちまちをのゝきて
あはれ我身と叫びたり
とばかりありて星飛びぬ
とばかりありてたまゆらぎ
我身くすしくなりにけり。

夢さめぬ朝日のぼりて
かぎりなし天のはる／＼
あかつきの光は清し
風吹けば青葉かゞやき
鳥啼きて今日も變らず
いかなればくすしかりけむ
この我身昨夜の夢に。

夕闇遠し、獨りして
小川の岸をたどりつゝ
仰げば高し、色深し
瑠璃の大空[illegible]たえぬ
見はてのかぎり山見えず
吹き送る風は袂をひるがへし
うたふ聲森へだてゝ聞ゆなり。
牛ひける童は見えず鐘の聲
遠近の寺にひゞきつ獨りゆき
ものを思へば、はてもなし。
我身あやしと見し夢は
夢よりさめし夢なるか
夢にあやしと見し星は
色に光に變りなし
現か今も夢なるか。

夢みなむ、いざ今宵また
星飛びて月も碎けよ
底さけて眠れる火山
降りそゝげ焰の雨
をのゝきさめむかくて吾れ
夢のうちにもうつし世の
にぶき眠の迷より。

若鳥

翼をえにし若鳥を
あはれと君もおぼすべし
此世の望高かりし
ますらをのこの翼をば
うちし獵夫や誰なりし
憐しと君はおぼさず—。

佐佐木信綱篇

凱旋　勇敢なる水兵　薩摩守　[illegible]　[illegible]



凱旋

あなうれし　よろこばし　たたかひ勝ちぬ
百千々の　敵はみな　あとなくなしつ
あなうれし　よろこばし　このかちいくさ

敵はみな　あともなく　うちほろぼしつ
ここちよや　ここちよや　このかちいくさ
わが國に　わが君に　いむかふものは
かくのごと　うちすてむ　今よりのちも

國のため　君のため　つくせといひし
わが父は　わが母は　このかちいくさ
よろこびて　聞きまさむ　その父母に

ほまれ負ひ　にしき着て　逢はむ日近し
いさましや　さしのぼる　朝日のみはた
さきに立て　かへりゆく　われらがみかた
あなうれし　よろこばし　このかちいくさ
いさうたへ　いざいはへ　このかちいくさ

勇敢なる水兵

煙も見えず雲もなく
風も起らず浪立たず
鏡のごとき黄海は
曇りそめたり時の間に

空に知られぬいかづちか
浪にとどろく大砲か
煙は空を立ちこめて
天つ日かげも色くらし

戦今やたけなはに
つとめつくせる勇者の
尊き血もて甲板は
から紅にかざられつ

弾丸の破片の飛び散りて
あまたの傷を身におへど
その玉の緒を勇氣もて
つなぎとめたる水兵は
間近く立てる副長を
痛むまなこに見とめけむ

彼はさけびぬ聲高に
「まだ沈まずや定遠は」
副長の眼はうるほひぬ
されども聲は勇ましく
「心やすかれ定遠は
戰ひがたくなしはてつ」
聞き得し彼は嬉しげに
最後の微笑をもらしつつ
「いかでかたきを討ちてよ」と
いふ程もなく息たえぬ
「まだ沈まずや定遠は」
此言の葉は短きも
皇國をおもふ國民の
胸にぞ長くしるされむ

薩摩守

保元の春の花ざかり
咲きさかえにし榮[illegible]
壽永の夢とさめはてて
今ぞ壽永の秋の[illegible]
傾くかげも[illegible]門の
榮花のはてを示すらむ

「かばかり門をたたくとも
あけ給はぬもことわりなり
みだれ世の末にいぶせき夜半なれば
されど[illegible]日と[illegible]ひ[illegible]
「薩摩守[illegible]たり」
五條の三位俊成は
門をほそめにひらきつつ
「あはれ[illegible]忠度」
薩摩守ただ[illegible]に
「かかる[illegible]歌屑に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

底の水屑となさむこと
のこりをしさに淀川の
川尻までは下りしが
思ひかへしてまゐりぬ」と
さぐる鎧の引合
とり出だしたる歌巻を
涙と共にうけをさめ
「かかる折にも斯の道を
忘れたまはぬ志
かならず世々に傳ふべし」
「のぞみは足りぬあた繁し
思ひを雁山に馳すれども
前途の道ぞ程とほき
いざ」と月毛をうながして
落ちゆくかげも西の空

霜夜

ひねもす家にいそしみて
彩へたる畫のかずかずを
店のあるじに渡しつつ

わづかの代と取りかへて
すがたさびしきをとめ子は
つかれしおもわやましげに
幾たびとなくぬかづきつ
寒きちまたに立ち出でぬ

木枯の風あららかに
夕ぐの雲を吹きしをり
月まだ出でぬ大空に
光またたく星幾つ

堪へぬ寒さにおのが手を
口にあてつつふきながら
つづく柳のかげやせて
氷れる道をたどりゆく

河にそひたる高き屋に
絶えたけの絃ひびくなり
橋のたもとのさむしろに
泣く子いたはる乞食あり

から世わたる我よりも
なほあはれなる親と子を
いとほしげにも見やりつつ
まがれる小路帰りゆく

[illegible]しめく板戸[illegible]
[illegible]らきに[illegible]れ[illegible]子は
[illegible]つ[illegible]つけ[illegible]
おぼつかなく[illegible]
[illegible]の具の皿は[illegible]
[illegible]れし疊をいろどれり
うすき衾をかづきつつ
青白の顔ぞうち臥せる

貧しき者の幸なきは
宿世の業か世の罪か
米のあたひはたかくして
勞力のあたひなどやすき

富みたる子らがやぶる絹は
涙の手もていろどられ
富みたる人が着る衣は
涙の手もて縫はるなり

頭は重く目はつかれ
胸いたきまではたらきて
わづかに得たる幾錢を
見えぬその手にさぐらせつつ
さびしく笑める母と子が
小家をゆするさ夜風に

水をわたりてひびきくる
うたげのさわぎかすかなり

浪はうち又浪はひく

鐘はひびきて日は暮れぬ
うすずみ色にしめりたる
まさごの上を旅人は
町の方にといそぐなり
浪はうち又浪はひく

くらさは空をおほひつつ
海は絶えせず聲たてぬ
砂の上なる足あとは
ましろき手もて消されたり
浪はうち又浪はひく

馬はいななき夜は明けぬ
新たなる日はのぼりきぬ
過ぎ行きたりしたび人は
また此の磯にかへり來ず
浪はうち又浪はひく

正岡子規篇

病の窓　蜻蛉



病の窓

心[illegible]して
　[illegible]
[illegible]、
　[illegible]見[illegible]
[illegible]
　[illegible]し、
[illegible]
　[illegible]、
嵐まじりにしぐれたる
　ゆうべの雨の音絶えて、
障子まばゆく照りわたす
　小春の日ざし暖かし。

庭に立てたる物干の
　[illegible]なる影と、其[illegible]に
かけ渡したる竹竿の
　横なる影と打ち違ひ
半ばを寫す、其はしに
　小さく黒く見えたるは
干したる足袋の影ならむ。
　[illegible]向する程にすいすいと
[illegible]一つ飛び出でぬ。
　左にかけり右に行き
終に戻りて竹竿の
　上にとまりて、こくこくと
首を動かす影しるし。
　ふと飛び上り消え失せて
足袋のほとりに現れつ、
　再びとまる竿の上に
落ちつきかねて、又しばし
　[illegible]
障子の外に去りにけり。
待こ[illegible]
　[illegible]。
昨日の友を[illegible]
　いづち行きけむ、やがて又
歸り來べしと待つ程に
　あらぬ物こそ寫りたれ。
何かあらむと見つつ居れば
　影明かに縮まりて
窓にとまるは胡蝶なり
　廣き翅をゆるゆると

鳴きて鳴かす其たびに、
　わづかに漏る[illegible]、
[illegible]色[illegible]
　[illegible]
翅をやすめて飛びも得ず、
　漸くここに[illegible]つきて、
ほつと息つく如くなり
　「あはれよ、[illegible]如何にして
今宵は[illegible]ながらへん
　[illegible]降る[illegible]
翔けるも失せず、[illegible]じき
　秋の初めに分にも
吹かれて死なで、風の
　すさむ中に[illegible]。
いかに長くも此冬を
　過ぎぬ命を偸み得て、
枯れし櫻に返り咲く
　花四五輪の露の間。
あしたは霜と凝るぞとも
　知らで、一夜を其中に
何の夢見るはかなさよ。
　思へばあはれ、やよ蝶よ。

[illegible]なりむ。
　汝が[illegible]かにの
蜘蛛のとりことなりにけむ
　[illegible]
竜の枝に打たれけむ、
　取り殘されて只獨り
さまよふぞ[illegible]たて、さりながら
　なから[illegible]れば[illegible]に角に
樂しきふしはあらぬべし、
　こよひに[illegible]る[illegible]の緒の
絶えなむとしては絶えかぬる
　今の悲しさ、そもいかに。
試みに思へ[illegible]限りある
　汝が一生の其中に
とりわけ樂しかりし日は
　[illegible]種花咲き[illegible]、
風暖かにそよそよと
　綾の袂をなるがへし、
[illegible]羽衣の曲なして
　汝が狂ひし其時ぞ。
されども汝は今日よりも
　更に樂しき明日ありと

明日を[illegible]
　[illegible]中に[illegible]、
さきをとといも、[illegible]
　[illegible]、[illegible]に
昔の明日の[illegible]、
　[illegible]
明日なき[illegible]
　樂し[illegible]、
明日程うた[illegible]はなし
　[illegible]、
來年花は開くとも、
　汝はまた此世に[illegible]。
あはれ[illegible]。[illegible]獨り[illegible]、
　[illegible]は僅かに[illegible]
廣き宇宙はものはあれど、
　苦み多く樂みの
少きところ、君が住む
　人間界の如きは無し。
吾等が受くる樂みは
　今の今なり。今を置きて、
思ひ出すべき昨日なく、
　推し測るべき明日も無し、

吾等が暮らす生涯は
　今と今とのつゞきにて、
樂と樂とのくさりなり。
　あはれよ、君よ。人間の
執著多き心もて、
　五欲の外の風に乘る
吾等をはかること莫れ
　「さらば」。と言ひて其影は
窓をはなれて失せにけり。
寂然としてややしばし
　我にもあらで物思へば
一吹き風の音過ぎて
　獨り驚く心かな。
見れば窓の日薄く、
　物干の影かたより一、
守り殘されし一本の
　冬枯れ芒さきばかり
二三尺程寫りけり。
　又吹き起る風の
來るやと聞けばはらはらと
　ふり來る落葉の[illegible]に
障子にさはる音もあり。

　蜻蛉蹤らず蝶も來ず、
たまさかに飛ぶ者さへも
　影おぼろにて見分たず。
　　、
塒求むる夕暮の
　烏かしましく啼きたてて、
外面を通るわらんべの
　友に別るる聲聞ゆ
いつの間となく物干は
　左の方に消え行きぬ。
芒の影もなくなりぬ。
　見れば右手の下つ方に、
もやもやとして樫の木の
　薄き影こそ寫りたれ。
次第次第に其影は
　變化の如き形をなし、
[illegible]にひろがりつ、
　一間半の窓總て
只[illegible]、なりにけり。
天に懸けたる日の玉の
　光を借りて、美の神が
わが[illegible]づれを慰めし

　天然界の幻[illegible]
終り[illegible]なり[illegible]、眼を塞ぎ
　我を休めて、知らず知らず
眠らぬ夢に耽り居れば、
　眼ぶたを透し[illegible]迄
物ぞ[illegible]りし。徐ろに
　小窓を見れば、薄暗き
月の光は一面に
　鬼火の如く照せども、
木の葉も落ちず、[illegible]程の
　物だに[illegible]はず、こうごうと
影なき風の音はげし。

蜻蜓

ほがらかに照る[illegible]日に
[illegible]き衣を[illegible]
[illegible]下に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]田の上に
[illegible]けし。

宮崎湖處子篇

歸思 [illegible]

[illegible]



歸思

[illegible]たき一[illegible]かひ。
[illegible]月日ののどかなる。
小川に媼は衣あらひ、
野邊に翁は秣かる。

閑む高峯はまへうしろ、
流るゝ水もみぎひたり。
浮世へだてし村のいろ、
今も昔の世に似たり。

竹の林に風吹けば、
絃なき琴の音もひびき。

森の小枝に春来れに、
高くにまさる花にしき。

百代傳ふる此里に、
安く老いたる親ふたり。
此處こそ幸はあるものに、
われは都にのぼるなり。

首途ゆかしき春げしき、
にほふ櫻や桃のはな。
わが行く方にかぐはしき、
馨は今日のなごりかな。

一駒の歩みのなどおそき、
すゝめ。」と鞭をあぐれども。
橋の柳に風そよぎ、

枝にかゝるゝ旗ごころ。

遙に村を過ぐれども、
わが父母はまだ去らじ。
見ゆる形は消ゆれども、
親はなつかな[illegible]。

今一度とふりむけば、
うつゝに消なむばかりなる。
我ふるさとの面影は、
かすみの根にぞ沈むなる。

このうるはしき天地に、
父よ安かれ母も待て、
學びの業の成る時に、
錦かざりて歸るまで。

離別

唯一年に一度を、
星の逢瀬とはかなまは、
六とせを越えて來つる身を、
あはれと君も思へかし。

別るは易く會ひ難く、
逢ふ[illegible]の間あるを、
人に[illegible]、我ながら
悲しきものは[illegible]なり。

人目の關に[illegible]られ、
たゞし[illegible]語る由もなし。
言な[illegible]君に逢ひぬれば、
言た[illegible]君に[illegible]。

[illegible]、と
[illegible]
[illegible]、
[illegible]。

あだし女のたはれける、
都すまひのわびしさに、
君が妾と寢ぬる時は、
床あたゝかき夜半の夢。

去らば戀人顔見せよ
悲しきとてなうつむきそ。
君が面影今一度、
胸の[illegible]に寫りてよ。

路にこぼるゝ我なみだ、
桔梗そめて、來む[illegible]に
花つむ君が手の裏の
かをる[illegible]に生えよかし。

○

暮れ[illegible]明日ぞ聞けず、
今日[illegible]、
たゞ[illegible]は故郷の、
追懷にぞ殘りける。

[illegible]、
[illegible]、いつぞと知らねども、
戀しき人は故郷の、
追懷にぞ殘りける。

雲の通路波の音の、
及ばぬ旅に我ゆくとも、
愛でたき景色は故郷の、
追懷にぞ殘りける。

（以上三篇「歸省」より）

葦

なかれつきせぬ古川の、
みぎはにしげるむら葦も、
あはれうき世の秋風に、
ふかれ／＼て枯れにけり。

薄

（[illegible]）

[illegible]、
野べに出で見し花薄
[illegible]、
ものおも[illegible]。

水聲

やなぎの蔭にながれ來て、
たにをかたるか知らねども。
いさゝ小川のさら／＼と、
きゝすてがたき水のおと。

〰〰〰

道ゆく人よたゝずみて、
君もあはれときけよかし。
橋のしたにて人しれず、
むせぶがごとき水のおと。

〰〰〰

かしらに雪をいたゞきて、
今日たちかへるたびごころも、
わがさと川はいまもなほ、
聲をさなくてながれけり。

忘れ水

いづこの野べに里川と、
わかれて來たるわすれ水。
たつきもしらぬ野なかに、
覺つかなくもながれ來て、
覺つかなくも流れ來て、
覺つかなくそながれゆく、
茅がやが下にうもれては、
うしなはるらむこゝちして。
はては二たび里川に、
あふべきものとおもへども。
茅はら菅ばらはる／＼と、
そのゆく末をおもひやる。

わが姉上

わが姉上の人しれず、
しのびて何を縫ひたまふ。
たゞ片ときも垂乳根の、
傍をはなれぬ人にして。
わが姉上の人しれず、
隠れて何を書きたまふ。
文かくときは其たびに、
[illegible]人に[illegible]

結びし柳

[illegible]

砧

わかれて來つる[illegible]家は、
狭霧のおくになりぬれど、
擣くきぬたのその音は、
月夜さやかに響きたり。



夕ぐれ

夕ぐれごとに立出でて、
　うれしき君が琴の音を、
きかむと我はねがへども、
　中を流るゝ大川の、
むかひのきしの遠くして、
　たえ／″＼なるをいかにせむ。

人づま

人のつまとぞなれるきみ、
　しばしはきゝねわが言を。

田山花袋篇

夕ぐれ　人づま　離れ小島　湖畔雑吟　山かげ　君が姿
春の夜　雨の夜

今こそきみにあかすべき、
　つゝみしおのがまごころを。
母もとがめぬむかしより、
　われは君をばしたひにき。
きみのほかにはわが胸に、
　ゑがけるものは有らざりき。
深山の奥にふたりして、
　すみたらむにはその時の、
うれしさあはれさいかにぞと、
　思ひしこともありたりき。
やさしき君をともなひて、
　春の野みちをてふのごと、
あそばゝいかに樂しきと、
　おもひしこともありたりき。
しかるをあはれ今いかに、
　うれしきことも盡きはてゝ、
たのしき事もつきはてゝ、
　苦とはなりぬおのが世は。
君はしれるかわがこゝろ、
　かくまでしたひしたひたる、
おのがこゝろを君知るか、
　人のつまとぞなれるきみ。

離れ小島

漕ぎ行くまゝに近づきて、

離れ小島のまつ原は、
うつし繪よりも美しく、
あらはれ出でぬわが前に。
渚のしらなみ[illegible]
[illegible]の風も吹き絶えぬ。
朧ろに月は[illegible]
まつと花とのかげあはし。
おもへやかくも美しき、
この松原のなかにしも、
わがなつかしき戀人は、
待ちてあるなり遲しとて。

湖畔雜吟

そよげる蘆よこゝろあらば、
つれなき君の此處にしも、
來ませし時にかたれかし、
幾年前のつきの夜に、
人氣とだえしこのやまの、
沼のほとりをたゞひとり、
泣きつゝゆきし人ありと。

[illegible]人、[illegible]
[illegible]
人[illegible]に、
船漕ぎ出でてたゞひとり、
かくもはげしく泣くわれを。
雪をのせたる山のかげ、
旗にも似たるくものかげ、
皆來りてぞうつるなる、
夕のどけきみづうみに。
そのうつくしき影の中に、
あはれうき世のわづらひに、
やつれ果てたるわが影も、
うつりてあるなりたえだえに。
橋のたもとにかいまみし、
少女をけふもまた見むと、
わが訪ひくれどかげなくて、
むかひはるゝ、打わたす、
そのみづうみの水の上に、
うつるはあはれ星ひとつ。

まだ風さむきやまみちを、
こえて行くたる少女子の、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
見捨てかたくて少女子は、
をりてかざして來しならむ。
あはれやさしき少女子を、
とほくも我は見おくりぬ、
みやまのおくにふけてゆく、
春のつかひのこゝちして。

山かげ

風もいたらぬやまかげの
芝生のうへこそのどかなれ
小鳥はうたひ花はさき
かすみはたなびき蝶は舞ひ
訪ひ來る人もあらずして
水はしづかになかるなり

おのれはいまだ戀しといふ
ことばもしらねどたゞ君を
ひる間かげに來るときは
何とはなしになつかしく
やさしき心のおこるなり
戀にはあらずや此こゝろ

君が姿

路のほとりに出で逢ひし
きみがすがたのあとゝめて
ひさしく來れど君はしも
かへりみだにもせざりけり
心ひくべきはなもあり
眼にとまるべきものもあり
されどこひしき君はしも
かへりみだにもせざりけり
かへりみだにもせずして
いと親しげに[illegible]く
君がこゝろはあはれいま

いかなる事をおもへるか
君は知らずやかくばかり
したひしたへるわび人を
君は知らずやきみ近く
くるひ焦れるわび人を
いかにおもひにふけるとも
かへりみたまへあはれ君
かくまで戀ふる我をしも
見かへりたまへひと目だに

春の夜

いつとも知らず日はくれて
おぼろ月夜になりにけり
家のめぐりの花かげは
せまきおのれの室にみち
たえなむとする花の香は
いともかすかにゝほふなり
あはれのどけき春の夜の
この月花のなかにゐて
おのれは何をおもへるか

雨の夜

かはづつまよぶあめの夜は
ことに君こそこひしけれ
やさしき君よきみはいま
何をなしてか居たまへる
この春雨にさそはれて
琴をやひきてゐたまへる
文づくゑにしもむかひゐて
歌をやおもひてゐたまへる
さらずばひとりつく／＼と
おもしろき文に讀みふけり
このあめの夜のつれ／＼も
わすれはてゝやゐたまへる
いな／＼さにはあらざらむ
おのれのごとく君もまた
ものを思ひてゐたまふらむ
このつれ／＼のあめの夜に

太田玉茗篇

はなれ駒　宇之が舟



はなれ駒

誰が乗捨てし駒ならむ、
　春のこゝろに狂ひてか、
鬣立てゝちら／＼と
　霞める野べにぞ馳せ来なる。
馳せ来る駒の眼には、
　熱き火焔や燃ゆるらむ、
馳せ来る駒の蹄には、
　かろき翼や生ふるらむ。
駒は蹄の音たかく、
　雲雀の床を蹴かへして、
菫の花を蹴ちらして、
　霞くれまに過ぎにけり。
過ぎ行く駒を見かへれば、
　かすみに遠く消え失せて、
嘶く聲ぞ、ひさかたの
　空のあなたに聞えたる。

宇之が舟

見わたす限り秋の野は、
　千ぐさの花となりにけり、
其野のすゑに一すぢの
　清きながれぞながれたる。
清くながるゝ其川に、
　蓮の葉ふねをうかべつゝ、
まつりし像を里人の
　おくるひとゝなりにけり。
けふ七夕への祭日を
　おもひ寝にせし子供らは、
流れくる舟まちわびて
　舟来よ来よと歌ふなり。
くるや忽ち子供らは、
　ふねをめがけて石投げて、
土塊投げてその舟を
　うちにうつなり沈むまで。
打破られてその舟の

沈むやがて子どもらは、
手をはたゝきて諸共に
こゝちよげにぞ叫びたる。
折しも兒らが後ろより
ひとり老媼のあゆみ來ぬ、
蓮の葉舟をたづさへて、
ながるゝ川のそのきしに。
あやふき足を幾たびか
杖にさゝへて踏みしめつ、
涙ながらにつく\〴/と
遊べる兒らを見やりたり。
兒らは老媼を顧みて
宇之が祖母樣いかにせば、
宇之はおばあ樣と、
宇之はいかで來らざる。
宇之を見ざりし日なりけり、
けふは我れらと蓮の葉の
舟沈めむと契りしを、
宇之はいかで來まさざる。

いかで\/と子供らは、
老媼のそばにあつまりぬ。
哀れや宇之が祖母が身の
こゝろの中ぞいかならむ。
涙ぐみて子供らを
老媼はしばし見やりつゝ、
舟をしめしてこの舟は
宇之が靈をばおくるなり。
賢き兒らよ此舟は
宇之が舟なりこの舟は
沈め給ふな哀れなる
宇之が靈をばおくるなり。
送るとてこそ其舟を
老媼は水にうかべけれ、
涙ながらにその舟を
流るゝまゝにまかせつゝ。
兒らは叫びぬ其舟は
宇之が舟なり其舟は
宇之が靈なり君なくて、
土くれ投げな沈むるな。

舟を沈むるものあらば、
打てや\/と子供らは、
水のまに\/流れゆく
蓮の葉舟を追ひ行きぬ。
或は岸をはしりつゝ、
あるひは水を渡りつゝ、
守りて行きし子供らの
姿は見えずなりにけり。
秋の野末も里川も、
さながら暮れて荻の葉の
末吹く風の音のみぞ、
さゝやくごとく聞ゆなる。
杖にすがりて唯ひとり
老媼は岸にたゝずみて、
舟をまもりて子供らの
行きにし方をながめつゝ。

鹽井雨江篇

深山の美人



深山の美人

その一

おぼろ月夜に あこがれて、
よし野の奥に わけいれば、
さくら吹きまく 山かぜの
花のまぎれに さそはれて、
ふみまよふらむ、谷のくま、
家路もわかず なりにけり。

その二

駒をとゞめて たゝずめば、
誰が世をしのぶ 庵ならむ、
軒もかきほも、ふりつもる
花のはだれに うづもれて、
たゞ一すぢに すみわたる
かけひの水の おとすなり。

その三

「あるじやおはする、もの申す、
はなのふゞきに 路はとぢ、
かへりわづらふ たびの鳥、
あはれ、こよひは、花のやど
君が木ずゑに たのむなり。
願ふ」とよびて、たゝけども、
しばし應答は なかりけり。

その四

さすがに、人は 住みぬらむ。
「誰れ待つ宿に あらねども、
むぐらの門は さしもせず。
小屋の軒端の このすゑを
厭はずあらば、いざたまへ。
いざ」と答ふは、たわやめの
よそにもにほふ 花のこゑ。

その五

「いづくの里も、いつの世も、
人のこゝろの うれしや」と、
つもるも深き しろたへの
花のころもで 打ちはらひ、
いざなふ儘に 立ち入れば、
見るも涼しき すゞむしろ。

その六

をとめは籠を 取り出でて、
木の實に添ふる わらび草、
「わが身のみなる おく山の
世ににぬ業」と すゝめつゝ、
ほゝゑむ袖の やさしさは、
この世ながらの あまつ國。

その七

「げにや住しく　みやこだに、
　住み憂かる世と　きくものを、
こはしらくもの　かゝる山、
　かゝるさびしき　篠のいほ、
むすび初めにし　手弱女の
　こゝろの奥の　なつかしや。」

その八

いぶかしみつゝ　言とへば、
　をとめは、聴て　ほゝゑみて、
「ひとは花とし　うたへども、
　みやこは塵の　ちまたぞと、
思ひ知りたる　われこそは、
　いはれの限を　しきてより」

その九

なほ語るなり、たわやめは。
「霞の八重立つ　さゝすまし
おくふの奥の　あけくれを、
　紫のあみ戸に　しばしだに、
さびしきまゝに　思ひしは、
　すまぬ昔時の　我がこゝろ。

その十

「住さけゝは、われからも
　かをるの木木も　ほゝゑみて、
かきねの草も　ほころべば、
　鳥も来鳴きぬ　まどさらず、
花もかをりぬ、とこあかく、
　宿は、かすみに　うづもれて。

その十一

「夏としなれば、またさらに
　みねの小松の　かげきよく、
谷の小川の　おとすみて、
　なくや古巣の　ほとゝぎす、
吹くや嬉しき　篠のかぜ、
　宿は、みどりに　木がくれて。

その十二

「秋きりくれば、おもしろや、
　もゝくさ千ぐさ　露ちりて、
あさおお庭も　いろふかく、
　つまどに間なく　鹿もよび、
よひ／＼ごとに　月も訪ふ、
　やどは、紅葉に　うもれて。

その十三

「冬としなれば、いつしかも
　おち葉も雪も　降りつもり、
あるかたきの　ましば垣、
　ひまもる風の　をり／＼は、
雪ふやなづとり　谷づたひ、
　宿は、こほりに　とざされて。

その十四

「思ひ入りにを　なやむれば、
　塵かきくもる　ちまたより、
人くさしげき　おほ路より、
　みねの月ぞ、晴るゝなる、
まなくかゝれど、雲かすみ、
　つねにつもれど　花もみぢ。

その十五

「うき世の人に　くらべなば、
　みやこの女に　くらべなば
はなうべなすや　勝るらむ、
　草木のかげや　まさるらむ、
ものいふ色に　あらねども、
　ことゝふ声に　あらねども。」

その十六

「げにおもしろの　言の葉や、
　はかなき物と、人はいへど、
時はたがへぬ　みねの花、
　をりはかへざる　そらの月、
思ひて見れば、なか／＼に、
　みやこの友ぞ、い[illegible]木なる。

その十七

「さはまりたまの　手弱女よ、

戀ひば、うしと 知りながら、
なほ捨てがたき 浮世をば、
みこゝろ深く おもひたち、
むすび初めにし いはし水、
深しきもとの しづくやな。

その十八

「昔時きかまし、由縁とはまし、ありしよの、ありしよの。」
幾たびそたび 問ひよれど、
をとめは、たえて 應答なく、
こゝにも散るや、花ふゞき、
ほかげに匂ふ くれなゐは。

その十九

「いはねのもとの うもれ水、
埋れ果つべき 身にしあれば、
音に立つべくも あらねども、
君もいとふと 聞くからに、
あさざは沼の あさき世を、
深きこゝろの なつかしや。

その二十

「いまそかりせば、父はゝの
わもなでし子の 若葉ぐさ、
塵だにすゑぬ ものとのみ
おほしたゝれし 其の時は、

雲ならなくに、よしの野も、
かゝらむ世とは、思ひきや。

その廿一

げにた[illegible]みの 父のため、
あなはゝそばの 母のため、
われや、根さしの 姫小まつ、
たゞ一もとの ひめ小まつ、
千世の緑と かしづかれ、
時なきいろに はやされぬ。

その廿二

「わらはが十歳 はるのころ、
野邊の蝴蝶と あこがれて、
茅花すみれに 日を暮らし
かへりゆく門、 まもる母、
『千代や待たれつ 我兒來よ
汝れにあはさむ 人のある』

その廿三

「ふりわけ髪を かいなでて、
父は云はれぬ、はゝもまた。
『こや汝がための 兄うへと
むかへうけたる まもる君。
なが行く末を まもるぎみ。
千代な忘れそ、汝が名なる。』

その廿四

「おなじ[illegible]に [illegible]こなく
君も[illegible]ひなる はらからを、
よそ人の眼に 見るにつけ、
うらやましとも 思ひたる
をさなごゝろの 罪もなく、
兄か[illegible]、 おもひしを。

その廿五

「眞茂留と呼びし 其の人も、
おきふし、露の いとまなく、
いつき仕へて、父母に、
まなびの窓の ひまあれば、
あをもとなび、月花に、
人はやさしく おぼえしを。

その廿六

「父なる人も、母なるも、
學びのみちに すさまれつ、
『もの知るからに、人といふ。
まことの人に ならまくば、
ふみこそ學べ、わが子よ」と、
いはれし事の 平生にかも。

その廿七

「こゝろ盡しの さるからに、
皇國のみちは おもふみぬ。

眞茂留の君は、ことさらに
　唐土の道にも　分け入りて、
倚まのあたり　見むといふ、
　すゑはるかなる　西のくに。

その廿八

「いかでいなまむ、父うへも。
　流石に、我が子、おもしろや、
汝れが學びの　みちゆゑに、
　いとふことかは、家たから。
疾く行けかし」との給ひぬ。
　「まなびぞ、人の　たから」とて。

その廿九

「思ひたちたる　たびごころも、
　人のかどでの　ありし日は、
わらはが心　何なれば、
　隙間けなき、よのこゝろ、
すみれ摘む野の　女どちの
　思ひし時に　似ざりけり。

その三十

「父はいはれぬ　やよ眞茂留、
　日の入る浦の　すゑ見るも、
汝が出づる日の　もとの根、
　かへすがへすも　わするな」と。
人もいとへぬ、繰りかへし、
『ふみはたがへし、本すゑを。』

その卅一

「母はさすがに　わかれ路の
　いとの細げに　おはせしが、
わが身がかざす　花取りて、
　眞茂留の君よ、わすれでや、
このひともとの　花を」とて、
　旅荷のはしに　さゝれけり。

その卅二

「花取りあげて、其の人も、
　いまよりむかふ　外つ國の
まなびの窓の　はるあきの
　おもひ出にせむ、この花を。
わが名にかけて　守らむ」と、
　かざしてよろこび　給ひしを。

その卅三

「なにとはなさの　悲しさに、
　わらはは泣きて　ありけるが、
『たつ田の山に　もみぢに』と、
　きこえし事は、おぼえたり。
『大和は萬えじ』と、其の人の
　いはれし事は、きこえけり。

その卅四

「八重の潮路の　はてなれど、
　沖ゆくふねの　往きかひに、
文は來りぬ、たえまなく、
　父をおもひて、かけながら、
母をしたひて、よそながら、
　あをも教へて、みつぐきに。

その卅五

「春は、花にも　さきだちて、
　のきばににほふ　文のいろ。
秋は、雁をも、待ちがてに、
　とほそにおつる　玉のこゑ。
『ひと夜や千代の　おもひぞ』と、
　いつもいはれぬ、言の葉に。

その卅六

「年は、ふたゝび　暮れゆきて、
　三とせの春は、あけにけり。
つねに健さる　鳥のあと、
　花ちるまでも　おとはなく、
あを葉が末に　なりてより、
　はつかに何は　きこえけり。

その卅七

「まなびのみちの　ゆたかなる、
　おもひの外に　うつりゆく
つき日の空と　聞くからに、
　しくるゝ庭の　あさぢふに

[illegible]、
[illegible] 思ひけり。

その卅八

「みなとをめぐる [illegible]の
[illegible]、[illegible] たなびけど、
雲のたえ〴〵、たまづさは、
彌たまさかに 成りにけり。
『またかのまどの 雪ふかみ、
文のかよひ路 かたし』とて。

その卅九

「四とせにつもる 旅ごろも、
たつき無き身と おもふから、
よさむをいとひ、暑さとひ、
つゝがなかれと 送りけり。
乞ふにまかせて、黄金をば、
あるにまかせて、しろ金を。

その四十

「わらはが親の やどとても、
玉しくきはに あらざれば、
塵のみふかく なりにしを、
『なほ一とせ』と のぞむまゝ、
父はひさぎぬ、いへくらも、
『をしへぞ、人の たから』とて。

その四十一

「[illegible]、
[illegible]に、
[illegible]、
[illegible]、
母はひさぎぬ、からぎぬを、
わらはも去りぬ、玉かざし。

その四十二

「こゝにも思ひ わたりたる
八しほのなだの 浪こえて、
かなたは着きぬ、難波津に。
なほ一夜さの 假りまくら、
生みのみ親の まつの戸を、
明日は吾妻と 報げ來しぬ。

その四十三

「父はかどべに、母は外に、
わらはは軒に たゝずみて、
ながむる一日、またいく日、
待ちわびにたる 夕まぐれ、
『つゝがのありて 日數ふ』と、
きくかひもなき 人のふみ。

その四十四

「つゝがを何と しら雲の、
こゝろも空に 迷ひ出でて、
父は、[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]。

その四十五

「よもの毛だ物 すらだにも、
もとの情緒は あるものを、
きくもあさまし その人は、
つゝがも無くて、難波津に、
いまを並べと ながめたり、
外國の花さへ 折り添へて。

その四十六

「人のこゝろは、はなごろも、
移るものとは 聞きにしが、
ひとのこゝろは、浮ける雲、
頼めぬものと 聞きにしが、
おもはざりけり、其の人を、
おぼえざりけり、斯くまでに。

その四十七

「ものは離縁ぬと、潔よく、
父は、さすがに のたまへど、
おほしたてたる わか竹の、
みさをの色の かへてより、
霜はふかくぞ なりにける、

　のこる[illegible]の　髪のうへ。

その四十八

「母のなげきは、たはやかに、
　なにといふべき　方もなく、
思ひつもえつ、かげろふの、
　やがて、はかなく　なりにけり。
おなじ空へと　あこがれて、
　間も無く、父も　みねの雲。

その四十九

「たらちの親の　[illegible]なくば、
　あさぢが庭の　ひめ小まつ、
千代は、誰れを[illegible]き。
　戀しき父母、なつかしと。
こゝら戀慕ひ、[illegible]、なき庭に、
　犬じもいかなる　人にくし。

その五十

「たのむよしなき　難波がぜ、
　惜むこゝろは　無けれども、
いはで消えにし　吾妻の、
　草葉のかげの　[illegible]に、
一葉なり[illegible]　きこえむと、
　[illegible]して出でし、難波津を。

その五十一

「雲にかすみに　うづもれて、
　とがたと知らず　まよふ路、
來し旅行く　見えぬまで
　ふりしく花に、おもはずも
うき世の雲の　わすられて、
　むすび初めにし　谷のみづ、
　木のしづくは、かゝりけり。」

その五十二

かくと語りて、たわやめは、
　「あな何ならむ、をかしさや。
いはがき清水、いはでのみ、
　すみはつべくも　思ふ身の、
よしなき君には　[illegible]つこと、
　はらふもすゞし、袖のつゆ。

その五十三

「こはいとほしの　千代の君、
　わが身、一とせ、其のひとと、
學びのまゝに　在りしとき、
　うらやましくも　思ひたる
かざしの花の　ゆかりとし、
　思ひまはせば、なつかしや。

その五十四

「千代はも[illegible]、萬代も
　世に[illegible]ほしき　[illegible]小まつ、
かゝる深山の　[illegible]木に、
　よそに見すてゝ　歸りなば、
われもあだしと　謗はれむ、
　こゝろしあらむ　世の人に。

その五十五

「[illegible]浦は　[illegible]も、
　なほ住み吉の　岸もあらむ。
いざ給へ　[illegible]と、すゝむれど、
　をとめは、たえて　言葉なく、
とざさぬ窓に　さしのぼる
　朝日のかげを　ながめたり。

その五十六

今はさそはむ　よしもなみ、
　袖をしぼりて　立ち出れば、
かなたも、流石、をしからむ、
　花こそをりは、またたま[illegible]
清水むすびて　待ちてむと、
　おくるもあはれ、門[illegible]く。

その五十七

さらばといひて、[illegible]
　[illegible]をたづねて　わかるれば、
駒も、[illegible]　[illegible]なで、
　なくなくあたりを、またぞ[illegible]、
手綱ひかへて、[illegible]に、[illegible]とぞ。



武島羽衣篇

小夜ぎぬた　綠　常夏姫

小夜ぎぬた

よもぎが宿もかたぶきて、
　軒もる月の影さむく、
壁のこぼれのこほろぎも、
　心ぼそさをそへにけり。

まがきも野らとあれはてゝ、
　風もさはらぬ閨の戸の
ほかげに額をそむけつゝ、
　ころもしで打つをみなあり。

たが秋風を身にしめて、
　あやなき物や思ふらむ、
しのびにぬぐふ白露に、
　乾かぬ袖もあるものを。

いたはりしらぬ淺茅生の
　蟲のねをさへかけそへて、
絞るにあまる露けさは、
　きぬたの音もしめりつゝ。

夫はひととせすゐろぎの
　おほみいくさにいでてより、
こゝらの秋はかへれども、
　そよとの音もなしとかや。

君が玉づさ懸くといふ
　雲井の雁は名のみして、
むすぼほれたる床の露、
　はらはむよしもなかりけり。

世の人づまはさのふけふ、
　醜のえみしをやはしつゝ、
飾るにしきも花やかに、
　ふる里さしてかへるなり。

老もわかきも諸共に、
　ゆくての空に打いでて、
千代に八千代とうたひつゝ、
　喜ばしげにむかふなり。

父よといひてたちまちに、
　玉なす頰をさしつけて、
胸のあたりにむつるゝは、
　おのが愛子にあるならむ。

思ふ心もいへばえに、
うれし涙にかきくれて、
かたみに手をばとるなるに、
はしき妻にやあるならむ。

そのうれしさにひきかへて、
かへらぬ人をまちがてに、
契りかはせる人皆の
ためしにもるゝあはれさよ。

うはの空なる嵐だに、
まつにはかよふ習ひとや、
うき世のほかをゆく旅も、
しばしは露にてるものを。

定めしことやあだなりし、
ちぎりしことや忘れてし、
わぶる枕の夢にだに、
などてか面影見えもせぬ。

[illegible]田の面ゆしすのきみ
千歳にも離れみだるらむ、
あぐる[illegible]なゝきて、

槌のしらべもたゆみゆく。

夜はやうやうにくだちつゝ、
ほそる燈の影くらく、
弱るか蟲の聲たえて、
田川の水もねむるなり。

軒端の荻か木がらしか、
穂波をわたる小夜風か、
前の霰ばし音たてゝ、
こえくる者や何ならむ。

はらはぬ庭の草わけて、
駒のあがきのやむなべに、
戸やのとぼそ打たゝき、
音なふ聲のきこゆなり。

荒れたる閨のかまとめて、
とみもに方を見出せば、
霜のまがひに影うすく、
こひしき夫ぞたてりける。

夢かうつゝかうつゝとも、
夢ともわかぬうれしさに、
身を倒しつゝさしよりて、
「よくぞわがせこまさきくて。」

旅路の露に窶りけむ、
身は朝影とそぼりつゝ、
やつれはてたる手をのべて、
泣きふす妻をかきなでぬ。

「あはですごしゝ年頃の
わびしかりつるとだえにも、
思ひたゆまで只ひとり、
われをまちたるうれしさよ。

いざ今よりはもろともに、
千代に八千代にちぎるべき、
とはに動かぬ岩が根の
つかのやどりにいそぎてむ。」

軒の雫にたちぬるゝ
妻をかろげにかきいだき、
かたへの駒にうちのせて、
やをら手綱をかいとれり。

あはれ吾妻またむかし、

[illegible]なるに、
こよいは眠れる[illegible]の
[illegible]しつつ
あな面白の[illegible]こそ、
[illegible]の[illegible]かけて、
千代に住むべき[illegible]を、
[illegible]何を養ふべき。」

いかつ[illegible]嶺を指[illegible]しつゝ、
三つ四つ[illegible]打つほどに、
駒はあがきもいと[illegible]く、
大地をけりて進みゆく。

枯野とほくはなれつゝ、
昔の細道わけゆけば、
かたへにそよぐ枯尾花、
草は夜寒やわぶるらむ。

ゆくての方は日もはるに、
高嶺や空をかすめつゝ、
わぎへのあたりいづくぞと、
かへり見すれどかひもなし。

野[illegible]駒に、
山も光も影ふけて、
[illegible]の
[illegible]なり。

いつしか野路もすぎぬれば、
[illegible]かげらし、
[illegible]来ぬれて、
さゝやく風の音すごし。

さむけき森の下露に、
友は心も冷えいりて、
われかのさまにおびえつゝ、
汗もしとゞに打ふしぬ。

やすまぬ駒のあゆみにも、
夫はあかずやおもふらむ、
そゝ打つ鞭のひまなきに、
はやちのごとく[illegible]るなり。

つもる落葉のさやけるは、
深き山路に入るならむ。
白雲路をうつむるは、
み山の奥になるならむ。

[illegible]は、
[illegible]
雪の深み[illegible]、
[illegible]

[illegible]
のぼりつおりつ[illegible]に、
千[illegible]にきにけらし、
五百[illegible]ぬらし。

さすがにたけき[illegible]も、
ゆきなやみつゝたゝずめば、
つきいだしたるあけくれの
鐘ぞそびら[illegible]ける。

物も覺えぬけらとともに、
あたりの景色ふと見れば、
人氣たえたる古寺の
半ばやれてぞたてりける。

所せけなる蓬生の
しけみがもとの塚かげに、
をれかたぶきていとすごく、

苔のそとばもみだるなり。

法のともしと照すなる
　月の光もいと青く、
たけく\いかよふふくろふの
　聲ものすごき折しもあれ、
とどろきわたる木枯に、
　忽ち鳥は打たふれ、
夏もろともに[illegible]ふは、
　塚の中にと落ちいりぬ。
[illegible]
　[illegible]
手足の肉もたゞればなれ、
　[illegible]
驚く妻は只ひとり、
　[illegible]のへたまひは肌を、
骨のむくろにいだかれて、
　土の中にぞのこりける。
折しもきゆる月かげの
　闇をのこしてゝるあとは、
木深くもゆる青き火に、
　うかるゝ魂ぞさけぶなる。

戀

やよひの空の薄ぐもり、
　霞よりふるはるさめの
夕べの露のかゝるとき、
　花はひとときはながめあり。
うれひの雲のかきたりて、
　身をしる雨の[illegible]なく、
袖のしづくのかゝるとき、
　[illegible]はいとこそらうたけれ。

常夏姫

燃々と燃ゆる[illegible]を
　落ち椿しとねとなして、
のどかなる春の日ひと日
　時めきしあはれ佐保姫。
ことわざの一花もひと時」、
　結りたる髷の下げ髪、
垂れし汝がうしろ姿を
　つく〴〵と見しも昨日よ。
今日こそは常夏の姫、
　しづやかに渡らせ給ふ。
ばら、空木、さつき、たちばな
　天づたと下したまひて、
空色の御衣よそひて、
　新緑の御帳深く、
ほゝゑみて見出でたまへる
　御有様げにもたふとや。
夕立の御湯めしたまひ、
　新月の團扇片手に、
白露をかざしたまへる
　御姿たおは何にたとへむ。
なつかしき常夏の姫、
　常夏の御名にし負はゞ、
常夏に世を領りたまへ、
　なつかしき常夏の姫。

大町桂月篇

琵琶瀧　涙の味　山の影



琵琶瀧

山をらしはく、あら神の
　おらぶが如く　おもほえて、
峰よりおろす　夜嵐の
　木の葉ふきまく　おとすごし。
啼くふくろふの　ひと聲に
　杉のしつえの　月おちて、
雲いそがしき　大空に
　星も走らむ　ばかりなり。
山寺の鐘の　音もふけて
　夜は早や四更と　なるほどに

誰かかなづらむ　琵琶の聲
　聞え初むるも、いぶかしや。
落葉も谷も　いと深く
　世をはなれたる　垢離小屋の
軒端にちかく　おとづれて、
　いときよらかに　ひゞくなり。
月だに訪はぬ　山のかげ
　うきにうもるゝ　やみ人の
わぶる枕に　音もさえて、
　かよふもあはれ、よつの絲。
彈くか山姫、手ずさびに、
　それかあらぬか、さ夜ふけて、
ひと氣も絶えし、山おくに

　あないぶかしや、琵琶の聲
いとなだらかに　澄みふきて
　春風ふくと　聞くほどに
たちまち鋭く、せまりては
　秋雨そゝぐ　おとすなり。
斷えむとしては　また續き、
　沈むとすれば　あがりつゝ、
ひとふしごとに　かはりゆく
　琵琶のしらべの　おもしろや。
水垢離とらむ　時は來ぬ。
　小屋のやみ人　いざ起きよ。
腥き血もて　もられたる
　世の人みなは　眠るなり。

あはれ濁れる　世の中の
あだなる人を　いのちとも
たゞひとすぢに　頼みたる
なれが心の　いとほしさ。

世のいつはりを　容れむには
さすがにせまき　汝が心、
寄るあだ波に　えも堪へで
やさしき胸は　さけにけむ。

いましにつらき　塵の世は
夜の色して　おほはれぬ。
清くすみゆく　琵琶の音に
まよへる夢を　さませよや。

あかつき近く　ならぬまに、
いほりを出でて　垢離とりて
ちひさき胸に　あふれたる
うらみを洗へ、瀧つ瀬に、

いざとばかりに　呼ぶ聲の
跡をしたひて　立ちいづる
姿はさやに　わかねども、
闇にも白し、肌の色。

結びもあへぬ　黒髪を
ふく山風に　なびかして、
蔦の細路　とめゆけば、
呼ぶ人もなく　琵琶もなし。

谷のきはみに　そゝりたつ
あをがき山の　山もとに、
たぎつや瀧の　絲白く、
空もとゞろに　音すなり。

涙の味

くらく悲しく　おそろしき
浮世のやみに　風あれて
雨にふけゆく　春の夜に、
泣くもうれしや、二人して。

嗚呼われつらき　世の中に、
なさけやさしき　少女子と
はかなき戀に　泣きしより、
涙の味を　覺えてき。

山の影

岸にそびゆる　山の影
さやにうつして　ゆく水の
こゝろも深き　淵なれど、
秋のはつ風　ふくまゝに、
たつや川なみ　音高く
山をくだきて　狂ふなり。

三木天遊篇

武士の子　わたり鳥　故郷なる母へ　安心

武士の子

青葉の露の亂れふる
木の下闇の夕まぐれ、
猶たゞそふそよ風に
森の下みちほの見えて、
茅の軒端の蚊遣火を
照らすも暫し入日影。

朝な夕なに逢ひ馴れて、
けふも如何に女のわらは、
闇を窺ふわが袖に
縋るは誰ぞや微笑みて、
百合花より白きかほばせに
涙の痕のいつくしき。

諸手にひしと抱きあげて、
『見よや樹下に闇くらく、
入日は西にかくろひて、
銀杏の古木ものすごし。
此おそろしき草原に
何とて獨り立ちつくす。

『歸らぬ父を待ちわびて、
道ゆく人をながめつゝ
ひねもす今日も泣きけるか。
さびしき宿の常なれば
訪ひこし我の嬉しくや、
うら珍らしの其笑顔。

『彼方に白き夕けぶり、
御身待つらむ母上の
涙にたける蚊遣火か。
よし父上はかへらずも
やさし母上あるものを、
いざさせ給へ諸共に。』

草に埋れし細逕の
露ふみわけて行く〳〵も、
紅葉の如き手をあげて
あらよと叫ぶ女の童、
指ざす空に松青く、
ほのめき出づる夕づゝよ。

『今宵ぞ父は歸らまし、
斯く迄あかき月なれば。

父の軍の門出とて
酒くみかはし給ひしは、
月影清き夜なりけり、
螢とびかふ夜なりけり。

「月の隠るゝ西の國、
千里へだてし唐土に
父は夷を打つべきぞ。
和女の仰ぐ月影は
父が劒の月影と
きゝしばかりぞ名殘なる。

「彼處の城に夕なく〳〵
あまたの兵士は歸れども、
隣の伯父も太刀佩きて
お馬に乗りて歸れども、
日毎々に待つわれと
知らでや父の影もなし。

「父や如何にと尋ぬれば
母は涙にむせぶのみ、
隣の伯父は答へなく
我を見詰めてうなだれつ。
やがて目元をおしぬぐひ
哀れの子やとのたまひぬ。

「雲井を走る夕月は
何嬉しげに笑ふらむ。
今宵ぞ父の歸らむと、
我に告げむと思ひてか。
父いますてふもろこしへ
逢ひに行かむと思ひてか。

「遠き遠き唐土へ
月や幾夜を通ふらむ、
ゆかしゆかしき父上に
月や幾夜を逢ひぬらむ。
待つに甲斐なき木下陰、
つれなく我をふりすてゝ。』

「あないぢらしのわが童、
さかしきにこそ哀れなれ。
さらでも昔忍ばれて
只ひまなき昨日今日、
父の記念の撫子に
ぬれこそまされ袖の雨。

「あないぢらしのわが童、
幸なき身にし生れしよ。
泣くな聞けよ武士の子ぞ、
御身が父は國のため
戰死せしよ、もろこしの
かばねに草や茂るらむ。』

流石女の子は泣かざりき、
しをれて家にかへれども、
何思ひけむわが袖に
縋りて聲をふるはせつ。
『さらば戀しき父上は
遂にかへらせ給はぬか。』

我にもあらでふりそゝぐ
涙に聲も出でばこそ、
答へむ言も忘れ果て
籬に暫し佇めば、
母よと叫ぶ小窓より
涙の笑顔みせたりな。

＊　＊　＊

枯葉の露にそぼぬれて
女の子は今もたゝずめり。
便なき父を待ち顔に
ひねもす道をながめつゝ、

やゝ青ざめしおほばせに
今も涙の溜みえて、
怜悧しき子ぞと聞えしを、
無残や愚となりけるか、
事とふ人にいらへせず、
物数ふれどさとり得ず、
死人を待つ子と人々は
見返りもせで笑へども

我のみ袖をしぼりつゝ
我のみ胸の裂くるかな、
まだ頑是なき稚児なれば
だましすかしてありなむを、
愚や何どか有りけらを
愚や何どか告けにけむ。

わたり鳥

こがらしに聲は亂るも、
おくれ渡る雁のひとつら。
網代守夢は残るも、
月落つる松かぜの里。

行く秋を雲に慕れて、
今宵に何方へ急ぐ、
霄雲に鶴ぞ消えて、
あかつきの夢を驚く。

世を渡る人の習ひか、
渡り鳥おくれて急ぐ、
假の世の假寝の夢も
網代守嵐にむせぶ。

行く水の行く月の影、
心なく流れ流れむ、
月追ひて雁は急ぐも、
浪の音に夢は亂るも。

故郷なる母へ

おろかと笑ひたまふらむ、
御身病にうせにしと
まさなき夢を見てしより、
にはかに旅をあきはてぬ。

女心

女こゝろはすぐひするの
昔の誰にとらはれて
なさけの前にこそ迷ふなる、
朝おもしろのあけぼのや。

こがねに露の流れし時、
情の側には目もくれず、
梢をこがれて咲び立ちぬ、
蔭がくれのあら惜し。

いつしか梢もわすられて
はやうつりくる緑に
人くといとふ葉守に
投けやる側こそ詮なけれ。

繁野天來篇

闇夜默坐　瓜盜人　蟬の聲　君が家



闇夜默坐

默念の　闇の夜に、
雨もよし、風もよし、
風來れば　闇淺く、
雨細し　窓の竹、
風去れば　闇深く、
雨遠し　庭の花。

瓜盜人

あま雲の八重たつ野路に、
牛叱る人影消えて、
ねむ生ふる小川の波に、
蟬の聲枯れ〴〵殘る。

ひもじやとむづかる稚兒を、
やつれたる背に背負ひて、
我袖も朽木のはしに、
寂しくも佇むや誰ぞ。

いで我子よ、かの雲をみよ、
恐ろしき黑雲をみよ、
いざやこの橋の小蔭に、
短夜の夢を宿さむ。

ひもじやとむづかる稚兒よ、
母親のこゝろもしらで、
唲びなく聲もあはれに、
物欲しとなほもむづかる。

いかにせむ　日も暮れぬるを、
明日までは眠りてよたゞ、
眠る子はさてもよい子と、
ゆすぶれどすかせど聞かず。

淺間しくつらきわが身に、
人並みの乳房はあれど、
水涸れし泉としれば、
旅人もなどかは汲まむ。

淺間しと見やる彼方に、
一軒家の燈火みえて、
瓜植ゑし背戶の小畠に、
笑ひ聲洩るゝもゆかし。

こゝはあご、かしこにゆかむ、
此枝も彼枝もぞと、
折られて急ぎし後に、
ほとゝぎすしばなきわたる。

「何者ぞ、とくたち歸れ
呼ばずばたゞき出さむ、」
嚴しくいかれる人は、
一軒家の主人なりけり。

あはれかく憂目に驅れて、
恥辱をだも思はぬ親は、
しかすかにおどろかしとも、
いかにせむ子は飢に泣く。

悲しくも望みは絶えて、
とぼ〳〵と背戸をいづれば、
うれしくも目にとまりしは、
瓜白き小畠なりけり。

うれしやと喜ぶ子より、
母親の胸はをどりて、
人やみむ人もや來ると、
氣遣ひしこゝろやしれる、

あれ〳〵と指さす方に、
十六夜の月いと淸く、
風はやき雲間をもりて、
ほとゝぎすまたもしば啼く。

蟬の聲

夜露散る軒端の桐に、
やり水の音を亂りて、
朝な〳〵
さわがしの蟬の聲。

入日さす外山の松に、
吹く風の音を亂りて、
夕な〳〵
さわがしの蟬の聲。

桐を追へば松の葉末に、
松を追へば桐の葉蔭に、
及ばじな
里の子よ釣竿も。

秋も更けて松風寒し、
桐の葉みな散る頃、
里の子は
「今いづこ蟬の聲」

其のゆふべ外山に登れ、
月影に松をけづりて、
一里の子に
「蟬だに無き秋の聲」

君が家

松風に　雨晴れて、
山青く　水淸し、
蓑ほすは　誰が家ぞ、
螢飛ぶ　竹の村。

白鷺の　飛行くは、
葦の間の　いさゝ川、
わがしたふ　笛の音は、
月明き　君が家。



戸川殘花篇

桂川

桂川（情死を弔ふ歌）

上

こゝは[illegible]も桂川
桂といふも名のみにて、
川の[illegible]も淀なれば、
木の下闇か、暗くらし。
[illegible]たちこめし水の面に、
二つの[illegible]りて[illegible]なり。
[illegible]におく[illegible]、
はたむせ[illegible]なく／＼、

思へば昔、年若き
男女のいくたりか、
意馬の駒の狂ひいで
心の猿おろかにも
夏草しげき煩悩に
人の正道ふみ迷ひ
色と情、深き淵。
あたら[illegible]して、あさましや。
その身の[illegible]み苦しみは、
ものゝかずにはあらねども、
父母や兄弟の嘆きには、
[illegible]の川[illegible]るなり。
[illegible]の[illegible]はしりたれば、
[illegible]

あやなき闇に[illegible]然として、
[illegible]と見ゆる並木[illegible]。
をり／＼照らす電光は、
獄の鬼の[illegible]にて、
閃く光り影凄し。
暗き方にて[illegible]流れ、
叫ぶは黄泉の聲ならめ。
をりをり[illegible]然におと[illegible]、
峰の[illegible]の身にしみて、
[illegible]たずも[illegible]たれぬ。
[illegible]ぞれ[illegible]き[illegible]／＼と、
[illegible]ふすみたす姿にて
白きは何ぞ、夏草に
しほれのうつ[illegible]るなり。

こゝに眠る村川、
蓮花の臺に[illegible]なほ、
悲哀の景色うつしいで、
我はた寡婦の人なりき。

昨日も、今日も、五月雨に、
ふりくらしたる暁なれど、
ひそかに月の影もれて、
死出の田長のおとづるゝ、
雲井はるかに見あぐれば、
喪服てふ空のさみしきに、
三つ四つおちし村雨は、
つゝみかねたる[illegible]かた、

下

[illegible]の道は小暗し、
たどりゆく[illegible]手[illegible]、
松風の[illegible]音も、
身にしみていとうらかなし。

現とも夢ともわかず、
幻の境にいりぬ。
あゆみし路をわすれ、

たゞ[illegible]

わが[illegible]、[illegible]は[illegible]ぞ、
裳裾のはしたべ[illegible]は[illegible]ぞ、

いとかしや、あたい[illegible]、
人の来る[illegible]はひすれども、
[illegible]にも[illegible]手にも[illegible]、
かすかなる[illegible]のみきこゆ。

枯野によわる蟲の音か、
葉末にあへぐ螢火か。
心を静めてうかゞへば、
影なる人のかたるなり。
そも愛といひ戀といふ、
ふかき意を世の人は、
さらく、まず氷より
霜より冷えしそのこゝろ。
親のゆるさぬ道芝を、
あゆむは罪としりぬれど、
二人が中の戀衣、
かさねし日より如何にせむ。
心の手もてはなるまじ、
きれるまでとて契約りしを、

[illegible]、[illegible]、[illegible]、
[illegible]に[illegible]べき[illegible]、
[illegible]、[illegible]、たふとき[illegible]、
[illegible]に[illegible]べき[illegible]。

[illegible]を身にしいたるに、
[illegible]ふべき[illegible]、
おそろしき[illegible]山の[illegible]も、
情より[illegible]となりぬ。

この戀を身にしつけたば、
谷水も玉うつひゞき、
枯蘆のさびしきさまも、
きさらぎの花と匂ひぬ。

われらが罪をゆるせかし。
犠牲となりし[illegible]愛のため。

降り来る雨の音、吹き来る風の音、月も星も雲も沈みぬ。きこえし聲は、主觀的よりなるか、客觀的よりなるか、螢火の、またも一二つ、あとやさき、わがゆくさきに、しらべ顔なる。
あはれく。



てつくのひる

そら晴れて　日あきらか
鏡のごとき　うな原を
ゆたかに舟は　すべりゆく

かぜなぎて　ひるしづか
艪のふしどの　ここちよく
まぶたおもくぞ　なりにける

うごくもの　たえてなし
ぼおとを吊れる　だゐつとに
ふたりの水夫　のぼりゆく

森鷗外篇

でつくのひる　老船長　いもの苗　乃木將軍　扣鈕　影　問答
のうた　火　三越

めをとぢつ　またあきつ
日にかがやくや　白ぺんき
水夫がふるふ　はけ尖の

老船長

八十のおほぶね　つぎつぎに
宇品みなとを　はなれつつ
大同江にぞ　むかひける

奥大將の　のりませる
八幡はひとり　艦隊の
根據地さして　すすみ入る

海州灣頭　もや深く
雨ふりそそぐ　ゆふまぐれ
東郷來ぬと　ふれられぬ

くがのをさ訪ふ　うみのをさ
めざすはおなじ　仇なれど
いさをはわかる　過去未來

あはれ此客　このあるじ
いみじとおもふ　群のうちに
とつくに人も　まじりたり

舟に老いたる　船長は
もと英國の　うまれにて
ねるそん夢みる　人なりき

別れてかへる　東郷は

雨にぬれつつ　とらつまに
立つ船長の　手をとりぬ
ことばはなくて　ややしばし
其手放たぬ　船長の
しろき鬢毛は　ぬれにけり
あはれ浮縁の　夜の夢に
ねろそんならで　今ゆのち
東郷をこそ　見るならめ

いもの苗

春寒き　遼東の
草のやを　かりの宿
杜公の壺に　王猛が苔
ところ狹く　ならべたる
直土の　間をめぐり
南窓にぞ　あゆみ寄りける
めづらしや　炕のうへ
そが中は　しきられて
ちかき畠と　盛れる黑土
焚ける火に　灌ぐ水
蒸されつつ　抽きいづる
床の苗いも　緑三寸
らがはし　これ除けよ
ののしるは　我從卒
あるじの額に　雲はかかりぬ
たくはへし　黍稈を
見るがまに　焚き盡し
糧にせむ藷　こも棄てよとや
な尤めそ　やよ從卒
その藷の　苗とこそ
環堵の室を　わけてすまはめ
これにやは　優るべき
雪ふかき　敵國の
珠の臺の　棕櫚のみどり葉

乃木將軍

つはものの　武勇なきには　あらねども
眞鐵なす　べとんに投ぐる　人の肉
往くものは　生きて還らぬ　强襲の
鋒を　しばし轉して　右手のかた
圖上なる　標のたかさ　二零三
巓の　ふたつ聳ゆる　石やまに
たえだえの　望のいとを　掛けてこそ
きのふけふ　軍の主力を　向けてしか
霜月の　二十日の　夕ぐれ
將軍は　高崎山の　師團より
ただ一騎　柳樹房なる　本營に
歸らむと　曲家屯をぞ　過ぎたまふ
ほの暗き　道のほとりを　見たまへば
身うち皆　血に塗れたる　卒ありて
そびらには　はやこときれし　將校の
亡骸を　かきのせてこそ　立てりけれ
汝は誰ぞ　そを何處にか　負ひてゆく
聞召せ　背負ひまつるは　奴わが
主と賴む　乃木將軍の　愛兒なり
年老いし　將軍の家の　二人子
そのひとり　勝典ぬしは　いちはやく
南山に　討たれ給ひて　殘れるは
おとうとの　保典のぬし　ひとりのみ
背負へるは　その一人子の　亡骸ぞ

父君は　心ををしく　我君をも
隊附の　ままにあらせて　討死の
身の果は　おのれと三人　弊をば
ひと時に　營めと宣り　給ひしを
人人の　強ひて料らひ　つるにより
さいつ頃　友安旅團の　副官に
職かはり　まだ程經ぬに　この朝開
あへなくも　空しき骸と　なりましぬ
果てましし　處は高地　二零三
目鏡もて　敵の備を　望みます
うら若き　領のただ中　打ち貫かれ
ひと言を　宣給はむ　ひまもなく
持口の　南の峯に　うせ給ふ
その業を　双背負ひて　此村に
ありと聞く　野戰病院　たづぬれど
くるほしき　心からにや　たづねえず
かくいふを　胸をとどめて　聞きましし
將軍は　病院の旗　あるかたを
額あげて　彼方にこそと　さし給ふ
面ざしは　かはたれ時に　見えねども
目ざしくも　雲の絶間ゆ　覗ひし
さむ空に　まだ離かぬ　冬の星
更闌けて　友なる星に　將軍の
睫毛だに　動かざりきと　語りけり

扣鈕

南山の　たたかひの日に
袖口の　こがねのぼたん
ひとつおとしつ
その扣鈕惜し

べるりんの　都大路の
ぱつさあじゆ　電燈あをき
店にて買ひぬ
はたとせまへに

えぼれつと　かがやきし友
こがね髪　ゆらぎし少女
はや老いにけむ
死にもやしけむ

はたとせの　身のうきしづみ
よろこびも　かなしびも知る
袖のぼたんよ
かたはとなりぬ

ますらをの　玉と碎けし
ももちたり　それも惜しけど
こも惜し扣鈕
身に添ふ扣鈕

影

なにすと　夜しづけき
聞くべき　ささやきもなし
なにすと　星さむる
見つべき　みすがたもなし

地のうへ　池のおも
われわれは　影におどろく
追ふもの　あるがごと
おぼえず　心をののく

庭下駄　ぬぎすてて
せはしく　戸さしかためつ
ねぬ夜は　わが友と
ともしび　高くかかげつ

問答のうた

詩人

[illegible]にをさめ[illegible]たる[illegible]あらば、
[illegible]出でむ[illegible]あらで
[illegible]た涙のみ[illegible]落つ。

ふみや

我手にはみだれて落つるその涙
玉に貫くべき緒こそあれ、
君鮫人にあらずとも。

火

左丹塗のまろばしら
並ぶ間に火ちらちら。
大徳の手に燃えし、
消えずして千とせ經し
常燈明、
誦する經
かしこき碩學と
[illegible]け[illegible]

[illegible]
[illegible]

右手にとる松明は
かざされぬ。空焼くは
滲みたる千とせの火。
わがおもひ
わが立てる嶺と
そびやきて、神か人
わかざるも一刹那。
ねたけしと神忌むた。
抛ちし我手疾し。
數添はる空の星。

三越

三越の賣場卓に
わが立ちて送り迎ふる
客のうちにかはゆき子來ぬ。
銘仙の衣にふさはぬ
つまはづれ。俯下る目の
なつかしき光、誰が子ぞ。

香木の[illegible]に[illegible]らねど
[illegible]は[illegible]づる。[illegible]に
入るがごと、などかたゆたふ。
蘇へる香[illegible]ならぬ
元祿のはでたる模様
はぢらひの目にぞかがやく。
見よ、選るは好めるならで
厭き選る心しらひの
かくせども遂に著きを。
三越の賣場卓に
立てるわれ富まば此子に
代取らで物皆遣らむ。

島崎藤村篇

草枕　潮音　明星　二つの聲　初戀　おえふ　おきぬ　おさよ　おくめ　おつた　おきく　知るや君　雲のゆくへ　髪を洗へば　君がこゝろは　酔歌　葡萄栗鼠の木彫を見て　秋のうた　秋風の歌　傘のうち　春やいづこに　鷲の歌　きりぎりす　晩春の別離　新潮、野路の梅　千曲川旅情の歌　常盤樹　勞働雜詠　胸より胸に　椰子の實　寂寥



草枕

夕波くらく啼く千鳥
われは千鳥にあらねども
心の羽をうちふりて
さみしきかたに飛べるかな

若き心の一筋に
なぐさめもなくなげきわび
胸の氷のむすぼれて
とけて涙となりにけり

蘆葉を洗ふ白波の
流れて巖を出づること
思ひあまりて草枕
まくらのかずの今いくつ

かなしいかなや人の身の
なきなぐさめを尋ね侘び
道なき森に分け入りて
などなき道をもとむらむ

われもそれかやうれひかや
野末に山に谷蔭に
見るよしもなき朝夕の
光もなくて秋暮れぬ

[illegible]も薄く身も[illegible]
[illegible]秋の[illegible]見て
行くへもしらぬ[illegible]行く
水に涙の落つるかな

身を朝雲にたとふれば
ゆふべの雲の雨となり
身を夕雨にたとふれば
あしたの雨の風となる

されば落葉と身をなして
風に吹かれて飄り
朝の黄雲にともなはれ
夜白河を越えてけり

道なき今の身なればか
われは道なき野を慕ひ
思ひ亂れてみちのくの
宮城野にまで迷ひきぬ

心の[illegible]よ
離れて[illegible]き我身には
日影も薄く草枯れて
荒れたる野こそうれしけれ

ひとりさみしき旅路には
吹く凩を友と聴き
悲み深き[illegible]には
色[illegible]なき[illegible]ゝ花と見き

あゝ孤獨の悲痛を
味ひ知れる人ならで
誰にかたらむ冬の日の
かくもわびしき野のけしき

都のかたをながむれば
空冬雲に覆はれて
身にふりかゝる玉霰
袖の氷と閉ぢあへり

みぞれまじりの風動く
小川の水の薄氷
氷のしたに音するは

流れて海に行く水[illegible]
嘆いて[illegible]もに[illegible]もしく
風に[illegible]るゝ[illegible]さま
光もうすき[illegible]に
汝も荒れたる野にむせぶ

[illegible]も[illegible]る冬の日の
光もなくて暮れ行けば
人めも草も枯れはてゝ
ひとりさまよふ[illegible]かな

かなしや醉うて行く人の
踏めばくづるゝ霜柱
なにを醉ひ泣く忍び音に
聲もあはれのその歌は

うれしや物の音を彈きて
[illegible]末をかよふ人の子よ
聲[illegible]く手も凍りはて
たに門づけの身の果ぞ

やさしや年もうら若く
まだ初戀のまじりなく

手に手をとりて行く人よ
なにを[illegible]その[illegible]

[illegible]しきに[illegible]て
[illegible]
道なき道をふみわけて
きたれば[illegible]

[illegible]に[illegible]に
[illegible]
[illegible]を望め[illegible]
おとなふものは[illegible]ばかり

暮ればさみしき荒濱の
[illegible]に伏し
日の入るかたをながむれど
湧きくるものは涙のみ

さみしいかなや荒濱の
岩にくだけて散れるとき
かなしいかなや冬の日の
潮とともに歸るとき

誰か波路を望み見て

その故郷を慕はざる
誰か潮の行くを見て
この人の世を惜まざる

暦もあらぬ荒磯の
砂路にひとりさまよへば
みぞれまじりの雨雲の
落ちて潮となりにけり

遠く湧きくる海の音
慣れてさみしき吾耳に
怪しやもるゝものの音は
まだうらわかき野路の鳥

鳴呼めづらしのしらべぞと
声のゆくへをたづぬれば
緑の羽もまだ弱き
それも初音か鶯の

春きにけらし春よ春
まだ白雪の積れども
若菜の萌えて色青き
こゝちこそすれ砂の上に

春きにけらし春よ春
うれしや風に送られて
きたるらしとや思へばか
梅が香ぞする海の辺に

磯辺に高き大巌の
うへにのぼりてながむれば
春やきぬらむ東雲の
潮の音遠き朝ぼらけ

潮音

わきてながるゝ
やほじほの
そこにいざよふ
うみの琴
しらべもふかし
もゝかはの
よろづのなみを
よびあつめ
ときみちくれば
うらゝかに
とほくきこゆる
はるのしほのね

明星

浮べる雲と身をなして
あしたの空に出でざれば
などしるらめや明星の
光の色のくれなゐを

朝の潮と身をなして
流れて海に出でざれば
などしるらめや明星の
清みて哀しききらめきを

なにかこひしき暁星の
空しき天の戸を出でて
深くも遠きほとりより
人の世近く来るとは

潮の朝のあさみどり
水底深き白石を
星の光に透かし見て
朝の齢を数ふべし

野の鳥ぞ啼く山河も
ゆふべの夢をさめいでて
細く棚引くしのゝめの
姿をうつす朝ぼらけ

小夜には小夜のしらべあり
朝には朝の音もあれど
星の光の糸の緒に
あしたの琴は靜なり

まだうら若き朝の空
きらめきわたる星のうち
いといと若き光をば
名けましかば明星と

二つの聲

朝

たれか聞くらむ朝の聲
眠と夢を破りいで
彩なす雲にうちのりて
よろづの鳥に歌はれつ
天のかなたにあらはれて
東の空に光あり
そこに時あり始あり
そこに道あり力あり
そこに色あり詞あり
そこに聲あり命あり
そこに名ありとうたひつゝ
みそらにあがり地にかけり
のこんの星ともろともに
光のうちに朝ぞ隠るゝ

暮

たれか聞くらむ暮の聲
霞の翼雲の帶
煙の衣露の袖
つかれてなやむあらそひを
闇のかなたに投げ入れて
夜の使の蝙蝠の
飛ぶ間も聲のをやみなく
こゝに影あり迷あり
こゝに夢あり眠あり
こゝに闇あり休息あり
こゝに永きあり遠きあり
こゝに死ありとうたひつゝ
草木にいこひ野にあゆみ
かなたに落つる日とともに
色なき闇に暮ぞ隠るゝ

初戀

まだあげ初めし前髪の
林檎のもとに見えしとき
前にさしたる花櫛の
花ある君と思ひけり

やさしく白き手をのべて
林檎をわれにあたへしは
薄紅の秋の實に
人こひ初めしはじめなり

わがこゝろなきためいきの
その髪の毛にかゝるとき
たのしき戀の盃を
君が情に酌みしかな

林檎畑の樹の下に
おのづからなる細道は

誰が踏みそめしかたみぞと
問ひたまふこそこひしけれ

おえふ

処女ぞ経ぬるおほかたの
われは夢路を越えてけり
わが世の坂にふりかへり
いく山河をながむれば

水静かなる江戸川の
ながれの岸にうまれいで
岸の桜の花影に
われは処女となりにけり

都鳥浮く大川に
流れてそゝぐ川添の
白[illegible]に
[illegible]な

雲むらさきの九重の
大宮内につかへして
清涼殿の春の夜の
月の光に照らされつ

[illegible]
[illegible]
玉の臺の欄干に
かゝるゆふべの春の雨

[illegible]高き人の世の
耀くさまを目にも見て
ときめきたまふさまざまの
ひとのころもの香をかげり

きらめき初むる暁星の
あしたの空に動くごと
あたりの光きゆるまで
さかえの人のさまも見き

天[illegible]
[illegible]ぶけるごとくにて
名の夕暮に消えて行く
秀でし人の末路も見き

春しづかなる御園生の
花に隠れて人を泣き
秋のひかりの窓に倚り
夕[illegible]とほき[illegible]を[illegible]ふ

ひとりの姉をうしなひて
大宮内の門を出で
けふ江戸川に来て見れば
秋はさみしきながめかな

[illegible]葉[illegible]に落ちて
いま[illegible]江戸川[illegible]
流れ[illegible]水際にて
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]かな

おきぬ

みそらをかける猛鷲の
人の処女の身に落ちて
花の姿に宿かれば

風雨に渇き雲に饑ゑ
天翔るべき術をのみ
願ふ心のなかれとて
黒髪長き吾身こそ
うまれながらの盲目なれ

芙蓉を前の身とすれば
泪は秋の花の露
小琴を前の身とすれば
愁は細き糸の音
いま前の世は鷲の身の
處女にあまる羽翼かな

あゝあるときは吾心
あらゆるものをなげうちて
世はあぢきなき淺茅生の
茂れる宿と思ひなし
身は術もなき蟋蟀の
夜の野草にはひめぐり
たゞいたづらに音をたてゝ
うたをうたふと思ふかな

色にわが身をあたふれば
處女のこゝろ鳥となり
戀に心をあたふれば
鳥の姿は處女にて
處女ながらも空の鳥
猛鷲ながら人の身の
天と地とに迷ひゐる
身の定めこそ悲しけれ

おさよ

潮さみしき荒磯の
巖陰われは生れけり
あしたゆふべの白駒と
故郷遠きものおもひ

をかしくものに狂へりと
われをいふらし世のひとの
げに狂はしの身なるべき
この年までの處女とは

うれひは深く手もたゆく
むすぼほれたるわが思
流れて熱きわがなみだ
やすむときなきわがこゝろ

亂れてものに狂ひよる
心を笛の音に吹かむ
笛をとる手は火にもえて
うちふるひけり十の指

音にこそ渇け口脣の
笛を尋ぬる風情あり
はげしく深きためいきに
笛の小竹や曇るらむ

髪は亂れて落つるとも
まづ吹き入るゝ氣息を聽け
力をこめし一ふしに
黄楊のさし櫛落ちにけり

吹けば流るゝ流るれば
笛吹き洗ふわが涙

短き笛の節の間も
長き思のなからずや
七つの情聲を得て
音をこそきかめ歌神も

われ喜を吹くときは
鳥も梢に音をとゞめ
怒をわれの吹くときは
瀬を行く魚も淵にあり

われ哀を吹くときは
獅子も涙をそゝぐらむ
われ樂を吹くときは
蟲も鳴く音をやめつらむ

愛のこゝろを吹くときは
流るゝ水のたち歸り
惡をわれの吹くときは
散り行く花も止りて

慾の思を吹くときは
心の闇の響あり
うたへ浮世の一ふしは
笛の夢路のものぐるひ

くるしむなかれ吾友よ
しばしは笛の音に歸れ
落つる涙をぬぐひきて
靜にきゝね吾笛を

おくめ

こひしきまゝに家を出で
こゝの岸よりかの岸へ
越えましものと來て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ

こひには親も捨てはてゝ
やむよしもなき胸の火や
鬢の毛を吹く河風よ
せめてあはれと思へかし

河波暗く瀬を早み
流れて巖に碎くるも
君を思へば絶間なき
戀の火炎に乾くべし

きのふの雨の小休なく
水嵩や高くまさるとも
よひよひにたくわがこひの
涙の瀧におよばじな

しりたまはずやわがこひは
花鳥の繪にあらじかし
空鏡の印象砂の文字
梢の風の音にあらじ

しりたまはずやわがこひは
雄々しき君の手に觸れて
嗚呼口紅をその口に
君にうつさでやむべきや

戀は吾身の社にて
君は社の神なれば

君の祭壇の上ならで
なにゝいのちを捧げまし

砕かば砕け河波よ
われに命はあるものを
河波高く泳ぎ行き
ひとりの神にこがれなむ

心のみかは手も足も
吾身はすべて火炎なり
思ひ乱れて嗚呼恋の
千筋の髪の波に流るゝ

おつた

花仄見ゆる春の夜の
すがたに似たる吾命
朧々に父母は
二つの影と消えうせて
世に孤児の吾身こそ
影より出でし影なれや
たすけもあらぬ今は身は
若き聖に救はれて

人なつかしき前髪の
処女とこそはなりにけれ

若き聖ののたまはく
時をし待たむ君ならば
かの柿の実をとるなかれ
かくいひたまふうれしさに
ことしの秋もはや深し
まづその秋を見よやとて
聖に柿をすゝむれば
その口唇にふれたまふ
かくも色よき柿ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
人の命の惜しからば
嗚呼かの酒を飲むなかれ
かくいひたまふうれしさに
酒なぐさめの一つなり
まづその春を見よやとて
聖に酒をすゝむれば
夢の心地に酔ひたまふ
かくも楽しき酒ならば
などかは早くわれに告げこぬ

若き聖ののたまはく
[illegible]
迷ひの歌をきくなかれ
かくいひたまふうれしさに
歌も心の姿なり
まづその声をきけやとて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

若き聖ののたまはく
まことをさぐる吾身なり
道の迷ひとなるなかれ
かくいひたまふうれしさに
情も道の一つなり
かゝる思を見よやとて
わがこの胸に指させば
聖は早く恋ひわたり
かくも楽しき恋ならば
などかは早くわれに告げこぬ

それ秋の日の夕まぐれ

そゞろあるきのこゝろなく
ふと目に入るを手にとれば
雪より白き小石なり
若き聖のたまはく
智恵の石とやこれぞこの
あまりに惜しき色なれば
人に隠して今も放たじ

おきく

くろかみながく
　やはらかき
をんなごころを
　たれかしる
をとこのかたる
　ことのはを
まこととおもふ
　ことなかれ
をとめごころの
　あさくのみ
いひもつたふる
　をかしさや
みだれてながき
　鬢の毛を
黄楊の小櫛に
　かきあげよ
あゝ月ぐさの
　きえぬべき
こひもするとは
　たがことば
こひて死なむと
　よみいでし
あつきなさけは
　誰がうたぞ
みちのためには
　ちをながし
くにには死ぬる
　をとこあり
治兵衛はいづれ
　戀か名か
忠兵衛も名の
　ために果つ
あゝむかしより
　こひ死にし
をとこのありと
　しるや君
をんなごころは
　いやさらに
ふかきなさけの
　こもるかな
小春はこひに
　ちをながし
梅川こひの
　ために死ぬ
お七はこひの
　ために焼け
高尾はこひの
　ために果つ
かなしからずや

紅霞は
蛇となれるも
　こひゆゑに
やさしかりけり
　佐保姫は
化となれるも
　こひゆゑに
をとこのこひの
　すはふれは
たびにすてゆく
　なさけなみ
こひするなかれ
　をとめごよ
かなしむなかれ
　わかともよ
こひするときと
　かなしみと
いづれかながき
　いづれみじかき

知るや君

こゝろもあらぬ秋鳥の
聲にもおくるゝ一ふしを
　知るや君
深くもあざる潮の
底にかくるゝ眞珠を
　知るや君
あやめもしらぬやみの夜に
静にうごく星くづを
　知るや君
まだ弾きも見ぬをとめごの
胸にひそめる琴の音を
　知るや君

雲のゆくへ

庭にたちいでたゞひとり
秋海棠の花を分け
なやむれば行く雲の
更に綾錦を輝くよな

髪を洗へば

髪を洗へば紫の
小草のまへに色みえて
足をあぐれば花鳥の
われに調の蔵はます
口になやむれば誘惑の
ときではひらく音楽の
手にとる酒は美酒の
若き歌をたゝふめり
耳をたつれば歌神の
きたりて時の篇を吹き
目をひらければただとの
一ふしわれはうたひたふ
あゝかくまでにあやしくも
熱きこゝろのわれなれど
われをし君のこひしたふ

その涙にはおよばしな

君がこゝろは

君がこゝろは蟋蟀の
風にさそはれ鳴くごとく
朝影清き花草に
惜しき涙をそゝぐらむ

それかきならす玉琴の
一つの糸のさはりさへ
君がこゝろにかぎりなき
しらべとこそはきこゆめれ

あゝなどかくは觸れやすき
君が優しき心もて
かくばかりなる吾こひに
觸れたまはずぞ恨みなる

醉歌

旅と旅との君や我
君と我とのなかなれば
醉うて袂の歌草を
醒めての君に見せばやな

若き命も過ぎぬ間に
樂しき春は老いやすし
誰が身にもてる寶ぞや
君くれなゐのかほばせは

君がまなこに涙あり
君が眉には憂愁あり
堅く結べるその口に
それ聲も無きなげきあり

名もなき道を説くなかれ
名もなき旅を行くなかれ
甲斐なきことをなげくより
來りて美き酒に泣け

光もあらぬ春の日の
獨りさみしきものぐるひ
悲しき味の世の智恵に
老いにけらしな旅人よ

心の春の燭火に
若き命を照らし見よ
さくまを待たで花散らば
哀しからずや君が身は

わきめもふらで急ぎ行く
君の行衛はいづこぞや
琴花酒のあるものを
とゞまりたまへ旅人よ

葡萄栗鼠の木彫を見て

山路も遠し[illegible]
冬の[illegible]かこゝろなく
[illegible]き[illegible]に身をよせて
[illegible]の名に[illegible]の[illegible]の
葡萄のかげにきて見れば
[illegible]のすみ[illegible]に
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

うし[illegible]の
かねにこの日の暮るゝとも
夕闇かけてたゝずめば
こひしきやなぞ[illegible]五郎

秋のうた

秋は来ぬ　秋は来ぬ
一葉は花は露ありて
風のきて彈く琴の音に
青き葡萄は紫の
自然の酒とかはりけり

秋は来ぬ　秋は来ぬ
おくれさきだつ秋草も
みな夕霜のおきどころ
笑ひの酒を悲みの
盃にこそつぐべけれ

秋は来ぬ　秋は来ぬ

[illegible]を
[illegible]
智恵あり[illegible]に
君笛を吹けわれはうたはむ

秋風の歌

さびしさはいつともわかぬ山里に
尾花みだれて秋かぜぞふく

しづかにきたる秋風の
西の海より吹き起り
舞ひたちさわぐ白雲の
飛びて行くへも見ゆるかな

暮影高く秋は黄の
桐の梢の琴の音に
そのおとなひを聞くときは
風のきたると知られけり

ゆふべ西風吹き落ちて
あさ秋の葉の窓に入り
あさ秋風の吹きよせて
ゆふべの鶉巣に隠る

[illegible]
[illegible]
紅葉をかへす秋風の
空の明鏡にあらはれぬ

悲しいかなや西風の
まづ秋の葉を吹けるとき
[illegible]
[illegible]とき

道を伝ふる婆羅門の
西に東に散るごとく
吹き漂蕩す秋風に
飄り行く木の葉かな

朝羽うちふる[illegible]の
明闇天をゆくごとく
いたくも吹ける秋風の
羽に声あり力あり

見ればかしこし西風の
山の木の葉をはらふとき
悲しいかなや秋風の
秋の百草を落すとき

人は利劍を振へども
げにかぞふればかぎりあり
舌は時世をのゝしるも
聲はたちまち滅ぶめり

高くも烈し野も山も
息吹まどはす秋風よ
世をかれがれとたすまでは
吹きも休むべきけはひなし

あゝうらさびし天地の
空の中たる秋の日や
落葉と共に飄る
風の行方を誰か知る

傘のうち

二人してさす一張の
傘に姿をつゝむとも
情の雨のふりしきり
かわく間もなきたもとかな

顏と顏とをうちよせて
あゆむとすればなつかしや
梅花の油黑髮の
亂れて匂ふ傘のうち

戀の一雨ぬれまさり
ぬれてこひしき夢の間や
染めてぞ燃ゆる紅絹うらの
雨になやめる足まとひ

歌ふをきけば梅川よ
しばし情を捨てよかし
いづこも戀に戲れて
それ忠兵衛の夢がたり

こひしき雨よふらばふれ
秋の入日の照りそひて
傘の涙を乾さぬ間に
手に手をとりて行きて歸らじ

春やいづこに

かすみのかげにもえいでし
綠の柳にくらぶれば
いまは小暗き木下闇
　あゝ一時の
　　春やいづこに

色をほこりしあさみどり
わかきむかしもありけるを
今はしげれる夏の草
　あゝ一時の
　　春やいづこに

梅も櫻もかはりはて
枝は綠の酒のごと
醉うてくづるゝ夏の夢
　あゝ一時の
　　春やいづこに

鷲の歌

みるめの草は青くして海の[illegible]にはびこり
流れ藻の葉はむすぼれて[illegible]の小島にこ[illegible]ゝ
も
あしたゆふべのさだめなき大[illegible]の見る夢の

闇きあらしに驚けば海原とくもかはりつゝ
とくたちかへれ[illegible]に友よびかはす[illegible]千鳥
もし[illegible]やく火はきえはてゝ岩にひそめるかも
めとり
翼は苔やに掛け[illegible]いそ[illegible]する波ぎはの
[illegible]りて[illegible]を稜角にし[illegible]身をよす一羽の鷲
いかづちの火の岩に落ち波間に落ちて消ゆる
まも
寝みだれ髪か黒雲の風にふかれつそらに飛び
葡萄の酒の濃紫いろこそ似たれ荒波の
波のみだれて狂ひよるひゞきの高くすさまじ
や
翼の骨をそばだてゝすがたをつゝむ若鷲の
身は複羽やさごろもや腋羽のうちにかくせ
ども
見よ老鷲はそこ白く赤すぢたてる大爪に
岩をつかみて中高き頭静かにながめけり
げに白髪のものゝふの劒の霜を拂ふごと
唐藍の花ますらをのかの青雲を慕ふごと
茜葉の影に啼く鹿の谷間の水に喘ぐごと

[illegible]く老鷲は雲の行く[illegible]
わが若鷲は[illegible]みわが老鷲はたちあが[illegible]
小枝に映る明星の澄めるに似たる眼して
黒雲の行く大空のかなたにむか[illegible]
いつれこゝろのおくれたり高し[illegible]しときたむ
べき
わが若鷲は琴柱尾や胸に文なす鵰の斑の
承毛は白く柔和に谷の落し羽飛ぶときも
湧きて流るゝ眞清水の水に翼をうちひたし
このめる鷲は行く春のたごりにさける花躑躅
わが老鷲は肩剛く胸腹廣く溢れいで
烈しき風をうち凌ぐ羽は著くもあらはれて
藤の花かも胸の斑や髀に甲をおくごとく
鳥の命の戰ひに翼にかゝる老の霜
げにいかめしきものゝふの盾にもいづれ翼を
ば
張りひろげたる老鷲のふたゝびみたび羽ばた
きて
踊れる胸は海潮の湧きつ流れつ鳴るごとく
力あふれて空高く舞ひたちあがるすがたかな

[illegible]
[illegible]老鷲を[illegible]
[illegible]は花葉舞ひ扇ひらめきかへる[illegible]の
わが老鷲を吹くさまは一葉を振るに似たり[illegible]
り
たゝかふためにうまれては[illegible]た劒の老鷲の
うたむかたむと小休なき熱き胸より吹く氣息
は
色くれなゐの火炎かもげに悲痛の湧き上り
勁き翼をひるがへしかの天雲を凌ぎけり
光を慕ふ身なれども運命かなしや老鳥の
一ところ深き苦闘のおとをみそらに殘しおき
金絲の縫の黒繻子の帶かとぞ見る黒雲の
羽袖のうちにつゝまれて姿はいつか消えには
り
あゝさだめなき大空のけしきのとくもかはり
ゆき
闇きあらしのをさまりて光にかへる海原や
細くかゝれる彩雲はゆかりの色の濃紫
薄紫のうつろひに樂しき園となりけらし

命を岩につなぎては細くも絲をかけとめて
腋羽につゝむ頭をばうちもたげたる若鷲の
鉤にも似たる爪先の雨にぬれたる岩ばなに
かたくつきたる一つ羽はそれも名殘か老鷲の

霜ふりかゝる老鷲の一羽をくはへ眺むれば
夏の光にてらされて岩根にひゞく高潮の
碎けて深き海原の岩角に立つ若鷲は
日影にうつる雲さして行くへもしれず飛ぶや
　かなたへ

きりぎりす

去年蔦の葉の
　かげにきて
うたひいでしに
　くらぶれば
ことしも同じ
　しらべもて
かはるふしなき
　きりぎりす

耳なきわれを
　とがめそよ
うれしきものと
　おもひしを
自然のうたの
　かくまでに
舊きしらべと
　なりけるか

同じしらべに
　たへかねて
草と草との
　花を分け
聲あるかたに
　たちよりて
蟲のこたへを
　もとめけり

花をへだてゝ
　きみがため
聞くにまかせて
　うたへども
うたのこゝろの
　かよはねば
せなかあはせの
　きりぎりす

晩春の別離

時は暮れ行く春よりぞ
また短きはなかるらむ
恨は友の別れより
さらに長きはなかるらむ

君を送りて花近き
高樓までもきて見れば
緑に迷ふ鶯は
霞空しく鳴きかへり
白き光は佐保姫の
春の車駕を照らすかな

これより君は行く雲と
ともに都を立ちいでゝ
懐へば琵琶の湖の
岸の光にまよふとき
東膽吹の山高く
西には比叡比良の峯

目に行き交ふ山々の
深きながめをふしあふぎ
いかにすぐれし想をか
沈める波に漂ふらむ

流れは空し法隆の
夢杳かなる鵤の水
水にうつろふ山城の
みやびの都行く磯の
偲めるすがた見つくして
畿内に迫る伊賀伊勢の
鈴鹿の山の波遠く
海に落つるを望むとき
いかに萬の恨をば
空行く鷲に託むらむ

春去り行かば青丹よし
奈良の都に尋ね入り
としつき君がこひ慕ふ
御堂のうちに遊ぶとき
古き藝術の花の香の
伽藍の壁に遺りなば
いかに體を身にしめて
深き思に沈むらむ

または攝津の島が根の
南の紀和の國を
回りて進む黒潮の
鳴門に落ちて行くところ
天際遠く白き日の
光を洩らす雲裂けて
目にはるかなる遠海の
波の躍るを望むとき
いかに胸うつ音高く
君が血潮のさわぐらむ

または名に負ふ歌枕
波に千とせの色映る
明石の浦のあさぼらけ
松萬代の音に響く
舞子の濱のゆふまぐれ
もしそれ海の雲落ちて
淡路の島の影暗く
狭霧のうちに鳴き通ふ
千鳥の聲を聞くときは
いかに浦邊にさすらひて
遠き昔を忍ぶらむ

世に君がため山々は
雲を停めむ浦々は
磯に流るゝ白波を
揚げむとすらむよしさらば
旅路はるかに海邊行かば
野邊のひめごと森行かば
森のひめごとさぐりもて
高きに登り天地の
もなかに遊べ大川の
流れを窮め山々の
神をも呼ばひ谷々の
鬼をも起し歌人の
魂をも遠く返しつゝ
清しき聲をうけあげて
朽ちせぬ琴をかき鳴らせ

あゝ歌神の吹く氣息は
絶えてさびしくなりにけり
ひゞき空しき天籟は
いづくにかある

九つの
藝術の神のかんづまり
かんさびませしとつくにの

阿典の宮殿の玉垣も
今はうつろひかはりけり
草の緑はグリイスの
牧場を今も覆ふとも
みやびつくせしいにしへの
笛のしらべはいづくぞや
かのバビロンの水青く
千歳の色をうつすとも
柳に懸けしいにしへの
琴は空しく流れけり

げにや大雅をこひ慕ふ
君にしあれば君がため
藝術の天に懸る日も
時を導く星影も
いづれ行くへを照らしつゝ
深き光を示すらむ

さらば名殘はつきずとも
袂を別つ夕まぐれ
見よ影深き欄干に
媚をふくむ藤の花
北行く雁は大空の
霞に沈み鳴き歸り

彩なす雲も愁ひつゝ
君を送るに似たりけり

あゝいつかまた相逢うて
もとの契りをあたゝめむ
梅も櫻も散りはてゝ
すでに柳はふかみどり
人はあかねど行く春を
いつまでこゝにとゞむべき
われに惜むな家づとの
一枚の筆の花の色香を

新潮

一

我あげまきのむかしより
潮の音を聞き慣れて
磯邊に遊ぶあさゆふべ
海人の舟路を慕ひしが
やがて空しき其夢は
身の生業となりにけり
七月[illegible]
[illegible]

兄もろともに舟浮けて
力をふるふ水馴棹
いづれ舟出はいさましく
波間に響く櫂の歌

夕潮青き海原に
すなどりすべく漕ぎくれば
巻きては開く波の上の
鴎の夢も冷やかに
浮び流るゝ海草の
目にも幽かに見ゆるかな

まなこをあげて落つる日の
きらめくかたを眺むるに
羽袖うちふる鶴鵠は
彩なす雲を舞ひ出でて
翅の塵を拂ひつゝ
物にかゝはる風情なし

[illegible]く々として鳥を吹く
風の力もなにかせむ
[illegible]龍の行くごとく
[illegible]音を聞けば葛城の
そつ彦むかし引きならす

眞弓の弦の響あり
希望すぐれし鶻隼よ
せめて舟路のしるべせよ
げにその高き荒魂は
敵に赴く白馬の
白き疊うちふるひ
風を破るにまさるかた

海面見ればかげ動く
深紫の雲の色
はや暮れて行く天際に
行くへや遠き鶻隼の
もろ羽は彩にうつろひて
黄金の波にたゞよひぬ

朝夕を刻みてし
天の柱の影暗く
雲の帳もひとたびは
輝きかへる高御座
西に傾く夏の日は
遠く光彩を沈めけり

見ようるはしの夜の空
見ようるはしの空の星
北斗の清き影冴えて
望みをさそふ天の花
とはの宿りも舟人の
光を仰ぐためしかな

潮を照らす篝火の
きらめくかたを窺へば
松の火あかく燃ゆれども
魚行くかげは見えわかず
流れは急しふなべりに
觸れてかつ鳴る夜の浪

一

またゝくひまに風吹きて
舞ひ起つ雲をたとふれば
戰に臨むますらをの
あるは鉦うち貝を吹き
あるは太刀佩き劍執り
弓矢を持つに似たりけり

光は離れ星隱れ
みそらの花はちりうせぬ
彩美しき卷物を
高く舒べたる大空は
みるまに暗く奪はれて
日にすさまじく變りけり

聞けばはるかに萬軍の
鯨波のひゞきにうちまぜて
陣螺の音色ほがらかに
野の空高く吹けるごと
湧き潮の音のうち
いと新しき聲すなり

我あまたたび海にきて
風吹き起るをりをりの
波の響に慣れしかど
かゝる清しき音をたてゝ
奇しき風の吹く角かとぞ
うたがはるゝは聞かざりき

こゝろせよかしはらからよ
な恐れそと叫ぶうち
あるはけはしき青山を
凌ぐにまがふ波の上
あるは千尋の谷深く
落つるにまがふ濤の影

思ひ悩むものゝふの
劔を[illegible]ごと
猛[illegible]泣かす
河を[illegible]流さるれば
望は一たりの[illegible]にして
花は[illegible]なり

たとへば深き西風の
梢をふきてふるごとく
身は枯れはてし秋の葉の
枝を離れて散るごとし
[illegible]

哀しや狂ふ大濤の
舟うごかすと見るうちに
櫓をうしなひしはらからは
げに消えやすき白露の
落ちてはかなくなれること
海の藻屑とかはりけり
あゝ我のみはやれども
眼の前の身をさへは

劔となりて胸を刺し
千々に力を砕くとも
怒りて高き浪は
猛き心を傷ましむ

命運よなにの戯れぞ
人の命は春の夜の
夢とさやけに夢ならば
いとど悲しき夢をしも
見るにやあらむ海にきて
まのあたりなるこの夢は

これを思へば胸潰れて
流しゝ涙せきあへず
今はた櫂をうちすてて
波と戦ふ力なく
死して仆るゝ人のこと
身を船板に投げ伏しぬ
一葉にまがふ舟の中
波にまかせて漂ひつゝ
舵を枕に泣き入れば
げに底ひなきわだつみの
上に行方も定めなき

己が身こそ悲しけれ
時には[illegible]闇の
光なき世に流れ落ち
朽ちて行くかと[illegible]はれ
時には憐む人もなき
冷たき冥府の水底に
沈むかとこそ思はるれ

あゝあやまちにし我身に
おろかなりともかくてわれ
まろび果つべき命かは
照る日や月や星にあり
大空に心あれば
[illegible]

かくと心に定めては
波もなかばと勇みたち
闇もかなたに[illegible]に
空はさびしき雨となり
潮にうつる[illegible]
[illegible]
我よるべなき波の上に

活ける力の胸の火を
わづかに賴む心より
消えてはもゆる闇の夜の
その靜かなる光こそ
漂ふ身にはうれしけれ

危きばかりともすれば
波にゆらるゝこの舟の
行くへを照らせ燐の火よ
海よりいでて海を焚く
青きほのほの影の外
道しるべなき今の身ぞ

砕かば砕けいざさらば
波うつ櫂はこゝにあり
たとひ舟路は暗くとも
世に勝つ道は前にあり
あゝ新潮にうち乗りて
命運を追うて活きて歸らむ

野路の梅

風かぐはしく吹く日より
夏の緑のまさるまで
梢のかたに葉がくれて
人にしられぬ梅ひとつ

梢は高し手をのべて
たこそ觸れめやたゞひとり
わがものがほに朝夕を
ながめ暮してすごしてき

やがて鳴く鳥おもしろく
黄金の色にそめなせば
行きかふ人の目に觸れて
落ちて履まるゝ野路の梅

千曲川旅情の歌

一

小諸なる古城のほとり
雲白く遊子悲しむ
緑なす蘩蔞は萌えず
若草も藉くによしなし
しろがねの衾の岡邊
日に溶けて淡雪流る

あたゝかき光はあれど
野に滿つる香も知らず
淺くのみ春は霞みて
麥の色わづかに青し
旅人の群はいくつか
畠中の道を急ぎぬ

暮れ行けば淺間も見えず
歌哀し佐久の草笛
千曲川いざよふ波の
岸近き宿にのぼりつ
濁り酒濁れる飲みて
草枕しばし慰む

二

昨日またかくてありけり
今日もまたかくてありなむ
この命なにを齷齪
明日をのみ思ひわづらふ

いくたびか榮枯の夢の
消え殘る谷に下りて
河波のいざよふ見れば

砂まじり水卷き歸る
嗚呼古城なにをか語り
岸の波なにをか答ふ
過し世を靜かに思へ
百年もきのふのごとし

千曲川柳霞みて
春淺く水流れたり
たゞひとり岩をめぐりて
この岸に愁を繫ぐ

常磐樹

あゝ雄々しきかな傷ましきかな
かの常磐樹の落ちず枯れざる
常磐樹の枯れざるは
百千の草の落つるより
傷ましきかな
其枝に觸る夜の日
其幹を照らす月
など行く水の淀みなる
など雲の[illegible]を[illegible]する

蝶の舞
花の笑
など遊ぶ日の世に短きや
など其醉の早く醒むるや
蟲草の葉に悲めば
一時にして既に霜
鳥潮の音に驚けば
一時にして既に雪
木枯高く秋落ちて
自然の色はあせゆけど
大力天を貫きて
坤輪遂に息なし
ものみな速くうらぶれて
長き寒さを知らぬ間に
汝千歳の時に嘯き
獨りし立つは何の力ぞ
白銀の花をかざして
吹雪の林間を聞く時
四方はすでに閉されて
江海も音をやすむ時
汝の緑も朽ちず
雪を凌ぐは何の力ぞ
など[illegible]
あゝしく[illegible]

汝の長き命なくば
山の命も老いなむか
汝の深き息なくば
谷の響も絶えなむか
あしたに葉をうつ霙
ゆふべには枝うつ霰
千草も知らぬ冬の日の
嵐に叫ぶつきたゝみ
いづれの日にか
氷は解けて
其葉の涙
消えやすらむ
あゝよしさらば枝も縮けて
終の色はあせなむ日まで
雪浮かば
無聲の天衣
風立たば
不朽の緑
おゝかれに
立てよ常磐樹
あゝ雄々しきかな傷ましきかな
かの常磐樹の落ちず枯れざる
常磐樹の枯れざるは
百千の草の落つるより

[illegible]

勞働讃歌

一　朝

[illegible]はふたたびこゝにあり
朝はわれらと共にあり
埋れよ眠行けよ夢
隠れよさらば小夜嵐

諸羽うちふる鶏は
咽喉の笛を吹き鳴らし
けふの命の戰闘の
よそほひせよと叫ぶかな

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

雲に轍うつ空の日は
語らず言はず聲なきも
人を勵ます其音は

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

あゝ綾錦につゝまれて
寫すとしも無く終ぬるより
薄き襤褸はまとふとも
活きて起つこそをかしけれ

偶偶ふ蟲の其が身に
羽衣を惠むものや何
酒か[illegible]か歎息か
迷か夢か昔ならず

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

口に[illegible]思を[illegible]き
骨には[illegible]を[illegible]
胸に[illegible]手に力
霜葉を履みてとく來れ

野に出でよ野に出でよ
稲の穂は黄にみのりたり
草鞋とく結へ鎌も執れ
風に嘶く馬もやれ

二　晝

誰か知るべき秋の葉の
落ちて樹の根の埋むとき
重く聲無き石の下
清水溢れて流るとは

誰か知るべき小山田の
稲穂のたわに實るとき
花なく香なき賤の胸
生命踊りて響くとは

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

血潮は草に流されど
力うちふり鍬をうち
天の風雨に假寢に
わが鬪ひの跡やこゝ

見よ日は高き青空の
端より端を弓として
今し父の矢母の矢の
光り降らす眞晝中

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

左手に稲を摑む時
右手に利鎌を握る時
胸滿ちくれば火のごとく
骨と髓との燃ゆる時

土と塵埃と泥の上に
汗と膏の落つる時
緑にまじる黄の莖に
烈しき息のかゝる時

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

思へ名も無き賤ながら
遠きに石を荷ふ身は
夏の白雨過ぐるごと
ほまれ短き夢ならじ

生命の長き戰鬪は
こゝに音無し聲も無し
勝ちて桂の冠は
わづかに白き頬かぶ[illegible]

共に來て蒔き來て植ゑし
田の面に秋の風落ちて
野邊の琥珀を鳴らすかな
刈り乾せ刈り乾せ稲の穂を

三　暮

揚げよ勝鬨手を延べて
稲葉を高くふりかざせ
日暮れ勞れて道の邊に
倒るゝ人よとく歸れ

彩雲や
落つる日や
行く道すがら眺むれば
秋天高き夕まぐれ
共に蒔き
共に植ゑ
共に稲穂を刈り乾して
歌うて歸る今の身に
ことしの夏を
かへりみすれば
嗚呼わが魂は
わなゝきふるふ

この日惜しみかの日に憶へ
この望みをかの夜に置き
門に立ち
野辺に行き
ある時は雲高くして
青草ふかき谷の影
雨に嵐に雷霆に
行手も暗く路を呑み
ある時は夏深くして
山路の蜩啼く森の下
たまたま虹に夕映に
木のみのりを祈りきて
それは逝き
これは來て
嘆と涙と送りてし
同じ自然の業ながら
今は思ひのなぐさめに
光をはなつ秋の星
あゝ歌みつゝ踊りつゝ
諸手をうちて笑ひつゝ
樹下の墓を横ぎりて
家路に通ふ森の道
眠る墓も落葉も
皆なほくれつ苔一重

聳立つ空に入相の
精舎の鐘の響く時
あゝ驕慢と歡喜と
力を息に吹き入れて
勝ちて歸るの勢に
揚げよ樂しき秋の歌

胸より胸に

其一　めぐり逢ふ君やいくたび

めぐり逢ふ君やいくたび
あぢきなき夜を日にかへす
吾命暗の谷間も
君あれば戀のあけぼの

樹の枝に琴は懸けねど
朝風の來て彈くごとく
面影に君はうつりて
吾胸を靜かに渡る

雲迷ふ身のわづらひも
紅の色に微笑み
流れつゝ冷ゆる涙も
いと熱き思を消す

知らざりし道の開けて
大空は今光なり
もろともにしばしたゝずみ
新しき眺めに入らむ

其二　あゝさなり君のごとくに

あゝさなり君のごとくに
何かまた優しかるべき
歸り來てこがれ侘ぶなり
ねがはくは開けこの戸を

ひとたびは君を見棄てゝ
世に迷ふ羊なりきよ
あぢきなき石を枕に
思ひ知る君が牧場を

樂しきはうらぶれ暮し
泉なき砂に伏す時
青草の追懷ばかり

悲しき日楽しきはなし
悲しきはふたたび帰り
緑なす野辺を見る時
漂泊の追懐ばかり
楽しき日悲しきはなし

その笛を今は妬まむ
その胸にわれは息はむ
君ならで誰か飼ふべき
天地に迷ふ羊を

其三　思より思をたどり

思より思をたどり
樹下より樹下をつたひ
独りして遅く歩めば
月今夜幽かに照らす

おぼつかな春のかすみに
うち煙る夜の静けさ
仄白き空の鏡は
俤の心地こそすれ

物皆はさやかならねど
鬼の住む暗にもあらず
おのづから光は落ちて
吾顔に触るぞうれしき

其光こゝに映りて
日は見えず八重の雲路に
其影はこゝに宿りて
君見えず遠の山川

思ひやるおぼろ〳〵の
天の戸は雲かあらぬか
草も木も眠れるなかに
仰ぎ視て涙を流す

其四　吾恋は河辺に生ひて

吾恋は河辺に生ひて
根を浸す柳の樹なり
枝延びて緑なすまで
生命をぞ君に吸ふなる

北のかた水去り帰り
昼も夜も南を知らず
あゝわれも君にむかひて
草を藉き思を述る

其五　吾胸の底のこゝには

吾胸の底のこゝには
言ひがたき秘密住めり
身をあげて活ける牲とは
君ならで誰かしらまし

もしやわれ鳥にありせば
君の住む窓に飛びかひ
羽を振りて昼は終日
深き音に鳴かましものを

もしやわれ蚕にありせば
君が手の白きにひかれ
春の日の長き思を
その糸に織らましものを

もしやわれ草にありせば
野辺に萌え君に踏まれて
かつ靡きかつは微笑み
その足に触れましものを

わがなげき衾に溢れ
わがうれひ枕を浸す
朝鳥に目さめぬるより
はや床は濡れてたゞよふ

口唇に言葉ありとも
このこゝろ何か写さむ
たゞ熱き胸より胸の
琴にこそ伝ふべきなれ

其六　君こそは遠音に響く

君こそは遠音に響く
入相の鐘にありけれ
幽かなる声を辿りて
われは行く盲目のごとし

君ゆゑにわれは休まず
君ゆゑにわれは仆れず
嗚呼われは君に引かれて
暗き世をはづかに渡る

たゞ知るは沈む春日の
目にうつる天のひらめき
なつかしき声するかたに
花深き夕を思ふ

吾足は傷つき痛み
吾胸は溢れ乱れぬ
君なくば人の命に
われのみや独ならまし

あな哀し恋の暗には
君もまた同じ盲目か
手引せよ盲目の身には
盲目こそうれしかりけれ

其七　枝うちかはす梅と梅

枝うちかはす梅と梅
梅の葉かげにそのむかし
鶏は鶏とし並び食ひ
われは君とし遊びてき

空風吹けば雲離れ
別れいざよふ西東
青葉は枝に契るとも
緑は永くとゞまらじ

水去り帰る手をのべて
誰れか流れをとゞむべき
行くにまかせよ嗚呼さらば
また相見むと願ひしか

遠く別れてかぞふれば
かさねて長き秋の夢
願ひはあれど陶磁の
くだけて時を傷みけり

わが身長く生ひいでて
額の汗を覆ふとも
甲斐なく珠を抱きては
罪多かりし草枕

雲に浮びて立ちかへり
都の夏にきて見れば
むかしながらのみどり葉は
蔭いや深くなれるかな

わかれを思ひ逢瀬をば
君とし今やかたらふに

二人すわりし青草は
熱き涙にぬれにけり

其八　風よ靜かに彼の岸へ

風よ靜かに彼の岸へ
こひしき人を吹き送れ
海を越え行く旅人の
群にぞ君はまじりたる

八重の汐路をかき分けて
行くは僅に舟一葉、
底白波の上なれば
君安かれと祈るかな

海とはいへどひねもすは
皐月の野邊と眺め見よ
波とはいへど夜もすがら
緑の草と思ひ寢よ

もし海怒り狂ひなば
われ此岸に倒れ伏し
いといと深き歎息に
其嵐をぞただ吹くべき

樂しき初憶ふ毎
哀しき終堪へがたし
ふたたびみためぐり逢ふ
天つ恵みはありやなしや

あゝ緑葉の嘆をぞ
今は海にも思ひ知る
破れて胸は紅き血の
流るゝがごと滴るがごと

椰子の實

名も知らぬ遠き島より
流れ寄る椰子の實一つ

故郷の岸を離れて
汝はそも波に幾月

舊の樹は生ひや茂れる
枝はなほ影をやなせる

われもまた渚を枕
孤身の浮寢の旅ぞ

實をとりて胸にあつれば
新なり流離の憂

海の日の沈むを見れば
激り落つ異郷の涙

思ひやる八重の汐々
いづれの日にか國に歸らむ

寂寥

岸の柳は低くして
羊の群の繪にまがひ
野薔薇の[illegible]
流るゝ砂に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]はくもたにの
[illegible]をあげて流るると
[illegible]くめぐつみに
流れて下る千曲川

あした[illegible]をたゝかはし
[illegible]をそびてし
[illegible]の富士の嶺も
今は[illegible]日の影に
白く[illegible]夕のごと
はるかに[illegible]む雲の外
[illegible]の空高く
今も[illegible]火の柱
南な[illegible]石を降らしては
みそらを焦す灰けぶり
神夢さめし天地の
ひらけそめにし昔より
常世につもる白雪は
今も無間の谷の底
沸きてあふるゝ紅の
血潮の池を目にみては
布引に住むはやぶさも
翼をかへす浅間山

あゝ北佐久の岡の[illegible]
御牧が原の[illegible]の影
夢かけめぐる旅に寝て
安き一日もあらねばや
高楼の上にをかあかと
燃ゆる炎をあふぐとき
み谷の底の[illegible]巌に
逆まく浪をのぞむとき
かしこにこゝに寂寥の
その味ひはにがかりき

あな寂寥や其の道は
獣の足の跡のみか
舞ひて見せたる大空の
鳥のゆくへのそれのみか
さてもためしの燈火に
若き心をうかゞへば
人の命の樹下蔭
花深く咲き花散りて
枝もたわゝの智慧の實を
味ひそめしきのふけふ
知らずばなにか旅の身に
人のなさけも薄からむ
知らずばなにか移る世に

[illegible]の契りもあだならむ
一つの石のつめたきも
萬の[illegible]をこゝに聴き
一つの花のたのしきも
千々の涙をそこに見る
あな寂寥や[illegible]の
小休もなきを思ひみば
あはれの外のあはれさも
智慧のさゝやくわざぞ是

かの深草の露の朝
かの象潟の雨の夕
またはカナンの野邊の春
またはデボンの岸の秋
世をわびびとの寝覺には
あはれ鶉の聲となり
うき旅人の宿りには
ほのかに合歓の花となり
羊を友のわらべには
日となり星の數となり
夢に添ひ寝の農夫には
はつかねずみとあらはれて
あるは形にあるは音に
色ににほひにかはるこそ

いつけり薄き寂寥よ
いづれいましのわざならめ
となりおもては冷やかに
いとつれなくも見ゆるより
深き心はあだし世の
人に知られぬ寂寥よ
むかしいましが雪山の
佛の夢に見えしとき
かりに姿は花も葉も
根もかぎりなき藥王樹
むかしいましが沅湘の
水のほとりにあらはれて
楚に捨てられしあてびとの
熱き涙をぬぐふとき
かりにいましは長沙羅の
鄂渚の岸に生ひいでて
ゆふべ悲しき秋風に
香ひを送る蕙の草
またはいましがパトモスの
離れ小島にあらはれて
歎き侘るゝひとり身の
冷たき夢をさますとき
かりに面は照れる日や

首はゆふべの空の虹
衣はあやの雲を着て
足は二つの火の柱
默示をかたる言の葉は
高きらつぱの天の聲

思へばむかし北のはて
海路侘しき佐渡が島
雲に隠しき天つ日の
光も薄く雪ふれば
四面の風は吹き落ちて
荒浪の聲を驚かし
岸うつ波は波羅蜜の
海潮音をとゞろかし
朝霜ふれば袖閉ぢて
衣は凍る鴛鴦の衾
夕霜ふれば現し身に
八つのさむさの寒苦鳥
ましてや國の聖人の
安房の生れの旃陀羅が子を
あな寂寥や寂寥や
ひとりいましにあらずして
[illegible]にまた
そのかなしみをあはれまむ

げに儚の夢夜の夢
旅の愁にやつれては
日も暖に花深き
空のかなたを慕ふとき
たやみのとげに責められて
袖に涙のかゝるとき
汲みて味ふ寂寥の
にがき誠の一雫

秋の日遠しあしたにも
高きに登りゆふべにも
流れをつたひ獨りして
ふりさけ見れば鳥影の
天の鏡に舞ふかなた
思ひを閉す白雲の
浮べるかたを望めども
都は見えず寂寥よ
來りてわれと共にかたりね

上田敏篇



牧羊神

阜の上の森陰に佇立ちて
牧羊の神パアン笛を吹く。
昼さがりの日暖かに、風も吹きやみぬ。
天青し、雲白し、野山影無き
音無の世に、ただ笛の聲、
ちよろ、りよろ、ふりよろ、
ひうゝりやに、ひやるろ、
あら、よい、ふりよう、るり、
ひよろ、ふりよろ、
蘆笛の管の鑽、
震ひ響きていづる音に、

牧羊神　さかほがひ

神も昔をおもふらむ、
髯そそげたる相好は、
翁さびたる笑まひがほ、
角さへみゆる額髪、
髪はららぎて、さばらかに、
風雅の心浮べたる
――耳も山羊、脚も山羊――
半獣の姿ぞなつかしき。
音の程らひの揺曳に、
憧れごこち、夢に入るを
きけば昔の戀がたり、
「細谷川」の丸木橋、
ふみかへしては、かへしては、
あの山みるにおもひたす、
わかき心のはやりぎに

森の女神のシュリンクス
追ひしその日の[illegible]を。
岩[illegible]の[illegible]間の白樫の
枝かきわけてラウラ木や
ミ[illegible]ト[illegible]の葉[illegible]ければ、
木[illegible]の[illegible]に[illegible]る
山葡萄こそ[illegible]けれ。
去年の落葉[illegible]は
時の間に[illegible]れし、
君を思へば[illegible]しさ、
岩角、木[illegible]、細流を
踏みしめ、飛びこえ、徒わたり、
雲の御髪や、白妙の
肌理こまやかの肉置の
肩を抱めむと喘ぎゆく。
やがてぞ谷は極まりて、

[illegible]日の[illegible]、
にほ[illegible]、すみれかしぼ鹿子、
[illegible]明[illegible]の[illegible]で[illegible]ぶ
[illegible]もとにつきぬれば
[illegible]もどこに、かの君を
今こそ終に得てしかと
思ふ心のそらだのめ。
[illegible]清水の中島に
[illegible]れてつかむ葦の根よ。
あまりに何のはかなさに、
[illegible]しあて、よよと泣く
[illegible]息[illegible]きとめあへず、
[illegible]に結ぶくもりしもあれ、
ふと[illegible]や、音しみじみと、
[illegible]も鳴りいでぬ、
[illegible]き鳴りいでぬ。
まこと抱けるこの草は
[illegible]ろのやどり草
[illegible]、[illegible]は戀。
さらにはこれぞわが物と
年ごろつかひ、年來の
[illegible]思ひ口うつし
[illegible]吹けば川岡に
[illegible]雉子の[illegible]鳥も、

[illegible]桃に馳る友鳥も、
[illegible]ににれがむ黄牛も
[illegible]に[illegible]く黒駒も、
牧にむれゐる小羊も、
聞惚れ見惚れ、あこがれて、
[illegible]の[illegible]節のどやかに、
蜥蜴も石に眠るなる
世は寂寥の眞晝時、
[illegible]に[illegible]りしわが戀と
おのれも、いつか、ひとつたる
うつら心や、のんやほ、のんやほ、
[illegible]のいつまでも
うれし愁にまぎれむと、
けふも日影の長閑さに、
心をこめて吹き吹けば、
いつも思も口うつし、
ああ蘆の笛、蘆の笙の笛。」
日はやや傾きて、遠里に
[illegible]はたち、中空の温もりに、
草の香いや高き片岡、
[illegible]、現は匂ふ今、
[illegible]の牧羊神、笙を吹きやみぬ。
[illegible]陰に音もなし、

村雨ははらほろ、
山梨の枝にかかれば、
けんけんほろろうつ
雉子の鳴く音に覺まされて、
磐床いづる牧羊の神パアン、
胸毛の露をはらひつつ
延欠して仰ぎ見れば、
有無雲の中空を
ひとり寂しく鶴の鳥、
遠の柴山かけて飛ぶ。
かへりみすれば、川添の
根白柳を滑燕、
掠め飛び交ふ雨あがり、
今、夕影のしるけきに、
生のこの世の忙しさよ、
地には蟻のいとなみを、
空には蜂の分封を
つくづく見れば、宿命の
かたき掟ぞいちじるき。
水の面に映りたる
おのが姿に戀じにの
玉玲瓏の水仙花、
花は散りてし葉の上を、

野は[illegible]

—なに[illegible]—

[illegible]に[illegible]られ[illegible]、

またある[illegible]

いとしき[illegible]なかにも

[illegible]を[illegible]の上、

二本の[illegible]の巴[illegible]、

なに[illegible]る

[illegible]るてりみな悲

蠱の[illegible]、

健氣にも、[illegible]傷ましや。

空は今何の[illegible]、

天馳使わ[illegible]、

東の山に虹かかり、

更に黄金の一[illegible]の

霓わたせるけしきにて、

鹿とり馳く弓雄等が

鳴鏑射放つ音たてて、

蜂の巣立の子別に

父蜂さそふ細工蜂、

七歩ばかりの後より、

やや高く飛ぶ女王蜂、

たとへば修羅の巷にて、

亂旋、亂廻、虎走、

[illegible]

[illegible]

人[illegible]、

戀ひ、[illegible]、

大騷亂のわた[illegible]、

生の力の仕[illegible]なる。

遙の山のあなたには、

人の[illegible]、

國富み[illegible]、民[illegible]を

都はあれ[illegible]、も[illegible]なは、

かたみに[illegible]

國の[illegible]、

青人草の[illegible]蜂、

黄泉の坂路の[illegible]かしきに、

とはに[illegible]押しくる

シシュフォス王の[illegible]かな。

種とり蜂の[illegible]、

夢の浮世の[illegible]男の

しやらりしやらりと[illegible]も、

子別[illegible]し初秋の

朝の命を知らざるや、

イクシオンのた[illegible]

車[illegible]に[illegible]るあはれ[illegible]

それに[illegible]、王蜂の

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

ブ[illegible]は知るといふ

法[illegible]

[illegible]

今[illegible]になにさ[illegible]

[illegible]

悲[illegible]に[illegible]る。

[illegible]

牧羊[illegible]の笛[illegible]に、

世の[illegible]たる。

名に負ふハアンの吹く笛の音に、

この天地の[illegible]なは、

擧りて群れゐふくまれて、

身も世も忘れ、處、時の

辨別も無き醉心地、

夢見る心地誘ふなる

不思議の笙の笛の聲、

悠やかに、朗かに、あんら、[illegible]かに、

森の泉に來て飲く

谺[illegible]、

谷の八十隈吹き靡け、
人里遠く傳はれば、
牧人笛を擱ちて、
羊[illegible]を[illegible]、
生の林[illegible]
雨に[illegible]、
[illegible]は[illegible]
[illegible]い[illegible]。
[illegible]山の[illegible]、
[illegible]なる[illegible]に
[illegible]く[illegible]。
[illegible]、
[illegible]、[illegible]は
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]

あの啼鳥の歌の聲、
間無く[illegible]く、
[illegible]、この夕
ここにパアンも今はとて、
[illegible]、[illegible]く、
[illegible]。
[illegible]、[illegible]
[illegible]人は
[illegible]に[illegible]。

さかほがひ

——[illegible]

[illegible]
[illegible]は
[illegible]
[illegible]
[illegible]よ、[illegible]よ、觴
[illegible]や、うたへ[illegible]、
[illegible]、[illegible]。
ああ、[illegible]、
[illegible]、[illegible]
[illegible]。

[illegible]は[illegible]
[illegible]は
かざしに[illegible]む。
たる[illegible]、かざしに、
[illegible]、[illegible]に
[illegible]、[illegible]、
[illegible]、[illegible]。
[illegible]、おもしろ、
[illegible]、[illegible]
[illegible]

色[illegible]へ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]、
[illegible]。
のめや、うたへや、
うたへ[illegible]、[illegible]。
[illegible]、[illegible]、
[illegible]、[illegible]
さかほがひ。



與謝野寛篇

五月雨

釘が降る、降る、鉛が降る、
生あたたかい針が降る、
暗い空から留度なく。
なんと執性なさみだれぞ、
世界の何處に降ることか、
降るは東の國ばかり。

黒板塀に黒い屋根、
牢屋のやうな日本屋に、
今日も降る、降る、十重、二十重、
鐵の格子を入れて降る、
灰の色した張り金を
がんじがらみに編んで降る。

壁も、柱も、椅子の背も、
鏡の枠も、ペン軸も、
本の背皮も、うす白く
一夜の内に黴が生え、
じめじめとする手ざはりは
蛇の窟に住むここち。

吹き入る雨を避けながら、
雨戸のかげにぢつとゐて、
物を思へば、床下の
茸のやうに氣が腐る。
二十日、ひと月、日を見ずに、
聴くは涙の[illegible]い音。

さればと云つて[illegible]へ出ると、
修験のやうな[illegible]下駄で、
騎兵のやうな[illegible]、
天子のいます[illegible]も、
一足ごとに沼の[illegible]、
肩まで泥の跳ね[illegible]。

お才

みごもりぬ、[illegible]のお[illegible]、
子が父をえもこそ分かね、
母父は云へと責め問ふ、
里人は袖引き[illegible]、
父が名を分かさねば、その子、

子ならねか、おすぢ[illegible]
熱する[illegible]ふに[illegible]り、
さた[illegible]めそ、[illegible]もとする。

森

[illegible]なる富士の[illegible]の
高[illegible]来れば、はるばると日路は[illegible]り、
ここにして、[illegible]の木[illegible]木の
[illegible]むら、[illegible]にも[illegible]り。
木[illegible]、[illegible]、
[illegible]
この森を要とし[illegible]、八をまたに
[illegible]の分れ[illegible]
[illegible]、野は[illegible]の[illegible]、
啼める空に揚雲雀さよく歌へり。
中を[illegible]、
甲斐へ、武蔵へ、相模路へ、都の方へ。
ここに[illegible]、[illegible]するは、[illegible]
[illegible]

八ちまたの路の何くに行くによし、
我が行く方はやがて[illegible]らやすの[illegible]。

まくは瓜

こは[illegible]か、きちがひか、
野に臥しあるく物乞か、
業病もち[illegible]、博打ちか、
盂蘭盆まへのこの二日、
いとあやしき[illegible]人は
[illegible]の[illegible]の青物の
市場の人を[illegible]。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
市場の軒を[illegible]。
[illegible]なる下ぶくれ、
[illegible]

[illegible]に光る[illegible]、[illegible]を行み
[illegible]、出たる前の[illegible]と。
いづこを[illegible]て来れるや、
問へど[illegible]して、
[illegible]

海の怪

青みて[illegible]大海は、[illegible]
幅廣き鋼の車輪、そのうへに、
[illegible]する調革——[illegible]。
いま、赤く[illegible]く落日の
[illegible]
[illegible]
目ざすは荒き北の海、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

背負ひくる手に驚き逃る。
日は消えて、やがて夜となり暗がれば、
この若者の路の案内に、
僅千の夜犬の聲は燭を點く。
前には黑し、時にして羅馬に似たる
古代――千出の都の TASKAROLA。

車

葛城山の嵐ふくと、
閉ざされしを、殘りたる
昨日の雪の野あかりに、
いで、この夜半に逃れめと、
書、調度、すこしを載せて、
荷車を男は挽けり。
猫やなぎまばらに燒き
浪速への路は幾曲、
をさな兒を背に負ふ妻は
小走りに後よりつづく。
慣れし野ながら、この夜半の
雪の明りの身に沁めば、
しばし負債も、里人の
つらき心も忘れ果つ。

わが、この夜、[illegible]
猶[illegible]まし。

戀しくは

戀しくは花を摘め摘め、艶の香すする八重の撫子、
黃ばみたる高き香の薔薇、杜若、野菊、雛罌粟、
あまりりす、黃金向日葵、西國の夕顏の花、
君知るや、山田の色、晖の香を、常新しく
春秋の花は薫す、それにこそ我は見べけれ。
戀しくば、ああまた君よ、ほがらかに開けて
歌へよ、
君知るや、わが歌卷の中にこそ君と相見て
とこしへに花にもまさり、老い死なぬ「我」は
あるなれ。

樟の樹

わが村の樟の樹よ、幾世經にけむ、
手つなぎて人十人めぐり試せど、
大幹は七尺を猶も餘せり。

冬[illegible]は[illegible]て、
村人は[illegible]へぬ。
[illegible]の前に[illegible]ゆすり、
行き[illegible]ぬは無し。
[illegible]は[illegible]し[illegible]ひ、
[illegible]を[illegible]り、
夏[illegible]とぞたれる。
[illegible]ばすべて
[illegible]は高く見ゆ。
大幹に[illegible]して、
[illegible]にひろげぬ。
樹の[illegible]心足らへば、
うち仰ぎ、何所[illegible]何[illegible]む
樟の樹[illegible]る心に[illegible]は、
人の世ぞ[illegible]しろく妙に興ある。
その初めこの蔭に遊びし子等よ、
目[illegible]は[illegible]し、手[illegible]き、歌ひ[illegible]き。
うら若き[illegible]人は[illegible]手とりき。
[illegible]たる庄[illegible]子馬[illegible]打たつき。
その子等も中の間に白髪かき[illegible]れ、
うち歎き、はては昔[illegible]人
その子等の後の後、幾世の孫ぞ、
[illegible]に來て[illegible]うたひ、またも遊べる。
ああ更に興あるは、四時の[illegible]ゆ。

おほみ空は花の魂よこそ遊べ、
空の日は白き馬せ[illegible]なふ
[illegible]風[illegible]吹き[illegible]、いつか[illegible]行くや。
にほひ雨[illegible]虹に[illegible]
定めなく移りゆく[illegible]色なれども、
おのづから亂れざる律こそはあれ。
智慧あさき短命の人等は知らじ、
大地に何ものか是れに洩れむや。
神の王者、雨手あげ、大空を抱き、
己が世のおもむきに獨り笑へり。
宿あひの[illegible]が村は語るもの無し、
[illegible]ぐる人、唯だに見よ、古き樽の[illegible]。

行きあひ

ふと、ゆかし、由もなきこと、
[illegible]誰れとか知らじ、
ゆきあへる[illegible]ぐるま。
衣の香か、[illegible]の匂ひか、
何ならむ、我れを引けるは。
その車[illegible]し[illegible]
[illegible]の[illegible]ぬ。
[illegible]ること、[illegible]、[illegible]にも。

細緒

ましろなる細緒[illegible]
[illegible]に[illegible]つなぐ、
青なるを、紅き[illegible]つなぐ。
たへ[illegible]しく心に沁みは
思ひ出も並べてつなぐ。

寝室

[illegible]竹色の[illegible]より
[illegible]をかいま見て、
[illegible]室の[illegible]に[illegible]し、
[illegible]にこそ冬の夜も
[illegible]白き薔薇の香はこもれ。

市役所

そこ守る小舎の[illegible]
[illegible]はわれを叱りぬ、
[illegible]上[illegible]。
[illegible]、[illegible]
[illegible]

影

薄ぐらき影きて泣きぬ、
[illegible]眠る床に、
[illegible]かよふ市の大路に、
[illegible]する御堂の中に、
さては知る、明日の墓まで。

夏日

鶏は庭に砂浴び、
犬どもは[illegible]て、其に
背にわたる風を[illegible]。
油日は[illegible]、そこ、此處、
むつかしき[illegible]の跡。

舞衣

われは[illegible]、[illegible]ところなる。
むらさきと赤とゆらめく、
[illegible]
[illegible]なく[illegible]、
[illegible]

人生

硝子すき、夜寒しがらに、
硝子すく、疲れは聞きよし、
音低く、[illegible]くと智慧の
[illegible]むなしきも。
硝子曇る、夜寒さがらに。

孤獨

われに添ひたるわが影も
われにはあらず、わが口を
出でし言葉も歸りこず、
まして、もとより離れたる
かなたの國よ、その人よ。

友

酒瓶は倒れて空し、
かの國に女の[illegible]
琴ひけば、夜のかの戸より
ヱルレーヌ音さへ覗く。
のけぞりて友は眠れり。

他の友

荒木の机に蛇を彫り、
女の名彫りして、
酒に醉へば、わかき友、
椅の[illegible]り傷負ひて
笑ふ悲しき歌のこゑ。

床

あめつちは餘りに濶し、
されはこそ行くかた知られ。
たをやめの香れる床は
やはらかに狭し、明るし、
この闇にわれを横たふ。

あだびと

あだびとは遠く去りにき、
闇の森にわれを繋ぎて、
わが馬と七つ繋ひに、
わが妻を馬に上せて、
わが角の笛を鳴らして。

夢

[illegible]は俄くなりき、
[illegible]、わが妻を
[illegible]りぬ、われ一人
手[illegible]れてさまよへば
[illegible]見えき。

呵責

天つ日となり、角はえて
野原に[illegible]る獅となり、
山に[illegible]き蛇となり、
海に[illegible]の口となり、
わが[illegible]よりひた追ひぬ。

乞食

縫の[illegible]、あやいろの單衣、
草履にて、頬の擦黒き
その男、またも來りぬ、
「大[illegible]下に住まへり、
錢たまへ、一つ歌はむ。」

異端

[illegible]下に[illegible]、
[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]にけれ。

撥無

[illegible]、[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

主人

[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]ない、
[illegible]

礎

なにごとの[illegible]けむ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]消える。

沈沒

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

嘆

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

窓

[illegible]ありと
[illegible]共れば[illegible]り。
な[illegible]曲り目、
今日[illegible]こそ過ぐれ、
その黒き[illegible]の窓。

猫

明き灯のもと、或ときは
ていねいにすこしにかき抱き、
ひしと[illegible]ひたれば、
つと[illegible]にかけ上がり
かた[illegible]を立て[illegible]

肥えたる女

世界の[illegible]れ、
[illegible]のごとく[illegible]せ細り、
風の[illegible]し、
肥えたる女、[illegible]ごとに
藥調[illegible]。

犬

[illegible]
あら、白い犬に[illegible]、
[illegible]、[illegible]、
[illegible]クンクン
なんだ、もう[illegible]閉さてゐる。

親爺

おとつつあん、おとつつあん、
呼んで見たけれど耳も無い、
首も、胴も無い、
唯だ足ばかり、よろよろと
墓へ行く、内のおとつつあん。

女

内側に歩けども物言はず。
ああ、女のむれ、
男のごとく銃を取らず、
黒髪、ひとみ、くちびる、手、
我等[illegible]の勝目無し。

乗合船

女の[illegible]、青みかかった、
[illegible]の乗合。
[illegible]出[illegible]水たは[illegible]、
[illegible]、
この人を[illegible]。

漫歩

春の夜の銀座通り、
大股に我が行き[illegible]。
新橋に[illegible]時の汽車に
待合はす人あるにあらねど、
遠く行く約あることく。

兒

いとほし、いとも悲し、
面ざしの我れに似るこそ
運命の我れに似るなれ、
とにかくも、いとほし、
末の兒は、我が兒は。

路上

大路を行[illegible]、
今し[illegible]、
裸[illegible]、
女[illegible]、
[illegible]

黒き色

いつ見ても我等[illegible]
[illegible]
内[illegible]して提香[illegible]
こを知らじ、[illegible]
ニコライ堂の円屋根の黒き色

舞

美しき人の身にして
桃色[illegible]の羽[illegible]くろい、
今、春を舞臺の少女、
くれなゐの纏の裾とり、
勝[illegible]ぬ、明き灯のもと。

虚空

かの虚空の大いなるかな、
我等を生み、物讀ましめ、
娶らしめ、戰はしめ、
疑はしめ、泣かしめて、
その擧句、見殺しにする。

ひと夜

帯を解くとき、君云ひぬ、
「こハ[illegible]るを見たまへ」と。
朝の別れにまた云ひぬ、
「忘れたまふな、海ごしに
二十日の月の黄ばみしを」

砂丘

筑紫の海に今日くれば
[illegible]
[illegible]身に、
[illegible]
[illegible]

平凡

人、われを見て「かの群に
行きてまじれ」と教へける。
[illegible]、むれにあらねども、
草の[illegible]にはあらねども、
我が嫌ひなるかの群に。

ひと日

思ひな[illegible]る日のあり、
手をつなぎ環の形して。
思ひならら若し、
またたれの美しき
心づみなとり傷める。

愁

なにか、などか、我が愁
木彫のごとく[illegible]たる。
[illegible]
ごとく[illegible]に[illegible]たる。
わが[illegible]、[illegible]む。

力

美しく清きは本より、
また好し、それが汚れてありとも、
黒く、ところどころ[illegible]物に[illegible]ありとも、
力満ちたる刹那の
ああ、[illegible]物にてあれ。

獅子つかひ

雄の獅子は眠りゐぬ、
このひまに讀む、文一つ。
雄の獅子は寝返りぬ、
猶一つ讀む、別の文。
雄の獅子は吼え出でぬ

門

五年越し使きたらず、
郵便物も届かず、
この門は鎖せるまま、
どくだみの繁るまま、
東京の[illegible]中に[illegible]てゆく。

鶴

たそがれの青める雲に
真白なる鶴の鳥啼く、
何と啼くぞ、
翼を日は[illegible]、
我[illegible]、また[illegible]にと啼く。

機

とり、はたり、
はたり、ちやう、ちやう。
いと細し、我が織る麻は。
これと、また、聞けば涼しや、
梭のなかに細く管鳴る。

その手に

ああ知りぬ、君がたぐひを、
海ゆけば沖の白帆、
空ゆけば赤き夕雲。
かく云ひて上目しければ、
われやがて下りき、その手に。

春

[illegible]の[illegible]のあそびなき、
隣の軒のつばくらめ、
春こそ来つれ、隣まで。
やがて[illegible]る頬を
白き[illegible]手にかい支ふ。

砂ほこり

[illegible]かなかに浮き立ちぬ、
河原のなかの砂ほこり、
つりがね草ぞ[illegible]れたる。
[illegible]終に[illegible]行き倒れ、
河原に蘇る物乞に
青きあし歯を食ひしばる。
つりがね草ぞ萎れたる。
鑢にかけて鉄骨を
削る音するきりぎりす。

[illegible]

[illegible]

荒畑の艫端に、[illegible]、
死[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]風にこそ鳴れ。

野の乞食[illegible]、
里の小路
[illegible]、
[illegible]、
た[illegible]。
[illegible]、
[illegible]に
[illegible]時、
美[illegible]白[illegible]に
地を[illegible]、[illegible]に聞えき、

土井晩翠篇

星と花　暮鐘　星落秋風五丈原　萬里長城の歌　おほいなる手のかげ　懐郷　日本の女性　フェヂェ湖畔月夜の曲　勇助の戀　金華山より太平洋を望みて　釋迦牟尼とトルストイ　ガブリイレ・ロスンチオ　東方の[illegible]



星と花

同じ「自然」のおん母の
御手にそだちし姉と妹、
み空の花を星といひ
わが世の星を花といふ。

かれとこれとに隔たれど
にほひは同じ星と花、
笑みと光を宵々に
かはすもやさし花と星。

されば曙雲白く
御空の花のしぼむとき、
見よ白露のひとしづく
わが世の星に涙あり。

暮鐘

"La cloche! écho du placé près de la terre.
Voix grondante qui [illegible] a [illegible] un tonnerre.
Fait pour la cité [illegible] la [illegible]
Vase plein de rumur qui se vide dans l'air.
Hugo : Les Chants du Crepuscule.

森のねぐらに夕鳥を
故郷の里に旅人を
[illegible]けき[illegible]になきがらを
夢路の[illegible]に[illegible]つちを
[illegible]に[illegible]鐘。

谷中山の花ふゞき
秋落葉の雨の音
[illegible]二世々の夕まぐれ
朔風ともに鳴りやまず。

天の反響地の叫び
相[illegible]慰か
[illegible]く[illegible]傷む悲か
[illegible]る[illegible]、喜か
無[illegible]いまし[illegible]
響[illegible]法音か。

[illegible]友[illegible]のおほしまに
別[illegible]を[illegible]とき
[illegible]あとに

永き日の思ひにききとき
聖者鳴らす窓の戸に
萬象の天を思ふとき
人々は、あはれけに
今はた時は終りの鐘。

人住むところ行くところ
嘆と死とのあるところ
歡と樂とのあるところ
涙、悲、憂きなやみ
笑、喜、たのしみと
互に移りゆくところ。

都大路の花のかげ
白雲深き鄙の里
白波寄する荒磯邊、
無心の稚子の耳にしも
無聲の塚の中にしも
等しく響く寺の鐘。

雲飄揚の身はひとり
五城樓下の春遠く
都の空にさすらひつ
思しのぶが岡の上

われもなほ鐘を聞く。

鐘の音に夕ぐるゝ
入日名殘の影消えを
あたりの森に集るごと
むらがりたてる淀みなく
そこひに通るわれの思、

靜まり返る大ぞらの
波をふたゝびゆるがして
雲より雲にどよみゆく
餘韻かすかに稍遠く
浮世の耳に絶ゆるとも
知るや無象の天の外
下界の夢のうはごとを
名殘の鐘にきゝとらむ
高き尊き靈ありと。

天使の階をかきわけて
昇りも行くか「無限」の座
鐘よ、光の門の戸に
何とかたれの叫ぶらむ、
下界の暗は厚うして
聖者の憂絶えずとか

信仰の花は[illegible]て
讃美の歌[illegible]とか
嗚呼、今はた、また[illegible]
今はたのぞく[illegible]
呼べど[illegible]の幽かに[illegible]
あの未來の幽冥に、
われも[illegible]に[illegible]く、
渡口に[illegible]し[illegible]
入江の春は[illegible]て
南路行は泣かれし。

恨みなほこの世の運命、
無限の未來後にひき
無限の過去を前に見て
我いまこゝに惑ひあり
はたいまこゝに望あり
笑、たのしみ、うきなやみ
暗と光と織りなして
歌ふ浮世の一ふしも
いざ響かせむ寺の鐘、
先だつ魂に來む魂に
かくて思をかはしつゝ
流一筋大川の

泉と海とのなげきごと。

暁いでて東の夕あらし
寄するる西の雲の波
かの中空に集りて
しばしは其に言もなし
ふた、再び消ゆるとき
響きは何を叫ぶらむ。

人生、理想、はた戀愛
皆人の夢と生まし
我笑ひは愛なれか、
まひるの光いづこぞと
望の星に消ゆること
情熱の瞳にまみえては
罪の嵐かわれ知らず

世の塵深き人の世の
夕暮ごとに響きけて
無限永劫の響を
響めき告ぐる鐘の音、
東流するに似して
[illegible]
[illegible]

有情の涙誘へるか。

祇園精舍の檐朽ちて
葷酒の香のみ高くとも
セント、ソフィヤの塔荒れて
福音俗に媚ぶるとも
聞けや夕の鐘のうち
靈鷲楞嚴いにしへの
高き尊き法の聲。

天地有情の夕まぐれ
わが驂鸞の夢さめて
鳳樓いつか跡もなく
花もにほひも夕月も
うつゝは脆き春の世や
峯上の霞たちきりて
縫へる仙女の綾ごろも
袖にあらしはつらくとも
「自然」の胸をゆるがして
響く微妙の樂の聲
その一音はこゝにあり。

天の莊嚴地の美麗
花かんばしく星てりて
「自然」のたくみ變らねど
わづらひ世々に絶えずして
理想の夢の消ゆるまは
たえずも響けとこしへに
地籟天籟身に兼ぬる
ゆふ入相の鐘の聲。

星落秋風五丈原

（一）

祁山悲秋の風更けて
陣雲暗し五丈原、
零露の文は繁くして
草枯れ馬は肥ゆれども
蜀軍の旗光無く
鼓角の音も今しづか。

＊　＊　＊

丞相病あつかりき。

清渭の流れ水やせて
むせぶ非情の秋の聲、
夜は関山の風泣いて
暗に迷ふかりがねは

令風霜の威もすごく
守る諸營の垣の外。
丞相病あつかりき。

帳中眠かすかにて
短檠光薄ければ
こゝにも見ゆる秋の色、
銀甲堅くよろへども
見よや侍衛の面かげに
無限の愁溢るゝを。
丞相病あつかりき。

＊　＊　＊

風塵遠し三尺の
劍は光曇らねど
秋に傷めば松柏の
色もおのづとうつろふを、
漢騎十萬今さらに
見るや故郷の夢いかに。
丞相病あつかりき。

＊　＊　＊

夢寐に忘れぬ君王の
いまはの言葉畏みて
心を盡し身をつくし
[illegible]
今落葉の雨の音、
大樹ひとたび倒れなば
漢室の運はたいかに。
丞相病あつかりき。

四海の波瀾收まらで
民は苦しみ天は泣き
いつかは見なむ太平の
心のどけき春の夢、
群雄立ちてことごとく
中原鹿を爭ふも
たれか王者の師を學ぶ。
丞相病あつかりき。

＊　＊　＊

末は黄河の水濁る
三代の源遠くして
伊周の跡は今いづこ、
道は衰へ文弊れ
管仲去りて九百年
樂毅滅びて四百年
誰か王者の治を思ふ。
丞相病あつかりき。

（三）

嗚呼南陽の舊草廬
二十餘年のいにしへの
夢はたいかに安かりし、
光を包み香をかくし
隴畝に民と交れば
王佐の才に富める身も
たゞ一曲の梁歩吟。

閑雲野鶴空濶く
風に嘯く身はひとり、
月を湖上に碎きては
ゆくへ波間の舟ひと葉、
ゆふべ暮鐘に誘はれて
訪ふは山寺の松の影。

江山さむるあけぼのの
雪に驢を驅る道の上
寒梅痩せて春早み、

疎林風を穿つとき
伴は野鳥の慕の歌、
白雲たなびく洞の中
誰ぞや棊局の友の身は。

其隆中の別天地
空のあなたを眺むれば
大盗競ひはびこりて
あらびて榮華さながらに
風の枯葉を掃ふごと
治亂興亡おもほへば
世は一局の棊なりけり。

其世を治め世を救ふ
經綸胸に溢るれど
其利を俗に求めねば
何も臥龍の名を負ひつゝ、
隱れし世にも花は咲き
花また散りて春秋の
移りはこゝに二十七。

高臥遂に永からず
信義四海に溢れたる
君が三たびの音づれを
背きはてめや知己の恩
羽扇綸巾風輕き
姿は替へで立ちいづる
草盧あしたのぬしやたれ。

古琴の友よさらばいざ、
曉さむる西窓の
殘月の影よさらばいざ
白鶴歸れ嶺の松、
蒼猿眠れ谷の橋
岡も替へよや臥龍の名
草盧あしたはぬしもなし。

成算胸に藏りて
乾坤こゝに一局棊
たゞ掌上に指すがごと、
三分の計はや成れば
見よ九天の雲は垂れ
四海の水は皆立ちて
蛟龍飛びぬ淵の外。

（三）

英才雲と群がれる
世も千仞の鳳高く
翔る雲井の[illegible]たぞ、
東[illegible]野の[illegible]
南[illegible]水の[illegible]
兵馬[illegible]い[illegible]
風塵[illegible]きたゞなかに
たてしいさをの數いかに

江陵去りて行く[illegible]
武昌夏口の秋の陣、
一葉輕く棹さして
三寸の舌英に[illegible]ば
見よ大江の[illegible]
[illegible]
[illegible]圖[illegible]け[illegible]あらく、

[illegible]閣[illegible]にそびえ[illegible]て
あらしは叫び[illegible]散り
金鼓[illegible]ひて[illegible]
[illegible]師は[illegible]
[illegible]中[illegible]で[illegible]
三分の棊は[illegible]し。

[illegible]軍山[illegible]は晴れ
[illegible]

[illegible]
[illegible]
天[illegible]
[illegible]
王[illegible]山の夕[illegible]
[illegible]雲の色、

中原北に臨むれば
崑崙峰に[illegible]
[illegible]の色も[illegible]し、
さらば漢家の一系統
わが君[illegible]をいたゞきて
踐ませまつらむ九五の位、
天の暦數こゝにつく
時建安の二十六
景星照りて錦江の
流に泛ぶ花の影。

花とこしへの春ならじ、
夏の火峯の雲落ちて
御林の陣を燒き拂ふ
四十餘營のあといづこ、
雲雨荒臺夢ならず
巫山のかたへ秋寒く
名も白帝の城のうち
[illegible]

その三峽の流れを
永安宮の夜の雨
泣いて聞きけむ遺詔に
君いまはのみことのり
忠[illegible]は盡きいにしへの
三顧の知遇またこゝに
重ねて篤き君の恩、
諸臣に[illegible]と[illegible]し
思やいかに其宵の。

邊塞遠く雲分けて
瘴烟蠻雨ものすごき
不毛の郷に攻め入れば
暗し瀘水の夜半の月、
妙算世にも比たき
智仁を兼ぬるほこさきに
南夷いくたび驚きて
君を崇めし神たりし。

（四）

南方すでに定りて
兵は精し馬は肥ゆ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
ためしを今こゝに見る。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
中原[illegible]

六たび祁山の嶺の上
風雲動き旗かへり
天地もどよむ漢の軍、
偏師節度を誤れる
街亭の敗何かある、
鯨鯢吼えて波怒り
あらし狂うて草伏せば
王師十萬秋高く
武都陰平を平げて
立てり渭南の岸の上。
拒ぐはたそや敵の軍、

かれ中原に一[illegible]
[illegible]略深く密ながら、
君に向はむすべなきを
[illegible]受けむ[illegible]。
[illegible]衣由[illegible]あたは[illegible]も、
陣を[illegible]らし下を束ね
魏軍守りて打ち出でず
[illegible]しく收むべき
その[illegible]人は[illegible]ずして
出師[illegible]はに君病[illegible]、
[illegible]頃[illegible]をなかりけり
[illegible]桑は忘れぬ君の恩
答[illegible]まことこそ
[illegible]下[illegible]眠[illegible]直は、
[illegible]れは[illegible]
[illegible]

五

[illegible]
[illegible]
たゞずと思ふ今のまも
[illegible]心[illegible]忘[illegible]
[illegible]

臥龍帳掲げて立ちいづる
夜半の大空雲もなし。
刁斗聲無く露落ちて
旌旗は寒し風清し、
三軍ひとしく聲呑みて
つゝしみ迎ふ大軍師、
羽扇綸巾膚寒み
おもやつれし病める身を
知るや情の小夜あらし。

諸壘あまねく經廻りて
輪車靜かにきしり行く、
星斗は開く天の陣
山河はつらぬ地の營所、
つるぎは光り影冴えて
結ぶに似たり夜半の霜。

嗚呼陣頭にあらはれて
敵とまた見む時やいつ、
祁山の嶺に長驅して
心は勇む風の前、
王師たゞちに北をさし
馬に河洛に飲まさむと
願ひしそれもあだなりや、
胸裏百萬兵はあり
帳下三千將足るも
彼れはた時をいかにせむ。

（六）

成敗遂に天の命
事あらかじめ圖られず、
舊都再び駕を迎へ
麟臺永く名を傳ふ
春玉樓の花の色
いさをし成りて南陽に
琴書をまたも友とせむ
望みは遂に空しきか。

君恩酬ふ身の一死
今更我を惜まねど
行末いかに蜀の運、
過ぎしを忍び後計る
無限の思ひ無限の情、
南成都の空いづこ
玉壘今は夜更けて、
錦江の水咽ぶべく、
鐵馬あらしに嘶きて

何[illegible]なく。

明主の知遇身に受けて
三顧の恩にゆくりなく
立ちも出でたる舊草廬、
嗚呼鳳兮に答へて
今に楚狂の歌もあれ
人生意氣に感じては
成否をたれかあげつらふ。

成否を誰かあげつらふ
一死盡くしゝ身の誠、
仰げば銀河影冴えて
無數の星斗光濃し、
照すやいなや英雄の
苦心孤忠の胸ひとつ、
其壯烈に感じては
鬼神も哭かむ秋の風。

（七）

鬼神も哭かむ秋の風、
行きて渭水の岸の上
夫の殘柳の根に訪へ、
蟋蟀のかたる絶えまなき

[illegible]
野は一色の[illegible]
[illegible]

[illegible]は碎けぬ露のもと、
枝は折れぬ霜の前、
[illegible]に包む花の色
[illegible]蝶睡る草の蔭
色もにほひも消去りて
有情も同じ世々の秋。

群雄次第に凋落し
雄圖は鴻の去るに似て
山河幾とせ秋の色、
榮華盛衰ことごとく
むなしき空に消え行けば
世は一場の春の夢。

擊たるゝものも擊つものも
今更こゝに見かへれば
共に夕の嶺の雲
風に亂れて散るがごと、
蠻觸二邦角の上
蝸牛の譬おもほへば

[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

五虎の將軍今いづこ、
神機きほひし江南の
かれも英雄いまいづこ、
北の渭水の岸守る
仲達かれもいつまでか、
感極まりて氣も遊か
聞けば魏軍の夜半の陣
一曲遠し悲笳の聲。

更に碧の空の上
靜かにてらす星の色
かすけき光眺むれば
神秘は深し無象の世、

あゝ無限の大うみに
溶くるうたかた其は[illegible]は
いか[illegible]、
千仞暗しわたつみの
底の白玉誰か得む
幽渺境窮みなし
鬼神のあとを誰か見む。

嗚呼五丈原秋の夜半
あらしは叫び露は泣き
銀漢清く星高く
神秘の色につゝまれて
天地微かに光るとき
無量の思齎らして
「無限の淵」に立てるとき
功名いづれ夢のあと
消えざるものはたゞ誠、
心を尽し身を致し
成否を天に委ねては
[illegible]
高き尚きたぐひなき
[illegible]、
[illegible]

管仲樂毅たそや彼、
伊呂の伯仲眺むれば
「萬古の霄の一羽毛」
千仞翔ける鳳の影、
草廬にありて龍と臥し
四海に出でゝ龍と飛ぶ
千載の末今も尚
名はかんばしき諸葛亮。

(一) 關羽の敗死 (二) 詩經大雅、[illegible]詩

萬里長城の歌

一

生ける[illegible]か[illegible]、[illegible]二千年、
影は[illegible]人[illegible]名[illegible]長城の壁の上、
落日[illegible]、[illegible]出[illegible]色、
征[illegible]影[illegible]。

[illegible]

二

嗚呼[illegible]人去り[illegible]、[illegible]流れぬ、千載の
昔に[illegible]今[illegible]を見む、
殘壘[illegible]、[illegible]
春[illegible]。

[illegible]

（三）

北夷の憂絶え果てゝ境は堅し國安し、
先王の書も焚け果てぬ、天下の儒者も埋まりぬ
わが萬世の業成りぬ君王の思しかなりや。
知るや夜半の阿房宮、後庭深く森暗く
歌臺の響よそにして獨りあらしのつぶやくを
浮世の花の一盛り槌むるに早き色見ずや。
聞け長城の秋の聲、旌旗の暗に消ゆるとき
またたく光露帯びて星の竊かにささやくを
「富も力も一場の夢覺め果てむ後思へ」と

（四）

寂寥かなる東海の緑を涵す波の上
不死の金闕遠くして童女五百の舟いづこ、
絳霞の光天上の花とこしへに匂へども
土に下れば流螢の示すは獨り世の脆さ、
至尊の榮は高くとも名を玉籍に留め得じ
この金人十二鑄なせども かれに無象のつるぎ
あり。
心を焦し世を碎くあゝ秦朝の一孤臣
胡の笛に取らずとも無常の風はあらかりき、
天地靜かに夜更けて江流秋に咽ぶとき
獨り汨羅のかたほとり燃ゆる心もしづまりて。
思ふやいかに人力の脆きを命の定りを、
鐵牛血無し博浪沙鮑魚臭有り沙丘臺。

（五）

嗚呼死屍未だ冷えずしてかれ「萬世の業」いづこ
暗君嗣ぎて上に在り佞臣の害よなどあらそ、
民の怒は火の如く、戍卒は叫び兵は起ち
楚人の一炬閃きて咸陽の宮みな焦土。
尋ねざる空に虹懸けし複道の跡今いづれ、
雲あらざるに龍飛べる長橋の影はたいかに、
哀蘭露に悲めば迷宮空しく草の宿、
驪山の春去れば花ことごとく涙なり。
斬蛇のつるぎ炎漢の光もさはれ極みあり、
甘泉殿の夜半の月かれも浮雲の恨みあり、
其移り行く世の習ひに京の花をよそにして
邊土に立てる長城の連雲の影あゝ絶えず。

（六）

[illegible]亡びて塔に[illegible]
[illegible]れる朝二十、[illegible]、
中[illegible]たび烽火[illegible]
また[illegible]去りし[illegible]いかに[illegible]
[illegible]
山川影は變られ[illegible]
[illegible]の[illegible]いた[illegible]に[illegible]
獨り邊土に影絶えず[illegible]
[illegible]昔に今青む長城の影[illegible]
民の幸血世の[illegible]
歴史の色に染められし[illegible]
き、
其面影に忍びいで泣くは懐古の露のみか
往春の恨誰がために哀も咽ぶ夕ぐれぞ。

（七）

青も咽ぶ夕ぐれの遊子俯仰の想ひ、
北夷[illegible]し長城の昔の跡[illegible]られ
時世[illegible]流れては中華の[illegible]明日いかに、
秦漢[illegible]移り行く昔の跡を[illegible]

西のあらしの吹き寄する黄海の波今あらし。
西暦一千九百年東亜のあらし明日いかに、
中華の光先王の道との民を救ひ得じ
愛を四海に傳ふべき神人の教今空語、
呑ずや虎狼の牙鳴す『基督教徒』血に渇き、
群羊守る力無き『異教の民』の聲呑むを。

俯仰古今の物思ひ遊子の恨いつ盡きむ、
征馬慨いて嘶ける響を返す壁のもと
思も遥に眺むれば猶たゞよふ大空の
自然の樂も絶え果てつ關山暮れて星出でて
恨も含む長城の姿は暗に呑まれ行く。

さらば滅れむとこしへにわが長城の壁のもと、
（盡きぬ思は大空の星の光に任せ置きて）
其星移る千載の時の流の末遠み
語らで昔を偲とめむ殘壘にまた忍びでて
我世の今日を歌ふべき後の詩人はわれ知らず。
嗚呼この永刧の眠擲は『いづれの時か鎭まらむ、

人生舊を傷みては千古替らぬ情の歌、
破壁聲無き傍にまた落日の影を帶び
流るゝ光積り行く三千の昔忍ぶ時
かれ咏嘆の聲擧げて何の國語に歌はむか。

興廢移り悲喜まじる一人の跡一國の跡、
笑の蔭に涙あり暗のあなたに光あり、
玉樓の花風の恨み殘壘のあらし天の樂、
千載遠き後の世の詩人よ既に君の歌
今も響けり長城の暗に隱るゝ壁の中。

（一）天下の兵器を收めて咸陽に聚め鎖して鐘鐻金人十二を作る。（十八史略）（二）張良始皇を博浪沙に狙撃して成らず ○ 始皇巡狩の途沙丘平臺に崩ず、群臣秘して喪を發せず一石の鮑魚を以て其臭を亂る（同上）（三）"Pulsschlag der Ewigkeit" Liebmann 氏の句を直譯す。

おほいなる手のかげ

月しづみ星かくれ
嵐もだし雲眠るまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり。

百萬の人宗みなしづまり
煩悩のひゞき絶ゆるまよなか
見あぐる高き空の上に
おほいなる手の影あり

懷鄕

夢に暮山のくれなゐの
雲のへ共にやすらひつ、
君が手とりて霞こむる
下界の春を見おろせば、
折しも東そらにほふ
月は・團の戀の靈、
あらしを拂ひ霧を吹き
わだつみ遠く澄みわたる
潮の歌に調添へ、
人の世永く春なれと
歌ふと見つるまぼろしや。

月は下界の春戀ひて
おぼろの夜半に袖かざし
海は磯邊のさゆり花
かをりにつねにあこがれて
あさな夕なの愛の歌。

[illegible]の夜をこめて
[illegible]きあたた
[illegible]のすみに侍る
[illegible]ばぞ。

その[illegible]みじさは
つめた[illegible]石も知る、
[illegible]人かけり
[illegible]雲をさく
その[illegible]のをゝしさも、
[illegible]に戀なしと、
[illegible]とりの苔つゝむ
古[illegible]の夜半の[illegible]いかに、
こゝにそ[illegible]し戀人の
涙は天に[illegible]かじを。

春やセイヌのさざなみに
たそ影にうす[illegible]人、
半ばは[illegible]に影つゝむ
雲錦裳の[illegible]や、
岸はみどりのわかめ咲く
世にはるかに[illegible]絶えじ、
水は流れ[illegible]の海
西の[illegible]は[illegible]波かよふ

[illegible]をむかしの
[illegible]かば
思[illegible]ゝ人の子に。

故[illegible]今花なしら雲か
[illegible]ぞらさで青葉山
[illegible]のみどり廣瀬河
花のおもかげやどしては
汝はた何の歎ありや、
人の子思ひくるゝとき
夕の岸にたとりたち
此春いとゞ[illegible]よと
咲かば月も泣くべきを。

こゝにも咽ぶ旅の子の
夜半の思は[illegible]ぞしる
ゐろりのまとゐ友さりて
灰やゝ深くつもる時
獨り向ふはたが姿、
寫繪聲はあらずとも
うちも我目みらるゝ目
等しく涙[illegible]ぬと
見るは迷かまた問はじ。

夜半[illegible]行く[illegible]
[illegible]いくたびか、
月に[illegible]くれたるの
[illegible]を[illegible]し夢ありと
[illegible]ずや世捨人、
たゞ[illegible]の風のねに
思は[illegible]雲の路、
君はた[illegible]思へりの
[illegible]思にほゝゑまむ。

[illegible]さしこゝ[illegible]はずば
受けよ[illegible]戀の宮
[illegible]
波は[illegible]らくれなゐの
海よりも[illegible]
[illegible]の林なごりの[illegible]
[illegible]を染むるわだつみの
あなた[illegible]のふるさとを、
光の[illegible]行け
暗の路また聞かれよ、
舞ふ白鳴の[illegible]へ
にほふ[illegible]へ
ゆけやわか歌遠く遠く。

（一）ヘトノルの何[illegible]人の心は[illegible]

日本の女性

[illegible]に
[illegible]ふ、
[illegible]なる花に
[illegible]かをりに[illegible]るか、
いとをば[illegible]に
輝く白玉光といづれ。

嗚呼君、[illegible]上がいさを
嗚呼君、聞えぬ至高のほまれ
嗚呼君、[illegible]、
[illegible]、[illegible]こと、
[illegible]に[illegible]
嗚呼君、[illegible]

[illegible]二湖畔月夜の曲

（南フランスの一名勝、ここを背景とし[illegible]の名歌あり「湖」と題す）

歌やいづこ
さゞなみに[illegible]はれて
木蔭にひそむ
夕風の聲。

戀やいかに
大空高くすみのぼる
月ただ照す
たへぬ思を。

さらば漕ぎ行け
一葉の小舟
むかしの夢のあとのこる、
あなたの岸の片すみに
暗き聲ある片すみに。

探りて得たる何の曲
夜目にもしるくアルペンの
雪の頂てりわたる、
月は[illegible]かに山のはに
思[illegible]の光をとめしを

こぎ歸れ
こぎ返せ
人はむなし汀上のあけぼの
戀に[illegible]古城の半月、
歌やいづこ
さゞなみ今は収りて
あけぼのの岸
[illegible]にさめず。

戀やいかに
ほの[illegible]む[illegible]かげに
さむるは[illegible]
あけぼのの夢。

永劫の戀

花[illegible]その[illegible]
染めしはじめの空の虹
その遠き世にその空に
戀ひし二人[illegible]
三千歳一たびなると聞く
その[illegible]
わかき[illegible]の夕
戀ひし二人にあらざるや。

[illegible]を
十字の光仰ぎ見て
[illegible]の森かげに
戀ひし二人にあらざるや。

あゝ時うつる世々のあと
時の潮のたゞ中に
浮き[illegible]つゝも共にして
[illegible]ひし二人にあらざるや。

金華山より太平洋を望みて

[illegible]大正 年の十一月一日[illegible]
[illegible]教授[illegible]
[illegible]

（一）

太平洋の秋の波を見おろす一千五百尺、
金華山[illegible]頂[illegible]、わが思を遠く吹く。

『王城去りて一千里、王化洽き東奥の山黄金を奉る』史上の[illegible]は遠けれど、一つ隔つる波の荒らして名山未だ人界に弘く知られず、神仙の府と[illegible]の空にのみ、たゞ幻覚の明滅を古の思に[illegible]して

[illegible]
[illegible]たる千年の[illegible]、
三[illegible]の[illegible]て、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]にうつる[illegible]

あゝ[illegible]なる太平洋、
[illegible]に月[illegible]の呼吸につれ
大宇宙の[illegible]の[illegible]一律洋々の
波浪と成り[illegible]帝国の[illegible]を洗へる[illegible]、
不死の仙郷[illegible]の[illegible]はた[illegible]か、
時劫の[illegible]は永[illegible]き、古今[illegible]名に[illegible]
[illegible]客潮分けし其春秋も遠さかる。

さなり[illegible]秋[illegible]さかり時劫の[illegible]は[illegible]なれば
[illegible]は大[illegible]の理は幻楼を砕き[illegible]
三山六[illegible]たきもおほいなる哉太平洋。
赤道帯の南北みどりの波の幾千里、
韃靼の岸、黒龍の水入る處、寒潮の
烟に月の眠る處、貿易風の吹きあふる
暖潮に魚の[illegible]處、時を同じく[illegible]
季節の[illegible]何か[illegible]の浪は[illegible]るや

（二）

[illegible]る[illegible]の[illegible]山の
天は[illegible]く[illegible]、[illegible]山の
[illegible]の[illegible]る。

[illegible]、一[illegible]して[illegible]
[illegible]の山[illegible]に[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]にして。

あゝ[illegible]の[illegible]、山また[illegible]、
[illegible]を[illegible]つるが如く、恍として
大自然のふところに[illegible]ふもの[illegible]人か、
[illegible]けて一切言句の[illegible]
[illegible]し[illegible]し太[illegible]の光に涵さるゝ。

（三）

さもあらばあれ空間の[illegible]夕陽の
落行 天の遠きあなた[illegible]の中[illegible]の
渦巻きわたる[illegible]の姿、日月また[illegible]かむ。

[illegible]しい哉百年の、[illegible]永く伏す處、
歐の東南ボス[illegible]の[illegible]年の夏の六月の、
[illegible]に[illegible]の[illegible]手負すし丸の響より、
西に東に大陸の[illegible]は修羅の市となり、
天上はたまた[illegible]雷の飛ばす數百の大怪鳥、
海上ひとしく鋼鐵の百の妖鯨火を吐けり。

リエージ、ナミユル陷りてチユウトンの族二
百萬、
颶風の如く[illegible]を地上に[illegible]りてあれ狂ひ、
ミユーズ、オアーズ、エーンスの流のほとり聯
合の
軍大波の[illegible]如く、東方[illegible]にガリシヤに
スラブの[illegible]兵[illegible]百萬[illegible]獨墺の
大軍ひ[illegible]に似ると聞
く。

江流秋に[illegible]悲か、
落月[illegible]か、
北地[illegible]大地を[illegible]、
殺氣大[illegible]。

あゝ黄[illegible]に
今悉く[illegible]

花も色なくうち枯れて只驚惶の影ならむ、
ノートルダムの聖堂は無情の砲に傷きぬ、
アミャリイドの墳の中、百年の昔列國を
敵に運命試みし[illegible]英雄何の夢結ぶ。
火山碎けて降る如き巨砲の猛威鐵塞を
微塵となしてベルギイの假の都をつんざき
ぬ。

海峽のあなた大川の流を帶びて儼として
豪富に誇るアルビヨンの大都も秋を感ずる
や、
リンデン樹下の逍遙も今は見はてぬ夢のあ
と。

（四）

遥かに思ふかんばしき地上の[illegible]の毒汁に
枯死する如く歴代の精を集めて培ひし
文化の華は戰亂のあらし忽ち吹き碎き、
秋叢頃の豐かなる畑は死體の收穫か、
天の光明共に受くる無[illegible]から民族と
「國」の名のため仇なして仇と互に攻め[illegible]り
炎々の火に白[illegible]の燎くるゝ如く消え去るか。

榴散彈の雨の下、影も留めず碎け散り、
或は千[illegible]の底に[illegible]去り、
或は利[illegible]の錆となり或は星泣き月むせぶ
夜半に焼かれて青燐の寒きを殘す牲幾萬、
中に紅顔の春の盛りをうび恥らふ色あらむ、
生立ち行かば一世の光たるべき導も、
織らば錦繡の錦のあや、染めなば虹霓の影の
にほひ、
或は學術底深く潛める眞珠探る身も。

其兵亂のくるほひの魔界の晝に似る處、
泥土の中ににじらるゝ花の姿を思ひ見よ、
流彈日なく[illegible]の子と共に斃ふる恨あらむ、
東西知らぬ幼子の四肢碎かるゝ慘あらむ。
逃るゝものも一切の資を宿を失ひて
此嚴霜の寒に泣き此慘烈の飢に泣く。
それはただ人界の世に受くべき運命か。

（五）

運命術の神秘なる彼衣[illegible]か射きとらむ、
東亞の空の運命の明日亦たれか測り知る。
大戰亂の一波瀾太平洋に傳はりて
渤海の[illegible]島、今皇軍の進む見る、
孤軍外より援けなく[illegible]べく、
水は濃[illegible]洋の天、赤光る[illegible]
是より東洋[illegible]の[illegible]、

[illegible]
あゝ[illegible]千里、
金門峡の星の旗閃く處秋いかに、
西の諸邦人ありて今同文の秘を知るや、
黒龍の水北陵の光は常にやさしきか、
恆河五天の夕ぐれの秋澄みわたるいつ迄ぞ。
機は風雲の變に倣て形勢次第に推し移る
其大局を綜攬の心の鏡寫し得に
經綸の策説たず、二千餘年の帝ノ邦に
わが極東の光明を放て、——亜細亜の暗は
足る。

（六）

鳴呼寶山の頂の秋逍遙のわかき友、
その紅頬は豐かなる望の春の曙か、
來る東亞の運命を雙の肩の上荷ふもの、
列强の中、一流の虚名に迷ふこと勿れ。
野人自尊の醜きを自らさらすこと勿れ。
爾の眼を光明に開き世界に知を探せ、
黴と錆とを心より劍より拭へ、陋習の
朽ちしを棄てよ、新たなる酒は新たの器に注げ、
迷夢久しく妄影の身にまとはるを斬り拂へ。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
心靈の力盡くるなく[illegible]ほいなるもの我にあり、
起ちて世界の文明の潮新たに捲き返し
太平洋の朝波に新たの歌を呼はしめよ。

七

鳴呼金華山　千歳の昔に聞きし黄金は
今其胸に空しとも靈境永く靈ありて
無聲の教、登臨の子にとこしへに施すか。
感謝を受けよ、名山の鎭むる處東瀛の
此邦永く愛すべく此民永く親むべし。
秋や漸く深うして今滿山のくれなゐの
錦繍やがて雨と散り驚飈空にうづまきて
萬物悉く枯れ果つる其慘悽の時去らば
春や再び回らざらむや。
雲今歸れ碧海の夕、
風今眠れ青天の限、
落つる日五彩の虹霓を染めて
烟波夢むる遠きあなた
大圓[illegible]の影を隱すも
[illegible]
[illegible]

（一）[illegible]（二）マルコポロ[illegible]（三）[illegible]（四）ナポレオン

釋迦牟尼とトルストイ

五天の夜半星ひかる。——
金殿玉樓——恩愛の
ほだしの閂を迦毘羅城
あとに落ち行く王子の玉貌、
眉間の白毫長く照して
魔王魔障の牙もひれ伏す、
靈鷲の山高からず
恆河の水長からず、
高きは靈、長きは餘韻。
末世今みな泥濁の波の狂に
金欄と紫衣と宗殿と幢幡と
泥に汚れ塵にまみるも何かあらむ。
流風とこしへに香を吐きて
二千年前の大獅子吼
今渇仰の心地に震ふ。

北歐のオーロラ微かに光る——
人生八十終に近き
冥想の宿ヤスナヤ ポリヤナ、
顧み見れば豪奢の青春、半醒の壯時、
立たむとして立たず、
覺めなむとして覺めず、
目は大空の高きを仰ぎ
足は塵土の低きに這ひしも
落日最後の光照して
雲霧を今はの際にたち切り、
五天のむかし二千年
青春の王子王宮を
逃れしあとに遂にならへり。
嗚呼これ今歐最後の偉靈
世紀二十の文明の思潮の高みトルストイ。

カブリイレ・ダヌンチオ

天その邦に幸ひし、
超人の群巨匠の群
おのおの誇る一代の
文化の誇は高く、

遠く千歳の後かをる、
其名まれある傳統の
桂の綠、南歐の
かをり、ミューズの恩寵の
豐けきガブリイレ、ダヌンチオ、
半生の詩名縹渺の
雲を傳へて、東海の
空に響けり、——オーリエント
こゝにも熱き血の潮、
大いなる物高き物いみじき物に
あこがるゝ青春の聲斷え果てじ。

時は風塵のあれ狂ひ、
花を銜める青鸞の
翼しばらく下界にたれ、
祖國の民の胸の琴
震ふしらべに鋼鐵の
絃を彈ずる時にして、
[illegible]アドリヤの
[illegible]の彼方のヴイ[illegible]の道、
[illegible]
[illegible]、
十[illegible]
[illegible]に[illegible]ふ、

そも人生のおほいなる
生ける詩、君にふさはしや。

嗚呼シムボリストか、デカダンか、
四十年前チュウトンの
馬蹄の下に荒らされし
パリ籠城の恨呑める
沈淪の時代——天に翔り
理想逐ふべき靈の翼
垂れて現實の享樂に
醉生夢死の日を送る、
例へばグリイス末世の詞藻、
あるひは東方十六の
詞人[illegible]あらびし世の亂、
道窮まれば竹林の
中に身を避け世を逃れ
世を嘲りし高踏の派か。

時は[illegible]り世は轉じ
チュウトン敗れてラテンの光、
正に再びかゞやきて
戰亂の餘燼消えむ後
桃李三千あらたなる
春を再び迎ふべく

[illegible]
[illegible]にむにたらずや。

あゝ大才こゝにあるも、
[illegible]貴の上、何ぞ[illegible]
[illegible]をつゞる如く、
更に詩情を富ましむる
絢爛巧妙の想湧きて、
わがオーリヨント日出づる處
天の一方に目をきはめ
懷を放ちて飛び來るや、
驚ずる翼ひらき延して
花は文章を照らすべき
三春の盛遠くとも、
扶桑の民に心あり、
血あり、情あり、南歐の
ラテンの精華東西の
文化の道をつなぐべく、
虚空をわたる三千里、
生ける英雄の詩歌として
飛び來るあとに感激の
脈搏高く打たであらめや。

オクシデントはたオーリエント、
[illegible]をあはせ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

いにしへの夢、霊鳥の
百千の翔舞ふ如く、
平和、恩寵、祝福の
標象の[illegible]飛ばむ時、
その[illegible]待てる憧憬の
思につゞる一小詩。

東方の聖經

オーリエント、オーリエント、オーリエント、
光はじめてにほふほとり、
雷音潮音とゞろきし
いにしへ遠し二千年、
人天ひとしく讃ぜしところ、
光明十方に溢れしところ、
それも流轉の理に洩れず、
八萬四千みな鳳毛にあらざれば
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
摩尼の光を[illegible]へど
その塔掃ひ參するとき、
東方聖經無限のかゞやき
永く心靈の世界に照らむ。

南歐の詩人思を潛め、
こゝ靈泉のみなもとに
酌みて荒れたる西歐の
思想の沙漠の上にそゝげ。

一切の現象、有爲の法、
生ぜず、滅せず、來らず、去らず、
一に非ず、異に非ず、常に非ず、斷に非ず、
その一片のひゞきにも
むかし五天の空に映ぜし
燦爛無上の光明の
跡をほのかに見るべからずや。

高安月郊篇



落瓦賦

秋は舊都に立ちにけり、
千代も落葉となりぬらむ、
瓦拾へば苔蒸して、
桐か、葵か、紋見えず。

宮も瓦屋となりにけり。
城に夕日の影落ちて、
山の古寺暮早く
泣くはつるぎか、松風か、

吾身ひとつと思ひしに、
うきはこゝにもありけるか、
經の裏見るともしびに
降るはいかなる雨ならむ。

身こそ心のまゝならね、
いかで想は限られむ、
愁のみ知るかなしさは
むかし想うて忘れなむ。

いつまで眠る東山？
いよ／＼清き鴨河や、
昔を語れ、我は今
人と離れて、なれを友！

朝日將軍、源九郎、
猿面冠者、高平太、
榮えしさまはいかなりし？
衰りしさまはいかなりし？

脆きは人の心かな。
山にかためしつはものも
この春にはとけにけり。
藤は都の男かた。

花は人より強かりし！
谷は花にもなかりしに、
花をかざして色競ふ、
男も顏は白かりし！

歌は香へど[illegible]、
梅吹き散らす[illegible]、
黒き男も[illegible]けり。
鄙に學[illegible]

伽藍ことごとく[illegible]ひ、
九年、三戦、[illegible]の
親子は草を刈りにけり。
花を守るはすがめかた。

花は嵐を呼びにけり。
酒もくされて盃を
爭ふはらから、やからさへ、
血汐白河染めにけり。

黒き炎は立ちにけり。
風は一夜に止みしかど、
またも燃えつく蘿壁門、
鬼は手を打つ六波羅や。

虎は荒野へ走りけり。
龍も馴れては花に醉ひ、
髑髏叩きて日を招く
父は子よりも若かりし！

孫は驚く水鳥の
[illegible]に[illegible]行く秋の葉や。
木曾に[illegible]し深山木も、

東山しぐれに染みにけり。

色は[illegible]に、
[illegible]の[illegible]る白拍子、
しづの小手卷くりかへす、
戀の徽こそはてなけれ。

誰に誓ひし、鬼武者は
寄らず、來らず、來れば去る。
あづまの花は針あるに、
木の實も早く腐れしに。

三の髑のなまぐさや。
花も血に染め、雪汚し、
月に照らして錢あざる、
それも天狗に食はれけり。

酒は亂るゝ不禮講、
打つや鼓の音高く、
破れ裂けても寄り來る
つはものどもは誰々ぞ。

河内男は[illegible]くとも、
元似合ふは左中將、

それは[illegible]
[illegible]けり。

牛の車の轍めぐり、
取れば[illegible]ひ、人嗤し、
獨占めては、色に溺れつ、
深けて通ふは執事かや。

こがね、しろがね、うてな立て、
客は茶を飲み、花ひねる。
叛け、家増す六分一、
三尺坊も鶏飼舞ふ。

御所の盃、山の端、
こゝに受くれば、洲の股や、
川はかしこにみなぎりて、
車首引く十餘年。

宮もしげみとなりにけり。
築地出で入る犬の子に
破戒頭陀さへ嚙まれては、
田舍商人毒ひさぐ。

箱根の峰に馬立てゝ

人の心を[illegible]るに[illegible]、
鎮守の山に[illegible]、
武装解けて、また[illegible]。

吉法師、吉法師、
なほぞまことに[illegible]おかし、
叶ふ一夜に夢はてゝ、
遂には小さし[illegible]川。

早く起きては、思ひ出す、
[illegible]一[illegible]や、
殺せ、殺さむ、ほとゝぎす、
塚はいづくぞ、本能寺。

[illegible]も[illegible]に
[illegible]
[illegible]
[illegible]。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]！

[illegible]に[illegible]裂きて、
浄土[illegible]も[illegible]より
[illegible]き、大仏の[illegible]、
[illegible]なり。

大仏先に毀れけり、
阿弥陀が峯も[illegible]けにけむ、
烟は上る[illegible]月夜、
[illegible]なる。

[illegible]いかに[illegible]けむ、
[illegible]の[illegible]まで、
小町[illegible]や、伊[illegible]、
[illegible]。

[illegible]の[illegible]間に、
白き[illegible]はしづれけり。
黒き石よりどよみきて、
[illegible]川や、

[illegible]、
川原に[illegible]に、
[illegible]、
[illegible]。

山の法師も[illegible]ひ、
川の[illegible]を[illegible]、
公卿も[illegible]刀抜き、[illegible]うて、
錦の旗は東指す。

[illegible]。
[illegible]行く千年の
春を残すはたをやめや。
[illegible]は野山を占めにけり。

守りがほたるもみぢより、
赤き三十三間の
[illegible]に[illegible]は
[illegible]。

比叡は遠くなりけるに、
[illegible]、
[illegible]の
中にさびしき阿弥陀仏。

[illegible]、
色ある[illegible]切れず、
[illegible]、

天竺よりは脱落して

妙法一夜火ともさて、
蓮華は鳥も飛ばしけり、
聲はあはれの虚無僧の
編笠何を忍ぶらむ

葵かざして加茂詣、
駒は競へど靡立たず、
扇かざして祇園會や、
ちごの化粧ぞ美しき。

神の社の杉古りて、
屋根に松生ふ樓門の
朱は剝げても朽ちもせぬは、
いづくの内匠作りけむ、

悪魔睨みて並び立つ
仁王は佛師親子とや。
無き名傳はる山水は
胸の中にぞ聲ありし？
松を叩きし琵琶の音は
白き泉に流れけむ、

西へ行くとも止どまりて、
女の紫色さめず。

捨てし反古さへ拾はれて、
人はつれづれならねども、
山のいづくに埋もれて、
兒に讀まるゝ文や無き。

梅雨に銀沙はくづれねど、
芭蕉野分に裂け易く、
炎草紙を好むなり。
水より寒き世の流。

殘すこゝろはいかならむ。
心ありても空となる
地には常磐もなきやらむ。
天の月日も消ゆといふ。

闇はふたたび明くるとも、
後の光に山見なば、
起つか、眠るか、いくばくの
峯はむかしを知るや否。

盡きぬさかえを誰か持つ。

朽ちぬ光を想うては、
朽ちし柱に文字ありと、
落つる瓦に雨浸らむ。

落つる瓦はよしやよし、
文字は心の影ならむ。
うつゝのうてな朽つるとも、
理想の宮ぞいとあかき。

一は有るを抱きては、
無きにながらふ心こそ、
今も昔にかよふらめ、
後もはからず合ふならむ。

泣くも、笑ふも、物云はぬ
天に問ふとも甲斐ぞ無き。
答へがほなる瀧よりも、
胸の泉は盡くるまじ。

汲めや、飲めや、我と我
養ふ酒にいざ醉はむ、
長生殿を我かけば、
不老門を人つくれ。

馬場孤蝶篇

ものの音　うきくさ



ものの音

草を藉しつむ六と時の
今生きつの世のごとき、
消えとおわず、その音の、
ほのぼのといそよふは、
耶蘇ゆかし、おぼゆかな。

あゝや、また聞く、笛の音を、
葭今ゆくりは、小鼓か、
しらべまさぐり、お琴の、
千鳥に吹きあはす
管の音は、たへなるは。

世にありとしも知らぬ曲、
さは名工のきざみてし
うつはの精の、おのづから
とはの世にゆきかよふ
途のへのすゞろぎか。

かすかながらもほがらかに、
ほがらかながらかすかにて、
諸音と聞くにはた通ふ、
遠くて、近づきて
これやげに影の曲、

まことに音あり、ものありや、
水なる夢路の夜の野に、
おのづまさしきわが夢、
ふかくもまた目にうかぶ

ことわりを今こゝに。
もの皆すでに忘れ路の、
しづまり深き時よ今、
うちにして聞く、たまの緒の
さゆらぎのともしらべ、
身に知らぬうたのこゑ。

ゆたかに織き紫苑の、
うまし少女の胸の夢か、
まづ手を休めぬでもなき、
かく手にかゞむ花の風、
かろき音は、あし拍子。
あゝ外の[illegible]の夜のうたげ、
そこに名たゝる[illegible]人の

調の音いろ、おほぞらを、
流離しの國わたり、
道行きの一夜か。

目に見えぬ世のかぎり無く
もののけぢめもさはたれば、
あそび好みのをすだまの、
むつれてはさゞめきの、
さながらの歌しらべ。

やゝ高鳴りの清むや今、
時の轍の轉じぬる、
諧生めぐる達の曲、
樂園によがへりの
たま呼ばふ鐘の聲。

深山ごもりの狩り人が、
音にのみ知る「古樵」の、
樹は枯れぬれど、斧の刃に
倒れにしそのうらみ
くりかへすものさびや。

逝きし樂師の骨は朽ち、
うつはも今は碎けつれ、
手なれの曲の天にしみ、
影の音の夜な夜なに
時を經てうするゝか。

涙をうけし手を擧げて
推すや扉のきしりにも、
樂の音消えて、おぼろ夜の
なか空に、名は知らず、
一こゑの春の鳥。

うきくさ

横網の更け行く夜や、
星あかりうす闇の
河づたひ、南へ、
男に添へる撫肩の、
世は今、うばらからたち、
もなかに咲けるにほひ花、
白き面の、憂ありや、
伏しめがちなる、なよび姿
影かとぞ、ならびの歩み、
をりをりの肩ずれに、
[illegible]の、なつかし、
かゝらむ宵の小路行、
[illegible]ゝ篠、そはかこつけ[illegible]
たゆみ心よ、君が手に
投げかけし身の、假名草[illegible]、
[illegible]るに増せし瞳のみだれ、

そも夢か、對ひの岸の
高樓に二人見し
おほ河のながれに
行きにし春の散りざくら、
あゝげに朽つるさだめの、
水には添はぬ落ち方や、
波の底なる藻屑がくれ、
破るゝ時しも君知らじな。

柳とや、思はぬ風に
なびきては、うつされて、
ひとのながめ、つれなし、
なほ籠の鳥、そばづまの、
さだめか、はや五つ年を、
あだに送りし變けはひ、
五十路の人のふか妬みに、
獨り出許りぬ心たゆみ。

夢ぞちになれし宵ぞら
あこがれの森の闇、
ぬけだし、忍び出、
橋口はなれていく町や、
ふきずし、それと分きては、
戀ふ人に逢ひ、あはならぬ
むつびよりぬるすぞろ心、
人無きしたる路に来ぬれ。

見に視る清流のしでこ、
すみ葉は母なかとしも
闇ふかなるにし、、
絡の糸にゆるぞ、、ぞ、
見る後れ、、に
話れたたる、、を
ふかはれの、、あきらぬつも、
みへ逢び見ては離れゆくき。

すみ日でさ、行く旅へとも、
たとしむこ月こころ
いふまで、はいへ、
言ふ、の岸に花ぬへぬ
ーーさ、そよたまれの身、

思の人のわづらひと、
あゝ世の波にとも沈みの
君が後の日こゝろもとな。

もつれ絲、その絲くちも
告げされば、ことわりで、
絡もとの過ぐ路、
思もあら知らかぬ身と、
はづかし君がさけしを、
後見らるゝ落つ人の
さは憂き思はるゝはかり、
泣きては見たや男だかみ。

浮舟の身何方に寄せて
隠れ岸の果ず何、
大路行くみくるま、
けにゆくりなう、御姿の、
あはれや我のみだれを、
秘すらふ為それならば、
戀のしるしよ、忘れますな、——
かれごと寄らぬ胸の思。

夕霧のたびつかの間た
たかすとす名さ知れぬ

さゝ見みはかなさ
今ぞ知りぬる、わくらはの
かたらひ、はなればなれの
時運づきぬ、軒あかり
をぼろき町の橋の袂、
思ひ断ゆべき別れの辻。



行く春の海邊に立ちて

天の工匠が造りたる
岩楠船を浮べけむ
その代のまゝに波打ちて
神馬藻寄する大和田の
千歳を經りし故郷に
我や在りしとばかりにて
さまよひ歸る汀かな。

海の上より行く春の
花の白帆は東風に
吹送られて常春の
沖津島根に歸るらむ。

河井醉茗篇

行く春の海邊に立ちて　孤影　儒艮を捕へし歌　[illegible]
[illegible]　内裡雛　[illegible]歎　[illegible]　霙降る宵　[illegible]の色　若き[illegible]るき[illegible]　こほろぎ
われは　一日　わが[illegible]　山の歓喜　海草の[illegible]　[illegible]樂　波のおと
[illegible]　球根　[illegible]炎　雪[illegible]ひ

好き人の座をすべり
[illegible]を[illegible]めて去るが如
底惜きるゝ想あり。

姫なる神の月天子
みむねを人にはからせて
滿干潮に光あり。
眞砂の粒の小さきにも
そゝぐ涙のあればこそ
蜑が子等にも拾はるゝ
詩は貝殼に似たりけれ。

翁さびして漁夫が
晴るゝ[illegible]るを行く雲の
夕占に[illegible]め教へたる
鞭のゆくへを自得て

[illegible]に水[illegible]醉を
八百[illegible]潮に恐れなく
放つ[illegible]わが詠よ。

半は砂に埋もれて
錆びに錆びたる[illegible]碇
千尋の[illegible]に投げられて
千石[illegible]を
ゆたに留めたる爪はあれ
春の風吹く[illegible]上に
荒男[illegible]かたる。

綱を[illegible]たれし碇こそ
さぞ荒海を[illegible]ふらめ。
かへれ、かへれ、渡津海に
汝が[illegible]て

故うつ波の底にあれ。
巷に狂ふ詩人は
衣裂けても怖ぢざるに。

風は南に吹き過ぎて
雲は落ちけり水のはて、
不易の天を頂きて
身は幾度も同じ世に
詩を生命の水鏡
こゝらの珠を探りつゝ
底なき海に想像の
龍の手間や開かなむ。

又哀しむ日には、来む世にも、
はた星の夕さりは
船路の地を顧みて
高く清きに崇めむ
今われらに享け得たる
百波見えぬうたかたの
翼を鎖ぎそへむや

空には枯葉、木には霜の
種子を残して行く春の
常世の秋に遊ぶなる

昔の我に返されて
面影のみか蜃気楼
これや繊目を忘れたる
絵巻を歩む汀かな。

塔影

巧匠ただ一番匠が
鑿の上につくられて
朝狭寺の晴れやかに
宝珠を天に捧げ持ち
岸に聳ゆる五層塔。

見よ！紺に染みて
伽藍忘れし杉の世に
雲をさへぎる勾欄に
清き絶の旗見れば
常に緑の影もなし。

秋は露盤に露うけて
扉は神殿に閉ざされて
四天の像に見られつゝ
金の鐸に風を聴く。

夜は北斗をうかがへり。
家に住まざる山鳥の
巣くふに所得たればか、
虚空杳かに翔れども
瑞垣の朱の古びたる
浮図を慕ひて帰るらむ。

落暉は西に傾いて
五重の屋根の屋然と
重なりうつる草の上、
月は廂に浮び出て
九輪の影は水にあり。

雲の岸より吹落ちて
風、潮水を打つて去る
波の面に渦まれし
阿修羅の花に咲きにほふ
時の力の迹ぞかし

その世に絶えし遊の音は
暁の嵐に破れたり。
生命の海を下に見て
天に昂立する塔よ。

落葉を焚く歌

秋晴の朝、庭守は
黄なる樺なる雌黄なる
木の葉草の葉うづだかく
火をうつ[illegible]。

夜にうるほひし露霜も
一葉一葉に乾きゆく
烟のかげに立ち添ひて
葉守の神を現れむ。

眞夏大野を覆ひたる
[illegible]の公孫樹
光に透いて金葉の
みな地に落つるひゞきかな。

櫻の精は遠き春の
海を渡りて去にけり、
朽ちてはかろき乾き葉の
梢はなるゝ力かな。

常緑なるべき[illegible]葉杉葉
うら枯れたるがあら〳〵と
火になりやすき秋のはて
[illegible]の實は[illegible]にをさまらむ。

機に[illegible]
自然のあや[illegible]
捲かるゝまゝに彼方なる
はてしなき手に渡されぬ。

ああ落つる葉に[illegible]いて
烟をあぐる庭守よ、
落葉焚いて盡きせざる
林に入らば[illegible]かむ。

天の高市

大和の土は踏むとして
詩ならざるはなかりけむ、
男郎花咲く香具山に
寧樂の詩人の隱れてより、

[illegible]
[illegible]
[illegible]

盛り過ぎたる[illegible]
館の前に[illegible]
稻の[illegible]
咎めむ人は[illegible]

天[illegible]市に[illegible]
人寄る市は[illegible]
初[illegible]
古き[illegible]は忘れけり。

それ天[illegible]の[illegible]を
[illegible]古[illegible]堂に
[illegible]行[illegible]はて
希臘、羅馬に入るが如[illegible]

詩に雅樂に彫刻に
美の淵源を興したる
氏ある子等は[illegible]りて
國[illegible]けたり[illegible]るほへり。

こざくら

墓場の苔に小ざくらの
花ちりかゝる雨の夕、
面影にしてかへるとも
父はも今や家ならず。

世づかぬ吾の子なれども
さすが産毛を撫でし時、
あまりに胸の若ければ
親といふにも憚かりし。

黒髪ながくらうたけて
花の小櫛にけづるとき
詩にはてゆく吾をすら
父と呼ばむは誰ならず。

吾子よかへれ
　うつし世に
花は根になる
　はるのくれ

人はつれなき
　ふるさとに
せめては汝を
　のこすべく。

なれし軒端を
　あとにせば
守るは去年の
　つばくらめ。

つばくらめこそ
　かへらめど
歸らぬ稚子よ
　いとし子よ。

など歸り來ぬ
　ながちゝは
遠くゆくとも
　告げざるに。

海酸漿

[illegible]
その唇にふくまれて
優しき音をぞ出すなる
海酸漿よ、わだつうみ
光とどかぬ水底の
潮のうちに居りなれて
浪のまにまに行きしとき、
世に出でよとは汝がために
いかなる神のさゝやきし。

内裡雛

男雛ただしき居ずまひに
おほとのごもり渡らせず、
女雛若うて白き面
闇に怖ぢたる春の夜を

小鼠走せてさかしげに
御衣の端を齒に咬へ
壇より下したてまつる。

女雛のみ手に尾の觸れて
あなやと強く振り放す、
鼠さわがず菱の餅を
[illegible]へこそは[illegible]りけれ。

[illegible]
悠々として出でたまふ、
後ろうかゞふ眉葉の
抱きすくめし綾がひじめ、
[illegible]の怪、まろみ提へぬよ、
そがみこふの肌らなるに
とものみ奴御階をよぢ
逆髪あげて心得貌、
さゝら堪山女の
殿上、花の嵐たり。

樂を停めて靜かなる
五人囃子はいとまあれや、
居黙りさめて忘りの
調べ召すと打ち出す
鼓の音鼕々たり。

夢破られて雛の主、
童女七つ燭を取り
かしこき眼、疑ひの
さなり女雛に力添へむ
眺かしはやらじと男雛の
御手を取りて据ゑまつる

[illegible]
[illegible]

沈默

夢の海、底に底にと
「沈默」のはてなき深さ
劫初より我が傍らに
侍ひて燭火さゝぐ。

燭火のしるべはあれど
行き得ざる我が「沈默」よ、
唇の强き衝動に
火は消えぬ、魂は浮びぬ。

海面のひろき限りを
唇の波こそうねれ、
波の穗の一つ一つに
根なし水よせかへるのみ。

また沈む「沈默」の海
ふり照らし、ふり照らしゆく
火の渦に、驚くばかり

[illegible]

「沈默」の海の底ひに
我が愛はあへぎて寄り來
我が魂の香の果實は
美しき形に現ず。

「沈默」の海の底ひに
なほ知らぬ「沈默」ありて
ああ遂に、言葉の力
滅ぶ日を眼前見ぬ。

葉

一言の葉を開くにも心より
生々とひらき出でたるこゝろよさ、
一言の葉のたましひのわづらひに
口ごもりて力なき葉は地に落つる。

活動に目覺めたる時は貝の葉を
蒼海の深きに探りはぐくみて
濃き油其葉に盛れば生命ある
くれなゐの潮、火となり燃ゆるらむ。

暗き日に慝する人の息の緒の
打ふるふ音と響とを目づけて
すきとほる眼と胸との愛しみ
戀ならぬ不調の我の影に添ふ。

わが言葉、空ゆく雲かなと時も
人の世に同じ姿はとどまれど
むかへば自然其時の表現を
表はさむ外に二つの姿なき。

けざやかに花匂する白日を
うらうへに素肌の人は理解られ
思を探らる詩言を落葉の
葉蔭に透かし見てしも怪訝あり。

霧降る宵

ひそひそと霧降る宵の
街の軌は遠のくすゐた
家と家竝に添ふ。
あきらかに鬧を寂聞ふ

街の灯の疲れしげに
消ゆる人、現るゝ人。

瞥見たる文字の象も
色彩も、ありと思ふ
さへしみる闇の深きに。

響きは彼方に消えて
大都會もの輕やかに
薄霧の底に沈みぬ。

我いつか濠に置けど
浮城は今や千尋の
霧の海かくれてゆきぬ。

火の色

深海の底に沈める
室の氣は更けに落ちぬ
靜なる人の寝息は
ほのめきぬ
聖しとふ

宵のまゝかがやき燃ゆれ
油吸ふ力をこめて
またゝくや火の葉はあへぐ

今外は曉闇の
星宮に殘れる光
うすれゆく眼路の極みに
見うしなふ。

薄ら明
光こそ地には下りざれ
室はなほ夜のさまして
窓帷の隙こそ見えね。

乾きたる炎の衰弱
終夜倦み疲れし色の
蒼白く燈火やつる
夜明前。

若き胸ふるき胸

胸突く坂
木の根、岩角

足觸り[illegible]
しづかに、深く
眠に入る、

[illegible]しげの
匂ひしたたり
[illegible]のあやかしさ、
奔る山の
おもしろさ。

[illegible]行の[illegible]
太陽に
[illegible]こそ下れ
ますます白き手に觸りて
ためらふよ。

何氣なく出す手と
何氣なく出す手と
觸るれば強き力ありて
岩の上すらかるがるし。

草の息吹ひ
木の息吹ひ・
息はずませて.

山[illegible]に
寄り[illegible]。

岩を踏[illegible]
ふる[illegible]と
ふと此處に
言葉絶えぬ。

さらさらと水音は
葉の上をながるるや、
叢の木の間の静かなる光
[illegible]のこゑ、鳥のこゑ。

こほろぎ

こほろぎが鳴く、雨と雫と。
暗い夜の
濡れた草の中に
たくさんのこほろぎが
高く鳴く、低く鳴く。
心も疲れたやうな
ものしめやかな雨の言ひより、

さびしさの[illegible]
床の下に
こほろぎ[illegible]、[illegible]鳴く。

闇にふたたび鳴く[illegible]
[illegible]、[illegible]しさ。
休む[illegible]
鳴くこほろぎ。
忘れてゐた[illegible]色の[illegible]を
わがわかしさ。

やんだやうな雨の雫が
枕にふしら、
もう一度は落ち
考へては落ちると、
寝入りかけた夜が
ぱつちりと眼を開ける。

しめじめと
丘を越え、野を越えて。
わが傍らに
歩みよる雨のさびしさよ
鳴くこほろぎの親しさよ。

かゝるとき、
こほろぎの吹鳴らす
銀色の笛聞惚れて
さまよひ出づる
さびしい姿を
つくづくと見る
あはれなうたの抱き心。

われは

われは歌はむと思はず、
わが心つねにうたひてあれば。
われは語らむと思はず、
わが心つねに語りてあれば。
われは動かむと思はず、
わが心つねに動きてあれば。
われは急がむと思はず、
わが心つねに休まざれば。
われは知らむと思はず、
わが心つねに一つなれば。
われは生きむと思はず、
わが心つねに滅びざれば。

一日

夜の熟睡より眼覺め
新しき一日に起き出づれば
われなほ生く。

われ嘗て死ぬと思ひし日もありしを
枝は伸び
花は散れども
われなほ生く
ああ日の光の美しきかな。

有り得ざるものの有るが如きわが一日よ。
何事の起るともよし、起らぬともよし、
ただ一日に生かしめよ
成長せしめよ。
地に立つ欅
一抱へにあまれども
こぼれたる實生の欅
土ながら掌にも載れど
みなわが一日のうちにあり。

心しづかなれば
道に落ちたる襤褸を拾ひ
石くれを除け
ただそれのみの一日にても
われなほ生く。

いつの時にても
ありしわが一日の
鳥の如く飛び去り
泡の如く消えゆきしは惜しけれど
惜しき一日に
われはなほ生く。

わが母

わが母は
マリヤの如く、觀世音の如し。

わが胸は
前の世に青く有りけるならむ。
わが胸は
現世にわれを生めり。
わが胸は
後の世にも生けるが如し。
わが胸は
なほわれを救はむとしたまふ。

山の歓喜

あらゆる山が歓んでゐる
あらゆる山が語つてゐる
あらゆる山が足ぶみして舞ふ、踊る。
あちらむく山と
こちらむく山と
合つたり
離れたり
出てくる山と
かくれる山と
[illegible]
高く空に[illegible]
雲海の上に聳え立つ山と
低く人の世の近くに横たはる山と
遠くなり
近くなり
あらゆる山が
山の日に歓喜し
山の愛に點頭き
今や
山のよろこびは
空いつぱいにひろがつてゐる。

海草の誇り

人間達の眼に見えない場所に生きてゐる誇り
いのちの根は海の底にもつづいてゐる。
海流の動揺は、地上の気流とかはりなく、
或る時は静かに
光線は幾十尋の深さにとどき
大小のひれふるもの
微小なるは動物とも植物とも分ち難い生物、
[illegible]一時の刺戟に依つて色は變る
紫色となり、紅色となり、深緑色とな
り、鳶色となり、
海中では、地上の光よりも神秘的にあざやかであ
である。
海藻、石蓴、海苔などは地上の[illegible]に近く、
海底の岩石には
すきまなく海草が生じ
海草は海流と共にふるへ、
枝も、根も、葉も、[illegible]も、青も、紫も
緑にそよぐ
しなやかに靡いて、はなやかに漂ぎ、褐色、黄
色、薔薇色が、更に暗色に、更に透明色に
海の色に染し
海中を行く太陽の色に染まり
その間を全身透明なる水母、烏賊などと、
奇怪なる古代の生物と、近代的に尾鰭の麗しい
た無数の魚貝類がゆききする。
いそぎんちやく、ひとで、かいめん、うみなば、
うに、かれむしの類が棲み心地よく棲み
たまにあらしに打ちあけられ
貝類も共に色あせてゆく海草の嘆き。

また海面には白日、銀の光をちりばめ
海水は揺々として静かに動いてゐるとき、
乙女が髪の毛をさばくやうに
風が新樹を吹き分けるやうに
海草の間をくぐり出でて
海面近く泳ぎ上る大魚の立派さ。

海はいま静まりかへり
境界なく、はてしなく、限りなく、
生物と共に海は生き
海潮には劫初よりの暗黒横はり、人間を超絶
し
海面は廣大に太陽を受け
深海ことごとく出現して
海潮の交響樂は一際高まる。

女の群衆

花が喘ぐ、花が苦しむ
蹂躙られて咲く、強く咲く
聞える、蒸發する
呻吟く、さゝやく

密集つた花、うづだかい花
壓搾されて滴る
性のなやみ、香水の滴り。

抵抗し、疲勞した
原色の昏惑
紫の渦卷、朱の沈澱
咲けば咲くだけ
あらゆる花の一つ一つ
壓へられ、搾られて
性のなやみ、香水の滴り。

蹈るほどに
動くほどに
しぼり、しぼり、しぼりぬく
性のなやみ、香水の滴り。

搾つても、搾つても
花はばらばらに
溶けるばかり
たわいない花瓣の
明るい色からも
暗い色からも
香を、香をと
一つにしぼり、しぼりぬく
性のなやみ、香水の滴り。

波のあと

波の引いたあと
砂に殘つた波のあと。

波のうねりもありのまゝ
濡れた砂地に
取り殘されたまゝかりが
潮の來るのを待つてゐる。

漂ひかねて
色失つた海草が
海の[illegible]も
潮の來るのを待つてゐる。

小舟から
離れたもの、
浮きもやらない流木が
潮の來るのを待つてゐる。

[illegible]が引いたあと、
[illegible]

鸚鵡

太平洋の海を越えてきた鸚鵡よ。
萌黄色の翼を收めて
お前は何を考へてゐる、
こゝろもち首を傾げて
しづかに
お前は何を聞かうとしてゐる。
あうむや、あうむや、
よくきたね。
遠い海を越えてよく來たね。
心配することはない
私たちは
お前を大事に、大事にして
守つてやる。
私たちの言葉が
お前に分らないのか、
何をそんなに不思議な顏をして考へてゐる。
世界が異ふのか、
こゝもお前の世界だよ。

お前が[illegible]考へても
[illegible]
でも[illegible]
誰もお前にわるくしないから
いつまでも考へてゐるより
早くよい言葉をおぼえてごらん。

球根

霜の降りた朝
球根を掘りだした。
日に照らした
水分が去つた
乾いた
干した魚のやうに
生氣が拔けた。

併し
球根は生きてゐる。
土塊のやうな
乾いたかたまりの中に
燃えるやうな色も
覺めるやうな色も
[illegible]
[illegible]
さてそれが何う隱れてゐるかと
何う見ても、かう見ても
呼吸もせぬ
土塊のやうな
乾いたかたまり。

雪炎

土手の片蔭に雪が殘つてゐる
雪の上を月が照らしてゐる。
月には色はない
雪にも色はない
月の光と
雪の息とがもつれ合つて
冷たい陽炎が立つ。

ちら〳〵と眩しい
白いやうな
青いやうな

紅いやうな纖い炎が燃える。

雪もよひ

ああ心持が好い
冷たい風だ、鋭い風だ、
雪が來るのだらう。
雪よ、降るならどんどんと降つて
俺の歩けないやうに積れ
俺は何う歩いて宜いか分らないんだ。

俺は熱して居るぞ
珍しく、ふしぎに、
魂が舞ひ出した。
どつこい
桐の木か
きれいに葉が落ちたな、
さあ分るだらう、此溫みが
血が通じるだらう。
桐の木、汝の幹に
紫の美しい酒がそゝがれてゐるよ。
放すよ
俺は[illegible]のやうに落ちるからね、
汝には通じる
俺の力が、俺の熱が
咲いてくれ、いつでもいゝから
花だらうが、葉だらうが
咲くなら俺の心のやうに咲け。

もう車庫へ歸つて電車も無くなつた
大通の中央を行つてやらう、
ああ風が冷たい、好い氣持だ。
街がひろびろと明るい
青い灯や赤い灯が
俺の通るのを知らぬ顏してゐる。
默つてゐる
また喜んでゐる、
抑へられたやうな家並が
高く低く眠つてゐる。

眠つてゐる街の中を
正直者が一人、
夜の眼を覺まして
涙の落ちるまゝに歩いてゐる。

ああ息が苦しい、
休まう、休まう、
眠れる扉よ、
明るい石階よ、
俺にも家があつたかしら
なかつたかしら
あつたやうにも思ひ
ないやうにも思ふ。
俺の身體を載せてゐるのは
冷たい石階だ。
血をそゝいでも、酒をそゝいでも
浸透むまい。
立つて行かう
それよりか、雪よ、降れ降れ
俺を埋めてくれ、
雪の中は暖かからう
柔らかからう
美しからう
何うしても雪の中でなけりや
此熱した魂は眠らない。



薄田泣菫篇

街頭

廣小路――日は暮ぐむ……
乞食兒の胡弓のすさび、
すすり泣く音に……そことなし
焼栗のほのかのにほひ……

ゆくさくさ、人ふりかへり
『ほ』と笑ふ、……胡弓のなげき……
砂ぼこりふと蹴立ち、
跳火して栗は汗ばむ。

焦げくさき實はふすふすと
爆ぜわれぬ……あなひだるさや、
販ぎ婦はつと鼻ひて
面顰む。……胡弓のたゆみ……

錢は落つ。――あな胡弓弾き
ほくそ笑み、はたほこりかに
栗食みて、かつ物言ひぬ、
頸顱のひきつるけはひ……

栗賣は糜なりき。

落穂拾ひ

葉は落ちぬ、
小野の榛の木、
灰いろの
影のただよひ。
落穂ひろひ、――
かたしびは
たゆげに動く。

求めあゆむ
『きのふ』の落穂、
ひろひしは
唯粃實のみ。
おちぼひろひ、――
とみかうみ
かつ涙ぐむ。

今日もはた
南へ、湖を、
夢の鳥

かへりぬ、ひとつ。
おちぼひろひ、――
うらぶれて
わが世は寂びぬ。

初冬の
日はわびしげに、
われとわが、
世を傷ぶかに。
おちぼひろひ、――
見入りては
また涙ぐむ。

蟲

初夏は酒甕の如、
泡だちて日は醱されぬ。
青みどり小野の木立は、
醉ひしれてまどろむこゝち。
うらわかき苑の無花果、
新葉の詩の下かげに、
[illegible]

無祥兒の蝨を産みぬ。

じじと日は油照りして、
汁澱むのみ。野は氣おされて
惱む間も、あなきしきしと
木食蟲、樹の髓を食む。

無花果の樹はかなしげに、
をとめさび、――思ひくづをれ、
葉廣なる掌面もたげ、
なに知らず乞ひ祈むけはひ。

諸香の空照りおもり、
啞蟬は氣づかはしげに
立ちすくむ日を、きしきしと
木食蟲、樹の髓を食む。

無花果の樹はくるしげに、
木膚には食まれの疵痕
騷擾きぬ。將たたゆたひぬ、
わが歌の音ぞ青じろに。

ふと人の足音とまり、
いぶせきて、また往き過ぎぬ。

午さがり、――きしきしとのみ、
木食蟲、樹の髓を食む。

無花果の葉は泣きしをれ、
青からび實は萎え落ちぬ。
蒂あとに生命は白み
しとしとと雫ぞ滴む。

木はなべて夢ざめぬ。日は
夕なり。あな無花果は、
こしかたの世を痛ぶかに、
見入りては噎しぬ。やがて――

もとせを刹那に醸みて、
古飲に醉ふかのさまに、
開き笑みぬ、夜をきしきしと
木食蟲、樹の髓食むを。

膃肭臍

「これはもと[illegible]提島の荒海に一と
[illegible]
[illegible]

もむくむやらなる[illegible]笑つとこそよよめ。
ただ眼の目は[illegible]も路辻の
[illegible]する[illegible]にたなら皆の衆、
北[illegible]の[illegible]は、昔に」と汗ばみし
た[illegible]一のやしたひ。」

路の[illegible]なみ姿びれて、
[illegible]しつつ[illegible]日向、——ああ海の主、
[illegible]肉の脊肉は[illegible]に灰じろみ、
黒血のにじみ垢づきて、かつ臘沸きぬ。

「これなるは流産の止め。」と喉の小舌
ひきつるけはひ、咳きて「あれなるは、また
おとろふる脊髄の薬、乾肉の
たけり。」と言ひて、北海のまぼろし夢む。

剔りくじるまだ見ぬ海の[illegible]、
小さ刀の刃にぬるる妖のしたたり。
獺の生干の色のなまぐさに、
ふとしも聞きぬ、鹹ゆき潮ざゐの音を。

つぶやきて人はも去りぬ。つむじ風
つとこそ躍れ。ほほけ立つ埃まみれに

[illegible]肉の[illegible]、——[illegible]に
心はまどふ、[illegible]を不安の[illegible]。

日ぞ正午、[illegible]する日の[illegible]、
[illegible]に、[illegible]、——
ひた[illegible]に[illegible]
[illegible]、[illegible]はつ[illegible]。

ああ大和にしあらましかば

ああ、大和にしあらましかば、
いま神無月、
うは葉散り透く神無備の森の小路を、
あかつき露に髪ぬれて、往きこそかよへ、
斑鳩へ。平群のおほ野、高草の
黄金の海とゆらゆる日、
塵居の窓のうは白み、日ざしの淡に、
いにし代の珍の御経の黄金文字、
百済緒琴に、斎ひ瓮に、彩画の壁に
見ぞ恍くる柱がくれのたたずまひ。
常花かざす芸の宮、斎殿深く
焚きくゆる香ぞ、さながらの八塩折
美酒の甕のまよはしに、
さこそは酔はめ。

新墾路の切畑に、
赤ら橘葉がくれに、ほのめく日なか、
そことも知らぬ静歌の美し音色に、
目移しの、ふとこそ見まし、黄鶲の
あり樹の枝に、矮人の楽人めきし
戯ればみを。尾羽身がろさのともすれば、
葉の漂ひとひるがへり、
籬に、木の間に、——これやまた野の法子児の
化のものか、夕寺深に声ぶりの、
読経や、——今か、静こころ
そぞろありきの在り人の
魂にもしみ入らめ。

日は木がくれて、諸とびら
ゆるにきしめく夢殿の夕庭寒に、
そそ走りゆく乾反葉の
白膠木、榎、楝、名こそあれ、葉広菩提樹、
道ゆきのさざめき、諳に聞きほくる
石廻廊のたたずまひ、振りさけ見れば、
高塔や、九輪の錆に入日かげ、
花に照り添ふ夕ながめ、

さながら、緇衣の裾ながに地に曳きはへし
そのかみの學生めきし浮歩み、――
ああ大和にしあらましかば、
今日神無月日のゆふべ、
聖ごころの暫しをも、
知らましを、身に。

わがゆく海

わがゆくかたは、月明りさし入るなべに、
さはら木は腕だるげに伏し沈み、
赤目柏はしのび音に葉ぞ泣きそぼち、
石楠花は息づく深山、――「寂寥」と、
「沈默」のあぐむ森ならじ。

わがゆくかたは、野胡桃の實は笑みこぼれ、
黄金なす柑子は枝にたわわなる
新墾の野のあらき畑、草くだものの
釀酒は小甕にかをる――「休息」と、
「うまし宴會」の里ならじ。

わがゆくかたは、末枯の草の葉ごしに、
[illegible]の入日の日さしひたひたと、
水錆の面にまたたくに見ぞ醉ひしれて、
姥鷺はさしぐむ水沼、――「歎かひ」と、
「追懷」のすむ鄕ならじ。

わがゆくかたは、八百合の潮ざゐどよむ
遠つ海や、――ああ、朝發き、水脈曳の
神こそ立てれ、荒御魂、勇魚とる子が
日黑みの廣き肩して、いさ「慈悲」と、
「努力」の帆をと呼びたまふ。

金星草の歌

そのかみ山の一の日に、草木はなべて、
　ああ金星草、
色ゆるされの事祝にたみさかゆるを、
　ああひとつば、
ひとり空手に山姫の宣をこそ待て、
　ああひとつば。
春は馬醉木に蝦夷菫かざしぬ、花を。
　ああひとつば、
裝ひ似さるうれたさに、宮にまゐりて、
　ああひとつば、
願へど、姫は事なしび、素知らぬけはひ、
　ああひとつば。
夏は山百合、[illegible]薔薇香にほのめきぬ、
　ああひとつば、
匂ひ香なきにうらびれて、一日は洞に、
　ああひとつば、
嘆けど、姫は空耳に片笑みてのみ、
　ああひとつば。
秋は茴香、えび蔓實ぞ色づきつ、
　ああひとつば、
素膚の性を恨みわび、夜を泣き濡れて、
　ああひとつば、
萎ゆれど、姫は目も空に往き過ぎまし ぬ、
　ああひとつば。
やがて葉は散り、實は朽ちぬ。冬木の山に
　ああひとつば、
獨り居れば、[illegible]の木で思ひかへたる、
　ああひとつば、
世は[illegible]とわが[illegible]るたこそ、在り[illegible]、
　ああひとつば。

藍は青ざめ、今日もはて、香をも衰へ、
ああひとつば、
何ゆゑ、[illegible]、[illegible]に
ああひとつば、
この日よりこそ、[illegible]、
ああひとつば、

時のつくのひ

時はふたりをさきしかば、
また償ひにかへりきて、
かたしき[illegible]に、[illegible]
うまし涙を湧かしぬる。

くちづけ

今朝あけぼのの浦にして
われこそ見つれ、面ほでり、
濃青の瞳子ひたひたの
み空と海の接吻を。
信や青空、われや海、

ああ[illegible]、[illegible]に
[illegible]、[illegible]の
[illegible]き海も頼ひしか。

大葉黄すみれ

人待つ宵を、[illegible]、
大葉黄花[illegible]、
[illegible]、
物さびしさの身にぞ沁む。

花とをみなの持てなやむ
悲びな来そ、天つ日の
なかなかし[illegible]と日、
今日に酔ふなる身のふたり。

はこやなぎ

かかる夜なりき、白楊
うるみ色なる月かげに、
飽かず別れて立ちかへり、
抱きあひてしは妖きしが。

[illegible]

小菅女

なかし思へばさまざまな
それおもひで、[illegible]
しづかな今[illegible]、
どんな思ひ[illegible]と、
さって、いよ[illegible]、
かつら女。

「このうつし世の世わたりは、
どんな嵐が吹かうとも、
心をつよく羽ばたいて、

空のあなたへ飛ぶこ[illegible]と、
さつさ、い[illegible]こか、
小雀女。

鳥のことばは聞きながら、
なほ下心とこやらに、
[illegible]を[illegible]い[illegible]て、
[illegible]る[illegible]、
[illegible]、いよこの、
かつら女。

公孫樹下にたちて

1

ああ日は彼方、伊太利の
七つの[illegible]古跡や、
[illegible]柱に[illegible]えて、
石床[illegible]回廊の
きざはし狭に居ぐらせる
青地襤褸の乞食らが、
[illegible]も[illegible]て[illegible]、
[illegible]
[illegible]む。

2

ああ日は彼方、北海の
波の穂がしら爪だてて、
ぬすみに[illegible]子の
氷雨もよひの日こそ来れ、
幸は足らひ、と直むきに
南へかへる鳥よとて、
破れし[illegible]を照らすとも、
ここには久米の皿山[illegible]、
嶺ごしにさす影を、
[illegible]にさ[illegible]へる銀杏の[illegible]、
向脛ふとく高らかに、
あをきみ空にそりたる、
見れば鎧へる神の子の
陣に立てるに似たりけり。

ここ美作の高原や、
国のさかひの那義山の
谷にこもれる初嵐、
[illegible]も日高み[illegible]に、
[illegible]銀杏の[illegible]、
あな[illegible]、
[illegible]手力[illegible]、
戦きほひの角笛を、

木木に空門に吹きどよめ、
家の子あまた集へ来て、
黒尾峠の懸路よ[illegible]、
風下小野のならび田に、
穂波たゞき[illegible]まで、
勢あらく攻めよれば、
あなや大樹のや[illegible]の
黄金の矢束[illegible]に、
諸肩つよく揺ぎつゝ、
[illegible]しきもの[illegible]に、
滅びはつべき[illegible]かと、
あざけり笑ふよもしや、
矢種皆がら[illegible]たむけて、
射[illegible]なる[illegible]に
射ずくめられし[illegible]は、
またも新手をさきがけに
雄誥[illegible]手[illegible]の
[illegible]、
頭は[illegible]、
因幡ざかひ[illegible]、
晴れ渡りたる[illegible]を
南へ[illegible]、
[illegible]に、
下なる[illegible]。

なじかはそのみ戀しさと、
心うれひに堪へずして、
瞳みがちに急ぐらむ。

黄泉の淵なる戀人に
生命の水を掬ばむと、
七つの闇の路守に、
冠と衣を奪はれて、
「あらとこの邦におりゆきし
生身素肌の神の姫、
ああ爭ひの七八日、
銀杏は征矢を射つくして、
雄々しや空手眞裸に、
ほまれの組の諸肩を、
さむき入日にいろどりて、
み冬の領にまたがりぬ。

3

ああ名と戀と歡樂と、
夢のもろきにまがふ世に、
いかに雄々しき實在の
[illegible]はいつの神明ぞ。
夏とことはに絶ゆるなく
青きみ枝にかへすとも、
冬とことはに盡くるなく
つれにその葉を蝕む去り、
さては八千歳常木の
誇の節は衰へずして、
戰ひとはに新らしく、
にた勇まし／＼繰りかへる。
銀杏よ、汝常磐樹の
神のめぐみの緑葉を、
霜に誇るにくらべては、
いかに自然の健兒ぞや。
われら願はく獨兒の
乳のしたたりに媚ぶる姫、
心よわくも平和の
小さき名をぞ呼ばざらむ。
絶ゆる際なきたたかひに、
馴れし心の驕りこそ、
たがき吾世のながらへの
花ぞ、價値ぞ、幸福ぞ。
公孫樹よ、汝のかげに來て、
何かも知らぬ睦魂の
よろこび胸に溢るるに、
許せよ、幹をかき抱き、
長き千代にも更へがたの
刹那の醉にあくがれむ。

おもかげ

花薔薇咲くなるみぎはに、
胡蝶の子の日向ばこまで、
花びらのこぼるる日なか、
はかなさの夢こそさむれ。

現し世のをはりのゆふべ、
死の黒羽こそろとおちよ、
おもかげの夢さながらに、
むれの様あまつみ國へ。

[illegible]

新らしき日[illegible]どちなき
霜ふる[illegible]のまだき、
乾反葉しらむ蕪根に
撒こ[illegible]つ[illegible]鼬鼠。

[illegible]
[illegible]

[illegible]小路をあゆみきて、
見しは光か、やがて死か。

●

今は六十日くらやみの
穴倉口に[illegible]、
ときどき啼き、――大慈悲の
[illegible]の御かげを見なしに。

けにや死こそは波羅密の
岸の夜あけの初ぞかし、
いまはただけふ闇仕の
時にし望み、――いと悲れ。

つむじ風

午過ぎて、日はわかしげに
[illegible]にさゐる、
[illegible]はそが緑れし―
たゆけにも[illegible]ここち。
ほくき来て、男女は
夢の間に[illegible]、[illegible]に
[illegible]の[illegible]て、
[illegible]人の行を

思ひいで、はたたつかしき、
俳優は見ぬ代の様に
酔ひほれて見とるここち、
物賣はしづかに喋み、
乞食女も忍びにあゆむ
午さがり、――日はわりた[illegible]
静心知らず乱れに、
つむじ風ふと思ひたち、
そそめきてかしき立ちしぬ。
乾かわきし頭は胸さわき
けばだちぬ、白楊の落葉
そそくさと先走りしぬ。
土ぼこり、塀蔭はそそけて
蝶形にまわりぬ、舞ひぬ。
故知らず、はた何知らぬ
時めきの、さとこそ渦に
くるめきて爪立ちあがれ、
程心の暇、[illegible]のしらでな
ほきかなの人あたふたと
物音のそわかしさかな、
俳優はまりぬ。――白き
[illegible]のたまゐを――たたと
ふためくす[illegible]き女ふたり。
ふと夢に[illegible]て

鳴くかこ[illegible]家の
招牌こそ動きぬ。――ひとり
とり[illegible]なき[illegible]、かつと
往きすぐる若き唖な女、
あと[illegible]で、ひとこえとまれ、
ふくら脛[illegible]し[illegible]れ、
[illegible]はにじみぬ、朱に。
見ず知らぬ人の誰彼、
はしり寄るひとりは青ざめ、
[illegible]の使な女、
[illegible]に生肌をこそ
噛みつあと、はた呟けり、
肌ざへの[illegible]なれば、
[illegible]なる[illegible]の保健に[illegible]
[illegible]あ[illegible]、あな[illegible]女は、
肉[illegible]して[illegible]あの時
われながら不可思議の世に
見ぬ[illegible]す、まこと見えず、
この日まで[illegible]
[illegible]の[illegible]を心に、
[illegible]の[illegible]は、
そそくさと[illegible]、
[illegible]に[illegible]、――
[illegible]、[illegible]

[illegible]

鶴の[illegible]

夕づつは[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]、
[illegible]にも夕顔[illegible]けり。

産土の祭は暮れぬ、
賤が家の厨には、いま
助枝窓ほのにあからび、
夕餐の宴ひらきそむらし。
興津姫せはしなの夜や、
夕顔は闇にしらみぬ。

戸は開きぬ、——つと片あかり、——
黙き女はかくれつ闇に。
ひしひしと焼火はしりて、
寄鍋の泡咲くけはひ。
たまゆらの[illegible]に揃えて、

[illegible]

日は[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
夕づつの[illegible]、
夕顔[illegible]。

窓につと火影[illegible]。
[illegible]、
弟むすめ、笑みのな白みに、
酔ごゑの濁もまじりぬ。
心安の日にはありきと、
夕顔は昨日を思ひぬ。

夕まよひ、六部のひとり、
足悩みて外面を過ぎつ。
闇は、いま[illegible]食む・まに、
干割戸に爪たちよれり。
童女まひ、つとうなだれて
夕顔はまた吐息しぬ。

青あかり弱くあをちて、
[illegible]
童泣き、かつくぐもりて、
[illegible]
[illegible]、
[illegible]

[illegible]、——[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]、
夕顔は呻吟びぬ、闇に。

ほとほとと訪ふけはひ、——
憎はまたもこぼれぬ。
ほくそ笑み、——獣のひとり
寝おびれてかつしやくりぬ。
わななきて[illegible]すなかに、
夕顔はつと[illegible]め

ほとほとと訪ふけはひ、——
童泣き、——母は寝ざめぬ。
ふと海の香をおもひて、
物怖に[illegible]こそすれけ。

夕顔の花はくづれて、
香のみ残りぬ、弱に。

爐中の人

更くる夜の厨のさむさ、
冷えとほる灰にもたれて
　火吹だるま、
翁びしまみの煤ばみ、
かりそめの火をはぐくみぬ。

ほのかなるぬる火のぬくみ、
胸の[illegible]、
　火吹だるま、
初立ちし生命の日かた、
面はゆく火脣を吹きぬ。

[illegible]心地、
[illegible]ぬ。
　火吹だるま、
[illegible]心の[illegible]、
[illegible]。

火移りの火は慕ひ合ひ、
たはれてはまた火を孕む。
　火吹だるま、
面ほてり汗ばむけはひ、
喘ぎつつかつ息づきぬ。

われとわが火は火を焼きて、
火ぞ燃ゆる——生のあくがれ。
　火吹だるま、
酔ひ伏しぬ、酔のたのしび、
さあれ、また刹那の痛び。

なべてみな死にゆく夜半を、
黄金なすほのほの宮に、
　火吹だるま、
[illegible]世を夢み、
[illegible]また[illegible]に倦みぬ。

夜は更けつ、沈黙の闇に
[illegible]る[illegible]の嘆き。
　火吹だるま、
火は消えつ、灰にうもれて、
[illegible]黒に消えぬ。

海のほとりにて

[illegible]なるみ[illegible]、[illegible]なる[illegible]、
ああ身ぞひとり、
入波ゆたにたゆたひて
ゆふべとなりぬ。

氷雨の海の[illegible]は、
椰子の實熟るる
常夏かげの[illegible]なて、
胸さわぐらし。

沖の遠鳴、潮の香、——
ああ[illegible]こころ、
いつくは知らず、[illegible]の
[illegible]こひし。

わが世は知らぬかなたへと、
日に、また夜に、
あこがれま[illegible]心の
[illegible]力の[illegible]
一[illegible]は[illegible]も、

恩の雨また、
常磐にしもあらまほし、
わが心のあこがれ。

ささめ雪

夕暮、
小野さへ、——狭霧に
——ここに——
日は暮れまかりぬ。
左見右顧、
あな細雪。
常磐に
音もあらなくに。
ものうけの
旅や、はつはつ。

とかくして、
榛實の殼、
また乾反る
伏葉のたゞに。
小木の枝に
鵐啄ふや、——

あな、ここは
悲びの邦、
鈍色の
住家ならまし。

ささやきつ、
また吐息しつ、
雲片の
歎きよ、——落ちて
葉に、石に
兇ひぬ、倦みぬ、
またたきて、
つとこそ消ぬれ、
いささかの
生命か、——濕ひ。

夏の朝

かた岡に
日は照りぬ、
男木の枝に
鳥うたひ、
いさら水
笑みまけて
面はゆに
野こそ消れ。

朝踏ます
風の裳に、
草かた葉
さゆらぎて、
しづれ散る
露や、げに
玉ゆらの
瓊音すらめ。

雲は、いま
しろたへの
羽を伸しぬ、
朝ぼらき、
海原に
帆をあぐる
蜑舟の
ふみえや。

ほのかなる
しろ咲ひ、

あな朝か、
昔は青竹に
かた寄みて
つゆ消えつ、
一日はすでに
牧に[illegible]。

海のおもひで

夕[illegible]、――こゝぞ[illegible]。
[illegible]に[illegible]
[illegible]に、――[illegible]、あ[illegible]
[illegible]に[illegible]、

[illegible]、[illegible]
上葉たゆけに傾きて、
昨日はともに葦かび[illegible]
若き日をこそ歌ひしか。

あな火ぞ點る夕づつ、
葦間にひたる影青に。
消ゆとは知れど、さこそ、わが
人のまみをば思ひづれ。

鴫の浮の

夏なかの[illegible]は過ぎぬ、
くたら[illegible]の[illegible]、
[illegible]は[illegible]を[illegible]して
はて[illegible]、[illegible]。

[illegible]、[illegible]、
[illegible]
なつ[illegible]に、
水[illegible]。

水[illegible]、
[illegible]、
末枯や、――さてしも齋場、
一もむろに鴫は滑りぬ。

商人の沓のおとにも、
[illegible]じろみ、西隠す兒の
[illegible]りかへり、かつ涙ぐみ、
[illegible]がくれにつとこそはめ。

[illegible]の夏を夢みて、
[illegible]、
[illegible]、[illegible]
常[illegible]の[illegible]。

見ず、[illegible]、――今は[illegible]、
[illegible]
かな[illegible]、あな[illegible]、
ひな[illegible]。

望郷の歌

わが故郷は、日の[illegible]の小河に[illegible]、
在木の枝に[illegible]、
物詣する[illegible]、
桂をとめは[illegible]に[illegible]、
小網の[illegible]、
櫂の音[illegible]、
瑞木の[illegible]、
技の手[illegible]、
かたた[illegible]。

わが故郷は、[illegible]

[illegible]の朝ごとに霧にしめる[illegible]、
[illegible]の日が[illegible]なる[illegible]の[illegible]下[illegible]に、
[illegible]、[illegible]、
[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]、
また水[illegible]の[illegible]、日ざ[illegible]り[illegible]の
[illegible]、[illegible]の人こそは、
[illegible]の[illegible]、[illegible]打ち[illegible]の[illegible]。
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、[illegible]の若葉なるかへる田中路、
[illegible]歌に[illegible]なる牛はかへりゆき、
日は今終の日移しを九輪の塔に見はるけて、
静かに暮るる夕まぐれ、[illegible]散り透きし常葉樹は、
さながら老いし斑鳩女の、[illegible]に被衣引延へて、
物[illegible]かしきたたずまひ、[illegible]間に灰めく、夕月の
夢見ごこちの流眄や、鐘の響の青びれに、
札所めぐりの旅人は、すずろ家族を忍ぶらむ
かなたへ、君といざかへらまし。

わが故郷は、朝凍の真葛が原に楓の葉、
そそ走りゆく霜月や、専修念仏の行者らが
都入りする御講凪ぎ、日は午さかり夕越の
路にまよひし旅心地、物わびしらの涙眼して
[illegible]、うら寂しけの日短かを、
[illegible]、ものの香朽ちし経蔵に、
[illegible]、[illegible]りの御経の文字や愛しれ
て、
夕[illegible]の明らみに、黄金の岸も慕ふらむ
かなたへ、君といざかへらまし。

石彫獅子の賦

一

童子に問へば石工は
木かげに夢を結びぬと。
入りて小闇き仕事場に、
刻みさしつる唐獅子の
[illegible]き額をかきなでて、
誰ぞ、もの思ふは、ひそやかに。

朽木の棚にすゑられて、
[illegible]くすぼるるあら彫りの
豕、狗児、野の狐、
とては雄[illegible]のむらがりに、
こはめざましき誇りかな、
日かげにぬるる獅子の影。

[illegible]に[illegible]かけて、
[illegible]、その[illegible]、
[illegible]、[illegible]にまきて、
[illegible]の潮。
[illegible]、力男が
[illegible]の姫。

念[illegible]する石工の
[illegible]える
[illegible]は躍り、
[illegible]なる[illegible]は、
いまは[illegible]花ふむも
[illegible]はいさめまじ。

心がまへのいかにぞや、
獅子彫られぬ唐獅子は、
光りを知らぬ盲目の身、
鼻かぐはしき香を嗅ぐも、
いまだ前肢ふみあけて、
花野の路はしだかじな。

[illegible]の手まだく捨てられて、
御苑の夏のあけぼのや、

緑したたる木のかげに、
巨人の如く立たむとき、
雄姿いかに、背に伏して
しばし想像にふけらまし。

2

汝の王者ぶりたたへられ、
黄白き石に囲まれぬ。
野より、山より、林より、
つどへよ獣、列なりて
膝の前にひざまづき、
弱きを[illegible]て[illegible]たれ。

おほき靈くだりきて、
黄白を石に囲まれぬ、
野より、山より、林より、
つどへよ獣、列なりて
その光輝に浴み浴みて、
膝の前にひれふせよ。

無上の權威あらはれて、
黄白き石に具せられぬ。
野より、山より、林より、
つどへよ獣、列なりて

王にささぐる燔祭の
聖き火盤をととのへよ。

斑の牛も羚羊は、
ふかき痛手に甘んじて、
ほのほの中に身を投げよ。

誇るべきかな、犠牲の
高きほまれは汝にあり、
羨む群ぞ愚たる。

見よ犠牲はそなはりぬ、
獅子は額にたて髪の
ながき流れをふるはせて、
あな起ちあがる、「戰闘と
勝と力の權化なり、
伏すよ」と呼べば皆伏しぬ。

さかんなるかな、その言葉、
「神は死ぬめり永久に、
人は靈のごと強からず、
われは王者ぞ、萬有の
値の源ぞ、頓なと
闘ふ胸の主人なり。

ああ運命の呟きをも、
眼ひらきてながめ入り、
胸わななかぬ雄心の
若き勇氣に溢れたる、
勝利のおもひに漲れる
この身この世に何の死ぞ。

絶ゆることなき永遠よ、
われは汝の伴なり」と、
聲は喇叭の音に似たり。
時に默止はやぶられて、
たかき讃美と服從は、
雷のどよみに現はれぬ。

3

いま想像の翔たゆむ。
見れば唐獅子日を浴びて、
ふくよかにまた靜かなる
すがたいかなる誇りぞや。
石膏ながく横はりて、
紫となりなむは幾千歳、
ああ[illegible]は支配せよ、
とはの生命ぞ汝にあり

郭公の賦

民集ひて凝鑄め、
春安かれと祈る日、
なぎつる白雲に[illegible]の
遠く鳴るを聞く如く、
あるは憐みの眞夜中、
望みの光りを得つる[illegible]く、
今かすかに、朗らに[illegible]
み空に鳴けるは何の[illegible]ぞ。

あな來たりやほと[illegible]す、
遠く、遠く、また[illegible]く、
[illegible]いとなふその音色に、
徂ぎ[illegible]、
車駕はする佐保姫の
はかなさ別れに恨み[illegible]う
血に鳴く鳥の音なら[illegible]、
いづれの胸より聞かれ得べき。

[illegible]の[illegible]を、
[illegible]にたと[illegible]、

[illegible]

みよ、[illegible]葉さ[illegible]る夏[illegible]うた、
權威[illegible]にさ[illegible]んに、
快樂[illegible]過ぎ去りぬ
知ら[illegible]追憶[illegible]こる[illegible]とに、
悲みいよよ新たに、
なが歌[illegible]すます清しからめ。

野[illegible]の若樹の葉が[illegible]、
根白蓮の笛吹きて、
[illegible]はみ[illegible]呼ばふ[illegible]、
なが音夕に聞きては、
[illegible]たる世もみだれ[illegible]、
そことしもな[illegible]。
さて[illegible]何の[illegible]、
悲歌は一の誇りなれば。

快樂、希望、莊嚴の
とき[illegible]人[illegible]、
なが[illegible]あまりに[illegible]し[illegible]や、
われ[illegible]ひ[illegible]、
[illegible]とに顯らひ、
[illegible]來る鳥の[illegible]に、
言ひ知らぬ[illegible]と、
[illegible]よりも深きこころ聞きぬ。

あな[illegible]きたりやほととぎす、
なが[illegible]再び[illegible]れず。
想像[illegible]遠く[illegible]するところ、
靈魂[illegible]とはに死なめや。
寂し[illegible]な空の上、
野こえ、山[illegible]、[illegible]、
[illegible]、[illegible]、
い[illegible]行り[illegible]。

破甕の賦

火の[illegible]も[illegible]に、
古[illegible]。

人のかこつ冊褒を
甕に身にも感ずるや。

古き甕は碎けたり、
また額圓き童女の
白き腕に卷かれて、
行かめや、森の泉に。

くだけ散れる片われに、
窓より落つる光の
靜かに遊ふを眺めて、
獨り思ひに耽りぬ。

潟く日蔭か汝を
花の園にも交へめや。
くたびる燃ゆる折々、
掬みしは吾が生命なり。

清きものの脆かるは、
いにしへ人に聞きにき。
汝は、清かりし、
青き葉は[illegible]
[illegible]

清き路を踏みし人、
そらの上を慕ふ人、
運命甕に似ざるや。

古き甕は碎けたり、
壞片を手に拾ひて、
心變ひにえ堪へず、
暮れゆく日をも忘れ[illegible]。

村娘

春ゆく夕、白藤の
花ちる際に身をよせて、
泣くは行末、さだめなき
世のならはしを思ふもの。

知らじや、薄き花びらに
春の日を燒く香あり[illegible]
見じや、か細き蔓莖に
かたへをあぐる力あ[illegible]。

路[illegible]人、
しばし木蔭に立ちよりて、

冷たき胸を叩く手に、
など若き身を抱かざる。

誰に語らむ、和肌に
指をさはればうとましや、
潮に似たる胸の氣の
浪とゆらぐを今ぞ知る。

春經てさぶる酒甕には、
色濃き酒の湧くものを、
瘦せし腕に血も冷えて、
苦き淚をぬぐふかな。

夏きてまたも新らしく
薄ら衣服を裁ちきれど、
もろき命をおもひみて、
たたむに惜しき染小袖。

神よ情ある人の子に、
昔日をゆるせ、ゆく春の
[illegible]
[illegible]

山本露葉篇

流星　静なる日の歌　五月雨



流星

そは[illegible]を結びたり
かの七夕の夕まぐれ
[illegible]らつり行く中空に
星の光りを見るに似て

星の光りにゆあみして
たくみの闇に遊ばずは
などうるはしくしたはしき
戀のおもひに酔はるべき

空しきわざをすてしより
いくそのうれひ身をさりて
はれてものなき蒼み空
[illegible]の光りも眺めしよ

夕逍遙の小野川べ
木々の青葉の色ふかく
しづ枝したゝり地におちて
匂ふみどりは白露か

葉さきにたへてその露の
あまきしづくをくみしとき
さやける星のたゞ一つ
青葉の森に流れしが

いつもおもはむ深みどり
あふぐみ空に群星の
またゝくかげはしづかにて
ここにさゝげ[illegible]づつ

きだめの戦の乳房より
流るゝにいを血に替へ
神風吹きなす角笛に
ふたゝぶこし[illegible]ふて

身は[illegible]の葉のそれならど
夕べ流星見しことを
わかき血汐のわきたちて
天にこたへのあふるごと

あゝかの星を戀しけれ
星を思へば身はさらに
運命のしもとのがれいで
闇にさまよふ心地すに

ゆるせ流星なを戀ふは
いのちを戀ふにひとしきに
なれ天獸をもたらして
吾れいのちあり朝ぼらけ

靜なる日の海

ふかどよむ海かこは——手力がこは海か
漂蕩の白流
さやさやと鳴り來てはたち開く波の瞳
けざやかに目覺めたり
くら海のほの白み、伏し沈む[illegible]しさを
ひたひたと搖がしぬ
朝やげに浮く花藻、貝の葉もなみま[illegible]て
碧瑠璃の潮よそひ
ほのぼのと日をまとひ、[illegible]の立姿
[illegible]
[illegible]
[illegible]

底凪げる海の胸濃情のどよめきや
夢みるか、淡々と
夏の日のいきざしも朝じめるものの香も
戀うて來ぬ——その胸に
法音の海の音に吾が靈をささへかし
日は照るや[illegible]くや
淺綠、深[illegible]、白光や、金色や
吾が生を埋めかし

五月晴

さと降りて木々の葉を鳴しつゝ、[illegible]て又
蕭やかに雨の粒。
日は白く漂ふて、雨けぶる林へと
ほのかにも靡きけれ。
枝はみな淺[illegible]ながら潤うて、
みづみづと若やかに。
丸らなる雨[illegible]の[illegible]銀の緒を曳きて、
半より晴やかに。
丈低き[illegible]、[illegible]は濕り、群立を

晝の雨けざやかに、
かたかたはふと明く——微かにも狭綠の
匂ひこそ流れたれ。
青草に光は散りて夢よりもほの白く、
小さき花生れたり。
つと飛べる黄なる鳥、そは[illegible]か、
ほがらかに鳴けよかし。
日はかげり日は照りぬ、銀杏樹の高幹を
まばらにも光る雨、
大空を晝の日は濡りて五月晴、
木々の葉はかゞやきぬ。

小山内 薫篇



[illegible]

君が家

[illegible]

高き憂は知りがたし
たゞ憂ある君知りて
あはれに堪へぬわれが手に
あぐるを許せ愛のほつれを

小野のわかれ

おぼろにゆらぐすゝきの穂を
ふたりして見したゞそれのみ
いづこより來て逢ふや狭霧
見る／＼朧るゝその嘆きよ

ゆふべの霧に君の姿
ゆふべの霧に君のこゝろ
神のつゝむにまかせおきて
おぼろにおぼろに見失ひぬ

ところ名知らぬうらみあるも
水よき川は忘れがたし
さりや夕のさ霧こめて
悲しやたがれの行くへ知らず

あゝこのわかれ永世なりや

すがらむ袖の絲も消えて
目白の森に鳥啼けど
風寐るやどりを告ぐるならず

なぐさめありや地をのぞめ
たりびてみのる黄金の穂も
來む年逢はむすべをなみに
きらめく利鎌を泣きて待つよ

なぐさめありや天をあふげ
運命の風の吹くがまゝに
飛びわかれ行く雲のあゆみ
むらさめ含みてたどりたどり

あゝこゝに逢ひこゝに別れ
またこゝに來て君を見ずば
其日のこゝろ今日のこゝろ
胸なるいたみはおのれひとり

君なき寒を知れるならば
身にひきしめて今日忘るな
すゝきがうれのひと字に
胸なるわたつみわれ亂れむ

あゝ君去りて天つ風の
人や隔つる暮ひけば
のこるはひとりわれとすゝき
嘆くにかひある友もなしや

すゝきもわれに同じこゝろ
わきも海に同じおもひ
あゝ草と人ならびつゝも
あゝ草も人も共にさびし

あゝ君去りて天つ風の
あふ瀬のなごり地を吹きて
この日の思消さむめぐみ
そゝさへ甲斐なや胸の谷間

おもひは來てじすゝき原の
うれよりうれと君の行くへ
まなこにたどる路のはては
血しほぞ燃ゆらむ西のみそら

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

狂人の歌へる秋の歌

僧の頭剃髪しゝと
耳を遠にして手をは
霜げれたく家を吹す
あはははははは
をかしの秋や

松の樹の根の草可愛やと
松の葉あつく苔きにしを
雨は腐りし葉のこかげ
あはははははは
をかしの秋や

薄、揺くとひたすら思ひ
走りて往りて縋りしに
薄、抱かで手を切りぬ
あはははははは
をかしの秋や

芋の葉すべる白露吹へば
にがき泥ある香偏り
[illegible]に向ひて[illegible]を叩く
あはははははは
をかしの[illegible]

柿の甘きに小石を投げて
食ふにはあらず地に落し
柿の滅亡に手をたゝく
あはははははは
をかしの秋や

伯労の言葉のたゞ惜し聴き
木の葉をふるふわが聲に
鳥は東に逃げ去りぬ
あはははははは
をかしの秋や

小指噛み切り小指をふれば
血汐まじらふ秋の水
刀に似たり秋の水
あはははははは
をかしの秋や

蟲のもろ聲楽しや月夜
花を枕に一と夜寝し
あゝ[illegible]
あはははははは
をかしの秋や

花野過ぎれば花野の[illegible]
[illegible]手をとりて
[illegible]を何と聴く
あはははははは
をかしの秋や

亡弟

はらからと人間はど
おくつきと答ふべし
はらからの往たれば
わが胸も冷えわたる



蒲原有明篇

歸港

遠方、八重潮にして、
夏はまた二十字は燃えき、
そのうかるさまや、幻燈、
帆の崩をたゆみなむすたれ、

常夏の島を繞り、
かへるけさ黄波折ぞも、
水手は、今、眼をあけば、
光惡しきこの港入り。

穢代と蔑すとは、あはれ、
濃の旋頭に、頓なに、
冬に驚き甲宵、白帆、
くさぐさの奇しき器。

大人の吹酒、麝香水、
綾衣を飜かしてはする。
さるからに、何のあやかし、
績絵は、今、喘ぎはためく。

はらはると齎らし來つる
常滑の蒼波、今宵、
失はれ果つとも知らで、
あくがれて人を待つらむ。

蒼びきの帰は背さめ、
江の波も暮をゆくなべこ、
……に……を斃そ、
兆惡しきこの港入り。

滅の香

わが胸の奥なる聖所を
誰人か尋めて知るべき。
實に僞と眞の面は
吝嗇もいつしか權せて、
このかたの業は虚無を
金粉の壁にぞ作る。
「滅の香」そ、ひとり闇でて
ほの暗き一室を領す。
ここにこそあれ、現代しかけに
湧き立つ愛の酢多、
背に蒼ね作きさびれれば、

[illegible]田[illegible]にすむ[illegible]の[illegible]も
[illegible]の上に浮かびただよふ。
ある時は、[illegible]
[illegible]の面[illegible]かし、
[illegible]を[illegible]の射[illegible]に、
[illegible]に[illegible]。
これは[illegible]の[illegible]なる[illegible]、
ただ[illegible]に[illegible]こそ、
その外に[illegible]なかりき。
ある時は、[illegible]の白牛、
繋がるるさまにぞ映れ。
朱の血は迸り出で
肥太り[illegible]きたる
その[illegible]を[illegible]に染めぬ。
いかなる[illegible]の場か、
人影はいづくにもなし。
ある時は、これ何事ぞ、
正眼にてわが上に見る
愛慾の深き傷痕、
蛇の鱗なしつつ
吹けるしが姿を、
今はとおもふ間もなく
幻は滅え失せにけり。
げにも彼の獵夫に追はれ、

[illegible]の大[illegible]も
[illegible]るるおもひのごとくに、
[illegible]
年しきは[illegible]
[illegible]みな[illegible]
[illegible]たるかにして、
[illegible]に[illegible]にありなし、
[illegible]は、
前生はすでになつかし、
現世のあまりに[illegible]く、
その「[illegible]」[illegible]しかる時、
宿世をば現に[illegible]ぎて
人間の苦惱を忍べ。
物は皆化現の[illegible]し、
「默」の華、「寂」の妙音、
またさらに寝もとどめぬ
「空相」の摩尼のまぼろし。

朝なり

朝なり、やがて川筋は
ほのじらめども、夜の胞を
[illegible]び徘徊るくぐもりに、

[illegible]に[illegible]上[illegible]
[illegible]
朝なり、[illegible]の
[illegible]、
[illegible]の
きざし[illegible]くも[illegible]は、
[illegible]

見よ、流るる[illegible]、
核子、[illegible]、[illegible]、
滅えもたごめる[illegible]の
絶間を[illegible]一[illegible]、
何を求むる[illegible]ふ。

また此方には[illegible]なく
黒ずみたる[illegible]、
人目ははばかる[illegible]の
ひそめきあひて、[illegible]やに
渡れば軋む橋の[illegible]。

水は濁れり、蛇の
文にうごめき、――[illegible]綠り、
瑠璃の端ひかり、碧よどみ、

揚場の杙にまつはりて、
蜿り色めを溢し[illegible]、
青[illegible]い[illegible]——また、
[illegible]ざ[illegible]人[illegible]。 乙巧の
[illegible]手。——魚[illegible]押[illegible]——
とては[illegible]く
[illegible]る船[illegible]。

[illegible]き[illegible]の
人[illegible]
[illegible]も
[illegible]出でぬ、——今日もまた
[illegible]るわ[illegible]思[illegible]。

[illegible]葉

日は[illegible]きれ[illegible]、[illegible]、
日は[illegible]れ[illegible]し[illegible]に、——
花の[illegible]、[illegible]、
[illegible]白みたる[illegible]の[illegible]。
日[illegible]、[illegible]

[illegible]も[illegible]を花[illegible]に、
日[illegible]む、[illegible]
[illegible]を[illegible]たる[illegible]の[illegible]を。

[illegible]とめる[illegible]内に
醒むる「命」のはしけやし、
生[illegible]たり[illegible]より
[illegible]見ゆる[illegible]な。

[illegible]の[illegible]に[illegible]の花、
[illegible]形に咲くを、醉ひ[illegible]れ、
我と[illegible]らむ忍[illegible]。——
[illegible]子のみだれを日は嘆[illegible]。

有田皿山にて

[illegible]時、日は[illegible]盛る
[illegible]の[illegible]。
一人[illegible]し、
[illegible]き[illegible]。
[illegible]める窓をあ[illegible]に、
工女にや、差出す暗き[illegible]せ、
その日のをののける見て、

堪ふ[illegible]しく[illegible]と思ふに、
氣も失せて[illegible]く[illegible]くは
[illegible]を[illegible]く[illegible]り。
時を隔き、また時を隔き、
川中に、[illegible]す[illegible]

[illegible]行[illegible]、通りすがりの
旅人[illegible]をも[illegible]と、
[illegible]合ふ[illegible]の[illegible]、
[illegible]器の[illegible]
ら[illegible]、[illegible]たなに、
數[illegible]、[illegible]べつ。
奈良茶碗[illegible]く、
鉢、小鉢、[illegible]そが中に、
花[illegible]は[illegible]、
酒坏は[illegible]く笑み、
お[illegible]が[illegible]る姿。
[illegible]の[illegible]
[illegible]、[illegible]物思ひ[illegible]は、
丹[illegible]色の[illegible]夢、
哀悲の[illegible]
陶器の生命[illegible]て[illegible]、
い[illegible]し[illegible]に[illegible]けやし[illegible]、
[illegible]にも[illegible]

寂寥の諧ひがたなき。
日盛の南國の町、
富み籠るけはひも著く、
獅子神彫りて立てたる
石祠ただ默然として、
人氣なき衢をば、往きつ遲りつ、
黑鳥しきりに飛びぬ。

秋の歌

しめやげる精舍のさかひ。
佇だみ長くつづける、
そが上を「秋」はもとほり、
和らかき苔に噎びぬ。
列び立つ影のふかみに
智識めく樅の高樹は
雄びくゆる紫ごろも、
合掌のすがたを横ぶ。
しめやげる精舍のさかひ。
すすり泣く夢もやあると
ひそめきて音にもたてず、
ひるがへる愁の落葉。
細りゆくこころに、われは
かぎりなき靜寂を覺り、
ほのかなる花のゆらぎに
煩惱の薄らぐを知る。
花の色、芙蓉の萎え、
おとろへの眼のもだしを
寂びの露しみらに薫ず。——
かにかくに淡きまぼろし。
「秋」は今、御堂に消えぬ、
誘はれてうかがひ寄れば
ほの暗きかげに燦めく
金色の御龕の光。

渇望

黄昏の色に溺れて
一室なる調度は薫り、
そが中に、わが魂の
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
花瓶に挿む薔薇は
安んじて火影に映えよ。
扉もなきそのさまを見て
魂の憐は募る。
外の面には暴風雄叫び、
電火飛び交ふ宵を、

癒えいでの病に臥して、
おぼゆるは何の渇ぞ。

舎利

あかあかと火に燃えて、
煩悩の雫は降り出づ。
その雫の埋みもはてず、
その中に灰ともならで、
なほ残る聖者の舎利。
これを見て、われはをろがむ。
生をおちて人間なれば、
止むなしと日毎夜毎に
犯しける罪の遺物と。

夏祭

その一

花の闇風をめぐらして、
祭物見かしこゝす、
金の鳳凰の綺羅模様は、
光琳もやう、花もやう。
花は紫、かきつばた、
水もあやなる雙鴛鴦。
祭物見の大店の
塵だにすゑぬしめやかさ。
縁者のさきの美しき
顔もそろひし女客。
見ればいづれも水草の
花とりどりの艶姿。
それとはかはる身だしなみ、
清らや、ここの中むすめ。
ことし十五の初夏と
うちそやさるる眼のにほひ。
かひな、肩つき、たをやかに、
踊の振りの裾さばき。
をりもをりとて、町内の
屋臺ちかよる縁のはて
足どり輕く浮かれゆく
表どほりの賑ひに、
眉根すこしくうちひそめ、
そむけがほなるそのけはひ。
十五初夏、黑髪の
艶に厭ふか町の塵。
さなそむけそよ、花の顔、
慕ひよる眼のなからめや。
しばしの輿にことよせて、
手をとるひまのなからめや。
君を慕ふがわかさにて、
七人きそふ夏まつり。
君を慕ひて、隣町、
われや數にも入らざらむ。
派手なる揃ひ、肩ぬぎて、

聲張りあぐるところ意氣。
その氣色見て比ぶれば、
けおされがちのわが戀や。

君を慕ひて、よろこびの
花笠いつかかざさむと、
街の日ざかり、人ごみの
なかにまぎれて立てるとき、
生憎さわぐ胸のさき、
警固の杖のとどろ、とどろ。

その二

君がすがたを譬ふれば、
濡れてすずしき花菖蒲。
むかしおぼゆる大江戸の
水の香ながく君に添ふ。
由緒もふかき座上の
[illegible]の宮子の君と[illegible]
[illegible]の日に通ひて
緣の絲ぞつながるる。
情け[illegible]を盛り、
戀には[illegible]思ひ。

晝は人目もうるさけれ、
夜街を君は厭はじな。
懸けつらねたる挑燈の
紋繪づくしの華やかさ。
こころ浮きたつ宵の口、
うれしき仲の、道すがら、
歌ひつれたるひと節の
ことばのはしの身にぞ染む。
燃ゆる灯影に照らさるる
二人を神もゆるさなむ。
ただ一筋の戀の道、
夜すがら、君とたどりゆかばや。

わかきいのち

ただかりそめに花を[illegible]て、
[illegible]に醉はしめ
人を戀し[illegible]には、
ゆくての途も暗からむ。
ゆめ、若人よ、こころして、
神より賜びし珍寶、
わかきいのちを放らかす
罪をな負ひそ、この世にて。

京の女

都のなかにことはりせめて、
今も河原に千鳥が啼く。
千鳥のこゑのわかさよ、
夢より夢へ、
おちとしどけなくも、
[illegible]の魂か、し[illegible]、
[illegible]ゆく。

こよひの雨にうちしめる燈火の華、
酒の香に焚きしめし宿の柱は
尼寺のものゆかしさにつやめける。
げにも、ややくづれたる三絃の婿めいて、
昔と今の、はたまた、
法と色とのえにし結ばするといの。
京の女の[illegible]の手[illegible]はれなる。

この時

紺瑠璃の
潮みちたらへば、
ゑみまけて
[illegible]、時も、
風は和ぎ、
浪は伏す南海、
天津日ぞ
かがやかに[illegible]へる。
いざここに
[illegible]、この時、
[illegible]、

おもむろに、帆あげて。
幸あれな、
帆じるしは[illegible]たれ、
しかすがに
生もまた[illegible]のごと。
あまりにも
足らひたり、海原。
静けさは
[illegible]にも似たりや。
ひなぐもる
[illegible]悪しき――日の暈。
[illegible]を
虹もこそ彩なせ。
紺瑠璃の
潮[illegible]み[illegible]しぬ。
素肌には
あらぬ瀬、なじかは。
素肌には
[illegible]、[illegible]。

見や生れむ――
虹の色、[illegible]。
幸か、今、
帆じるしは[illegible]れ、
いづこをか
[illegible]く、わが[illegible]。

水禽

[illegible]やかに[illegible]
[illegible]に映れる
[illegible]
[illegible]

かかる[illegible]めには
ひと[illegible]かかるるや――あな、
[illegible]ゆる水の面を
[illegible]みたる光ぞ[illegible]ぶ。

いとも[illegible]、
に[illegible]、
[illegible]を、[illegible]、

水禽はまどろむけはひ。
[illegible]
[illegible]、今、[illegible]、
浮びて、[illegible]
水禽の夢見ごこち。

神ほぎ

晴れわたりたる秋の日なり。
爽やかなる空の鏡に
（穢れにし都會も今日や禊ぐらむ。）
映りかぎろふ銀杏の高樹。

忌々しく、いつくしき銀杏樹の
浄まはりたる装ひに
えも言ひがたき
秋の葉の淡き黄金の光。

あまりにも清しきその姿見て、
わがこころ、都會の
慘ましき刺戟に疲れたる
甲斐なきこころは、今、忍び泣く。

晩も高に、かつ妙なる法連木よ、
日影そのよそほひを[illegible]、
ここに[illegible]なして
[illegible]。

げにも[illegible]
孤り立つ銀杏の高樹、その[illegible]を
爪立ちて仰ぎ崇むれ、しかすがに、
わが悲しみは更にまた深まりゆくかな。

わが眼

わが眼——自信の緑の青は瞳を供養す、
こはこれ發相にしてまた直に印現、
譫妄と調絃と兩つを兼ねた宇宙の體得者、
狂氣の如き反映に絡む無礙の帝王。

わが眼——碧色の血の凝りは瞳を燃す、
雪と焔の大沼に自ら溺れ且つ照らす青蓮華。
わが耳は沙漠の海に宿る車渠の瀟洒、
星の渦、硫黄の谿にかくれた酒の泉。

わが[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]、
[illegible]
く。

[illegible]、
[illegible]、
[illegible]
業、——
わが[illegible]厳詩。ここに「同時」を食る「刹那」を[illegible]
く。

光明讃

光明がわが肉むらに喰ひ入る、
おそろしいわが肉むらの、この曉。——
痛む、汗ばむ、疼く、眩む。
光明がわが肉むらを散ずる、
わが肉むらは、この時、清淨な芬陀利華。
光明がわが肉むらを彫りちりばむ、
わが肉むらは、あはれ、佛身のかげ。
わが身のあかつき、信の夜あけに、

光明を讃ずよ。
妙蓮の肉むらよ、南無す、そは今踊躍し、
活き歓ひ、涌き出で、流れ注ぐ。
このおごそかなわが身の暁には
闇として怖るべき闇もなく、
闇もまた光明の影、光明のことば。
曼荼羅の史は十方に血潮を激らせ、
痛み疼くわが肉むらは光明を信ずるのみ。
わが肉むらはこの暁の光に法界に入り、
甚深の意識が脊とわが身を掩く。
われはわが肉むらを讃み、信じ、讃嘆し、
しかも貧しおほけなき身命の燈火と華とを、
光明の海なる遍照尊にささげまつる。

食卓

ギヤマンの切籠の器に、紅い
葡萄の酒が、仄かに、ふと揺れてはほほ笑む。
柔らかな[illegible]の匂ひが[illegible]する、
すこし懐い、そのにほひが心地よく。
切籠に刻まれた[illegible]のおもてには
清高い貴石の光の音楽。
今また静に溶け入る緩やかな絢まはし。
青磁の瓶に盛られた花のあだっぽい色。
生々とした燒肉と銀のナイフ、
その爽やかな薄い刃が血にあくがれる。
原始的な残虐の快感を
人の世の幾代に馴いた美感が薦る。
ギヤマンが歌ひ、花がかなでる、
過ぎし昔の王侯の宴楽を、その悲哀を。
一日の中、最も心のどかなこの時。
そしてまた心のどかに思ひ浮べるのは、
女の顔、忘れた日に行き逢つた女巡禮、
零落はしたが品位ある蒼白いその顔を、
夢が腐れ入るその眼を、そそけた九十九髪を。
食卓に掛けた眞白い布の上には
窓の外なる若楓の緑が微かに映つて、
取りすました給仕が無言でまた酒を注ぐ。
暮れなむとして暮れあへぬ初夏の夕は
古い葡萄の酒の味の隈々を濃やかにする。
一日の中、最も心ゆたかなこの時よ。

高速度の世界

吾妹よ、見よ、この群集を。
一人としてきりきり旋らぬものはない。
何を中心として旋つてゐるのか。
これが現代に於ける流行神を
迎へて祭る狂亂の儀式なのか。
吾妹よ、あのおそろしい[illegible]の響き、
高速度、高速度の世界と。
その[illegible]
[illegible]
しかも[illegible]
[illegible]
明け易き夜を照らし出す紅なる[illegible]
吾妹よ、また見よ、あの[illegible]を。

怜悧は一人として
智慧を悦ぶものはない。
[illegible]の智慧を非[illegible]ようと
[illegible]
[illegible]
[illegible]。

吾妹よ、われ等は何たる者ぞや、
この無限の辻々を
どうして辿り過ぎて行かう。
さてわれ等とても踊つてゐる、旋つてゐる。
これが定めなれば仕方がない。
しかし、もう少し緩くり歩かう、
[illegible]の花を[illegible]、
短かい此世を楽しもうに、
われ等には楽しい望がある。
それだけはこの酒瓶に濡らしたくない。
死滅の灰が、忘却の陰が、
われ等を攫ふ日はいつしかに来る。
ただ一つの望だけは生きに生きて
またも此世にうまれ出るやう念じたい。
吾妹よ、その未来の誕生の暁に遇はうと、
さあ、ゆつくり歩かう。
黒[illegible]れ眠らうとも、

星晨はきらめき過ぎようとも、
千年が一瞬に消え去らうとも、
それは宇宙の舞台に於ける配景と装置。
吾妹よ、われ等は[illegible]はりく、
時には青[illegible]い葡萄を買つて出よう。
一度は[illegible]、
一度は[illegible]の山の[illegible]。

甕

わが身をば何とかは知る。特質もなき。
素焼の甕と澤もれてありやしつらむ。
上つ代の土師の女が手すさびに
製り棄てたるその一つ、それかあらぬか。
さればこそ弄りつる徴には
小指の痕の渦[illegible]なし残りてもあれ。
それのみの記念も今は墓[illegible]、
鈍びたる壊の面さへにほほゑまれぬる。
益もなき甕にはあれど、ことならば
満ててもあらむ、現世に溢れ出でし
吟に[illegible]、生の香ふかき葡萄酒を[illegible]。

[illegible]
毛[illegible]に[illegible]のさだめ、
何か[illegible]、[illegible]また[illegible]とも。

霊の日の蝕

時ぞともなく暗くなる生の扉。
こはいかに、[illegible]とまもけすさまじ、
こはまた、[illegible]、われ[illegible]の泉を、
何者か頭さし[illegible]、[illegible]ひぬ。
善しと匂へる花[illegible]は[illegible]に[illegible]みて、
悪しと見る果は[illegible]て[illegible]る。
そを[illegible]に栽ゑて[illegible]し嗅げに、
朽の渦はいよよ[illegible]。
聞け、物の音。——[illegible]の音。
さならずば、大沼の底を[illegible]
青の水泡の水[illegible]に[illegible]。
[illegible]はまた[illegible]、[illegible]
一[illegible]の宮に叫ぶにか。[illegible]、[illegible]、

穏かなる「心」の宮や、「靈」の日の飾。

からたち

雨みどり野に
鳴りやみて、
五月風なく
日は蒸しぬ。

標結ひ隔つ
からたちの
垣にも、花は
咲くものを。

一重に白き
その花よ、
一瓣にこもる
その夢よ。

われや佇む
垣の外、
嘆くと知れる
君ならず。

もとより門の
からたちに
花さきぬとも
おもはむや。

標結ふ戀の
そのへだて、
君がこころの
つらさゆゑ。

優曇華

遂にわが身變りぬ。まことや、今、
醉なき「よろこび」は手を高く擧げて、
わが肩突きじろひつつ、示すがまま、
わが眼の前ゆく夢の不思議を知る

先づ見る、都大路の石だたみに
映ろひ彩なす衣の流るる影。
なほまた、見もて過ぐれば、いつとわかず、
ゆゆしき戎神の力わが身を壓す
巷のどよみも、ふつに、[illegible]つつ、
雲なす許多の人々、おのがじしに、
光の輪をし被きて舞ひて遊ぶ。

この時なりき、かしこを[illegible]、
あたかも極熱の土しばし[illegible]
優曇華匂ふが如く、君も過ぎぬ。

ともしび

人の世はいつしか
かたぶきぬ。花さき
香に滿ちし世も、いま、
たそがるるわりなさ。

滅えがてに、見はてぬ
夢のかげおぼろに、
夕靄の裾ひき、
しめやげる折しも、

さゆらげる燈火、—
ほの暗き木の間を
佗しらになげくか、

ともしびの古い[illegible]
ともしびの[illegible]、
うちふる[illegible]に、
かすかすの[illegible]が
[illegible]を貫くおもひよ。
[illegible]ちぬ。にほひも、
はた色も、ひとつの、
音に添ひぬ。——ともしび、
遠ながきうまし音。

草びら

法悅の醉に、ひねもす、
向日葵は貴に匂へど、
この夕、ただわびしらに
朽ちはつる草びらもあり。

夕映の雲くろずめば、
何事もなかりしがごと、
向日葵を、はた草びらを、
あやめなき闇はおほひぬ。

ねたみ

[illegible]は
[illegible]に、
食べ[illegible]し[illegible]は
缺皿に。
それでも物の嫉みは怖しい。
厨の隅を走るあぶら蟲よ、
それかと云つて、
進ぜようにも、
今は一箸の初穂ももたない。

冬三趣

I

近所でおそろしく啼く小兒の聲がする、
それをなだめすかす母親の聲もまじる、
少し遠いところからは鷄の聲、
さらに海道のあなたを
今しも停車場に到著する汽笛のうめき、
すべての聲をつつんで、一瞬時、
[illegible]は[illegible]に入る。

II

[illegible]、燃える、
それに古い女の精をこめた[illegible]、
窓うつ[illegible]に[illegible]心な[illegible]
寂寥と[illegible]、何[illegible]
人の世の[illegible]にしかた、
未來に[illegible]眼々のめでたさ
智慧の[illegible]、今[illegible]に、
思想の芽を育ん[illegible]。

III

冬は鏑矢を射る、
ひようひようと鳴り渡りゆくその白箭、
寒い光をふるはして、
天狗の山から、甲へ、海へ。



横瀨夜雨篇

富士を仰ぎて　人故妻を送にれて　寶宮　[illegible]　お才　野に山ありき　やれだいこ

富士を仰ぎて

大野の[illegible]て
火[illegible]なりにけり
水[illegible]ず
到[illegible]

[illegible]
[illegible]木の間に[illegible]
[illegible]色
[illegible]て

八[illegible]に
[illegible]て

雪の冠を戴ける
富士の高嶺は現はれぬ
返らぬ浪に影見えて
櫻は川に匂ふらむ
霞み初めたる天地に
遥きものは光かな

涙氷りし胸の上に
閉ぢたる花も咲かむとして
亡びむとせし我[illegible]の
今こそ生きて新なれ

人は[illegible]と歸る時
花なき庭を門に見む
[illegible]るまゝは[illegible]

土橋の詰の[illegible]

人は旅路に出づる時
美し人を[illegible]に見む
我行く路にあるものは
暗を罩めたる穴にして

筑波の山に居る雲の
葉山茂山掩へるも
春は[illegible]ぶ花園に
立つべき足の萎へたるも

[illegible]ともすれば雲の奥に
隠れむとする愛し子を
[illegible]に
[illegible]とする[illegible]にして

[illegible]も[illegible]れけり
明けて[illegible]
[illegible]人なき[illegible]
[illegible]

人故妻を逐はれて

水の上に[illegible]ける[illegible]
獺は鰭の透[illegible]見て
尾上の花や散り來るよ
鰭ふり尾ふり躍るらむ

雲の端に月沒りて
沼は光の消えにけり
濕れる棹を手にすれと
さすは櫂無き藻刈船

筑波に燃ゆる紅を
八雲は山の[illegible]に
殘れる夜の[illegible]めて
二つの峰は清らなり

[illegible]
[illegible]北に[illegible]
[illegible]
[illegible]

朝日[illegible]
富士[illegible]
沼の[illegible]
霞に[illegible]

[illegible]なれば
白[illegible]の鳥も[illegible]るなり
[illegible]しきは[illegible]
雌雄共に棲む[illegible]

船の動くにつと逃けて
葦間の枝に[illegible]
鳥にも[illegible]
[illegible]ならずして

[illegible]と思ふ[illegible]
鳥の如くに[illegible]
人は[illegible]家を[illegible]後
寂しき秋となりにけり

[illegible]
[illegible]
[illegible]
若紫の色も濃く

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
鳴らさむとして覺られて
笹[illegible]に
ふたたび[illegible]を逐せしも

人故妻を[illegible]はれて
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
人故妻を逐はれて

過ぎし白日の夢に迷れ
[illegible]行く東[illegible]に
何しに[illegible]ぬる我ならむ

松樹にして榛多き
[illegible]山も高からず
（鷲の[illegible]浮ぶ沼なれば
白鶴の[illegible]も翔るなり）
[illegible]若芽掻きよせて
帰らむ船の[illegible]まで

思ひ出人の逐はるゝも
逐はれし草に[illegible]るゝも
大路を[illegible]ぐる花車
少女は花の小車か

指の手に開く春の花
引く手に織る[illegible]の波
灯火[illegible]めく[illegible]殿に
扇[illegible]し舞[illegible]と

伊賀[illegible]落つる木津川に
石相[illegible]を川の上
雲と[illegible]の戸に

赤裳かゝげて立[illegible]
西の京なる荒寺の
破れし築土に身を[illegible]
森の銀杏に落つる日の
光に泣きし尼君[illegible]

燈籠古りし石階を
鹿に逐はれて駆け上り
紅潮しゝ頬の色の
花の如くに光りたる[illegible]

人は行きけり
かへりけり
とゞろと渡る
花車
蜘蛛手の路の
遠くして
残るは暗き
花の影

野水
面錆びて
形を落す

雲も無[illegible]
遣らし[illegible]
[illegible]
神は戀ふるを
許せども

殯宮

木尼秋遊[illegible]

東の海に出づる日は
西なる山に没るれ[illegible]
没れぬ光は天雲の
五百重の遠に射渡る[illegible]

虚しき空に紅の
霞流るゝ沙漠の[illegible]
ナイルの岸に石積み[illegible]
築きし墓は荒れに[illegible]

獵矢手挟み鹿子追[illegible]
森に落しけむ久米の[illegible]
耳朶に懸けし金の
環も雨に曝されて

丹を頬に塗りし少女等の
文ある袖も黒髪も
殯の宮に斂めしより
千歳の土となりにけり

櫻が下の
　曙に
春の旅こそ
　終りけめ
秋は如何なる
　風吹きて
露より霜と
　結ぶらむ

行けども／＼
　歸らざる
人を送りて
　野は青く
野は青くして
　亂れ飛ぶ
花の行方は
　幻か

石燈籠

雪ま[illegible]ふる雨となれば
[illegible]のみに[illegible]りけむ
山[illegible]の蕭[illegible]れて
内は小暗くなりにけり

言はで立つ妹の
髪も顔も朧に
雪の白きも地に落つれば
雨に消さるゝ何日哉

花守花を植ゑずなりて
苑には石の轉ぶのみ
小菊枯れて殘れるに
竹の折戸は閉されず

露じも降りぬ朝且より
草は日に日に[illegible]なり
思へば二月花吹くも
誰かまた我に手を貸さむ
雨は斜に落し來て

[illegible]る
[illegible]
[illegible]行くか

[illegible]すら
[illegible]の涙

[illegible]すら
[illegible]までに
[illegible]中の子の
我は[illegible]として

[illegible]ならば
[illegible]らむ
[illegible]ぬとも
[illegible]に見む

光[illegible]蚊帳の
一つ花に[illegible]人寝し
[illegible]は[illegible]雲珠櫻
花[illegible]散りぬれど
有りとは分かぬ天の雲
[illegible]も天にと歎ふれば

泣くのみなりし丘に
君とあひ凭る我肩よ

花や煙と渦いて
壁に這ふらむ烏瓜
落日は兄妹を照せども
影は三にもならばこそ

母のと聞ける懐かしさに
面影遮ふ古鏡
吁吸吹きかけて拭へども
拭けども人の現はれず

少女なりける少時は
優しき眉もおはせしか
鐵漿黒々と歯を涅めし
とばかり母を覺ゆるに

家妻めかす妹の
異なる人とも見えざるは
弱き吾子をあはれみて
母やも我に遺しけむ

受くれば溜まる

淡雪の
軽きを打ちて
丸めなす
雪燈籠は
脆くとも
灯入れて君の
眉を見む

尊しと思ひし
笄も
插せばさしも
應ふもの
晴の旅なる
乗懸の
裲襠に伽羅は
留めたりや

十三塚の
森かくれ
明日は越ゆべき
雲の海
背向過ぎむ
峠の上
せめては山を

顧みよ
兄になればや
柔順なる
君が幼名
そと呼びて
手近の物を
取らするも
今日限りとは
なりにけり
妹よ

お才

男女居てさへ
筑波ノ山に
霧がかゝれば
寂しいもの
佐渡の小島の
夕浜千鳥
[illegible]の[illegible]の
[illegible]からむ

[illegible]にから
[illegible]まで
泪に名々
家はそれと
お月様を
十三七つ
お父様ふるか
無理かえな
三国峠の
険路を
越えて帰るは
何時ぢややら
やはり妹と
背負籠かけて
薪拾うて
あつたもの
お才あれ見よ
越後の国の
雁が来たにと

ならされて
故郷山から
見た東京根を
今は[illegible]で
泣かうとは
心細さに
出て山見れば
雲のかゝらぬ
山は無い

野に山ありき

野に山ありき忍冬
蔓なる花のほのかゝと
匂ひて暁の紫は
筑波に負へる名となりぬ
雲南に浮くとのみ
霞める空に鳥鳴きて
竹の小弓を携へし
子等は麦生に隠るらむ

[illegible]
[illegible]になりにけれ
森の内なる[illegible]
今は二人に[illegible]
櫂は舳に横へて
吹かるゝまゝに行くまゝに
風芳はしき櫓波の[illegible]
人よ[illegible]には[illegible]ずか
な[illegible]、[illegible]き大[illegible]る
浪に[illegible]へし我なれど
船底に星宿る[illegible]の
沈むは物の数ならず
君行る[illegible]の[illegible]りたば
泳ぎ帰らむ水色の
裾に絡まる睡蓮の
花は額に飾らむもの」
男「濡れて見ある黒髪は
新たに解きて[illegible]けむ
悴れたりとも見えぬ頬の

など夢のごと眞白き」

女「君が紅注せとのたまはば
紅も薄らにさしぬべし
故ならぬ髪の毛は
掻上るたびに亂るゝに

常に戯ゆる鳥居に
貝は脆く彈きしか
反りて落さぬ掌の中に
網の目のみ突き馴れぬ

春華美なりし宮仕
御守殿風に反りては
三味線の撥かけに
翻しゝ袖の長らして

初めて山といふ山を
見しは最後の秋の雲
青きもえて山葡萄の子は
猿もや摘むと疑ひし

谷に霧める浮雲を
袖に押へて捕ふると
指挾まれし痛すら
覺ゆるものを山見れば」

男「山は野にあり、舟に居て
背向になれば彩ぐに
吾手に縋る君が手の
微に著き血のめぐり」

女「小蜘蛛に似たる蟲跳ねて
靜かに軋る日の車
耀ふ浪の眼を射むに
傘の薄きやさしかけむ

人は見るとも夏霞
棚引く岸は草深し
暑しとならば頬を當てゝ
暫時はおはせ我膝に

夢には戀ひし人もあれど
春を武藏に暮れにけり
空遠くして寂しさに
今は心の疲れしを

人の肩に手を觸るは
最初なるべき君よ、彼の
土佐りける下髪の
妹として來りしなり

朝吹く花の露無き
露とも思へ、君が手に
かゝる涙は遣瀬無き
わが追懷の證なり」

人何なれば胸開けて
吾掌を當てしむる
そよ海の底深く
浪は鳴るとも聞ゆれど

垂れし項に囁くべくも
片手は君に抱られけり
たゞ戰ける唇を
小指の端に觸れしめよ

寂しく生きし我なれば
人を見むとは願はねど
涙に曇る眼をあげて
向へば君もさしぐむか

天の直路に別れての
雲は再び合はぬべし
死にぬと言ふて嘆くも
終に忘るゝ我ならず

様は行くとても何秋か
今は嘆き給ひて
吾子に帰れ一たびは
吾妻と呼ばむ我が家に

十年に過ぎぬ瞬間の
夢は二人に覚めぬとも
千代の絆を愛しむべき
月日は共に許されず

君と呼名は
天雲の
白く、うすく、
墳墓の
苔の丘に刺す
影のごと
朧々に
なりぬとも

斯、夢路に
迷ふくれ
隠れて生くる
荒みゆく
瞬間に
落して
忘れぬ紀念
備あるなし

やれだいこ

これの子に寄して

花なる人の
戀しとて
月に泣いたは
夢なるを

縦縦びし
衣手に
涙の痕の
著くとも
うき世に浅き

既なれば
初まの声は
答めじな
——花なる人は
戀しとて
月に泣いたは
夢なるを——
つらけれど、紅葉
綾なす幸福の
墓に今は
帰らうよ
破れ太鼓は
叩けど鳴らぬ
落つる涙を
知るや君

伊良子清白篇



秋和の里

月に沈める白菊の
秋冷まじき影を見て
千曲少女のたましひの
ぬけかいでたるこゝちせる
佐久の平の片ほとり
あきわの里に霜やおく
酒うる家のさゞめきに
まじる夕の雁の聲
蓼科山の彼方にぞ
年わかき猟夫住むといへ
月はろばろとうかびいで
八谷の奥も照らすかな
旅路はるけくさまよへば
破れし衣の寒けきに
こよひ朗らのそらにして
いとゞし心痛むかな

漂泊

蓆戸に
秋風吹いて
河添の旅籠屋さびし
哀れなる旅の男は
夕暮の空を眺めて
いと低く歌ひはじめぬ
亡母は
處女と成りて
白き額月に現はれ
亡父は
童子と成りて
圓き肩銀河を渡る
柳洩る
夜の河白く
河越えて煙の小野に
かすかなる笛の音ありて
旅人の胸に觸れたり

故郷の
谷間の歌は
續きつゝ斷えつゝ哀し
大空の返響の音と
地の底のうめきの聲と
交りて調は深し

旅人に
母はやどりぬ
若人に
父は降れり
小野の笛煙の中に
かすかなる節は殘れり

旅人は
歌ひ續けぬ
嬰子の昔にかへり
微笑みて歌ひつゝあり

月光日光

月光の
　語るらく
わが見しは一の姫
古あをき笛吹いて
夜も深く塔の
階級に白々と
　立ちにけり

日光の
　語るらく
わが見しは二の姫
香木の髓香る
欄桁や白乳に
浴みして降りかゝる
花姿天人の
喜悦に地どよみ
　虹たちぬ

月光の
　語るらく
わが見しは一の姫
一葉舟湖にうけて
霧の下まよひては
髪かたちなやましく
亂れけり

日光の
　語るらく
わが見しは二の姫
影映る圓柱
驕り鳥尾を觸れて
風起り波怒る
濤立つ空殿を
七尺の裾曳いて
黄金の跡印けぬ

月光の
　語るらく
わが見しは一の姫
死の島の岩陰に
青白くころび伏し
花もなくむくろのみ
冷えにけり

日光の
　語るらく
わが見しは二の姫
城近く草ふみて
妻覓ぐと來し王子は

太刀取の恥見じと
火を散らす駿足に
かきのせて直走に
國領を去りし時
春風は微吹きぬ

不開の間

花吹雪
　まぎれに
さそはれて
　いでたまふ
館の姫
蝕める
　古梯
眼の前に
　櫓だつ
不開の間
香の物
　焚きさし
採火女めく
　影動き
きえにけり
夢の華
　處女の
胸にさき
　きざはしを
のぼるか
諸扉
　さと開く
風のごと
　くらやみに
誰ぞあるや
色蒼く
　まみあけ
衣冠して
　束帶の
人立てり
思ふ今
　いけにへ
百年を
　人柱
えも朽ちず
年若き
　つはもの
戀人を
　持ちながら
うめられぬ
怪し瞳
　炎に
身は燃えて
　死にながら
輝ける
何しらむ
　禁制
姫の裾
　なほ見えぬ
扉とづ
白壁に
　居る蟲
春の日は

[illegible]
暮れにけり

安乗の稚児

志摩の果安乗の小村
早手風岩をどよもし
柳道木々を根こじて
虚空と[illegible]れの細葉

水底の泥を逆上げ
かきにごす海の病
そゝり立つ波の大鋸
過げとこそ船をまつらめ

とある家に飯蒸かへり
男もあらず女も出で行きて
稚子ひとり小籠に坐り
ほゝゑみて海に対へり

荒壁の小家一村
反響する心と心
稚子ひとり恐怖をしらず

[illegible]
いみじくも貴き讃歌
今もなほ[illegible]見る
少くして人と行きたる
志摩のはて安乗の小村

鬼の語

顔蒼き若者に
[illegible]不思議をきけば[illegible]と
村人[illegible]
[illegible]

前の日村を立出でて
仙者[illegible]
恐怖を抱くものゝごと
山の景色を語らはず

伝へきくらく此河の
きはまる所瀑ありて
其れより奥に入るものは
必ず山の祟あり

瘴癘気を衝いて立昇る
[illegible]を分け行けば
[illegible]
頂に[illegible]

[illegible]
[illegible]
剣を[illegible]に
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

劉邦未だ若うして
谷路の底に蛇を斬りつ
而うして彼れ漢王の
位をつひに贏ち獲たり

この子も亦凡山の気に
中りて来に[illegible]れども
果を守りて愚鈍者に

鬼の語を語らはず

五月野

五月野の晝しみら
瑠璃囀の鳥なきて
草長き南國
極熱の日に火ゆる

謎と組む迷路
深沼の岸に盡き
人形の樹立見る
石の間靑き水

水を截る闊肩に
睡蓮花を分け
のぼり來る美し君
柔かに眼を開けて

玉藻髮攬け落ち
眞素膚に觸る浪
木々の道木々に倚り
多の草葉にふむ

葉の裏に虹懸り
姬の路金扶つ
大地の人離野
變化だつ白日時

垂鈴の百濟物
熟れ撓む石の上
みだれ伏す姬の髮
高圓の日に乾く

手枕の腕つき
白玉の夢を展べ
處女子の膩肉は
力ある足の弓

五月野の濡跡道
深沼の小黑水
落星のかくれ所と
傳へきく人の子等

空像の數知らず
うかびくる岸の隈
湧き上る高水に

いま起る物の音
めざめたる姬の面
丹穗なす火にも似て
たわわなる身を起す
光宮玉の人

微笑みて下り行く
湖の底姬の國
足うらふむ水の梯
物の音遠ざかる

目路のはて岸木立
雲下す日の眞澄
迷野の道の奥
水姬を誰知らむ

初陣

父よ其手綱を放せ
槍の穗に夕日宿れり
數ふればいと秋九月
赤帝の力衰へ

天高く雲野に似たり
初陣の駒競うたば
敵将が兜の星も
きらめきて[illegible]む

父よ其手綱を放せ
征矢の[illegible]行方に
月細く[illegible]れる時に
一すぢの烽火あがらば
陣[illegible]ふきならせ
軍[illegible]あれ[illegible]のら、
鎧[illegible]の[illegible]く下に
[illegible]を洗ひて待ちね

父よ其手綱を放せ
[illegible]く[illegible]に老いませり
花[illegible]く[illegible]胸踊る
橋を断ちて抱おしならべ
[illegible]高く[illegible]を清めて
さか落し千丈の崖
旗さし物亂れて入らば
大雷雨落つ[illegible]底
風[illegible]しあゝ[illegible]血汐

父よ其手綱を放せ
君しばしうたゝ寝のまに
絵巻物遠に開きて
夕べ星波間に沈み
水深く河の瀬なりて
野の草に眠るゝ螢
石の上悪気上りて
亡跡を君にしらせむ

父よ其手綱を放せ
故郷の寺の御庭に
うるはしく列ぶおくつき
栗の木のそよげる夜半に
たゞ一人さまよひ入りて
母上よ晩くなりぬと
わが額をみ胸にあてゝ
ひた泣きに泣きあかしたには
わが望満ち足らひなむ
神の手に抱かれずとも

父よ其手綱を放せ
雲うすく秋風吹きて
[illegible]高なる動き
軍人小松のかげに

遠祖らの[illegible]名を[illegible]む
今ぞ時[illegible]が[illegible]ひく
初陣の駒むちうちて
西の方曠野を駈らむ

ねたか起きぬか

寝たか起きぬか
　萱野の雉
　よいそらよい
沖の夜網を
　鮫がとる
　よいそらよい
丘の朝西風
　飛び出せ蟋蟀
　よいそらよい
濱の鰯を
　鮪が逐ふ

吉野臥城篇

埋火三律　人に答ふ　松林　立秋吟　宮城野に立ちて



埋火三律

一

灰の面の稍崩れたる午すぎの
埋火や、若き男と女と物がたる。
薄日さす障子に映る鳥の影、
香に蒸してあからに火照る炭の顔。
寒牡丹音なく散らふ卓の上、
琴の緒絶え空鳴る床の前。
ゑましさの悲しみを生む一瞬に、
手放てば、二人の緣兒はれぬ。

二

灰占の幸もなう、唯更くる夜の
埋火や、うら若き女ぞ物おもふ。
銀燭は薄冷の香を吐いて、
金盞は契りし人を待つけはひ。
籠居の炭こそ老ゆれ髮白に、
叫鋭の木兎こそ過ぐれ闇暗を、
忽ちに靜寂にかへる惡寒の、
高樓に、あはれや人の寐もやらぬ。

三

灰清く搔き均したる朝の間の、
埋火や、うら若き男ぞ歌おもふ。
額黒の炭漸々に[illegible]燃けて、
腹白の水[illegible]、の鳥啼か[illegible]くす。
洋裝の金字の[illegible]に照る光、
淨玻璃の[illegible]の[illegible]消ゆる影、
活くる日の[illegible]には、[illegible]、
美しき靈の宮居に憧るる。

人に答ふ

才はじけたる少女子の
琴になぐさむわれならば
葉風さみしき草の戶に
病をなどてやしなはむ

われは智慧なき少女子の
たのしくうたふ鄙ぶりに
思はず耳をかたぶけて
ひとりほゝゑむ身なるぞや

あゝ病めるまの手すさびに

こゝのけしきを寫すべく
[illegible]
[illegible]の水に筆をあらはむ

松林

伸立ちぬ、新芽——[illegible]松柏、
日の入り[illegible]濃紫の[illegible]衣、
[illegible]を、谷あひの
若[illegible]の[illegible]て來る時に、
また過ぎし[illegible]、
はた青ひ寄れと、[illegible]の前にこそ
默して立てれ。——常磐の松林。

立秋吟

琴を葡萄の[illegible]にかけ
葉分の風に女神が
秋のおもひをかきなせば
戀になやめる人の子は
うれひの耳をかたぶけぬ

曲におどろく[illegible]は
[illegible]
[illegible]の乳燕を呼びさまし
[illegible]
[illegible]打つべく

青[illegible]の香をこめて
理想の[illegible]に迎ふなり
乙鳥ならぬ人の子よ
うれひの[illegible]を立ち出でて
こゝに[illegible]

宮城野に立ちて

秋た[illegible]吹くゆふべ
宮城野のほとりに立てば
[illegible]くれなゐにとび
おくれたる燕かなしむ

さびしさの胸うちなでて
物ぞ思ふ惆悵として
うつろひし野べの面影
かはりしよ誰れの心ぞ

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

かへり見すれば[illegible]
くもる日に[illegible]
戀むなし影のごとくに
身はたそがれ[illegible]

てる日に[illegible]はれて
陽炎の[illegible]にぞまよふ
もえくれば[illegible]に苦し
きえゆけばあまりに淋し

それ秋をおもふ心は
少年の戀にかよ[illegible]
うつくしき野べの夕やけ
見[illegible]われに[illegible]とぶ



岩野泡鳴篇

女護海島　ああ、世の歡樂　圓き石　常世の光　無言の石　月と猫　閣の盃盤　胸のきしめき　眞赤な太陽　ダナエー獨白　瀨戶の火鉢　きりぎりす

女護海島

序

白帆は遙かに戀しきものよ、
をとこは心に慣れの鐵か。
大浪おし入り込むそのゆふぐれに、
きそひて出で來る島人どもの
化粧はあとなつ黑ずむ、赤く、
優しき手に手に持つわら苔を、
落ち、みぎはに置き並べつも、
之をばかがむにい島もりの
結べる小紐しるしにすがり、
おのおの分れてみさをを守る。
ああ、とこしへにも生きなむものが、
一夜をいだくは如何なるさちぞ。
すなはち賴みのとも綱切れて、
その船遠くも歸らむ日には、
歎きの淚にその身はなかば
融けてや深みの人魚とならむ。

（一）

麗々乎として風吹き來れば、
みなぎる大洋二十重に倒れ、
蓼々乎として浪逆まけば、
そびゆる椰子樹もかゞみて恐る。
岸べにあらぶる獅子とは何ぞ。
見よ、見よ。巖石ぬれにぞ濡れて、
かしらを擧ぐるは活くるに似たり。
この島まとふは如何なる蛇ぞや、
しり尾も示さず動くに遇へば、
天柱やすきをこれ疑はる。
幾千百丈みた底深き
神祕の奧よりゆるぎも出でつ、
ああ、茫漠たるそらをば仰ぎ、
いとさゝやかなる、汝、海島よ。
ながが身を護るはアダムの子らか、
はた又いづくの流人がすゐぞ。
靜中動あり、動中靜の、
寂寞却て一しほ深し。
山にも、川にも、森にも、野にも、
住へるものらの影だに見えず。

（二）

山々みどりの眉をば染めて、
白きは御空のかたひに殘る。
流れは香樹のにほひを乘せて、

ふるくも 去りて 寂寞に 入る。
野には 鳥 あり、その名を 知らず、
日南に 眠りて 羽がひ を やすむ。
大鷹 小畜 小みち に 遇へど、
その牙は その爪 用をも 為さず。
喬木 灌木 こずゑ は たわわ、
繁けき 果物 食ふに まかす。
空氣 は 醇なる 力 を 帯びて、
天なる 御門 ゆ 涼しく 流れ、
かゞやき 照らすよ、小草 の 色の
青きは あまねく 地上 に 敷きて、
文化 の 足跡 少しも 受けず。
遠きも 近きも、左も 右も、
自然 の けしき は 活き活き 踊る。
ああ、これ 仙境── 無名 の 主の
臥牛 ゆたかに 眠 より 逃れ、
悠々、天壽 を 終へにし 陸 か。

（三）

晝夜 は 分れて この地 を 見舞ひ、
風雨 と 戯れ、無手にて 歸り、
變化 は 隱れて こゝにも 來れど、
時日 あまりに もの 長ければ、
天數 地數 の 八卦 に のらず。

願は いまだに 定まらざれば、
靈は 生れ 何處 なりか。
物皆 おのづと 世に出でぬれば、
遷延 ともども 輪廻 繰りて、
たがやす 勞者 は いづこに ありや。
うれひ の 主權 を とゞめぬ 限り、
造化 の 所有 に みづから なやみ、
火宅 を 現ずる ものら は いづこ。
有形 の ほだし を 遙かに 去りて、
無形 の 位 に 融合する か。
咎なく、憎なく、闘はず、傷さぬ、
草木 に 牝馬 の いのち を 繋ぎ、
優しく 健き は かけ のみ 走る。
ああ、生々の理 孤獨 と なりて、
いつまで、化育 の いといと 高き、
對象 を 別ちて 男子 と 成さぬ。
雲 行き 雨 ふる この 島山 に、
六龍 遂には 顯はれざりや。

（四）

そも 何もの ぞや、音樂 の ごと、
なみ風 靜まる 刹那 と 刹那、
そのひま かすめて 幽かに 聽ゆ。
山 には その山、川 には 川の、
島 には その島、獸 には 獸の、
それぞれ 固有 の これ音 も あるを。
そのある 調子 は 韻律 も さらむ、
なみ風 かすめて 幽かに 聽ゆ。
その 神韻 一 確とは わかず、
たつゝ に 聲 は たゞみ に 漂り、
いねる に 響 は いねる に ひゞく。
靈智 開けば、これとや 云はむ。
見よ、見る 限りは、と 三世 の 夏 の
枝葉 は ゆはゆか、その水 清し、
精魂 出、また、若やかならむ。
剛健 範 自然 に かなふ、
椰子の 樹、棕櫚の 樹、あなゝす、ざぼん、
芭蕉 の 葉かげ に、蘇鐵 の もとに、──
たとへば、あれ野 の かしこに こゝに、
蟲の 音 一時に 高まる 如く、──
恨む か、歎く か、かこつ か、泣くか、
悲しく 哀れ に 聽えも 來る、
調べ は をちこち 一つ の ひゞき。

（五）

ギリシャ の いにしへ 船人ども を
いざなふ 島根 の それにも 似てよ、

へだてゝ聽きなば怪しきひゞき、
あてを定めて近づき見よや。
住民ありけり――サイレンのごと、
美なるはをんなの機織りすがた。
前者は、オルフアス琴彈きの爲め、
巧みを恥ぢ入り移石と化しぬ、
後者は、却て、海より來る
獸帶をば求めて心は亂れ、
炎熱烈しき樹のかげかげに、
無聊に倦みてぞ織り出す布の、
長さが如くに夏の日盡きず。
まなこを横ぎる筬の手ゆるく、
逃れて出づるは夢路のうつゝ。
やがてはそのまゝ眠りに入らば、
目ざめて苦しき煩悶もなきに――
かよわき力の渠等ぞあはれ。
うつゝと夢路の境にありて、
われからとめ得ぬ歌をも杼をも、
ねむげに合せて又くり返す。
「はた地は織れども、着る人あらず、
着る人あれども、をみな子ばかり。』

（六）

甲板の荒武者爲朝、むかし、
この根を襲ひて、美なるを多く
小舟に引きゐて南に去りぬ。
これ、この處の唯一の歴史。
祖先はいづれぞ。開祖は誰ぞや。
文明あかるき光を惜み、
學術その口つぐみて云はず、
朴訥平易は、神代の如し。
小波に尋ねば、小波は隱れ、
大浪招けば大浪にげむ、
こずゑに訴へば、こずゑはゆらぎ、
木の實に語れば、木の實は落ちむ。
ああ、單調子の安逸、安臥、
無理想、無何有に勞れも果てつ。
小蜘蛛の織り爲す網になぞらへて、
芭蕉布作るが手足の動き、
なほ飽き足らざる心の糧よ――
いづこの果よりなぐさめ來る。
運命卜する卦はたゞ潛み、
牝馬は空しくいな鳴くばかり。
島民とこ世にその數あまた、
不憫さながら配偶を得ず。
さびしきその身をいだけば胸に
燃え立つほのほの暑さに堪へず、
南の岸べに冷氣を呼べば、
天地はかをりて感ある乙女。
ああ、また同性、同性を產む。

ああ、世の歡樂

ああ、世の歡樂あまきに過ぎて、
夢路にまたがる春、そのうつゝ、
遠きは薄もや、近きは花の
ねむりか、心のまなこをめぐる。
それ、たゞしきりに降るほそ雨の
窓にはそゞろの戀もや祕めむ。
それ、たゞ曇りて吹くやは風に、
浮き立つ思ひのいこひや住まむ。
ああ、とこ靜かの春、そのうつゝ、
うつろのまぼろしあしたに破れ、
大地は音なきほろびのかげを
一ひら胡蝶の羽がひにまかす。
若き身もたげてわが世を追へば、
ああ、亡き乙女よ、見えては消ゆる。

闇き石

この世の 暗黒(くらみ)をも
かつて 吞みたる 女、
暗に 鎖せる こゝろ、
之も 闇き 石ころ。

楽しき 家に ありて、
嘆、日を 浴まぬ 貝子、
高く 葉末も 濡はぬも、
凝りて 結ぶ あま雲。

ネビユラ 冷え来りて、見よ、
照らす 小星の 月夜、
闇を に 続く、雲 あり、
自然の まゝ その態。

いまだ 憂ひ 悲しみ
もつれ出でぬ この君、
巻くが まゝの から緒、
歌ふ ものは、赤人。

佛教 こゝに 来らず、

人、死の [illegible]を 知らず、
積[illegible]の ために 悩し、
眠る さまを [illegible]。

[illegible] 時も いと[illegible]
[illegible]る 実の [illegible]も せ、
[illegible]を 時に [illegible]へても、
[illegible]に 何の 色こそも。

取りて 見えぬ その実、
打ては 堅き それのみ、
[illegible] を 問へど 示さず、
口 なければ その答。

棄つれば、また、転ぶか、
まろぶ ことも たまさか。
行く、問へど 語らず、
なさけ 無きか 然らず。

雨に ぬれて、忽ち、
乾くに 早き かたち、
涙 もろき ものには、
住ひ 易き この庭。

[illegible] 信心 にして 仰ぐ、
人に [illegible]、
之は [illegible]、
[illegible] 見る [illegible]。

太古 [illegible] より 来れり、
こゝに [illegible] 千年 より、
日に [illegible] 宿、
[illegible] と もを この[illegible]。

常世の光

（カトリックの[illegible]イアナ讃歌の調に任せ新たに作れる。）

ああ、地 初めて 一つ に 分れ、
御空 を 照りて 照り出でたる 光、
とこ世 の おもて を 蔽ひたる 闇 は、
音なく 破れて かゞやき 渡り、
四方 は 新たに くらゐ を 定め、
よろづの 物 皆 生命 を 浴びぬ——
あめ地 初めて 一つ に 分れ、
御空 を 踊りて 照り出でたる 光。
静けき とこ闇 おのづと 破れ、

御空を踊りて照り出でたる光、
御神の夢より溢れたる笑みの
くらきが中をかゞやき渡る。
物皆新たに本性を受けて、
生命の流れは四隅に振ふ——
あめ地初めて二つに分れ、
御空を踊りて照り出でたる光。

無言の石

云はず、語らぬ石をいだき、
われはこの世を泣きに泣きぬ、
人のいふなる戀にあらず、
おのが受けたる苦にもあらず。
苦にも、戀にも、更らに増して
胸のさびしさあふれ來なば、
もゆる思ひの肉は裂けて、
なみだばかりぞ[illegible]く流る。
われに[illegible]なし、[illegible]は[illegible]なく、
あゝといふべきこのかなしみ、
今宵の[illegible]に[illegible]りて、
つきぬわが世は石と共ぞ。
かれは『無言』を絶えず生めば、
われはなみだをそゝぎ繼がむ。

月と猫

樫の樹の間を漏る月の
影は、ふるひて、座に落ちぬ。
誰がゑみまけし魂の
かた碎けぞと、そも小猫——
白き小猫は走り來て、
ただつくねんと見守りぬ。
泡とつぶ立ち、玉と散り、
[illegible]りてはつどふその碎け、
白き小猫はざれ[illegible]て、
つかむとすれば手を照りぬ。
月と猫とは、その夜より、
わが座を[illegible]靈なりき。

闇の盃盤

夢は失せにし玉の如く、
覺めて掴むとすれど、あはれ。
艶も光も跡を絶ちて、
闇にのべたる片手ばかり。
ゆるむ節々ちから添はず、
戀ものぞみもなかばうつゝ。
まなこ開けば、暗きかもゐ、
あやしまぼろしこれをめぐる。
鬼よ、羅刹よ、夜叉の群よ、
われを[illegible]の[illegible]かな、
死[illegible]は[illegible]を[illegible]に[illegible]き、
肉は[illegible]
見えぬ火の中、水の中の

[illegible]と [illegible]は 迫り 来れど、
[illegible]の [illegible]に [illegible]の [illegible]、
昔を [illegible] [illegible] [illegible]。
[illegible]の [illegible] [illegible] 盛りて、
わが [illegible]なき [illegible]に 沈む。
かくて 夢より 夢を [illegible]、
とこしなへ に [illegible] に [illegible]はむ。

胸のきしめき

時計の ちくたくが 自分の 動悸と なっ
て 響いて来た。
すると、今まで、どこだか 知れない
暗い 海の 真ん中で、大きな 嵐がたに 漕
ぎまはされて ゐた 身か、
身の舟 と 共に とまって 明るい とこ
ろへ つれて行かれる。
それは 廣い 野邊だ――
夢に 花が 咲き、花に 夢の かをり、
[illegible] [illegible]に [illegible]れて [illegible]は 千
早、
[illegible]く [illegible] [illegible] [illegible]に
[illegible]は [illegible]、
そん[illegible] [illegible] [illegible]、[illegible]とか [illegible]
ない 人の
水汲む なつかしい 音が 聞こえる。
あんなに 懐しい 世なら、
昔といふ ものは なかった だらうに――
今一度
あの 井戸 に 行きたい、
あの 水が 飲みたい、
あの 水で 拵へた 酒が 飲みたい。
ここへ 来たのは 間違ひで あったらしい。
から 思ったら また 急に 闇の 中[illegible]
うつら／＼の 夢さきに 迫って 来て、
息が 詰ったのは 底も 知れない 虚空
に 落ちて 行くのだ。
あ！ と、思はず 聲を 挙げたら、
あなた、あなた！ と 女房 の 聲、
しッかりなさい！ と 息子 の 聲。
[illegible] [illegible] [illegible] [illegible] 鳴る、
その [illegible] 人[illegible] [illegible]
[illegible]は [illegible] [illegible] [illegible] その
[illegible]、
[illegible] 出ない この [illegible] [illegible]
[illegible]！
[illegible] [illegible] [illegible]、
今 [illegible] [illegible] [illegible] [illegible]

眞赤な太陽

[illegible]な [illegible] [illegible]に [illegible]り
立って [illegible] ゐると、
[illegible] 眼を 描いて [illegible]な
い。
後の [illegible]には、[illegible]で [illegible]
てしまふ。
目の前 には、静かな 海が [illegible]、
矢ッ張り、[illegible]の 中に [illegible]
そこに、光線で 刺き取られた 太陽が
眞ッ赤な 色を して、

淡いべに赤唇を浮べてゐる、
接吻！といふことが思ひ出されたが、
僕は愛する婦人に遠ざかつて来て、
その愛婦に棄てられた際に寂しくな
つた。

ダナエー獨白

〔[illegible]〕

では[illegible]、ダナエーが
その[illegible]と[illegible]の[illegible]へ。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]——
[illegible]

安きは[illegible]のかたみのみ、

あはれ、不安とかなしみの
火もてほてれるわが目には、
海のちからの高どよみ、
遠く燃ゆるを見しこゝろ——

ああ、神ゼウス身に觸れて、
もろきいのちは見えぞめぬ。
もろきいのちの見えそめて、
朽ちぬ榮えぞうらみなる。

ああ、燦爛や天の座は
高きどよみに乘り來る。
この兒を受けて、おほ御つま、
御座のほとりにそだてしめ、
ただ常世の血すぢをば
アハヤの勇者たらしめよ。

朽つる宿世の身なれども、
こゝに[illegible]のかがみあり。
聖き榮えの照らす間ぞ、
このまぼろしの見ゆる間ぞ。

まことの闇よ、いざ、さらば、
その手を延して來れかし。
うらみと歎き、死とつちを
このはこ船にくつ返し、

深きひびきをつたひ來る、
熱にぞわれは燃えあがり——
ほのほと成りて、まのあたり、
戀しの神にしたがはむ。

瀬戸の火鉢

あまりに書齋が寒いので、何も考へはまとまらない。筆を投げたまま獨り僕は、暗い周圍がふくらんで行つて中[illegible]

[illegible]
首府に [illegible]かつた 火鉢だもち の あ
る [illegible] おほ火鉢に
雨の [illegible]を かけて、
ふと 考へた こんな ことを——
なぜ 僕に 斯う 親しみ が あるのだ、
火鉢を [illegible]に して 保つ だけの こ
んな 物か？
どうも、その 中に かた炭 の
火が ある 爲め ばかり でも ない や
うだ。
さきの 妻に 同じ 大きさ のを 取られ
て から、
これも 二代目の だが、然し
前後 の 妻 よりも 元來が つめたい
この 瀬戸に 僕の 心が 常に 引きつけ
られる！
しんかん と した 夜中 を、
あたま から 落ちて
火中に 小さく、燃え焼ける ものは 何か？
これが、乃ち、多年の 習慣で、
知らず 識らず
僕の 心を 火鉢に 引きつける もの だ
らう。
ここから とも なく
そよ吹きの くゆり か？ 否、かんばしい
香水の かわき行く にほひ か？ 否、否、
もッと、もッと なつかしい
人間の 血の 固まつた のを あぶり
焼き！
氣が 付くと、
相變らず 僕は 肱を 火鉢 の ふちに 乘
せた まま、
かゆい あたま から
雨手で 頻りに 大きな ふけ を かき落
し、拂ひ落し、
その 焼ける にほひ を 嗅いで ゐる。

きりぎりす

門内 の 小ばたけ に
胡瓜 や 茄子 の 無くなつた 晩秋 の
ゆふぐれ、
とまる ところ を 求めて、きりぎりす
ぽつねんと
——但し、[illegible] に 凍える 物なひ——
玄關さき の 敷石 に 來て
その ほのほ も 細る [illegible] の 呼ぶる
ひ、
たほ 切れぎれに いのち を おやん——お
やん——ぎいす！
敷石 の うへに きりぎりす、
つめたい 石 の うへに、
もう 飛ぶ ちからも 失せて、ただ 獨り、
この 秋の 日 を 消え行く 生に 對
して、
その かすれた 聲は 然し 最後 の 雄
たけび！

眞下飛泉篇

戰友　出征



戰友

こゝはお國を何百里
　離れてとほき滿洲の
赤い夕日にてらされて
　友は野末の石の下。

思へばかなし昨日まで
　眞先かけて突進し
敵を散々懲らしたる
　勇士はこゝに眠れるか。

あゝ戰の最中に
　隣にをつた此友の
俄かにハタと倒れしを
　我は思はず駈け寄つて

軍律きびしい中なれど
　是が見捨てゝ置かれうか
「しつかりせよ」と抱起し
　假繃帶も彈丸の中。

折から起る突貫に
　友はやう／＼顏上げて
「お國の爲だ關はずに
　後れて呉れな」と目に涙

あとに心は殘れども
　殘しちやならぬ此身體
「それぢや行くよ」と別れたが
　永の別れとなつたのか。

戰すんで日が暮れて
　さがしにもどる心では
どうぞ生きてゐて呉れよ
　物なと言へと願うたに。

空しく冷えて魂は
　故郷へ歸つたポケットに
時計ばかりがコチ／＼と
　動いて居るも情けなや。

思へば去年船出して
　お國が見えずなつた時
玄海灘に手を握り
　名を名乘つたが始めにて。

それより後は一本の
　煙草も二人わけてのみ
ついた手紙も見せ合うて
　身の上話くりかへし、
肩を抱いては口ぐせに
　どうせ命はないものよ
死んだら骨を頼むぞと
　言ひかはしたる二人仲。
思ひも寄らぬ我一人
　不思議に命ながらへて
赤い夕日の満洲に
　友の塚穴掘らうとは
くまなく晴れた月今宵
　心しみじみ筆とつて
友の最期をこまごまと
　親御へ送る此手紙
筆の運びはつたないが
　行燈のかげで親達の
読まるゝ心思ひやり

出征

父上母上いざさらば、
わたしはいくさに行きまする。
[illegible]に育った男[illegible]、
[illegible]に行[illegible]に、
わたしは人と生れきて、
而かも男子とあるものが、
お國の爲の御奉公は、
いつであらうと待つうちに、
昨日とどいた赤だすき、
かねて勇んで行きまする。
行くは旅順か奉天か、
いづこの空か知らないが、
お天子様の爲だもの、
うち死するはあたりまへ。
父上母上いざさらば、
これが此世のいとまごひ。
父上あなたは御老體、
山や畑のおしごとも、
どうぞ御無理をなさらずに。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
大事に孝行盡しませ。
父上母上いざさらば、
[illegible]
[illegible]村の人達に、
[illegible]
村一番の[illegible]、
[illegible]
手をさしあげて聲そろへ、
萬歳萬歳萬々歳。

山崎紫紅篇

松の歌　始めて佐島を望み見て　木曾殿



松の歌

茅ばかりなる丘の上に
ひと木の松の老いたるを
里人あがめて神縄を結ひたる
そもそのさまをたゝふれは
金春大夫「翁」を舞ふか
差す枝引く技法にならび
そよや千秋の声
[illegible]どや萬歳の声
[illegible]の頭は天に秀で
[illegible]の裾は池を[illegible]へ

[illegible]は走りて水を飲む
潜める龍の姿あり
[illegible]月の夜は鳥を宿し
自然の文をうたはしめ
朝日に鶴の巣立ちして
青き天にいさぎよき
ある時は冬のあした
ただむきに萬斤の雪を擔ひ
たわわに力も折れてんける
[illegible]ち拂ひて緑を現じ
あるときは雪のくれ
巖を劈く黒風に
ぬかづく諸木を嘲笑ひて

苦苦しけに旗を守りたる
曲れる幹は[illegible]の
用なきにこそいのちあれ
[illegible]尺にはづれし枝ぶりは
たまたま千歳を過ごしたり
老木ますます[illegible]を得て
[illegible]に[illegible]ともならず
[illegible]を枝に加へては
[illegible]に生命を[illegible]らす
[illegible]も[illegible]夜を[illegible]り
[illegible]
[illegible]
[illegible]

生けるか死せるか我が本性を
知ら[illegible]月
二[illegible]
風[illegible]

東風ふきこめば焱そらさまに
虹にまたがる[illegible]修羅吉王
黒龍かけりて天に昇る

蟠まれば地を掩ひ
[illegible]れば天に跋る
青き角、黒き胴
鱗あざやかに爪するどし

あなづる者には威嚴を示し
懇ある者には和容を見ず
わが劫初より芽生して
二千餘歳の星霜を經ぬ。

始めて佐渡島を望み見て

（赤倉温泉にて）

そのあさよ
東明若き瓜瓜の蔓
裾野の草も小暗にて
湯の客いまだ起出でず
湯風[illegible]
かひな[illegible]

夜の雲[illegible]下に垂れ
懇よ、[illegible]、人間の
迷ひさめなと沈み行き
[illegible]
堤の柳、淀、流れ
おぼろおぼろに分かぬとき

樋道おくる湯の音に
靜かをやぶるさみしさや
むねに響ける北濱の
荒浪やもし見ゆるかと
風呂より躍り立ちてあれば
右よ左よ山の脚
雲浪まがふ中空に
ものこそ見ゆれ佐渡が島
一切經を運びたる
つかれに伏せし黄牛か

[illegible]高く[illegible]ける
[illegible]の地の[illegible]せし
[illegible]

あれ[illegible]
上行生まれしかの島に
われ對すれば折伏の
劒の鋒先肝魂に
あたれるを覺ゆなる

見よ黄牛は眠りさめ
やちまたたせる金色の
角をふるよと見てあれば
ひんがし空に日は昇り
船の帆影は銀に
望の色をあらはせり。

木曾殿

三井の鐘は湖をわたりて
入相を告げて行く
鶴立ちてさざ波の
汀によする聞こゆ

折から粟津野の
塚の中に聲あり
兼平やある

いかに〳〵四郎
おびたゞしき人馬のどよみ
痩せ男きいたるは
様かはる修羅の勢や
搦手のたゞ將軍か

つく息にほと火を吐きて
今井のいふ
業の戰ひまたければ、
おん見送りもしばし
一夜をつゝむ渋茶に
ふしあはせでとまれなつも
ヒリヽと二個の師
またふたゝびまみゆる粟津へ
門川を廻る人質なれ
あかにけり曲輪に
しかもの、さてもその
とやの原をさかな

忝けなくも義仲
清和の系圖正しう
いささか世に知られたり

業つゝむ修羅道に
沈みては日夜の責苦
闘の聲を叫びに
小休みとてなけれども
勝つときの心地よや
足を貫く鐵刀の
痛さも忘れ
降りかかる輪棒の
苦みも思はず

わざ〳〵歌の師匠
さかしら顔のにくさ
ひとあふり、あふらうやと
いひ〳〵
さてさてにおかしい鼻
いかと立つ見れ

武骨ぶりへけるは
よしなのこと敷島の
歌の道は難し
門前にして千の

師となりし彼れ
はかなき武者の
いつをいつまで語らう
國亡び家朽ちて
幻は草に殘りぬ
止まりたまへと振翳る
しばかれの音響
闇間たる螢火
やうやくに明きは
すはや修羅のときよ
今夜の敵は誰そ
ものものしと武者づくり
兼平來れとさし招く
咳ばらひ、えいえいと
夜嵐にまぎれて聞こえたし。

平木白星篇

日本國家　機上の唄



日本國歌

一

巨大の天體日に日に新に
不滅の光明の赫々たる間は
我が爲すつとめの無窮無限

二

足ること知らぬが我、この精神
勝るを好むが我、この習慣
一死を誓ひて斷行せむ

三

慕うて來らば疑惑つゆ無く
美酒を獻げて敵をも容るるに
天より寛なるわが心膽

四

將帥賢く堅甲そなはる
國々あれども、我、國としては
威徳を旨とす三千年

五

左手には亞米利加、右手に清、英
自由の貿易、我、商としては
さもこそ天秤のその中心

六

自然の力を人事に用ゐて
「鍛鐵」「鑄鋼」二つをつとむる
文明こゝに新紀元

七

三尺無くとも劍は無くとも
平和の詩をもて驥馬を走らせ
凱歌をあぐべき機一轉

八

皇天苟も我れ唯一なりせば
何とて人心相去り離るる
「大我」に合せよ唯我、自慢

九

豆より小なる坤球東西
鬪ふおろかさ、いでいざ一人の
主權の下にて親和なさむ

十

渇には濁らぬ泉をこそ飲め
妻には穢れぬ女をこそ娶れ
上には則ちわが日本

十一

世界は日本の一の名にして
日本は世界のまた假の名ぞと
我が父その子にこの遺訓

十二

ああ我が任務は世界の統一
ああ我が抱負は人類共同
千歳これをば言ひ傳へむ

機おり唄

一

機の木がくれお山の奥の
茅の伏屋に棲むたをやめの
女可愛や、いろ衣を――
今日もとどころと織り出すやら
白歯娘の名はおこんとて
親も無ければたよりもつても
辛や寂しやさればとて
誰に習たか戀、しをらしの
うそぢやあるまい、聞いたか我も
我も見て知る井堰の小六
花で咲くなら花菖蒲
姿やさしく心も直に

二

野くれ山くれ里川そうて
けふもゆくゆく井堰の小六
扱の肩あていとしほなげに
ゆくも戀から山王の御山
『山のお山のおこんはどこに
機が織れたらもらひましよー
里へかざりの五百綾錦』
『よくはござつたさはさりながら
今日はやうやう三尺四尺
いいいいい とんとんからく
とんこういいいとんこうと
明日は必ず織つても進じよ
許し下され又こそござれ
風が吹くやら此方の窓の
ほつれ搔かしやれこの櫛に
わしが機おる唄聞きたか』

三

『うまれいづこの名は[illegible]と
知らず知らぬが[illegible]
うち解けそめし色糸の
戀の恨はこの片結び』
野くれ山くれ里川そうて
今日もゆくゆく井堰の小六
後しぶきに降る夕時雨
笠は斜に棲ひつから[illegible]
『山のお山のおこんはいかに
機が織れたら針留めて――
我身放さぬ女のかた[illegible]』
『よくはござつた、さはさりながら
今日はやうやう六尺[illegible]
いいいいい とんとんはたく
いいほといいほとい

明日は必ず織り切りまする
許して下され復たこそござれ
雨が降るやらしとゞに濡れた
袂乾しやれ褶襟して
わしは機おる唄聞きながら

『君はからよと何々までも
計るでもなき一人の命
ふと織りあげし大巾の
絹の名残の紫鹿の子』

四

野くれ山くれ里川添うて
今日もまた行く男の姿
戌刻の鐘に送られながら
裾にまつる萩女郎花
『山のお山のおこんはいかに
機が織れたら袖くけて——
人に見せたや戀ぬれ衣』

『よくはござつた、さはさりながら
けふは彼是八尺九尺
いゝいゝいゝとんとんさらさら
いゝいゝいゝとんそろそろと

明日は遅けず織り終へまする
許して下され又こそござれ
猿おかせの一味の酒を
一つ呑ましやれあはれとて
わしは機織る唄聞きながら

『胸に一念思をこめて
横に千筋は女の操
わしの心はいつまでも
松の緑の相生模様』

五

野ゆき山ゆき里川越えて
人目忍びの頬隠しつゝ
烏啼くとて月暮るとて
止めかねたる男の心
『山のお山のおこんはいかに
やがて織れたらつい縫うて——
憂さも忘れる夜の添臥に』

『布を取つたらもうこれ限り
翌日は逢はれぬ女がつらく
永い別離となるのがつらく
迷ひ迷うて心はうつつ

一寸織けば一寸濡れて
織れば一尺涙に朽ちて
いつそ織らまいさりとては——
何といひわけお前にせうぞ

『絲に思をあかそとすれば
思ひ絶えよと綜糸切れて
筬はつれなや、外れつつ
ちぎる心を語らせまいと』



野口米次郎篇

われ山上に立つ　月夜　歌の道　詩人　廣重に與ふ　某詩人に與へる　森の彼方　ロバート・ブラウヰングに與へる　蓮花崇拜　[illegible]　空しい聲の行[illegible]　我は太陽を崇拜する　影　[illegible]　歸去來[illegible]　影の[illegible]　[illegible]　向日葵　雀　奇怪の[illegible]　木の葉　藝術　[illegible]　瀬戸内海　細波　[illegible]　船頭　山上の一夜　沈默の血[illegible]

われ山上に立つ

かくてわれ山上に立ち、
時間と沈默の帝者、雲の首府、
空に頭をあげ、[illegible]、
沈まむとする太陽を見て[illegible]、[illegible]悲し
　き落陽を[illegible]。
夕は潮汐にこそわれをも運べ、
その落陽の[illegible]にかくれば、
ああ、われにしのび寄る闇なる沈默は、
[illegible]は怜悧の[illegible]の如く、或は蛇の如し。
大[illegible]しわれ山上に[illegible]、
野の上に響きわたりつつ[illegible]、
われに黃金の快樂あれ、氣高き眞理あれとい
　ふなるべし、
げに、われは都會の騷擾を厭ひ、
その狂暴なる威嚇をのがれて立つものな
　り。
太陽は[illegible]しく遙かに沈み、
[illegible]と[illegible]の手にわれを殘しゆく、
夕はたゆたひとその影を拂つて西方へと逝
　き、
その過ぎゆく夕と共に、樹木の長き影は消ゆ
　る……
如何に沈默の脈はわが魂にしのび込まむと
　するよ。
われは、[illegible]の[illegible]
[illegible]と[illegible]なる[illegible]として立ち、
如何に[illegible]その身か夜に溶けゆくかを見
　むとするなり。
月は徐々として上る……われの影は
霧の如き夢の逍遙を地上に描く、
空に微笑み無言の歡迎を送れる一箇の人間
　あり、
そはわれにあらざるわれなり[illegible]

月夜

明月や池をめぐりて夜もすがら　芭蕉

悲しき月は山を、
われは靜かに町を離れ、
[illegible]にして、われ、[illegible]を
[illegible]なき[illegible]に[illegible]、

月[illegible]を浴たし、
われ[illegible]を踏み、人間の[illegible]かる。
神秘の[illegible]び、恰も愛の耳語[illegible]、
わが髪[illegible]……わが髪は微[illegible]れて[illegible]、
われ混[illegible]甘きを感ずれど、[illegible]何たるを知ら[illegible]。
われ月に[illegible]笑み、
月われを[illegible]り……沈默いやが上に深し。
水面を見[illegible]、この世以外の夢、
青い[illegible]の秋をのせて無言に歩めり。
月は大きい柔和な笑を水に投げ、
誇りを[illegible]海を讃へるが如し。
思へば、[illegible]岸に寄る海の情熱に、
女性に[illegible]秘密あれど、
われ遠きを彼方に女性の愛を見捨てたり、
徐ろにわれ、月の海に沈むの美しさを惜み、
月を崇拝して、再び海中に出でむことを願ふ。
鳥は潮の真珠を翼より散らしつつ、
にはか[illegible]波の底より浮び上れり。
われ海岸に坐り、
耳を海に欹て、
[illegible]む。
その[illegible]月の[illegible]盤の如く偉大なり、
海は[illegible]を、[illegible]を守る……
そは世界[illegible]一日より遥ることなし。
われ海岸を[illegible]、
翌朝に及べ[illegible]われ思ふ所は、
月の思ふ所なりたり、われその何たるを知らず。

歌の道

歌の道は静かな薄明なれ、
蘆の歎息に乗つて来る。
目に見えない仙女と接へむ……私は知る、君の家は風の懐中にあることを。
君はさまよふ雲の幽霊なるか……私は聞く、
君の言葉なき雨の憧憬を。
君の歌は灰色にて悲し、されど君は、光線の喜悦を知らざるにあらず、
げに、君の微音は、背後より人を驚かすこ[illegible]とより
ああ、君は星の神秘を護れる胡蝶なるか、
雲の古城を廻る孤独の鳥なるか、
[illegible]、
ただ[illegible]の[illegible]
ここ[illegible]の[illegible]
君にあこがれ[illegible]
[illegible]ふ[illegible]
ああ、君は[illegible]らむ、
願くば、私[illegible]
を教へ給へ。

詩人

深淵と暗黒[illegible]、
輝き出づる[illegible]、
完全なる[illegible]、
恰も太陽の[illegible]如し。
ああ その呼[illegible]し、
その両眼は[illegible]照らし、
その額に微[illegible]、
その背は天[illegible]光[illegible]を擁ふ。
彼は[illegible]に[illegible]幻想の[illegible]歩み、
永劫の情熱を放散しゆく。
彼は朝日の輝きに仕居し、

その言葉より[illegible]音樂なり。
人若し彼の[illegible]線に會へば、
直に墳墓の塵を離れ
瓊樹の[illegible]へと動かざるを得ない。

廣重に與ふ

君は自然の一角を力說する……
[illegible]幾一點とでもいふ點を、愛の力で描いての
ける、
新しい美の創造者だ、
自然と人生を改造する巨腕が君にある、
水、山、木や人間を整理する畫家だ。
君の藝術には、
虹のやうな大膽な飛躍がある、
音律がある、狂喜がある。
私に君の繪を眺める……
[illegible]も浮世の一週間を終り疲れ、雨[illegible]をぐつ
と伸ばす神様のやうに、
繪のうしろから、君の顏が輝く、
そして微笑みながら私にいふ、
「ここに[illegible]きた[illegible]ね[illegible]し、[illegible]一[illegible]かせ
よ、
又そこに大雨でさへ[illegible]と降らしてみる……君
からいつた調子さ、僕の繪は出來上る……
も何か描いてみないかね』
ああ魔法使だ、
浪漫主義者だ、
自然の偏心性を愛する反逆藝術の所有者だ、
君は未知の世界へ突貫する勇者だ。
君は再び私にいふに相違ない、
とあ、今現實の絕頂に立ち、
もう一度想像の羽翼をのばし、
藝術の大飛躍をやつて見よう……君、僕につ
いて來れるかね。』

某哲人に與へる

鳥と花が歌ひのこしたものを
あなたは取つて以て自分の歌にするであら
う……
あなたの諧音は生れたもの、作られたもので
ない。
藝術の叛逆を知らない歌をうたふといふこ
とは[illegible]い、
「その[illegible]

理智の壓制を忘れるといふことは尊い。
あなたはミニュエトやシャンソンや空想に止
れと命ずる、
酒宴や假裝に閉ぢよと命ずる。
あなたは高い座席から下りて、
粗末な着物と言葉の民衆のなかに坐る。
單純のなかにあなたは自分の解放を求めた。
眞實なる自己を確にするといふことは尊い。
現實のないところに眞實の想像がある理由が
ない……
人生を平易に見るといふことが
發見であり感動である。
私はあなたに人生と世界の問題を讀むであら
う、
[illegible]と[illegible]の[illegible]り合せを、
[illegible]間の深さ、[illegible]間の[illegible]を、
完全な[illegible]の[illegible]を。
私はあなたに人類の[illegible]くべからざる偶然への
服從を讀むであらう
[illegible]の場合を[illegible]に[illegible]する[illegible]たる知識を
讀むであらう
[illegible]はただ[illegible]から得られ
る、
眞實なる[illegible]と[illegible]

世界を保守することを我々に迫る。
あなたの魂は時間と空間との上に浮きのぼる。
不断と永劫とに結付けされたい生命の心理
明澄……
静寂なる解脱……
世界
あなたの鏡はあなた自身以外に何物でもない。
私は忙しい風に見た
人情と法則を暗示しながら過ぎるのを見る、
風は熱情が横はつてゐる陰影へと急ぐ。
おお風よ、私はお前と共により良い生命と詩とを築くであらうか。
あなたは夢と希望から生れた一光明、
生の戦標を歌ふ人……
あなたの幻想の魔法、
あなたの歌の妖術をして、
沈黙の沙漠の上に逍遥させてください。

森の彼方

はるかなる森の彼方に美人住む。
その胸に金の首飾り、
頸に翡翠と珠とをかけて、
目に光輝、彼女は渓流にその身を正し、
神秘の微笑と共に、私を見、而して微笑む。
私は静寂の路を踏み、罌粟の花を摘み、
彼女の姿容を惜しむとする。
彼女の影を覗ふれば、樅の木の影の如し、
その影に添つて私は戀の歌をうたふ。
彼女は楽器を取つてその絃を打ち、
彼女の声は白鳥の声に比較される。
星と微風の住家よりその音を迎へ、
恰も西方の谷を眺める一枚の樫の葉のやうに、
長い流離を私に與へる。
甘やかな愛人よ、美人よ、
私はお前と共に住み、
盡きたい侶の笑を永劫から紡ぎたい。

ロバート・ブラウニングに與へる

あなたは人生のハゼントを官能で見る喫煙室の物語師、
あなたの愉快な嗅香はあなたの技術を朦朧化させ、
もとの面目を更に一層新たらしめる、
あなたは□□を□□された田舎紳士だ。
あなたは時に皮膚の表面を逃れるため醫者の助けを求め、
あなたの大きな真理の前はあなたを偉大な傳道者となし、
殘忍に見えるが、あなたはしばしば神秘の啓示を示現する。
あなたは世界の貪慾な大食家だ、
天國と人生との間をヒョトトトトするトロバドーアだ、
六絃琴にあはせるあなたの愛撫は、私共に肉體的な痛さを與へ、
あなたは現實家だが、不思議に眼を樂天主義に向ける。
あなたは人情の火の上に□□に跨る猪頭騎手だ。

蓮花崇拝

羅漢者は、谷からも山からも忍び寄る、

その心は着物と共に、白い。
彼等は今聖き池のまはりに集る、池はこれ蓮
花の聖殿……
[illegible]の水を貫く無音の蕾は、恰も合掌の女
[illegible]だ、
恰も合掌[illegible]女[illegible]のやうに、禮拜者は合掌す
る、祈禱する、
[illegible]は言葉の祈禱よりも更に尊い。
[illegible]も、星も、その歌を止め、
[illegible]今や動き始める。
ああ、復活だ、世界の復活だ、人生の復活
[illegible]……
[illegible]上る、合掌の蕾は
[illegible]佛[illegible]、ぱつと破れる。
[illegible]る、開いた花の心のなかに落ち
る、
いな、[illegible]な人間の心のなかに落ちる……
[illegible]
[illegible]
[illegible]家路へ向ける、
いて、[illegible]へと向けるであらう。
[illegible]の[illegible]を受け、黄金色に輝
き、
[illegible]

狂想

麥稈一把と、女の[illegible]と、土塊で、
私の家は作られる……さうだ。
世界はいらない、
ああ、ほしいものは、眞實の詩の一つだ。
左の窓から、雲は飛びこみ、
目には見えない一群の、
高慢[illegible]な踊り子が、
右の窓から踊りこむ、まるで潮だ。
いやはや、われは[illegible]徒、[illegible]まつて心
病む。
踊り子の拍子に乗つて、[illegible]、
滄海[illegible]じて山嶽となる時[illegible]、
ああ、詩が止む時道徳ここに始まることを我
は[illegible]
身に[illegible]、夢の斷片、
とては心に[illegible]夜陰の恐怖……
[illegible]で、空を眞赤に燒き[illegible]い、
星を集めて、[illegible]に撒き散らしたい
私の魂には木の葉をくぐつて、様々な假裝す
る……

[illegible]一つのために大地へと急ぐ。

空しい歌の石

雨[illegible]降ると私の[illegible]……六月の雲の
やうに、
歌が、私の耳もとにむくむくと涌きたつ。
風より輕いその足拍子が、或は高く、或は
低く、
波うち、私の眼は夢で燃える。
[illegible]
[illegible]

私は太陽を崇拜する

私は太陽を崇拜する……
[illegible]

やうだ。
其處で私は、空の甘い夢を築くであらう。
私は女を禮拜する……
戀愛のためでなく、戀愛の追憶のために。
戀愛は枯れるであらうが、追憶は永遠に清い、
私は追憶の泉から、春の[illegible]を汲むであらう。
私は鳥の歌を聆聽する……
その聲のためでなく、聲につづく沈默のために。
ああ、聲から生れる新鮮な沈默よ、「死」の[illegible]音よ、
私はいつも喜んでそれを聞くであらう。

影

歌は終つた……一寸、待ち給へ、
君の歌は形に過ぎない、形は消える、
歌の眞實な靈は、歌が終つても終に殘る。
……うだとも、君の胸の波に反響して、
私の歌を震はせる、（それが私の歌の投げる影だ。）
君の胸の衝動に、私の遙か眞實な遙か白い靈が宿り、
それ方で、[illegible]は卑と[illegible]から高潮する。
……[illegible]は過ぎた、
春の薔薇や鳥は形に過ぎない、
私はもつと大きな春を、緑に光り夢に光る夏の森林に見る……
春が殘す心の影が夢の林となるのだ。
ああ、私は春と成つて心の影を、世界を蔽ふ夏の森林に宿らせたい、
いな、私は靈の影を、靈の影を、將來の上に投げたいものだ。

禪僧

彼に單調な好みがある、
宗教の超絶を信じ、
悠々と莊嚴の時で整理して、
彼は神秘の路を歩む……
これ以上、麗はしい單純がどこにあらうか、
どこにもこれ以上現實的の締があらうか、
彼以上、不變不易の存在は無い。
彼は信仰に額づき、
神秘の路を歩む……それが彼の當事だ、
彼は何故かを問はない。
實、表現外の[illegible]に[illegible]
沈默の[illegible]を[illegible]、
その[illegible]と運命との前に[illegible]する。
彼は宇宙觀に目覺め、
意志集中のため寂寞を深め、一人[illegible]
彼は自然の機能を支配して、
始めてやうに白光に[illegible]えてゐる。
人生の事實も、道德も、
最早や彼に無意味だ……
ただ、沈默と祈禱の力を感ずるのみだ。

歸去來賦

西の都に告別して、
東の海へ歸らうよ、
太陽が最初に接吻する東の島へ歸らうよ。
甘い甘い生れ故郷へ歸らうよ。
いざ、憂愁を山に横たへ、
すべての歌を鳥に與へ、長く長く歸らうよ。
森を動かす風を聞き、私は目覺め、
大空の雲へ、生命の喜びを口笛吹かうよ……
雲の生命は私の生命であるだらう。
思ふに、愛人は脊高くなつたであらう……

最後に別れた時、[illegible]より低かつた[illegible]
提燈の月を、[illegible]花の間に點し、
平和のやうに[illegible]垂れる藤の花に、[illegible]より、
たがひの存在を[illegible]らうよ。
彼女が勝たば、七つの接吻を挑[illegible]よ、
私が勝たば、七[illegible]の接吻を受取[illegible]、
どの道、接吻は[illegible]のものになる[illegible]う。
そして私等二人、聖者詩人の像[illegible]を生き、
「人生はただこれ[illegible]愛」の一義を[illegible]よ、
ああ、戀愛と[illegible]一株で、永へに[illegible]に生きよ
うよ。

影の一旅客

眼に見えぬ神の御手に招かれて、
そよ吹く銀の風の如く、聖き空[illegible]
胸に秘むる一曲の歌……我等[illegible]
だ。
われ等の歌は、亡びし都城の跡を[illegible]、
王國の哄笑も、我等の足を止め[illegible]、
我等の心は遠く、太陽、風、雨を[illegible]、
聖なる大路をさまよふ……ああ、我等は影の
一旅客だ。

向日葵

お前は情調から破れ出る。
私共は悲しくも經驗に執着する。
お前の各原子は、生命の奇蹟に[illegible]、
如何に充實の生命にお前は生きるよ、
日光に生きる熱情家、
誇りある青春の表象、
お前は顔を寒氣に向け、影に向けようと思つ
たことがあるか。
お前は舞上る色彩の抒情詩だ、
無言の歌にお前は飛躍する。
お前は生命の意味を呑みほし……
ああ、驚くべき自意識、
ああ、壯大な存在感。

雀

一幽靈、
沈黙と影のなかから再び踊り出たもの、
前世の色彩と追憶をあさる獵人、

彼は同じ夢と人情を、ここに再び見出すこ
とが出來るだらうか。
彼は生きる力の[illegible]者、
各瞬間に獻身するもの、
彼の一瞬間は人間の十年に比較されるであ
らう……
各瞬間は彼を唆かし、慰め、驚かすに相
違ない。
彼は神經の幽靈……
彼が呪詛するならば、
すべての心を以て呪詛するであらう、
彼が後悔するならば、
すべての盤を投げて後悔するであらう。
ああ、私も彼と同樣に、同じ生命の感動を味
ひたいものだ。

奇怪な雪

あは、奇怪な雪だね、
ははは、面白く踊るね、
お覽、可愛い[illegible]あ、なに上げて。
死は甘い、[illegible]

空しさへ死んで行く、
あんなに綺麗な夢を見せて、ははは。
永遠に甘える事と一緒に、
私共に結ばれる自己を喪失する……
これこそ自然な最期であらう、ははは。
舞ひ消える自我ではないか、
死よりも偉大な、荘厳な瞬間はない、
お前、雲と雨とは消えない。
ははは、臆病者だわね、
怖くて死ねない……
まだ小さい我儘が戀しくて、ははは。
悲哀を殺さずに死んでゆく、
雲は、ははは、奇怪だ、
私の戀人よ、お前は臆病だわね。

木の葉

沈黙は破れる……自然へと
たしかに私の[illegible]に帆れる、

[illegible]
[illegible]
[illegible]
わたし、私の心は弛む、
[illegible]
[illegible]
ああ、私は大きい、
失意と希望に吊されて、
世の想像と幽靈に
結付き、かつ震へる。

藝術

そもそも藝術は、
蜘蛛の巣のやうに、香の空中にかゝる
微かで生々と、音楽にゆれる。
（人生に洗錬する藝術、藝術は悲しい。）
その音律は瞬間の緊張に死ぬる、生きる、
暗示がその生命だ。
藝術に美と夢の『探求』はない、ただ夢といふ
に、

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

朝顔

太陽の最初の呼吸を感じつつ、
君は、急に、暗黒の部屋を破る。
何たる犬のやうな、豚のやうな嗅覚が君にあるよ。
君は重要ならざるはつい又から、
君は大きな嬉しい顔をさらけ出す。
何たる夏の朝の嘘美が、君の顔にあるよ、
餘りに嬉しいので涙を流し君の顔……
太陽に魅せられて大きく開いた君の顔……
柔和でしかも粗野な顔……
世界のすべてで語られた上は、死んでも嬉し

さうた[illegible]の續……

瀬戸内海

静かな[illegible]と流れ、
春陽四月の[illegible]は[illegible]色に輝く……久しく忘
れた、[illegible]の光に
瀬戸内海の[illegible]明界に[illegible]……
私は無聲の[illegible]を聞く、
飛躍する私の魂の[illegible]、
千年も以前に夢見た私の[illegible]の歌を聞く、
仙女の世界の夢を聞く……ああ、瀬戸内海の
美しさよ。
私は今日この[illegible]、走る、
私を[illegible]、
歌うた[illegible]、
ああ、[illegible]の歌を聞け、
[illegible]、[illegible]に惜別する！）
白い[illegible]、白い戀愛の力で私の心を
[illegible]、
この[illegible]だ、[illegible]、美しい瀬戸内海
[illegible]。

綱渡り

彼は他人を考へる時間が無い、
自分自身であることが、エゴイストの藝術
だ……
何といふ熱中を彼は仕事にもつであらう、
熱心が極まる時、彼は沈默に入り、
言葉を失ふ時、彼は自分自身の人格を作る。
踏外さない彼に、何といふ行爲の節約がある
であらう。
彼は祕密と方則の所有者だ。
彼は人生の遊戲者でない……現實その者だ、
彼を眺めて私共は空想と夢を見捨てる、
さうして近代の苦痛を感ずる。
彼と等しく私共も、生か死かの舞臺に立つ藝
術家だ。

幽靈

額の髮をかき上げる手の樣子で、
（思想の枯葉のやうに、彼女は髮をかき上げ
る。）
微風の[illegible]を求める眼つきの工合で、
あは……私は彼女をよく知つて居る、
私の古い愛人だもの、いつの頃からかは知ら
ない、、
（死んだ思想の木は[illegible]搖れる搖れる。）
銀色[illegible]やかな彼女の耳語に、
私は[illegible]の消息を聞くやうな氣がする……
何だか何だか知らないが、忘れられない。
「ああ、時の幽靈、眞夜中の幽靈だな」と、私
は[illegible]。
（時計はチンと一時を打つ。）
信仰の古い言葉のやうに、彼女は耳語く。
（古い小川の信仰は流れゆく流れゆく。）

船頭

夜の[illegible]場で客待ちの船頭は叫ぶ、
『[illegible]の町へ船が出ますよ！』
「提燈をともして水を照らしてください、
暗[illegible]私共の骨を[illegible]であらう。」
「客人よ、提燈は無用になさいませ、

眞黒な[illegible]をすべつて、
始めて[illegible]町へ行かれます。
我儘な[illegible]に航行を[illegible]らしめる、
客人よ　[illegible]を忘れてはいけません、
孤獨の洗禮を受けなくては、客人よ、
驚異の町へ[illegible]は貰はれませぬ。

山上の一本松

昨朝私はお前と[illegible]の合唱を聞いた、
昨夜もお前と月の合唱を聞いた。
そしてお前に燃える音律の火が、
如何に相手の心と溶けあつて、完全に歌の
一曲を奏[illegible]たかを見た。
お前の謙讓の[illegible]、他を理解する叡智、
それに自分[illegible]る批判力は如何にも立派
だ。
（私は自然に向ふと恥かしい肉の一斷片たる
に過ぎない）
ああ　山上の一本松、
お前は鳥と月との場合のやうに、
川とも雲とも乃至は形の歪んだ岩とも調和し
て、
いつでも[illegible]するであらう、
（私は[illegible]な人間の一人で
あることを[illegible]）
今日お前は[illegible]はない青空の下で、
たつたひとりで[illegible]居る……
お前は、[illegible]な聲の獨唱家！
私はお前の[illegible]を聞いて、
始めて最高に達したお前の美を見ることが
出來た。
お前の獨唱[illegible]態度に大きな獨立の
威嚴がある、
そしてその獨立は沈默と孤獨の堅い空氣のな
かで育つたものだ。
お前[illegible]たらしめるお前の獨唱、
ああ　お前の[illegible]た獨唱に、
何たる壯麗な[illegible]私は感ずるであらうか。
私は泣かないばかり[illegible]感激をお前の獨唱に感
じた。
多少たりとも個性は合唱の場合に破れる、
だが、
獨唱は自己[illegible]の完全なものである。
ああ　山上の一本松、
お前の獨唱家としての價値は、
[illegible]、ただ[illegible]させた
[illegible]たる[illegible]を[illegible]て
[illegible]、
[illegible]から、[illegible]なる一本松、
[illegible]！　歌へ！

沈默の血潮

右には[illegible]とした灰色の沙漠、
左には鉛のやうに尖つた雪の峰、
前はその間を無邊際[illegible]さすさんで
木の葉を落した裸木[illegible]梢先から沈[illegible]
滴る……
君はかういふ場處を想像したことが[illegible]
私は今この沙漠と[illegible]の山との中間に[illegible]、
ここは世界を失つた人間が追放[illegible]處[illegible]
も知れない。
私は全身の呼吸を凝らして、
ぢつと蹲み、
沈默の血潮がぽたりと樹木から落ちて
詩の寶玉と變じ、
夕日をうけて燦爛と輝くのを見出[illegible]。

前田林外篇

黄金の扉　尼少女　夏の夜の夢　夢のほのほ　極樂鳥の賦
毒は金杯より　杜鵑に



黄金の扉

ささやく、「[illegible]を汝はひとり
[illegible]
[illegible]
[illegible]

「あゝ、こは悲し」と扉に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]に[illegible]たり。
[illegible]

汝が[illegible]め、[illegible]む、靈妙の扉。
何等の靈境、[illegible]の[illegible]を
[illegible]く[illegible]、[illegible]、[illegible]。

尼少女

いつ[illegible]と決めて[illegible]
我が世の生命を[illegible]
[illegible]たき宿[illegible]の御衣こそ着け
ふしめにかこたぬ、可憐の姿か。

[illegible]
[illegible]
[illegible]

野の子[illegible]ひぬ、[illegible]
香、香、[illegible]光ある天女と描き
一枝添へむか、美し白百合。
さはあれ、燃ゆるは理想か、戀か
見よ、この[illegible]の[illegible]に。

われ、父[illegible]かで、[illegible]
少女の[illegible]を[illegible]つつ老いにき。

夏の夜の夢

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

その時、我が幽室、ああ、久、墜ちて
夏草繁茂れる箜篌啼う、
「いつ世にかへる」。と泣きつつ居るに
『悔ゆた[illegible]。』と錦の小蛇は寄り來、
青き火灯しつつ、いとしと相見
我れをば再び少年と化して、
「ああ、君、永遠こそここに契れ」。と
その瞳もみるみる艶なる少女。
燃ゆは、秘密、花蛇に纏へよ
節もて題せむ、「夏の夜の夢」。

夢のほのほ

燃せよ、雲と、しば祈れど
紅色の裏は見せず。
橄欖しげるこの森にし
行くに火び、鳥ぞ啼く。
ああ、止むなくば、蛇に打たれ
うたてや、とはを闇に泣かむ。
照らせよ、星と、また叫べど
星は燃えず、雲も黒く、
ふと眼に映る、姿や何に
それぞ、二人の天つ童
不盡の熱火、さては鬼火
點せる燭は焔奇しき、
右、わらべの捧げぬるに
焔のはしら、立ちて燃ゆ。
焔の色は、紅き眞珠
焔のなかに、妙華の宮。
暗き夜、誰れか、汝を照らし
かの樂土には至りぞ得る。
懺悔にくるる、そのをりをり
われは「学善」、夢と見これ」。
左、わらべの捧げぬるに
焔のはしら、裂けて散りぬ。
焔の色は、青き眞珠
焔のなかに、地獄の淵。
「暗き夜、誰れか、汝を照らし
かの奈落には堕りぞ得る。
遂に夢にくるる、その[illegible]
われは「[illegible]」、夢と見さ[illegible]。

極樂鳥の賦

一

ああ、絶南の樂鳥や
寶相樹繁茂れる深林の
たかに棲みたる極樂鳥、
あした、旭紅の影待を見て
ゆふべ、残照の影を見て、
水銀懸る長き尾を
右に左に翔げつつ
林に紛れて翔る時、
閃く濡れたる幾線の
[illegible]色の繊き尾は、
黄金をばだつ冠毛と
日に輝きて、[illegible]きて
あたり何等の[illegible]す。
ああ、人の子は眞に果せて
容姿誇るに何ありや、
鳥の[illegible]詩ふ見よと
扇の如く翼延べ、

ほのかに夏なる音色して
寶相樹の枝に乗り遊し
囀ずる仙禽の面白さ。

二

我、[illegible]日の[illegible]りを
思ひ[illegible]に來り、
散策[illegible]に奇しき物
すつの寶[illegible]と佇むに、
たちまち[illegible]に下り
畏ず、屋を[illegible]り打を[illegible]て
學者[illegible]に[illegible]き、
さまで日に浴しては
ミートスの地の[illegible]に、
その御意を凝すこと
[illegible]むな、いた[illegible]、
我、[illegible]に身を寄せ
彼處に定めし[illegible]は[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

何等[illegible]を極むるや。

三

ああ、慣習に拘泥ひ
創作は此の[illegible]を[illegible]すと、
眼小さき[illegible]士のは
智慧あり[illegible]に驕りて、
愛たてや、萎微と凋落の
悲地に人を置かむとす。
見よ、[illegible]も
その[illegible]も[illegible]も、
聖き[illegible]より進み初め
[illegible]高き[illegible]に[illegible]たまま、
創作は[illegible]の門を開く鍵。
ああ、紅花一つの[illegible]ぜとぞ
沙漠に似ずや人ごころ、
[illegible]くて教化も益は無り、
眞治も終に何かせむ、
[illegible]、鳥よ、[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

毒は金杯より

（[illegible]の妖姫が唱へる）

いざ、君、金杯かたむけたまへ
おごりといはむも、時は春なり。

まぼろしのみか、國よ城にうたげ
いかなる愛を守りにでも[illegible]けむ。
昔の大海、この戀の國
[illegible]、今、[illegible]りつ。

いで、君、[illegible]へて、[illegible]の酒を
[illegible]、[illegible]なめて、
人の世歡樂、これに漏れむや。

なにはあれ、毒は金杯よりと。
[illegible]の[illegible]はあれ
[illegible]の[illegible]はあらむ。

[illegible]、[illegible]のふしよや
[illegible]、[illegible]にたべし。
[illegible]、ふれなむ、[illegible]
[illegible]、[illegible]なむ、白き[illegible]むさ。

もし、智は[illegible]く、心は弱くも
君、ただ[illegible]を[illegible]せよ。

さはいへ、[illegible]、青春消えなば
あはれ、いかにては、なにすべきや。
わが身、霞とも化しもせば
君は蝶となりて、薔薇の花壇へ、
わが身、露ともし化しもせば
君は[illegible]ますや、[illegible]たへ、

ああ、君、わが君、いなみまさずば
なにとて、このまゝ、いく別やある、
花蕾――、唇と唇と觸れもせず
甘酒や、ふたりは香に醉はれつつ、
春雨、――露とも玉ともいはず
嬉戯よ、ふたりは[illegible]に濡れつつ。

いま、君、命杯、かたむけたまへ
いざ、君、歌ひて、戀歌の調を。
わが嫉ふなとは、理の子、智慧の子
あはれ、戀人よ、一晌に酔へよ。
妖とな思ひそ、魔とな思ひそ
ふかくぞ[illegible]ぬ、こよひの「性」を。

杜鵑に

ほととぎす、
緑なる時に、
夢は聴き、うつつにしては、
汝が聲をきくこと難し
かたきぞや・ふたきだまでも、
「ほんぞんかけたか」と友はききしと
あな、ねたや、あな、なつかしや。

ほととぎす、
汝をききえ得ば
ほほけ髪、白き埃を、
巷にぞ[illegible]る身の
ふたたびは[illegible]もあらたに、
嬉しさに涙こぼれて
福音やきくここちせむ。

秘戀の
わがほととぎす、
汝がこゑはわが生命かも、
わがけふを泣くも笑ふも

たまさかも汝がこゑによる、
秘戀のわがほととぎす、
いま、一度、み靈ただちに、
星ぞ滴る
雨雲の夕、
淡紅の曉かけて、
青葉なるかの森こえて
消えかかる虹の調べに、
たのりゆけ、苦しき聲音に
あはれ、我が魂伴うてゆけ、

兒玉花外篇

平民の屍　闇中田鼠に告ぐる歌　馬上哀吟　松を刺して　可憐兒　傷める鷗　詩人某　ラサールの死顔に



平民の屍

眞紅の鐵のさむる如
わが胸、熱の冷えば今
屍は地に與へてむ、
さらばよ、友よ手をとりて
永久の別れを告げんかな、

苦酒盛られし空盃
血汐しぼりしなきがらは
元の土へとかへさし、
浮世の塵や雨に風
噫、衰へし骨捨てし。

わが靈魂は天つ國
甘き平和、願ぎもせじ、
現世にます苦痛と
暗黑の陰府も厭はじ、
宇宙の間よわが魂は。

はかなく卑き小草さへ
種を殘して枯るものを、
天地の中に留めたる
魂は自由の氣となりて
光の如く磅礴ればや。

土に生れし白雲の
空に上りて動くごと
世へは注がむ、自由の氣、
雲や消ぬとも、あゝ人の
胸より出でし精神き[illegible]き。

闇中田鼠に告ぐる歌

昔來し墓地の側の
畠につきし一筋の
田鼠の跡をとひみれば
夜風は枯れし草吹きて
魂魄さそふ響あり、

月は缺くれどわが胸の
あふるゝばかり悲哀を
晴さむよしもありやとて
梟啼ける森もぬけ
さみしき野路たどひとり、

終日闇に棲む友よ、
生れて人の蔑の矢に
心の創傷きし
人ぞ、青葉のそよとだに
[illegible]かずや、あはれ土の[illegible]、

人と獸のけぢめあれ
同じ非運のわが儕よ、
饑ゑし鼠の廚にて
板を穿たむそれならで
力の限り掘りしよな、

それも光を見むためか、
頭の上の輝きは
汝に似たる醜しき
衣まとへる農夫の
振りあぐ鍬のひかりなり、

やめよ、徒なき企計の
身をば亡ぼすわざぞかし、
吾も幾歳もとめしに
天の惠みやあらざりし
たゞ長かる幼童のみ、

いかに荒れしよ、冬の野邊、
木の葉を食ふ生物は
猫と鷹に苦しめり、
草の莚とかはりなば
小鳥や餌に悲しまむ、

さらば安かれ憐なし、
造化にへだてやあらなくに
人のさだめに一片の
土塊だにもなき人に
比べば富めり、むぐらもち、

まして生れて卑[illegible]、
香もなき泥も饒たり、
貧しき人に一粒の
米も汗なる眞珠なり
價なくして得られむや、

人と人との血に塗れ
嫉妬、鬪爭、わづらひの
塵の地上をおもひみよ、
さても靜けき土の中
天上の福にぞしかねども、

[illegible]斃れたり、
惡魔の無くわが息を
たれに吹かたむ風くは
板と共に、吾はわれし
人住む家の庭をはなれ、

是れぞ空しき夢ぞかし、
死こそ一切のをはりなれ
汝のすぎし道のごと
人や喘ぎて行く終極は
たゞ一すぢの墳墓のみ、

[illegible]
田鼠や穴を出でもせむ
人や一たび埋れては
またも見ざらむ現世を
元の土へと歸るらむ、

弱き小さき獸とて
光はたくもふさはしき
處あたへし神に謝せ、
情も氷る寒き世に
吾れ放たれて恨みあり、

明朝は[illegible]の
来らばこゝにつぶやかむ、
消してかへらめいざさらば
[illegible]は花[illegible]き無くとも
またあらはすことなかれ。

馬上哀吟

重き鞍の身をのせて
馬は歩みの重きかな、
枯草、芒薄は吹き靡れ
雲にたゞよふ[illegible]花、
鳥啼くて[illegible]て、
その名も[illegible]を
[illegible]の山に来りけり、
こゝ[illegible]と
[illegible]る[illegible]を、
[illegible]
[illegible]きは[illegible]に
[illegible]
[illegible]、

いきたる物の影も無く
高く[illegible]、[illegible]く[illegible]。
山の[illegible]におのづから
首くだれば、わが袖と
馬の[illegible]、[illegible]し
夕闇をよけて進みゆく
まごの[illegible]にも積るかな。

壮なるかな永劫に
天に炎をあぐる山、
小さき胸に火は燃えて
われも大地に[illegible]、
人の思想を[illegible]すなる
世をば[illegible]かむと、憤恨の
火にて[illegible]をむかおのが身は
蝕ろ[illegible]、[illegible]ろ共に
裂けてくだけて消えむかな、
呪詛の世にぞ[illegible]は[illegible]じ。

松を刺して

[illegible]
[illegible]

松は[illegible]しき[illegible]を上げ
雲にむかひて叫びけり、

おのが甲斐なき身を嘆き
[illegible]す勇士の
歌をうたひて[illegible]りけり。

可憐児

[illegible]の水[illegible]川[illegible]の
[illegible]なる[illegible]かけ、
哀れ[illegible]子の乞丐あり、
[illegible]む[illegible]を
[illegible]に[illegible]ふ石の上。

[illegible]に[illegible]花[illegible]、
[illegible]、
[illegible]に[illegible]は、
世の[illegible]子かと
人[illegible]は、[illegible]。

このよの[illegible]

[illegible]

傷める鷗

ふるさと捨てゝ旅人の、
海を渡るにまかせつゝ、
雲さだめなき大空を、
翔を待つ[illegible]岸に立ち、
永遠の世の岸望みつゝ、
思ひ遙かに眺むれば、
翅の裂けたる白鷗の、
血と涙をあびけりて、
自由を歌ひ舞[illegible]かた。

眼に涙を湛へつゝ、
血に染める旅人が、
[illegible]

詩人塚

今は日花にて
　死ぬる、
詩人塚――
　雨に泣き、
墓に一人旅人が
　跪きて、
[illegible]
　美しき男、
其ふよ接し
　黒髪、
相見て立ちつゝかなしく泣く。
昔思へば
　秋風、
石の中にも
　魂の声、――
國の運命

大空を、
[illegible]

[illegible]の死に

[illegible]

[illegible]

[illegible]



溝口白羊篇

驛馬鹿毛

驛馬鹿毛

[illegible]

[illegible]

驛の鼓を何ぞ
[illegible]
下の[illegible]むるとも
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]と聞くからに
[illegible]のめいぼうた
まのあたりに見ては
[illegible]つに
[illegible]に
[illegible]
[illegible]となる[illegible]
[illegible]られ、[illegible]へに

古人[illegible]無き日の
[illegible]めをばこゝに見る

[illegible]、物も言はで
[illegible]の子に[illegible]はす
自若と最[illegible]を[illegible]念すれ
[illegible]ます[illegible]に[illegible]の如き
[illegible]劇あ[illegible]を[illegible]す可き

無明の闇に[illegible]
[illegible]の心[illegible]
人[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

後のおんぞを御ぎへまつり
[illegible]に堪へずや
おん[illegible]やうを妨げし
[illegible]話もあり
是は[illegible]、生ある物の靈長と
[illegible]に誇るえせ者が
[illegible]の力を恃みて
[illegible]びつるものの命を
[illegible]まゝに奪ふとは
恰[illegible]の心かな
昭君派に嫁くの怨はものか
罪も無き身を慘虐の
犠牲とせらるゝ憤り
人ならば狂ひもすべし
怨念、鳴る神となつて
惡つくき人間ばら
いち人もあまさず
片端より裂いて裂いて
裂きも捨つ可し
悲しゝ人にあらぬ身の
胸は炎と燃え。

[illegible]ぐとも
[illegible]を知らず
[illegible]も知らず
[illegible]、他の手に曳かれて
[illegible]に赴くか
鬼に[illegible]大畜生
あゝ却て之を昭代に
行はるべき[illegible]と呼ぶや
罪を[illegible]れに嘶いて
此馬[illegible]く
乘れば落して人を傷け
之を田畑に用ふれば
牛ほどの役に立たず
聊の重荷を負はするに
一歩も動かず
斯かる畜生を生け置くは
家の費え、國の費え
殺して何の罪あると
得たり顔にも手を拍つて
鐘[illegible]の調を作れども
臆病の手に乘ればこそ
この鬼鹿毛も荒るゝなれ

[illegible]
[illegible]して
[illegible]り
轡を[illegible]へて
千里の[illegible]足を止むればこそ
[illegible]ぬなれ

一たび[illegible]場に出でて
烟の中を右に驅けり
矢彈の中を左に驅せて
勳功抜群なりける者
世に[illegible]も馬はあるべし
血を[illegible]に受けながら
鈍牛のまねをする
不甲斐の馬もあるべし
この鬼鹿毛は、泥くさき
駄馬と田を耕して
痛々しう重荷負ふ
下品の馬の類ならず
父といひ、母といひ
稀代の名馬
其血を受けたる鬼鹿毛なれば

とどろと踏鳴らす蹄の音には
鬼も避けむ、魔も隠れむ
鬣を揮つて嘶けば
獅子も慴する猛勢あり

されば幾度落されても
是程の名馬に
乗つたりといふは
いみじき果報

末代までの語りぐさ
凡人には過分なるに
淺智の輩
柔弱に生れて
馬乗鎮むる術も知らず
この神駿をもて悩み、
之を荒馬と名けて
殺さむとは非道かな

繁華の子等が一夜のうたげ
肉林廻らし
酒を池の水と湛へて
溢るる琥珀の盃には
萬金の費えありといふに
多寡が馬一匹

日本六十餘州の中に
養はれぬ事もあらじ

乗れば落され
之を田畑に用ふれば
牛程の役に立たず
聊の重荷を負はするに
一歩も動かぬが
不承とならば
ならばよし

無益の畜生ぞと思はじ
疾く疾く手綱を切り拂ひ
呵責の鞭を折つて
轡を外し、鞍を外し
生れながらの素裸馬
狭き厩を出して
萬億里、涯無き
廣漠の野に放てよかし

廣漠の野に之を放たば
吹くやなご風
しいじの花を司る
もろ／＼の神達

荒地の胸に春を送つて
美しき命の呼吸は
無法の人が加へたる
虐げの傷を癒り
疲れし彼が希望を勸めて
驅けるや千里
馳するや萬里
此島を遠く超ゆれば
西も東も、上も下も、
さへぎる者無き自由の天地
驊馬鬼鹿毛
勇み進んで
駿足、雲に入らむ
駿足、雲に入らむ

小牧暮潮篇

燭の火　白水郎の歌　抜錨　落ちる葉



燭の火

楽譜の象の分かぬまで
招みだるゝ蠟燭の
弱き光は薄黄の
昏れゆく色を見るごとく
しづかに室をゆきかひぬ。

上にかけたる額の繪の
千草の花の紅を
光仄かに隈どりて
眞中に立てる少女子の
衣の白きにまぎれたり。

青磁の瓶の水揚げて
花香る水仙の
清しき香葉を出でて
ピアノに向ふ妹の
小さき姿をつゝむかな。

「わがたましひよ
　　　羽をあげて
天津御國に
　　　たちむかへ
日月もつちも
　　　みなほゝゑむ
かけりすゝみて
　　　みざにゆけ」

天津港もほど近き

[illegible]の川に流されて
中洲にたてる[illegible]
それかとばかり[illegible]の夜の
風吹くまゝにゆられつゝ。

白水郎の歌

曉なれば黎明に
かぎろひの動く曙
朝歌に霧を破りて
大海に舟漕ぎいだす。

暮なれば夕映雲に
沖潮の湧き立つ夕
ならひ風片帆に受けて

薄闇の入江にかへる。
蟹なれば[illegible]に寄る
沖つ[illegible]に[illegible]
みぞれ降る夜はさびしくも
松蔭の家を思はす。

蟹なれば夕[illegible]して
家に得[illegible]かざしと
[illegible]草の花の白きを
肩寄せて摘まむともせず。

蟹なればたゞ一葉の
片肩に身を任せては
[illegible]枕、浪のまに〳〵
思なき夢もかひろぐ。

[illegible]より[illegible]につゞく
[illegible]の心を[illegible]
日に夜に[illegible]るふ
八百潮の心を[illegible]す。

[illegible]の色日[illegible]の
世に[illegible]人ぞいふなる
清見潟とある磯邊に
漁りのわれは蟹の子。

抜錨

錨鳴る。錨鳴る。また錨鳴る。
舟は俄に騒がしき
機關の音。人の聲。
軽げに動く舟あしの
左右に白く泡立ちて
渦巻き狂ふ夜の汐、
つくもの髪をはらゝかす
鬼女の姿と湧き躍る。

今、泳ぐさる沖の[illegible]
[illegible]居る[illegible]のはたて[illegible]
見よそのほの——[illegible]の[illegible]
[illegible]の花ひらの
一時に[illegible]く光明に
われ行く、かたげ[illegible]さぬ。

[illegible]とききたる目に映る
幻づつ斧を[illegible]
草にこもるわが夢の
追懐の[illegible]よ。——折しもあれ
心をつんざく汽笛の音に
おきれて消ゆる[illegible]。
今、わが肩は沖のかた
消えかゞよへる一すぢの
金線道をまつしぐら
光の國へ——。

落つる葉

はらり！ と桐の葉が落ちる。
遠い國へ、
旅立ちでもするやうに。
又一葉、はらりと
故里へ、
歸ってでも行くやうに。

相馬御風篇

車のひゞき　鐵路　夕　夜



車のひゞき

つめたき地に
音をたてゝ
雨はふる
くらき夜なり
をちかたに
車のひゞき。

車のひゞき
あゝ、かの夜
君ぞ來し
さむき夜なりき
うき別れ

今はいづこに。

ひゞきは消えぬ
おもひでは
あゝ、かの夜
雨に消えゆく
そのひゞき
暗き世界に。

暗き世界に
雨はふる
あゝ、わが胸
かすかにつたふ
ひゞきあり――
涙ぞながる。

いづこより來て
いづこへか
さてはたゞ
車のひゞき
あやしくも
胸にぞひゞく。

つめたき地に
深くはむ
ぬかるみの
わだちの跡か
わが胸に
うれひぞ殘る。

わだちの跡に
雨は降る

かなしき音に
君をおもへば
わが眼には
涙ぞあふる。

ふと起りては
ふときゆる
雨の夜の
車のひゞき。
わが戀も
つひにかゝりき。

鐵路

むし暑き空はくもりこ
地に低くせまれる下に
末遠く青田を割きて
二條の鐵路ぞ走る

何事か重き惱みに
地はいたく汗ばむけはひ
無限より無限につゞく
鐵路のみ白く光れり

あはれ、この果なき路を
さまよへる人の思を
日に夜にのせ行く汽車の
いつか、はた、歩みをとめむ。

かすかなる蟲の聲と
つるはしの響と交り
地に空につたはるごとに
惱ましく鐵路ぞふるふ。

夕

妹よ、いま
しばし戸あけて
夕ぐれの
空をながめよ
青ざめた
つゝめる、ゆかし
星のごとくも出でゝゐる。

妹よ、いま
しばしきけかし
戀人の
聲のごとくも
おぼろなる
空の奥より
も知れざる鳥の音すなり。

夜

わが胸は
深山がくれの
ほの暗き
森の湖
寂しさは
常世にみちて
影うつす花だにあらず。

われを纏ふ
君が思は
幾億里
遠き空より
夜ごとわが
胸にぞうつる
蒼白き星のかゞやき。

與謝野晶子篇

草と人（十二章）

太陽出現　紅梅　冬が來た　[illegible]の歌　蜂　[illegible]　市に住む[illegible]　[illegible]
[illegible]ロオの森　[illegible]　君死にたまふことなかれ　[illegible]



太陽出現

薄暗がりの地平に
大火の祭。
空が焦げる、
海が燃える。
珊瑚紅から
黄金の光へ、
眩ゆくも變りゆく
焔の舞。
曙の雲間から
子供らしい圓い頬を
眞赤に染めて笑ふ
地上の山山。
今、焔は一搖れし、
世界に降らす金粉。
不死鳥の羽たきだ。
太陽が現れる。

紅梅

おお、ひと枝の
花屋の荷のうへの
紅梅の花、
うすぐらい長屋の隅で、
ボウヴルな母と娘が、
つぎ貼りした障子の中の
冬の明りに、
うつむいて言葉すくなく、
わづかな布片と、
糊と、鋏と、木の枝と、
青ざめた指とを用ひて、
手細工に造った花と云はうか。
いぢらしい花よ、
涙と人工との
羽二重の花びらを綴った花よ、
わたしは悲しい程そなたを好く。
なぜと云ふなら、
そなたの中にわたしがゐる、
私の中にそなたがある。
そなたと私とは
貧乏と北風とに脅されて、

あの三日月に先だち、
怖る怖る光つてゐる。

春が来た

春が来た。
せまい庭にも日があたり、
張物板の紅絹のきれ、
立つ陽炎も身をそそる。

春が来た。
亜鉛の屋根に、ちよちよと、
樋に焦れてまんまろな
ふくら雀もよい形。

春が来た。
遠い大路の良人から
使に来たか、見に来たか、
わたしを泣かせに唯だ来たか。

春が来た。
柚の汁にきりきざむ
蕗の薹にも春が来た、
青いうれしい春が来た。

薔薇の歌

まあ華やかな、
けだかい、燃え輝いた、
咲きの盛りの五月の薔薇。
どうして来てくれたの、
このみすぼらしい部屋へ、
この疵だらけの卓の上へ、
薔薇よ、そなたは
どんな貴女の飾りにも、
どんな美しい戀人の贈物にも、
ふさはしい最上の花である。
もう若さの去つた、
そして平凡な月並の苦勞をしてゐる、
哀れな忙しい私が
どうして、そなたの友であらう。
人間の花季は短い、
そなたを見て、私は
今むかしと是れを感じる。
でも、薔薇よ、
私は窓掛を引いて、
そなたを陰影の中に置く。
それは、あの太陽に
そなたを奪はせないためだ、
猶、自分を守るやうに、
そなたを守りたいためだ。

蜂

夕立の風
軒の簾を動かし、
部屋の内暗くなりて
片時涼しければ、
我は物を書きさし、
空を見上げて、雨を聴きぬ。
書きさせる紙の上に
何時しか来りし蜂一つ、
よき姿の蜂よ、
腰の細き絲に似て、
身に流れる金は
何の花蜜よりか成れる。
好し、我が文字の上を

蜂の舞ふに任せむ。
わが悩ましき魂は
萎れし花に等し、
せめて[illegible]の名残を求めて
蜂の舞ふに任せむ。

お猿

お猿が出て来た、
負はれて出て来た。
お目目をぱちくり、
赤んぼうのお猿。

お猿、手に持つ、
ちさい紅の扇。
負はれた肩から
ちよこなんと下りた。

•

下りたお猿は
足もとふらふら、
狭い座敷を
斜めに歩き、
舞ふかと思つたら、
旦那の前で、
あれ、まあ、お辞儀をする。
いやなお猿。

市に住む木魂

木魂は響の霊、
如何に微かなる聲をも
早く感じ、早く知る。
常に時に先だつ彼女は
また常に若し。

近き世の木魂は
市の中、大路の
並木の影に佇み、
常に耳を澄まして聞く。
新しき生活の
諧音の
如何に生じ、
如何に移るべきかを。

木魂は極にも
内心を感ぜず、
人の群れて
聞かざらむことを怖る。
唯だ折々に
叫び且つ笑ふのみ。

フォンテンブロオの森

秋の歌はやまぬ響き、
白楊と毛欅の森の奥に、
かの樹を聞きつつ、我等は
しづかに語らめ、しづかに。

褪めたる朱か、
剥がれたる黄金か、
風無くて木の葉は散りぬ、
な拂ひそ、よしや、衣にとまるとも。

それもまた木の葉の如く、
かろやかに一つ白き蝶、
舞ひて降れば、尖りたる
赤むらさきの草ぞゆするる。

眠れ、眠れ、疲れたる
休暇の王子よ、姫よ。
かぼそき路を行きつつ、我等は
しづかに語らめ、しづかに。

おお、此處に、岩に隱れて
ころころと鳴る泉あり、
水の歌ふは我等が爲めならむ、
君よ、今は語りたまふな。

夏の歌

あはれ、快きは夏なり。
萬年の酒男太陽は
一時にその酒倉を開けて、
光と、熱と、芳香と、
七色との、
巨大なる甕の前に
人を引く。

あはれ、快きは夏なり。
人皆ギリシャの古への如く
うすき衣を着け、
はた生れたがらの
裸となりて、
飽くまでも、湯の如く、
光明歡喜の酒を浴ぶ。

あはれ、快きは夏なり。
人皆太陽に醉へる時、
忽ち前に裂くるは
夕立のシトロン。
さて夜となれば、
金屬質の涼風と
水晶の月、夢を搖る。

颱風

ああ颱風、
初秋の野を越えて
都を襲ふ颱風、
汝こそ逞しき大馬の群なれ。

黄銅の背、
鐵の脚、黄金の蹄、
眼に遠き太陽を掛け、
鬣に銀を散らしぬ。

火の鼻息に
水晶の雨を吹き、
暴く斜めに、
驅歩す、驅歩す。

ああ抑へがたき
天の大馬の群よ、
怒れるや、
戯れて遊ぶや。

大樹は逃れむとして、
地中の足を擧げ、
骨を挫き、手を折る。
空には飛ぶ鳥も無し。

人は怖れて戸を鎖せど、
世を裂く蹄の音に
屋根は破れ、
家は船よりも搖れぬ。

ああ颱風、
人は汝によりて、

今こゝに[illegible]むれ、
[illegible]不[illegible]に[illegible]ことも。

こころよきかな、わが[illegible]
巨大なる[illegible]
喇叭のここちして。
[illegible]と共に[illegible]。

君死にたまふことなかれ

（旅順口包囲軍の中にある弟を歎きて）

ああおとうとよ、君を泣く、
君死にたまふことなかれ、
末に生れし君なれば
親のなさけはまさりしも、
親は刃をにぎらせて
人を殺せとをしへしや、
人を殺して死ねよとて
二十四までをそだてしや。

堺の街のあきびとの
舊家をほこるあるじにて
親の名を繼ぐ君なれば
君死にたまふことなかれ。
旅順の城はほろぶとも
ほろびずとても何事ぞ
君は知らじな、あきびとの
家のおきてになかりけり。

君死にたまふことなかれ、
すめらみことは、戰ひに
おほみづからは出でまさね、
かたみに人の血を流し、
獸の道に死ねよとは
死ぬるを人のほまれとは、
大みこころの深ければ
もとよりいかで思されむ。

ああおとうとよ、戰ひに
君死にたまふことなかれ、
すぎにし秋を父ぎみに
おくれたまへる母ぎみは
なげきの中に、いたましく
わが子を召され、家を守り、
安しと聞ける大御代も
母のしら髪はまさりぬる。

暖簾のかげに伏して泣く
あえかにわかき新妻を、
君わするるや、思へるや、
十月も添はでわかれたる
少女ごころを思ひみよ、
この世ひとりの君ならで
ああまた誰をたのむべき
君死にたまふことなかれ。

繋縛

木は皆その自らの根で
地に縛られてある。
鳥は朝飛んでも
日暮には巣に返される。
人の身も同じこと、
自由な魂を持ちながら、
同じ區、同じ町、同じ番地、
同じ寢臺に起き臥しする。

石川啄木篇

櫻のまぼろし　妹よ　辻　無題　無題　無題　幽思



櫻のまぼろし

あめが下、知らぬ人なき
[illegible]
はろ〜〜とこの一千里、
春の旅あこがれ求めてと、
南の國の[illegible]
艶なるや、[illegible]
ふと見れば、訪ふ人もなき
侘住居、まどの小欄に、
ひと枝の櫻の[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
朝浄め、我つとめむ。」と、
聲はまた、若きうぐひす。
ふと見れば、竹の小籬の
端ちかき櫻一株、
うす紅の匂へる綿を
枝々にかづきて立てり。
「病臥す我が兄人が
とし頃この詩卷に
朱の筆をいれて給へ、と、
西遠き筑紫の野より、
春使、身はまゐりぬ。」と。

妹よ

（望合たか子に）

涼風吹くさ、水無月の
若葉の匂ひ、侘住みの
夢の名殘の跡ぎよめ。
朝餉はてたる窓の中、
澁茶を啜る興がりに、
香爐の青磁はしけやし、
風上に置く風流や、
侘のおごりはこれのみと
わが手浄めて沈焚けば、
何の香ぞもと妹よ
君はしづかにほゝゑみぬ。

灰色ひくき町の空、
杉ある寺の南や、
木槿に葺ける屋根の上に
とび交ふ鳩の白き羽を
見よと指さし、清浄の

夏の行方に目はなてば、
あなや君も[illegible]見る
ひとみたゆげにうなづきぬ。

我にならべる婦人の
やはらの膝によりかゝる
君はをさなき妹の、
姉に似たれば、[illegible]果の
新柳のかげのほのめきに
ほゝゑみ見せて、おとづれし
今朝の消息を手にありと、
あはれ、詩に瘦せ文に瘦せ
ほうけし我はたゞてみぬ。

[illegible]の若葉路、[illegible]も折れ、
捨小舟とぞ流れたれ。
我まつ人の胸ふかく
つきぬ泉の洞ありと
めざめて、こゝに、初夏の
すまひ侘しき家ながら、
さだめの外の恵みにか
清きほこりの日のありと、
吟じて暮らすこの頃を、
秀歌はなけれ、恩みは

諸手にあまる[illegible]に、
よし、かしましき隣人の
[illegible]にはげ[illegible]も、
年さびたる壁より
我身はいつか愛の野の
[illegible]守[illegible]日葵の
あこがれ眼ゆく見にあれば、
野の石抱くさすらひの
悲歌に[illegible]し孤児も、
心の[illegible]に[illegible]、
心の[illegible]に[illegible]。

破窓ひくきこの室や、
焚くなる沈の香煙に
魂やはらかに包まれて、
あゝ、この愛の[illegible]に
我はも君を[illegible]の
沙門とこそはほこらるれ。

君ら若き妹よ、
よしや深林香木の
朽つる日見るも、あこがれの
法林、愛の枝々や、
しづかにわたる我が歌に
まどかの夢の調あり。

[illegible]たるゝあの、[illegible]、
[illegible]に[illegible]たき、[illegible]
[illegible]に[illegible]の[illegible]、
は[illegible]に[illegible]
われ[illegible]も、
忘るゝ勿れ、[illegible]
心[illegible]さるうたびとの
二人、[illegible]の[illegible]に、
またあの[illegible]に[illegible]
清きほこりに目を[illegible]と、
[illegible]に[illegible]きて
吟じて[illegible]
君に書くなるこの歌の
しらべは[illegible]なから、
夏の二人のほゝゑみに
ほゝゑみてこそ[illegible]たる
八十行の我が心、
我が心こそほゝゑむに
君も笑みてぞうけよかし。

辻

老いたるも、[illegible]は、若きも、

幾十人、男女や、
東より、はたや、西より、
坂の上、坂の下より、
おのがじし、いと急しげに
此處過ぐる。
今わが立つは、
海を見る廣き世の
四の辻。――四の角なる
家は皆いと嚴めしい。
銀行と領事の館、
新聞社、殘る一つは、
人の罪嗅ぎて行くなる
黒犬を飼へる警察。

此處過ぐる人は、見よ、皆、
空高き日をも仰がず、
船多き海も眺めず、
ただ、人の作れる路を、
人の住む家を見つゝぞ、
人とこそ群れて行くなれ。
白髪の翁も、はたや、
紅き頰の若き少女も、
少年も、また、靴鳴らし
馬車[illegible]く、[illegible]商も、
丈高き紳士も、孫を
背に負へる痩せし嫗も、
酒肥り、いとそりかへる
商人も、物乞ふ兒等も、
日傭の若き給仕も、
家持たぬ憂き人々も。

せはしげに過ぐるものかな。
廣き辻、人は多けど、
相知れる人や無からむ。
並行けど、はた、相逢へど、
人は皆、そしらぬ身振、
おのがじし、おのが道をぞ、
急ぐなれ、おのもおのもに。

心なき林の木々も
相凭りて枝こそ交せ、
年毎に落ちて死ぬなる
木の葉さへ、朝風吹けば、
朝さやぎ、夕風吹けば、
夕語りするなるものを、
人の世は疎らの林、
人の世は人なき沙漠、
あゝ、我も、わが行くみちの
今日ひと日語る伴侶なく、
この辻を、今、かく行くと、
思ひつゝ歩み移せば、
けたゝまし戸の音ひゞき、
右手なる新聞社より
驅け出でし男幾人、
腰の鈴高く鳴らして
驅け去りぬ、四の角より
四の路、おのもおのもに。
今五月、霽れたるひと日、
日の光曇らず、海に
牙鳴らす浪もなけれど、
急がしき人の國には
何事か起りにけらし。

無題

秋の夕べの重くるしさ
梢の枝は一條々々に
限りなき重たさを以て、
冷い鐵の欄干に口づけ、
椅子による男の髪には、
涙にぬれた女の袖――

霧をとぶ鳥の羽音を
小窓の電燈がかきみだし、
寒くて鍵盤を叩く時、
小兒は寒氣の亂さに口を閉し、
大川の水の靜さに流れる時、

室の中には青白い瓦斯の光が
卓の上の紅薔薇を黒く見せ、
硝子の窓から雪の中に、
人生の階段を下る重い／＼
一時の音の忍びやかな足音が消む。

秋の夕べの重くるしさ。
女には給仕を簡單して家路を急き、
男には馬が病む、
別れば一が女を泣かせ、
男は手足のやり場にこまる。

無題

屋根又屋根、眼界のとゞく限りを
すき間もなく埋めた屋根！

國の屋根、國の屋根、わけのつくされたやうな
屋根、
おしつぶされつゝしづか、或ものは地にしみ
みつき、
或は空に向け開けられてゐる屋根！
その上に眞實な教會の目のやうに、
秋の光がほか／＼と照りわたつてゐる。

とらへやうもない
然し乍ら、魂の底石まであるかすやうな
あゝ、あの都會のとどろき……
初めてこの都會に來て此景色を眺め
この物音をきいた時、
弱い田舍者の心はおびえた——
驚き、にてはない、尊さ、にではない、又、
其處にいとたまるゝ文明の尊さにでもない、
あのはかりがたい物音の底の底の——
都會の夜のふかさに。

今また此處に來て此景色を眺め
そしてこの物音をきいて
よわい都らしい都會の歸化人の心はおびえ
る——
獅子かひが獅子の眠りに見入つた時の心、
もし——
あゝはとことほき物音の底の底の、——
人々ささく／＼はかりあひて
都會の夜のふかさに。

すべての都會の雲響をひとしなみにふむ
愚鈍なる我の靴が、
そしてはそなたの靈魂と肉體の戀愛を
またひとしなみにふむか、

花は嬌娜の香をはなちて咲き、
人は精力の汗を流して死ぬ
それらは花と人との戀愛ではないか。
教會よ、そなたの塔に、
雨とふる日とそゝぐそなたの愛は、
人の……

見よ、數一さぬ無數！
その下には死なうとするか月よ死なまいとす
る慾望と……
あゝあの騷然たる物音
人間は住居の上に屋根を作つて、
その上に日が照る、
屋根は人間の最上の智慧！

そして又反抗、又運命、その上に日が照る。

あゝ、我は歸らうか？　はた歸るまいか？
あの屋根！　眼界のとゞく限りを
すき間もなく埋める屋根の下へ。

無題

一

赤！　赫！
赤といふ色のあるために
どれだけこの世が賑やかだらう。

二

紅、女、旗、
それから、血！
砂漠に落つる日
海に漂ふ戰の跡の波、

三

『あゝ、こんなに悲しい事がまたとあらうか！』
何もせずにぼんやりしてゐた時
ふとこんな事を言つてみた。

強い言葉で。
そして記憶の中の悲しい心地を
よび起して見ようとした。
欠伸！

やゝあつてまた『死なうか。』と
思つてみた。『死ぬ外に途がない。』と。

四

靜けさ！
心々の隅々谷々には
何の反響もない。

何か聞えさうなものだと
耳をすまして
心の狀を窺つてゐると、ふと
あの女のことが浮ぶ。
『行かう、さうだ。』と直ぐ身支度をした。
『噓のつきあひをしに。』

五

物を言へといふのか？
笑へといふのか？
よし、よし、俺は知つてゐる——

戀は[illegible]のとりやりだ。
悲しいな！

少し、待つてくれ、少し。
ほんの少しの間。
今一寸、一寸笑へなくなつた。
俺には悪いくせがある。

幽思

ほのかにも搖げる灯あり。
ほのかにも今我が心、
はるかなる人無き島の
洞内の光明を忍ぶ。

ほのかにも搖げる灯あり。

ほのかにも今我が心、
春の夜遠方人の
涙にし濡れたる思ひ。

我が思ひ、幽かに顫ふ。



北原白秋篇

邪宗門秘曲

われは思ふ、末世の邪宗、切支丹でうすの魔法。
黒船の加比丹を、紅毛の不可思議國を、
色赤きびいどろを、匂鋭きあんじやべいいる、
南蠻の棧留縞を、はた、阿剌吉、珍酡の酒を。

目見靑きドミニカびとは陀羅尼誦し夢にも語る、
禁制の宗門神を、あるはまた、血に染む聖磔、
芥子粒を林檎のごとく見すといふ欺罔の器、
波羅葦僧の空をも覗く伸び縮む奇なる眼鏡を。

屋はまた石もて造り、大理石の白き血潮は、
ぎやまんの壺に盛られて夜となれば火點るといふ。
かの美しき越歴機の夢は天鵞絨の薫にまじり、
珍らなる月の世界の鳥獸映像すと聞けり。

あるは聞く、化粧の料は毒草の花よりしぼり、
腐れたる石の油に畫くてふ麻利耶の像よ、
はた、羅甸、波爾杜瓦爾らの橫つづり靑なる假名は
美しき、さいへ悲しき歡樂の音にかも滿つる。

いざさらばわれらに賜へ、幻惑の伴天連尊者、
百年を刹那に縮め、血の磔背にし死すとも
惜しからじ、願ふは極祕、かの奇しき紅の夢、
善主麿、今日を祈に身も靈も薫りこがるる。

接吻の時

薄暮か、
日のあさあけか、
晝か、はた、

ゆめの夜半にか。

そはえもわかね、燃えわたる若き命の眩
　暈、
赤き震慄の接吻にひたと身顫ふ一刹那。

あな、見よ、青き大月は西よりのぼり、
あなや、また瘠病む終の顫して
東へ落つる日の光、
大ぞらに星はなげかひ、
青く盲ひし水面には藥香にほふ。

あはれ、また、わが立つ野邊の草は青色も干
　乾び、
折り伏せる人の殼の夜のうめき、
人靈色の
木の列は、あなや、わが挽歌うたふ。

かくて、はや落穂ひろひの農人が寒き瞳よ。
歡樂の穂のひとつだに殘さじと、
はた、刈り入るる鎌の刃の青き光よ。
野のすゑに獸らわらひ、
血に饐えて汽車鳴き過ぐる。

あなあはれ、あなあはれ、
二人がほかの靈のありとあらゆるその呪
　詛。

朝明か、
死の薄暮か
晝か、なほ生れもせぬ日か、
はた、いづれともあらばあれ。

われら知る赤き脣。

濁江の空

腐れたる林檎の如き日のにほひ
圓らに、さあれ、光なく甘げに沈む
晩春の濁重たき靄の內、
ふと、カキ色の輕氣球くだるけはひす。

遠方の曇れる都市の屋根の色、
たゆげに仰ぐ人はいま鈍くもきかむ、
濁江のねぶたき、あるは、やや赤き
にほひの空のいづこにか沒るる鐵の音。

なやましき、さは江の泥の沈澱より
あかるともなき灰紅の帆のふくらみに
傳へくる潜水夫が作業にか、
饐えたる吐息そこはかと水面に黃ばむ。

河岸になほ物見る子らはうづくまり、
はや倦ましげに人形をそが手に泣かす。
日暮どき、入日に濁る靄の內、
また、ふくらかに輕氣球くだるけはひす。

謀叛

ひと日、わが精舍の庭に、
晚秋の靜かなる落日のなかに、
あはれ、また、薄黃なる噴水の吐息のなか
　に、
いとほのにヸオロンの、その絃の、
その夢の、哀愁の、いとほのにうれひ泣く。

蠟の火と懺悔のくゆり
ほのぼのと、廊いづる白き衣は
夕暮に言もなき修道女の長き一列。
さあれ、いま、ヸオロンの、くるしみの、

[illegible]

またあれば落日の色に、
夢燃ゆる噴水の吐息のなかに、
さらにまた聲もなき白鳥の愁のもとに、
いと強き硝薬の、黒き火の、
地の底の導火燬き、ギオロンぞ狂ひ泣く。

跳り来る車輛の響、
毒の弾丸、血の烟、閃く刃、
あはれ、驚破、火とならむ、噴水も、精舎も、
空も。
紅の、戦慄の、その極の
瞬間の叫喚燬き、ギオロンぞ盲ひたる。

顔の印象

A 狂へる時

翳らめる暗き鼻、なめらかに禿げたる額、
痙攣れる脣の端、光なくなやめる眼、
なにか見る、夕栄のひとみぎり噎ぶ落日に、
黄昏の[illegible]する煉瓦家か、狂へる街か。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
霊のありかをさうち惑ひ窓ふりあふぐ。

その窓に盲ひたる[illegible]とり鈍き刃研げる。
はた、啞朱に笑ひ痺れつつ女を説ける。
次なるは聾しぬる濁き[illegible]三味線弾ける。

しかはあれ、黒日狂ふ街はまた酒と歌とに
しどろなる[illegible]列あかあかと溢れくるめき、
馬車のあと見もやらず、意味もなく歌ひ倒る
る。

B 酢の甕

苛ざめし汝が面、饐えよどむ瞳のにごり、
薄暮に熟視めつつ撓みちる髪の香きけば——
酢の甕のふたならび人もなき室に沈みて、
ほの暗き玻璃の窓ややかに愁ひわななく。

外面なる嗟嘆よ、波もなきいんくの河に
旗青き獨木舟そこはかと巡り漕ぎたみ、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
たまたまに[illegible]ぬ夜のせず[illegible]
ひとびとは声もなし、河の面をただに熱[illegible]
そ。

は、、甕のふたならび、さこそあれ愁はた[illegible]
[illegible]ひ、
内と外かぎりなき懸隔に離隔つれば、
あな悲し、あな暗し、酢の沈黙長くひび[illegible]、
[illegible]。

盲ひし沼

午後六時、血紅色の日の光
盲ひし沼にふりそそぎ、濁の水の
聲もなく傷き眩む生おびえ。
鐵の匂のひと冷み沁みは入れども、
影うつす煙草工場の煉瓦壁。
眼も痛ましき香のけぶり、鬨喊とどろく。

鳴ききたる[illegible]鳥のから
しらしらと水に消え入る。

午後六時、また[illegible]をやむ管の湯氣、
壁に凭りたる[illegible]若者ひとり
腕拱き鐵の匂にうち嘆ぶ。
はた、あかき[illegible]蒸汽鑵音なく叫び、
そこここに咲きこぼれたる芹の花、
あなや、し[illegible]におしなべて日ぞ黑りそそぐ。

聲もなき[illegible]鳥のから
色みだし水に消え入る。

午後六時、[illegible]見たる水底は
血潮したたる沼の[illegible]の負傷の光
かき濁る泥の[illegible]に疲れつつ、
水死の人の[illegible]ごとちらぼふなかに
もの鈍き鉛の魚の[illegible]くるめき、
はた浮びくる妄念の赤きわななき。

逃げいづる[illegible]のうから
鳴きさやぎ[illegible]

午後六時、あな水底より浮びくる
赤きわななき――妄念の猛ると見れば、
強き煙草に、鐵の香に、わかき男に、
盜いだす硝子の窓の少女らに血潮したたり、
歡樂の極の恐怖の日のおびえ、
顫ひ高まる苦痛ぞ朱にくづるる。

刹那、ふと太く湯氣吐き、
吼えいづる休息の笛。

尋めゆくあゆみ

いと高くいと深くいと靜にいと蕭やげる
夜の森のかげ、暗く冷たる列のもとを、
　われはあゆむ。

いと高くいと暗くいと密にいとほのかなる
紫み細き赤楊の列、そのもとの底の底を
　われはあゆむ。

いと高くいと深く沁みたる愁悲のもとを、
眞素肌のましろなる、衣つけぬ常若の矜もて
　われはあゆむ。

赤[illegible]ありとしも見えぬ空のけはひ、
あはれその[illegible]に色紅き小鳥の如も星の見ゆる。
　あはれひとつ。

いと高くいと深くいと靜にいと蕭やげる
夜の森のかげ、暗く冷なる列のもとを、
　われはあゆむ。

[illegible]忍びかに蹤きぞ來ぬる。
昨日より去年より生れしより、否、前世より
　蹤きか來ぬる。

[illegible]る夜のとある梢、哀れその空に星の見えし。
紅き星紅き星ほのかにもわれは知れり、
　かかるゆめを。

いと高くいと深くいと[illegible]
夜の[illegible]、ふとし、あな、[illegible]落つる。
　[illegible]

衰れ衰れあらゆる香にいと暗く露や落つる。
真素肌の悲哀よ血の香する荊棘のなかを
　いかにわけむ。
足音のす、音もせぬ獣忍びかにひき歸すらし。
衰れまたひとつ星、見もあへぬ闇のかなたに
　はたや消ゆる。
忽にものの呻吟、やはらなる足に觸れつつ
そこここの血の荊棘あなやその暗き底より
　赤子啼きいづ。

天草雅歌

角を吹け

わが佳耦よ、いざともに野にいでて
歌はまし、水牛の角を吹け。
視よ、すでに美果實あからみて
田にはまた足穗垂れ、風のまに
山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。
いざさらば馬鈴薯の畑を越え、
瓜哇びとが園に入り、かの岡に
鐘やみて蠟の火の消ゆるまで
無花果の乳をすすり、ほのぼのと
歌はまし、汝が頸の角を吹け。
わが佳耦よ、鐘きこゆ、野に下りて
葡萄樹の汁滴る邑を過ぎ、
いざさらば、パアテルの黒き袈裟
はや朝の看經はて、しづしづと
見えがくれ棕櫚の葉に消ゆるまで、
無花果の乳をすすり、ほのぼのと
歌はまし、いざともに角を吹け。
わが佳耦よ、起き來れ、野にいでて
歌はまし、水牛の角を吹け。

ほのかなる蠟の火に

いでや子ら、日は高し、風たちて
棕櫚の葉のうち戰ぎ冷ゆるまで、
ほのかなる蠟の火に羽をそろへ、
鴿のごと歌はまし、汝が母も。
好き日なり、媼たち、さらばまづ
禱らまし讚美歌の十五番、
いざさらば風琴を子らは彈け。
あはれ、またわが爺よ、なにすとか、
老眼鏡ここにこそ、座はあきぬ、
いざともに禱らまし、ひとびとよ
さんた・まりや。さんた・まりや。さんた・まりや。
拜めば香爐の火身に燃えて
百合のごとわが靈のうちにふるふ。
あなかしこ、鴿の子ら羽をあけて
御龕なる蠟の火をあらためよ。
黑船の笛きこゆ、いざさらば
ほどもなくパアテルは見えまさむ、
さらにまた他の燭をたてまつれ。
あなゆかし、ロレンゾか、鐘鳴らし
まめやかに安息の日を祝ぐは。
あな樂し、眞白なる羽をそろへ、
鴿のごと歌はまし、わが子らよ。
あはれなほ日は高し、風たちて
棕櫚の葉のうち戰ぎ冷ゆるまで、
ほのかなる蠟の火に羽をそろへ
鴿のごと歌はまし、はらからよ。

艪を拔けよ

はやも聽け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、
御堂にははや夕の歌きこえ、
蠟の火もともるらし、艪を拔けよ。

もろもろの美果籠に盛りて、
汝が鶴ら畑に下り、しらしらと
歸るらし、夕づつのかげを見よ。
われらいま、空色の帆の闇に
新なる大海の香爐採り
籠に炷きぬ、ひるがへる魚を見よ。
さるほどに、跪き、ひとびとは
目見青き上人と夜に禱り、
捧げます御くるすの香にや醉ふ、
うらうらと咽ぶらし、歌をきけ。
われらまた祖先らが血によりて
洗禮がれし假名文の御經にぞ
主よ永久に惡みあれ、われらも、と
鶴率つつ禱らまし、涙をしぼれ。
はやも聽け、鐘鳴りぬ、わが子らよ、
御堂にははや夕の歌きこえ、
蠟の火もくゆるらし、櫓を拔けよ、

鵠

わかうどなゆめ近よりそ、
かのゆくは邪宗の鵠、
日のうちに七度八度
潮あび化粧すといふ

伴天連の祕の少女ぞ。
地になびく髮には薔薇、
嘴にまたあかき實を滴る
淫らなる鳥にしあれば、
絕えず、その眞白肩ひろげ
乳香の水したたらす。
されば、子たちゆめ近よりそ。
視よ、持つは炎か、華か、
さならずば實の無花果か、
兎にもあれ、かれこそ邪法。
わかうどなゆめ近よりそ。

思ひ出序詩

思ひ出は首すぢの赤い螢の
午後のおぼつかない觸覺のやうに、
ふうはりと靑みを帶びた
光るとも見えぬ光？

あるひはほのかな穀物の花か、
落穗ひろひの小唄か、
暖かい酒倉の南で
ひき毟る鳩の毛の白いほめき！

音色ならば笛の類、
蟾蜍の啼く
醫師の藥のなつかしい晩、
薄らあかりに吹いてるハーモニカ。

匂ならば天鵞絨、
骨牌の女王の眼、
道化たピエローの面の
なにかしらさみしい感じ。

放埒の日のやうにつらからず、
熱病のあかるい痛みもないやうで、
それでゐて暮春のやうにやはらかい
思ひ出か、ただし、わが秋の中古傳說？

斷章

一

今日もかなしと思ひしか、ひとりゆふべを、
銀の小笛の音もほそく、ひとり幽かに、
すすり泣き、吹き澄ましたるわがこころ、
薄き光に。

[illegible]
[illegible]、
[illegible]に
[illegible]てたまふ。

時は逝く

時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく、
穀倉の夕日のほめき、
黒猫の美しき耳鳴のごと、
時は逝く。何時しらず、柔かに陰影してぞゆく。
時は逝く。赤き蒸汽の船腹の過ぎゆくごとく。

螢

夏の日なかのヂキタリス、
釣鐘状に汗つけて
光るこころもいとほしや。
またその陰影にひそみゆく
螢のむしのしをらしや。

二

見るとなく涙ながれぬ。
かの小鳥
在ればまた来て、
茨のなかの紅き實を啄み去るを。
あはれまた、
啼かず去るや、

三

わが友はいづこにありや。
晩秋の入日の赤さ、さみしらにひとり眺めて、
拙いさぐるピアノの鍵の現なき高音のはしり、
かくてはや、獨身の、獨身の今日も過ぎゆく。

四

泣かまほしさにわれひとり、
冷やき玻璃戸に手もあてつ、
窓の彼方はあかあかと沈む入日の野ぞ見ゆる。
泣かまほしさにわれひとり。

五

何時をいかなる日の光のなかに、
いまひとたび、あはれ、いまひとたび、
ほのかにも洩らしたまひね、
われを思ふと。

六

爛れたる闇のみどりに
ふりそそぎ、ふりそそぎ、にほやかに小雨はうたふ。
罌粟よ、罌粟よ、
やはらかに燃えもいでね……

七

なにゆゑに汝は泣く、
あたたかに夕日にほひ、
たんぽぽのやはき溜息野に蒸して甘くちらぼふ。
さるを女、
なにゆゑに汝は泣く。

八

いかにせむ……

そなたの首は骨牌の
赤いジャックの帽子かた、
光るともなきその尻は
感冒のここちにほの青し、
しをれはてたる幽靈か。

ほんに内氣な螢むし、
嗅けば不思議にむしあつく、
甘い藥液の香も濕る、
息のつかれのしをらしや。
白い日なかのヂキタリス。

公園の薄暮

ほの青き銀色の空氣に、
そことなく噴水の水はしたたり、
薄明ややしばしさまかへぬほど、
ふくらたる羽毛頸巻のいろなやましく女ゆき
かふ。
つつましき枯草の濕るにほひよ……
圓柱に、あるは街燈に、
割られし園の配置の靑にほめき、綾に三つ四
つ
色淡き紫の弧燈したしげに光うるほふ。
春はなほ見えねども、園のこころに
いと甘き沈丁の苦き香の
刺すがごと沁みきたり、瓦斯の薄黄は
身を投げし靈のゆめのごと水のほとりに。

暮れかぬる電車のきしり……
濕れたる調和にぞ修道女の一人消えさり、
裁判はてし控訴院に留守居らの點す燈は
疲れたる硝子より弊私的里の瞳を放つ。

いづこにかすずろげる春の暗示よ……
陰影のそこここに、やや強く光素りて
息ふかき弧燈枯くさの園に嘆けば、
面黄なる病兒幽かに照らされて迷ひわづら
ふ。

朧げのつつましき匂のそらに、
なほ妙にしだれつつ噴水の吐息したたり、
新しき月光の沈丁に沁みも消ゆれば
官能の薄らあかり銀笛の夜とぞなりぬる。

片戀

あかしやの金と赤とがちるぞえな。
かはたれの秋の光にちるぞえな。
片戀の薄着のねるのわがうれひ
曳舟の水のほとりをゆくころを
やはらかな君が吐息のちるぞえな。
あかしやの金と赤とがちるぞえな。

物理學校裏

Borum. Bromum. Calcium.
Chromium. Manganum. Kalium. Phosphor.
Barium. Iodium. Hydrogenium
Sulphur. Chlorum. Strontium.
(寂しい聲がきこえる、そして不可思議
な……)

日が暮れた、薄い銀と紫 ——
蒸し暑い六月の空に
暮れのこる棕櫚の花の惱ましさ。

黄色い、新らしい花穂の蕊闘が
暗い裂けた葉の陰影から噎せる如に光る。
さうして深い吐息と腋臭とを放つ
歯痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい興
奮の黄。

$C_2H_3O_2Na + NaOH = CH_4 + Na_2CO_3$....
蒼白い沼氣瓦斯の情調が曇硝子を透して流
れる。
角窓のそのひとつの内部に
光のない青いメタンの焔が燃えてるらしい。
肺病院の如な東京物理學校の淡い青灰色
の壁に
いつしかあるかなきかの月光がしたたる。

Tin...tin...tinn.n...tin.n....
tire...tire...tin.n.n.n...syn....
t...t...t...t...tote...tsn.n...syn.
n.n.n.n....

靜かな惱ましい晩、
何處かにお稽古の琴の音がきこえて、
崖下の小さい平家の亞鉛屋根に
コルタアが青く光り、
蕊か、草いきれの底に Lamp の黄色い搖み
が點る。
その上に、見よ、すこしばかりの空地には
腐つた西瓜と茄子の臙びた新らしい臭が
慌ただしい市街生活の哀愁に纏れる....
汽笛が鳴る.... 四谷を出た汽車の Cadence
が近づく

暮れ惱む官能の棕梠
そのわかわかしい花穂の臭が暗みながら噎
ぶ、
歯痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい興
奮の黄。

寂しい冷たい教師の聲がきこえる、そして不
可思議な....
そこここの明るい角窓のなかから。
Sin...,Cosin...,Tan...,Cotan...Sec...,
Cosec...etc....
Ion. Dynamo. Roentgen. Boyle. Newton.
Lens. Siphon. Spectrum. Tesla の花火
攝氏、華氏、光、Bunsen. Potential, or,
Archimedes, etc., etc....

棕梠のかげには[illegible]にこぼるる[illegible]、
無意味な琴の音の鄙なびた Sentiment は
何時までも何時までもさうことなしに續いて
ゆく。
汽笛が鳴る....深緑の淡い靄と紫との空に
停車つた汽車が蒼みがかつた白い湯氣を吐い
てゐる
靜かな三分間。

惱ましい棕梠の花に官能に、今、
蒸し暑い魔睡がもつれ、
暗い裂けた葉の縁から銀の憂鬱がしたたる。
その陰影の捕捉へがたき Passion の色、
歯痛の色の黄、沃土ホルムの黄、粉つぽい興
奮の黄。

Neon. Flourum. Magnesium.
Natrium, Silicium. Oxygenium.
Nitrogenium. Cadimium or, Stibium.
etc., etc....

槍持

槍は錆びても名は錆びぬ、

殿につきそふ槍持の槍の穂さきの悲しさよ。
槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。
いつも馬上の寛濶に、
殿は伊達者のよい男、
紺の暖簾は、
しんと[illegible]見とれる[illegible]。
空に槍持、銀たんぽ
何の因果かこのやうに、わいわいさわいで、こそ
わいさの、取りはづす、
やあれ、やれ、危なしやの、槍のさき。

槍は錆びても名は錆びぬ、
殿の御紋付、[illegible]
身なりくづした[illegible]、
槍は九尺の銀たんぽ、
けふは[illegible]、明日はまた
[illegible]
わたる日本橋[illegible]雪はふるふる、日は
暮れる、
[illegible]、やれ、[illegible]、槍のさき

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。
雪はふれども、ちらほらと
河岸の問屋の灯が見ゆる。
さてもなつかし飛ぶ鴎、
壁のしたには廣重の紺のぼかしの摸様、
殿の御容貌に、ほれぼれと
わたる日本橋、槍のさき、
槍は擡げど、空のそら、澁面つくれど供奴、
ぴんとはねたる附髭に、雪はふるふる、日は
暮れる。
やあれ、やれ、やるせなの、槍のさき。

槍は槍持、供ぞろへ、
さつと振れ、振れ、白鳥毛。

槍は錆びても名は錆びぬ。
殿につきそふ槍持の槍の穂さきの悲しさよ。
いつも馬上の寛濶に、
殿は伊達者のよい男、
さぞや世間の取沙汰に
浮かれ騒ぐも女なら、
そこらあたりの道すぢの紺の暖簾も氣がかり
な。
槍は九尺の銀なんぼ、
槍を持つ身のしみじみと、涙流すもつとめ
故、
さりとは、さりとは、供奴、
雪はふるふる、日は暮れる、
やあれ、やれ、しよんがいなへ、槍のさき。

新月

断崖の松の木に
月ほそくかかりたり、
ほそき月、
金無垢の月。

入海の波間にも
また、月はしづきゆく、
沈沈と
金の鈎。

金無垢のするどさよ、
絹漉の雨ののち、
しんじつに

照りいづるその[illegible]。
島遠く、海原を
舳の間、
舟ひとつすすみゆく、
[illegible]にほそき月、

なにかわかれ、
魚族は目をさまし、
鈴蟲は一心に鳴きしきる。
處の極まり。

闇の夜は斷崖も、松の木も、
かけわかず、ゆく舟も見えわかず、
たゞ光るほそき月、
金無垢のほそき月。

雨中小景

雨はふる、ふる雨の霞がくれに
ひとすぢの煙立つ、誰が生活ぞ、
銀鼠にからみゆく古代紫、
その窓に城ケ島近く横たふ。

なごやかな空なりや、海の面に
霧をかくは水氣のすがた、あれは晴れて
しみじみと泣きわかれけむ、
その下にあるかなきかの雨の[illegible]。

遙かなる岬には波もしぶけど、
絹漉の雨の中、蜑小舟ゆたにたゆたふ。
棹あげてかぢめ採りゐる
北齋の蓑と笠、中にかすみて
一心に網うつは安からぬけふ日の[illegible]ひ。
とるにてもうれしきは浮世なりけり。

雨の中、をりをりに雲を透かして
さ緑に投げかくる金の光は
また雨に忍び入る。昔には如めど
絶えて影せぬ鶺鴒のこゑをたよりに。

眞珠抄

滴るものは日のしづく、靜かにたまる眼の涙。

[illegible]

ひとり[illegible]こえ吹かなれ、[illegible]
つ[illegible]。

巡[illegible]の[illegible]は、[illegible]
も、一心に[illegible]

物言はぬ金無垢の彌陀の如さよ。

幽かに揺らもつるは、わが常住の[illegible]たり、
幽かなれ[illegible]

寂しければ海中にとんらんと入らうよ。

乾草に火を點けむぞ、きりぎりすきりぎりす。

木の光りよろめくぞよ、とめどたき啄木鳥。
妹よ、そたたにはきこえぬか、秋のといきが。

薔薇の木に

薔薇の木に
薔薇の花さく。

なにごとの不思議なけれど。

竹林の七賢

さても黄色い蝕月である、
さても閑雅な竹林である。
七人の賢い人、風月の友、
この幽人たちの面持、また、
その清らかさはかぎりもないが、
あまりに世の中からかけ離れた、
それゆゑの月の出か、
明るい眞近な光である。

ああ、いま、せせらぐものに
何かのたよりがきこえさうだ。
さてもこの良夜に
言葉を失くした
ひとつひとつの靈である。
近いやうでもまた
遠い銀と紫の世の中である。

月光微韻

1

月の夜に
影するものの眞近さ、
花ちり方の椎の木。

2

月の夜の
白い白い木槿に
影さすものは
小竹の葉。

3

月照る野路の明さにて、
など啼きやまぬ、
鶉よ。

4

月の夜の
星の淡さ、
見え來る聲の
幼なさ。

5

月の夜の千鳥
見えて啼けとの。

6

月夜の榧、
かやの實が青うつくしよ。

雪中思慕

雪は霏霏として、蒲の穂につもり、
灰いろのへら鷺も今は姿をひそめた。
わたしは小さな蓑笠を着た童、
この雪に日の暮に何處へ行つたものか、

片手にはまだ雛の子の温かみがあるやうで、
遠い郷里の窓のランプも見つからぬ。
ああ、寂寞としてふる雪の郷愁。

落葉松

一

からまつの林を過ぎて、
からまつをしみじみと見き。
からまつはさびしかりけり。
たびゆくはさびしかりけり。

二

からまつの林を出でて、
からまつの林に入りぬ。
からまつの林に入りて、
また細く道はつづけり。

三

からまつの林の奥も
わが通る道はありけり。
霧雨のかかる道なり。
山風のかよふ道なり。

四

からまつの林の道は
われのみか、ひともかよひぬ。
ほそぼそと通ふ道なり。
さびさびといそぐ道なり。

五

からまつの林を過ぎて、
ゆゑしらず歩みひそめつ。
からまつはさびしかりけり、
からまつとささやきにけり。

六

からまつの林を出でて、
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
浅間嶺にけぶり立つ見つ。
からまつのまたそのうへに。

七

からまつの林の雨は
さびしけどいよよしづけし。
かんこ鳥鳴けるのみなる。
からまつの濡るるのみなる。

八

世の中よ、あはれなりけり。
常なけどうれしかりけり。
山川に山がはの音、
からまつにからまつのかぜ。

野茨に鳩

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
春はふけ、春はほうけて、
古ぼけた、草家の屋根で、よ。
日がな啼く、白い野鳩が、
啼いても、けふ日は逝つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
庭も荒れ、荒るるばかしか、
人も来ぬ茨が藤に、よ。
茨が咲く、白い野茨が、
咲いても、知られず、散つて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ、
何を見ても、何を為てもよ、
あいやだ、寂しいばかりよ。
椅子が揺れる、白い寝椅子が、
寝椅子もゆさぶりや折れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
日は永い、眞晝は深い、
そよ風は吹いても盡きず、よ。
ただだるい、だるい、ばかり、よ、
どうにもかうにも倦んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
空は、空は、いつも若い、が、
わしや元の男兒ぢやなし、よ。
世は夢だ、野茨の夢だ、
夢なら、醒めたら消えて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
氣はふさぐ、身體は重い、
おおままよ、ねんねが小椅子、よ。
子供げて、搖れば搖れよが、
溜息ばかりが搖れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
昨日まで、堪へても來たが、
明日ゆゑに、今日は晴し、よ。
人もいや、聞くもいやなり、
それでも獨ぢや泣けて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
心から、ようも笑へず、
さればとて、泣くに泣けず、よ。
煙草でも、それぢや、ふかそか。
煙草も煙になつて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ
春だ、春だ、それでも春だ。
白い鳩が啼いてほけて、よ、
白い茨が咲いて散つて、よ、
かうしてけふ日も暮れて了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ。
日は暮れた、昔は遠い、
世も末だ、傾きかけた、よ。
わしや寂びる、いのちは腐る、
腐れていつかと死んで了ふ。

おお、ほろろん、ほろろん、ほろほろ、
おお、ほろほろ
ほろほろ、ほろろん、
おお、ほろほろ。……

この子あの子

あの子もとうとう死んだそな。
嫁取り前ぢやに、なんだんべ。
　蕪畑にや鰯がはねる。
　お墓まゐりでもしてやろか。

この子もとうとうおつ死んだ。
嫁入り前だに、なんだんべ。
　花は馬鈴薯、うす紫よ、
　鉦でも叩いて行きましよか。

どの子もどの子も、なんだんべ。
色事ひとつ知んねえでな。
　子芋もどつさり殖えたによ、
　かはいさうだよ、まつたく、たあ……

竹林幽居

ひと[illegible]に、
若竹[illegible]香ににほふ。
酔うてほろほろとする日でも、
[illegible]、[illegible]。

匂の秋

かかる人こそわれ知れり。わがふるさとのあはれなり。

ほのるましげの盲人よ。うた[illegible]鼓を手に摺る
て、
なにをかすかに囁いてやら、
ああ、秋よ、
ただ日あたりがよいのやら、
にほひばかりに惚れてやら。
えいや、ほう、はん、
えいや、
こころばかりで鼓つのやら。
花は白菊、ませの菊、
にほひばかりの秋ぢややら。

秋立つ濱

[illegible]

涼しや涼しやと後のが云つた。
好[illegible]かむけた。
涼しや涼しやと乳母が指した。
磯のぬれ岩しぶきが立つた。
涼は[illegible]、
涼[illegible]桿。
また鈴[illegible]、たけいたきつた、
よいにほひよと眺めて行つた。
涼し、や涼しや、涼しやなう、
その響ばかりが吹かれて行つた。

白蛾

黒の毛深い白の蛾は

[illegible]

[illegible]
[illegible]、[illegible]。
[illegible]、
[illegible]。
[illegible]
[illegible]の[illegible]。
なら、なら、留まれ、白の[illegible]、
[illegible]のかなものながら。
[illegible]、[illegible]、
月も[illegible]小さうなるに。

春[illegible]

[illegible]
[illegible]
冲み[illegible]日さ[illegible]

今朝、現なし。
十字架のみくるゐに
君はおはすた。
またいつか、みそなはす
冬の日の白き花瓶。

白藤

藤のはな軒ににほへり、
日の暮れて白き藤なみ。
[illegible]田にほど近からし、
[illegible]車角吹きにけり。
[illegible]来し道了薩埵、
[illegible]麦田もうしろになりぬ。
[illegible]や、遊ぶ子どもや、
[illegible]、跳ぬる足うら。
[illegible]し、小[illegible]たつ杵、
それすらや、なにか、このごろ。
うらがなし、田螺ころころ、
夜の驛宿しぶく泡だち。
いづれよし、餘光の微塵、
脚垂れて蜂もあがれり。
常無しや、為すなしや、ああ、
春はゆく、かかはらず、また。
日の暮れて白き藤なみ、
酒匂川見えそめにけり。

白鷺

白鷺は、その一羽、
睡蓮の花を食み、
水を食み、
かうかうとありくなり。
白鷺は貴くて、
身のほそり[illegible]るなり、
冠毛の払子曳く白、
へうとして、空にあるなり。
白鷺はまじろがず、
日をあをぎ、おのれ啼くなり、
幽かなり、[illegible]のひとつに
蓮の實を超えて立つなり。

早春

槙のこずゑに青鷺の
群れて巣をもつ閑けさよ。
空のはるかを日の華の
凝りかけつつ行き消えぬ。

泉石

萌黄の月の眉引に、
鶴は啼くなり、土のうへ。
水に揺れあふ風のかげ、
花はこもらふひつじぐさ。

にほひをさたき梟石の
[illegible]
蒼き夜ごろけ貫ぬて、
[illegible]

渚

渚たさよ、しろき月
炎しろく、
雲の翼はろばろに
行きながれぬ。

釣舟の漕ぎいづる
入江ちかく、
さざなみの影織りに
魚鱗なたせば
光るなし、かげるなし、
夕満ち汐、
うらもなし、うつつなし、
勝、くるぶし。

[illegible]、黄金蟲
[illegible]
さんごじゆの花の香のみ
蒸しにほひぬ。

冬眠

ねむれよ、やすらかに、
冬のあひだ、
まどろめよ、和み靄の
香にとろみて。

ねむれよ、おだやかに、
蛇よ、かはづ、
まどろめよ、おのが闇、
[illegible]

ねむれよ、このもしく、
夢も欲らず、
まどろめよ、土の室、
塗りとざして。

ねむれよ、[illegible]
あるかなしに、
[illegible]、
[illegible]

ねむれよ、やすらかに、
[illegible]、
まどろめよ、ここり凍し、
地をいとひて。

ねむれよ、[illegible]ごころ。
冬のあひだ、
まどろめよ、ほのと、ただ、
ああ、とろみて。

螢に

螢は沸き、
蒼蠅なすもの、
夜は夜とて
光る神々。
（ほうたるよ。）

言問ひぬ、
かの神の代は
苔清水、
岩根、木の間
（ほうたるよ。）

瞳なるを、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
（ほうたるよ。）

精霊、
我や啼くとも、
誰か、[illegible]かむ、
[illegible]
（ほうたるよ。）

夜は若し、
[illegible]
ただ[illegible]
[illegible]
（ほうたるよ。）

とふふなし、
この夜、現、
なにを、[illegible]は
嫌はむぞ、また。
（ほうたるよ。）

ああ、保て、
[illegible]
に[illegible]み
[illegible]に、この[illegible]。
（ほうたるよ。）

言問

岩が根に言問はむ、
いにし[illegible]しやと。
[illegible]
かそけさ、[illegible]。

草に木に言問はむ、
いにしへもかかりしやと。
おのづから染みいづる
[illegible]、このあか[illegible]

小さき日に言問はむ、
いにし[illegible]しやと。
かか[illegible]わたる
わりなさ、このはるけさ。

幽くに言問はむ、
いにし[illegible]と。
はればれとひ[illegible]
松かぜ、このさわさわ。

水上

水上は思ふべきかな。
苔清水湧きしたたり、
日の光透きしたたり、
[illegible]、馬酔木、枝さし蔽ひ、
[illegible]葉の五百箇眞榛[illegible]、
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな、
[illegible]
岩が根の言問ひ止み、

かいかがむ[illegible]の、
荒み神の神遊び、神つどへる
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。
雲、狭霧、立ちはばかり、
丹の雉子立ちはばかり、
白き猪の横伏し喘ぎ、
毛の荒物のことごとに逆寒ぎ竄る
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。
清々に湧きしたたり、
いやさやに透きしたたり、
神ながら神寂びせすと、
うづの、をを、うづの幣帛の緒を鎮もる
水上は思ふべきかな。

水上は思ふべきかな。
青水沫とよみたぎち、
うろくづの堰かれたぎち、
たまきはる命の渦の、
渦巻の五百筒盤村をとどろき揺る
水上は思ふべきかな。

老雞

さわさわと起つ風の
音響けば、
「雞は羽ばたきぬ、はたはた、ああ、はたは
た、
白樺の、葉廣樺の
かがやく陽を目ざして。

高冠や、猛々し
眼の稜々、
尾羽、翼、はららぎぬ、はたはた、ああ、は
たはた、
岩根の、白羽蟻の、
吹雪よ舞ふ柱を。

力よ、荒み靈、
飛び搏くと、
勢ひ蹴るひと空や、はたはた、ああ、はたは
た、
光の、陽のしじまの
耿たる幅亂すと。

沾まじ、身は重し、
青の夏を、
朱の古りし羅よ、はたはた、ああ、はたは
た、
すべなし、飛び搏うつと
いくばくも飛ばず落ちぬ。

汐首岬

たらたうと波騒ぐ汐首岬、
鮮やけし、雑草の青、さみどり、
ああ、げに、いにしへのアイヌモシリ、
言問へよ、今にして邊の岬々。

味鳧の浮きなづむ海越え來て、
噴き朧る縦雲の秀をあふげば、
夏よ、げに、聲はあり、カムイ、ニカラ、
その聲は風と滿ち、照り響けり。

朗らかや、すがし葉の大虎杖葉の、
露の葉の下つ人、コロポックル、
呼べよ、げに、神はあり、オイナカムイ、

さながらに立つ影の素の裸男。

ここ過ぎて、神ながら身は新らし、
ここ過ぎて、我が息吹蘇れり。
人よ、げに、ひたごころ、直なる神。
白雪の噴き騰る國思へや。

たうたうと波騒ぐ汐首岬、
鮮けし、雜草の靑、さみどり、
ああ、げに、いにしへのアイヌモシリ、
言問へよ、今にして邊の岬々。

註、アイヌモシリ　蝦夷島（アイヌ語）
カムイ、ユカラ　神　（同）
オイナカムイ　古傳神（同）

樺太の山中にて

尾白鷲眼を放つ梢には
横雲の縹雲ほのあかりぬ。

ああ、蒼し、黒椴のさるをがせ、
いつの日か花咲かむ、香も幽かや。

棧倉よ、露西亞びとの住み棄てし小舍、
驟遐のフラフにも朱は褪せたり。

霧は飛ぶ、霧は飛ぶ、山高きに
夏もなほ氣流のみ冷えまさるを。

雲の上に棲む魚よ、みづうみの鱒、
縹渺とふりあふぐ人いくらぞ。

凜として將た思ふ、カムイ、エカシ、
旅行けば我すらや神に入るなり。

註、カムイ、エカシ　神々の祖先（アイヌ語）

曇り日のオホーツク海

光なし、煙し空には
日の在處、ただ明るのみ。

かがやかず、秀に明るのみ、
オホーツクの黒きさざなみ。

影は無し、通風筒の
帆の綱が邊に搖るるのみ。

眺めやり、うち見やるのみ、
海豹のうかぶ潮滙。

寒しとし、暑しとし、ただ、
霧と風、過がひ舞ふのみ。

われは誰ぞ、あるかなきのみ、
醉はむとも、醒めむとも、また。

煙し空、かがやかぬ波、
見はるかす圓き涯のみ。

新曲　千社札

着附

唐棧の袷、手甲、脚絆、
博多の一本獨鈷の帶、貝の口結び、
手拭（かめのぞき、清元染
箱（納札箱）　桐柾、
竿、刷毛、
銀鎖付き胴亂錢入。

背景

遠景に雪をかづいた山脈、

[illegible]
[illegible]
[illegible]、丘の上の堂宇、
[illegible]
[illegible]の[illegible]、
[illegible]の遠見に[illegible]の[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

千日[illegible]　明[illegible]出づ。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
また、
また、
うそや、人の身、とやかくと、
常しかろそれ、忘れてのけて、
いすか[illegible]、獨鈷の博多、
腰は[illegible]、欄に刷毛、
笄は[illegible]、[illegible]たすた
手甲、脚絆の裏地の藍を

ちよいとはねたも、ええ、江戸まへの
行儀まゐりの氣さんじ草鞋。

明[illegible]來る。[illegible]

「頭し[illegible]、
木々のもみぢ[illegible]、
啼くはむら鳥、[illegible]、
山家なり[illegible]、
にほふ狭霧の夕[illegible]、
裾の遠見の鳴子[illegible]、
棚田、小山田、[illegible]、
[illegible]
て[illegible]

村[illegible]人、左右より手を拍き[illegible]
[illegible]、音附よろしく。

「夕[illegible]、小焼、
あした天氣になあれ」

男。

「明日も日和か、また旅か、
雲はうろこの總燃え[illegible]、
札は魚がし、〇に鯖、
安といふ字の白ぬきも

あなた[illegible]
[illegible]
[illegible]、[illegible]は、
[illegible]
[illegible]くあしらひつつ[illegible]る。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

男[illegible]きこえし。[illegible]

「守[illegible]、西[illegible]、
國の御[illegible]、里[illegible]、
辻の閻魔の赤御堂、
牛は大日、木は千手、
泊り泊りも刈萱の
馬頭觀音の[illegible]、
旅は[illegible]、世はなさけ、

鳴[illegible]の六斎[illegible]。

この踊の[illegible]、[illegible]
る。

[illegible]の聲、

鶏[illegible]行け、[illegible]か[illegible]。—

「急がうよ。」

「歸らうよ。」

男。

「急がうよ、
歸らうよ、
いまや、村の子、[illegible]
丸白九つ、[illegible]、
角[illegible]、山道、
[illegible]ほく野道、
山[illegible]いは
木[illegible]に[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]、[illegible]、
[illegible]、
[illegible]の
[illegible]、
見[illegible]、[illegible]しては
た、[illegible]、
えて、[illegible]、[illegible]き、
[illegible]に[illegible]、[illegible]
夜の[illegible]

[illegible]、[illegible]
[illegible]、[illegible]に踊る、合唱。

[illegible]」

「[illegible]。」

男。

「[illegible]、[illegible]、
ぬ[illegible]、
鳥はねぐらに、こちや宿に。」

[illegible]
[illegible]

「[illegible]」

「[illegible]」

男[illegible]

「道は[illegible]しみ、[illegible]の
手刷、[illegible]刷、[illegible]の[illegible]、
ちやちな[illegible]、[illegible]り、
惚れた[illegible]はいまこそ[illegible]、
竿に手[illegible]れの[illegible]と[illegible]、
ひとつ納めて、またひとつ、
心まかせの[illegible]、[illegible]よ、
[illegible]れても、
[illegible]や、[illegible]、
月もさす。」

平野萬里篇

やまおろし　硝子ふく家　轆轤のほとり　うすあかり



やまおろし

まつ中央の一人が
かろくうたひぬ一くさり。
半切を打つ櫂の音。
倉人足はおもしろく
おなじ調べをくりかへす。
半切を打つ櫂の音。

釜屋の二階の板敷に
半切槽ぞ数しらぬ。
左右にめぐる三つ巴。
槽ごとに立つ三人の
手ごとにあそぶ櫂のさま、
右にながるる三つ巴。
くるめき、[illegible]、乱れつつ
[illegible]
右に[illegible]三つ巴
すべての櫂は一斉に
たがひにからみ、折りかへし、
右にながるる三つ巴。

粉雪ふらさむ灰色の
寒の日ざしはうすらぎぬ、
半切をうつ櫂の音。
内は春めき、おもしろく
拍子にあはす歌の聲。
半切を打つ櫂の音。

硝子ふく家

日くれむとしてうすぐらく、
[illegible]き仕事場に
ま[illegible]のあかうし
[illegible]火の玉、前に飛び、
後に[illegible]、右におち
左に[illegible]、たわたわと
[illegible]、大風に、
[illegible]の[illegible]のおどおどと
ゆらるるごとし。中央に
たぎる火山の山腹を
く[illegible]ぬく[illegible]き眼の光、
世をきろきろと睨んだり。
す[illegible]事ありと馳せちがふ

あまたの子供いさましく
そのかみありし玉造、
はた近き代の備以杼呂志、
それらの裔か、黒がねの
手槍をしごき、怪物の
眼を射るや、穂先には
火焔の玉をつらぬける。
早くも高く空ざまに
ふたたび三度くれなゐの
獲物うち振り勝ちほこる
あはれ勇まし。取りなほし、
鑄型さしあて、頬ふくらし
吹けば鑄型もぢと焦げて
紫の烟たちのぼる。
型をはづせば、透きとほる
うすくれなゐの酒の瓶、
頸長うしてひよろひよろと
空にをどれる頸長を
きつて落せば、いちはやく
奪ふがごとくもてゆきぬ。
あた眼まぐろし、戰ひは
闌なるよ、火の玉は
竈をかこみ、右左、
前に後に往來す。

見る見る、こつぷ、菓子の皿、
[illegible]や、鉢の[illegible]、しやぼん入、
猪口もろもろの器物
形をなし[illegible]、棚の端に。
ほのかに赤き[illegible]らは
運ばれてゆく、炎々と
ここにも燃ゆる冶金爐
から[illegible]にいき[illegible]つ
[illegible]たる、累々と
積まれにけりな、瓶の山、
[illegible]の[illegible]の聲
かつ[illegible]、[illegible]熱の
地獄の[illegible]、[illegible]む。

轆轤のほとり

あ[illegible]、くるくると、
いま[illegible]上に[illegible]けられし
ひとかたまりの[illegible]の土。

[illegible]、[illegible]、燒かるるを
[illegible]や、さては、うづもれし
むかし[illegible]、墟の土。

いかにあやしき、人の[illegible]
[illegible]くふるるや、[illegible]つると
忽ち成れる、物の底。

また新らしく輪をつくり
指をふるるや、するすると
忽ち成れる、[illegible]、

[illegible]成れる、物の[illegible]、
それを重ねて[illegible]へば
[illegible]と[illegible]むとす

この[illegible]を小屋にさへ
運命の[illegible]
あり[illegible]、[illegible]の土。

轆轤はめぐる、くるくると、
か[illegible]に、[illegible]
[illegible]

ひとしく小屋の[illegible]に
所せきまで据ゑられし
形いみじき土の[illegible]。

[illegible]

うすあかり

[illegible]といへ[illegible]、も[illegible]、
あ[illegible]あかね[illegible]
空にはあらず。とこしへに
[illegible]曇らぬ世の
かはた[illegible]あかり。

[illegible]として[illegible]
[illegible]を[illegible]る森のなか、
すこしくひらけ、寂として
水をたたふる泉あり、
それに臨める巌あり。

[illegible]

泉のなかに行き[illegible]る。

我[illegible]、みづは[illegible]
[illegible]、わがまへに
わが眼の見つる、これは[illegible]
あか[illegible]むや。あきらかに
いかに[illegible]む、能くぞ見な。

水は深[illegible]、いとすぐに
[illegible]の瞳をのみ
はつかに[illegible]、[illegible]いかこ、
明[illegible]夜[illegible]の[illegible]
熱[illegible]、かはらかに。

[illegible]、そをとつて
[illegible]もこくるくると
[illegible]

しかし[illegible]、
はた、[illegible]、
な[illegible]としく身を[illegible]、
し[illegible]中
巌[illegible]に[illegible]。

[illegible]として我は立つ
木[illegible]、木[illegible]にも
[illegible]森のなか、
あたりを[illegible]の
かはた[illegible]。

はたして、何かきはめむと、
巌の上には[illegible]
水の心をうかがへば
大[illegible]いなる[illegible]ふたり居り、
いうにあそべり、我知らぬ。

茅野蕭々篇

熱鐵　落葉　回復期　モデルのうたへる歌　秋たつ朝　その頃　心の冬



熱鐵

[illegible]は
夜の仕事場[illegible]その時、
牝牛[illegible]を西方人の
裸けし腕を見えしめぬ。

見れば[illegible]
[illegible]、[illegible]我は
胸[illegible]
[illegible]の手[illegible]ひて、

その時、[illegible]
[illegible]嚙みぬ、[illegible]

[illegible]には[illegible]
ものに怖れ[illegible]しは[illegible]。

あなとたじろぐ我、前を
はや三歩ほど隔て[illegible]
血のしぶきこそ[illegible]とほしく、
さと闇にひく紅のいろ、

鳴きながら[illegible]胸には、
[illegible]けただ[illegible]熱鐵は
[illegible]床の上に[illegible]なり、
我が心[illegible]る。

たちまち[illegible]に
火の粉、[illegible]散れり。
[illegible]は苦痛の[illegible]に、
身を[illegible]しぬ。

ああ、運命の神に似し
男ら皆は鍛煉の
鎚をおろしぬ、苦しめる
心に似たる熱鐵に。

落葉

[illegible]に
二葉[illegible]、[illegible]中[illegible]。
[illegible]には、
火[illegible]はなか

見よ、[illegible]黄金の[illegible]かり

讃のごと響かせる靈ら、
銀杏葉はこぼれて、胸の
夢のうた、律をききみぬ。

その[illegible]
妙なる[illegible]ころも淀に、
[illegible]
うち[illegible]の落葉。

ふと葉の、葉のなるが[illegible]
光[illegible]、[illegible]我が身うち
照すあかみ、生命の歌の
音を張りぬ。夢の想を臥し、

あ[illegible]葉、[illegible]に一葉、
かがやける夕日の塊に、
とけゆきぬ。こころの燭の
夢の歌、生命のしづく。

回復期

長い病氣の後、
久しぶりに野に出て見れば、
畠をおびた黒土に[illegible]青み、
くぬぎ林も赤らんだ。
あれ、また[illegible]株に、
秋の[illegible]に[illegible]、
冬も[illegible]、
三月[illegible]
[illegible]、[illegible]、[illegible]

モデルのうたへる歌

予が[illegible]、
潤れたる[illegible]し思[illegible]は、
言葉な[illegible]、ただ白[illegible]
遠き地平に[illegible]をりをり微風起り、
曙のごとき光ほのめけど、
我が小鳥はつひにうたひ出さず。
彼は永久に失なはれにやあらむ。
ああ、畫家よ、畫家よ、
予が顔を、しかく見つむること勿れ。
よし其處に、色と線と光の
[illegible]なる律[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]と咲きとを人[illegible]

秋たつ朝

[illegible]、[illegible]、
[illegible]
あ[illegible]い山[illegible]
線[illegible]、うつくしさ。
燃える火のやうだつた森さへ、
今朝は靜に寂るやうに見える。
「[illegible]」に似る小さい草花に、
吹く風の[illegible]白さ。
秋が來た、秋が來た、
澄みきつたあの高い空。

そこからも涼しい匂が降りて來る。
野にも、水にも、木にも、土にも。

お前はまだ泣いてゐるか。
さあ、暗い部屋から出て
しらじらと明けてゆく、
野をご覽。

ゆうべは何故二人あんなに泣いたらう。
熱情の夏は過ぎ去つて、
恍惚の界から、今、
心地よく行爲に醒めてゆく
初秋の朝のすずしさ。

出てご覽、
この白い秋の朝が
泣きぬれたお前の美しい眼を
やさしく接吻するだらう、

その頃

見つめゐたり、
みつめゐたり。

何處をと問はるるも、
答ふべき術はしらねど。

ただ見つめゐたり。
魂も張裂けむばかり。

その頃のなつかしさよ。

心の冬

ああ、そは我のみかは。

落葉せる木立の樹樹も、
嵐にさめぬ眠に入り、
さざめける池も今しづまりて、
疲勞に横はる少女に似たり。

生命を養ひはぐくむ黑き土、
大空の愛の日さへも、
暫しの安息を願ふごとし。
冬、冬、冬は我が上にも來れり。

心よ、凍てたる土に花草の芽ぐむを思ひ、
眠る少女の夢のなかに、
あかりゆく春の舞踊を知るならば、
嘆かざれ、嘆かざれ、魂の凝り動かぬを。

さしあげし手は空しく
祈願の橋は夕にをはれども、
求め得るかぎりは求めたり
今はただ熟しゆく時を待たむ

冬、沈黙と眠と安息との冬、
來む春の前のひと時、
ああ、我のみかは
天地にもかかる季節はあり。

やすめ、こころよ。

澤村胡夷篇



壇の浦

白雲は動きて、
冷やかに鞍馬の
頂に懸れり。
階上に倦じて、
白髯を撫しつゝ
陰陽の博士は、
ものに、今、驚きぬ。

香の煙、衣ずれ、
橘の樹かげに、
静かなる貴趣を
式神にまゐれと、

うなだれて卜占へる
庭上の白砂に
もの怖づる老師や。

ただれ行く白雲
西方に垂れたり。
山茶花散る苔石、
遣水はとだえぬ。
草路の下風、
式神をうちのせ、
深院にまかれる。

橘の葉を揺る
式神のさゝやき、
古じ凝る老師の
長き眉動けば、

声もなく仰ぎて、
白雲をゆびざす、
西の方。西の空。

西方の雲気は
冥海に動揺けり。
壇の浦、壇の浦、
西海に變とみる。
曇り行く日輪、
つと立ちし階段
冠はふるひたり。

銀漏のしたゝり、
盤上に動いて
東北の疾風は
垂簾を蹴たりや。

殿堂のひしめき、
雜人は急ぎて
階前にさむらふ。
『西方の雲氣に
冥海に沈めり、
壇の浦、壇の浦、
西海に變とかへる、
たゝらかす廻廊、
落ち來るあらしに
玉簾は裂けたり。

棕櫚の花

——小曲——

樞戸うつは、棕櫚葉、
たゞあに燭をあけて
てらすを何ぞところぞ
黄金のはな房、はたと落ちぬ。
塚あな暗き日暮、
しきりに雨はふりて
飢うるがごとき響動の
やみぢを市よりかへうちよる。

彼處にみゆる塚を
壞ちもすべき雨ぞ。
せめては靈のやすみが
塚あな閉ぢよ、棕櫚の
黄金のはな房。どよみわたる
この世と黄泉門を、夜に閉ぢよ。

船室

懶さうな眼よ。鈍くうるむ頰の
ゆるい線と、その重い瞼。
蒸しあつい船室の燈じれて
がたん　ごとん　ごう——がたん　ごう。
青白い額——かたく閉ぢた脣に
あせて震ふ朱と、熱い呼吸。
ほの暗い室の黄なる重い底の
なやましい、がたん　ごとん——ごう。
ああ海よ、何もない。けれどひとり船底に
呻き概ぶ火のやうな瞳。
この若い苦痛のせて、船は何處までも
がたん　ごとん　ごう——がたん　ごう。

砂洲にて

柳は疲羸のとこに影うづめて
たわめる枝には銀のはな珠のみ、
日を彈けり。

蛇籠はひゞきぬ。濶き洲をめぐりて、
柳と柳と低くうつぶし、また
春をのばしぬ。

凍てつどける地を、鈍く震ふ日は
彫塊ちて、ほろほろと崩せり。洲の
ゆるき蜿蜒……

礦にすべての命、なげうたれ[illegible]
いま、沈まむとする冬の……[illegible]念の
ああこの花。

柳のたわみ撓ろゝ[illegible]つやなく、
蛇籠にすれて、淵を滑かすかに
地を這ひつゝ……

花は疲れの岸に、芽をきざみて
たわめる枝には銀の花つぶのみ
ああ、日を弾けり。

冬の窓

名も知らぬ鳥が、いつも、
默つてきて、默つて去ぬ。

雑木林を窓の際へ
煙のやうに、いつも来る。
かれた葉が落ち[illegible]まつて
鳥の路も見えてきた

実は細い實が[illegible]
いま、枝のすきに光つてゐる
赤く熟した烏瓜も
知らぬまに落ちてゐた。

黄な葉が幾束か、
窓のしたに忘れてあつた。

名も知らぬ鳥が今朝も
默つて来て、默つて去ぬ。

夕日の歌

野は暮れる。小鳥よ、空に、雙のはね[illegible]、
むなら
わたしの赤い枕をそつとかしませう。

野路は、いま、胸をおさへて、血と疲れた眼
をねぶる。
いざ、石のたもとの床に、默つて涙を[illegible]
よ[illegible]

何處まで[illegible]も想ひを伸して、行[illegible]だけあなたは往
く[illegible]い
路、たみ樹、丘、[illegible]、[illegible]わたしの智をた
けませう。

ははは、ほほほ、古巣の草に、濕はけしい風も
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
あまりでせう、
[illegible]
た
ははは、ほほほ、[illegible]
眺めませう

長田秀雄篇

深きこころ　港の歌　乞食　晴空　影　月光紅燭曲



深きこころ

透きとほる水の深みに、
静なる冷たきもののすめり、
沈み[illegible]光[illegible]、
もの悲しげに[illegible]、それは
人の情には[illegible]なきなつかしさを印す。
たとへば透明なる沈音の
一高一低するかごとし。

あるかたきかの風、あるひは
[illegible]かなる雨、もし[illegible]つて
その[illegible]に[illegible]、それは
[illegible]女の[illegible]なれど、
[illegible]しき[illegible]立ち[illegible]して、
美しきものを人にしめさず。

また、その[illegible]を夜来[illegible]て、
[illegible]物の像を[illegible]沈黙を強ふるとき、
死人の[illegible]あるかごとき月と、
たえず[illegible]光を、
その面にあざやかに映せども、
されどかの[illegible]なる冷たきものは
深く[illegible]、遂に[illegible]を現はすことなし。

港の歌

[illegible]

朝だ、[illegible]、起きろ、もう[illegible]た。
汝は[illegible]美しい[illegible]た。
見ろ、[illegible]窓から[illegible]
緞子夜具を照してゐる。
朝だ、鸚鵡。起きろ。もう朝だ。

伊豫丸が今、波止場へついた。
ほら汽笛がきこえるだらう。
きつと汝の好きな龍眼肉を、
あの船は一ぱい積んでゐるだらう。

汝はいつも夢をみてゐる。
海に[illegible]た窓によりかかつて、
[illegible]の街に[illegible]
[illegible]の影を、見小さき姉妹を。
また[illegible]しい[illegible]、
[illegible]汝は[illegible]
朝だ、鸚鵡。起きろ、もう朝だ。

[illegible]の日の、[illegible]を聞いて
[illegible]に[illegible]
[illegible]のは[illegible]、
[illegible]、もう消えた。

公[illegible]

あかり消えぬ、南京街の、
[illegible]て人影見えず、
[illegible]の青き光に
[illegible]る街を[illegible]
[illegible]て朽ちゆく春、
[illegible]き空気にまじる。

土耳古帽かぶれる若者、
見えつ、[illegible]
[illegible]、[illegible]もまじり、
十億人、[illegible]
かかる[illegible]、
[illegible]

[illegible]明き[illegible]、
ただ宙に[illegible]を
響くは[illegible]て、
破調子[illegible]となりもしぬ。
癩病める女芸人は
足姿に何かささめく。

おもしろき宴のさまや、
酔ひ痴れし裸体の男、
よろよろと踊り出づれば、
隣はみな手を打ちはやす。——
かかる時病めるか、一人、
ちとうめき仰反り伏しぬ。

「河童奴が病みぬ」と云ひて
非人等は手とり足とり、
「笑止なり」「早息絶えぬ」
「打ちおけよ、貨をとれよ」と、
容赦なく鉄ふるへば、
かなかなと銅銭まろぶ。

「死面の見苦しさよ」と、
あざ笑ひ、「いざ疾く行かむ、
夜行の巡査来らば、
善からじ」と、ふと瞳をとめ、
「[illegible]とよ」「[illegible]も」と[illegible]て
[illegible]ふかき闇にまぎれぬ。

空虚のこれも世のさま。
夜はいつ時か、跡はしづかに
星月夜。瓦斯の火かげに
蒼白き臓腑見えて、
死馬のごと遺れし男——
敷石に黒血流れぬ。

暗室

暗室のうち、我はただ
人のためいきと熟れたる果実のやうに刺激する香気と、
冷たき前額とを感ず。
日も知らず。時も知らず。
眼前の事実も知らず。
ただ深く没頭して、その感
音を没したる深き音楽をきく如し。

それはわが悶絶の一部にして、
如何なる高貴なる人も爲すことなり。

影

古沼

時は午前、晩夏の光
烈々と、大野のはてに
草深き古沼てらせば、
底に水ぬるく青みて、
鳥ひとつ、[illegible]
水[illegible]を折々水に
[illegible]の波紋を起す。
いたましと荒蕪の色
[illegible]の蔭に見えて、
青き[illegible]
白日の[illegible]。

月光紅娘曲

月が出た――ご覽、紅娘、
ほら、あの街路へ[illegible]

闇い月が――汝の持つてゐる
銀の鏡子のやうな月が――見えるだらう

ほら、海が汝の嘆息のやうに
眞珠いろに輝いてきた、
黒い帆影だけが
闇夜のやうに深く見えるだらう。

月が帆柱にかかつて
磔刑にされてゐるやうだ
大きい帆布が鍍金したやうに
銀色にぎらぎら顫へてゐる

海岸に乞食が三人
月光に刺されて
神經が腐つてしまつたやうに
呆やり海を眺めてゐる

紅娘、今夜は海岸は
在月の夜の灯の下
凝然と[illegible]てゐる
肥つた美しい蛙のやうだ。

[illegible]はつてゆく

汝の沈んだ眼の奥に
褐色の瞳の奥に
靜かな悲哀が燃えてゐる。

見知らぬ國に賣られて來た
おとなしい女は日が暮れると
自分では何とも思はないで
よくそんな眼附をするものだ。

紅娘、汝の衣服をご覽
月が映つた支那絹の袖が
雲南の斑鳩の翅のやうに
冷たく美しくみえる。

綠色の帳子の蔭で
初めて汝を抱いたとき
崑崙の麝香の香がした。
――黄金の耳環は冷たいものだ。

紅娘、あの茉莉の花の匂ひする
包種茶を一つ持つてお出で
そして靜かな南京の
悲しい[illegible]花曲でもきかせないか。



木下杢太郎篇

[illegible]

はためき

「はためく、はためくぞ。[illegible]よな、おぞ
[illegible]出でて
[illegible]。南洋の戦の
いよいよ、あの[illegible]の船の
窓に来る伽羅を[illegible]く。」

高札

「高札の下を通るの人は
心してゆけ、足な鳴らしそ。

[illegible]

一の瞳[illegible]
[illegible]
[illegible]目の[illegible]の
[illegible]香
みさの[illegible]には
[illegible]ふ
[illegible]のおもても
[illegible]る[illegible]」

緑金暮春調

ゆるやかに、[illegible]の白き大水盤に
ゆらめく、きらめく、暮春の[illegible]よ。
その律[illegible]り、緑金の[illegible]ば
今日もまたいと重くうち薫り、空氣淀みぬ。

[illegible]り、
[illegible]
戀の子ら手を[illegible]、わりなし[illegible]
きて
大空ににじみゆく悲哀の淡藍色ながめ
すずろにも、[illegible]だき涙する時しもあれや、
ひそに、さと、[illegible]た少時、窓[illegible]る[illegible]
聲・・・
「古き世の、古き世の愁ひ[illegible]絲しみだ[illegible]」
「さば[illegible]の影[illegible]る彼の島に、してえる[illegible]に
わが小舟寄せたむに、などてさは歎ふ――と
云ふ。」
「この舟の、この絃の、この戀の朽ちは[illegible]――と

答ふ」

花ちりつ、花ちりつ、灯に揺れて、花ちりちりつ。

ともすれば深みゆく心の沈黙うち擾し、
わかき日の薄暮の竪笛は泣くこそさぐれ、
石楠花の葉も垂れて、ああ、つひに怨恨も暮るる。

かつしかつし、むらむらばつと、「時」の足、
戀慕、なげかひ、
歌、小唄、楽譜の精靈ら黒みゆく丘を逃げかふ。

ああ暮春、この堂の錆びし扉は音なく鎖され、
西の空やや明かり、濃き空氣おぼめきたるを、
ただひとり、今もたほ、ゆるやかに、さはれ悲しく、
さららめく、きららめく、ほの青き鬱憂よ。

玻璃問屋

空氣金緑にしていと冷き
五月の薄暮、ぎやまんの
數々ならぶ横町の玻璃問屋の店先に
盲目は來りて笛を吹く。
その笛のとろり、ひやらと鳴りゆけば、
青き玻璃、水色の玻璃、珊瑚珠、
管の先より吹き出づる水のいろいろ——
（一瞬の胸より胸の情緒）。
流れ流れてうち流れ
流れゆく引いてはいと長の細き口より飛ぶ泡の
車輪まはせば風鈴もりんりんりんりんとなりさわぐ。
わ[illegible]胸さわぐ。

おどけたる旋律をきけど、さはあれど、
雨後の空氣のしつとりと、
うちしめりたる五月の暮れしがた、
びいどろの鐘鳴りわたす玻璃問屋の店先に
雲を漏れたる落日の
その一閃の長箭の一矢が、
ぎやまんの[illegible]より日をとめ
ゆら[illegible]に立てる玻璃の少女、
（ああ人間のわかき日の
唯一瞬のさんちまん）
それを照してまた消ゆる影を見るゆゑ、
われはそれ故涙する。
君もそれ故涙する。

落ちし涙は水盤に小波を立て、
くるくるとまた車ぞうちめぐる。
車は廻れ、波おこれ、
波起す[illegible]れ、
風は吹きてりんりんと風鈴鳴らし、
細君は[illegible]鳴らす玻璃問屋の店先に
盲人は來りて笛を吹く。

金粉酒

Eau-de-vie de Dantzick.
黄金浮く酒、
おお、五月、五月、小酒盞、
わが酒舗の彩色玻璃、
街にふる雨の紫。

そんなよ、酒舗の女、
そなたもうセルを着たのか、
その薄い藍の縞を？
まつ白な牡丹の花、
触るな、粉が散る、匂ひが散るぞ。

おお、五月、五月、そなたの聲は
あまい桐の花の下の竪笛の音色、
わかい黒猫の毛のやはらかさ、
おれの心を熔かす、日本の三味線。
Eau-de-vie de Dantzick.

五月だもの、五月だもの——

両國

両國の橋の下へかかりや
大船は檣を倒すよ、
やあれそれ船頭が懸聲をするよ。
五月五日のしつとりと
肌に冷たき河の風、
四ツ目から來る早船の緩かな櫓拍子や、
牡丹を染めた[illegible]の[illegible]が波にもまるる。

灘の美酒、菊正宗、
薄玻璃の杯へなつかしい香を盛つて
旗亭の二階から
ぼんやりとした、入日よ、
夢の國技館の圓屋根こえて
遠く飛ぶ鳥の、夕鳥の影を見れば
なぜか心のこがるる。

該里酒

（「鴻の巣」の主人に）

冬の夜の暖爐の
湯のたぎる靜けさ。
ほつと、やや頬に出たるほてりの
幻覺か、空耳かしら、
該里酒杯のまだ殘る酒を見いれば
ほのかにも人の聲する。
ほのかにも人すすり泣く
「え、え、ま、あ、な、に、ご、と、
ぞ、い、ひ、　あ・・・と

と[illegible]は[illegible]の響か、
[illegible]いた——[illegible]、
それをきいて人の泣いたる——
乃至その酒のしわざか。

冬の夜の靜けさ、
[illegible]、該里酒[illegible]
さて云ふは時計の響か、
乃至その酒のしわざか、
[illegible]窓か[illegible]見れば
星の夜の[illegible]雨[illegible]、
舟一つ　[illegible]水音。

こほろぎ

こほろこほろと鳴く蟲の
秋の夜のさびしさよ。
日ごろわすれし[illegible]さ、
思ひださるるはかなさに
袋戸棚をさがし、
箱の蓋はとり落して、
棒もついて見たれども、
あはれ[illegible]、[illegible]人も聞くやらむ、

つたなき音は立てじとて、その儘におく。
月は[illegible]いよいよ消えわたり
悲し[illegible]、いよいよ[illegible]。
[illegible]はかくれて夜は鳴く
[illegible]
しばしとぎれてまた低く
[illegible]と夜も[illegible]。

海の入日 敍序

……[illegible]れはしない。遠く、水平線の上に相模の大山の一[illegible]の見たのは夕方であつた。[illegible]
[illegible]
[illegible]つかは御伽比亞奇話のあやしい夢の國に引き入れられるやうに思はれて來る。

潮の[illegible]に[illegible]ば
また[illegible]て消しさりぬ。
あはれはるばる我がおもひ、
[illegible]に[illegible]。

石竹花 敍序

[illegible]「[illegible]」などが盛らされ「當世[illegible]」[illegible]盛の浮世繪などの繪卷の後に芳虎が「英吉利國」[illegible]
[illegible]ひくる黑船」の大津繪「横濱へ通ふ蒸汽は千枚張り[illegible]
[illegible]蒐集は欲は[illegible]。其代りにもそんな唄を今聽く[illegible]崩されて行つたといふ痛ましい記憶が續く。其中にも、予に尤も深い印象を與へたものは、[illegible]の傍への沿革である。初めは小さい家に[illegible]
[illegible]悲しい有[illegible]がある。
[illegible]

世はかく變るが、然し二十年三十年否々百年に其前にも或はわかき人のまた今の予の如く、はかなき[illegible]、かく海の面に立ち[illegible]盡したものがあるかも知れぬ。

夕暮れがたの濱へ出て
[illegible]を[illegible]には
昔もかく人のうたひ候と
よ[illegible]。
さても昔も今にかはらぬ
人の心のつらさ、懐しさ、悲しさ。
[illegible]の石垣に
うす[illegible]の石竹の花が咲いた。

浴室の窓より落日を見る人の歌

西日が山に近づく。
[illegible]山の[illegible]日の[illegible]も
早いのだ。そしてその金色の光が
庭の杉の並木、
青い[illegible]木、
それから[illegible]に[illegible]つて——
無數その葉はぎらぎらと金色に光つてる
[illegible]

そして長い[illegible]ける。
わたしは[illegible]、
その[illegible]
奇麗た[illegible]
まるで[illegible]者たち、
「[illegible]
[illegible]
何[illegible]
[illegible]てゐるのだ。
わたしは——はつと[illegible]をかへした。
でもまだ小指は
紅く血の色の縁を取つて
かの太陽のやはらかい[illegible]を浴びて居たので
ある。

温泉——
わたしはもう何もかも忘れてしまつた。
彼の人の温い[illegible]も
これほど純粋な平和と
快楽と[illegible]感とを與へはしまい。
そこでわたしは小指の背をまげて
懶く、ほの赤いその關節に樗(?)をあてて
この静かな夕方の温泉の息を吸ふことにし
た。

もう日は[illegible]
何[illegible]
[illegible]
もう[illegible]て、何か小さい[illegible]
つけて[illegible]
鶏の子[illegible]——[illegible]
鳥居の[illegible]を出して、
何ごと[illegible]、[illegible]事か、
まるで[illegible]を[illegible]れた
昔の[illegible]人といふ所だ。
それ[illegible]けこけこと大[illegible]をするのだ。
よせば可いのに、
その上、あの白犬まで[illegible]て来て
そこで[illegible]なつたのだ。

川を流るる水の音の
闇けさ、またも、けたたましさ。
いま[illegible]の飛んで行つた
あの[illegible]木の間から白い水の面が見えるか、
早鮎のやうに大[illegible]の間を滑つて来た水が
白く砕けて、またそのあち、
あの紫水晶の卒に入るまで
あんたに叫んだり、呼ばはつたり、
魚の[illegible]たり、

[illegible]、
[illegible]
小[illegible]、
[illegible]、
[illegible]
[illegible]
水を浴びる女の子の[illegible]のやうな——、

ああ、[illegible]
[illegible]
る。
もう夕飯だといふのだらう。
おお、何となくさびしくなつた。
わたし[illegible]
[illegible]
その[illegible]
「大[illegible]
みんな[illegible]
そして[illegible]
さうだ、[illegible]上つて、
それからあのあまいそ[illegible]るんの息に浮かれ
て、
昔の旅人のしたやうに、
悲しい歌をうたひながら、

[illegible]い、[illegible]の[illegible]を[illegible]して見よう

よるよるは

よるよるは

夜よるはねむし口惜し獨立し、[illegible]も[illegible]
[illegible]悲し。

雨の[illegible]見

[illegible]、大[illegible]見にこゝろある
[illegible]。

やはり何よ[illegible]

[illegible]

消息

[illegible]

また用いたほどに。

むかしの仲間

むかしの仲間も遠く去れば、また[illegible]
はそれに、[illegible]なき[illegible]なき
と。[illegible]、[illegible]月[illegible]、四月[illegible]
[illegible]く[illegible]五月には
[illegible]花[illegible]の[illegible]、窓の
[illegible]。

飛行機

[illegible]から人[illegible]死んだといふ[illegible]を見
ない、[illegible]何となすい
[illegible]、小[illegible]味[illegible]小つく
[illegible]

[illegible]よ

[illegible]、そなたはわかけれども[illegible]、こ
[illegible]る[illegible]
[illegible]

く[illegible]この[illegible]はたんと知つ
たな[illegible]ある[illegible]地もある、
[illegible]前酒後、ま
[illegible]れども、[illegible]
[illegible]れつれつれに。

[illegible]

[illegible]の[illegible]き
[illegible]色に[illegible]、[illegible]出した
る今宵の悲哀は、[illegible]
[illegible]、[illegible]に思はれた。

夜ひそかに訪ねる友

[illegible]い、い[illegible]、[illegible]美しさ、[illegible]
[illegible]に、
[illegible]に[illegible]、[illegible]を
夜、[illegible]のかほり、小さき燈かそすかに點し、
[illegible]
たゞ[illegible]に[illegible]
[illegible]
[illegible]、

[illegible]落ちる[illegible]
ほんやりと[illegible]行く[illegible]くに……

窓の外は雪、[illegible]に
月光さむけく、[illegible]しけども、
紙で、障子、[illegible]の[illegible]は、
空気重く、湿[illegible]かの内に火の燃ゆ
る音、
遠き川の[illegible]と[illegible]る。
[illegible]の夜の[illegible]けさ。

われは食後、熱きかかおのあとのしえりぶらい
い、
暫し頭に[illegible]にまかせ、
いつも夜は訪れ来るなる
わが友、わが[illegible]性素質に厚く
[illegible]の足音を待つ。
既に彼は在り。われは鄰房の蓄音器の、
[illegible]しく痛しき徳川古曲の悲哀を語り終へて、
なほとめ手なきにぎりぎりと廻るを聴きつ
つ、
ふと心からに
[illegible]

海に入る
小さい町に
[illegible]の[illegible]り来る音かも[illegible]せる
[illegible]に[illegible]く[illegible]く。
いいしれど——その[illegible]像の
わが扉叩くそれたり。

春の夜の大雪

静かなるホテルの夜、
或る露西亜将官の夫人は
涙して我等の物語を聴きければ、
半ば、われ、童話書く心持になりつつ
美しき日本にありし
わかき日の事ども、いと真しやかに、
其實はいたく誇張しつつぞ物語りける。
「あな、新に茶を呼ばむ、
ベルタ、鈴押したまへ。」いたいけの童女に
「汝もいまの話解き得たるや」と言ひかけ、
窓に倚り「あれ、雪また強くなりぬ、
春なるに」と獨語ちつつ、静かに
暮方の街うち眺むるけはひ。

是もまたわが露台の一とき。

草堂四季

昭和二年

わたしの[illegible]き[illegible]の[illegible]、二月[illegible]の[illegible]
北風、[illegible]が[illegible]れ来る　さもありなむ、雪[illegible]
の葉がいろ。

庭に雪。梢に星。[illegible]に[illegible]知らぬ灯かげ[illegible]
らゆら。

今日はまた音色が[illegible]。雪にきしむか、[illegible]
[illegible]。

はねつるべ、空の月は小さいか。

塀の下一寸の青。互に薄き日のかげ。春[illegible]し
北國の空。

わが庭はとさみづきの黄なる花ばなを名のら

す。わが添は雪日ねもす。夜の風雨戸を鳴らす。

あちこちに葉の出でてそれぞれに命を張らす。白樺、春の冷さ。

芽は出でて水仙とこそ知られけれ なべき日のかげ。霜にあれし地の色。

突然に芽から葉が出でた。梅咲いた。春の潜[illegible]なめらか。

今日は幽きの立に寄る——日待つたる不意。

春の流れけざ[illegible]か。

鍋で春[illegible]比目魚や。日の滞り、[illegible]次のららら か。

大寒し、春の[illegible]日は落ちて空のはるか。

庭上[illegible]、たそがれ、春音を聴く。

*

た[illegible]、[illegible]、[illegible]、花小さくたり。

あさごけのほそぼそと、わが庭も夏に入りけり。

丸窓のふと飛びこみ、おや夏だ、さすがにと、しばし眺めた。

蟲買つて檜の枝につるし。夜ふけても鳴かぬ蟲。馬おひ。

*

秋雨や障子をあけて、衰ふるものの明るき。

ふと湯殿の窓より見つけたるはプラチナいろの瓦なりけり。秋雨、暮れがたすこし明るく、垣のそとのどよめき。

漣波の如くにも[illegible]いたむ、雨息みて落葉あかるし、と見、かう見、栗鼠、[illegible]掃かずにいて。

いつの間にか席がなくなつた。あれほどのこほろぎ。

昭和三年

ふと高窓から見たらば雪かと思つた。この時の雪さだから。實は梨の花盛に月のさす光であつた。壁に落ちた梨のふかぶか。

手水鉢の水がきらめく。外は梨の花盛に月が冴えた。壁のかげの影が[illegible]くなる深さた。

これはわたくしは長安の春夜を懐つた。嘗て行つた。今は無い。かの楷樺の消えてゆく音の如くに。

それは黒い犬であつた。あるか無く[illegible]いて行つた。めりめりと月光、夜中の荒苑をゆすぶる。



春の旅情

そぞろなり、春の日に旅行けば、
山櫻散るを見つ、山路を歩み、
我れ獨り、遠くなる大空を望みては、
我が胸そぞろなり、そぞろなり、
陸奧の厨川、見え隱れする流水の日に輝き、
衣笠淋しくして國原に人稀れなり。
我れ峰を越えて、
白河、衣川も後にしつ。
善知鳥棲む東の濱に、
曉早く春の潮のとどろくに驚き、
出でて濱の沙を踏めば、
風は千里の彼方より衣を吹く。

濃藍の空と海とに、
我が想は鳥の如くに翔りて、
涯も無く行くここちなり、
ああ我が憩ふべき處は何地ぞ。

そぞろなり、我が胸そぞろなり、
陸奧の果てなる津輕の海に、
我れ來りて、春空しけれど、
我が憧憬は翔る、心の翼。

美の殿堂、多くは廢れて、
礎に櫻の散りし平泉、
懷古の涙とどめ難く、去りては雲に身をゆだね、
我れは行きて陸奧の津輕の海を看たり。

三木露風篇

春の旅情　現身　早春の林にて　淺水の岸に立ちて　黎明　[illegible]　白き月夜　濱　夕陽　橄欖の下　志摩の村　船の印象　[illegible]　海の船上にて　北海道の旅の或日　影と人生　黄金杯　春の饗宴　[illegible]　村童　渚の月　ロータス　法隆寺　月見草　横顔の印象　地上の春　[illegible]　し沈丁花　白日夢　夕の曲　牛　晩秋　秋の草木　宙の鳥　水[illegible]月　[illegible]　き言葉　自畫像　北洋の詩

現身

春は今、空の眺めにあらはれ、
ありとも知れぬ薄實に、
惱みて死ぬる蛾のけはひ。

ねがひはありや、日は逝し、
花は幽かにうち薫ず。
ゆるき光にたましひの
煙の如く泣く如く。

我が身のうつつ眺むれば、

雲雀の聲[illegible]、
かすみわたる中、[illegible]、
入日の中に[illegible]遠く響く。
心もかすむ日暮れ時、
鳥は[illegible]花は[illegible]に、
恍惚の中に[illegible]、
色と色とは[illegible]、
我は[illegible]、[illegible]、
[illegible]の[illegible]、[illegible]、
身には揺れ[illegible]がしく、
入日の花[illegible]ず。
[illegible]、
あり[illegible]に、
[illegible]。

早春の林にて

早春の林に入りて[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、

陽炎のゆらゆらと燃えて明るし。
旅に來りて幽かなる憂を覺え、
なほさまよひ行かむと、
我れ自然をば慕へども、
靜かなる林に入れば君を思ふ。
たまたまに別れて、
[illegible]に又めぐり會ふ、
君は[illegible]、心清く、
我れをして君の面影に[illegible]。
ああ大寶の沼の水涸れて、
見渡す大野には人も無し、
[illegible]に、
我れは過ぎ[illegible]を思へり。

流水の岸に立ちて

[illegible]、
[illegible]もうづくまりて、
[illegible]、
[illegible]、

水の面より我が顔に反射しぬ。
流れは[illegible]、
[illegible]く渦卷となり、運びゆく
苦痛と快樂との間、
[illegible]く[illegible]。
流れ來る水は、我[illegible]、
眞實の世界に[illegible]ぐ。
一つの[illegible]は指を[illegible]、
又一つの[illegible]、
指のめぐりに[illegible]――
あ[illegible]、
光は[illegible]、
[illegible]、
[illegible]く[illegible]。
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、

[illegible]
[illegible]、
[illegible]も時知らず、日を暮らず、
[illegible]れのふちの戀心地、
[illegible]無き世界の輝く水に手繰して。

黎明

象牙に白き背を見て、
冷やかに清淨なるを感じ、
氣流の中に、
精靈の通るを覺ゆ。
太陽の昇るに先立ち、
雲霓、高調の交響樂と
移り變り行く氣動、
そは可見か、不可見か。

春の暮れ

柔らかき夕の靄に、
[illegible]
[illegible]、
[illegible]
ああ春の暮れ、
抒情調なる
歌曲を奏づる如く、
空氣は月色と諧調す。
物静かに葉を垂れたる樹は、
夢見ごこちに靄に浮び、
今宵我が胸は、
そぞろに月と融け合ふ。

白き月夜

白き月夜にさまよひて、
遠くに吹ける笛を聽く。
ほのかなる靄の中、
その音も消え消えに……
森の影、鮮かに、
樹の肩は月光に白く、
[illegible]、
ああ深き森の奥、
笛の音を聽けば[illegible]し、
内心に入りて、[illegible]ろはみ、
遠き方思ひいでられ、
思はずも涙ぐみ[illegible]り。
静かなる樹や影[illegible]……
白き月光に、
すべては夜想曲の如く、
夜は更け行けり。
をりから梟の[illegible]、
靜觀の眼澄みて、
啼き出づる——そも、
月夜のシンホニーの一つか。

濱

大きな惱みが襲つてゐる風の濱、
人生の半ばに禍のあつたやうに、
白浪、激浪、

さうして汽船の浮き沈み――
一脈の悲哀のメロデーが、
慰めの如く濱邊から起る。
それは誰か吹いてゐるのか、
幽韻の笛。

人生は忙しく過ぎ去つて行く、
白波は岸の礫が碎くやうに、
殘つてはゐるが、やがて平穩になる、
思ひがけない死が、水平線上に現はれる。

凪ぎゐた日本のすなほな少女が、
只吹いてゐる、
さうして海上に日が暮れる。
濱の幾年の春秋が過ぎた。

紅い太陽

光、
紅の輝き、
沙漠の礎を打つて――

世紀の響は地響きして、
遙かの地平から傳はる、
海上の岩には海豹が嘯く。

エヂプトの古代文化が、
廢墟となつて、
それから間もない頃。

紅い太陽が沙漠に沈む、
それを歌つた女詩人が、
紅海の濱を目ざしていつた。

其の詩の碑銘だけが殘つた、
永遠に――
沈默と共に。

光、
時の調べ、
沙漠の礎を打つ音――

橄欖の下

橄欖の下で、

老いた人が泣いてゐるのを、
[illegible]に見た。

日は沒しさうに、
有史前の民の住みた穴居の庭に、
沈んでしまつた。

いつ、どうして、
この橄欖の樹があつたか、
それさへも知らぬ。

どうして橄欖の實が、
あつたか、
さうして殘つたかも知らぬ。

それを思うてゐる、
老いた人が、
けふも樹の下で寂しく泣く。

その人は何人か、
ユデアの民なのか、
悲しむ古代の遺民か。

嘗ては[illegible]であつたユデア人か、

今は故国とはなれて
[illegible]——

其の民族に似た人を、
私は知る、
[illegible]

オーロラの白光が薄の[illegible]地に、
[illegible]
[illegible]を[illegible]んでゐた彼の[illegible]

[illegible]
人生の[illegible]
[illegible]いた人。

[illegible]の[illegible]は[illegible]で行き、
さびしい風が其の[illegible]を音づれる、
さうして老いた人も[illegible]に残はれる。

志摩の村

鳥羽の町のうしろの山に登つて、
[illegible]

小さく、さうして[illegible]しいおを、
ふと心にほほゑましく思ふ。

[illegible]に、
こんな小さい[illegible]があるのを、
[illegible]と[illegible]したらよからうと、
[illegible]
[illegible]

[illegible]に[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
「[illegible]」と[illegible]等は笑ひかけながら、
浪漫的な氣分で水夫とも語る。

船の印象

[illegible]、[illegible]

[illegible]
[illegible]、
ここでは[illegible]

[illegible]
水[illegible]の[illegible]で[illegible]る時
[illegible]

[illegible]な水兵の[illegible]。
[illegible]えだすと、
[illegible]

[illegible]の中にある[illegible]の「詩」、
[illegible]に[illegible]つて[illegible]
[illegible]……

海上の幻想

船中の卓子の[illegible]の好い
金[illegible]花、世界を縮小した
花の[illegible]をなしてゐて、

日の[illegible]って[illegible]の
肉体に[illegible]。
火[illegible]の[illegible]に、
人[illegible]、
[illegible]。
[illegible]、[illegible]。

波濤の[illegible]て、
[illegible]の光は尖鋭の部分で、
そこで[illegible]は意志の象をなすもの、
[illegible]——

もう人魚などつゐさうもない国、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、

さうすると[illegible]いタイフンが吹いてくる、
[illegible]、
船中は一人二人去つて甲板に行き、
[illegible]。
ジャガタラぶみでも草案しようと
する人が黙する。

航海の船上にて

吹雪、さうして曇つた灰色、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]——

[illegible]、
人[illegible]。
[illegible]、
[illegible]、これだけ、[illegible]。

[illegible]、
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]を顕はせつつマストに来る。

[illegible]
[illegible]、
[illegible]
[illegible]、
[illegible]

北海道の旅の或日

軒からさがつた氷柱がぽとりと、
[illegible]、
[illegible]、
北海道の旅宿の或日に。

[illegible]、
[illegible]。
[illegible]、
[illegible]一人。

[illegible]は、
別の街へと歩み去つて行き、
さうした人情の[illegible]、
[illegible]。

[illegible]
[illegible]、
さうして砕けたのを、
[illegible]、
どこかの心の和らぐところがすこし

影と人生

やがては、
君はあちにて、
我はこゝに
黙してあらむ。

日は早く、
瀬を過ぎ行く、
時計にも、
鳥の影——!

ああ鳥の
影の如くに、
去り行くか、
此の人の世も——!

黄金杯

吾れは黄金杯、
いつも楽しく人生を
観照するためにあり。

吾れは黒髪の女、
吾れは黒髪の男、
吾れは黒き酒を愛す。

吾れは黄金の杯、
日光と月光との下、
地上に歓楽を齎らす。

春の微風

柔らかな野の樹木の緑は、
微風に吹かれて戯れを囁き、
歓楽の甘露と素直な気性との姉妹が、
春を負ひ微笑して、大気に微笑む。

自然は此のふたりの姉妹の前に跪き、
雲は白く静かに動き、
紅と白との木蓮の上に、
其の影を翳し、
斯くて微風は、
野から野へと吹く。

詩[illegible]に[illegible]、
彼は、[illegible]の[illegible]を[illegible]、
しかして[illegible]、
そして[illegible]、
其處に日光[illegible]、

あゝ[illegible]の[illegible]に、
雪の色に[illegible]はあれど、
静かな[illegible]、
明るく、そして[illegible]い[illegible]を[illegible]ふ。

橋上

暗き水の色、
夜の闇に、
只一つの燈火の
岸より洩るゝに[illegible]照らせる。

おゝ[illegible]しき[illegible]冬、
水も[illegible]の
心を[illegible]くが如く、
よどみてあり。

橋上の人人、
雪の降らむとする時を、
急ぎて行く、
寂しき夜更けて——

村童

旅で病んだ一人の詩人が、
途中で醫師の手當を
受けてゐるのを、
見た跡に町を通つて行くと、
もう杉の上に新月が出てゐる。

「あれは女を食だ」
かうささやく村童が二三人、
遊びおくれて道で會ふか、
一寸した對話をしてゐる。

旅は偶然の所見と感傷とを、
私の心に感じさせながら、
しかも亦遠い地への憧憬を、
やめさせたい魅力を、
何か知ら持つ。

新月を愛でながら、
宿に着く〳〵と、
もう暗い心持になつて、
何となく、
森の中にでも、
臥したい氣持がするのも、
旅は詩であつて、
眠りでたいことを想はせる。

渚の月

月、濱邊の渚に照り、
我が歩める路の一筋の足跡、
いつか消えてしまふことを、
儚なくも興あることに感ずる。

須磨——昔の戰は、
風にまぎれ、
向うの舞子の濱の
松風は聞えぬが、
只感傷の歴史的感興に、
月が特殊な氣分をさそつてくれる。

嘗て私の人と話した斜丘に似た所、
誰も見えぬ日には、
不思議な閑寂・
さうして明麗そのものの様な記憶、
只それは一詩であり一夢。

須磨、明石と少年の頃の
追憶の落穂を、
ひそめる様な濱
まだもつと歩まうとして
沖を見ると、
月が漣波に照つて笑つてゐる。

ロータス

黎明に開く、ほの白いロータス、
露が其の葉において、
靜かに東が明けてゆく
清らかさ。

朝の石階に咲いて、

昔の寂びを殘し、
そこに倖ばまれた封建の
寂しさと豪華とが見える。

只清いロータス、
汝ばかりが、
今も私の心を慰めて、
曙の月の樣に、
優しい夢をささやいてくれる。

ロータス、おおロータス、
濠の水は古くても、
また冷たくても、
黎明の香を傳へる。
汝のみは我が友。

法隆寺

遠くから見える法隆寺、
昔の香を殘して榮える、
今も――
路は靜かで、
誰も見えぬ、
古都の情調は、
我が胸に染みる。

ああ法隆寺、
聖德太子の賢慮の美、
いかに永久の生命を、
其の建築に表現するか。

法隆寺の大伽藍は、
私の心に、
日本古代の夢と光と、
藝術とを齎らす。

日が漸く暮れかける頃迄、
私は此の藝術の前に立つて、
古と共にあつた。

月見草

黄ろい月が彼方の野から出て、
其の光を受けた月見草が、
優しく、ほんのりと、
靜かな風に搖らめく。

ああ月見草の影もする、
明るい月夜。
露も、もうおき初めた、
野の小徑の傍の草に。

郊外の野の路を遙か、
私は友と共に歩み、
月光を浴びながら、
歌を低唱する。

月見草よ、
柔かな花瓣と、その色と、
私は、お前のやうな心を抱く、
あの遙かな月を眺めて。

横顔の印象

古の雅びの姿偲ばする
氣高き君の横顔よ、
花咲く森に月昇りて、
柔かき光と影と靜かに、

古代錦の模樣の如く織り成したる
其の印象。

地上の春

ああ春よ、
我が胸は、とどろきわたる。
歡樂の大氣の中に。

白き日の光は、
樹の濃き影を地に印し、
青空の遠きところ霞む。

我が官能は鋭く外に觸れ、
我が情緒は熱く内に充つ、
此の時朗らかに鳴ける小鳥。

爽かなる其の聲、
我れ湖の畔にありて、
汝の聲を聽き、空を仰ぐ。

我れ清き[illegible]の奥に、
久遠の[illegible]を見
微風にそよぐ緑の樹蔭に立つ。

散りし沈丁花

沈丁花の花瓣は散りたり、
蕚黑く殘り、
花瓶に插したりしかば、
葉も凋れて斑を出せり。

我れ心いたみ、
黑き蕚を嗅げば、
そこに寂しき香殘りたれど、
彼の盛りなる日の甘さには似ず。

我れ或日、
沈丁花を觀て、
胭脂の如き葉の中よりいでて、
花は佳く咲きたりと思ひき。

沈丁花の薫にまさる薫、
何の薫ぞ。
卯月と半月との日に、
咲き匂ひ、空氣に滿つ。

我が心歡び、我が感覺軽せられ、
我れは沈丁花の下にて、
死せむことを望む。

さはれ、花の命の
短くして、
はかなさをおぼえしむ。

白日琴

霞立ち、
陽炎もゆる大野の中、
白日の琴はうち顫ふ。

夏は來ぬ、
うるはしき時は滿ちあふれ、
夏は來ぬ。

並木の路に現はれて、
燃えつつ消ゆる
そよ風よ。

時しも見えき、ちらとただ、
面紗にひそむ佛の
「實在」なる君。

見わたすかぎり、
日の瀬、光の瀬、
幻のしづくする。

誰か、そも見えぬ指もてひきけるや、
並木の上に、
琴のそよろぎ、うち顫ふ。

「うれしきかな、うれしきかな
よろこびあふれ、
かなしきかな、かなしきかな、
寂寥滿つ」と。

ああ、夏は來りぬ、
讃唱のしらべのねの、
赫耀の炎は、琴にまつはれり。

夏は來ぬ、
ほのかに、君の見えつつ。

夕の曲

樹の影長く引き、
春く日の空は、
葉と葉との中より輝く、
萬の物を造る
黄金の靈の力
引き絞る眞弓の空に
頽瀾の光を顯ず。

長き堤の一列、
高き枝をそよがす、
むらがれる緑の青き陰を、
ゆるくゆるく環れる
夕の風の合奏。

ああ夕の風の合奏、
とゝのふる有情の歌、
金銅の祭壇なせる
空の前、
樹の蔭に立ちて、
葉の睦む、
折しもふれ、
空の果、[illegible]の國まで
夕靄の[illegible]でいつつ
安住界[illegible]、
[illegible]
招すとぞ見ゆる、

牛

牛はあゆむ
日の落つるくだり坂を、
あかきころもの夜被て、
額のあたり、[illegible]がよひつ。
[illegible]ご[illegible]風の吹き入りて、
あと[illegible]めたる雲の色、
竈ゆたかに、そことなし、
日もおほどかのくだり坂。
首突きいだしおしだまり、
目は、心に浮べたる
何かゆかしきれんげさう、
それと見らるるくだり坂。

あゆみの練りや向光る、
疲れごころの砂ぼこり、
さみしき雲も一人に、
染みてかがやくだり坂。

晩秋

秋の入江の日はさびし、
風は、さやさや、かゞやけど、
波は、寄る寄る見ゆれども。
暮れの心の切にして、
蘆間の鳥の、しきなか、
秋の入江の日はさびし。

秋の草木

秋の草木、早こがねいろなり、
花やかに照り合ふさま、うるはし。
幽かなるよろこび滿ち薫りて、
一すぢの烟にまじるこころ。

ああ、秋の日、
空翔けてゆくちひさ鳥
聲なき聲の滿ちて、
心かなし。

宙の鳥

金色に光を放つ日、
あとつけて只默す、
宙の鳥。

野のさみしさ、
暮れがてに、
木木は其の葉をそよがす、
長き此の默思の時を。

人は去らず、遠く、
秋の色の中に、
動かず、あまりに小さく。

ああ滿ちし秋の暮れ
よろこばし、只何となく、
さみしさ添へしけしき。

水底の月

水底の月のかげ、
さびしく病めりとなし、
暗き綠の藻を分けて、
音なく其の身を搖りながら。

ああ、さだまらぬ胸のかげ、
たゆたひつ、住みかねつ、
さはされど、
安らかならぬ隈はなし。

沈默の夜半よ、
白き輝き只ありぬ、
白き輝き、月ならず、我れならず、
夢と眞の淵に住む。

善き言葉

ためらふことなく常に言へよ、
そは只正しき心のみを、

汝等が永き中にありて、
そこにのみ許さるる言葉をもて、
我等一時の幸福を
只あるがままにとしたまふな、
よし光を夢見むとも、
あだなる言葉もて言ひたこふな。

心に願ひあらば、
其の願ひもて言ふべけれ。
眞の望起り來なば、
其の望もてこそ高く行くべけれ。

こよなく生きむと言ひ給はば、
長き潮の上に光る鳥、
おし默り炎の如く、
安らかに浮び漂ふ如くあらむぞよき。

自畫像

我れ願ふ、わが面影を
よろづの上に観むことを。
此の故に、我れは己れの像を、
言葉のうちに刻む。

賢き人の苦みや、
烈しき憤りの心や、
又忍苦の大膽の勇氣や、
又生命の歡喜やを、
諸物の中にまじなふ。

我れは造る、主に似せて
我が心より滴る物を、
具體の像を。
我が死の墓に撒かむため、
我れ描き、作る。

我れは贋造の詩人、
主に似せて作る。
我れは窺視者、
神聖の垣根に據る。

我れは諸物に我れを混ずる被金師、
黄銅の装ひせしめ、
とれざる假面をつけしめ、
不動の中に、これを置く。

我れは言葉の錬金士、
黄金の粗鑛を混じて造るといふ、
玄義に聴かむ。
そは言葉も沈滯すれば
心的物質なればなり。

我れは古代の鍛冶工、
[illegible]の火をかくはして、
萬物を鑄改し、
悲哀の紋章を刻印す。

我れは言葉の大工、
幻想を建築す、
錯綜し、渾融し、厚き、重き、
浮彫こそ我が詩の王。

我れは技巧の中の技巧、
髄の髄、
言葉の言葉、
あらゆる工夫を[illegible]者の[illegible]者。

おお我が詩よ、
形式と心靈とは同一、
そは暗黒に鏡を架けて、

己れの像を彫るなり。
我れは惱める心の旗手、
我れは苦痛の福音の宣傳者、
我れは主の運命の模倣者、
我れはわが運命を造る者。

我が詩、我が碑、
我が束ねたる花よ、
我れは其の中に死の臥床を用意せむ、
其の花もて、面を覆ひ、埋もれて。

北洋の詩

カムチャッカの眞っ白な野、
波の荒い渚と、
ツンドラとが續いた眺め。
女人禁制の漁場に、
船が來て温かい贈物が
積まれて來る。

ロップで鮭と鱒とを漁した船か、
湖に[illegible]と、

オーロラのやうな寂寞たる
白光の太陽、
魚鱗を閃かす。

カムチャッカ風物――
銀灰色の情調、
其の中の湖沼は死海の如く、
産卵期を終つた死魚が、
水底に氣味惡く沈下してゐるのを見る。

ああ寒きモノトナスな野の彼方、
曲線を以て極地の音樂を、
奏するやうなのは、
カムチャッカ連峰の
僅かに藍色を見せる山谷の襞。

オホーツクの暗い夕に、
星の光は空に滿ちるが、
海は其の影を映さぬ程に、
陰慘に、さうして、
深刻な世界苦を表現する。

ベーリング海峽を通過する時、
[illegible]よりも早い

吹雪は、船上の私の面を打ち、
檣頭に來てとまる鴎の翼を
白くする。

けれども雄雄しい漁夫達の
生活の中には、
ロマンチックな「詩」が潜み、
それが私をして、
微笑にまでさそふ、
さうして果て遠く、
苦慘の中を凌ぎつつ、
我等の友と共に
航海を續けしめる。

野口雨情篇

[illegible]
人の出船　行々子　[illegible]　紅い花　[illegible]
船頭小唄　橋の上　また來る[illegible]



旅の鳥

山に絹雨
　野に菜花
花のかげかは
　つばくらめ
去年常陸の
　ふるさとの
山に來もした
　つばくらめ
雨は降れども
　つばくらは
花に寢もせぬ

旅の鳥
野にも山にも
　春の日の
雨は糸より
　細く降る

鴫の聲

曉けになつても
お母さんが來ない
お母さん來るかと
出て見たりや
スイ〳〵ちけ

鴫の聲
鴫は田で啼く
可愛鳥
待つてもお母さんの
來ないときや
せどの田甫で
いつも啼く

河原柳

南風吹け麥の穂に
河原柳の影法師

もはや今年も[illegible]の
花はちらほら咲きました
待ちも待ちしもしたけれど
河原柳の影法師

山に[illegible]蔦葛羅
なぜにこの頃山戀し
藪に[illegible]の木　野に茨

[illegible]も忘れたが
[illegible]の頬白は
[illegible]たかと啼きもした

野雀、雀

山に二人の[illegible]は
藪の小藪の[illegible]は
河原柳の[illegible]も見ず
南風吹け[illegible]の穂に

旅の[illegible]
野雀、[illegible]

夜さへ明ければ
啼く雀
山で寝ました
楢の木の下に
磯で寝ました
小石の上に
今は宿なし
野雀、雀
空を眺めて
日を送る

畑のとんぼ

とんぼ追つかけたら
畑さ逃げた　とんぼヨー
とんぼア畑で
スウ……イ

逃げちやあぶない
畑の中にや　とんぼヨー
麦の枯れ穂が
スウイ　スイ

鐘になりたや

鐘になりたや
チャン　チャカ　チャンの鐘に
叩きやチャン　チャカ　チャンと
鳴る鐘に
チャン　チャカ　チャンとナ

鐘は気楽だや
チャン　チャカ　チャンのチャンと
叩きや　チャン　チャカ　チャンの
チャンと鳴る
チャン　チャカ　チャンとナ

どうせなるなら
チャン　チャーリ　チャーンの鐘に

叩きや　チャン　チャカ　チャンと
なる鍋に
チャン　チャカ　チャンとナ
鍋になりたや
チャン　チャカ　チャンのチャンと
まるく作たら
楽したや
チャン　チャカ　チャンよナ

農民歌

一鍬打ちな
サノクリコと打ちな
二鍬打ちな
ウントサと打ちな

この畑耕しや
一やすみ
貫の煙で
一やすみ

サノクリコと打ちな
ウントサと打ちな

あの山陰

山は　霜枯れ
月ヤ霜枯れる
お月ャ出ても
あの山陰にゃ
鳥が棲むだろ
なヨ　母や

行々子

葦の葉陰でカツカリリと
行々子ア騒ぐ
石を投げたら日の暮れ頃だにヨ
飛んで逃げた

葦は夕風ザワザワと
行々子ア隠れ
飛んで逃げよと日の暮れ頃だにヨ
石ア投げぬ

菜の花畑

畑に菜の花
咲くことさ
菜の花咲いたら
見てよかな
菜の花畑は
夕明り。
日暮れにゃお星も
出るだとさ
お星も出たなら
見てよかな

お星もちらちら
夕あかり。

紅殻とんぼ

とんぼ來るかなと
裏へ出て見たりや
とんぼ飛んで來て
釣瓶にとまる
とんぼ可愛や
紅殻とんぼ
赤い帶など ちよんと
締めて來る

豆の花

裏へ出て來ちや
畑を見てる
盆が來るから
姉さん達よ
豆の花でも
咲いたのか

捨てた葱

葱を捨てたりや
しをれて枯れた
捨てりや葱でも
しをれて枯れる
お天道さま見て
おら泣いた

眼子菜

蛙鳴くから
沼へいつて見たり。
沼にや眼子菜の
花盛り
沼にや眼子菜の
花盛り
蛙ア眼子菜の
蔭で鳴く

枯れ山唄

潮來出島の
五月雨は
いつの夜の間に
降るのだろ
枯れてくれろと
枯れ山の
風は幾日
吹いただろ
常陸鹿島の

[illegible]山に
おれが涙の
雨が降れ

橋の上

橋の上から
小石を投げた
小石ャ浮くかと
川下見たが
小石ャ沈んで
流れてく

また來よつばめ

月日立つのは
　つばめの鳥よ
早いものだと
　さう思へ

南風吹きや
　また來よつばめ
櫻吹いたら
　來よつばめ
南風吹きや
　つばめの鳥よ
わしが待つぞと
　さう思へ

草刈り娘

わたしや田舍の
草刈り娘
草は千駄
刈らなきやならぬ
草の千駄
夜明けの星

わたしや思はぬ
日とてない。

洪水の跡

洪水の跡に
コスモス吹き
赤い蜻蛉が
とまつてゐる
赤い蜻蛉よ
旅人は
どこまで行つた

人見東明篇



心とこころ

歓びのなかの悲しみと
春のこころと香がこころ、
やはらかな乳兒の頰を這ふ
青き毛蟲の眼ざしと、
ギオロンの音のゆれびきと
戀の小袖のひるがへり、
金絲雀に擂ことまじへて
眼をまつ[illegible]り、
歓びのなかの悲しみと
春のこころと香がこころ。

林間のはてより

うなだれてゐる秋の月が
青白い——林のはてから
笛を吹いてゐる。
泡だちながら降る光線の雨
空の果てから——「もう歸りませう」
「ああ、もう歸りませう。」
思ひ出に咲く秋の月が
うつむいて——林のはてから
青白い笛を吹いてゐる。

扉

とざされた扉に手を觸るれば
うら悲し
ながあめのあとの夜。
黄なる葉の落つる
暗き夜の底へぽたり
ぽたりと落つる葉の重さ。
死せるが如く生きし
生けるが如く死せし
[illegible]、

薄明りもれ来る窓に、
ひたすらに手を触れば鈴の音
ちりんりんとかすかなり。

心のほとり

こころのほとりには――
病院の廊下、ひとつかをり
暗くして静かなる

こころのほとりには――
腹膜とカリエースを病む女の
おびえつつ生きてをり、

こころのほとりには――
葬式の夜の月しづ心なく
みたれ、みだれて光りけり

こころのほとりには
悲しみの鐘の音青白く
わななき、わななきつつ鳴りてあり。

白い花

庭のこかげに、
[illegible]
花がま白くさいたとき

森のかなたで
赤ん坊が
ちいさな聲で泣いたとき

花もうごかず
葉もふれず
村はしづかな晝だつた。

ものなやみ

おぼろ月夜の
草かげに
泣いてゐるのは鈴蟲か、
戀にやぶれた
をみなごの

[illegible]

木の葉

はらはらと
冬の日に
木々の木の葉が[illegible]やうに、

くらい心に
ただ一葉の[illegible]
おちてくるのが[illegible]。

旅の朝

しん、しん、しんと
雪ふる
旅の朝あけ、朝がへり。

なにを思ふや
外套の
襟をかき立て、草鞋はき、

しん、しん、しんと
霙ふる
旅の朝あけ、朝がへり。

君思はずや

彼はいまフオクをもてり
やさしき林檎の頬はいきづみてあり
——(いぢらしと思はずや)
果は眠むなかにまろべり
その香は、人のこころに沁みてゆく
——いぢらしと思はずや。

鑪の香

ひそかにひそかに燻つてゐる
唐人針のあかき針は
あかたまの實のかなしみか、
ひそかにひそかに喘げる
鑪の香とあかい瞳は

やもめ女のさみしさか
あをい月夜の店さきで
ひそかにひそかに泣いてゐた
唐人針とわがこころ。

海岸にて

袂時計をとりいでて
ちつくたつくの音をきけば
こころあやしく息たえむ。——
内海にちかき宿にゐて
ものの憐みにたへがたし。

何となく

蟬の殻のくづるるに
君のこころのかなしさに。
ポンペイの町の入り日かげ
廊にかくれて泣きしづむ。

眠れる冬

枯草のなかに鳴く鳥
くろ土のなかに眠る蟲
いろ褪めて沈む冬。
鐘樓にたたずむ雛僧
落葉を踏みゆく尼と
いろ褪めて沈む冬。
橋のらんかんに倚りかかり
廊のしろ壁をめぐりつつ
いろ褪めて沈む冬。
青き沼の水をすべり
枯草の莖をつたひながら
いろ褪めて沈む冬。
冬はなべてのものに、今は
青白き瞳をそそぎ
その眠を手もて覆ふ。



福田夕咲篇

貧々亭詩稿（四章）

畫僧『白雲居』　老娼婦おとく　木こりの唄　星はきら／＼

畫僧『白雲居』

『白雲居』は飛驒高山の[illegible]寺の僧にして性頗めて剽逸、畸行多し、殊に詩書に巧妙なり、その筆を揮うて竹を描くや、先づ紙に觸れて、颯々の音を發す、師曰く『畫竹、風を生ず』と、自ら斯く信じて疑はざりしなり

閑々たる書院である
寂然と、竹を描きつゝある
畫僧『白雲居』

圖は風竹二三竿――、
風に吹きたわめられた
竹の撓ひの寥しさよ

禿筆の穂さきから
風に[illegible]姿そのまゝに
竹の葉が一片、ひとひら
紙上に[illegible]り、躍動する

閑かなる書院に
颯々とひゞきわたる風の音
これは禿筆が紙に觸れる音かも知れない
客はひつそと風の音に耳をすます

風の音である
清爽なる風の音である
まさしく竹林をわたる風の音である

『畫竹、風を生ず』
客を顧みて破顔微笑する
畫僧『白雲居』

老娼婦おとく

『おとく』は老娼、年八十に近し　往年は[illegible]に高く、[illegible]四方の[illegible]を[illegible]せしもの、[illegible]時の[illegible]、今何處にかある、[illegible]の小[illegible]を[illegible]せらる、[illegible]、[illegible]つて[illegible]、[illegible]錦は錦、泥水のんでも鯉は鯉

綻ばみし『おとく』の[illegible]に
つやゝゝき玉にたぐへて
浮れ男のよりつどひけむ
あはれ、はれ、そのかみのたをやめ『おとく』

色あせし『おとく』の唇も
いつくしき花にたぐへて
浮れ男のよりつどひけむ

あはれ、はれ、そのかみのたをやめ「おとく」
あけし日の色香も失せし
[illegible]
し[illegible]見[illegible]しき
あはれ、はれ、そのかみのたをやめ『おとく』
洟を押しのごひつゝ
なまめかし昔がたりに
ながき夜を語り更かしつ
あはれ、はれ、そのかみのたをやめ『おとく』

木こりの唄

木挽稼業は
閑都なものよ
誰に氣がねが
いるぢやなし
　日がないち日、斧ふりあげて
　たんだひとりで山稼ぎ
氣がねやなけれど
しいからさみし
話相手が
あるぢやなし
　日がな一日、斧ふりあげて
　たんだひとりで山稼ぎ
寥しければこそ
どら聲あげて
唄ひますぞや
木挽唄
　日がな一日、斧ふりあげて
　たんだひとりで山稼ぎ
唄はうたうても
山彦ばかり
誰が拍子を
とるぢやなし
　日がな一日、斧ふりあげて
　たんだひとりで山稼ぎ

星はきら〱

星はきら〱　夜風の寒さ
土堤にや枯れ葦　枯れ[illegible]
河岸のおでん屋で　一ぱいやつて來たが
酒が新酒で醉はりやせぬ
カチ〱〱　火の用心
火の用心さつしやりやせう
芝居もどりか　自動車がはしる
茶屋の騒ぎも　まだやまぬ
茶屋も芝居も　及びはないが
せめて爐端で煎り酒
カチ〱〱　火の用心
火の用心　さつしやりやせう
夜がな夜つぴて　うろつくものは
宿無し犬奴か　夜廻りか
風邪をひいたら、洟が垂れる
ぬくい寢床がなつかしい
カチ〱〱　火の用心
火の用心　さつしやりやせう

正富汪洋篇

少女の房毛　ローザ・ルクセンブルグ嬢を懐ふ



少女の房毛

靜な郊外の道を歩いてゐると、
ひとつの高い窓から、
やさしい聲が落ちて來た。
見あげると、きれいな娘らしい
十八歳の少女二人。
何を云つてるのか、
よく聞えないが、
わたしをさした一人が
「詩人」と云つただけは聞えた。
二三町歩いて、わたしは嘆いた。
あの嬢ちやんの黒い房毛に、
春風が今戯れてゐた
その髮の搖れと、
あの無邪氣なまる顏。
私の過去の詩の中に
あのうつくしさにますやうなものが
一篇だつてあるかと。

ローザ・ルクセンブルグ嬢を懐ふ

ローザ、貴嬢が銃殺されたことは、
私自身が身體の一部分を斬られたよりも
悲しく、惜しい、實に悼ましい。

ローザ、貴嬢の一生は尊かつた、
貧しい小商人の娘に生れた貴嬢は、
自ら、自らを立派な學者に、闘ひ手に、
社會主義者に、改革家にしました

ローザ、貴嬢は、何といふ立派な額の持主か、
高尚で、ひきしまつて、そして女らしい、
私は、貴嬢の額に、深い愛着をもつ者です

ローザ、あなたを懐ふて、
私は今も泣いて居るのです、
美しいもの、正しいものの、
暗愚狂暴なものの手に殺される不合理を。

ローザ、私の眼には、獄中の
あなたの有様が、映る、うつる。
石のやうに固いベッドの上

街燈の反射が、掛蒲團に落ちる時、
蒲團の上に、動いたあなたの白い手。

ローザ、あなたの其の手は、
まあ、どんなに、力強い論文を
書いたことでせう、そして書物を。

ローザ、あなたの其のやさしい眼は、
まあ、どんなに多くの弱いものに、
憐みを注ぎ掛けたでせう。

ローザ、貴孃は、獄中まで引込まれた
戰爭の掠奪物の一つである
ルーマニヤ産の野牛が、
虐待せられるのに對して
その眼に涙を溜めたといふぢやありません
か。

ローザ、あなたの見よい口、
それが、まあ、どんなに、不正義に對して、
熱烈な氣を吐いたでせう。

まことに貴[illegible]た時[illegible]、
[illegible]は、道徳[illegible]、
[illegible]の中に、[illegible]です。

ローザ、あなたは詩人であつた、
監獄の浴室で、瀕死の蝶を視て、
これを監房に持ち歸り、
いたはつて、いたはつて、
窓から逃したあなたの愛。

監房の中に飛込んで來て、
唸り廻る一つの蜂に、
生命の歡喜を感じた貴孃。

革命は薔薇の水では
洗禮されないと嘲る言葉を、
不十分だとして、ボルシェヴィキの
テロリズム政治を、
いましめた、心やさしいあなた。

九ケ月間、歩き親んだ
獄舍内の敷石小路に、
離別を惜んで
他の獄舍に、かはりたくないと思つたあなた。

監獄近く、來て啼く白頭翁鳥に
心を動かしたあなた
鳥の物語が解ると云つた

やさしい靜な貴孃。
人が唯、正しく見まもりさへすれば、
深夜の闇は、天鵞絨のやうに、
柔かで、美しいと、哀しい
悟つた言葉を殘したあなた。

フーゴー ウォルフの音樂を、
心から味つた其の耳、
獄舍近くの公園の
黑楊の風に鳴るのを
ぢつと聽いたあなたのその耳。

ローザ、ローザ、おゝ、ローザ、
いくら、あなたを戀しがつても、
また此の世に來はしない。
でも、ローザ、でも、ローザ、
貴孃は死なない、貴孃は死なない。



川路柳虹篇

思想　其他八篇　寺院の鐘、[illegible]、[illegible]、山上、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、[illegible]、ケンガル！、[illegible]、[illegible]、[illegible]の日

思想

時の書を[illegible]流れに染められて
[illegible]、かくて、[illegible]ゆく[illegible]
いつかた力をえて心を
次へ、次へと[illegible]す[illegible]
思想よ、おまへはいかなる闇にも
みつめる力を[illegible]け、
[illegible]の[illegible]にも[illegible]ず、
幾世紀を[illegible]にうたれ、[illegible]に[illegible]たれ、
その[illegible]をなし[illegible]れたから、
力に屈服することなく、
力をおし返し[illegible]力とする
清い噴水のほとばしりのやうに

水面に落ちてはふたゝびまた[illegible]ぼり、
高い蒼空めがけて水沫を[illegible]たらす！
思想よ、おまへの限りない努力に
人は[illegible]と崇敬とを
おまへのうちに置く。
意志はいつも眠りより[illegible]まされて
次ぎ次ぎにひしめく、おまへの[illegible]に
あらゆる理性と信仰とを打ち建てる！
思想よ、おまへは[illegible]をも[illegible]る大寺院の
[illegible]然と聳える、あの[illegible]の奥ふかく棲ふのか、
はた、巨人のごとく、時を下[illegible]にし
限りない[illegible]力をおしさげて幾世紀をへたのか
か。
希臘、羅馬の古聖、中世の神學者、
額着ざめて、もの思はしげに默する
近代[illegible]疑論者の瞳の中にも隠れたのか、

十字架に[illegible]をなげた[illegible]者の
[illegible]
その[illegible]く吐息をのこしたのか、
[illegible]
安逸と非力と怠惰とを、
自らにかなぐり[illegible]て、[illegible]に[illegible]
尊い信仰と希望とを得しめたのか、
思想よ、あらゆる[illegible]の力よ、
おまへは生き、また、おまへは死ぬ、
永遠の相を[illegible]に[illegible]る哲學者も
またてはかつてその一沫の水沫に
そのつきせぬ動きに
おまへの生命と力とを[illegible]める！
思想よ、永遠の[illegible]に渡つて、
人知のうちに消えまた現はれる
不可思議の流轉よ、おまへ、[illegible]常に

死に、また生き、生き、また死ぬ。
おまへこそ活動、おまへこそ流転の相、
おまへこそ靈と肉との間のものに
時を超えるもの、 かくて
今日、わたしをこゝに覺ましめたものは
今日、わたしをこゝにあらしめたものは
かの朝か、はたかの夕か、
夜の闇の底に沈む底に
微かなる星の光にこぼるゝごとく、
息苦しい思想を誘ひ出で
陰影をもとめ、空に擾れて上る
煙か。その柔軟なる、
その旋律あまい、
その活動におまへに見る、
あざやかな明るい午後へと
私の心に曉の生誕を信ぜしめた
最後の勝利を信ぜしめた
思想よ、おまへのみ私を祝福にする。
あゝ、一つの可憐なる存在を
今日、こゝに私のあることを、
今日、讃ふるものを知り、
今日、わたしのみを愛することを。――
靜かなる休息のうちに

わたしの時を[illegible]ものよ、
私の生を育て愛する
一つの思想を
小さな輝き無意味な存在をも
この地上に、所有として欲ふことを
この一人の中に生かして育てられる
一つの草の芽を、この小さな孤りを、「吾」を、
或の断片として宇宙に繋りあらしめる
氣温と光との世界にあらしめよ、
あらゆるものの生を
吾が呼吸のうちに感じ合ふことを、
あゝ、吾と偕なる人々と
いま共々に祝福せしめよ。

歩む人

"L'Homme qui Marche"—Rodin

歩む人は往く、大地を、
歩む人は歩む、日も夜も……
歩む人には目標がない
歩む人には踏みゆく路のみ
ただ一つの前進である。
あゝ、雄渾なその体を、
[illegible]に静かに
押下げられた胸は鋼で鍛へられ
鋼鐵の塊のやうに前方に向ふ、
それは偉大な古代の建築が
地から聳立つてゐるやうだ。
それに
踏みしめた足の力は
[illegible]土に
限りない闘ひと弾力とで
地上を目がけて運動する。
踵よりも高い一つの力が
その筋肉の中を貫く。
胴よりも強固な意志が
肩を両方へ[illegible]に生きてゐる、
アトレスの腱は問ひ詰めた鐵のやうに
力をこめた一點に集中する。
この偉大な建築は動かぬ生えて
その重心を絶えず前に踏みおろす、
あの深遠なダイールの道程が
この建築を無限に作りなしてゐるのだ。
歩む人の顔は見えない、けれども、
歩む人の顔はただ
結ぶ筋肉のなかにある。
傾した頭は切りとられても

たしかに生きた存在として
個々の動の中に抛かれる。
歩む人は踏みゆく人だ、
歩む人は求める人だ。
されば こそこの世界は
意義ある存在となる。
停頓を、静止を、停滞を、
悲しいも[illegible]もない無力を、病弱を。……
それは小鳥のやうに
囚はれの詩人が[illegible]する「自由」をたのみとした、、
自由を生むものだ、創めるものだ。
現実の苦悩のなかに
つき進み、つき進み獲得する
ただ一つの方だ。
歩む人は踏みゆくことによつて
彼自らの自由をつくり、
踏みゆくことによつて
地上の甘みを知り、
踏みゆくことによつて
彼方より此方へと
[illegible]化し道が創められてゆくのを知る
歩みこそ法則だ
歩みこそ行動だ、
歩みこそ思想[illegible]ば

[illegible]の國から響きして
その[illegible]を明らかにさし示す。
歩む人は往く、[illegible]
歩む人はすゝむ、昼も夜も、
[illegible]なく[illegible]
日々ことくに前行する。
歩む人には停止なく
歩む人には[illegible]なく、
歩む人には[illegible]な意識のみ
意志と行動を一つに結びつける。

偶發事

夕餉の前には三つ皿が
狭い食器棚からころげて落ちた、
けたゝましい響を立てゝ静かな薄暮に
その破片は白鳥の毛のやうに亂れた。
妻はその片われを探りながら
ふたゝびもとに還らぬ皿の形を思つた。
だが結論は皿になく棚にあつた。
狭くかよわい食器棚は
永年の[illegible]ゐるが、

[illegible]はひとしく、私等に堪へかねた。
問題は[illegible]新しい棚を買ふことだ、
[illegible]新しい皿に代へることなのだ……
しかし、そこはもう新しい意見に
[illegible]であるから……それは
[illegible]でなければないといふことだ。
ふるさとの[illegible]は
ただ[illegible]しさといふことか？
いまはさない[illegible]の將來はすぐに
[illegible]の[illegible]が、
これは[illegible]はしめる
永年の、[illegible]し、おびえる心があるのだ。
私のまはりにある[illegible]が
私をいつも[illegible]にさすほど苦めた。そして
今必要だといふことは
どんなに[illegible]まはりにあるのか。
しかも、その[illegible]をかへることすら、
それは[illegible]い[illegible]い理想のなかにある、
思考[illegible]たく[illegible]行し、
幻影の[illegible]し、[illegible]ことが
どうして、からも出来ずに
さしのばす手のなかにあるのだ。
眼の前に[illegible]一つ[illegible]

努力なしには確かしえないのに
なぜ吾らの心はその力をば惜むのだ？
この薄暮にきえゆくものは弱い心と
智慧の嘲笑ふ悔恨ばかりではあるまい
か。……

動物園

鷄

「時間」がおまへを歌はせる。
太陽はおまへの歌で上るといふ
おまへの迷信はおまへを長く
幸福にしてゐたのだ、
そのやうに「人」は「時」を支配するのだと
英雄はいつも信じてゐる。莫迦な！
みなさい、外はまつ闇だ、
おまへの時はづれの喧嘩は
たかが隣りのあひるを吃驚させる位さ。

燕

空の享樂兒、
幸福は南にあると
おまへの翼は確信する。
燃えた渚に
瑠璃紺の岸邊に
舞ふよ、いつも。
夏は去ると
電線の上で
おまへは豫感する
空の享樂兒、
だがおまへの遊蕩は
「未來」をいつもつきとめて
彼岸から彼岸へと
「南國」の女色にふける。

駱駝

おまへの瞳のなかには
かぎりない沙漠の海、
そのはてに落ちる血紅色の入日と
そのはてに見出す椰子の葉かげの
綠のオアシスとがうつつてゐよう。
おまへの瞳の柔和は
その夢を私に感じさせる。
だがこゝの檻は何だ、
こゝの土は何だ、
しかも平氣な顔をして
子供の投げるパンを食べてゐる。
おまへの郷愁は
おまへの體の奥に隱れたのか、
女面獅子像と三角塔の
あの偉大な郷國の夢をば
人々がおまへから奪ひ取つた爲めか。

山羊

青草のうへを
けふもおまへはゆくよ、
長老の鬚長く垂れ
飾柱の角頭にかざして。
青草のうへを
けふもおまへは跳るよ、
殉情の夕月、
柔和なる耶蘇の徒にふさはしく。
青草のうへを
けふも泣くよ、
追はれ追はれて
綠の群ながくも永く年へとつゞく。

野兎

神さまがきつと
なにか[illegible]
[illegible]、
[illegible]
[illegible]
[illegible]

孔雀

[illegible]陸[illegible]像が
[illegible]王さまのそばにゐた時分、
おまへもきつと狗をのして
極楽浄土の天竺の
[illegible]しい花園の中を
とんでゐたのだ。
英吉利が支配して
縦横に鉄道を敷いたので
おまへの幻想は[illegible]
肉桂の森の薫はなくとも
この砂は乾いて
すこしばかりの花もある。

[illegible]、ここで
勝手に[illegible]
[illegible]は
[illegible]の中で[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]では
とても歩けまい。

象

人間といふ小さな動物は
歴史の首枷におしつぶされ、
世界をその頭脳と心臓との
狭い関係にちぢめてゐる。
あゝマンモスの砂煙たてゝ大地を、
沼沢を、[illegible]闊歩してゐた時代よ
火星は月夜より明るく
巨大な象の背にふれてゐた夕
おもひ見よ、吹きまくる[illegible]に
燦爛と碎ける銀河の海を、
おまへはゆく、おまへは渡る、
ひたむきに、おほどかに
行かむとするところへ一さんに進むのだ。

おまへの[illegible]はここにある、今！
おまへの[illegible]
それなのに
おまへ[illegible]は[illegible]
背中にむなしく上を[illegible]

馬

馬よ
おまへ[illegible]
人に[illegible]
おまへは[illegible]で平気だ
「功利」はおまへに生命を喰ひ
おまへの足に[illegible]をつけた。

綿羊

アッシジの聖者か
頭をかゞめて歩く姿か、
波羅門の信仰で
苦行に苦行する姿か、
おまへの毛衣は重たく地に垂れ、
おまへの曲つた角は天へ向はない。
けれども人間は賢く

おまへの[illegible]
その[illegible]は
たゞ産業のために育てゝゐる。

犬

忠實といふ美德にも
多少の愛嬌が要る、
おまへの尾を振ることは
おまへの精神を
感じのいゝ表現にする
みなさい、あの獰猛で
醜惡なブルでさへ
首をかたむけて尻尾をふれば
菓子の一つもやりたくなる。
忠實な國家の卑僕
陸軍大將でさへも
威張らなければ
一つの裝飾品には見えるだらう。

狐

穴ぐらから險しい眼を光らせて
おまへは狂人のやうに怯え乍ら
この世[illegible]てゐる、
おまへの心と足とは不安で
陰險な詭計と傀儡とが
剃刀のやうに隠されてゐる。
どんな世界になつても
おまへの魂だけは
捨てなければならない。

カンガルー

戰場から歸つた兵士は
足を折られて杖にすがる、
おまへは不自由をも嘆かずに
私生兒を腹に一ぱいかくして
飛びあるく。

獅子

暴王よ、
おまへは今眠る、
「怒」がおまへに與へられた
唯一の寶か。
剽悍なその[illegible]鬣は
熱砂のなかを驅けめぐり
球のやうな前足が
なにものをも掴むのは‥
暴力の是認をば
神は人に示すのか。
しかし、暴王よ、——
おまへは今眠る。
眠つたおまへの前には
虻一匹すら安全だ。

虎

燃える夜の深林に
おまへは吼える。
「闇」が何か怪しい影を
おまへに見せつけた。
虎よ、牙をむけ、
おまへの跳躍に任すものは
たゞに印度の草原ではないのだ
虎よ、吼えたてろ、
この暗い夜のなかに
「眞理」を探す探險者は
羊のやうであつてはいけない。
おまへの怒號がやくざなものの
夢と迷妄とをしりぞけて

おまへの餌食となるまでは……
竹よ、燃えたてろ。

預言

"C'est Dieu même que je demande et qui je cherche."—Pascal

今日、庭の夾竹桃は枯れて
血の滴のやうな花は朽ちはてた。
青い芝草のうへを這ふ蟻も
力なげにまばらだ。

日さし弱い秋が
清爽な夕ぐれを秋におくる、
燃えた心を沈める「智慧」のやうに
ふかい瞳にもの思ふ尼のやうに
瞑想が私をみちびく。

ひらいた本のうへには
哲人の言葉が澄む、
おゝパスカアル、
あなたの蒼空のやうな瞳が
このしづかな燈の室にかゞやく。

神はどこにある、
神は遍在する、いな、一つの神は
たゞ祈禱のなかにある。
私は教へられた神を疑ふ、
しかしもとめる願望のなかに
神はある、
神は熱だ、預言はその焔だ。

パスカアル、
このあわたゞしい世界に
血と鐵火と腐肉のなかに
私たちは何を賴む。

あゝ正しい願望よ、
今日を善くするために
明日をより善くするために
この靜かな夜のなかにも
私の心は聖壇の燭のごとく
闇にふるへて燃え立つ。

靈の澄む秋、
月いでて庭に蟋蟀もなきはじめ、
無心の童子
私の心を探つて
見える世界から、
見えぬ世界の言葉をおく、

雨の日

わたしはさみしいからだひとつを
いゝ
まんとにくるむ、
かつてはあのひとゝくるんだ
あつたかいいゝまんとに。——
けれども、そとにはつめたいあめ、
みちをわるくし、くつをだいなし…
あまつさへ、かぜさへくははつて
さんざんにふきつけ、しみわたり、
どろだらけによごしてしまふ
つめたい、さむい、れいこくなあめ、
このあめのやうな
れいこくなせけんに
わたしはあつたかくいゝまんとで
じぶんひとりをだいてゐる。



加藤介春篇

鴉　葉　暗い背　夜の白百合

鴉

このたくさんな鴉は
木から生れた、野から生れた、
大空の雲の中から生れた、
そして皆集つて来た。

三角に見えるのがあり、
長うなり、まるうなり、平たくなり、
或ひは網のごとくになり、
そして皆散つてしまふた。

×

このたくさんな鴉は！
あゝこのたくさんな鴉は！
逃げてくれ、
逃げてくれ、
あのくろい大空が光線の邪魔になるから。

×

鴉よ、
君はあの黒い翼をどこで磨いて
来るのか。

×

鴉よ、そしておまへが額を洗ふのは
うらゝかな春の日の川の水面だ、
鴉よ、そしておまへは
もつと〳〵うつくしくなつてゆくかも知れな
い、
それは誰にも見せられない隠所だ、
鳥の隠家だ、
こつそりそれに来るがいゝ。

×

木に、山に、野に
鴉がみえなくなつたら、
この世界には、
おそらく影がなくなるだらう。

×

木のうへに一つ、
さびしい鴉よ、
おれはおまへの叔父さんに当るかも知れな
い、
し……

おまへは[illegible]
[illegible]
鴉よ、
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
木のうへにとまつてゐるのはもつとさびしい、
[illegible]
[illegible]さびしい。

×

何の声だ？
木のうへの
黒い鴉

×

鴉よ、
高い木のいただきから
おれの姿が蟲けらにでも見えたといふのか。

[illegible]
鴉よ、
[illegible]

×

[illegible]
あの大いなるいつもの鴉かも知れない、
おれ[illegible]
まつ黒いかげがこそこそ出て行つた——
鴉よ、[illegible]
[illegible]

×

おれは今[illegible]
人間の[illegible]か鳥の詩を書いてゐる、
これは或るうすぐらい鳥の思想かも知れない
——
たか[illegible]この詩に作者の[illegible]
鴉よ、
君の名が[illegible]

×

誰れにもわからぬおれの詩が

[illegible]——
[illegible]

×

[illegible]
わたしはなくことを[illegible]ゐる、
[illegible]
あゝこの不幸な[illegible]のいきものは、
鴉よ、[illegible]さびし過ぎる。

蕪

山の[illegible]、
[illegible]
[illegible]いた、
[illegible]しい女[illegible]
もう処女ではない——
だからその[illegible]な一夜があけると、
そこ[illegible]に
色[illegible]とか[illegible]つた、
[illegible]かも知れない。

あれは妖氣だ、
しかしその山々の惡さも今はとられた。
氣ちがひに似た
草や木の病氣は癒つて
もう變な踊りはやんだ、
（傀儡師は疲れて山をおりたらしい）
新綠だ、新綠だ、
野にはまだ青白い蝶々が
たら〳〵と流れたが、
それとてもぼろ〳〵にこはれた羽根だ。
うつくしい太陽の邪魔にこそなれ
飾りにはならない、
そして今、葉ざくらの青さと匂へるところ、
谷々のうぐひすは
翡翠玉となつてかくれた。
新綠だ、新綠だ、
草や木はいき〳〵と彈ね出した、
新綠だ、新綠だ、
そことその山の向うの見えぬ空から
誰にか知らぬが
投げつけた一つの線——
まつしぐらに
飛んで來た一羽の燕、
新綠だ、新綠だ、
そしてこの清爽で、輕快で、元氣な
潑剌とした時の——季節の先驅者を迎へて
草や木は飛びおきた、
一齊に敬禮した。

暗い背

背中には、
何かしら
書いてあるやうな氣がする——
わたしにはその文字はわからぬ、
しかしわたしが生れるとすぐに書かれた
わたし自身の番號のやうな氣がする。
おそろしい運命の宣誓か、
それならばわたしには
たゞ不可思議な『夜の詩』のやうに思へるが
まだ讀んで見たことはない
何ぜなればそこはわたしの知らぬところ
だ——
たましひのちやうどうしろだ、
外だ。
そしてあまりに暗いので、
且つ遠いので、
わたしはそれが絶えず氣になる。

夜の白百合

しめつた夜氣に濡れるのは、
肺病に惡いといふことです。
熱が出て、ついたはごとに、
月の祕密をしやべるさうです。
どなたです、こそ〳〵とよつて來るのは、
むくつけき生きものの匂ひがします。
香水はいくらでもさしあげますから、
どうぞあちらへ行つてください。
さうだ、わたしはまだ生きてゐるのに、
デッド・マスクをとられるのは恐しいことで
す。

服部嘉香篇

（明治[illegible]）
[illegible]



盲魚

暗い[illegible]海の底より
つ[illegible]盲魚の吐息、
ぷつぷつと泡を
泡と浮ぶ[illegible]
いつより[illegible]住み
いつよりかつぶやきそめし、
みよりも暗く水層のどん底に
つつましく鰭を振りつつ。

日の光忘れ去り
物の音恐れて行かぬ海の底の
岩[illegible]にして[illegible]を
何を思ふ[illegible]——わが心。

島

[illegible]の島、現實の島
空間に[illegible]用[illegible]島島
[illegible]の島、現實の島
忘却の海へ[illegible]沈む島島
物語を載せて流れ去る島
島の上の赤い旗、黒い旗、青い旗
みた流れ去る過去の戀
[illegible]の戀　自分の戀

雑草

庭木の[illegible]、[illegible]、
[illegible]なかに潜む[illegible]
あたりの[illegible]雑草は、
[illegible]
[illegible]
武藏野のふところをのぞくに
ふさはしい[illegible]なつた。

いや、武藏野が、
わたしの心をのぞくにふさはしい
心の雑草は、まだ、

刈り取つてはないけれども、
深さは、眞晝の深さよりも深い。

すべてのものがお互に
内を觀、内に聽いて喜ぶ季節だ。
鳥影さへも
おお何といふ靜かな心を
窓に殘して去つて行くことぞ。

唐辛

心弱く晴れた秋の野に、
わたしは見る、唐がらし、
遙かな森の家の白壁に
ゆくりなく見る唐がらし。

その爛れた悲しみの一點から、
秋の心
野に、空に、みなぎりあふれる。

唐がらしこそは秋の眼——
青春をむなしく過した
わたくしの思ひ出よりも悲しく、
その眼に
すがりつく秋の命、
すがりつく秋の命。

涙

風は風の哀樂のために流れ
樹は樹の歡喜のゆゑに立つ。

捨てどころなき涙にも
なつかしさふることあり。

わりなくも
流れてやまぬわが涙。

月 [二曲]

〇

犬 犬 犬
吠える 吠える 吠える
うるさい！
窓あける
夜更の空
月一つ
野に一面

〇

平つたい金屬板が
ふら ふらつとひつかかつたやうな。

何といふ淋しさだ。
何といふ慇懃だ。

お辭儀をするやうな月、
たつたひとりで挨拶する月。

風ひき車

風が冷たや 夕日の野道
風ひき車が がらがらと

長い影曳く風ひき車
石ころくだいて ころころと

二月悲しや 空までひびく
風ひき車が からからと

水野葉舟篇

寒き夜なりし　祈る言葉を知らざれば　悲しき闇の中に



寒き夜なりし

寒き夜なりし
地の凍れる音堅く耳に徹し
心を打ちて脅し來る夜なりし
闇の廣さに恐れて耳をすまし
明るく狹き室に籠りてあれば
わが心はすきとほりて白き玉のごとく
靜かなる光を帶び
力は花の花瓣の中にひそみ入り
紫を帶びたる薄紅のプリムラの花と相生
き、相思ふ
暖かく燃えたる花は
冷き呼吸をせり

豐に水を含める花莖は
太く笑みて伸び
緩かに空に向ひて花を支ふ
―かくて生きてあるものも悲しきなり
わが心も痛ましきなり……
屋根に覆ひてかゝれる暗の深さ
闇の中に濺れる氷への歯の恐し……
地に晒されたる草は、細く鋭き聲を立てゝ叫
べり
ものの生の力はいと弱く
大なる黑き手に壓せらる
心は今細かに、鋭く、すき徹り
このいと弱きものの中に忍び入るなり
悲しさに慄へつゝ
はてなくも忍び入るなり

祈る言葉を知らざれば

祈る言葉を知らざれば
われは祈らざるなり。
魂の安さは人に託すべきものにあらず。
古きものの畑にむせかへるとも
亡せ行きたる人は幸にあらず。
聲を合せて叫び、そゝりたつるとも
その生命が背負ひたる泥を黄金とするあたは
じ。
誰か空なる同感と
嵐に驚きたる感激とに迷はむや。
われは、たゞとこしへに御身を見る。

相並びて行くべき道をなくして、さまよふ。
御身はさらに闇の中にさまよひ
御身の負ひたるものを
何人も代る能はざるなり

悩める言葉を知らざれば
われは悩まざるなり。

悲しき闇の中に

白きもの、かの闇をただに白きもの生きたる
もの、
されど腐爛の小さき粒の一つ一つが輝きて、
よろこびて生きたるなり
その白きもの病めることと、熱を帯びて
すばやき呼吸をかすかに続けたり。
あゝ苦しさよ。

生きてあるが故に、生きて行く
されどそは甘き夢の酔ひにあらず
わが生命は憔悴にして
傷つき、病まされたり
病みたり、疲れたり
力衰へたり

されば今苦しきなり
われ力を集め、その髄の凡てに新しき呼吸
を起さむとすれど
病めるものは眠り
なえたるものは倒れ、
わが心は不随となりて、たゞうごめく
われは苦きものを吐かむとも許されず
走らむとすれば跪く
されば苦しきなり

われは病めるなり
永き日の醜き心がみづからを病ましめたり
祖先を欺きて傳へたる人々がわれを病ましめ
たるなり
われを取り囲める無智なる世がわれを病まし
めたるなり
わがみづからの生がわれを病ましめたり
この日、病れたるものを知らざりし故に
この心も傷みて行くなり
あゝ今は苦しき暗き日の頭をめぐり行く
滅ぶるものは斯くして滅ぶるならむ
世の多くの生は斯くして滅ぶるならむ
われは今苦しきなり

病めるが故に苦しきなり。

高村光太郎篇

雨にうたるるカテドラル　樹下の二人　鉄を愛す　雷獣　白熊　象の銀行
[illegible]　夜の二人　火星が出てゐる　花下仙人に遇ふ　人に[illegible]
ぼろぼろな駝鳥　同棲同類　[illegible]
冬の詩　首の座



雨にうたるるカテドラル

おう又吹きつのるあめかぜ。
外套の襟を立てて横しぶきの此の雨にぬれながら、
あなたを見上げてゐるのはわたくしです。
毎日一度はきつと此処へ来るわたくしです。
あの日本人です。
けさ、
夜明方から急にあれ出したおそろしい嵐が、
今巴里の果から果を吹きまくつてゐます。
わたくしにはまだ此の土地の方角が分かりません。
イイル・ド・フランスに荒れ狂つてゐる此の嵐の顔がどちらを向いてゐるかさへ知りません。
ただわたくしは今日も此所に立つて、
ノオトルダム・ド・パリのカテドラル、
あなたを見上げたいばかりにぬれて来ました、
あなたにさはりたいばかりに、
あなたの石のはだに人知れず接吻したいばかりに。

おう又吹きつのるあめかぜ。
もう朝のカフエの時刻だのに、
さつきポン・ヌウフから見れば、
セエヌ河の船は皆小狗のやうに河べりにつながれたままです。
秋の色にかがやく河岸の並木のやさしいプラタンの葉は、
鷹に追はれた頬白の群のやう
きらきらぱらぱら飛びまよつてゐます。
あなたのうしろのマロニエは、
ひろげた枝のあたまをもまれるたびに
むく鳥いろの葉を空に舞ひ上げます。
逆に吹きおろす雨のしぶきで、それがまた
矢のやうに広場の敷石につきあたつて砕けます。
広場はいちめん、模様のやうに
流れる銀の水と渦巻く栗色の木の葉の小島とで
一ぱいです。
そして毛あなにひびく土砂降の音です。
何かの吼える叫きこむ音です。
人間が声をひそめると、
巴里中の人間以外のものが一斉に声を合せて

[illegible]出しました。
外套に金いろのプラタンの葉を浴[illegible]、
わたくしはその中に立つてゐます。
嵐はわたくしの國日本でもこのやう[illegible]
ただ聳え立つあなたの姿を見ないだけ[illegible]

おお[illegible]オトルダム、ノオトルダム、
岩のやうな山のやうな鷲のやうなう[illegible]まる
[illegible]子のやうなカテドラル。
[illegible]中の暗礁、
巴里の角柱、
目[illegible]しの雨のつぶてに密封され、
[illegible]の嵐の息吹をまともにうけて、
[illegible]の前に聳え立つノオトルダム
[illegible]、
あなたを見上げてゐるのはわたくし[illegible]
[illegible]日本人です。
わたくしの心は今あなたを見て身ぶる[illegible]
す。
あなたの此の悲壯劇に似た姿を目に[illegible]、
[illegible]遠くの國から來たわかもの[illegible]
[illegible]いです。
何の[illegible]で知らず心の高鳴り[illegible]
[illegible]中の[illegible]に聲を合せてただを[illegible]ばかり
に響きます。

おお又吹きつのるあめかぜ。
出來る事ならあなたの存在を吹き消して、
もとの虛空にかへさうとするかのやうな此の
天然四元のたけりやう。
けぶつて燐光を發する雨の亂立。
あなたの頂きを斜にかすめて飛ぶ雲のうろ
こ。
鐘樓の柱を一本でもへし折らうと執念くから
みつく旋風のあふり。
薔薇窓のダンテルにぶつけ、はじけ、ながれ、
羽ばたく無數の小さな光つたエルフ。
しぶきの間に見えかくれするあの高い建築べり
のガルグイユの化け物だけが、
飛びかはすエルフの群を引きうけて、
前足を上げ首をのばし、
齒をむき出して燃える噴水の息をふきかけて
ゐます。
不思議な石の聖徒の幾列は異樣な手つきをし
て互にうなづき、
横手の巨大な支壁はいつもながらの二の腕
を見せてゐます。
その斜めに弧線を描く幾本かの腕に

おお何といふあめかぜの集中
ミサの日のオルグのとどろきを其處に聞きま
す。
あのほそく高い尖塔のさきの鷄はどうして
ゐるでせう。
はためく水の幔まくが今は四方を張りつめま
した。
その中にあなたは立つ。
おお又吹きつのるあめかぜ。
その中で、
八世紀間の重みにがつしりと立つカテ
ル。
昔の信ある人々の手で一つづつ積まれ刻まれ
た幾億の石のかたまり。
眞理と誠實との永遠への大足場。
あなたはただ默つて立つ。
吹きあてる嵐の力をぢつと受けて立つ。
あなたは天然の力の強さを知つてゐる。
しかも大地のゆるがぬ限りあめかぜの跳梁に
身をまかせる心の落着を持つてゐる。
おお錆びた、雨にかがやく灰色と鐵いろの[illegible]
のはだ、
其にさはるわたくしの手は

まるで[illegible]手の中にふれたも
　のやう。
そのエスメラルダにつた[illegible]怪物、
嵐を[illegible]そこらの
　くりかたの隅に潜んでゐます、
あの醜い[illegible]正義の[illegible]、
[illegible]の力―
傷つく者、打つ者、[illegible]を行はうとする者、[illegible]
　[illegible]する者、
まして[illegible]あなたの[illegible]、
おのれに[illegible]、
おおあの[illegible]をあなたこそ生んだのです。
　[illegible]ない、奇怪でない、もつと明るい、
　もつと日常のクワジモド、
あなたの荘厳な[illegible]なかには母の愛に満ちたそ
　の[illegible]しい胸に育まれて、
あれがあ[illegible]の位生れたことでせう。
おお雨にうたるるカテドラル。
息をついて吹きつのるあめかぜの急調に、
俄然とおろした一瞬の指揮棒、
天空のすべての楽器は混乱して
今そのまはりに旋回する乱舞曲。
おおかかる時黙り返つて聳え立つカテドラ
　ル、
嵐になやむ巴里の家家をぢつと見守るカテド
　ラル、
今此処で、
あなたの角石に両手をあてて熱い頬を
あなたの肌にぴつたりと寄せかけてゐる者を
　ぶしつけと思ひ下さいますな、
酔へる者なるわたくしです、
　あの日本人です。

樹下の二人

あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

かうやつて言葉すくなに坐つてゐると、
うつとりねむるやうな頭の中に、
ただ遠い世の松風ばかりが薄みどりに吹き渡
　ります。
この大きな冬のはじめの野山の中に、
あなたと二人静かに燃えて手を組んでゐるよ
　ろこびを
下を見てゐるあの白い雲にかくすのは止しま
　せう。

あなたは不思議な仙丹を魂の壺にくゆらせ
　て、
ああ、何といふ幽妙な愛の海ぞこに人を誘ふ
　ことか、
ふたり一緒に歩いた十年の季節の展望は、
ただあなたの中に女人の無限を見せるばかり。
無限の境に烟るものこそ、
こんなにも苦渋を身に負ふ私に爽かな若さの
　泉を注いでくれる、
むしろ魔もののやうに捉へがたい
妙に変幻するものですね。

あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。
ここはあなたの生れたふるさと、
あの小さな白壁の点点があなたのうちの酒
　庫。
それでは足をのびのびと投げ出して、
このがらんと晴れ渡つた北国の木の香に満ち

た空氣を吸はう。
あなたその者の樣な此のひいやりと快い、
すんなりと彈力ある雰圍氣に肌を洗はう。
私は又あした遠く去る。
あの無頼の都、混沌たる愛憎の渦の中へ、
私の恐れる、しかも執着深いあの人間喜劇のただ中へ、
ここはあなたの生れたふるさと、
この不思議な別個の肉身を生んだ天地。
また松風が吹いてゐます。
もう一度この冬のはじめの物寂しいパノラマの地理を教へて下さい。
あれが阿多多羅山、
あの光るのが阿武隈川。

鐵を愛す

君やうしろの煖爐の上の
寫眞額の下のところに置かれてある
鐵の鎔塊を取つてくれ、
南部産の鑄鐵にありさうなものだが、
まあ埃を拭いて此の分厚な樫の臺の上にのせよう。
むかし鎌倉のさかつた頃、
刀の地金のあまりで鍛へた
一尺ばかりの細い角鐵、
上に茶碗がたの鐵鉢をのせ、
下に大きい鐵盆をふせ、
何とあたりまへで、手丈夫で、物ともしないで、
默りこくつて、吸ひ込むやうに深いのだ。
黒くさびて、錆のかげから地金が出て、
荒れ果てながらねつとりして、
鋭い角に鍛へたなりの奥のある和らかさに光をつつみ、
投げ出したままの魂にいきづく
この鐵の瞑想に火をともさう。
もう一度手をのばして
その大窓を閉けてくれ。
昨日もけふも暖春の雨が
風を封じてしづかに、
町の若葉の下道を濡らしてゐる。
こんもりした晴とを合せて
たどたどしい明るさの調和した
このうす緑の夕暮の空氣の中に、
君は今、
何か結局死よりも恐ろしい幻影を持つかについて、
君の心の通路と新らしい門出とを話さうとする、
それではこの明けひろげた青い窓の前へ近くへ
金でない、
ままでない、
いぶし銀でない、
この黒がねの鐵塊の小さなあかい火を燃やさう。

雷獸

(道程以後より)

嘈嘈くさいのはいい、
空氣をつんざく雷の太鼓にこをどりして、
天から落ちてそこら中をかけずり廻り、
きりきりと樹幹をかきむしつて、
いち早く黒雲に身をかくすのはいい。
雷獸は何處に居る。

雷獣(らいじう)は[illegible]の[illegible]に棲む。
山にとどろく[illegible]の[illegible]中に居る。
弾道(だんだう)の[illegible]の中にゐる。
風花(かざはな)の中に居る、
壮時(さかり)の中に[illegible]の中に[illegible]中にゐる。
若(わか)き女(をんな)の[illegible]切断のさきに居る。
そうしてどうかすると
[illegible]の[illegible]人の[illegible]の[illegible]の中に居る。

白熊(しろくま)

(高村光太郎)

ザラメのやうな雪の降つてゐる吹きさらしのブ
ロンクス パアクで、
彼(かれ)は日本人らしい啞のやうな顔をして、
せつかくの日曜を白熊の檻(をり)の前に立つてゐ
る。
白熊(しろくま)も黙(だま)つて時々(ときどき)彼(かれ)を見(み)る。
白熊(しろくま)といふ奴(やつ)はのろのろしてゐるかと思(おも)ふ
と、
飄(へう)として飛(と)び、身(み)をふるはして氷(こほり)を砕(くだ)き、水(みづ)
を浴(あ)びる。

岩(いは)で出来た洞穴に鼻をつつこんで居たり、
そいつはまた[illegible]、
彼の胸に[illegible]を[illegible]して[illegible]
[illegible]。

七弗の給料から部屋(へや)代を払つてしまつて、
[illegible]のついた[illegible]音のする[illegible]少しばかりの[illegible]ポケット
に残つてゐる。
彼(かれ)はポケットに手(て)を入(い)れたまま黙りこくつて
立(た)つてゐる。

二匹の大きな白熊は水から出て、
北極の地平を思はせる一文字の背中に波うた
せながら、
音もさせずに重つたコンクリイトの上を歩き
まはる、
真正面(ましやうめん)の平たい額とうすい紅の舌と、
すばらしい腕力(わんりよく)を隠した白皚々(はくがいがい)の四肢胴体
と、
さうして小(ちい)さな異邦人(いはうじん)的な燐火(りんくわ)の眼(め)と。
彼(かれ)は樹(き)にもたれて寒風(かんぷう)に耳をたれ、

[illegible]に[illegible]しい[illegible]を[illegible]ます。
[illegible]の[illegible]に[illegible]人に[illegible]す、
肉にあ[illegible]の[illegible]は[illegible]れて
教育の[illegible]的[illegible]。

[illegible]は彼の[illegible]に[illegible]
[illegible]の[illegible]的[illegible]
は、
[illegible]一日[illegible]。

白熊[illegible]
一週間目に[illegible]、
[illegible]も[illegible]れて[illegible]大きな白熊[illegible]
[illegible]。

象(ざう)の銀行(ぎんかう)

(高村光太郎)

セントラル・パアクの動物園のとぼけた象(ざう)は、
みんなの投(な)げてやる銅貨や白銅で、
並外(なみは)れて大(おほ)きな鼻(はな)づらでうけて、拾つては、

上の方にある象の銀行にちやりんと入れる、
時々赤い眼を動かしては鼻をつき出し、
「彼等」のいふ此のジヤツプに白銅をくれといふ。
象がさういふ。
さう言はれるのが嬉しくて白銅を又投げる。

印度産のとぼけた象、
日本産のさびしい青年、
群集なる「彼等」は見るがいい、
どうしてこんなに二人の仲が好過ぎるかを。

夕日を浴びてセントラル・パアクを歩いて來ると、
ナイル河から來たオベリスクが俺を見る。
ああ憤る者が此處にも居る。
天井裏の部屋に帰つて「彼等」のジヤツプは
　血に鞭うつのだ。

無口な船長

またひとまはり、
南十字の向うの方をやつて來るよ。

それはね、
風といふ奴は吹くとなれやぼんぼん吹くさ。

こはかあないよ、
怖いほどあのまあるい世界は人情ぽくないよ。

だからいい、
人間が何ぢやろとわめく魚が居ろしな。

そんな馬鹿があるか、
不思議の深祕のといふ勝立はまだ喰はん。

ありのまんま、
そいつが押してくるんだ。又押してゆくんだ。

おれの額か、
寂しくて樂しくてその又上に何だかあるが。

冬だな、
海岸通の屋根から烟が出て人がちらちらして山がまつしろで。

うむ父達はう、
おいおい、この烟草を持つてゆけよ。

夜の二人

私達の最後が餓死であらうといふ豫言は、
しとしとと雪の上に降る霙まじりの夜の雨の言つた事です。
ちゑ子は人並はづれた覚悟のよい女だけれど
まだ餓死よりは火あぶりの方をのぞむ中世期の夢を持つてゐます
私達はすつかり黙つてもう一度雨をきかうと耳をすましました。
少し風が出たと見えて薔薇の枝が窓硝子に爪を立てます。

火星が出てゐる

火星が出てゐる。

嗟するにどうすればいいか、といふ問は、
折角たまつた財寶の薪を無にかへす。
ざうするにどうでもいいのか。
私、作、無限に[illegible]
待つてゐない、さらに一歩、力を出て、
そんな間に自分の顔の醜さを蔵すがいい。
[illegible]これを讀哦と思ふ人は惡しい。
正しい範圍に生きる事、
それのみが正しい。
お前の心を更にゆすぶり返す爲には、
もう一度頭を高くあけて、
この凝固まつた駒込臺の土の上になかる
ああ大きな、まつかな星をみるがいい。

火山が出てゐる。

木枯が皂角子の實をからから鳴らす。
犬がきかつて狂奔する。
落葉をふんで
藪を出れば
崖。

火山が出てゐる。

己は知らない。
人間が何をせねばならないかを。
己は知らない、
人間が何を得ようとすべきかを。
己は思ふ、
人間は天然の一片であり得る事を。
己は感ずる、
人間は無に等しい故に尊である事を。
ああ己は身ぶるひする、
無に等しい事のために。
無をさへ蔵した
必然の漏洩よ

火山が出てゐる。

天がうしろに廻轉する。
無數の遠い世界が登つて来る。
己はもう昔の詩人のやうに
天使のまたたきをその中に見ない。
己はただ聞く、
深いエエテルの波のやうなものを。
さうしてただ、
世界が止め度なく美しい。
見知らぬものだらけな無氣味な美か
ひしひしと己に迫る。

火山が出てゐる。

花下仙人に遇ふ

花よ、[illegible]
[illegible]老人へ
[illegible]わたくしの[illegible]たま
い。
さうして法をおきかせください。
自分を[illegible]ずに[illegible]
あさましい律に縛られずに生きられる法を、
たくさんの友達が最後の峠に身を更へてゐるま
す。
花よ、霊でわたくしの眼をあけてください。
わたくしの欲しいのは九萬円の富よりも、
その筋金のやうな弾力と打撃力。
このままお別れしたら、遠からず、
わたくし達は昔社會悪の中に死にませう。
花はわらふといくら散つても、
老人よ、
今日はこの鶴をお返ししません。

あどけない話

ちゑ子は東京に空が無いといふ、
ほんとの空が見たいといふ。
私は驚いて空を見る。
櫻若葉の間にあるのは
切つても切れない
むかしなじみのきれいな空だ。
どんよりけむる地平のぼかしは
うすもも色の朝のしめりだ。
ちゑ子は遠くを見ながら言ふ、
阿多多羅山の山の上に
毎日出てゐる青い空が
ちゑ子のほんとの空だといふ。
あどけない空の話である。

ぼろぼろな駝鳥

何が面白くて駝鳥を飼ふのだ。
動物園の四坪半のぬかるみの中では、
脚が大股過ぎるぢやないか。
頸があんまり長過ぎるぢやないか。
雪の降る國に此では羽がぼろぼろ過ぎるぢやないか
腹がへるから堅パンも喰ふだらうが、
駝鳥の眼は遠くばかり見てゐるぢやないか。
身も世もない様に燃えてゐるぢやないか。
瑠璃色の風が今にも吹いて來るのを待ちかまへてゐるぢやないか。
あの小さな素朴な頭が無邊大の夢で逆まいてゐるぢやないか。
此はもう駝鳥ぢやないぢやないか。
人間よ、
もう止せ、こんな事は。

同棲同類

——私は口をむすんで粘土をいぢる。
——ちゑ子はトンカラ機を織る。
——鼠は床にこぼれた南京豆を取りにくる。
——それを雀が横取りする。
——カマキリは物干し竿に鎌を研ぐ、
——蠅とり蜘蛛は三段跳び。
——かけた手拭はひとりでじやれる。
——郵便物はぱつたりと落ちる
——時計はひるね
——鐵瓶もひるね
——芙蓉の葉は舌を垂らす。
——づしんと小さな地震。
油蝉を伴奏にして
この一群の同棲同類の頭の上から
子午線上の大火團がまつさかさまにがつと照らす。

何をまだ指してゐるのだ

逆まく波のしぶきにいつも濡れながら、
あの岩の出鼻に裸で立つて、
空の果まで何にも見えない海の深みを見透す
やうに、
馬鹿の太郎は何をまだ指してゐるのだ、
炎天霾氣の砂ほこりにまみれながら、
ボストンの忙しい生産社會の人ごみに
まぎれこみながら、
建てかけた鐵骨の外には空の月しか見えない
空に手をあげて、

觸知

或るはイエスの腹に手を入れて
二つの傷痕を撫でてみる。
一人のかたくなな彫刻家は
彫像をおのれ自身の指で觸つてみる。
水を裂いて中をのぞき、
天を割つて入りこまうとする
ほんとに君をつかまへてから
はじめて君を君だと思ふ。

街上比興

蹉跌は證だ。
眞なるものは必ず蹉跌す。
蹉跌の深みに轉落せぬもの、
己はそいつの友ではない。
君見たまへ、此のおもちや屋の
葉卷の灰は崩壞しない。
サンタクロオスにもらふなら

その詩

その詩を讀むと詩が書きたくなる
その詩をよむとダイナモが唸り出す
その詩は結局その詩の通りだ。
その詩は高度の原の無限の變化だ。
その詩は雜然と並んでもゐる。
その詩は矛盾撞著支離滅裂でもある。
その詩はただ眞の動きに貫かれてゐる。
その詩は清算以前の展開である。
その詩は氣まぐれ無しの必至である。
その詩は生理的機構を持つ。
その詩は溶然と空間を押し流れる。
その詩は轉落し天上し壞滅し又蘇る。
その詩は姿を破り姿を孕む。
その詩は電子の反撥親和だ。
その詩は眼前咫尺に生きる。
その詩は手きびしいが妙に親しい。
その詩は不思議に手に取れさうだ。
その詩は氣がつくと歩道の石甃にも書いてある。

首の座

私は今山雀を彫つてゐる
此が出來上ると木で彫つた山雀が
あの晴れた冬空に飛んでゆくのだ。
その不思議を此世に生むのが
私の首をかけての地上の仕事だ。
そんな不思議が何になると、
幾世紀の血を浴びた、君、忍辱の友よ、
君の巨大な不可抗の手をさしのべるか
おお否み難い親愛の友よ、
君はむしろ私を二つに引裂け。
このささやかな創造の技は
今私の全存在を要求する。
この山雀が翼をひろげて空を飛ぶまで
首の座に私は坐つて天日に答へるのだ

山村暮鳥篇

雲　おなじく　朝顔　おなじく　ある時　春の河　おなじく　おなじく
月　病床にて　おなじく　西瓜の詩　ほそぼそと　[illegible]　種子はさへづる
りんご　いつとしもなく　こども



雲

丘のうへで
としよりと
こどもと
うつとりと雲を
ながめてゐる

おなじく

おうい雲よ
ゆうゆうと
馬鹿にのんきさうぢやないか
どこまでゆくんだ
ずつと磐城平の方までゆくんか

朝顔

瞬間とは
かうもたふといものであらうか
一りんの朝顔よ
一日咲いて[illegible]

おなじく

芭蕉はともかくも
火をこしらへて
茶をいれた
それからおもひだしたやうに
かたはらのお櫃を覗いてみて
さびしくほほゑみ
その[illegible]
[illegible]
冷飯をたべた
朝顔よ
さうだつたらう
翁には、妻も子もなかつた

ある時

雲もまた自分のやうだ
自分のやうに
すつかり途方にくれてゐるのだ
あまりにあまりにひろすぎる

罪のない草花たんで
おお吾子よ
こんなときに
ここにこうして
ひょっこりとでてきませんか

春の河

たっぷりと
春の河は
ながれてゐるのか
ゐないのか
ういてゐる
藁くづのうごくので
それとしられる

おなじく

春の、田舎の
大きな河をみるよろこび
そのよろこびを
ゆったりと雲のやうに
ほがらかに
飽かずながめて
それをまたよろこんでみてゐる

おなじく

たっぷりと
春は
小さな川々まで
あふれてゐる
あふれてゐる

月

ほっかりと
月がでた
丘の上をのっそりのっそり
だれだらう、あるいてゐるぞ

病床にて

朝である
一つ一つの水玉が
[illegible]にのみでてゐるよ
ここできめて
よあ、[illegible]なし
そるべとのびよ[illegible]よ

おなじく

ああ、まぶしいにし
もったいなし
けさもまた粥をいただき
朝顔の花をながめる
妻よ
生きながらへねばならぬことを
自分ははっきりとおもふ

西瓜の詩

農家のまひるは
ひっそりと
西瓜のむすばれた
大かい奴がごろんと一つ
座敷のまんなかにころがってゐる

おい、[illegible]がつまるぞ
わたしが西瓜だつたら
どうして噴出さずにゐられたらう

ほそぼそと

ほそぼそと
[illegible]の[illegible]にかかるもの
[illegible]なりよ
[illegible]
[illegible]

朝

[illegible]
[illegible]
[illegible]
うれしさうにわらつてゐる
[illegible]
[illegible]
だれもかれもそこをとほるのが
[illegible]

種子はさへづる

種子はさへづる
穀倉の種子のふくろで

はるがきたとてか
[illegible]の雲雀も

それをききつけた百姓は
あわてて穀倉に驅けこみ
[illegible]の種子のふくろを抱きだした

りんご

[illegible]
大きく大きく
ひろげても
かかへきれないこの気持
[illegible]
[illegible]

いつとしもなく

いつとしもなく
めつきりと
うれしいこともなくなり
かなしいこともなくなつた
それにしても野菊よ
眞實に生きようとすることは
かうも寂しいものだらう

ことり

[illegible]
家の[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]の國からでもつたはつてくるやうにき
[illegible]

森川葵村篇

睡蓮　雨のまぼろし　聲　六月のといき　哭かざる涙　雨の夜
海鳴　わが嘆き　月光と音樂　寂しき調



睡蓮

かはたれの水の面に
白睡蓮の扉をこめて
ほの浮ぶ龕のうち
わが憂愁を祭る宵
松が枝わたるすゝり音も
空には星のまたゝきと
消えいりつゝ、今し世界は
ひとつの息の底にあり
祈念の奥に灯ともりて
白睡蓮の扉はひらき
ひそやかに笑へる處女
それぞはかなき愁の姿なるらし

雨のまぼろし

小雨ふるたはて路に
そのむかしわれをおくりて
ひたぬれに君はいごかし
たゞよへる雨のまぼろし
おもひでのすがたを追ひて
見かへせどついに見わかず
雨しぶきはらひもあへで
しどろにも眼路のくもりは
傘のしづくゝふる音に似

聲

潮よどむ瀬をたゞよひ
珠さぐる海人のことゝも
泣きさみしあとの心か
うす明りにほのふるなかに
われは今、ひしとつかむ
しじまの聲を

六月のといき

夕顔のひくにたへざる憂の花

た[illegible]わ[illegible]の[illegible]に
[illegible]の[illegible]
[illegible]に、[illegible]に満たし月[illegible]出で[illegible]
な[illegible]ざるわがうれひ、
た[illegible]心、[illegible]の薬てどころ
[illegible]に[illegible]消えて
六月[illegible]明日に浸るゝわが息——

異しき涙

[illegible]に——な[illegible]きけむ、
あさなればわが頬にあまき涙あり。

夢にしてなにを泣きけむ、
昨、わが踏みし春の花のごと
春の夜の闇にほのめけり。

めざむればわが頬にあまき涙あり。
われは知る——夢路のひまを通ひにき
昔の戀の、その幼き涙もて
われに接吻けにしを。

雨の女

いつか知りけむわが女、
暮るゝ雨の[illegible]の青白う
かろき調子にふるふこと、
倦みたゆみたる肉の[illegible]、明日は
わがサフランの花が心に擬ひかゝる。

いつか知りけむわが女、
蛇のごといとなめらかに滑かに
沈默は夜が唇にあり。
消ゆもひとり寝す
[illegible]は夜の[illegible]になげけり。

いつか知りけむわが女、
蔓珠沙華紅きに注ぐくされ雨
雨のなかより[illegible]きて、
わが立てば[illegible]、[illegible]は歩み、
つかのまも否を[illegible]よ。

いつか知りけむわが女、
醜き雨住まへるかなた、砂丘に
さらばわれらがおくつきを築かまし。

それ日に、[illegible]心[illegible]なし兒は
色紅き[illegible]となりて
さしのぼる朝日とともに歌ふらむ。

海鷗

乾きたる鷗、汀のまゝに地に
あるかなきかの足跡つけて出で去にけり。
海の[illegible]、

つかの間の姿は眼にも入らなくに、
かすかに殘る卜象を[illegible]われたる
鷗の[illegible]。

乾きたる鷗、汀の[illegible]砂地に
君が足跡の[illegible]、[illegible]われたる
そらだのめ。

わが祈り

夢のごとき落葉は
白き波路に[illegible]むとす——

ゆるしませ、
ああわが心いつにぞ、ああわが心は
悲しき琴に觸られ觸られて
夜の[illegible]られてあり。

白き波路に沈みゆく魂のはかたに――
今もかはらぬ思ひにて
わが空とほくらち見る時、

いまひとたびそのかみの涙もて
あてどなくたゞ訴へむ
ゆるしませ、ゆるしませ

月光と音樂

潮路のはてを白銀の
雲は[illegible]れて洩るゝ月、
まま白き君が手によりて
心の嘆は狂ひ泣く。

半ば瞑れる君が瞳、
半ば開けるわが心、
それは[illegible]
いかにか君に[illegible]なむ、

盛りあふれたる高[illegible]の
熱み[illegible]たる滿月の
滿ちたる愁のかなしみの
それゆゑに泣くわが心。

樂しき滅

噎びぬ、息は
熱に火に
はた接吻に。

埋められぬ、
身はゆるびたる
たゞむきに。

世は皆滅ぶ、
海原も
みどりの陸も。

あはれ今、
[illegible]に
呼吸[illegible]
[illegible]に
[illegible]はる
眼のうへに。

[illegible]と洩れぬ、
君が瞳の
青き空。

三富朽葉篇

夜の鳥　花瓣と花粉　憂鬱病　切抜書



夜の鳥

柔かい夜の模様に
羽も見えず
跡も止めぬ鳥の歌――
ひそかに、ひそかに、
心は印象に打たれる……

ひとすぢ
心を捲く
顫音の――
はてしなさ。

緑の心を、いつまでも
忘れな、と

夜の鳥の
仄白い
歌聲、
消えては續く
闇の方の
ああ懷しい
ねむげなひとすぢ！

聞き分けよ、
眠りの影の
淨らかな、時の敷布を
轉じゆく
刹那の歌の麗しさ
やる瀨ない靜けさを、また。

ひそやかに、ひそやかに、
負債を逃れ行くごとく
――はても知らず――
寂しさの限りを
下りつづける
魂消ゆる歌の階段……

花瓣と花粉

I

快活なランプのまはりに
何ものか宿つてゐる。
柔らかに眼を閉ぢて
衰へゆく君の脣。
そのしなやかな媚に

眞紅の花の咲くとき、
夏を[illegible]けて萎びくる
[illegible]の黄いろい[illegible]ぞ鳴り[illegible]る。

II

夜を浸す
水の光りの動搖。

窓の下で、
淨らから敷石の上で、
蒼ざめて、空しく歌つた
乞食の行方は如何に？

冷たく陸に登り來る
水の光りの閃き。

遙かに小さい火影の
最後の絶望。

瓦斯の熱の昏睡。

III

此の夜半の眺めを閉し、

[illegible]に[illegible]を當て、
接吻の味を[illegible]ひ、
薔薇の花の萎むまで、縮れるまで、消えるまで、
熱い抱擁を、生命のひまな[illegible]を。
ああ！ 短い[illegible]ひの一曲を！

IV

黄ろい花粉を地に委して、
ああ、初秋の、
紅い花、
眞黒に、縮れた
姿よ…泥と別き難い……
誰か汝の名を尋ねよう、
夢の羽の
朽ちて漂ふ…
影――

憂鬱病

I 雨

青い洋館を取り卷く
畑の後の地平線よ、
雨が降る、雨が降る。

[illegible]を[illegible]むやうな暗い雨が
雨の中から生れて、
雨の中へ消えてゆく。

のろのろと動いて
濡れて[illegible]る[illegible]雨、

おお、私は熱を病んで、
影のやうに飛び去る
火の鳥を夢みてゐる。

枝から枝へ舞ひ昇る
明るい水の煙の
雨に紛れるわびしさ、
窓硝子のみやがて白く
擴がりかかる夜の鬱陶しさ。

暗い焰の陰から
私の饑ゑた希望は
人知れず狂ひに行く……雨の中。

II 夜

血なまぐさい室を出て

私は夢遊病者のやうに迷つて歩く、
闇の底に蒼ざめた
光りの[illegible]り。

薄明りの[illegible]か、どこからか
洩れるともないピアノを聽いてゐる。

火の渦きに打たれて、
私は獨り、病に強いられて、
怖い夜のイリュジョンを追つて歩く。

切抜畫

I

子供等は路の上にいつとはなく
白い印象を殘して消えゆく、
揺れて閃く影の群に
濃厚な彩を添へる黄昏。

生温い風に壓される
か弱い蟲の[illegible]が
重苦しい[illegible]に[illegible]と[illegible]つてゆく。

[illegible]上へ[illegible]に

雪の積るやうな音がする、
往來の人人は何かしら微かな色を落して過ぎる。

II

とある[illegible]格子の逞しい門は
[illegible]の[illegible]に蔽はれて、
夢魔になやんで壞れようとしてゐる。

飾りも無い室のけうとさ、
をりをり、[illegible]の[illegible]く[illegible]る、
女は黒塗りの柄を握つて
奇妙な風俗畫を眺めてゐる、

男は眠りを貪つて
深いふかいところへ落ちてゆく。

いつまでも目醒めない病氣の子供のやうな
昏れ方の[illegible]色の薄明り。

III

あてどなく、風に吹かれる[illegible]は
[illegible]を[illegible]らして歩く、
昏れ方となる時、

屋根の上に、うす[illegible]くなる猫の眠りも
いつ知れず[illegible]をつくる。

一時に室を照した白い光りが
永い間[illegible]の[illegible]のあたりに漂つてゐる。

[illegible]の夢の[illegible]の[illegible]に青みゆく時、
[illegible]の[illegible]は遠ざかり
私の窓に黄色なランプが輝く……

IV

ランプの下で
熱い[illegible]を啜りませう、
濡れた[illegible]の明るみへ醉つて
快い眠りを誘ふ時、
私、達は子供のやうに
手を繋いで陰へ行きませう、
もつともつと明るい陰へ、
もつともつと熱い陰へ。

ああ、白い花束を[illegible]し棄ててしまへ、
そして窓をあけませう、
大空の[illegible]の[illegible]が
[illegible]の[illegible]を[illegible]らむ爲に！

今井白楊篇

BLACK SWAN　其の一群



BLACK SWAN

その火の嘴から、
惜氣もなく池の面の水蓮の花瓣を啄んで、
お前の黒く荒荒しい胸毛を飾れ。
お前の臆病な心の周圍を白い水蓮の花で取
　卷け。
白鳥よりも纎やかな頸のほとりに淨い瓔珞の
　飾りを垂らせ。
そしたらお前の詛はれた姿が少しは美しく
　なるかも知れない。
此の世の誰かがお前を眞個に愛して呉れる樣
　になるかも知れない。

哀れなる水鳥よ、焰を宿す水晶の瞳を揚げ
　て、
自分の周圍の樣子を窺へ。
お前の池より遠くない海の邊りは
秋の淸氣が岬より岬の端へと搖らいでゐ
花壇の花も樹立の影も終焉に近い光の中に微
　笑してゐる。
そして總てのものには悲哀の歡びが輝いて
　ゐる。
お前は王者の樣な嚴かな頸付をして、
その火の嘴と黒い影とを「死」の樣な風にし
　て、
ほのかな水光の中を森の方へと行くが宜い。
黒耀を刻んだ二つの水搔で
黒蒼い森の嘆きの叫びに相槌するまで、
ナヤーデの眞白な乳房に寄り添ふまで、
默つた流を掻き亂して行くが宜い。

哀れなる水鳥よ、お前がいかに探したとて、
遲鈍な翅は日の中に僅かな糧ですらも探し得
　まい。
夜明のために白い水蓮すらも集め得まい。
そしてお前を愛して呉れるものはいつもある
　まい。
然しお前は悲しむには及ばない。
やがては夏も終るであらう。
樹樹の枝から青い木葉が散るであらう。
その時無聲の森の奥深いほとりで、
お前は降り積む落葉の下にお前の魂を埋め

るが宜い。——
優しいナヤーデのみが露はな胸を大地に横へ
て、
お前の死んだ魂を覆ひ隠して呉れるであら
う。
お前と共にわびしいひと冬を過して呉れるで
あらう。

燕の一群

今年自分が歸つたとき、
燕は未だ歸つてゐなかつた。
すべての木の葉が眩く輝き、
葡萄の蔓には實が結られた。
しかし其等は、
今年、其等の歌は聞かない。

ああ！ 明日の朝に輝きだす、
雲が鮮かに浮いて來る。……
此時われ等は、
あの濃艶な空氣と光線との中の、
流るる様な
燕の群をいつも見た！

柳の木蔭。
白く晴れる空を眺めて、
一人の男が呟いた。
『今年は一體何うしたのだらう？』
葉ずれの音がかすかに鳴つた。
自分は默つて空を仰いだ。

或朝、
自分は窓に凭つてゐた。
新鮮な日光が晴れやかに降る。
洪水のやうに。
野に、山山に、山の谷谷に。——
南の風がしづかに吹く、
すべての森に露がかがやく。
不圖！
小鳥の群が空に行く。
輝つた空を、
しつとりとした大氣の中を。——
自分は凝とそれを仰いだ。……
燕だ！ 燕だ！ 燕の群だ！

大空の下、
黒い一群は亂れて見える。
日光は彼等の翅を照らし、
微妙な歌がほのかに洩れて。……
首垂れしまま、
永き旅のあと、
いかに悲しきひと時だらう!?

しかし！ しかし！
汝の翅翼は汚濡れてゐる。
青き光も、
柳の吐息も、
汝は已に解し得ない！

すべてのものより只一人。
旅人よ！ 悲しく淋しきかな。
汝は默つて——默つて並木路をゆく。

福士幸次郎篇

昏睡　夜曲　泣けよ　ああ平原のかなたに　友情　平和　傲慢　賛美歌
智慧の實を食べてよ』　この詩は何處から来る　快復　自分は太陽の子
である　扇を持つみなしごの娘　最高岸の[illegible]



昏睡

一人の男に智慧をあたへる、
一人の男に黄金のかたなをあたへる、
一人の男に火をあたへる。
その男は睡つて正體なく、
髪はぼうぼうとのびて、
さながら酔ひどれの如し、
泥のごとし。

鳥は巣に鳴き、
風は林を吹く。
ああ眠れる日はどろんとよどんで、
今大洋の水平線上を行く。

この男に魂をあたへ、
この男をゆりさまし、
この男に閃をあたへ、
この男を立たしめよ！

夜曲

離れてゐる彼女に贈る

靜かな世界で、
おれは君に語る。
ねがはくは君は永遠にわかくあれ、
ねがはくは君は永遠に微笑してあれ、
ねがはくは君は永遠に心靜かであれ。
よし眠つてゐるとも、

よい夢を見むことを。
よい夢を見てつまらぬものに、
さまされないことを。

ああガラス窓にうなる蠅ひとつ、
赤くとろとろと沈む西日、
ああ暮る夜、
永遠の夜、
ねがはくはその暗に君にあいそよく、
美しい星あれ、
底びかりする星あれ、
なつかしい星あれ。

ああわれは君のかつて見た海をわすれず、
君の遊んだ濱を忘れず、
その海によなよなうつる星のごとく、

荒いうねりに影うつす星のごとく、
われは君をば思ひだす、
われは君をば思ひだす。

泣けよ

自分は君が泣くことを許す、
自分は君が泣くことを許す、
ああ泣けよ泣けよ、
汝の魂はその涙に洗はれむ、
汝の心はそのために、
暗底の泥の如くに雨にぬるるとも
しめるとも、
更にそれによりて光をまさむ。

ああ泣けよ、
泣けよ、
汝の心は底より汲み出して、
涙なきまでなけよ。

汝の涙はかわくことなし、
汝の涙は海より出づ、
汝の涙は雨後のすきとほれる海より出づ。

ああ泣けよ泣けよ、
汝の自然のために泣けよ、
われは泣くべきものに泣かざる人を愛せず、
嵐のあとのきよき野の如き顔せざる人を愛せず、
ああ泣けよ泣けよ。

ああ平原のかなたに

ああ平原のかなたに
夜はまだ明けない。
星は霧の中にささめき、
水蒸氣は冷く叢をうるほしてゐる。

わが命は濡れて渇くことなく、
わが戰ひの旗は肩越しにしをれてゐる。
ラッパは夜なかの夢をつづけ、
兵隊は闇間に起き伏す草のやうに眠つてゐる。

かかる中にわが魂は目醒めて、
一線になつてゐる敵を見る。
遠い眠つてゐる地平線のさきを見る。
葉摺れの中にただひとりめざめて、
永遠に醒めてゐる目が一つある。
それが敵を見る、
眠れる味方を敵の中に、
唯ひとりめざめてそれを見る。

友情

（千家元麿に）

ゴールデンバットを吸ひながら、
僕は日の暮れ方の倉庫街を思ひ出した。
赤く金をかすつた断れ雲が、
空いつぱいに光つてゐる、
一群の屋根瓦が同じ色に染まつて光つてゐる。
河沿ひの倉庫は一列になつて、
掘割りの水深く落ちてゐる。
その水はいつも流れず、
いつも淀まず、
むねもあらはにさらけ出して、
冷たい嘆きをうつしてゐる。

僕はそのあと二ヶ月の間
死身になつて心に願つた。
襲ひくる音はだの寒さに、
つねにかのゆめをつくつた。
日陰の鳥は羽ばたきして、
つらい牢屋のゆめをつくつた。
今こそ僕の肉體は、
惡熱を病んで居る。
肌身はなさず或る女の肉體を、
つねに戀ひしたうて慄へてゐる。
常にせぐりあげて慕ひ泣く聲を、
肌に耳あてて聞いてゐる。

ここにまことの愛があつた。
いつも流れず、
いつも淀まず、
むねもあらはにさらけ出して、
互に烈しい熱にふれあふ愛があつた。

幸福

幸福といふものは鳥見たいなものだ、

この寒い野原の中にゐる。
音が聞えるのはまだしもいい、
聲も形もかいくれ隱れる事がある。
だがこの鳥を一度捕まへたらしめたものだ、
今度は捕まへた彼れがその鳥になる。
いくら何か出て來て邪魔したって
もう駄目だ。
芥子粒のやうに小さくなつて、
風に向うを飛んでゐる。

獵師

地に敷いた落葉、
そそり立つ骨まばらな老木、
いま私は銃を手にして、
鳩でもない、山鳥でもない、
その梢に鳴く頬白を射てやらうと、
なぜか鐵砲をむけてゐる。

ああ、なぜ小鳥を射る、
そのうつくしい聲の主を？
その聲があんまりよいもんだから、
私を魅いてしまふんだから、

[illegible]、
[illegible]たより木[illegible]、
[illegible]、[illegible]さし[illegible]林に
ああ、
白い雲のなかに見える空の色はおだやかな空
ああ、
枯れ草目に咲く草の花あり、
その景色にあの小鳥の聲があんまりするどく、心持よいもんだから
わが心に嵐をもたげたいたづら心が、
お前ののどをねらはせたのだ。

私はお前を打ちはしない、
ただお前がこの野原一面の沈默を破つて、
不意に囀り出すとき、
私はそのするどい心持よさに釣られて、
無心に銃の筒先きをむけるのだ。
ああするどい秋の野の朝景色、
この世はなぜに斯うもうつくしい。

發車前

低い空はぼんやりと街の灯をうつして、

薄月に小雨が降り出した。
夜行列車の振鈴は鳴り渡つて、
一時に動みはじめる群集の呼び聲。

ああ私はどこへゆく？
ぞろぞろと改札口を出る群集、
かすかな眩暈からふと目がさめて、
私はベンチを離れた。

ああ私はどこへゆく？
ただ一人うちしをれて歩むプラットフォオム、
鎖した歎きは何時までもほどけず、
ただ一人うちしをれて歩むプラットフォオム、

人混みにときめかぬ處女の胸、
其の胸は病みおとろへた私の胸にある。
其の悲哀は時を打つ振子のやうに、
術なげに時を打つ振子のやうに、
思ひ出しては鉦をならす。

その追憶は病みおとろへた私の胸にある。
ああ、あなたは今どこにゐる？
うすむらさきに吐息せる白熱燈、
あなたの微笑した顔はどこにある、
人影がいり亂れる蒼青なプラットフォオム。
たよりない人生に、
嘆息はほろびず、
世にない人に、
くちびるはふるへる。

さびしくも唯だ一人どこへゆく？
薄月に小雨が降り出して、
ほのあかるい夜の空、
さびしくも唯だ一人どこへゆく？

智慧の實を食べてより

栗の樹の下を歩けば、
ふかい落葉の中に、
君の吐息たち、
わたしの吐息たち
何處で鳴くともしれぬ山鳩の聲は、
梢に唯だ一つ殘る黒い葉のやうにふるへる。
もの寂しく遠吠えする果樹園の番犬、
突然鋭く發射する連發銃の反響、
遠い山脈からは雲一つうごかず、
遠いあさぎ色の麥畑のそよぎまでも、
日は悲しげにしんと照らしてゐる。
此の時堪へきれないやうに君の暗い影は、
空とぶ鴉のやうに私の胸へ落ちた。
手錠のやうに痛のやうに、
おもく呼吸ぐるしく私の胸を抱きしめた。

ああまたしても私等は悔いるのか、
あの遠吠をする犬のやうに、
罪と苛責に吠えるのか。

うらがれ時の果樹園に、
しらじらしくもふるへる白い日の光、
その薄寒い木立の奥に、
犬は悲しげに吠えてゐる。

この殘酷は何處から來る

どこで見たのか知らない、
わたしは遠い旅でそれを見た。
寒ざらしの風が地をドッと吹いて行く。

低い雲は野天を覆つてゐる。
その時火のつく様な赤ん坊の泣き聲が聞え、
きんぽら髪の女が窓から顔を出した。
ああ眼を眞赤に泣きはらしたその形相、
手にぶらさげたその赤兒、
赤兒は寒い風に吹きつけられて、
ひいひい泣く。
女は金切り聲をふりあげて、ぴしやぴしや尻を
　ひつ叩く。
死んでしまへとひつ叩く。
風に露かれて裸の赤兒は、
身も世も消えよとよよと泣く。
雪降り眞中に雪も降らない此の寒國の
見る眼も寒い朝景色、
暗い下界の地に添乳して、
氷の胸をはだけた天、
冬はおどろに荒れ狂ふ。

ああ野中の端の一軒家、
涙も凍るこの寒空に、
風は悲鳴をあげて行く棟の上、
あゝこの殘酷はどこから來る、
あゝこの殘酷はどこから來る、
またしてもごうと吹く風、
またしてもよよと泣く聲。

恢復

人生は苦艱と愛の庭、
荒い心に温柔をつつみ、
生茂る木の葉に紅い實點々と
秋の日照りに傾の旅情の、
逞しく足を揃へるその青い幹。
やがては霜來り、葉は落ち、
枝はさくさく折れ立ち、
あゝ險しくも白眼をした雪もよひの空、
寒い雨、
地凍る霜の夜明に、
君の呻きは細枝をふるはし、低い空に嘯かう。
缺乏の黒い感情、
苦痛に充ちた忘失の眼、
この身にふりかかる苦しみの出所は何？
やがては[illegible]も黒ずみ、
寒い[illegible]に[illegible]、
[illegible]小鳥の鳴き、
天のことわりは季節のさかひに、
君はその時見るか、ああ見ぬか、囁く聲かに潜
　しくまた靜かな春と冬との分れ目を—
雪は消く、風は凪く、日は短く、
しかし何處にか胸にはらむ恢復の希望……

自分は太陽の子である

自分は太陽の子である
未だ燃えるだけ燃えたことのない太陽の子で
　ある
今口火をつけられてゐる
そろそろ燻ぶりかけてゐる
ああこの煙が焔になる
自分はまつぴるまのあかるい幻想にせめられ
　て止まないのだ
明るい日光の原つぱである
ひかり充ちた都會のまんなかである

嶺にはづかしさうに純白な雲が輝く山脈で
ある
自分はこの幻想にせめられて
今燻ぶりつつあるのだ
黒いむせぼつたい重い烟を吐きつつある
ああひかりある世界よ
ひかりある空中よ
ああひかりある人間よ
總身眼のごとき人よ
總身象牙彫のごとき人よ
怜悧で健康で力のあふるる人よ
自分は暗い水ぼつたいじめじめした所から産
聲をあげたけれども
自分は太陽の子である
燃えることを憧れてやまない太陽の子である

扇を持つみなしごの娘

扇の中にみなしごは、
白い澄つた眼を閉ぢる。

病氣上りの氣のやみに、
まぶしく照らす赤い夕日、
風にふらふらうごく雛罌粟
心覺えの兩親が心の何處かにあるやうに、
所々にきらきらと清水が涌く。

ああパウルのやうに嚴くて、ペテロのやうに
やさしい院長さん
私が此方へ初めて來た日には、
あのお天日樣目掛けて飛んでゆく鳥みたいで
した。
そのくせ夜になると魘されたり、
泣き出したり、
知らぬ他國の夢を見て、
暗い廊下におびえて居たり……

鍛冶屋のぽかんさん

梨の花が眞白に咲いたのに、
今日もまた降る雪交りの雨。
濁り水は早口に鍛冶屋の樋へをどり込み、
眞裸な稚兒は手放しで清い涎をぬらしてゐ
る。

此處の息子はぽかんさん、
とんてんかんと泣く相鎚に、
苺の初熟が食べたいと、
鐵砧臺を叩くとさ、
手をあつあつとほてらして叩くとさ。

ああ、夢ならばさめておくれ、
ぽかんさん、
此の世の中に多いものは、
祕藏息子のやもめ暮らし。
時計の針の尖のやうに、
氣の狂れやすい生娘暮らし。

この年月の寒暑の往來に、
私の胸は澱んだ花の皺ばかり、
私の胸はとりとまりない[illegible]
かり。



竹友藻風篇

わが心傷つき……

わが心傷つき、わが歩のなやめるとき、
すべての人はなつかし——。
わが眼は涙に濡れつつも
微笑みて、祈りてあらん。

いつまでも祈りてあらん、
われいかで人を詛はん、
「わが道はすべて幸なり」と、
主よ、けふも祈らしめたまへ。

わが心傷つくとも、破るるとも、
いかに宿命はつらくとも、
人いかにつれなくあらんとも、
わが道はすべて幸なり。

すべての人はなつかしく、
流れ行く日はうらがなし。
くるしむごとに、痛むごとに、
わが心は清し。

わが心傷つき、わが歩のなやむとき、
主は低く語りたまひぬ。
その聲をえこそ分たね、
むせびつつわれは聽けり。

また聽けり、天人の遠き吐嘆を、
わが罪の秋の落葉を、
ふりつもる愁の雪を、
聲もなき祈禱の言葉を。

われ

誰かわれとともに胎を出でし、
誰かわれとともに墓に入らん。
はふり落つる涙の底に、
「われ」ありて、われを見つむる。

冬の日

日は遠き
海をめぐる。

世の涯の
トゥウレの島に、
波の上に……

わたり行く
翅の足結の、

はるかなる、
いと遥かなる、
ああ、その聲、
ほのかに聞こゆ。

水夫のうた

月の出汐のしづけさよ——
はてしなき海は眠れり。
いざ友よ、いく秋のならひのごとく、
けふもまたやぶれたる船べりに、
ほのかなる笛を吹かまし。

月の出汐のしづけさよ——
わが友の水夫の眼は
かすかなる瞳を開く。
友よ、聞け、ドルフィンのうたに交りて、
流れよる他界の聲を。

月の出汐のしづけさよ——

水葬

水の柩に抱かれてわれらの友は眠れり。
泣けよ、やさしき波千鳥、
水の柩にゆれゆれて、
父の住居に歸り行く白きすがたを。

水手はみな船べりにならび、
あるは帆桁に凭り、また舳に立ちて、
青波のうへを眺む。
その時靜かなる祈禱の聲絶えて、
しづしづと白き骸は下されたり。

靜かに組めるふたつの手には、
なつかしきうつし繪を抱きたらん、
白き毛布の中に
うらわかき友は眠れるなりと、
水手はみな眼をうるませて
言もなくわかれを告ぐるとき、
白きむくろは音もなく波にうかび、
おもむろに船を離れて
遠く去り行き——
くはへたる煙管を持ちかへて
見送るかたに、
浮標のごとく
やすらかに流れたり。

吹けよ、そよかぜ、海越えて
かなたの岸に吹きおくれ。
泣けよ、やさしき波千鳥、
波のまくらにゆれゆれて、
父の住居にかへりゆく白きすがたを。

歲月

水色の絹の帳によりそひて、
ひそやかにすぎゆく影、
消ゆるまぼろし、
うすく濃くうかびては闇にまぎれつつ、
はかなくあふを見るうつゝのうへに、

夢深くなりて、ほのかに白き。
ひそやかに、影もなく、
一時のわたどりめぐり行き、
素足には瑠璃の園を踏むらん……

纈草の葉のささめきも絶えはてぬ。
木立の楡を吹き、丘にうそぶき、
「去歳の雪」、あとなき夢を喚くかな。
逃げまどふシルヴンのあらきためいき、
ニンフの叫び、
聴けよ、また冬枯の麓の原に
息絶ゆるパアンの笛を。

年は逝く、
ひそひそと、うち黙し、悲しみて、
指を組み、手に手をとりて逃れ行くかげ。
アダムのうから、エヴの子ら
やらはれのカインのごとく亂るる群よ、
疲れたるたましひは、今日新らしく、
大なる悲哀を見てくらく曇りぬ。
そのなかに、われを見る寂しきひとり、
「うららかき春の日は君にかへらん、
されどかの逝きてあとなき幾人を
なほ君はおぼえたまふや、いかに」と言ひて、
小指もてその[illegible]、かき[illegible]、
かなしげに微笑みて、さて消え去りぬ。

わかれ

わかれては
またも見じ。
さらばきみ、
さきくあれ。

風吹けば
風に舞ひ、
はらはらと
ひとり散る、

このいのち、
そのいのち、
ここ、かしこ、
さだめなし。

うらみなく
悔もなし、
秋の葉の
いさぎよく。

母

熱を病む枕もと、
[illegible]ればに、
羅馬字の乾菓子に
われ知れる文字つらね、
かなしげに看護せし
母上や老いたまふ。

われからと藥にすだき、
ひとり泣く蟲なれど、
罪にしも死にがたく
はなれゐて、遠く呼ぶ。
「母上よ、母上よ、
わが心、熱を病む。」

雨

夜もすがら、外に雨ふり、
夜もすがら、心くるしむ。

ああ、むかし、罪をわびては、
なげき伏す膝もありしを、
今はただ冷たき窓に、
降りしきる雨を聴くなり。

夜もすがら、雨の中より
われを撃つ鞭の聲あり。
夜もすがら、心ねむらず、
くるしさにわれは眼をとづ。

秋の落葉

われらの心おとろへて
散りしく秋の葉に似たり。
青く澄みたる夕空は
木の間の奥にまたたきぬ。

秋の落葉は小止みなく
心の底に舞ひ落ちぬ。
吹く夜風や、わが胸の
夜の思をなぐさめん。

想の廬

若しや汝、若立の緑をわけて、
森ふかき泉のほとり、ほそぼそと
灯のともる草の廬にいたりなば、
旅人よ、汝が足の音をひそめよ。
うつそみのわれをいとひて遁れたる
想こそ清く住むらめ、ふるさとの
大原や野山のはてを侘びくらし、
こよひはた何處にあらん、月あかり、
そのかみのリディアの原を照らすとも、
すだきよる蟲の音のひとつひとつに、
笛吹きて辿り行くとも、えやは知るべき、
この世にはかへらざる想の廬。

藥艸

翁あり。
ほのかなり。
月あかり
遠白み、
ただひとり
うつむきて、
藥艸を
刻むなり。



生田春月篇

ロオザ・ルクセンブルグ　春の讃歌　自由の歌　道化者の詩
時代の戀　勞働爭議、家庭爭議　狼　雲　花のばら

ロオザ・ルクセンブルク

ロオザは薔薇よ、薔薇なれど
サロンの、戀の花ならず、
強權を刺す刺の花、
自由の愛に血と咲いて
嵐には散る鐵の花。

波蘭の日、瑞西の日、
獨逸の社會民主黨を
制せむための假りの結婚、
ただ名ばかりよ、その夫は
ただ自由のみ、平等のみ。

健氣なるロオザはうれし、
その血もて藝術を書き、
詩を愛し、詩をば生きたる
ロオザは深き學者なれども、
闘ひの女、希望の女、

わがロオザ・ルクセンブルク、
いまだ生くべき道知らぬ
この國の少女あまたに、
正しく強く生くる道、
君よ教へよ、その血もて。

春の讃歌

人の世の春を踏みゆく春の足、
春の素足は夢のごと、
緑の中に舞ふ花、
生命の泉と溢れつつ。

大地は銀の盃よ、
あふるるものは生の酒。
醉へばぞ歌ひ、歌ひては
をどりも狂ふ春の人。

罪としいふな、たはれとも、
春のいのちに舞ひ狂ふ、
狂ふは罪か、めでたきを、
ただ擧げよかし、春の足、

うちひそめけるささやきも
かがやく空にこだまして、

破るることなき怨ひすら
しづけき涙となりはつる。

白きただむき、白き足、
揺れつつゆけぞ風の歌、
ああ、命なればふるはかし、
罪もあらでこそ生の命。

自由の歌

若き日本は火となれよ、
これぞ初戀、狂はしく
ただ抱かむと嘴を立つ、
愛する女、自由なれば、

ただ抱かまし、その女、
すらりとのびしその身體、
愛を捕しる処女の笑み、
追へば逃げて、爽かなれし、

鎖で、綱で、鐵も、火も、
いまでこの身をとどめえむ。
この戀いかでとどめえむ、
はじめの接吻に死ぬとても。

いかに愛は遠くとも
たたかへよ君が、汝まで。
生ぜば小さき蹟すらも
大なる影響となるものを。

自由よ、自由、君がため
いざ起て、若き日本の子、
愛する自由のためならば
身はとらはれに死ぬとても。

道化者の詩

獅子がピエロになりました、
さても不思議な事もある。
末世末法、世はさかさまよ、
ただの不思議があるものか、
獅子は獅子でも、越後獅子、
越後の國の角兵衛獅子よ、
獅子よ一本つて、ひつくりかへつて
ちよいとまれば、ピエロ候。

金澤の名人八十吉つくる唐獅子の
きつかりふんだ四つ足のたしかさ、
その獅子鼻もいつしかとして、
きつと睨んだその眼の力、
これがわれわれちやと、荒野を驅る
われも一度は獅子であろ
獅子と見えたはその日の迷ひ、
實はピエロでございます。

鈴つき頭巾、赤頭巾、
腕の紫つなぎのメリンスの
チャンチャンコ、襟も、袖口も
眞紅な紙の前だれり。
頰に頰紅、べつたりまろし、
鼻のあたまにおしろいつけて
一人前のピエロが出来ました。
さあさ、踊つたり、踊つたり。

牡丹にたはぶれ、獅子の舞、
それは長唄、おれはいま、
おまへの十八番は何だつた、
ハイネ、ワグナー、毛唐流、
[illegible]
ハンネイムでやりました。

目にたつては、[illegible]、
コロンビイスは豆鐵砲。
獅子[illegible]あアをいた、
ピエロの頬つぺた眞赤いな。
獅子舞獅子は息さへ荒く、
あなたーならば、こなたーならば。
ピエロはなよつくり、かよつくりに、
コロンビイスはあかんべい、いいい。
それでもピエロは面白相、
涙を出して笑ひます。
泣いたときよりもつと出る
涙はピエロの血だものを。

時代の戀

急行列車の戀をする、
西と東と、かけ持ちに。
會へば別れる、さつぱりと、
別れれば呼ぶ、その日次。

シネマ・ファンの戀をする、
なつかしの圖、夢のひと、
クララ・ボウのおでんにも、
こ[illegible]。

舶來文化の戀をする、
あらむ限りの歡待に
鑵をあけたら、それつきり、
五彩しまつた鑵の食卓。

マルクス・ボオイの戀をする、
階級鬪爭、共産主義、
その戰術よとごまかして
剩餘價値の戀をする。

勞働爭議、家庭爭議

勞働爭議、家庭爭議、
後の方の爭議がなほむつかしい。
或る家庭では、爭議の果てに
[illegible]、
おれは頭を剃つて坊主になる、
まるで坊主になりさへすれば
まるくをさまる世のやうに。

[illegible]、
折れて[illegible]、
[illegible]
坊主になるとはそりや[illegible]、
シンネリ[illegible]、
いまさらの青[illegible]心[illegible]何になる、
昔坊主もなか[illegible]しい。
頭を剃るとは煩惱を[illegible]いふ事、
坊主になつたとて、[illegible]に
行ひすまして[illegible]。

頭を剃つて坊主になる、
男の逃道も昔はあつたものを。
今はお寺さへ、商賣上手、
俗より俗は上手なものを、
なまの生臭、[illegible]、
その發心は嘘いかな
いまさらさらこ、俄坊主、
いつそ頭をもつとのばして
主義者となつて、主義者面、
西部戰線をノッシノッシ歩かうか、
手にはハンマー、唯物史觀、
頭をのばして主義者になるか、
男の逃道、今はこれだよ。

坊主頭と、長髪と、
髪は伸びよか伸びまいか、
迷つて横に縮れ出す。
髪はないよりあるがまし、
煩悶、執着、あるがまし、
髪をのばし、鬚をのばし、
意欲、権利を高揚し、
奪はれたものを奪ひかへす、
これが人間、闘争は人の宿命、
髪を剃つても生えるぢやないか。

労働争議、家庭争議、
後の方の争議がなほむづかしい。
或る家庭では、争議の前に
いつでも男は叫んで云ふ、
おれは頭髪を伸ばして主義者になる、
労働争議がもつと楽だからな。
女は青菜に塩かけて、それはまつぴら。

狼

冬の夜は
寒さきはまりて、
空はみえわたる碧色に徹り
みがかれたる星は、狼の眼のごとし。

人の心は
考へきはまりて、
頭は冴えたる碧色に徹り
みがかれたる一念は狼のごとし。

白銀の雪上
駈けらむとする狼よ、
われらしばしば狼たらむとすることあり。
孤獨の勇志ふるひ立つことあるなり。

雲

大空をただよふものと
見てやまむ、
とどまりがたく
鎮まりがたく、
山の上の
石には似ざる人心。
生くる身なれば、
雲のごと
鎮まりがたく
ただよひて。

花うばら

土橋かかれる細谷川に
目もさやかなる花うばら、
その白いこと匂ふこと。
野にさいてちる花うばら、
眞實しづかな
花のそなたがうらやまし。



富田砕花篇

映像

夕かぜにうかびただよふ
名づけがたきおもひ、
あきらかならず　消えもせず、
唯、唯、そことなく灯をめぐる短き夏夜の蛾のこころ——。

はかなきは蛾の命のみとぞはむや、
さはれその呼吸のかぎり飛ぶよ、舞ふよ、
やはらかなる夕の空氣の中、
翅はいみしき調を发づ。

——までもその調の断續——
蝶に病めるものの呼吸のごとく
夕かぜにうかびただよひ
——織るは怪しき夢、夢。

失はれたる Alpha と Omega

『思念』生命を與へられ
動く、動く。
——ここは雲霧漠々たる天空界、
生きたるものも形態を有たず
死にしものもただ呼吸を絶たず
ただ漠々たるなかに閃きの如く手を執り交す。

『思念』の翼翔けゆくほどに
前途は次ぎ起る迷霧に失はれ
空しき一方に向ひて
——流れゆく。
誰れか知らむ、むなしきなかの一瞬、
『思念』の休息所を。

迎秋篇

われに親しきものとては、
棚の姫と秋の大氣のみ、
孤獨にして冷たき言葉を囁く
秋の子の[illegible]
形なき仇敵との闘爭に
身も心も傷きはてて

茫然と佇みつくすわれに
親しきは秋の大氣、慰めむとてや寄する秋の
手の脣。

溫い言葉に飢ゑてゐる群れ

「どうぞ、ゆつくりお匂ひ下さい！」
……私どもは、どんなにこの言葉に打たれた
ことだつたらう！
僅かのこれらの言葉に、
花屋の奧さん……
私どもはこんなにまで溫い言葉に飢ゑてゐ
るんです。

秋ももう可なり闌けた頃の雨あがりのあとの
夜だつた、
私ども巷の放浪兒は、
いつものやうに俛かず語り合ひながら見知ら
ぬ街のとある花屋の鋪頭にさしかかつたの
だつた、
街路樹の三角楓は呪符のやうに枝のさきにわ
づか散り殘り、
街燈は、群れを離れた魚のわびしさで、枝頭
に風もないのにはためいてゐる……
そのとき！
誘はれるともなく紅葉とりどりの色彩のなか
の純白の花からの妙たる匂ひに
足をとどめさせられた、
そしてお互に相顧みた……
「いい匂ひだなあ！」
「うむ！」
私どもの間に短い沈默の時がかゝめるやう
にあつた……。
「どうぞ、ゆつくりお匂ひ下さい！」
氣がつかなかつた私どものうしろに
乳兒を守りしてゐるひとの聲だ、
驚きましたよ、奧さん！
そして私どもはどんなに感激したでせう、
奧さん、
可笑しいですか？
私どもは淚をながさないばかりに感激したん
です！
花屋の奧さん、
あなたの偶然の僅かのそれらの言葉は
私どもに幸福の世界をかへして下さつたん
です、
おわかりになりますか?!
是非わかつて下さい、そして受けて下さい
私どもの感激から溢れ出る感謝の言葉を！
ああ
私どもその夜の眠りの幸福だつたことよ！
私どもがこんなにまで溫い言葉に飢ゑてゐ
ると誰れが知らう?!

幻の墓

私はいつも幻の墓を描く、
氷河をその裾に捲く
尖峯の絕巓に、
大概の日の明け暮れは
氷霧によつてその墓がまかれてゐよう、
稀に晴れた日の朝なれば
それは薔薇色に包まれてあらう、
また惠まれた日の夕暮なれば
亡靈を想はせる黃褐色に
空しく流[illegible]
空間に懸[illegible]
燃え滾るた[illegible]
悠久の[illegible]に[illegible]つて

誰にかける言葉は
[illegible]たは健康に恢るんでゐるか、
闘病の[illegible]の
生活から[illegible]
草土[illegible]に[illegible]やうに
程なく[illegible]は
村[illegible]の時間に
その[illegible]を無限する。

夕の祈禱

園鳥、
けふも、その黄金の翼ひろげて
静かに祈禱をしてゐる、

空の碧さすゑて、
いま、ほのお色の匂ひ
たたかひの人よ、心ではらく。

変ず、傷くれさてゐる
指をおとはし保樹の枝をにも
露けさ祈禱は遠げられたり。

現に即けるものの最も小さき
願ひ、——明日の日もまた平安を
與へたまへ、と。

五月の歌

旅人は草を藉いて
長い息をのみ込んだ、
——瞳は遠く
かぎりもない山脈が
紫の花のやうに咲き簇つてゐる
五月の空の
匂はしい邦の
幻想へと吸はれてゐた。

彼れの心は
胸をふるはせる喜びの日の追懐も、
凍てつく冬夜の
寂しい街頭の彷徨も
この時、傷手として殘るには、
あまりに晴れ晴れとしてゐた、
たとひ快い憂鬱の影が
まるで無いとは云へなかつたにしても。

旅人には
いま、身と心とをつつむ青草の香と、
想ひを通はせる
遠く、遠くはてしなく流れる山脈と、
匂はしい空とが
夢のなかの實在として蔵つてゐるだけであ
る。

鞍上に哄笑するもの

地に歸るものは歸りはてた——
萬象は苦熱に喘ぎ、
あらゆる運動は、
——瞬時、
釘付けにされて停まつた。
苦惱の地、
すべてから解き放された恣しいまゝなものに
　とつては
苦惱そのものがすでに至大な歡びで、
躍り上れ、

躍り上れ、
今こそ
私たちは歡びの飽滿者だ、
嘗ては、
君が産むあらゆる惱みも苦みも
この日、歡喜に淨化されて
君からへに烙きつける
我れと我が身の姿相を、
仰げばそこには苦慘な地と相照應して
永遠の焰の泉が
燃え躍り狂ひ
噴き舞ふ。

夏、
高處から被掩を剝ぐ力の賦與者、
我々が虛僞と罪惡の鎔鑛爐、
淨化の煉獄よ、
　永遠に呪はれたものすら芽を出る季だ、
植物といふ植物は濡れたやうな綠を着た、
今だ、
内へ、内へと探り進めた思索の踏步を
外へ、外への疾驅に代へて
躍り出ろ、
躍り出ろ、

女よ、
人々よ。
そこに君たちを待つものは
一團の火の塊の神馬だ、
おお友よ、君も乘れ、君も乘れ、
誰一人として拒否されてはならないぞ。
此處に、
我れらのまへに涯もなく展けた
競場の、
見るからに心を躍らすではないか、
誰れ擧げるとなく一齊に鞭を擧げる、
神馬の疾驅は
乾板の感光よりも迅い、
飛べ、翔けれ、おもふままに、
そして鞍の上に人々は、次の瞬間に現實に根
　を下すべき希望を
振り落されぬやうに緊つかりと掴んで哄笑を
　つづけてゐる。

自主の峰

私の持つてゐる峰だ——「自主」の峰だ、
狂ひ叫ぶ子供ながら歡聲を
吹き散らし、吹き散らす嵐よ、
何處に暴れて行かうとする嵐だ、
私のよろこびを何處へまで傳へようとするの
　か、
嵐、嵐、
私自身もいつかそれであるやうに
あらゆるもののうへを躍つて渦く。
魔の力を渦き、渦いて過ぎる嵐、
その眞ただなかに、根こそぎ
さらはれさうになりながらも、
何んといふその彈力性ぞ、
草と樹とは髮を振り亂して鬪ふ、
それから、
喘ぎながらも雄々しくみづからを
嵐のなかに曝露してゐる「自然」、
「自然」の一切、
そのうへに君臨してゐる峰だ。

言葉

この日、私は
燃ゆる太陽に向ひて

大空のかなた
あを輝く。

人は賑やかにて
あるかなきかの燈火を
土に精魂をつつ、散役れつつ。

すべて終なき営みは
さびしけれども
力に溢れ満ちたり。

極北の頁

いたらしく痛ましい霊魂よ、
君は何處へかへらうといふのか。

視野の一切は
灰色の霧のなかに踊る渦つてゐる交響樂で、
ジインといふ空洞のなかで木霊が
はてもなく揺曳してゐる大きな空虚の世界
だ、
その透明な水晶體の沙漠のうへにこぼされ
た

黒熊の[illegible]た人間が、
[illegible]て、[illegible]て、
答へるものはただジインといふ木霊だけなの
だ、ただジインといふ……。

それはそれでいい、
だが、（君は想像を中断してはならない）
水晶體の巨大な凝體で、
人々の焚き棄てた熱し木の灰のなかから、
翼馬の迅速さで駈け昇つたものがある、
さうだ確かに駈け昇つたものがある、
そしてぴたりと帆船の大檣の突端にひつつい
た、
それは形體の無いものだ、
だが人々は現實にそれを見た、
そして燃え上つた、
今し方、彼女の亡骸をメフィストの舐めつくし
た火は、
まだはつきりと人々の眼に焼きつけられてゐ
た。
人々は黙つて錨をあげて
帆走る、帆走る、
噫、巨萬の富に代る[illegible]の獲物を[illegible]も

なく、[illegible]
[illegible]
人々は海洋のほどは忘れた、
一心に[illegible]、[illegible]、
また幽かな響のやうに、
なかに遠い遠い港の灯を想ふことが
彼れらに郷愁を感じさせるやうになると、
一切合切が胸のなかに蔵はれてゆく……。

いまこそ淋しい霊魂よ、
君たちは何處へかへらうといふのか。

胡地の夕

黒煙で、從順な家畜は
はげしく、思郷の念ひを湧きかへらせ、
夕空に、
嘶ふるはせて、啼く。

旅人は、
いま、
胡地の夕風に
涙をのむ。

おお、腕を拱いて湧き泡だつ
この世界！
自分は、これを否定しなければならない、
これを振り捨てなければならない旅人であ
る。

歴史は、乾き切つた沙漠に流れ、
風物はただかれら
徒らにその吸盤を
人は伸ばす。

たとへば
ここにして、一日の行動のはての
風雨に爛れつくした市場の土塀、
その土の色と黒焦した瀬をもつ稀に薄い住
民！

たとへば
ここにして、清く純ませた自然
——それ故にこそ
ひとを用ゐた時間の余情！

ゆゑには

ここにして、魂をさへ凍らせて
物品のなかから
倫を抜ける種族！

愚鈍で、從順な家畜と
旅人の
姿が、長く、淡く
灼きつけられる……
かぎりない平沙の海の一點。

無爲の祭司

深く、大地に根を下した
一本の立樹のやうな、耕人、
君の姿は
あらゆる主張を超え、
あらゆる論議を後退りさせる。

いま、
此所に立ち私の聴いて来るものは
ただ運命たる黄褐色の平野だけで、
深く冬眠に入つてゐるからは
それを前にした肉體は無心である。

乾き涸れた沼地！
多彩な興亡史を嘲笑し、
音も響かない單調に遷りつつして
押し黙つてゐる黄褐色の平野！

いまは冬である、
そこに、大地から生え抜けたやうな
耕人、君の無爲の立姿にこそ
大自然は頽つて動かない。

おお、一切の文明よ、
それは手を拱いてゐねばならない、
この黄褐の大祭壇は
それ自身が四時の營みをする。

無爲の祭司である耕人に、
そして樹に線を萌やし、
秋の収穫を贈る
祭壇ではないか。



室生犀星篇

寂しき春　海濱獨唱　櫻と雲雀　上[illegible]　かもめ　砂山[illegible]　永日　罪業は
る　櫻咲くところ　朝の歌　夕の歌　[illegible]　自分の下宿　[illegible]
と家家と恵方　永久に　小さい家庭　都會の春　郊外は[illegible]　[illegible]
神神　上陸　切なき思ひぞ知る　[illegible]　家庭　何者ぞ　君こそ　[illegible]
情熱の射殺　人家の背景　女[illegible]　[illegible]の中に[illegible]

寂しき春

したたり止まぬ日のひかり
うつうつまはる水ぐるま
あをぞらに
越後の山も見ゆるぞ
さびしいぞ

一日もの言はず
野にいでてあゆめば
菜種のはなは
遠きかなたに波をつくりて
いまははや
しんにさびしいぞ

海濱獨唱

ひとりあつき涙をたれ
海のなぎさにうづくまる
なにゆゑの涙ぞ青き波のむれ
よせきたりわが額をぬらす
みよや濡れたる砂にうつり出づ
わがみじめなる影をいだき去り
抱きさる波、波
哀しき波
このながき渚にあるはわれひとり
ああ　われのみひとり
海の青きに流れ入るごとし

櫻と雲雀

雲雀ひねもす
うつらうつらと啼けり
うららかに聲は櫻にむすびつき
櫻すんすん伸びゆけり
櫻よ
我がしんじつを感ぜよ
らんまんとそそぐ日光に、ひろがれ
あたたかく樂しき春の
春の世界にひろがれ

土筆

[illegible]
[illegible]に尚さす
い[illegible]つくし
摘まむとしつつ
[illegible]
また[illegible]淺くして
あたま[illegible]しきつくつくし
指は[illegible]一心に土を掘る

かもめ

かもめかもめ
去りゆくかもめ
かくもさみしく口ずさみ
渚はてなくつたひゆく
かもめかもめ
入日[illegible]
[illegible]
あはれみやこをのがれきて
海のなぎさをつたひゆく

時無草

秋のひかりにみどりぐむ
ときなし草は摘みもたまふな
やさしく日南にのびてゆくみどり
そのゆめもつめたく
ひかりは水のほとりにしづみたり
ともよ　ひそかにみどりぐむ
ときなし草はあはれ深ければ
そのしろき指もふれたまふな

永日

野にあるときもわれひとり
ひとり　たましひふかく抱きしめ
こごゑにいのり燃えたちぬ
けふのはげしき身のふるへ
空もみどりを震はせておそるるか
われはやさしくあらねども
わがこしかたのくらさより
さいは[illegible]
[illegible]
いたいた[illegible]
血みどろになののけど
たふとや、われの生けること
なみだしんしん湧くごとし

罪業

自分はいつも室に燈明をつけてゐる
自分は罪業で身動きが出來ない氣がするのだ
自分の上にはいつも大きな
正しい空があるのだ
しまひには空がずり落ちてくるのだ

はる

おれがいつも詩を書いてゐると
永遠がやつて來て

ひたひに何か知らな[illegible]つて行く
手をやつて見るけれど
すこしのあとも殘さない素早い奴だ
おれはいつもそいつを見ようとして
あせつては手を焼いてゐる
時がだんだん進んで行く
おれの心にしみを遺して
おれのひたひを何時もひりひりさせて行く
けれどもおれは詩をやめない
おれはやはり街から街をあるいたり
深い泥濘にはまつたりしてゐる

櫻咲くところ

私はときをり自らの行爲を懺悔する
雪で輝いた山山を見れば
遠いところからくる
時間といふものに永久を感じる
ひろびろとした眺めに對ふときも
鋭角な人の艷麗がにほうて來るのだ
艷麗なものに離れられない
離れなければ一層苦しいのだ
その意志の方向を先廻りすれば
もういちめんに櫻が咲き出し
春淺い山山に
まだたくさんに雪が輝いてゐる

朝の歌

こどものやうな美しい氣がして
けさは朝はやく起きて出た
日はうらうらと若い木木のあたまに
すがすがしい光をみなぎらしてゐた
こどもらは喜ばしい朝のうたをうたつてゐた
その澄んだこゑは
おれの靜かな心にしみ込んで來た
何といふ美しい朝であらう
何といふ幸福を豫感せられる朝であらう

夕の歌

人人はまた寂しい夕を迎へた
人人の胸に温良な祈りが湧いた
なぜこのやうに夕のおとづれとともに
自分の寂しい心を連れて
[illegible]
また明日へめぐりゆくのであらうか
かの高い屋根や並木の上に
けふも太陽は昇つて笑みかけてゐた
それがそのままに人人の胸に殘つた
人人は夜半の茶卓の上で
深い思索に沈んでゐた

未完成の詩の一つ

赫赫しい夕燒
そのしたにぎつしりつまつた街と家家
それを見てゐると疲れてくる
そこから何が映つてくるか
そこから自分の心にしみ渡つてくる
夕ぐれどきのもの賣りのこゑごゑ
あはれな時雨のにほひにまざつた
いろいろな生活のこゑごゑ
窓にもたれて自分はそれを聞いてゐる

自分の本道

自分はいま本道を歩いてゐる
わき目もふらず行くところに
行き到らうとしてゐる
自分は生活をいとなみ
不安をつくろひつつある
義務の感激に圧倒されつつある
生死の[illegible]ばに立つて
[illegible]に[illegible]を[illegible]り行きつかうとしてゐる
自分は前[illegible]に
[illegible]い道を[illegible]てゐる
上から来りかかつてくるものと
下から来りかかつてくるものと
その一撃はいま[illegible]小さい心をせめ
のしかかつて来る
僕は[illegible]な[illegible]にふれあらうとした
[illegible]
[illegible]を[illegible]とした
日[illegible]がかへてみた
[illegible]た

僕の胸は安まることなく
僕の安らかさはいつもあと戻りする
火の[illegible]をもつて[illegible]る思ひで
たえまなく浮き上らうとする
進まう進まうとしても
押しもどさうとする
何処からとなく圧してくる宇宙だ
額を重くしてくるものの生きてゐる宇宙だ
ああ 總ての全生活のどよみだ
よこにも たてにもふれむけない歩みを歩ま
せられる
たぎる焦心をもつて
あるたけの力をもつて
高い峰と地盤とに自分はゆきつかうとする
本体と価値とのさまざまな悩みに
日夜心は締めつけられる

街と家家と遠方

この菜の畑も
畑土の盛り上つた心持をも
いまはこれまでにない親密さをもつて
眺めることが出来る
一直線につづいた[illegible]畑は
ところどころに冬枯れの
[illegible]を[illegible]してゐる。
ごぼごぼいふ小川の水
これは又生れて初めて聞く小川の音だ
この[illegible]しい流れやうは!
どこまでも流れてつきない
此の微妙さはどうだ
いつまでも無限に
くさむらを分けてゆく
[illegible]たからだ[illegible]しい[illegible]たるもの
おれは[illegible]
これら[illegible]今[illegible]かけたことを[illegible]

永久に

「永久にかうして行きませう!
一つの[illegible]をとりあつて行きませう!」
カフマ[illegible]
コーリ[illegible]
自分は[illegible]
たとひ[illegible]人間にな[illegible]

[illegible]い人間に生長しても
おたがひに[illegible]して遊んだ少年時代を忘れない
で
たつた一これだけを忘れないで居ようと
みんな少年等が誓ひ合ふところで
自分は僕も彼も忘れて涙を出した
ああ永久にさうして行きませう！
一生涯手をとり合つて行きませう！」

小さい家庭

僕はいま小さい家庭をつくりかけてゐる
まるで小鳥の巣に似たやうなものを
自分は毎日
二つの心を持ち合つて
一枚のまづしい蓆を編むやうに
たてとよことの絲を振り合せてゐる
自分はこの小さい家庭を愛する
この小さい家庭にまだ幸福は來てゐない
平安が宿つてゐない
秩序がない
けれども生命に充ちてゐる

温かい日常の心はうるはしく澄んでゐる
自分をそこなふものとは戰ふ
自分を愛しないものには愛[illegible]やうにする
いやな世界とも戰ふ
眞實でないものとも戰ふ
自分のこの小さく優しい犧牲の精神は
自分にとつて永い味方であり
自分を鍛ふべききびしい味方だ
土を掘るやうな[illegible]しさと
胸打つ鼓動を感じ合ひながら
少しづつ築き上げ
また盛りあげてゐる

曉明がくるとともに
ぱちぱち燃える薪の音がする
空では星がきえ初める
僕は起き出てそれに從ふ
この世の愉快たくるしいどよみに從ふ
机の上には塵も見えない
書物はみな一つ一つに呼吸をしてゐる
あついペエチの羽ばたきをする
妻は木綿の朝のきものをきて
もう猛り立つ犬と庭で遊んでゐる

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

郊外の春

朝と晩と若い木木の[illegible]の
その[illegible]しさは
まるでよい音樂をきいたあとの
冴へきつたあた[illegible]
あれらのそれぞれもつた[illegible]さ！
春はあさい深い[illegible]たる色を生みつける
人間の心にまで生みつける

若葉は燃える

僕の室の前にも
幹の良い木木しい若葉[illegible]
風か波かしら美しさは限りない
みな生きてゐて鮮やかすぎる
心も胸も[illegible]るのだ

呼吸の新しさ！
喜ばしさ！
私はこころから
樂器をかかへて力いつぱいに彈く
彈かれゆく音いろに心を澄ましながら
若葉のそよぎをかんじながら
いとまある一日を送る

詩歌の城

詩や俳句を一しきり輕蔑してゐたが
このごろ仲仲好い味のあることが解つた
一日に十枚文章をかいてゐても
詩や俳句が一行一句もできぬことがある
詩や俳句の王城は誰でも敲けるものではない
詩や俳句の城へ入るものは
その城の中の庭や金銀の居間を知り
その居間に坐る儀禮を知り
弓や矢や盾を把り
宮殿に[正しく入る術をしらねば]ならぬ
[自分はもう何千枚書いてゐるか]知らない
自分で[努めたさへでも]空しとする

しかしまことの詩は何もかけてゐない
何千枚何萬枚書きつかれたあとで
數行の詩や俳句を戀ひ慕ふことの嬉しさ
わが心いまだ腐らずにゐる嬉しさ
自分はへとへとになりながら
眞個の心は城の中に目ざめてゐる

神神

枯木の姿はよい
色はみんな沈んで幹を包んでゐる
引掻いたら紫が滴れさうだ
しかも蕭條と頂きの枝が空へ消え入るところ
その細細しい姿で立ちつくすところ
花もなく夢もない露はなところ

王座

雲の山が美しい
重り合って續いてゐる
山と山とつらなりあって
それ一番高い峰が見下したところに

低いのや平なのがあり
高い山の王座をまもつてゐる
日が一面にあたると神神しくなる

切なき思ひぞ知る

我は張り詰めたる氷を愛す
斯る切なき思ひを愛す
我はその虹のごとく輝けるを見たり
斯る花にあらざる花を愛す
我は氷の奥にあるものに同感す
その劍のごときものの中にある熱情を感ず
我はつねに狹小なる人生に住めり
その人生の荒涼の中に呻吟せり
さればこそ張り詰めたる氷を愛す
斯る切なき思ひを愛す

晴れ間

美しい[空が山に晴れ上つ]た
どこからどこまでも美しい
そしてやさしく憂鬱な自分に[まつはりつい]た

間もなくからりとした顔になつた
庭を撥つて忘れてしまつた
美しい女といふものは忘れやすいものか
あんまり長い間父上に見とれたら
折角の人生がたいくつになるだらうに
橋をわたりわが子のそばへ駈つてゆく
わたしの心がからりとしてゐた
この瞬間よ
わが子の美しさよ
わたしはとつとつとあるく

家庭

家庭をまもれ
悲しいが樂しんでゆけ
それなりで凝固つてゆかんだら
ゆかんだなりの美しい實にならう
家庭をまもれ
百年の姿もみんな同じく諦め切れないこと
　だらけだ
悲しんでゐながらまもれ
家庭を脱けるな
ひからびた家庭にも返り花の時があらう

まぞそれだけはまもれ
この苦しみを守つてしまつたら
實に[illegible]にならう

何者ぞ

何者か崩れたり
我が中にありて閉ぢられしもの崩れたり
かれらみな殻を裂けて叫び出せり
桃の實のごときもの割られたり
星のごときもの光り出せり

老乙女

我は詩を抛たむとす
我はもはや詩人にあらざるかを思ひ惑ふ
我は立ち出でて天地を四顧せり
枯れたる木木を眺めぬ
美しき彼女らの微笑を手摑みにせり
我は埃と烟との塊にある街を眺めぬ
斯て我はなほ詩人にあらざるかを惑ふ
我に最早新鮮なる言葉なきかを思ふ

我が詩篇に[illegible]は
我こそ[illegible]を與へよ
滅びゆく美を與へよ
いま一度寶を[illegible]
寒流を[illegible]
いま一度會はしめよ
老いたる乙女のこと[illegible]

埃の中

或日道りを[illegible]
一列の[illegible]行けり
そのあとに[illegible]子供ら[illegible]行き
我が子の[illegible]
かく彼女は埃の中を行き
自ら其の[illegible]
その虹の[illegible]
望しき埃の中に[illegible]

情熱の射殺

自分は結果に於て恐ろしいことになるので

仕方なく引鐵を曳いて
自分の中にある熱情を射殺した
彼は何者かに擁かれたまま
鳶のやうに寂しく屋根の上から轉がり落ちた
そして熱情と別れた自分は
冷たい巖窟のやうなところに
硝煙をあびたまま喪失者のやうに佇んでゐる——

人家の岸邊

己は思ふ
冬の山山から走つて出る寒い流れが
海を指して休む間もなく
我我の住む人家の岸べを洗つて過ぎるのを思ふ
人家の岸邊に沿うて瓦やブリキや紙屑が絶えず流れてゆく
海はかれらを遙か遠くに運ぶであらう
波は知らぬ異境に瓦やブリキを打ちあげて
行くだらう
そこにも人は住んで岸べにむらがり
瓦やブリキを拾ひ上げ打眺めるであらう
我我の現世と生活は解かれ記されるであらう
その波はまた我我の人家に捲き返し烟れる波を上げ
遙かに戻り來るものの新鮮さで
我我を呼びさますであらう
我我は答へるであらう
そして彼等の言葉であるところのものを
朝日の耀く岸邊に佇み讀むだらう

友情的なる

此の日雪降れり
此の日我心傷せり
此の日我出で行かむとはせり
何者かに逢はむ望を持てり
何者かに、——
何者かに留めがたき友情を感ず
友情的なる標渺を感ず
此の日雪降れり
友情的なるものを痛感せり
雪の中に我出で行かむとはせり

己の中に見ゆ

我はくろがねの扉の前に佇めり
我はひねもす其扉を噛れり
或は爪をもつて引掻き穴をあけむとせり
くろがねの扉に血のごときもの垂れたり
その響は雛するごとし
我は飽くことなくその扉を叩けり
動かざるものを動かさむとはせり
扉の奥に何物のあらむや
何物を得むとするや
我は恐らく生涯これを叩かむとす
叩き破らむとす
身をもつて耐へむとはせり

萩原朔太郎篇

かなしい遠景　悲しい月夜　猫　ありあけ　春夜　陽春　くさつた蛤
よ　海[illegible]　[illegible]の相似　憂鬱なる花見　夢にみる空家の庭の秘密　悲しい
出[illegible]　艶めかしい墓場　[illegible]色の情　[illegible]しい囚人　憂鬱な風景　野鼠　[illegible]や
らしい景物　閑雅な食慾　[illegible]　風景の内殻から　猫の
死骸



かなしい遠景

かなしい薄暮になれば
勞働者にて東京市中が滿員なり。
それらの憔悴した帽子のかげが
市街中いちめんにひろがり
あつちの市區でもこつちの市區でも
堅い地面を掘つくりかへす。
掘り出して見るならば
煤ぐろい嗅煙草の銀紙だ。
重さ五匁ほどもある
にほひ菫のひからびきつた根つ株だ。
それも本所深川あたりの遠方からはじめ
おひおひ市中いつたいにおよぼしてくる。
なやましい薄暮のかげで
しなびきつた心臟がしやべるを光らしてゐる。

悲しい月夜

ぬすつと犬めが
くさつた波止場の月に吠えてゐる。
たましひが耳をすますと
陰氣くさい聲をして
黄いろい娘たちが合唱してゐる
合唱してゐる
波止場のくらい石垣で。

いつも
なぜおれはこれなんだ
犬よ
青白いふしあはせの犬よ。

猫

まつくろけの猫が二疋
なやましいよるの家根のうへで
ぴんとたてた尻尾のさきから
糸のやうなみかづきがかすんでゐる。
おわあ　こんばんは
『おわあ　こんばんは』
おぎやあ　おぎやあ　おぎやあ』
『おわああ　ここの家の主人は病氣です』

ありあけ

ながい疾患のいたみから
その顔はくもの巣だらけとなり
腰からしたは影のやうに消えてしまひ
腰からうへには藪が生え
手が腐れ
身體いちめんがじつにめちやくちやなり。
ああけふも月が出で
有明の月が空に出で
そのぼんぼりのやうなうすらあかりで
畸形の白犬が遠白く吠えてゐる。
しののめちかく
さみしい道路の方で吠える犬だよ。

春夜

淺蜊のやうなもの
蛤のやうなもの
みぢんこのやうなもの
それら生物の身體は砂にうもれ
どこからともなく
絹いとのやうな手が無數に生え
手のほそい毛が浪のまにまにうごいてゐる。
あはれこの生あたたかい春の夜に
そよそよと潮みづながれ
生物の上にみづたまがながれ
貝るゐの舌も、ちらちらとしてもえ哀しげなるに
とほく渚の方を見わたせば
ぬれた渚路には
腰から下のない病人の列があるいてゐる、
ふらりふらりと歩いてゐる。
ああそれら人間の髮の毛にも
春の夜のかすみいちめんにふかくかけ
よせくる、よせくる
このしろき浪の列はさざなみです。

陽春

ああ春は遠くからけぶつて來る
ぽつくりふくらんだ柳の芽のしたに
やさしいくちびるをさしよせ
をとめのくちびるを吸ひこみたさに
春は遠くからごむ輪のくるまにのつて來る。
ぼんやりした景色のなかで
白いくるまやさんの足はいそげども
ゆくゆく車輪がさびしくまはり
しだいに梶棒が地面をはなれ出し
おまけにお客さまの腰がへんにふらふらとして
これではとてもあぶなさうなと
とんでもない時に春がまつしろの欠伸をする。

くさつた蛤

半身は砂のなかにうもれてゐて
それで居てべろべろ舌を出して居る。
この軟體動物のあたまの上には
砂利や潮みづが、ざら、ざら、ざら、ざら流れてゐる
ながれてゐる
ああ夢のやうにしづかにもながれてゐる
ながれてゆく砂と砂との隙間から
蛤はまた舌べろをちらちらと赤くもえいづる
この蛤は非常に憔悴れてゐるのである。
みればぐにやぐにやした内臓がくさりかかつて居るらしい、

[illegible]
青ざめた海岸に坐つてゐて
ちらちらちらちらとくさつた息をするのですよ。

蛙よ

蛙よ
青いすすきやよしの生えてる中で、
蛙は白くふくらんでゐるやうだ。
雨のいつぱいにふる夕景に
ぎよ　ぎよ　ぎよ　ぎよ　と鳴く蛙。

まつくらの地面をたたきつける
今夜は雨や風のはげしい晩だ。
つめたい草の葉つぱの上でも
ほつと息をすひこむ蛙
ぎよ　ぎよ　ぎよ　ぎよ　と鳴く蛙。

蛙よ
わたしの心はお前から遠くはなれてゐない
わたしは手に燈灯をもつて
くらい庭の面を眺めてゐた
[illegible]
眺めてゐた

海鳥

ある夜ふけの遠い空に
洋燈のあかり白白と[illegible]てくるやうにしる。
かなしくなりて家家の乾場をめぐり
あるひは海岸にうろつき行き
くらい夜浪のよびあげる響をきいてる。
しとしととふる雨にぬれて
さびしい心臓は口をひらいた
ああ　かの海鳥はどこへ行つたか。
運命の暗い月夜を翔けさり
夜浪によごれた腐肉をついばみ泣きゐたりし
が
ああ遠く飛翔し去つてかへらず。

蠅の唱歌

春はどこまできたか
春はそこまできて櫻の匂ひをかぐはせた
[illegible]
はるやまを見れば白い浮雲がながれてゐる
さうして私の心はなにかを求めてゐる
いつもおとなしくひとりで遊んでゐる私の
こころだ
この心はさびしい
この心はわかき少年の昔より　私のいのちに
日影をおとした
しだいにおほきくなる孤獨の日かげ
おそろしい憂鬱の日かげはひろがる。
いま室内にひとりで座つて
暮れてゆくたましひの日かげをみつめる
そのためいきはさびしくして
とどまる蠅のやうに力がない。
しづかに暮れてゆく春の夕日の中を
私のいのちは力なくさまよひあるき
私のいのちは窓の硝子にとまりて
たよりなき子供等のすすりなく唱歌をきいてゐ
た。

憂鬱なる花見

憂鬱なる櫻が遠くからにほひはじめた

櫻の枝はいちめんにひろがつてゐる
日光はきらきらとしてはなはだまぶしい
私は密閉した家の内部に住み
日毎に野菜をたべ　魚やあひるの卵をたべ
　る
櫻のはなの醱えた匂ひはうつたうしい
いまひとびとは帽子をかぶつて外光の下を
　歩きにでる
その卵の肉はくさりはじめた
遠く櫻のはなは醱え
さうして日光が遠くにかがやいてゐる
けれども私はこの室内にひとりで坐つて
思ひをはるかなる櫻のはなの下によせ
野山にたはむれる青春の男女によせる
ああいかに幸福なる人生がそこにあるか
なんといふよろこびが輝やいてゐることか
いちめんに枝をひろげた櫻の花の下で
わかい娘たちは踊をおどる
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
かぎりなき憂鬱のなげきをもつてきこえる。
いま私の心は涙をもてぬぐはれ
閉ぢこめたる窓のほとりに力なくすすりな
　く
ああこのひとつのまづしき心はなにものの
　生命をもとめ
なにものの影をみつめて泣いてゐるのか
ただいちめんに醱えくされたる美しい世界の
　はてで
遠く花見の憂鬱なる横笛のひびきをきく。

夢にみる空家の庭の秘密

その空家の庭に生えこむものは松の木の類
枇杷の木　桃の木　まきの木　さざんか　さ
　くらの類
さかんな樹木　あたりにひろがる樹木の枝
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
それら青いもののさかんな生活
その空家の庭はいつも植物の日影になつて
　薄暗い
ただかすかにながれるものは一筋の小川のみ
　づ
夜も晝もさよさよと悲しくひくくながれる水の
　音
またじめじめとした垣根のあたり
なめくぢ　へび　かへる　とかげ　のぬたぬ
　たとした氣味のわるいすがたをみる
さうしてこの幽邃な世界のうへに
夜は青じろい月の光がてらしてゐる
月の光は前栽の植込からしつとりとながれこ
　む。
あはれにしめやかな　この深夜のふけてゆく
思ひに心をかたむけ
わたしの心は垣根にもたれて横笛を吹きすさ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

木の枝
なめくぢ　へび　とかげ　の不氣味な生活
ああ　わたしの夢によくみる　このひと棲ま
ぬ空家の庭の秘密と
いつもその謎のとけやらぬおもむき深き閑邃
のなつかしさよ。

恐ろしい山

恐ろしい山の相貌をみた
まつ暗な夜空にけむりを吹きあげてゐる
おほきな蜘蛛のやうな眼である。
赤くちろちろと舌をだして
いゝいゝ
うみざりがにのやうに平つくばつてる。
手足をひろくのばして地いちめんに這ひ廻つ
た
さびしくおそろしい闇夜である
がうがうといふ風が草を吹いてる　遠くの空
で吹いてる。
自然はひつそりと息をひそめ
しだいにふしぎな　大きな山のかたちが襲つ
てくる。
すぐ近いところにそびえ
怪異な相貌が食はうとする。

艶めかしい墓場

風は樹を吹いてゐます
どこにこんな薄暗い墓地の景色があるのだら
う。
なめくぢは垣根を這ひあがり
見はらしの方から生あつたかい潮みづがにほ
つてくる。
どうして貴女はここに來たの
やさしい　青ざめた　草のやうにふしぎな影
よ。
貴女は貝でもない　雉でもない　猫でもない
さうしてさびしげなる亡靈よ
貴女のさまよふからだの影から
まづしい漁村の裏通りで　魚のくさつた臭ひ
がする
その腸は日にとけてどろどろと生臭く
かなしく　せつなく　ほんとにたへがたい哀
傷のにほひである。
ああ　この春夜のやうになまぬるく
べにいろのあでやかな着物をきてさまよふひ
とよ
妹のやうにやさしいひとよ
それは墓場の月でもない　燐でもない　影で
もない　眞理でもない
さうしてただなんといふ悲しさだらう。
かうして私の生命や肉體はくさつてゆき
「虛無」のおぼろげな景色のかげで
艶めかしくも　ねばねばとしなだれて居るの
ですよ。

綠色の笛

この黄昏の野原のなかを
耳のながい象たちがぞろりぞろりと歩いてゐ
る。
黄色い夕月が風にゆらいで
あちこちに帽子のやうな草つぱがひらひら・
る。
さびしいですか　お孃さん！
ここに小さな笛があつて　その音色は澄んだ
綠です。
やさしく歌口をお吹きなさい
とうめいなる空にふるゑて

あなたの[illegible]をよびかへしてください
四肢一杯に[illegible]ひろがり
ひとつの[illegible]が[illegible]したいにおちかかついてくるやう
た、
それはせつない猫のやうで　墓場の草影に
ふらふらする
いつそこんな悲しい暗黒の中で　私は死んでし
まひたい[illegible]ん！

かなしい囚人

かれらは青ざめたしやつぽ[illegible]かぶり
うすぐらい尻尾の先を曳きずつて歩きまは
る
そして[illegible]　そいつの陰鬱なしやべるが泥土
を掘るではないか。
ああ草の根株は掘つくりかへされ
どこもかしこも曇暗な日ざしがかげつてゐ
る
なんといふ退屈な光景だらう
ふしぎな葬式のやうに列をつくつて　大きな
[illegible]
この[illegible]影だ
硝子のぴかぴかするかなしい野外で
どれも青ざめた紙のしやつぽをかぶり
ぞろぞろと蛇の卵のやうにつながつてくる
さびしい囚人の群ではないか。

憂鬱な風景

猫のやうに憂鬱な景色である
さびしい風船はまつすぐに昇つてゆき
い、い、[illegible]
り[illegible]た看た人[illegible]ちらちらと見えるではな
いか。
もうとつくにたへがたい闇だ
だれもこんな波止場を思つてゐやしない。
さうして荷揚機械のぼうぜんとしてゐる海角
から
いろいろさまざまな生物意識が消えて行つ
た。
そのうへ帆船には綿が積まれて
それが沖の方でむくむくと考へこんでゐるで
はないか。
なんと言ひやうもない
身の毛もよだつ　ぞつとするやうな思ひ出は
かりだ。
ああ神よ　もうとりかへすすべもない
さうしてこんなむしばんだ回想から　いつ
も幼な児のやうに泣いてゐよう。

野鼠

どこに私らの幸福があるのだらう
泥土の砂を掘れば掘るほど
悲しみはいよいよふかく湧いてくるではない
か。
春は幕のかげにゆらゆらとして
遠く俥にゆすられながら行つてしまつた。
どこに私らの恋人があるのだらう
ばうばうとした野原に立つて口笛をふいてみ
ても
もう永遠に空想の娘らは来やしない。
なみだによごれためるとんのづぼんをはいて
私は日傭人のやうに歩いてゐる
ああもう希望もない　名誉もない　未来もな
い。
さうして　とりかへしのつかない悔恨ばかり
が
野鼠のやうに走つて行つた。

厭やらしい景物

雨のふる間
眺めは白ぼけて
建物　建物　びたびたにぬれ
さみしい荒廢した田舍をみる
そこに感情をくさらして
かれらは馬のやうにくらしてゐた。

私は家の壁をめぐり
家の壁に生える苔をみた
かれらの食物は非常にわるく
精神さへも梅雨じみて居る。
雨のながくふる間
私は退屈な田舍にゐて
退屈な自然に漂泊してゐる
薄ちやけた幽靈のやうな影をみた。

私は貧乏を見たのです
このびたびたする雨氣の中に
ずつくり濡れたる　孤獨の　非常に厭やらし
　いもののやうです。

閑雅な食慾

松林の中を歩いて
あかるい氣分の珈琲店をみた
遠く市街を離れたところで
だれも訪づれてくるひとさへなく
林間の　かくされた　追憶の夢の中の珈琲
　店である。
をとめは戀戀の羞をふくんで
あけぼののやうに爽快な　別製の皿を運んで
　くる仕組
私はゆつたりとふほふくを取つて
おむれつ　ふらいの類を喰べた。
空には白い雲が浮んで
たいそう閑雅な食慾である。

蒼ざめた馬

冬の曇天の　凍りついた天氣の下で
そんなに憂鬱な自然の中で
だまつて道ばたの草を食つてる
みじめな　しよんぼりした　宿命の　因果の
　蒼ざめた馬の影です
わたしは影の方へうごいて行き
馬の影はわたしを眺めてゐるやうす。
ああはやく動いてそこを去れ
わたしの生涯の映畫幕から
すぐに　すぐに外りさつてこんな幻像を消
　してしまへ
私の「意志」を信じたいのだ。馬よ！
因果の　宿命の　定法の　みじめなる
絶望の凍りついた風景の乾板から
蒼ざめた影を逃走しろ。

佛陀

或は「世界の謎」

赭土の多い丘陵地方の
さびしい洞窟の中に眠つてゐるひとよ
君は貝でもない　骨でもない　物でもない。
さうして磯草の枯れた砂地に
ふるく錆びついた時計のやうでもないではな
いか。

ああ　君は「眞理」の影か　幽靈か
いくとせもいくとせもそこに坐つてゐる
ふしぎの魚のやうに生きてゐる木乃伊よ。
このたへがたくさびしい荒野の涯で
海はかうかうと空に鳴り
大海嘯の遠く押しよせてくるひびきがきこえる。
君の耳はそれを聽くか？
久遠のひと　佛陀よ！

ある風景の内殼から

どこにこの情慾は口をひらいたら好いだらう
大海龍は山のやうに眠つてゐるし
古生代の海に近く
厚さ千貫目ほどもある鯨の胴體が喘息し
てゐる
なんといふ鈍暗な日だらう
しぶきにけむれる岬岬の島かげから
ふしぎな病院船のかたちが現はれ
それが沈没した艦の艫をすべるやうに動いて
ほう　ここではいいか

ねえ！　お嬢さん
いつまで僕等は此處に坐り　此處の悲しい岩に
並んでゐるのでせう
太陽は無限に遠く
光線のさしてくるところに　ぼうぼうといふ
　ほら貝が鳴る
お嬢さん！
かうして寂しくぺんぎん鳥のやうにならんで
ゐると
愛も　肝臓も　いいいい　ぺしやんこになつてしまふやうだ。
もういきません！
もう僕には希望もなく　平和な生活の慰めも
ないのだよ
あらゆることが僕をきちがひじみた憂鬱にか
りたてる
へんに季節が情熱して
もう春も李もめちやくちやな妄想の網にこん
がらかつた
どうすれば好いのだらう　お嬢さん！
ぼくらはおそろしい孤獨の海邊で　大きな貝
肉のやうにふるへてゐる
そのうへ情慾の言ひやうもありはしない
これほどにもせつない心がわからないの？
お嬢さん！

猫の死骸

海綿のやうな景色のなかで
しつとりと水氣にふくらんでゐる。
どこにも人畜のすがたは見えず
へんにかなしげなる水車が泣いてゐるやう
す。
さうして朦朧とした柳のかげから
やさしい待びとのすがたが見えるよ
うすい肩かけにからだをつつみ
びれいな瓦斯體の衣裳をひきずり
しづかに心靈のやうにさまよつてゐる。
ああ浦　さびしい女！
「あなた　いつも遲いのね」
ぼくらは過去もない未來もない
さうして現實のものから消えてしまつた。……
浦！
このへんてこに見える景色のなかへ
泥猫の死骸を埋めておやりよ。

白鳥省吾篇

大地の鐘　種蒔人　花園のマダム　夜の雨　古代の夢　町の鐘
湖水の約束　桃色の風　朝鮮の女



大地の鐘

永遠の日々に
私は歩いてゆく、
私の全身を明かす夕日影。
夕日は大地を花園のやうに塗り
なつかしく嬉しく
大地はすぶるひ微妙に鳴りわたる。
永遠の旅人と
全身を輝かしつつ
永遠のまへに滅ぶるごとく
音を絶えてゆく。

夕日影に美しく輝かに輝きわたりゆくところ
大地はおのづから響きわたりて美しき響、
吐息する種蒔人の群
おお私は今土を
永遠のまへに献げて静かに眠りてゆく。

種蒔人
（劇詩）

人

ぴちぴちぴちと囀る雲雀
あがれあがれ高く……
雪消えの山のいろは
空色に融かされた靄

山

種を蒔け、種を蒔け、
土は貧の無盡藏、
おまへは希望のゆめの踊り子、
種を蒔け、種を蒔け。

人

いゝいゝいゝ
びろうどのもぐらは
土を掘り手を擧げて死んだ、
蝶は霞に溺れに
種は光を吸ひに蒸される。

山

美しい蟻の空屋に
おまへは土のあやしい模様の上に向ふ、
種を蒔け、種を蒔け、
そしておまへも世の一粒の種。

人

林檎の樹に林檎のあるやうに
私は未だあの山を越えた事がない。

種を蒔くプリミチブの踊り子、
恭と永遠とに汗ばむ踊り子、

山

花屋のマダム

カッフェーの窓のそとに
秋の雨が泣くやうに降つて居ました、
青い[illegible]懸の葉に散花に行き交ふ人影や車の上に……
ああ[illegible]は雨と灯と影の
濡れ[illegible]ぼちながら溜息する幻想曲
私達は遠い港へ着いた旅人のやうに、
どこ[illegible]でも雨夜の街を歩いて
このカッフェーの椅子に腰を下ろしました。
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

涙で温める悲痛な歓喜でそれを語りました。
燃える水のやうな都会の秋雨、
魂を寂しく慰める秋雨
ああ私達は未だ貧乏らしい貧乏をして居ない、
私達はまだ幸福だ、
私達には未だ帰るべき明るい室も取るべき食物もあるではないか。
熱い珈琲を吸つてから
更に秋雨の街へ私達は歩き出しました。
都会は建物も濡れ路も濡れ樹立も濡れ灯も濡れて、
幽かに囁くやうな嘆くやうな秋雨に皆包まれて了ひました、
私達も煙る雨の吐息のやうなこころで
どこまでもどこまでも歩いて行きました。
街から街へやるせない氣持で
私達の心は無限に寂しく慰められませんでした。
私達は町並のとある處に大きい花屋を見つけ

その[illegible]黄や白やエクゾチックな色彩に[illegible]に足を留めました。
温かい室内に異香は酔ふやうに罩めて
開かれた玻璃扉の外にまで漏れてくるのでした
『いい香がするよ』
友は少年らしく恍惚として窓際に寄つて叫びました。
『ああいい香だ』
私も窓際に行つて香を嗅ぎながらさう叫びました。
その[illegible]二人を後から優しく驚かしたものがありました、
『ただ[illegible]お嗅ぎなさいまし』
と物[illegible]かな花の匂ひのやうな美しい言葉[illegible]
私達[illegible]耳に流れました。
私達[illegible]後ろにその家の女主人らしい[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

せう。
[illegible]
した。

ああ相互に離れ――ゐる人々の生活、
心を出し惜んで固く口をつぐんでゐるやうな
心の中、
冷たいさびしい離れ離れの魂、
ああ私達の若い心は路傍の人のこんなささやかな一言にすら
かくも感激する事はありませんか――
其夜を幸福にしてくれた
美しいにこやかな花屋のマダムに私達は限りなく感謝しました、
温かいあの一言で胸が一杯になつて了ひながら。

夜の雨

雨よ雨
ささやかに静かに通る[illegible]を
柔かい闇の土に沁みる
[illegible]私もまた。

[illegible]
[illegible]

春は春に
はてなき空より落ち砕くる雨の
一つ一つは生きて輝き、
わが耳にきこゆるもきこえぬも
無辺に輝りいのちを讃め
土を讃め
永遠の樂の音を大地に與ふ。

古代の夢

この町で一番古いのは
太陽と土地とを除いては、
丘にかかる青錆びた鐘と
一もとの老杉とである。

ああ丘の鐘は大きい耳のやうに
おつとりして一千年このかた
なんでもみんな聴いてゐる、
一もとの老杉は丈高い人のやうに

[illegible]
[illegible]
[illegible]
樂園のやうに此の邊に住んでゐたことも、
新しい侵入者が主人を追つて
ここに砦を築いたことも
次々と人の殖えて行つたことも、
草の葉のやうに数限りなく織り交る
人間の悲しみと喜びのあらゆる時代の夢も、

ああ人々よ、丘の鐘の謎のやうな獨語に
わからぬなりに耳を澄ましたまへ、
一もとの老杉が蒼空の中に
雄飛するばかり高きを見たまへ。

町の鐘

ごーん、ごーん、ごーん、と鐘が鳴る、
南の丘の杉薬師の鐘が鳴る
時ならぬこの鐘の音に
いままでの習慣から
町の人々は驚き惑ふ、

「誰か人影でがすべ、[illegible]でがすべ」
[illegible]聲に聞き合にして
[illegible]だと判る
町のみんなは一錢銅貨を手にして
やっと[illegible]の鳴る方へ
[illegible]御堂の方へ急ぐ。

町の人が御堂に一緒になって
[illegible]は花のやうに町々と[illegible]ってゐる
一錢銅貨は一人分の蠟燭代なのだ、
みんな[illegible]い自然の道に[illegible]ついて
[illegible]詩人も[illegible]祈る

どうしても、[illegible]眞實のやうに、
[illegible]ような[illegible]は一つなの心のやうに揺れ
る、
みんなは心を一つにして[illegible]人のために
[illegible]に願ひを忘れず祈る。

洪水の約束

[illegible]には

水清く涸れた大河のほとりに在る、
ところどころに砂の河原あらはれて
岸邊に消えのこる雪の模様の上
寒さを研ぐ日の光
晴れわたる青空の冷たい匂ひ
影うつる枯れ草や柳も心澄んで
すべて玻璃の輝きに明らむ。

凍えた沈默の中を
大地の[illegible]のやうに[illegible]流れ
その水面に[illegible]浮んで
言葉なき[illegible]、[illegible]を肩に[illegible]には
ときどき辿るやうに[illegible]いて河原に[illegible]、
[illegible]は

[illegible]しく[illegible]
人々よ終日[illegible]
河底をどれほど[illegible]たか
[illegible]の洪水の恐怖を
どれほど少くし得るか、
[illegible]
水[illegible]の中[illegible]いて遠く
[illegible]

[illegible]ない自然の溢れる力は
[illegible]沈默する。

水はいま優しい生物[illegible]
[illegible]かに河底を流れてゐるが
[illegible]年の夏の[illegible]陽と雨と[illegible]と草木との
[illegible]度に強烈な[illegible]彩につれて
洪水の持つ[illegible]い自然の汎濫は
永遠の存在から[illegible]きくる[illegible]情は
[illegible]かな幻想を人に與へる。

[illegible]い[illegible]
無[illegible]な[illegible]の[illegible]に
[illegible]な光に[illegible]
人[illegible]
[illegible]美しく[illegible]
冬の[illegible]の中に[illegible]

桃實る頃

貧しい農家の前に
清い小川があり
飾りなき幼き[illegible]

樹のにとりに戸板を据ゑ
十数の熟したる天津桃を並べて
炎天の下に商つてゐる。

農家をめぐるいくらかの畑中に
桃の樹が数本あつて
いましがた少女等は桃の樹に攀ぢ
びろうどの如く輝く葉蔭に
かつと笑む黄赤き桃の實を取つた。

桃の實は戸板の上に
黄金よりも重く
ただちに割れて
芽ぶかむとする艶を帶ぶ。

ここにして商ひも神の言葉のごとく
桃の實は
ただちに旅人の靈の糧となる。

種蒔く女

鐵道線路に添うて
秋ふかい日に若い穂が銀色に煙るのを
揺れて囁くのを私は聞いた、
虐げられても虐げられても生えてくる力だ
原始の唄だ。

ああ田園のただ中を
鐵の匂ひは果てなく貫き錆び
荒々しい鐵橋の響きと
かなたの工場の煉瓦の赤と
そことなき煤煙の陰翳とは
田園の心を流すべつてゐるが‥‥。

何と廣漠として健康な土地であらう、
秋の午前の日光をいつぱいに受けてゐる畑
を見ると
其處に暗い病弊は影を潜めてゐるらしい。
畑のそちこちには今、甘藷掘る人々が夫婦者
とか一家族とかづつ、
老若男女のそれぞれの 間がところどころ
に出てゐて
畝には掘り返され た甘藷が淡紅く並んでゐ
る、
また長い柄の鋤で半身を土に埋めるやうにし
て耕してゐる若者もある。

更にこの展望の遠くに
若い農夫が鍬を振つて居り
傍に一人の若い女が[illegible]
ら
何か白い粉末をさらさらと蒔いて[illegible]
それは手の先から光のやうに[illegible]
煙のやうに白く輝いて土に吸[illegible]
何の種蒔きか
いつまでも續けてゐる。

ここから見れば女は花嫁の[illegible]
その仕事は踊よりも美しい、
二人はそして默々として働いてゐる。

土は彼等を接吻してゐる、
新しき時代のアダムとエヴよ
しかも呪はれたアダムとエヴ、
現實そのものは暗く貧しく
日の光と共に
血の雫が滴つてゐる。

佐藤春夫篇



たゞいき

一

紀の國の五月なかばは
椎の木のくらき下かげ
うす濁るながれのほとり
野うばらの花のひとむれ
人知れず白くさくなれ、
佇みてものおもふ目に
小[illegible]
素直なる[illegible]見れば　古人の
た[illegible]あかで。

二

[illegible]息して

三

丈高くわかき梧桐はられひたり
杉は暗くして消しがたき憂愁を秘め
椿の葉　日の光にはけしくすすり泣く……
ふといづこよりともなく
　君が聲す。
百合の花の匂ひのごとく
　君が聲す。

四

なげきつつ薔薇の山をのぼりき。
なげきつつ山に立ちにき、
なげきつつ山をくだりき。

五

蜜柑ばたけに出て見れば
か弱き[illegible]の[illegible]かん
たゞ[illegible]に

大なる實をさゝへたり。
われもさゝへむ
たへがたき重き愁を
わが戀の實を。

六

ふるさとの柑子の山をあゆめども
[illegible]えぬなげきは誰がたまひけむ。

七

遠く離れてまた得難き人を思ふ日にありて
われは心からなるまことの愛を學び得たり
そは求むるところなき愛なり
そは信ふかき少女の願ふことなき日も
[illegible]前に指を組む心なり。

八

[illegible]なむといふにあらねども
[illegible]

ひとり出て佇みぬ
渚の明けがた渚の暮れがた
――ただ[illegible]とほきあたりは
たとふればふるき思ひ出
波よする近きなぎさは
けふの日のわれのこころぞ。

淡月梨花の歌

こはこれわがをさなともなりし頃のちつし給なり。さらば、げに君にこそおくらめ。なかしき変[illegible]、人に[illegible]せよ、わが片身なるものを。かく言ひて、人のひそかにわれに[illegible]の上には、手に[illegible]もち[illegible]、ながめんとしつつ、さこわが言ひ出でし言葉は凝にて歌に似たりき。

かなしく白くうつくしく
わが心こそ[illegible]。
あはでむなしく過ぎにける
泣かむ[illegible]なれ。
夕月あはき梨花にして
汝が泣けるこそ切なけれ。
ああかかる日に君をみて
かたりし人ぞ嘆きましき。

秋刀魚の歌

あはれ
秋風よ
情あらば伝へてよ
――男ありて
今日の夕餉に　ひとり
さんまを食ひて
思ひにふける　と。

さんま、さんま、
そが上に青き蜜柑の酸をしたたらせて
さんまを食ふはその男がふる里のならひなり。
そのならひをあやしみなつかしみて　女は
いくたびか青き蜜柑をもぎ来て夕餉にむかひけむ。
あはれ、人に捨てられむとする人妻と
妻にそむかれたる男と食卓にむかへば、
愛うすき父を持ちし女の児は
小さき箸をあやつりなやみつつ
父ならぬ男にさんまの腸をくれむと言ふにあらずや。

あはれ
秋風よ
汝こそは見つらめ
世のつねならぬかの団欒を。
いかに
秋風よ
いとせめて
証せよ、かの一ときの団欒ゆめに非ず　と。

あはれ
秋風よ
情あらば伝へてよ、
夫に去られざりし妻と
父を失はざりし幼児とに
伝へてよ
――男ありて
今日の夕餉に　ひとり
さんまを食ひて
涙をながす　と。

さんま、さんま

さんま苦いか塩つぱいか。
そが上に熱き涙をしたたらせて
さんまを食ふはいづこの里のならひぞや。
あはれ
げにそは問はまほしくをかし。

秋衣篇

その一

[illegible]年前のある日、机に凭りて[illegible]なかに[illegible]といふ一項あり、
[illegible]
これに[illegible]美辞を弄ぶものといふべし。われは三誦して秋[illegible]

[illegible]と身をなして
おもふ人いとも遠し、
歎きつつ織るものは
なつかしき人に着られよ。

[illegible]とさぞ　天の[illegible]
逢ふことぞ待たるるよ、
秋ごとに君に行き
君にそふ衣[illegible]たまし。

絹裂けば音にぞ聞く
わが胸の千千の切なさ、
縫ひゆけばなみだ落ち
縫ひきしむ針ぞ憂たてき。

裄丈は昨のままぞも
わが心昨のままぞも、
憂れたくも痩せ給へりや
憂れたくも肥え給へりや。

もとより即興の戯れにして原詩の哀切に對して恥づ。

その二

[illegible]衣の候となる。われは假そめながら病に伏して他家に身を寄せたり。秋宵ただ一人の爲めに長く孤愁は時に甚だ堪ふべからず。つれづれのあまり[illegible]りぬ。詞の稚拙は既に恥ぢざるなり。

灯かげ[illegible]小[illegible]に
さすらひ人の行李より
ひとり索ればわびしさよ
秋風に着る秋ごろも、

[illegible]を妻に持たぬ身の
わがとり出づる古ごろも
ころもをとればそぞろにも
おもかげぞ立つ　憂き人は。

わりなきことを言ひいでて
恨むよしなき佳き人よ
汝がいとし子の秋ごろも
裁つ手をしばしやめよかし、

絹を二つに裂かむとき
こほろぎの音をしばし[illegible]
そのかそけき[illegible]に[illegible]
つれなき人となりしかし

人目を[illegible]　汝はそそ
あわただしくも[illegible]手に
そ[illegible]ほころびをつくろひし

ころもは曾て無かりしか、
今日をかぎりの晴れの日
吐息とともに汝が歎きて
くつがへりたる味噌汁に
しとどなる膝なかりしか。
劉氏は人の妻なれば
ひとりとり出しわがころも
濯ぐべき人もとめねば
終日もふるし古ごろも、
秋の灯かげにすわるとき
新しく着る古ごろも
膝なる汚點はわりなくも
いみじき汝を怨めとぞ。

遠き花火

つつましき人妻とふたりゐて
屋根ごしの花火を見る——
見出でしひまに消えゆきし
いともとほき花火を語る。

浴泉消息

1　大ぶん熱が出ました

隣室の客は男ふたりだ。
酒をのんで、いつまでも
何だかくだらない議論をしやがつた。
やつと寝たと思つたら
ひとりは直ぐと怖ろしいいびきだ
ひとりは又すばらしい歯ぎしりだ
これではまるでさつきの議論のつづきぢやな
いか。
そのいびきをかうして聞いてゐると
自然豚のことが思ひ出されるし
歯ぎしりの方はまるで柱時計のぜんまいを巻い
てゐるやうだ。
おれは豚小屋の番人になつて番小屋の柱時
計に
油の足りないねぢをかけてゐるのか知ら……
ゆうべの寝汗のしみ込んだこの掛ぶとん
何だかほし草のにほひがして来た……

2　だんだんよくなります

浴泉は毎日わたしのおできの
[illegible]のやうにこびりついた奴を洗ひ流す
事、
谿川の水は細流、私の心に流れこんで
それが心の古傷に何としみるかよ。
ひとりぼつちの部屋に月がさすから
電燈を消したら
おれの目から温泉が出たつけ。

3　こんど地方に向ひました

秋になつたら
小さな家を持たう、
小楷・楷書百巻
さうして
煙草とお茶とのいいのが飲みたい、
そこには花畑がいる、
妻はもういらない、
童子を置いて住まう、
童女でも悪くはない、
さうだ、それよりさきに
一度、上海へ行つて
支那の童女を買つて来よう、
おもちやのやうに着飾つた
十四ぐらゐのがいい、
木芙蓉の蕾のやうな奴はいくらぐらゐするか
しら？

故園晩秋の歌

ふる里のふりたる家のあはれなる秋のま
がきは人ありてむかし植ゑにししらぎく
のさかりすぎたりあれまさる桑のはたけ
は人ゆかぬ畦のかたみち釣鐘の花かれに
けり古井戸の石だたみには人しらぬ鶏頭
の花うつぶせにたふれさくなりひとりた
だ園をめぐりてとほくゆく雲をねぎらひ
うつつなる秋の胡蝶をあはれみてわがた
たずめば山ちかみくる日はやし

反歌

ふるさとのふりたる家の庭にして晝なく
蟲をきけばかそけし

鳩

白い羽根が一枚[illegible]り込んだ
それは、[illegible]いて聞かせた
[illegible]の上に鳩が一羽ゐた。

怪訝な鳩よ　一たいどうしたといふのだ
旅に出てたよりのない女からの
その便りならば、・・・困つた事だ。

せつかくの深切なお前のその話も
女の心と同じく私にはわからない
お前の落した羽根には何も書いてない。

鳩よ　曇り日のひとりの鳩よ
見知らない鳩よ　白い鳩よ
女に返事をせよ――私はもの憂いと。



柳澤健篇

雪の上　未來　喪失　雲　雁　のすたるぢあ　ほのかなる戀
噴水語　和蘭船　古代皿　野薇　廢園風景　午後遊戲　白のメ
ランコリヤ

雪の上

靜かに雪ふりいで、
月後ろにのぼる。

嵐はいづこよりかおこり、
雪のなかをはるかに……。

はるかなる地平線の上を、
雪のなかの月、
粉のごとく煙のごとく
圈をゑがきて呼吸す。

われら影のふたつ戀のなきがら、
夜のなかにいつまでもあひ倚りて、
うれはしく雪ふる月の旋律を、
足おとつゝましくふみてゆくなり。

未來

日浮び、
雪やむ、
われらはてしなく
いつまでか冷たくあひ抱かむ。
みよ、嵐を、
青白き地平線より、
やゝはやき明るみさして
囁きそむ……

[illegible]、
[illegible]、
われらの上に、[illegible]の下に、
悲しく、[illegible]く、[illegible]に[illegible]——
いつまでか冷たく[illegible]さむ、
われらの胸に[illegible]はり
[illegible]も[illegible]ろにはげしき[illegible]に[illegible]……

喪失

樹立のむかうの雲、
疲れた私の心へ
うすくひかる空。

鳥がひとつ
はてもなく
空のかなたへ、けむりのなかへ。
秋の心に
こひしくたよりなくあなたから
さびしい、鳥を、のぞみを、
いつしらず喪つてゆく——

微笑

空に淋しい瞳が、
あかるく、はてなく、
溯る満ちた春の上に。
野の上に、瞬のうちに、
瞬にこと、息のごとく、
……
このままの心のあとより、
ひそやかな微笑が
いつまでも……

虎

嵐が吼って、
だんだんと色が黒くなる。
闇のなかに、かいと虎はねた時——
獣の高慢の皮膚の上を
渦をなして来る黒、
闇のなかにつきすすむ黒、
はてもなく搖する黒——
曙らしい太陽が、
闇のなかから、一杯の力でのぼる！

のすたるぢあ

白い雲が飛んでゆく、
……
……
……

ほろびし戀

花草を喫へる若人！
初秋の鳥は枯れる並木にかくれ
午後の太陽はおだやかに眠りたり。
いづこにありや汝が戀、
こゝろよくほろびたる汝が戀。
さびしきこほろぎは秋の面に飛び
薄明りのなかに汝が戀はほろぶ。
若人、こゝろやすき若人、
秋はさびしき戀のなかにすぎゆけども
ほろびたる汝が戀のやすらかさに
汝はこゝろよげに花草を喫へり。

海水浴

……
……

甘く軽く、煮える青色、また物を動かす風。
人々水にありて一日に微笑す。
水色の幼兒は水の面を日映ゆるごとく光り、
花のごとくまろまろと母の裸身にまつはる。

おゝ、母の裸身を激しくゆするは誰ぞ？
られり來る波か、まつはる幼兒か、かたはらの父の微笑か。——
たゞ赫くして強きもの、勇健なる青年の群。
するどく波上に泛び、歡呼してまた沈む。

腕を組みて泛べるは花の處女、光の處女。
青き水上に、そと開きそと消ゆる和らかき百合……

かたはらを走りゆく快艇、おゝ、帆のかげにありて潮風に吹かるゝは
亞麻色の髪と麥桿帽子、微笑む眼に燃れる唇。——

このとき、ひとときは高き笑、ほがらかに響き、
裸身の處女、いとど浮びてみゆる花束。
快艇は遠のき、處女そとためいきしあと見送れる、
吹けよ風、寄せよ波、冷せよ胸、處女の肉體
火焔のごとく燃えたり。

火焔のごとき處女の肉體、さゞめく微風に燃えたつ白百合。
熱きおもひ、さみしき心、やさしき愛撫。
おゝうつむく額にしぶく波……
泳げ、泳げ、冷たき波に打たせよ肌、さらせよおもひ、
海上の七月、——あらゆるもの黄金に光りて皆笑へり。

——本牧所見——

和蘭船

和蘭船のゲンテル號のカピタンと
手を握つて軟かい佛蘭西語で話しかけるとき、
横濱港の春霞はいつしか重く雨となり、
海鳥の白き翼も物哀しくギヤマンの窓に映りくる。

ジヤバの土人は淡い紅茶を銀皿にのせて、
カピタンと私とのまへに、靜かに、靜かにして置く。

雨のなかを眺めたいスケツチの間、
和蘭木靴の黒靴……カピタンは一寸眉を顰めてる。

パアサーの肥つた爺さんと美しい細君の事務長とか、
カピタンの部屋にほつとした光線と軟い和蘭語とを投げこむ。

「日本はこれで二度、いつも美しい」カピタンは窓の外を見ていふ、
軟かい雨、重い雨、横濱港の午後の雨、
窓から覗けば、赤い建物はグランドホテル、
山の上の風景は佛蘭西人コンシユールの館に滴霞。

静かな雨、白い海鳥、ジャバの紅茶、
カピタン室の空氣の重さ、軟かさ。
窓の外なる濱港の夜の雨
絶えまなく、絶えまなく……

古代頌

一

彼等、神殿に遊ぶ白鳩の朱き脚を愛して、
陽の輝ける後庭に集ひ樂しめり、
口に銜むは木の果實にて醸せる酒、
酒に醉ひたる古人[illegible]しく歌をうたふ。

檜樹の黑き緑、銅鐵のごとく光りて、
燃えあがる哄笑を、支へ且つ搖する、
身を傾けて歌ひ、また把むは木製の杯、
杯のなかに燦たる黄金の日光！

黄金の日光は空氣を焦して、
ならべる林、焔の如く亂れたり、
古銅の古人酒に醉ひ痴れ、
肉體を叩いて笑ふ、その聲、
古人心足らひて、は、は、と笑ふ。
雲と雨うづまくなかに、は、は、と笑ふ。

二

古銅の古人月を浴び、
砂にまろびて、瞬かず、
蒼穹深くはてしなくはろ〴〵と、
月は照す、森と海、砂と人とを……

青くして遠き光、杳かなる光！
露滴風とともに古人の額に落つ、
古人は眼を閉ぢ、心より吸ふ月のひかり、
青くして遠きひかり、杳かなるひかりを。

古銅の古人貌をあげて、
眼前に佇立せる神を見たり、
憂愁に眼黯く悲慘なる神を
色蒼ざめ涙に溢れたる神を。——

三

古銅の古人劍を研ぐ、
息を凝して劍を研ぐ、專念に劍を研ぐ、
黑き巖に彈けて硬く、
[illegible]けとき雲は森林に生れ湧きあがる。
古銅の古人劍を研ぎ終へたり、
一閃、椰の幹枝紫煙のなかに消えたり、

鳥の音、蛇の聲、獸の呻吟、
雲の亂れ、嵐の響、雨の波濤、
つんざき走る電光とはたゝめく雷、
あゝ、古銅の古人今し劍を研ぎ終へたり。

野蠻

眞白な手巾を握つた左手には指環の碧玉が
ちらめき、
右手に持つた金口の莨のきはりには何といふ
輕い紫煙！
柔らかなソフワにふか〴〵と身體をうづめ、
から眼をつむつてゐるところは立派な文明
に違ひはないが——
しかし、私の胸にはいま電閃がはちぱちして
ゐる、
[illegible]がる雲を生みいだす嵐が吹きあがらうとし
てゐる。

君は輝く、哀歌の歌に何とも言へぬさびしい響を、

ふすふすと燃えあがるひびきを、押し寄せてくる波の音を、

悩ましい夜の瞬間！　海の誘惑！　夏のなかの奇怪な電光！

我知らず髪の毛をつかんで私は椅子から立ちあがる。

おゝ、焔の恋のもとに揺れ動く巨のやうな青の海、

そのなかに七月の熱い太陽を浴びて裸體になってゐる女

奇妙な笛の音。淫蕩野蛮な舞踏の足どり。

裸體の女は栗色した身體を蛇のやうにうねる。

私の息はだん／＼と熱くなり、汗は額から頬へと傳はる、

女は絶えず微笑ながら爆破して私を嘲る。

[illegible]、あゝ、[illegible]

[illegible]

又は手を背後にして見ることも[illegible]

[illegible]

腕や脚は燃えて蝋燭のごとく燦きかへし、

伸ばせる背教者の肩と、頭と、額と、輝きかへす。

指頭か、陰部か、焦げたる地面に顫へる自分、

その己れの首を強く絞ふ白蛇と栗色の裸女。

いつしか私も裸體になる、牛肉を剥ぎ、臓腑、[illegible]

そのうへに女は注ぐ、貴様なる情液の熱湯を。

うつらうつら、星は飛び、月は砕け、風は死に、

たゞ一様の青いろのなかに、眞白き蛇がそろそろと十字架にのぼる……

おゝ、私の肩に優しげに手を置いて、この[illegible]

[illegible]

[illegible]

黄昏風景

黄昏の浜に来てみると、

[illegible]のいゝ[illegible]がする。

黄昏の海を見てゐると、

[illegible]いろの[illegible]の[illegible]がする。

[illegible]がたゝ／＼する[illegible]に[illegible]、

湖も、空も消えゆく[illegible]ない、

私は独白する。「この風土に[illegible]る日の匂ひ……」

湖も、周囲の山も夕陽のなかに揺れる。

微風に漣波をたゝいて消える。

音もなく滑るヨットには、[illegible]ヨット。

誰かが幽かに海上で[illegible]する。

ヨットのうへでか？　いや、もっと遠く、もっと遠く、

なぎさは静かに[illegible]つてゐる波がはるかかなた
に……

[illegible]を見てゐると
[illegible]きこえる。

[illegible]を見てゐると
[illegible]する。

宇治淺酌

月[illegible]、[illegible]うへ、砂のうへ、
松の[illegible]に、この涼しい微風、
私は[illegible]を頬にあてながら、
青く[illegible]宇治川の對岸をながめる。
遠い所を汽車が通る――かすかにそこに[illegible]
し、
[illegible]
[illegible]
す、
ふと私の心のなかで過ぎたことがうかんでだ
す……

小さな[illegible]
[illegible]、
私は[illegible]ながら、
冷たい[illegible]ことを、
[illegible]
私は盃をさしいだす、なみなみと充たされる酒、
[illegible]、
それに、[illegible]
私の[illegible]を揺れうごく[illegible]
おゝ、月光しのびやかに盃のなかに[illegible]
にそそぎに……
[illegible]鐘の音が對岸からひゞく――
[illegible]
[illegible]悲みをもつてきく、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

何故、
おまへ[illegible]心の悲みと樂しみの[illegible]、
[illegible]であること
を、
その[illegible]の光が、
[illegible]ことを――
[illegible]なみなみと[illegible]
をつぐ。
[illegible]
も。――

月のメランコリア

大[illegible]
[illegible]
さみしげにきよらかに
あお月はさまよひゆく。

西條八十篇

頽唐　年　薊の花　帽子　戀人に　雪　港にて　[illegible]の海　胸の上の孔雀
書物　猫　かなりや　薔薇　なげきたまひそ　黎明　[illegible]　[illegible]
玩具の舟　春の日　山の母



頽唐

——最近の西條八十に與ふる詩

巨なる病牛ありて
漸く疲れたり、
その窪める背に
宋窯の華やげる寶塔一基を据ゑ
緋の紐を曳きてわれの從ふ。

空は曇り
吾がめぐる村々は
雨のごと落葉す、
顧れば空谷のかなたに
昔の湖水のみ清く耀く。

歌はむかな、歌はむかな、
われ佳き贈物を携へ
ひねもす愛人の里を尋ねてゆく、
疲れては黄牛とともに眠り
覺めては村童のために
癡呆けたる謠をつくる。

年

私は北の國へ行きたいとおもふ
巨きな、美しい氷河に逢ふために、
そしてその月光の燦びやかな胸に
悲しい歳月の花束を抛げたいと想ふ

曇り日、戀人は黒の外套に身を包み
私たちは蒼ざめた馬に跨るであらう。
めぐりゆく路に鵯が啼き
夕日のなかに粉雪がちりみだれる。
戀人は赤い昨日の小靴を失ふであらう、
そこにはやがて春、狐の手套が咲くのだ、
いな、それよりも、遠くひびきくる
幽かな黄金の鈴の音に私たちは耳かたむけ
る。
それは山の羊の群である、
頸には智慧の鈴を搖れど、かれらは悉く盲
　である、
過ぎゆくそのうつろな眼ざしを見たまへ、
いかにその俤の

わが父にも母にも似かよへることぞ、
涙すな、戀人、
しばし、……かれらは山上の雲に消える
戀人よ、馬を下れ、
そこにわが壯麗な氷河がある、
そは夜に煌く水銀のランプ、青き無言の燈
台である、
いざ、われらが秘めた匂たかき花束を抛げよ
う。
薔薇、百合、花薄荷、罌粟、毛莨
素馨、にほひあらせいとう……
私たちが涙しつつ抛げる花束は
星のやう、火のやう、かぎりなく舞ひ
夕日のなかに粉雪はちりみだれる。
私たちの腕は疲れ、戀人の頬には汗が眞珠と
かがやく、
美しき氷河かな、
そは私たちの贈る花束をやすらかに負うた、
そして青空のもとに永劫に凍つてゐる。
私は北の國へ行きたいとおもふ。
ふたたび晝きた、慈愛の氷河に逢ふために、
ああ、その月光に燦びやかな胸には
色褪せた若き日の花束が、今もかぎりなく埋
れてゐる。

桐の花

おもひ出でては
あるも怖ろし
大理石の湯槽のなかに
忘れたる、その
桐の花。

夜ふけて
尼等ひとしく
庭に下り額をあつむ。

誰びとの
犯せし罪ぞ
月の暈
ほのかなるころ。

うつろなる
石の湯槽に
桐の花
媚きわたる。

梯子

下りて来い、下りて来い、
昨日も今日も
木星の林の中に
吊つてゐる
黄金の梯子
瑪瑙の梯子。

下りて来い、待つてゐるのに——
嘴の紅く爛れた小鳥よ
疫病んだ鸚哥よ
老いた眼の白孔雀よ。

月は明み
青空は凍てついてゐる、
木星の黄ろい花が朽ちて
瑪瑙の段に縋るときも。

下りて來い、俟つてゐるのに——
色？
光？
紅い罌粟を伴れて
蝙蝠の[illegible]、何か[illegible]行つてる。

待たるる[illegible]
月にそむきて
木蘭の花片の
埋れし女の[illegible]。

年も寂し
昨日も今日も
[illegible]も
綺羅[illegible]
黒金の梯子を下りつ上りつ。

蠟人形

寂し、寂し、
銀の野薔薇の實を摘みて
屋根にのぼれば
日は黄昏。

[illegible]
[illegible]室に
誰が忘れたる
蠟人形、
素絹の[illegible]に
日は暮るる。

あはれ、あはれ、
ひとり野薔薇の實を[illegible]
[illegible]
このこころ。

いつまでか
外るる[illegible]や
空に浮く、
蠟人形に
戀びとの
俤は遠し。

燈

おもふこと、
[illegible]

[illegible]

海にて

星を數ふれば[illegible]、
金の燈臺は[illegible]、
岩陰に白き牡蠣[illegible]、
生るれど
わが戀はひとつにして
寂し。

顔の海

妻よ、見よ、
しづかなる吾兒の寢顔を、
眞晝、桃花心木の回轉椅子
搖がする微風だになし。

いま、父の手にやさしく摘みて捲る
小さき紫の花片、可憐のロベリヤ、
點々とその寢顔に落ちて
眉に、睫に絡む。

無心の面を
朧に泛ぶ小舟に似たる花片、紫、
(窓をとぢよ、日の光あまりに明るし)
父はそれに遠き古昔の海の音を聽く。

卓の上、わが讀みさせる
Oman の英國原始史は在り、――
「北の海、灰色の霧がくれに、蛮人の音聞え、
Anglo-Saxon人はあらはれぬ。かくて、
心怯えたる紅毛の Britain 族に、森林の奥に
[illegible]、
原始の渚に新しき國を建てぬ。」と。

ああ、吾兒の寢顔の海、
そこに無心の狹霧の晴れゆくは
いつとしも遠くわかたねど。

妻よ、いま眞晝の日の光に
美しからずや、その海の上を、
忙しげにゆきかふ花片の小舟。

胸の上の孔雀

忘れては
いつか捉へむ、
胸の上を過ぐる
孔雀の群。

午睡の夢のまに
しろき月
音なくのぼり、また
沈みゆきぬ。

おとろへし
肋の畝に、
幽かにも
そよぐ青麥。

そを踏みて
過ぎゆく孔雀、
一羽、二羽、
靜かなる音。

書物

月の夜は
大きな書物、
ひらきゆく
ましろき頁。

人、樹は
橋の欄は
美しくならべる活字。

樹がくれの
夜の小鳥は、
お[illegible]て

黒きふり假名、
しらじらと
ひとりし繰れば、
懐しく、うれしく、
悲し。

月の夜は
やさしき詩集、
夢のみをかたれる詩集。

指

父よ、
母よ、
姉よ、
弟よ、――
四人かぞへて
なほ殘る
ひとつの指を
いかにせむ。

夕月に
透しみれば、
白く、纖く
あはれ小指の瘦せしかた。
そは永久に語りえぬ
名を祕めて、
靜かなる
墓のごとく。

かなりや

――唄を忘れた金絲雀は、後の山に棄てましよか。
――いえ、いえ、それはなりませぬ。
――唄を忘れた金絲雀は、背戸の小藪に埋けましよか。
――いえ、いえ、それもなりませぬ。
――唄を忘れた金絲雀は、柳の鞭でぶちましよか。
――いえ、いえ、それはかはいさう。
――唄を忘れた金絲雀は、
象牙の船に、銀の櫂、
月夜の海に浮べれば、
忘れた唄をおもひだす。

薔薇

船のなかに
忘れた薔薇は
誰が拾つた。

船のなかに
殘つたものは
盲人がひとり
鍛冶屋がひとり
駒鳥が一羽。

船のなかの
赤い薔薇を
拾つたものは。

盲人がひとり、
見てゐたものは

青空ばかり。

なげきたまひそ

たげきたまひそ、儚なきは
この世の戀の性なれば。
怨みたまひそ、別るるは
あひ見し者のつねなれば。
仰ぎたまへな、夕月は
こよひもいかに冴かなる。

祕唱

ひとすぢの青き葦さへ
吹き吹けば佳き音をしらぶ。
ひとすぢの焔とならば
いつの日か消燃えざらむ。
たまきはる命をかけて

愛しきひとよ、女よ。

母の唄

ねられぬままに
起きいでて
夜更けの空を眺むれば
冴えわたる月のおもてに
白き纖雲
ほつかりと浮びいづ。
ほつかりと、このとき、
添寢の吾兒の
目をさます。

老人と帆

——父よ、
今日もひねもす
寂しく砂に臥してなにを想へる、
海は暮れ
黄なる月見草のひらきそめぬ、
いざ網をたたみて

灯の家に歸らむ。

——吾兒よ、しばし待て、
訪れきたる遠祖先と
われとの會話はいまだ盡きざるたり、
夕の微風に
星は嬰兒のごとく若し、
今しばらく吾をして老いし人人と
懐しき歡語に耽らしめよ。

——父よ、おんみはなほ夢みつつありや、
砂は黝く冷えて
黄昏の濱には人氣無きを、——
見ゆるは、折折、幻のごと
沖邊に浮み、また消ゆる
蒼白き帆かげのみ。

——さなり、吾兒よ、
ああ、沖の眞帆片帆、
そのひとつびとつに
蒼白き遠祖先のおもかげは宿れ、
そはひねもす
月見草さく砂丘をめぐりて
わが衰へし耳もとに

[illegible]を驚くなり。

玩具の舟

雪のふる夜に
母さんの
膝にもたれて
おもふこと。——

あかい帆かけた
玩具の舟は、
夏の川原に
忘れた舟は、
どこへ流れて
行つたやら。

春の日

行つたり、來たり、
昨日も今日も
山のうへを
白い雲が。

行つたり、來たり、
[illegible]のまへの
お室の時計、
錆びた振子。

行つたり、來たり、
窓の下は
花の祭、
馬車と人が。

行つたり、來たり、
春の日かげの
母亡き室を
小さい風が。

山の母

いつも見る夢、
さびしい夢、
月の夜ふけの
山の上。

青いひかりに
[illegible]なかの
うちの母さま
ただひとり。

草も生えない
岩山に
白い[illegible]
いとしうて、

泣いてまねけど
もの言はず、
風に揺れるは
影ばかり、

いつもさめては
さびしい夢、
月の夜更けの
山の上。



日夏耿之介篇

夜の誦　雪の上の聖母像　青面美童　生神母畫像の前　しかし笛の音はない夜の事　灰の丘　薄暮の旅人　わが身の夜半　黒色　雙手は神の聖膝の上に

夜の誦

キリエ　エレイゾン
キリエ　エレイゾン
クリステ　エレイゾン

一切有しかく在らしめたまへ聖母よ
わたくしは現在嘔吐を感じ
また發熱を感じ戰慄を感じ
この惡心に疲みながらも　蹣跚と　たどたど
と
蹌踉と彷徨り歩きまた佇むものです
古代と稚醇と渾沌とに腐り果てて
路傍に棄てられた彈力化なき護謨球のごとく
無要なるわたくしの魂をば哀憐ませたまへ

肉頽れ　軟骨廢れ　心澄み氣明かに
禪院老主の心度もて
われ御身をまことに信じ奉る也
また青春の日の羞多き記憶に殘る
美しき肉の女人らの手をとるごとくに
心ときめき肉ふるへ禮拜し跪坐する也
永貞童身の美女なる萬聖瑪利亞

一切有しかく在らざらしめたまへ御母よ
昔は好少人のころほひ　われ御身を
人工燈火　燦爛たる恍惚たる不可思議なる
巷々の窓玻璃の表裏に眺め
いまは錆き老骨の破片のわたくし　御身をば
黒き兜の聲ごぶごぶと音信なせる

深山なる處女林の梢に覗る也
ああ愛心を發す大なる器なる童貞よ

一切有しかく在らしめたまへ
心の悉の懈怠と絶望と癡愚困憊と
自嘲と焦心と孤疑とより悉く救はせたまへ
御母よ

たとへば疲める石女の皮膚を破つて
にじり出る膿汁の細胞のうちに蠢動ける
顯鏡下一千萬微生分子の世に恐ろしい存在
のごとく
潑溂と生き生きと身動きたまへり　美しくも
たとへば　御身眞紅なる石造建築の絶巓の

碧空の上に恒に燦々と光りかがやく
白金常針のごとく照りわたりたまふ聖瑪利
亜よ

たとへば御身天々しく直き都大路を慟々と
古風なる辻馬車のいともいとほしくあたかく
車輪らが叫びのごとく響きたまへり聖処女よ

一切有しかく在らざらしめたまへ

ああ聖母よ御身かつて墓畔に佇み
翼ある漏刻をささげ持ちつつ
艶かしき蠱惑の嗤笑を送りたまひ
また白大理石大卓の端におかれた
象牙の黒き嚢の目と化りて
一刻隣の情懐をあたへたまへり 童身よ

朝な朝な日の光とともにともに山の端を黄金
に染め
眞晝は樵の樹の林ふかくに假睡り
日の宵 ただ赤々と
白き障子を照り映え給へりわが母よ
蠕蟲の屍骸にも誇りかに哄笑する焔の央にも
白き鬼百合の花の蕊にも

御身が直ちにありわれを監視したまへり 聖
処女よ

冷たき瑠璃の上なる青き長針を振うち
白き波の声は頻度燈上の綺を剥ましめ
天を指さす高塔を一本の草のごとく手折り給
へる生神母

一切有しかく在らしめたまへ

鬱悶と貪慾と狡獪と自棄と
足なへたる飽満と猜疑と野心との
守神なりしわが母よ

苦戦と惨闘との血に飽ける庶民らには
無為の和平をあたへ
和衷と共助とに鼓腹する黎民らには
仇なき血闘をあたへたまへる

盗心なきものには悉皆の盗心を
淫蕩なきものには悉皆の淫蕩を
貧しきものには極端なる貧賎を
暴富の子におびただしき南鐐を
晴天には酷熱を霖雨には陰湿を
巷市には豊穣を荒地には飢饉を
それぞれ業因のごとくにあたへたまへる聖瑪
利亜

一切有しかく在らしめたまへ

ああ心醜き老廃者わたくしは御身に
青蠅のごとく毒蛇のごとく猛虎のごとく
萬物に憑きまとはり毒をそそぎ牙を研ぐ
厚顔にも今起ちて 手を洗つて神母に見えむ

疲労と病頽と嗤笑と潑罵と
青ざめた悒愁と狂獣と咆哮とのわたくし
第七戒を棄てた如くに第一戒をも踏み躙れ
るわたくし
御身瑪利亜が眞白く麗はしき脚下に伏し沈み
卑屈なる求婚者のごとく
野心ある反間者のごとく
諂諛する追従者のごとく
力籠めて御身にこかれ
伏し倒れ自ら噛みしめ夢見る地に
御身が世にも崇高の清麗にふたるる也
久遠女人アグライヤよエウフロシネよターリ
ヤよ

黄金の乳持よ　聖の乳持よ　稀代なる眞珠母
よ

ああわたくしは悉くこの黒瞳澄める書[illegible]ら
を大[illegible]に[illegible]し
御身が聖[illegible]の[illegible]火のために焚火となし
虔みて毀たれし事物のごとき
己が肉身を[illegible]し[illegible]して
昇天祭逮夜の[illegible]に[illegible]む
永遠に美しき[illegible]聖瑪利亞
繊手の[illegible]よ　[illegible]作者の御母

わたくしは[illegible]となつて[illegible]の香[illegible]にまつはり
わたくしは[illegible]となつて[illegible]の軒[illegible]にもくだけ
わたくしは[illegible]となつて[illegible]の虚空にのぼらむ

あらゆるものごとをなげ棄てて
御身[illegible]を[illegible]
[illegible]
[illegible]
ありとある眞理のための御母よ

今宵[illegible]に[illegible]
[illegible]を一[illegible]十字架と手槍とを
捧げ持ち
翔[illegible]なた[illegible]の[illegible]に
[illegible]冠と[illegible]光と[illegible]の黒衣の[illegible]
御身に軟くおん優しくも抱かれて
光ある聖ソフィヤ、ビサンチン派の
折目正しき御身が神聖[illegible]像のもとに横臥し
て
卒然と亡び逝くべし
ああ[illegible]童女[illegible]聖瑪利亞
われらのために[illegible]ひたまへ

雪の上の聖母像

I

ああ今宵[illegible]は
北の[illegible]の上に[illegible]たる
か[illegible]を呼ばひ
[illegible]ために
世界[illegible]ために
[illegible]光る雪を降らした

II

ありとある七彩色を[illegible]じなす
この純[illegible]の白色は
[illegible]へばあらゆる[illegible]して
偉いなれども[illegible]しいまた力ある
水流の[illegible]なるものを[illegible]くに
[illegible]る雪は
[illegible]と[illegible]明日の[illegible]
立[illegible]らをも[illegible]
ありとある有[illegible]の世界を包み[illegible]び
[illegible]界に[illegible]
大[illegible]をしつ[illegible]

III

ああ雪の上に[illegible]は
凡百の思考の塊に[illegible]いなまるる
心性はあまたた[illegible]の[illegible]して
のびのびと[illegible]にまた心[illegible]しく
[illegible]を[illegible]の白く[illegible]を
冷々とする[illegible]を[illegible]し
また[illegible]々と光[illegible]の中[illegible]に
青を[illegible]の[illegible]
光[illegible]たしを[illegible]を見る

IV

[illegible]あるわ[illegible]心[illegible]
[illegible]の[illegible]をはたと閉しながらも
時ありて扉の内部を隙見する汚辱のわれら

ああ　今日も[illegible]を聴く
紫[illegible]の[illegible]月の雪の上に
酒く[illegible]けしき[illegible]を額に感ず

青面美童

I

夜となれば……
暗ぐらい書齋にこの身臥しよこたへ
黄いろい裳に倦みなやむ
己が頭顱を抱かうとのみ
眼瞼かろく閉ぢてあれば
銀光の灯はいつとうす暗みて
陰影のごとく　災殃のごとく　礫のごとく
青面の美童角笛を吹き
古像のやうにあらはれる

II

その夜の天は
星辰を鏤め
濛々と香霧を降らし
草木うれしみ夜氣を吐くのに
人間ひとりその家居もただ黒々と愁ひ臥し
[illegible]の早鐘はやく
[illegible]を[illegible]き
南方はるか[illegible]び延びた頭ほひをば
青面美童
陰影のごとく　災殃のごとく　礫のごとく
踊り狂ふ　角笛を吹く　踏舞する

III

夜は夜もすがら……
貴を[illegible]り
黄金の[illegible]ふかふかと穿ちまとひ
黒き帯しめ
朱珊瑚の馬鞭を振ひ
わが大[illegible]の[illegible]を亂りうち
角笛を吹きまた咳して
陰影のごとく　災殃のごとく　礫のごとく
悠然と　從容と　高歩する

IV

月あかい宵は
青い寛袍に水銀の雫したたり
襞をすべつて黒い床に煌とくだく
心寂しい雨の夜も
黄絹かろく身に纏ひ
陰影のごとく　災殃のごとく　礫のごとく
青面美童
わが緞[illegible]の扉口に佇つ

V

心[illegible]　われ
[illegible]の[illegible]のごとく
黒い[illegible]に[illegible]て
内なる心[illegible]
[illegible]を受けた[illegible]のやうに身[illegible]えすれば
いつとなし
[illegible]い[illegible]　青面美童
[illegible]い角笛の[illegible]きならす
小ぐらい[illegible]の[illegible]は
陰影のごとく　災殃のごとく　礫のごとく

生神母聖像の前

（斷章）

焦い沙漠を擦きまはし攪き廻して
そつと手に[illegible]し古怪な畫像は
歳[illegible]の蝕け果てた聖貞童女生神母
この聖貌を凝視める仔細は
我世界をば己が霊夢で服飾して
全消けたい悲願から御座ります
ああ　まあてる　くれあとりゐす
おおら　ぷろ　のをゐす

「背後の方で誰やらが
もの言ひたげな素振りに見はる」

今世界には日光が一杯に漲つて
巴旦杏は千百の思想の銀線で悉く
張り裂け相であるところへ
水晶體には夥しい色彩の光座で
眩暈を感じ初しましたゆゑ
聖畫像をしかと抱擁いて
熱い沙地に俯伏したので御座ります
ああ　まあてる　あまびりゐす
おおら　ふろ　のおゐす

「背後の方で誰やらが
もの言ひたげな素振りを覺ゆる」

あるはまた巳が惡夢の睛を瞑り
聖母の御名をただ一遍唱名して
「さても聖き榮福なる童身瑪利亞かな」
われ[illegible]心を[illegible]して
米と[illegible]の[illegible]なる神の御寺に
悲[illegible]なる[illegible]合力を希はむか
ああ　まあてる　いまてめらあた

おおら　ふろ　のおゐす

「背後の方で誰やらが
もの言ひたげな素振りを感ず」

ああ至上醜惡肉身とこの心の胸の刳り
聖母が畫像を血塗り絕死せむ
科を興じて聖母に耽溺し乍ら
全世界をばこの惡夢に裝飾せむ
ああ　まあてる　かすちつしま
おおら　ふろ　のおゐす

しかし笛の音はない夜の事

今宵　月のひかりは
銀いろの歎息を吐きながら
樹の芽樹の芽をそつと撫でてゐる
溫情のこころごころにみちみちたる
しかし笛の音はない夜の事

夜風も浮き[illegible]ましい五月の晩
背後の者は
[illegible]な[illegible]に手をとつて迎へられるまま
天上の月かげにも
狂ほしく甘え心地で
魚のやうに泳ぎまはり
この娘の透垣を窺いたのだが……

纖柔な芝生の青草のなかぶかく
夜露にそつと泪ぐんだその片隅に墓を作し
忍び耐へかねてめざめと
小娘は悲然と啼泣けども
まばらな雜木林の奥手なる
黒堅い古ぼけた洋館造りの一間にて
その父親らしい老人は七十歳に老いながら
いまだ大阪の古書と試驗管とコムパスと
古代めかしい鼈甲の鼻眼鏡とを身離さぬ
慣習の[illegible]かな！
また僕はそつけなく踵をかへし
冷たい表情で默々と瞳をすゑつつ
已が愛慕の古城たる窮理室の燭火のもとで
不可思議の觀念のみどり色のもめんの眞中に
　沒入せむと
歸路を辿る

[illegible]泪のかけにみちみちたる
しかし笛の音はない夜の事

灰の丘

つかれたる我の眼は
外面世界のなにものをも反射せぬ
——心性の鬼の
大集會に躍まするこの頭腦ゆゑ——
ああ 一片の白紙に大雪原を感じ
黑き首筋に
峻嶮な雪山の薄暮を感じるこの宵

しかれどもわたくしは
手近なる手帳を擲して
このわづかなる灰の山に見入りてあれば
獨斷敎義信條に倦み惱む神祕家だちが
波斯中世の秋の世界に
ただ黑き酒を醸み
古城なる美女を漁り
雲も寒く低迷する高原の上
己が愛人と詩を想ひ美酒を啜る
古代を感ず

ああ 灰の山[illegible]
時あって崩落し
室内の[illegible]
また黑く[illegible]
心理の大傾斜面に投影する
灰の山 赤き火をかこみ
黑き黑き灰らはいま
いい
こころのごとくに火ゆる

火を去りて佇めば
心 限りなく淋しくあれども
火に近く瞰望すれば
心ときめき
放肆なる手や足や肉身は
いづくにか奔馬のごとく去らむと希ふ
灰の山は 寥しく 火は嶮し

薄暮の旅人

色靑ざめし旅のもの わたくしは
菅の笠
ふかく傾げてただ急ぐ

ああ [illegible]
[illegible]なく[illegible]
あまつさへ
しばしば[illegible]
黑色の[illegible]そそぐ
しとやかに思想の[illegible]は更けてゆき
ところどころの[illegible]にからむ
歳月の[illegible]身にしみわたる頃なれば
來し方の重荷に肩はゆがみつつ
時あってふと出現る
わが行く末のありとある
儚ないのぞみの一片にあくがれ心地
果てしなく
岩根岩根の嶮峻を踏む
ああ 日は出で沈み
夜は不慮の災殃のやうに
眞黒い脣をひるがへし
小さき人間を呑み終へむとのみ進みよる
私はわが淚さへもとばさじと
胸いつぱいの哀愁に
よろめきながら
ぢつと堪へて矮小の歩をつづる

とうとうと瀧は咲き咲き
叫喚とを胸はわめく
わが胸壁に
いま薄闇と日の暮れかかる
ああ いつか銀の夜の
聖き官能に充實を得悟らう・・・・

わが身の夜半

夜の階陛のたかみより
已に青銅の宝鑰を抛りいだし
ついこその新らしい墳墓の上に
幽紺色の朝明の光を注ぐ
——わが身の夜半
ああ美しい夜黒である

黒色

暗い壁に妬しいものがこの黎明を嗾けかけた
まつくら[illegible]な[illegible]の[illegible]の[illegible]に
[illegible]のやうに[illegible]、黒色と[illegible]は[illegible]たつてゐた
おん身の[illegible]によつてかれを恵むお[illegible]
[illegible]をとり[illegible]して
ささやくが如く谷へすらく
[illegible]のやうに花咲くかれを予はかつて[illegible]し
てゐた
まことにこれに凝視するは予であるが
この黎明日に生存らへる・香を識らぬ
執心して今なほわが情を育んでゐるかみて
ある
影なき鬼は嘲の嚥ひとともにかき消えた
わたくしは虚心して
大空をまた歩みはじめた
ああ 黒色は[illegible]のやうに[illegible]心させる
薄明のなかの微光のやうに
わが身肉を引つ張つてゆく
いま羸弱に[illegible]つて
予は猛ましく[illegible]走つていつた
けれどもつひに[illegible]情はまたまへは
人間の[illegible]汗と[illegible]と[illegible]とたけてゐる
ああ 黒色は
虚空にひとつ萠えてゐる無名の[illegible]だ
たんぴとがかれを視たのか

雙手は神の聖膝の上に

雙手をあげよ
こころゆくまで
脈搏正調にて
[illegible]る自行のことごとく[illegible]でのそきには
つねに雙手をあげよ
[illegible]心たかく——ただただと[illegible]つて
[illegible]
[illegible]したり
ああ 青[illegible]き日かな
雙手は[illegible]の[illegible]の上にあらむ

堀口大學篇



椰子の木

大地の苦惱からのがれる爲めと云ふやうに
ひとすぢに　まつすぐにのび上り
たゞまつすぐにのび上り
頂つねに天上にあこがれて
高くそびえる椰子の木たち！
なやみの觸手を
絶望の表情にふり立てながら
なほ高く
なほ大地より遠く
天の方へと差しのべたれど
天はそこにもあらで
天は理想のやうに
いよいよに遠ざかり
ふるる術もなきに
紫の夕ぐれとなる

椰子の木たちは
そもそも樹性の苦行僧
大地ものかげの底に埋れ
夕星　西天に
銀青の振香爐をゆれば
大いなる黒十字架と身をなして
彼等は祈る
風は梵鐘の餘韻を傳へ
潮音は果のない經を讀む

椰子の木たちは
そもそも　幻の空中寺院
金と　紫の熱帯植物にこそ[illegible]
悩ましい人間慾の
燃え上る匂ひの渦の上にあって
そこにのび上り
そこに身を十字架となして
無言の祈に潜心するは
それは椰子の木たちか
または私の魂であるか

鴉

光栄あるあかつきの
不吉な豫言者よ

誰がお前の言葉に青さめたか！

白日のみ空をかける
呪詛の黒十字架よ

誰が誰を呪つたか？

燦たる夕ぐれの空にとぶ
おびただしい翼ある墓石よ

誰がそんなに死んだのか？

獅子宮

十月の空澄めり
明け方の獅子宮を見しか
うす闇の天鵞絨幕のかげ
白き金星
赤き火星と
默想を通じたり
[illegible]土星
なほ[illegible]木星
[illegible]の上に[illegible]月かかる

十月の空澄めり
明け方の獅子宮を見しか

私は何も願はない

私の歌の爲に
私は何も願はない
空ゆく雲の少し許りと
散つてくる花の一つと
流れる僅かの水と
それ等が青い瞳に
現はれるすがたと
私の歌の爲に
それより他の何ものをも
私は願はない。

私の歌の爲に
私は何も願はない
岸邊の葦にささやく
夕風の草笛と
明るい夏の朝の
日暮すのいいわれ等の家に
幸福のやうに滿ちあふれる
よろこばしい小鳥の聲と
それ等がお前の表情に
現はれるすがたと
私の歌の爲に
それより他の何ものをも
私は願はない。

私の歌の爲に
私は何も願はない
光のやうに明るく
空氣のやうに輕げに擴がつた
お前の金いろの毛髪と
瑞々しい薔薇の房のやうな
お顔の形の正しい少女の乳房と
それ等が私の戀愛に
現はれる姿と
私の歌の爲に
それより他の何ものをも
私は願はない

私の一生の爲に
私は何も望はない
これ等の僅少なもので

私

この心の寂れさ
この魂の貧しさ
わたしの口の中はわたしの味で苦い
どうすればよいのか？
何所へ行きたいのか？
何が欲しいのかわたしの心よ？
魂よ
お前は何故に慰まぬのか
書物も戀人も茲にあるではないか？
わたしには若さが健康があり

記憶の女

一羽の小鳥がわたしの庭に住んで
朝も夕も悲しい歌を歌ふ
一人の女がわたしの記憶に住んで
昨日も今日も冷たい涙を流す
庭の小鳥よ記憶の女よ
君等は嘆くをやめぬのか
君等は泣くをやめぬのか
戀は短く生命は長い
然し仕方もないことだ
泣いたとて嘆いたとて
消えて夢はかへらぬ
死んだ戀はよみがへらぬ

彼女の靴下

シュミイズはなほ取去るべかりしか
遂に彼女の靴下は
彼女の皮膚の一部なりしか
膝の上やや高きあたりより
皺もなき淡紫色の刺青の
すき見ゆる絹の夢
黄金いろの麥の穂の波
桃いろの形よき畝のあひだに燃え上る
美學の中心をやや遠ざかり
彼女の靴下は

ああ對照だ
合奏だ

遠い薔薇

昔の戀がなつかしいので
遠い薔薇を私は思ふ。

うなだれた青い前額の
そのかみの日の情熱。

忘却の上に流れる
ほのかな匂ひの幽靈たち。

昔の戀がなつかしいので
遠い薔薇を私は思ふ。

流星

靜夜の空に星が一つ消えた
虚空の底へ星が一つ流れた

われ等が生命　つかのま光り
音もなく靜夜の底に
虚無への道をとる

夜天いよいよに澄み渡り
靜夜いよいよに深い

天は永劫のかたちに殘つてゐれば
いま　一つの存在がほろびたのだと
一瞬の後　誰が思はう

靜夜の空に星が一つ消えた
虚空の底へ星が一つ流れた

化粧

光　色　にほひ
瞼に墨を塗りをはり
まつ毛に蠟をひく女
紅い脣代赭の頰
持ちあげた手先の巧緻
裸の肩の丸味
ブロンドの髮は野獸の匂ひがする

光　色　にほひ
ああ　かの女の化粧

踊る女

雨のやうなきものが
形をささへる
踊る女は
倒れようとするのだが

星を釣る

暗い沼に絲を垂れて
星を釣る
星を粉にしてのめば
いい詩が出來る

詩法

象徴の付け鼻をとつて

顔を洗つて出なほせ
われ等今日の世界の詩人だ
無意と無必で詩を作らう

韻律の新アメリカ發見のコロンブスであり
そして感情の紅白粉をけづり落せ

老いぼれた詩學の柩に釘を打ち
そして新興の地酒に醉へ

われ等過去の詩の墓の上で
赤い喪服を着て踊らう

氣候

巴里の氣候
東京の氣候
行方も知れぬ女たちよ
君等の住所を誰にきかう?
消え行く虹よ 遠い小鳥よ
君等は私の心に住むが
私は君等の住所を知らぬ
何處の郵便局に手紙を託さう?
虹ならば消えよう
小鳥ならばかへつて來よう
消えぬ戀人よ 歸らぬ女よ
何處へ行つたら君等に逢へよう?
巴里の氣候
東京の氣候
行方も知れぬ女たちよ
君等の住所を誰にきかう?

扇子

そのあたりの空氣が
明るく見えて
白い齒を見せて
扇子が微笑する
あなたの微笑を
かくしながら

射的

射的場にねらつて
霰の彈道學は面白い
パットをねらつたこの指で
あなたの心臓に觸れてゆく

虹

思ふこと
雲の行方
ほのぼのと
消えては
むなし

かいまみし
君が乳房
桃色のもやとや?
つかのまは
はかなかりしが

黄昏の空
桃色から青へ
靄とあらはれ
霧と消え
ああ 乳房は虹だ

その日

ああ その日
その日は何處へ行つたのか
今どこの景色を眺めるか

笑ふとき樹のやうにみどりであつた
泣く時に夕のやうに灰いろであつた

ああ その日
その日は何處へ行つたのか、
今どこの景色をながめるか

わたしが其處に女のせつなさを飲んだ
わたしが其處に男の思ひを注ぎ込んだ

ああ その日
その日は何處へ行つたのか
今どこの景色をながめるか

海の風景

空の石盤に
鷗がABCを書く

海は灰いろの牧場です
白波は綿羊の群であらう

船が散歩する
煙草を吸ひながら

船が散歩する
口笛を吹きながら

要

海が扇子をひろげる
ああ 私は要だ
遠い白帆はさびしい

私に似て
ありありと一人ぼつちだ

鳩

窓の前を一羽の鳩がとんだ
心の上をあなたの思ひ出がすぎた

鳩のはばたきが空氣に孔をあけた
思ひ出の嘴が心臓に血を流させた

窓の前を一羽の鳩がとんだ
心の上をあなたの思ひ出がすぎた

太陽と蛇

わが罪よ
わが惡意よ
すべてわが惡しき存在よ
汝あきらけし
太陽の如く、

わが肉を
わが魂を
すべてわが悲しき存在を
嘲りきる悲しきおのれよ
汝は見るか
夏日青葉にねむる
蛙を見しや？

太陽の明るさ
蛙の楽しさ
ああ　わが存在の悲しさ

私は歌ふ

流れることにもあきて
水がつぶやくやうに

長い旅路に疲れて風か
ささやくやうに

人生　この退屈な待合室で
死を待ちながら私は歌ふ

うそ字

私の心臓
人生の小學生
お前はまたしても
うそ字を書きました
手帳のうそ字は消せばよいが
ゴムも消さない思ひ出がある

キャンデイ

キャンデイをしやぶるやうに
少女よ　この心臓をしやぶるがよい

レモン入りのキャンデイのやうに
ただもう甘ずつぱい心臓だ

甘いばかりでは退屈で
粗い舌ざはりが欲しかったら

キャンデイを嚙み碎くやうに
少女よ　この心臓を嚙み碎くがよい

五厘の笛

日夏耿之介を泣かせる爲めに

友よ　あきらめよう
地球はまはる
私の五厘の笛では
人々は踊らない

友よ　あきらめよう
人々は踊らない
私はいきが切れる
私の笛はだまる

五厘の笛だ　五厘の笛だ
私の笛は五厘の笛だ
地球はまはる　人々は踊らない
友よあきらめよう　友よ　あきらめよう



福田正夫篇

夏まつり

あゝ、限りない太陽の[illegible]下に、
若者たちは[illegible]。

[illegible]、
いつぱいに[illegible]、
[illegible]、
[illegible]。

かゝる労働の[illegible]は、
都會のもとの[illegible]で、
またふしぎな力である。

自分を投げ出して行く、
労働の後の安息に、
すべては[illegible]のさわぎ——夏まつりの、
よろこびには[illegible]に　いつぱいに　ふりそゝぐ。

石工の歌

山[illegible]の[illegible]を[illegible]で石工の歌、
曇り日のチラチラと雪のふる日、
いたましいメロデイでひゞく石工の歌。

その歌には労働の[illegible]がこもる、
その歌には汎労働の精神がこもる、
そして家には[illegible]と父を待つ子供の愛[illegible]とぶ。

あゝ、石[illegible]の[illegible]、
[illegible]たゞに[illegible]、
地を[illegible]石を[illegible]、
戰ひは君の腕に、
明朗は君の心に
愛は君の渾身にこめられる。

うたへ、君の[illegible]を、
そして[illegible]で、
そして槌をふるひて君の心が[illegible]に[illegible]るだらう、
そして[illegible]あらう。

小さい戰士

子供よ、小鋏を目に、
君も働いて來たか、
うれしさうにいそいそと、夕餉にかへるのか、
赤い頰、黒い手、
あゝ、君は人生の小さい戰士だ。

大空への思慕

空をさしてゐる大樹、
のびよ。その枝、その幹のごとく。
わが胸の奥にも、
大空への思慕がうめきながら、
生の呼吸を忙しくする。
あゝ、光の消え行く夕暗に、
わが心の中の大樹はひつそりと立つ、
しづかにしづかにのびて行く、
わが正しき生命の影を地上に長く曳いて。

月かゝりて空に

月かゝりて空にある時
砂を踏みながら歸つて行く漁夫の群、
渚には光砕け、光砕け、
波の音離れて、海聲に語る彼等とコーラスを
つくる。
かゝる一瞬！
おゝ、かゝる一瞬ありて、海に住む者は幸福
だ。

地と空の交靈

林の高い樹の並列に、
強く涙ぐましく惹きつけられる、
その樹の、深い沈默に。
沈默の行者こそ偉大な靈のひゞきにさゝ
やく、
あゝ、根をはつて空に、
廣く手を擴げる樹々よ、
[illegible]靈が、
[illegible]中にうめいてゐる[illegible]

落葉林

五月の落葉林に、
成長と凋落とが、
深い沈默で鬪ひあつてゐる。
緑の葉が風に揺らぎ、
若い枝が手をのばし、
生が鮮かに大空へかけのぼらうとする、
大空は哄笑ふ、秋の心で笑ふ。
凋落よ、それは時のすがたである、
しかし誰が知らう、永遠の意思を、
樹はのび、葉は大きく育てば見る、
風は吹き、地は固く根をしつかと摑む、

明るき虚無者

私はからつぽ、無、虚無、空……

いくら入れても埋りはしないのだ、いつぱいに
ならないのだ、
黙つてゐろ、あゝ、それで充實してゐる私。
これでいゝ、
永遠にこれでいゝ、
どうともならないで苦しくて寂しくて惱んで
ゐる私、
世界、空間、時……それらの一切から消え果
てた樣に、
地の底にうめいてる私。
大空よ！ 風に吹かれて、
大地よ！ 土の底にうづめられて……
それで一切を思はう、さうだ一切の魂に生
きよう。
私は死だ——唯惱みにだけはつきりと生きて
ゐる。

鷗

啼いて海の上に
うかんでゐる一羽の鷗……、
あらしの前の沈靜の中にゆれながら、
ゆらゆらとなにを嘆く
あゝ、鷗のすがたは、
寂しく悲しく死の天使のやうに水の上にうつ
てゐる、
空は暗く、急雨がさつと降つて、
風はないけれど、
なにとなく物恐ろしい氣がする。
鷗よ！
丁度それはよるべない人間のすがた、
いゝ、あらしの狂ふ前のしづけさに、
ぢいつと思ひ沈んでゐる。

炎の花

燃え上る熱炎！
人間は疾風のやうに地獄に向つて、
身を燒く焦熱を求めてゐる、
この生は地獄どころか、
もつとひどい修羅場ではないか、
煮られてしまふ熔鐵工、
縛られた[illegible]工、たゝきつけられた鍛鐵工、
使ふ機械に使はれて呻いて、
血の滴りは更に赤さを[illegible]る、
それを道に投げるのか、
生活の火の車が[illegible]た。
青ざめて青ざめ[illegible]しまふ、
暗い灰色の、[illegible]人間の[illegible]になる、
赤く赤く心は燃えれけ
暗い虚無の色の黒いことりでふに[illegible]られてし
まふ、
一面の窓のない盲目の家の、
近代的[illegible]の場所には見られるのだ、
燃え上る熱炎は、
その時赤い赤い血の窓から、
炎の花を咲かせるのだ、
炎の花の[illegible]る種子は、
風に吹かれて[illegible]け出す[illegible]出す、
[illegible]の中で、[illegible]と走る新しい種子が、
人間を焦熱の地獄に走らせるのだ。
走らされて[illegible]地獄まで、
地獄[illegible]人間の魂は往く[illegible]、
[illegible]

一生おとなしい魂の生命なく、
火のやうに熱かつて、
地獄までも焼きつくして、
それでいゝぢやないか、
夕日が赤ければ、
私達曠野の旅人も赤くなる、
地獄へは遠いから、
恐らく曠野の中で人間は赤い凱歌を、
うた聲高くうたひ出すに相違ない、

錆びた嬰兒

俺は燻された嬰兒だ、
雷と火に、裸で鍛へられて、
鐵のやうに光の下に曝された、
赤く錆び、曇り、とろけた、
けれど俺は立ち上る、
俺は錆びた劍だ、鈍い刃先で突きとほしてやらう、
間に合はなければたゝいて
骨をめりゝと挫いてやらう、
手ひどい武器になつて……正義の手で焼きなほして、
[illegible]い刃先で突きとほさうと、
俺は錆びた嬰兒だ、生命の嬰兒だ、
焼けても生命は消されないで來た、
俺はいつも[illegible]れた生命を一つ、
たつた一つ持つてゐると誇らう、
俺は赤く錆びた嬰兒だ

地を翔けり行く星々

"To be as it is to be."
——[illegible]トラウベルに捧ぐ。生の頌歌

地を翔けり行く、幻の星々を見た、
青く赤く、燃えつゝまた搖れながら、それは
聖火のやうに、
久遠の魂のありかをたづねてゐます、
散り流る、速く翔ける光の幻想、
空の星々はまた其影のやうに高く花輪を描き
ながら……
さうです、幻の星々はほんの小さな[illegible]きま
かゝも、
その光の瞳で[illegible]のぞくのです、
山々谷々を巡つて、林の蔭、水の邊り、森の
中、[illegible]
貧しくあるお家に、罪人のごとくであつて[illegible]
[illegible]はすき[illegible]
いゝえ、[illegible]ではなく、
星々は高貴の門を照し[illegible]
賤い、貧しき、病み、虐げられた[illegible]
[illegible]のです、
牢獄のすきまから囚人の夢に通ふのです、
汚れたと言はるゝ者、罪人だと言はるゝ者、
貧しき者と言はるゝ者の枕邊に、
自由の花輪は幻のやうに飾られてゐる、
星々はそしてひそやかにさゝやく、
あゝ、なぜこれら久遠の魂は悩んでゐる
か、
これはまあ[illegible]、これは矛盾だ、
私は地を翔けり行く、
幻の星々を見たのです。

光の銅鑼

太陽がぐわんぐわんぐわんと鳴り出したのです、

空の上で光のどらがたゝかれ、
うろうろと食を求めてゐる群衆を煎りつけます、
六月です、それはとにも烈しい人間の飢ゑ！
いつたい群衆は、どこをめざしたらいゝでせうか。

僕は惧れます、僕は！
そのくせ僕は谷底をめがけてゐるのです、
どこへ行かうと人間が、
どうにもならないやうな氣がしながら、
それでも水が海をめがけてゐるやうに。

僕はたしかに轉落する者です、
黎明を待つて消えて行くインテリゲンチャです、
が、それがどうしたのでせうか、
君は埒もなくしやべつてゐるが、
君もその生れを、生活を拒むことは出來ないのです。

群衆！ それらの中に僕はまじつてゐます、
けれど何にもわからないのです、
[illegible]の黄ろにかすんでゐる谷間の、
その煙のやうな行方が定めかたないのです、
心を鞭うつ衝動に焦りながら。

僕はとにかく外に出ることを欲したのです、
すつかりだめになつて來たのです、
野原に雑草がいつぱいです、
それらの生きてゐる働きの中に、
僕はころころところがり込みます。

空は陣痛を暗示するのです、
大地はうめいてゐます、
さて、僕は歩きはじめなければならぬ、
空の上で光のどらがたゝかれます、
太陽がぐわんぐわんと鳴り出したのです。

陽だまり

ねころんで林の陽だまりにゐる。

僕は實在を信じたくない。
小春日はねむたい虚無であらうが、
空を見てゐるのでもなく、
その展望が見える前に、
僕はうつとりと想ひの中に埋つてしまふ。

人間を信じようとする、
憎んだり、悲しんだりしなくてはならぬ、
信じないとどうなるか、
生憎、そこまで判らないうちに、
陽はあたゝかだ、
僕は夢みごこちになつてしまふ。

が、雲が一つ、それでもかかけた、
うれしくない、
ねむ氣がさめてうそ寒くなる、
人生がつめたくなつたやうに思はれる、
それが消えるまで、
僕はぢつとしてゐようか。

雲が逝く、ちらりと陽が來た
が、また雲がくる
僕はあきらめて立ち上る、
實在がどうであらうと、僕はそれをどうしようもない、
ひかりのリズムの悲しいのは、
また僕が持たないからだと思ふ、
僕は林の中で枯葉に頭をさげてしまふ。



千家元麿篇

車の音　わが兒に[illegible]　立ち話　眞夜中の宴會　[illegible]　[illegible]
小[illegible]體操　[illegible]

車の音

夜中の二時頃から
電車の大通りに田舎から百姓の車が
カラ／＼カラ／＼と小さな[illegible]木の音を立てゝ、
無數に遣つて來る
勢のいゝその音は絶える間もなく、賑やかに密集して來る。
人聲は一つも聞えない。何千何萬と知れない
車の輪の、
飾り氣の無い、元氣な單調な音許り
天から繰り出して來る。
遠く、近くから、カラ／＼カン／＼、調子面白く、
[illegible]るところから[illegible]て、[illegible]に集り
地に[illegible]れて、[illegible]にひろがつて來る夥しい木の音の音、
夜もすがら
眠れる人々の上に天使が舞ひ下りて、休みもせず
舞ひつ踊りつ煩さい位耳を離れず、[illegible]な歌を歌ふやうに。
氣がつけばます／＼音は元氣づき、密集團となり
朝の來るのに間に合はせる爲め
忙しなく天の戸を皆んな繰り出した音のやうに
喜びに滿ちた勇しい同じ小さな木の輪の音が
恐ろしいやうにやつて來る。
[illegible]しい[illegible]時[illegible]二時の間に
[illegible]
[illegible]過ぎて仕舞つたやうに
[illegible]まで同じ音で此世へやつて來る
[illegible]なる　その音は
天使が見離した夢のやうに消えて仕舞ふ。
[illegible]との[illegible]なぎをへだてゝしまふ
何處かへ蜂が巣を替へて仕舞つた跡のやうに
一つも聞えなくなる
[illegible]になつた頃には今度は地上に[illegible]
音を聞く
馬鹿らしい[illegible]の自動車の[illegible]や、
間の抜けた眠さうな不平をこぼす汽笛や、
だるさうな時計の響が味もなくあつ[illegible]、こ[illegible]
[illegible]で

眞似をして仕舞つたやうに、自信も無く離れ
離れて居る。

あゝ[illegible]、西の[illegible]夜も[illegible]夜も、
自分の頭に響いて來る
無數の百姓の車の音は自分に喜びを運ん
で來る
飾り氣の無い木の音のいつも變らない快さ
天から幸福を運んで繰り出して來る音樂、無
數の幸を運へる、
その一つ一つの音に熱中した心の底から親切な
音がいつも、無數の車の音、樂しい、賑やかな、
樂しい音
あゝ汝の勝利だ
その一生懸命な小さいけれども氣の揃つた
豐富な百姓車の音の、堂々と繰り出して行
く音、何でも負けない
道を讓れ
あゝ美しい木の車の音の行列よ
どんどん繰り出して來い
大空の下に來い、
下界を目がけて、直線に[illegible]こちらか
ら[illegible]て來る[illegible]のやうに
音樂で目ざしてその一絲も亂さず、整然と
同じ法則、同じ姿勢に
立派に揃つた、木の音で
電車道を踏み鳴らして行け、進つて行け
揃ひも揃つて選り拔きの、よく洗はれた手入
の屆いた、簡單で、
率直な、木の車の自信のある安らかな音色よ
何ものも御前の音に敵ふ奴は無い。
憎々しい惰弱な利己的な汽笛や不平な野心の
遅い機械の音より
どれ程
御前の勤勉な飽きない木の音の方が、俺は大
好きだか知れないぞ、
前にゆくものの音を受けついで、後から來る
ものに傳へて
小兒のやうに生れて來た、
汝の血を受けた、繰り出す音は
出世するものではない、天上のものだ
音だ、[illegible]きだ。

あゝ又氣がつけば賑やかな、いつも機嫌な木
の車の音は
滿ち、溢れ、盡きず繰り出して來て
ぴつたり跡を殘さず消えてゆく自信のある歌
ひぶりよ、神來が來り
大撹亂を[illegible]やうに[illegible]
も殘さず
漏れる事なく[illegible]
無數の木の音の音
わが愛す、喜びの歌

平易で味の無いやうで
無限な味の籠つた
天の變化にも追ひ付く、單調な音の歌
大衆の音、賑々の音
簡單で[illegible]た、よく洗はれた、手入れのいゝ、
親切な車の[illegible]の音、
氣の揃つた[illegible]かなコーラス
毎朝來てくれ、
毎晩調子を揃へて繰り出して來て呉れ
巣鴨の大通りを田舍からつゞいて來る
無數の百姓車の木の車の音

俺は毎朝待つて居る、きつと氣がつく
御前の來るのを待つのは恐いけれど
來てしまへば俺は元氣づいて躍り出す、
氣がつけば引つきり無しに這つて來る、神來
の喜び
木の音の行列、新しい星の歌、一粒選りの

[illegible]しい景色
天の戸を[illegible]る音楽の響、樹の影
[illegible]った[illegible]
行く路

わが兒は歩む

わが兒は歩む
大空の上に下ろされて、
翼を切られた鳥のやうに、
危く足早に行く、
道の向うには、
地球を包んだ雲の[illegible]をして、
風知らず[illegible]日はその上に大波を立て
[illegible]居る、
風は地の底から涼しく吹いて来る
自分は子供を追つてゆく、
道は上り下り人は無關係に現はれ又消える、
明るく或は暗く
景色は變る。
わが兒は歩む

道の上に積つた小さな石に躓いて、
むやみに足を[illegible]引張さうともち上げて
[illegible]
自分の靴を[illegible]、
幸福は足早に逃れて行かうとする、
われを捨らて
どこまでも歩いて行く、その足の早さ、快い
の足の早さ、
路の高い處に登つて下駄の商人が居て荷を下
ろして居る
わが兒はそこに立止まり
客寄[illegible]の年寄りの顔を覗き込
み、
腰をかゞめてものを問ふ
商人は大きな眼鏡をはづして見
機嫌好く[illegible]
暫らくそこでわが兒は遊ぶ。
わが兒は歩む
あちら、こちらに寄り道して翅を切られた鳥
のやうに、
幸福の足の危さ、
向うから屑屋が來る
いゝ御天氣で一杯屑の集つた大きな籠を背負

[illegible]
わが兒は[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
をする。
[illegible]ほい、[illegible]
[illegible]自轉車で[illegible]
中に、
うまく[illegible]子供は[illegible]
り[illegible]行く
わが兒は[illegible]
[illegible]
わが[illegible]自轉車[illegible]
彼方の[illegible]消えてゆく、
わが兒は歩む
嬉しさうに[illegible]
捕まるまいと大急ぎ
大きな犬が來る、彼よりも背が高い
然しわが兒は恐がらない、恐れない
喜んで見て居る。
笑ひ聲を立てゝ犬のあとについて行く

わが兒は父に
[illegible]に一寸と戯れ、挨拶し、關係のある無しに
拘らず
通る人にも誰にでも愛嬌を見せる。
不機嫌な顔をした女が男が通つて
彼の挨拶に氣付かないと
彼は不審相に悲しい顔付をして見送る
がすぐ忘れてしまふ。
[illegible]
[illegible]
「[illegible]」と[illegible]手を横にしながら[illegible]／＼
[illegible]微笑にしつかり
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
わが兒は[illegible]小さな[illegible]一人[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]好奇心と[illegible]

彼等に分けてくれる。
何にでも氣がつく子供等は彼の特色を發見し
て呼んで
「首領」は名譽だといふので[illegible]た。—
かくして何も先へ先へと歩み行く
われ[illegible]とらへて抱き上ぐれば
[illegible]
顔[illegible]
[illegible]る
自分は[illegible]の名を呼びあわてゝ木蔭へ
つれこむとそこはひや／＼と
火をさます風が吹いて來て
彼は[illegible]入る。
一生[illegible]
一生[illegible]
自分[illegible]

立ち話

[illegible]家へ歸つて來る途中で
[illegible]
二人は[illegible]

妻は自分に子供を注意した
[illegible]しるに
[illegible]な[illegible]
[illegible]
枝になつた果實のやうに[illegible]引きしまつ
た小さな顔が
默つて笑つて居た
實へやうもない可愛いをとなしい顔よ
[illegible]滿足顔[illegible]
自分[illegible]
りこそ[illegible]ところで出會つ
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
てはきまらない、行つて[illegible]いで
[illegible]笑つて居ましょ。

眞夜中の宴會

ああ眞夜中、ふと目をさまし窓に立つて行つて
外を見れば、神秘世界の宴會は開かれて居る。
もう餘程前から開かれて居るらしい
多くの人は死んだ友も子も親も兄弟も友人
　も無數の知人も
打ち連れて早くから行つて居るらしい、
自分はこの招待の日を忘れて居た事を思ひ出
　して口惜しくなる
もう今から行つても遲い氣がする。宴會は下
火らしい。
いや今が絶頂かも知れない。自分は一人窓に
　佇んで見る。
木は一杯魚のひそんだ大きな藻のやうに
靜かに光りを放つて潑刺として入り亂れ
一夜の中に凡ての美を焦燼し切るやうに
優しく強き姿をして整然と佇み
全世界から美の粹を集めた星は少し赤味を帶
　びて輝きを競つて舞踏し
夜の更けたのを知らせるやうに
少し疲れた歡樂の宴の再び賑ひを新たに
　つけられるやうに
聞くも美しい音樂の音は
一齊に鳴る拍手のやうに空中に入り亂れ響き
　合つて
無數の細かな音を發し
幾度も幾度も同じ事を繰りかへされ
宴會は更に絶頂へ辿りつくやうに
あり餘るところから新たに泉の湧き出され
　たやうに
一氣に何倍も光り輝かせられ
燈の數は増され
夜のふくるまで壯麗無比の宴會はつゞく
自分はもう招きに遅れたのを悔まない
自分はそれを見てゐるのだ。
自分も内に優しい力が生じ、勢ひが加へら
　れた。
自分は詩人だ。
一篇の詩をこの宴會に捧げようと思つた。

雁

暖い靜かな夕方の空を
百羽ばかりの雁が
一列になつて飛んで行く
天も地も動かない靜かな景色の中を、不可思議
　に動いて
紐と紐に一つ一つセッセと羽を動かして
黒い影を残して
靜かに音もなく空を横切つてゆく
前へ行つた雁の心が騷がしいのだらう、
息切りがして後れて居るのもあるのだらう、
たゞ鳴聲は耳には聞えない
彼等は皆默つて、心でいたはり合ひ勵
　け合つて飛んで行く。
前のものが後になり、後ろの者が前になり
心は心を助けて、セッセセッセと
勇しく飛んで行く。
その中には親子もあらう、兄弟姉妹もたへ
　あるにちがひない
この寒氣をおかいで靜かな風のない夕方の空を
　運んで、
一群になつて飛んで行く、
暖い一團の心よ、
天も地も動かない靜かさの中を波打りつゝ動
　いてゆく
默つて大きな早さで
見て居る内に通り過ぎてしまふ。

今宵吾が家の

おゝ今宵吾が家の内の明るさよ
[illegible]の如く擴がつていづ
くれ[illegible]、
[illegible]に満ち[illegible]
妻子は[illegible]に、[illegible]にありて
このすばらしい明りの中に電光の如く心を
とり冒はしたり、

おゝ今宵吾が家の内の明るさよ
久し振りにて[illegible]を得たる貧しき家の如
く
すばらしい光はいづこにも輝き渡れり
くすみたる[illegible]、[illegible]たる障子のかげより
隠れたる[illegible]は現はれ給へり

おゝ今宵吾が家の内の明るさよ
吾この[illegible]分たむと欲す
心[illegible]未来の[illegible]を案ずる勿れ
妻よ、[illegible]やさぬ[illegible]
吾よ、[illegible]未来[illegible]ふ勿れ

おゝ今宵吾が家の内の明るさよ
[illegible]は吾が家の[illegible]とりを通過し給
ひ
[illegible]悲しみをその光れる剱にて[illegible]
[illegible]
貧しき[illegible]子よ、案ずる勿れ
吾等が未来は目くらむ許りの輝きに満てり

おゝ今宵吾が家の内の明るさよ
吾等は輝ける白刃をもちたる天使の内に閉ま
れたり
さながら[illegible]は壁一重のところにあるが如し
おゝ今宵吾[illegible]は夥しく[illegible]れり
吾[illegible]を人々に與へむと欲す

秘密

子供[illegible]
裸に[illegible]に
[illegible]小川[illegible]
魔法[illegible]やうに
家の中を[illegible]
[illegible]何にでも[illegible]も尻でもぶ
つけて
冷たい[illegible]に觸れた嬉しさにかけ廻る
母[illegible]もつてうしろから追ひかけ
る。
裸になると子供は妖精のやうに痩せてゐる
追ひ[illegible]の隅に息が絶えたやうにひ
つついてゐる
まるで小[illegible]、うしろ向きで。
母は秘密を[illegible]ない様に
子供をつかまへるとすばやく着物で包んでし
まふ。

櫻

冬枯の[illegible]女の飾りの無い姿を紡んで
すらりと[illegible]つてゐる
何と云[illegible]小枝の群れ
千も萬も[illegible]な小枝が
優しく[illegible]
平和な[illegible]下に彼女の[illegible]を
[illegible]と[illegible]してゐる。

百田宗治篇

淺草　[illegible]　高士の[illegible]　[illegible]

歸り花　[illegible]　[illegible]



淺草

I

淺草は[illegible]の[illegible]の下に[illegible]てゐる、
[illegible]く[illegible]しい[illegible]のなかに、
淺草は[illegible]れてゐる一疋の猛獣のやうに、
反[illegible]し、[illegible]をあけ、
のたうちまはつてゐる。
[illegible]のなかに、[illegible]た彼女の狂亂を
見、
[illegible]あげ
狂奔するその四肢を[illegible]する。
彼女は[illegible]かれてある一疋の猛獣である。

あらゆる[illegible]の、[illegible]と[illegible]と[illegible]と、一
[illegible]の[illegible]が、
[illegible]にその燃料を[illegible]つてゐる。
いつのまにも知れず、一人の[illegible]を[illegible]け、
[illegible]のやうにそれは燃えあがつた。
[illegible]り、焦げ、燒け、
それは次第に新しい部分に浸潤して行く。
それは巨大な狼煙である。
田舍の八月の夜に、
[illegible]夜のやうに昆蟲達を[illegible]きよせる
それは[illegible]けた一つの大洋燈である。

II

その中心を形づくるものは、
夜闇に面伏せた
宏大な、眠れる甲蟲にも似た古い大寺院の
建築である。
高い階段と、低く地面の底に喰ひ込むかと思はれる
その東洋風の破風である。
彼女の不思議な心臓を、
あらゆる汚濁と瀆神から護る爲めに、
それは幾百年の風雨から曝された莊嚴な楯である。
そこには一個の大提灯が[illegible]いてゐる。
暗く、世紀によつて動かされることなく、
その灯は行き交ふ群集の影繪に
不思議な調和と、森嚴の鍍金を附與してゐる。
人々はそこから暗黒と摸索の内庭に入つて行く。

古い寺のやうな、その大建築の横を通り過ぎ
て行く。
運河の[illegible]と曠野の夜とに包まれた
[illegible]の方に行く。
人は、[illegible]不思議な[illegible]
また鳥居や提灯やに飾られた
[illegible]
黒と月は彼女のうへに冷たく、
[illegible]的である。
彼女[illegible]の夜に、
それは[illegible]心臓のやうに、
[illegible]に沈殿してゐる。
彼女は、[illegible]ない、
しかし一切は彼女の[illegible]の中にある。
それは冷艶な彼女、
透き通る白い[illegible]
彼女は神秘[illegible]、
不思議な合奏[illegible]、
その永遠の[illegible]である。

Ⅲ

大提灯の[illegible]は
更にその一[illegible]を、[illegible]の上に[illegible]

ってゐる。
それは[illegible]
不思議な[illegible]の上に、
その[illegible]、[illegible]的な[illegible]の意味を
響[illegible]。
それは人工の暈[illegible]であり、
また[illegible]する空間の死の予想である。
（それは水中の祭であり、
色さまざまな魚介の夜の[illegible]である）
五色のイルミネーションは上下に明滅し、
あらゆる[illegible]の[illegible]門は開かれて、
白[illegible]の妖女達[illegible]往来する、
[illegible]の色[illegible]い水泳
に[illegible]、
[illegible]
[illegible]水
中に[illegible]。
[illegible]
不[illegible]を織り出し、
[illegible]行く、
[illegible]、

白粉で塗りかくした[illegible]した肉體の踊り子の
姿が、
[illegible]から見透かされる。
[illegible]女が、
足を[illegible]の[illegible]を吐き散らす。
[illegible]の生活が、
[illegible]の下に
[illegible]させられる。
（それは水中の祭であり、
色さまざまな魚介の夜の[illegible]である）
暗い[illegible]の夜に
不思議な[illegible]映り、
人々は[illegible]の下に集ふ小魚のやうに、
[illegible]入口[illegible]行き
また[illegible]出て来る。
それは[illegible]月光であり、
その[illegible]である。
[illegible]
[illegible]、
[illegible]、
[illegible]。

[illegible]陰惨な[illegible]上の、
汝、白粉と付髭のハムレットよ。
穢れの開花しクレオパトラよ。
痛んだギターのやうな緒を出す
矮小の汝ドン・ジュアンよ。
セヴーラの理髪師よ、カルメンよ。
また白衣の、汝窶れた合唱隊の小娘達よ、
十二月の夜風はそのところ斑らの白粉を凍り
　つけ、
素足の瘦らんだ足が
野ざらしの裸木のやうに顫へてゐる……

IV

（祝宴は終りに近く、
祭の夜は更けて行く）

濕潤な空氣、凸凹した敷石、
傳播する汚臭とぬかるみの小路の奥に、
不思議な死の娘達はその化粧を整へてゐる。
時をとはぬ不自然な春の供給者、
尖つた反抗と、猫のやうな柔順さを以て、
あらゆる飢餓と虐待の下に生きる蒼白の魂。
重苦しい衝動と[illegible]い狂[illegible]

変化を装へた不思議な影像のやうに、
群集はその家々を覗いて行く。
取交される私語、はげしい嘲笑、
誘惑の不思議な囁が
あらゆる格子や戸の隙間から眼に見えぬ網の
　やうに打ちひろげられ、
また投げかけられる。

（月は狂熱の紅提灯のやうに、
傾いた家々の屋根の上にかかる）

混雑と紛亂は夜と共に加はつて來る、
見え難い力と酒精の奔騰が
たちのぼる大氣のなかの一切のものに浸潤し
　て行く。
不自然の春が
その荒涼と憂鬱を焚きつけて、
殺到する。

群集はいや増し、
學生や、水夫や、軍人や、浮浪人の一隊が、
魚のやうに入り亂れる。
怒號と狂喚が突き當り、
火花を散らし、

[illegible]いてゐ
[illegible]
[illegible]月[illegible]、
[illegible]は、
[illegible]
[illegible]
闇に[illegible]、
うばはれた戀の見えかくれする[illegible]のやうに、
星のない空に永劫の謎を語つてゐる）

[illegible]下に燃えてゐる、
[illegible]しい自然のなかに、
それは[illegible]のやうに、
[illegible]し、[illegible]、
[illegible]手を[illegible]てゐる。
それは巨大な[illegible]。
八月の夜に、
雲夜のやうに[illegible]を描きよせる、
それは裸けた一つの大[illegible]である。
[illegible]それは水中の[illegible]であり、
色さまざまな魚介の夜の[illegible]であ[illegible]。

慰安

夕暮ほしづかな樹の間にただよふ、
仄かな白い香かり、
梢から街に
音もなくすべり落ちる風。

空の[illegible]は明るい、
透明な[illegible]ばかりの[illegible]の奥に、
上げ[illegible]休戦[illegible]
星が[illegible]

高天をめがけて

[illegible]なる宇宙――[illegible]
くことなしに居る、
[illegible]
[illegible]、[illegible]
[illegible]し、[illegible]
燃えさかる火のくるまのごとく、
[illegible]
すすみ、[illegible]、たじろぎ、[illegible]も[illegible]

まるで[illegible]なく、
いつくにか到着し、いつくにか己の[illegible]を見出
でんとし、
彷徨ひ、[illegible]一個の星。
あゝ一切の苦悶、[illegible]、死、それらすべて
を内にして、
宇宙をさまよふ一個の星。
星座をもたぬ一つの星。
一切の懐疑、一切の自苦、一切の生長の寸
時もとどまらぬがたき力、
高天をめがけて[illegible]。

幼年時代

空の奥深くで小さい星が瞬いてゐる。下界は
[illegible]として、家々の[illegible]も低く、[illegible]
の[illegible]子供達が[illegible]い、[illegible]
うたつてゐる。

[illegible]い行燈の灯[illegible]いて、大人達は
ひそひそと[illegible]ながら、何か不安な[illegible]
[illegible]、
[illegible]

[illegible]やつてゐる。

何か人間以上の[illegible]
[illegible]の上[illegible]
ゐるのではないかと思はれる。不[illegible]、[illegible]
苦しくて、然も人々は何も知らず[illegible]向ひ合
つてゐる。

子供達は[illegible]つてゐる。子供達は各自に赤い細
紐の端を持ち合つて、くらい川端の方へ輪
をつくつて行く。空の奥深くで、小さい星
[illegible]いてゐる。

雪

雪ふれり、音もなく
降りつもれ
[illegible]、[illegible]、[illegible]
[illegible]

彼女出[illegible]
[illegible]
見知らぬ客のごとくこ

いつしかに、暮るる夕影。
雪ふれり
音もなく降りつもり
庭の樹々、石、土のうへ
霏霏として、白く舞ひつつ……

かげ

庇のかけの落ちてゐるとき、
せまい小径をへだてて、
まだ雪が一列に白く残つてゐる。
——それに
さびしい灰いろの障子のやうな木槿の枝と、
物干竿の影がうすくうつつてゐる。
空には月があり
ほそいせせらぎの音もする。

何もない庭

日がかければ、
何もない庭はさびしい。

日が照つてゐれば、
叢菊の花の咲きにほふ心地がする。

歸り花

冬日のなかの歸り花のやうに
妻よお前はみごもつたのだ。

歸り花

天が降らせた灰だ。
梢についてゐる歸り花のやうに、
その子は寂しい顏をしてゐるにちがひない

受胎

こころかたくななマリアにも、
神樣はその手をお置きになつたのだ。
梢にかへり花をつけるやうに、
神樣はそこにも微笑を殘してお行きなされたのだ。

冬日に[illegible]に、
けふは小[illegible]
天國のはふかたの庭で、
その子は[illegible]、
寂しくその門が[illegible]

味噌汁

朝は味噌汁をすすつてゐたよ
くらいうちの門さきで[illegible]寄席を[illegible]
ゐて、
朝はどの家でも味噌汁をすするんだよ
——どの家でも、
鍛冶屋のやうに火を燃かして、
くらがりのなかで味噌汁をすするんだよ。



佐藤惣之助篇

村村の最端

東部日本の
いき／＼した息子や娘にとつて
村村の東の最端は
はつらつたる波濤の[illegible]や
海の電線をつらねたる
太平洋の、世界で最も古い、そして[illegible]い
心臓を[illegible]ませるところの
風と浪との遊歩場である
地平線も境界線も
みんなこまかな一月の浪の[illegible]で彩ら
れ

海岸に立つて、生活する男や女にとつて
こゝは青空と海原の
天の中央にある生の[illegible]
そしてふしきな憧れをもつて出發する
星と新月の街道の端である

おゝかれ等はこゝに
その美しい地上の最極點に
はなばなしい朝の焚火を置いたり
水の木靴のやうな船をならべ
青天と海とを祭る
大洋の人種としての、その歡喜と正直な力
も
自然のまゝにすてゝ置く
黄金色の息子よ、娘よ

わたしも一歩先きに、その村の東の最端の[illegible]
に
わたしの新らしい詩と力とを喜んで置くも
のだ
海鳥の嘴のある、するどい鳴聲のある
海の最中に
君達はわたしをたすけ
お互に仕事をしたり舞踏する日を
波濤の新聞の上で發表しよう

わたしは太平洋の若者と呼ばれる事で
わたしの血にとつて無上の名譽にしたい
黒鶫や野鴨なぞの
水とほのかな小音樂者を引きつれて
霞の中からとび出したり
日光と[illegible]の[illegible]に立つて

われ〳〵の村から
天然の恩寵を受けたいのだ
　わたしは[illegible]とわたしの
[illegible]の人種で
この村の[illegible]を[illegible]するのみ[illegible]
[illegible]の[illegible]を[illegible]く[illegible]た
そして[illegible]
この村にある最も古く強く
そして清きものゝ友達だ
美しい村の城壁、弾力ある真の言葉のふ
　るところ
われ〳〵古代東洋の
[illegible]採集[illegible]には
この新らしい実在の、[illegible]と花との境界で
血と精神によつて[illegible]してゐる
われ〳〵はこゝに立つて
悠久の[illegible]
日没の大空の華を描いて生きる
　曾てその名もなく、又発見されない
　多くの気流、潮流、大洋の動物等の
　[illegible]い深紫の[illegible]の生活から

はつきりと[illegible]の日の[illegible]に[illegible]
おゝわれ〳〵の[illegible]
新らしい自然の[illegible]の子供等よ
その村[illegible]の東の最端を持て
[illegible]な[illegible]に[illegible]の[illegible]
鏡のやうに[illegible]に照りかゞやく[illegible]
地球が自ら[illegible]
鮮麗なる引力を運ぶやうに[illegible]すること
を

娘

　村をあるいてゐて
[illegible]深い大きい[illegible]花のついた[illegible]木[illegible]の中で
[illegible]をして[illegible]つてゐる娘を
見る
この地球ほどあかるい素朴な存在の
天然の楽器をもつてゐるところはないと思ふ
その上に父水と花とをもてる
誰にもつかない情人でいつぱいの
　又ある時は
花だの蔓だの、星だの雪の図案をもつた衣裳

の[illegible]
或はその[illegible]、[illegible]
[illegible]に[illegible]
娘を
その娘さ[illegible]
名もない[illegible]
又[illegible]
　これほど清らかな、[illegible]
わたし達を刺激する[illegible]と、思はず[illegible]いた
めいき[illegible]
　又はその村の[illegible]の祭の夜中に
大[illegible]い手に手を組んで[illegible]
あ[illegible]の若者を
[illegible]
赤い田圃の[illegible]、[illegible]
愛[illegible]花蝋燭[illegible]
或は[illegible]可哀想な[illegible]
どんな[illegible]の寂しい村村を[illegible]
　つて
思ひ[illegible]自分の[illegible]しい庭の椅子をふりかへる
　わたしは村の娘達がすきだ
泥のついた真鍮の飾燭台のやうな足を丸出

しにして
赤褐色の若い大きい手に指環をはめ
誰にも遠慮なく話しかけたり笑つたり
又は戀愛に耳をかしたり屋の
出ると英國よりも背の高い娘達が
奉公にも出ず、我まゝで働き者で
美しい畑の上を、あたらしい明日の日をあ
いて
ばた〳〵麥を刈つたり、種子を蒔いて
田舍の光榮となり
怒濤の上にある日本の未來を護つたり
まつ青な自然界の、美しい動物として
八方に點在してゐるのを
わたしの青色望遠鏡で眺め廻して物思ふの
が。

潜水夫

潜水夫は武裝した星の兵卒である。
金の頭を
暗の中にとぢこめ
全身に
風と水の鱗や皮をつけてゐる。
兜をもつて、星を閉ぢ、世界を隔て
波濤の眼鏡一重が
同じ船の人々と千萬里を異にし
水と星の世界へ出發する。
潜水夫は怒濤から生れた新らしき神であ
る。
金星の眼をかゞやかせ
麻に赤絹の生命をよりまぜた綱と
悲しき呼吸機管を引いて
水中のふしぎな花咲く岩地へ降りてゆく。
海底は無人の荒野の如く
夜の恐怖とたゝかひ、死に襲はれ
海の亡靈と打交つて、深紫の牛のやうに
重々しい水中の開拓にかゝる。
潜水夫は哀れな海の十字架である。
港の下や荒礁の底にゐて
はれやかな星や愛情といつしよに生活する
地上の友や姉妹を
天の燐光のやうに仰ぎながら
電氣ランプをともし、斧をもち
難波船の死骸の上に
この世の金貨をさがしにゆく
武裝した骸骨である。

月

ほんのりした空中の窓よ
あざやかな時間の運轉者が
せつせと月を洗ひ淸めてゐるよ
旅行者よ、農夫よ、航海者よ
その頭の中に燈火をつけよ
日光をもたない囚人も ぬす人も
いそいで美しい影の松火をともすがよい
月は自然の幽靈であるから
一つの眼のうちにこもつた幽情を
地上へ映しながら光と陰の文字をかくよ
きよらかな、淸らかな
寂寥と光明の今宵の晴れに
ほんのりした空中の窓は開いてゐるよ。

喧嘩

彩られた夜の血で
まつ青な街燈の檣に
花と葉をまきちらせ
意地張りた鐵橋が
あつい南風にほてるまで

五月の巷のあらしが
藪の外套をふきまくり
青と赤の碁盤縞の上を
女子供がにげちつたあとに

とべ椅子よ、硝子の花よ
船乗りが大浪のやうにおほひかぶさり
呼吸もつけない眞最中に
いきなり燈花を叩きやぶつて
鋭いサーチライトを照らし出せ

赤と黒の闘ひよ
スペイン風の豪奢な頤で
小さい獅子を猛らし
夜の祭の大きい牛の中へ
汝の歡樂の叢ひをあびせかけよ、

星的生誕

梢のあばらやで小兒が生まれた
どうしてこの嬰兒に、かの火の輪がかからぬ
事があらう
その最初の眼ざしに光が昇り
夏いろの母から熱がともり
野山の深みからあらはるる曙光が
あいらしい田舎の船をうかべ
木木はしげつた、水は杳かにながれる
牛は吼え、孔雀は茂りに巣をつくつて
しかも稚い戀の繪模樣をひろげた喜びる。
神的ともいひたい、あらふく喜びがきつとか
かり
はるかに恒星と遊星はたがれて
この下界の孤居にある母をふかめ、小兒を導
からと
見えぬ虹、雲と光線をはりまはした
いまたれか新たなる靈の中に、あらたなる
一つの雷をおき
一つの世界が木かげから[illegible]
かの明星とともに手をさしのべて、[illegible]
する花の力を[illegible]たよう
そこにはいつも火の[illegible]がかつた
琵琶咲吃風の[illegible]かな[illegible]念がまひさがつて
ゐる。

西遊記の一節

なんといふ微風いろの若い聖者であらう
膵のなかから青い蓮の花の咲く女たちの村で
あかるい柳の陰にも眠ることをあへてしない
ふしぎな旅行のさびしい塵にうもれて
雲間の半月のやうにふるへてあられる人よ
今宵は又どんな妖怪が塔臺に宿られるやら
三人の弟子は一瞬に雲中の山河をつきぬけて
夜あけるまでは空中の戰爭にいそがしい
沙悟淨よ、きよけき水と穀物とを求めよ
若い聖者は古い木の根に倚つて
しばらく珠のやうにまどろみ給ふであらう
靈鷲山ははるけき雲の峯にかくれ
まだ光明のさす國土への路はわからない
黑雲はながれ、腥き風は聖者の肩をたたかれ

星辰はかすかに衣[illegible]を止めてゐる
その時、いちばん黙つて、いちばん寂しい沙
恒河よ
おまへは何を求め又ひとり涙をたれてゐるか
その千年も年老いたる眼、その水底の沈黙が
悉々として若い聖者をつめたくしてしまはう
闇く火を焚けよ、老いよる川の弟子よ
せめて恒河の砂と生れかはり
うつくしい佛の木の實をたべるには
この長いしづかなおまへの寂寞が必要だと
若い聖者は凍えながらおまへを求めてゐられ
るのだ。

南かぜ

この曇り日に、いちめんの晝顔が
色のうすい風の盃をゆすり、ゆすり
あちこちと咲きまはつてゐるところ！
はるかに川邊のかたより、ゆるりかんと
帆は雲にふれて消えもせず、ふくらみもせず
陽氣な、それでゐてどことなくむなしい熱氣
[illegible]と空中にも[illegible]るとも感じらるる

田舎娘よ、ここへ來て寢ころぶといい
うすい孔雀いろに曇つた午まへは
うつくしい怠惰な色もわるくはない
眉をさつぱり落したやうな
この晝顔の淡々たる砂原では。

南方哀詞

まつしろな鷺にでもなつてしまはうではない
か
こころがつかれると夏服もおもたいし
青いヘルメットの庇から百合を眺めると
今宵の月のいろがまぶしすぎるだらうよ
一人ぼつちで涙ぐんだとて何にもなるまいし
さうかといつてうれしくも悲しくもないのだ
雲のかたまりのやうに何にも思ひたくないの
だ
そこで鷺のやうにまつしろに痩せて
一本の白骨と化ける事は何でもない事だ
その白骨の先にハンケチをしばりつけて
ひらひらと風にふかれるところを
せめて鷺と百合のやうに想像されればうれし
いよ

色氣はなれた洒落が見つかつたやうにうれし
いよ。

悔む

今日こそ忘れはてた野の徑へでよう
一炊の春のけむりを迎へに
東面のたかい窓を青青とひらいて
豔艶な凝行をあつめし枕にまで
きよらかな日の花をうちかけよう
あまりに窓をとぢ、衾をかぶつて
ふかい夢の都に遊びたはむれ
この身の神氣を煙と焚いた
時よ、酒の香のない母からの春衣をおだし
今朝はまるで幼兒のやうに
わたしは門へたちいでて
かすかなる春風と心から遊ぶのだ。

現代日本詩家年譜

外山ゝ山　名は正一、文學博士。[illegible]月[illegible]に生る。慶應[illegible]米國に留學し[illegible]。[illegible]ン・アーバー學位をえて、歸朝後開成學校教授、後にその後身たる東京帝國大學總長、[illegible]三十一年[illegible]月伊藤内閣の文部大臣たり。學士會院會員、貴族院議員にして、本邦文教の功勞者。明治三十三年三月八日逝去。

矢田部尙今　名は良吉、理學博士、植物學者。伊豆韮山の人。明治二年[illegible]開成學校教授試補に任ぜられ、後米國に留學、バチェラー・オブ・サイエンスの學位を受け歸朝。後東京博物館長嘱託、東京大學教授となり、三十一年六月高等師範學校長となる。三十二年八月鎌倉に遊泳中溺死す。年四十九。

井上巽軒　名は哲次郎。安政二年十二月廿五日筑前太宰府に生る。明治八年東京開成學校に入學、十年東京大學に入る。十三年七月九日卒業。十七年二月十二日哲學研究の爲獨逸國に留學し、明治二十三年十月十三日歸朝、同月二十三日文科大學教授となり、帝國[illegible]學評議員となり、[illegible]文科大學長となる。大正十二年三月退職し、七月[illegible]日東京帝國大學名譽教授となる。

湯淺半月　名は吉郎。安政五年二月、[illegible]安中に生る。自ら言ふ所に依れば、老生は詩人であるともいはれたいが實は學生である、今も尚老書生である。[illegible]行し學んでは[illegible]りゐた。巖井白潭と云ふ老儒に漢學を學び、京都同志社大學のグリーン博士に英文學を學び、ハルネット博士に希臘語を學び、米國オベリン大學のハンスタイン博士に猶太文學を學び、後にシカゴ大學初代總長となつたエール大學のハーパー博士に希伯來語を學び、メルヴィルデューヰー館長に圖書館學を學び、また英國の牛津大學で英詩を學んだ。それから宮内省御歌所の高崎正風所長や鎌田正夫氏や税所敦子刀自に和歌を學び、京都の谷口藹山畫伯に南畫を學び、淺井忠氏に洋畫を學び、[illegible]明治十八年に十二[illegible]創作[illegible]明治三十[illegible]出版[illegible]詩人[illegible]であると。

山田美妙　名は武太郎。明治元年七月八日、東京神田[illegible]に生る。十八年大學豫備門に入る。十七八歳の頃より新體詩を作る。而も世に出す機なく、[illegible]之を[illegible]しても、新體詩の出版者とて歸るや征[illegible]く所を知らず、遂に涙下らにでる。[illegible]武藏野拾遺。後、紅葉、思案、九華等と硯友社を組織す。二十一年都の花の編輯を擔す。小說を創作し又諸新聞等に關係し、盛名ありしが、晩年頗る不遇、日本大辭書等の編輯に從事し、四十三年十月二十四日逝去す。

小室屈山　名は重弘。宇都宮の人。明治十二三年頃栃木新聞に筆を執り後上京團々珍聞社に入り同紙上に戯作新體詩を載す。自由の歌は最も人口に膾炙す。次いで信州より名古屋に轉じ、新愛知を發行し、又同地方より推されて縣會議員となる。後山陽新聞に筆を採り、晩年東京に來りてやまと新聞の主筆となる。新體詩の他漢詩、篆刻をよくす。四十一年六月十三日逝去、年五十一。

落合直文　文久元年十一月二十二日、陸前國本吉郡松岩村に生る。明治十年十六歳にして伊勢神宮教院に入學す。二十年頃、皇典研究所より聘せられて國文の教師となる。當時日本在來の文法などは一向に顧みられず、大いに之が振興普及に力め、日本文典、日本文學全書、日本歴史讀本、新選歌典等を出す。二十一年國學院の講師となり、また[illegible]の東京専門學校に國文の教鞭をとる。二十六年頃淺香社を組織し和歌の革新を叫び、その機關誌を出し、又「ことばの泉」を編み大成す。三十六年十二月十六日逝去。

中西梅花　名は幹男、梅花の號を以て知られた。慶應三年生。江戸、仙臺、美作と轉々流浪して後、淺草に住す。學歴は殆んどなく、常に萬葉集を愛誦し、俳諧を良くした。初めポンチ畫報「トバエ」を編輯し、後讀賣新聞、國民之友に記者たりし事もあつた。二十四年三月「新體梅花詩集」を公にしたが、同年狂死せりと傳へらる。

大和田建樹　國文學者。安政四年四月宇和島に生る。廣島外國語學校に入り英學を修め明治十三年上京、國文學を專攻し、後男女高等師範に教授す。和歌、新體詩をよくし、就中「鐵道唱歌」は一時天下に傳唱せられ、三歳の童子も是を口吟す。詩集「詩人の春」「いさり火」「深山櫻」その他「雪月花」「新體詩學」「日本大文學史」等の著がある。明治三十七年十二月一日逝去。

北村透谷　名は門太郎。明治元年、相模小田原に生る。東京専門學校中途退學。藤村、孤蝶等と「文學界」を刊行しロマンチシズムを鼓吹す。二十七年五月自殺。後友人等「透谷全集」一巻を編む。（[illegible]）

國木田獨歩　名は哲夫。明治四年七月千葉縣に生る。早稲田大學に學び後國民新聞社に入る。日清の役の際從軍記者として戰に臨む。明治四十一年六月茅ヶ崎に歿す。その詩及小説は「獨歩全集」に收めてある。（[illegible]）

佐佐木信綱　明治五年六月三日、歌人佐佐木弘綱の長男として、伊勢國鈴鹿郡石藥師村に生る。明治十七年東京大學古典科に入學、同二十一年卒業。二十七八年の交、歌壇に革新の機運興るや、その一員として力を盡し、また新體詩を國民之友に、童謠を幼年雜誌に發表し、日清戰役には唱歌を製作して人口に膾炙せるもあり。明治三十八年以來、東京帝國大學に和歌史を講じて今日に及ぶ。明治四十四年文學博士の學位を、大正六年帝國學士院より恩賜賞を受く。著書に「日本歌學史」「和歌史の研究」歌集「思草」「豐旗雲」等あり。

正岡子規　名は常規、歌號を竹の里人と云ふ。慶應三年九月十七日、伊豫松山市新玉町に生る。帝國大學文科中退學。明治二十五年九月十九日[illegible]

規全集」がある。（大正名家第十一節參照）

宮崎湖處子 名は八百吉。元治元年九月二十日、筑前國朝倉郡三奈木村に生る。早稻田大學政治科卒業。基督教牧師であつた。大正十一年夏東京に於て病歿。「抒情詩」の著者の一人。「湖處子詩集」「湖處子文集」小說「歸省」等の著がある。

田山花袋 名は錄彌。明治四年十二月上州館林町に生る。館林小學校を卒へ、十六歳の時上京、苦學を二三の私學で學んだ。「抒情詩」の著者の一人。永く博文館に在つて「文章世界」の編輯に從事した。「妻」「生」「緣」「蒲團」「田舍教師」をはじめ多くの小說、紀行、隨筆の著がある。

太田玉茗 明治四年、武州忍町に生る。名は玄綱。東京專門學校出身。後、「歌舞伎新報」記者たりしことがある。「抒情詩」の著者の一人。身を僧籍に置く。武州羽生町建福寺の住職。

塩井雨江 名は正男。明治二年一月三日、但馬豐岡町に生る。東京帝國大學國文科卒業。日本女子大學教授の職に在ること十年、明治四十三年七月、奈良女子高等師範學校教授となり、大正二年二月一日逝去。「湖上の美人」の翻譯、合著「詩文集 花紅葉」「暗香疎影」等の著がある。

武島羽衣 名は又次郎。明治五年十一月東京日本橋に生る。帝國大學文科卒業。擬古派の一人として詩歌壇に活躍す。合著「花紅葉」詩集「霓裳微吟」等の著がある。久しく音樂學校教授の職に在つたが、今は宮內省御歌所の寄人である。

大町桂月 名は芳衞。明治二年、土佐に生る。第一高等中學を經て東京帝國大學文科卒業。博文館編輯部に入り文藝評論等の筆を揮ひ視聽を集む。又詩、文、紀行をよくし、雨江、羽衣等と擬古派の稱をうけつゝ活躍す。かつて明治大學、第一高等學校に教授たり。大正十三年十二月蔦温泉にて逝去。合著「花紅葉」「黃菊白菊」等あり。別に「桂月全集」がある。

三木天遊 播州龍野に生る。大阪の中學校に在り、後龍野中學校に入る。上京して早稻田專門學校文科に入り、詩に努め、「早稻田文學」に投す。坪內逍遙氏の推賞を受く。繁野天來との合著詩集「松蟲鈴蟲」、外に小說の作二三あり。

繁野天來 名は政瑠。明治七年德島に生る。二十六年京都第三高等中學校に入學、程なく病氣退學。後、東京早稻田專門學校文學部に入る。同校在學中に詩、小說等を「早稻田文學」「文藝倶樂部」「太陽」「新著月刊」等に寄す。この頃の詩を集めて、「松蟲鈴蟲」を天遊と共に出版す。三十年家事の都合に依りて退學。現在早稻田大學教授。「失樂園物語」「中曲物語」等の著、ミルトン「失樂園」「離婚法案」等の翻譯がある。

戸川残花 名は安宅。安政二年江戶牛込に生る。維新當時彰義隊に加はり奮戰、後大學南校、慶應義塾等を經て築地學校に入り、基督教徒となる。爾後傳道生活、教師生活をおくる。文學を好み、和歌、新體詩、俳句を作り「文學界」その他の雜誌に投ず。三十九年

毎日新聞社客員、後に南葵文庫の主任。大正十三年七月逝去。

森鷗外　名は林太郎。文久二年一月、石見國津和野字横堀に生る。大正十一年七月九日逝去。文學博士、醫學博士。「水沫集」「うた日記」「高瀬舟」「長曾我部信親」譯詩「玉匣兩浦島」等詩關係の著書も多い。（全集第二篇）

島崎藤村　名は春樹、明治五年二月十七日長野縣西筑摩郡神坂村に生る。三田英語學校を經て明治學院に學ぶ。二十六年、雜誌「文學界」の創刊に與り文學生活に入る。詩集「若菜集」をはじめ「一葉舟」「夏草」「落梅集」等あり。小說、感想の著も頗る多い。（全集第十六篇）

上田敏　柳村と號した。明治七年十月東京築地に生る。文學博士。京都大學教授。大正五年逝去。譯詩集「海潮音」は當時の詩壇に大なる影響を與へた。特に象徴詩移植の運動に貢獻することが多かつた。著書に「みをつくし」「牧羊神」「上田敏詩集」その他があるが、別に「上田敏全集」として目下改造社より刊行せられつゝある。

與謝野寛　曾て鐵幹と號した。明治六年二月京都岡崎に生る。森鷗外、落合直文に師事した。新詩社を結び、短歌を中心とした雜誌「明星」を主宰した。明治四十四年歐洲に遊び大正三年歸朝。慶應大學教授。詩歌集「東西南北」「天地玄黃」「鐵幹子」「むらさき」「毒草」「片袖」第一集「檞の葉」「相聞」「鴉と雨」「灰の音」譯詩集「リラの花」等の著がある。

土井晩翠　明治四年十月二十三日仙臺南北鍛冶町に生る。第二高等學校を經て東京帝國大學英文科に入り三十年卒業。三十三年一月より第二高等學校に奉職、三十四年辭して歐洲に赴き、英、佛、獨、伊等を巡遊して三十七年の末に歸朝、翌年再び二高に入つて教鞭をとり今日に到つた。詩集に「天地有情」「曉鐘」「東海遊子吟」「曙光」「天馬の道に」（以上）をまとめたる「晚翠詩集」あり。外に二三の散文譯書がある。

高安月郊　名は三郎。明治二年二月十六日大阪市[illegible]町に生る。二十六年初めてイプセンを我國に紹介した。二十八年の史劇作「重盛」をはじめとして、「櫻時雨」「平賀源内」「江戸城明渡」その他多くの戲曲のほか詩集、評論、飜案「リヤ王」等がある。

馬場孤蝶　名は勝彌。明治二年十一月、高知市に生る。明治學院卒業。中學教師、日本銀行員をしたことがある。三十九年慶應義塾大學部教授となり今日に及ぶ。「文學界」の創始者の一人。詞華集「花かたみ」「春駒」等の他「明星」その他に發表せる詩作多く、又、飜譯、評論の著が多い。

河井醉茗　名は又平。明治七年五月七日大阪府堺市に生る。早稻田專門學校に學ぶ。三十八年雜誌「文庫」の記者となり詩を選評して四十年に至る。同年第一詩集「無弦弓」刊行、又詩草社を起して「詩人」を主宰せり。「子供と女」「新少女」等の編輯に與りしことあり。詩集「塔影」「霧」「獨作集」「青鳥」「醉茗詩集」、次作に於ける風景、その他少女物語等の著書がある。

薄田泣菫　名は淳介。明治十年五月十九日岡山縣淺口郡連島村に生る。[illegible]父は[illegible]

教科目、岡山中學に入りしも、文學趣味を得意とせず、第八十一…、數學に忌まれ、在學二年にして校門を去る。爾來、また學校生活を志さず、上京後、上野圖書館に通ひて和漢の書籍を讀む。明治三十一年春より、大阪に於て雜誌「小天地」を編輯す。同三十六年同誌廢刊後京都に移り住む。その後郷里に歸り、同三十九年冬また京都に寄寓す。同四十四年夏西宮郊外に居をトして今日に及ぶ。大正元年八月大阪毎日新聞社に入る。著作の主なるものは、暮笛集、ゆく春、二十五絃、白玉姫、白羊宮、落葉、泣菫小品、象牙の塔、茶話、後茶話、新茶話、茶話全集、泣菫詩集、泣菫文集、太陽は草の香がする、猫の微笑、艸木蟲魚、等なり。

山本露葉 名は三郎。明治十二年二月三日東京下谷根岸に生る。早稻田大學文科に學ぶ。曾て雜誌「新文藝」「モザイク」を發行した。詩文集「小山水」の著がある。

小山内薫 撫子なる號がある。明治十四年七月二十六日廣島市大手町に生る。東京帝國大學英文科卒業。第一次「新思潮」を刊行す。大正元年冬歐洲に遊び、劇壇の實際を視察して歸朝す。初め詩小說等を發表していたが、後、演劇方面の實際運動に從事し、自由劇場、築地小劇場等を起す。小說「大川端」のほか、說集「大川端」「自由」「小山内薫集」等のほか、戯曲に關する編著、翻譯等が多い。昭和三年十二月二十八日逝去。

蒲原有明 明治九年、東京市麴町區隼町に生る。隼雄と名づく。同二十五年東京府立尋常中學校卒業。雜誌「落穗雙紙」の同人となり初めて新詩を公にす。同三十五年與謝野寛氏の「明星」發行以後同誌上に於て、多く新作を發表す。詩集「草わかば」「獨絃哀歌」「春鳥集」「有明集」「有明詩集」「有明詩抄」等の著あり。

横瀬夜雨 名は虎壽。明治十一年一月、茨城縣眞壁郡大寶村に生る。尋常小學四年を卒へたるのみにて、後專ら獨學。詩集「花守」「花守日記」「二十八宿」「夜雨集」「死のよろこび」等のほかに、近業として「明治初年の世相」「天狗騷ぎ」等の著がある。

伊良子清白 明治十年十月四日鳥取縣八上郡曳田村に生る。…中學を經て京都に出で、京都府立醫學校（今の京都府立醫科大學）に入學し三十二年卒業。後東京に出て…國…學…等で學ぶ。…京都…、東京を去り、宮崎、…病院へ奉職し、島根、大分、更に臺灣、京都と轉々し、…より三重縣鳥羽町字小濱に…醫を開業、今日に及ぶ。詩の方面では明治二十七年頃より「文庫」「青年文」に寄稿し、出京後一時「明星」にも寄稿。その…明治三十九年…にて發行せし「よしあし草」にも執筆した。詩集「孔雀船」がある。

吉野臥城 名は甫。明治九年九月、宮城縣伊具郡角田町に生る。帝國大學文學部卒業。曾て新韻會を起し雜誌「新韻」を主宰し、又同志と共に都會詩社を結んだこともある。詩集「小百合集」「野茨集」編著「明治詩集」小說「痛快」等の著がある。

岩野泡鳴 名は美衞。明治六年一月、淡路國洲本に生る。十九年大阪に遊學し、翌年上京明治學院に學び、後仙臺東北學院に學ぶ。大

正七年の夏、東京府下[illegible]に病歿す。曾て林外、御風等と共に雜誌『白百合』を刊行す。詩集『露じも』『夕潮』『悲戀悲歌』『闇の盃盤』『戀のしやれかうべ』『泡鳴詩集』等の他、詩論、『[illegible]史』詩作法等の著あり。小説作又多く、別に『泡鳴全集』がある。

眞下飛泉　名は瀧吉。明治十一年十月丹後河守町に生る。三十二年京都師範學校卒業、直ちに京都小學校に奉職す。この頃より伊良子清白氏と往來し又『文庫』『よしあし草』後に『明星』等に投稿す。三十七八年の頃口語詩を試みた。大正十二年教育界より退き十四年京都市會議員となる。十五年十月逝去。逝去後、西川百合子氏の手になる『飛泉抄』が出版された。

山崎紫紅　名は小[illegible]。明治八年[illegible]月[illegible]日横濱市戸部町にて生れる。小學校卒業以外、別に學歴を持たない。横濱市會議員、横濱[illegible]引所理事をしたことがある。史劇[illegible]『史劇十二曲』『史劇十種』論集『日蓮上人』『大[illegible]』等の著作の他に多くの戯曲がある。

平木白星　名は照雄。明治九年三月三日千葉縣市原郡鶴ケ崎村に生る。遞信省の學校を出て[illegible]等郵便局長たりしことがある。雜誌『白百合』の同人。病歿して今は亡し。詩集『日本國歌』『七ツ星』『敍事詩』『心中お小夜新七』『耶蘇の戀』『釋迦』等の著がある。

野口米次郎　明治八年十二月愛知縣津島町に生る。慶應義塾に學んだ後、渡米して詩人ホーキン・ミラーに學ぶ。歐米にてはヨネ・ノグチとして知らる。英文著書十四五種あり。邦文著書としては、詩集『二重國籍者の詩』『林檎一つ落つ』『沈黙の血汐』その他『野口米次郎詩論』『野口米次郎ブツクレツト』『私は現代風景を切る』等數多い。慶應大學教授。

前田林外　名は儀作。元治元年三月三日姫路市外青山に生る。早稻田大學英語普通科、外國語學校[illegible]語専修科卒業。曾て岩野泡鳴等と共に東京純文社を結んで雜誌『白百合』を出した。詩集『夏花少女』『花[illegible]』等の著がある。

兒玉花外　名は傳八。明治七年七月[illegible]日山口縣[illegible]村に生る。同志社、東華學校、札幌農學校、東京専門學校等に學んだが、いづれも中途退學。詩集『花外詩集』『行く雲』『天風魔帆』等がある。三十七八年の交著す所の『社會主義詩集』は發賣禁止となつた。

溝口白羊　名は駒造。明治十四年六月大阪市の島之内に生る。詩をうたひはじめたるは十七歳の年なり。作品は『文庫』『新小説』『中央公論』『早稻田文學』に發表す。明治三十八年、早稻田大學法律科卒業。詩集『さゝぶえ』を公刊す。後筆を詩壇に絶つ。大正十年帝大文學部の[illegible]を聽き、十四年研究室に入る。

小牧暮潮　名は健夫。明治十五年十一月東京市芝區櫻川町に生る。明治二十年頃より雜誌『文庫』に詩を寄せて河井醉茗氏の提撕を受く。『一[illegible]』を經て東大獨文科に入つてより『[illegible]』に詩を發表した。明治四十年、大學卒業。[illegible]京都、東京、水戸の各地に教鞭をとる。大正十年獨逸に留學し駐まること一年半にして歸朝。[illegible]作及飜譯の詩は『文庫』『[illegible]』『帝國文學』[illegible]等に[illegible]る。

相馬御風 名は昌治。明治十六年七月十日新潟縣西頸城郡糸魚川町に生る。明治三十九年早大文科卒業、永く早稻田文學記者、早大講師をしてゐたが、大正五年郷里に歸住し今日に至る。「黎明期の文學」「自我生活と文學」「大愚良寛」「良寛和尚詩歌集」「懺悔和尚」その他「砂上に書く」「雜草苑」「田園春秋」「凡人浄土」「一茶と良寛と芭蕉」「蔵山雜記」等の著作がある。

與謝野晶子 明治十一年十二月七日堺市に生る。堺市立女學校卒業、明治三十三年以來新詩社同人として歌壇に新運動を起した。大正三年に外遊したことがある。著作書頗る多く、歌集、詩集、評論、感想、隨筆、小說及び童話等、その數五十餘。最近「晶子詩篇全集」の刊行あり。文化學院學監。

石川啄木 名は一。明治十九年二月岩手縣澁民村に生る。盛岡中學校出身。四十五年四月病歿す。詩集「あこがれ」歌集「一握の砂」「悲しき玩具」等がある。それ等全部は「石川啄木全集」に收められてゐる。(本全集第四十五篇參照)

北原白秋 名は隆吉。明治十八年一月を以て福岡縣柳河町に生る。早稻田大學英文科中途退學。三十七八年の交、「文庫」に[illegible]を發表して文庫派詩人の花と稱せらる。後新詩社に入り、去つて「スバル」「屋上庭園」等に詩及び短歌をかゝぐ。詩集「邪宗門」を出すに及んで詩名高く、爾後、詩、短歌、散文詩、小唄、民謠、童謠、隨筆、論文等著作頗る多く主なる單行本に「邪宗門」「思ひ出」「東京景物詩」「印度更紗」「白金の獨樂」「雪と花火」「ローマ字思ひ出」「白秋詩集」一、二、「觀想の秋」「白秋パンフレット」「水墨集」「白秋詩歌選」「新北原白秋集」等の詩集、「桐の花」「雲母集」「木馬集」「雀の卵」「白秋自選歌集」「花樫」等の歌集、その他「日本の笛」「白秋小唄集」「白秋民謠普及版」「綠の觸角」等がある。

平野萬里 名は久保。明治十八年埼玉縣北足立郡遊馬村に生る。六歲東京に移る。明治四十一年東京帝國大學工學部應用化學科卒業。暫く横濱の某硝子會社に就職、後滿鐵中央試驗所技師となる。大正二年獨逸に留學、同四年歸朝、後農商務省技師に任じ爾來東京に住す。大正八年歐米各國へ出張仰付けられ、主として[illegible]に留まり、[illegible]早くより「明星」[illegible]同人として[illegible]を授く。商工省技師[illegible]官。

茅野蕭々 名は儀太郎。明治十六年三月長野縣諏訪に生る。東京帝國大學獨文科卒業、第三高等學校教授、後慶應義塾大學教授となり今日に及ぶ。獨逸に留學し、「明星」その他に詩歌を數多く發表した。他に多くの飜譯紹介あり又小說の作もある。

澤村胡夷 名は專太郎。明治十七年一月一日江州彦根に生る。明治四十二年京都帝國大學哲學科卒業、後上京、美術雜誌「國華」の編輯に從ひ、別に東京美術學校、東京女高師、東京高師等に教職をとる。大正六、七年の間、印度に遊學、大正八年九月京都帝國大學文學部助教授となり、美術史を講ず。大正十二年三月支那に留學し、更に埃及に赴き、歐洲諸國に在留、後米國を旅して大正十五年春歸朝。詩集「湖畔の悲歌」がある。

長田秀雄 明治十八年五月東京市神田區神保町に生る。中學卒業後、明治大學、關西大學

等に學び、曾て北原白秋氏等と「屋上庭園」を刊し、又「スバル」の同人として詩歌壇に大いに活躍した。現在では專ら戯曲を創作し多くの劇團に關係がある。『歡樂の鬼』『放火』『琴平丸』『大佛開眼』『飢渇』等の戯曲集その他小説集がある。

木下杢太郎 本名は太田正雄。明治十八年八月伊豆伊東に生る。第一高等學校を經て、東京帝大醫科卒業。後、獨逸に留學、大正十三年歸朝。目下東北帝大醫學部教授。醫學博士。明治四十年長田秀雄氏の紹介にて新詩社に入り、初めはシュトルム、リリエンクロンなどを喜び、後フォン・ホフマンスタアルを愛し、又有明・敏より啓發せられるところがあつた。繪畫に於ける印象主義の理論、手法、江戸音曲の情調、言葉等を新詩にとり入れることを試みた。詩集『食後の唄』戯曲集『和泉屋染物店』『南蠻寺門前』隨筆評論集『印象派以後』等の著がある。

三木露風 明治二十二年六月二十三日兵庫縣龍野に生る。備前閑谷黌に學びたる後、早稲田、慶應の兩大學卒業。十七歳、處女詩集『夏姫』を出す。『廢園』『寂しき曙』『白き手の獵人』『露風集』『幻の田園』『良心』『蘆間の幻影』『生と戀』『信仰の曙』『眞珠島』『象徴詩集』『青き樹かげ』『小鳥の友』『神と人』『三木露風詩集』『お日さま』等の詩集及童謠集、隨筆集の著がある。嘗てトラピスト修道院に講師たりしことあり。エルサレムより基督教聖騎士の稱號を受く。

野口雨情 明治十五年十二月二十九日茨城縣多賀郡磯原町に生る。名は英吉。東京專門學校文科出身。『別後』『赤い月夜』『砂上の夢』『童謠十講』等のほかに多くの童謠、民謠の作がある。目下日本ビクター蓄音器會社文藝部囑託。

人見東明 名は圓吉。明治十六年一月生、早稲田大學に學び、明治四十年の頃同好の人々と早稲田詩社を結び、同社解散後自由詩社を興してパンフレット『自然と印象』を發行し、次いで、同人雜誌『劇と詩』(後『創造』と改題)を發行し、ひたすら詩に精進しようとした後終に筆を燒いて詩に遠ざかる事年久し。著作としては『夜の舞踏』『戀ごころ』『愛のゆくへ』「近代名詩選」などがある。

福田夕咲 明治十九年三月十二日飛騨高山に生る。斐太中學校より早稲田大學英文科に入り、明治四十二年卒業。在學中東明、介春、孝次郎、暮鳥、朽葉、白楊等と新詩のパンフレット『自然と印象』を發行す。その後一時某雜誌の編輯に從事し、次いで讀賣新聞文藝部編輯員となる。居ること四年、歸郷して家業に從事す。傍ら郷友數氏と山百合詩社を起し詩歌の研究を倶にしつゝ今日に至る。詩集『春の夢』あり。

正富汪洋 名は由太郎。明治十四年四月岡山縣邑久郡本庄村に生る。明治三十七年東洋大學卒業。大正七年より詩誌「新進詩人」を發行す。詩集『世界の民衆に』『一人の思想より』『月夜の海』『豔麗な花』『汪洋新詩集』等、其他評傳、譯詩集、編纂物各數種あり。

川路柳虹 名は誠。明治二十一年七月東京市芝三田臺町に生る。東京美術學校卒業。玄文社、博文館等に入つて雜誌編輯の任に當つたこともある。又「現代詩歌」を主宰し、唱

程一年フランスに遊び、[illegible]。詩集「[illegible]の花」「かなたの空」「曙の[illegible]」「[illegible]を步む人」「川路柳虹詩集」「[illegible]」その他、詩、詩論、美術評論等の著がある。

加藤介春 明治十八年五月福岡縣田川郡上野村に生る。名は壽太郎。縣立嘉穗中學を卒へ、早稲田大學に學ぶ。人見東明、原田譲二等と東京自由詩社を組織し雜誌「自鳩」を發刊す。其後相馬御風、三木露風等の早稲田詩社に入り、更に自由詩社同人たり。早大英文科卒業後、福岡市九州日報社に入る。爾後數年間詩筆を斷ちしも再び詩作を始む。昭和三年四月九州日報社退社、同市福岡日々新聞社に入る。詩集「獄中哀歌」「梢をあふぎて」「眼と眼」等あり。

服部嘉香 明治十九年四月生る。同四十一年早稲田大學英文科卒業。早稲田文學社員、有朋堂、富山房、研究社等の編輯部員、日本中學校、早稲田大學、關西大學等の教員生活を經、大正十四年四月再び東京に住居を定む。以來、詩の本質論、歌論、俳論、國語、國字問題等に關する研究を斷續しつゝあり。

水野葉舟 名は盈太郎。明治十六年四月[illegible]下谷に生る。早稲田[illegible]學政治經濟科に入りしが[illegible]卒業の頃[illegible]高村光太郎氏の感化にて文學に志す。[illegible]十一年の春頃より[illegible]に知られ、小說の[illegible]作少からず。また短歌[illegible]詩等をよくし、その集に「明暗」等あり。

高村光太郎 明治十六年三月、東京下谷に生る。東京美術學校彫刻科出身。與謝野寛氏に就き短歌を學ぶ。一九〇六年三月より一九〇九年迄、紐育巴里等に滯在す。詩集「道程」譯詩集「明るい時」及「ロダンの言葉」等の譯著がある。

山村暮鳥 名は土田八九十、別號木暮流星。明治十七年一月群馬縣堤ヶ岡に生る。立教大學神學部卒業。大正十三年十二月、茨城縣磯濱にて病歿す。詩集「聖三稜玻璃」「三人の處女」「風は草木にさゝやいた」「梢の巣にて」「穀粒」詩文集「小さき穀倉より」等の著がある。

森川葵村 名は勝次。明治廿一年東京淺草駒

[illegible]十八年頃、[illegible]に投稿し、[illegible]氏の門下に入り[illegible]を發表し[illegible]出版す。[illegible]

三富朽葉 名は義臣。明治二十二年八月長崎に生る。早稲田大學英文科出身。大正六年八月二日犬吠ヶ岬君ヶ濱に今井白楊と共に溺死す。自由詩社の同人。[illegible]の作の他に佛蘭西文學の評論がある。それ等は詩と共に增田篤夫氏編纂の「三富朽葉詩集」に收められてある。

今井白楊 名は國三。明治二十二年十二月薩摩に生る。早稲田大學英文科出身。大正六年八月二日千葉縣犬吠ヶ岬君ヶ濱に遊びて、三富朽葉と共に溺死す。自由詩社の同人。

福士幸次郎 明治二十二年十一月五日弘前市本町にて生れる。青森中學校、開成中學校を何れも中途退學、國民英學會卒業。明治四十

[illegible]年初めて詩壇に[illegible]、後、短歌、思想の批評をも發表するに至り、傳統主義地方主義を高唱して今日に至る。[illegible]郷里弘前に在つて地方主義社を主宰してゐた。詩集『太陽の子』『[illegible]』評論集『[illegible]』などの著及び飜譯『イワン・イリッチの死』のほかに多くの詩作、評論がある。

竹友藻風 名は虎雄。明治二十四年九月大阪に生る。京都同志社大學神學部、京都帝國大學英文科選科出身。二十五歲の時、アメリカに留學し、イェイル大學、コロンビア大學に學ぶ。現に東京高等師範學校教授。詩集『祈禱』『浮彫』『時の流に』のほか、譯詩集がある。

生田春月 名は清平。明治二十五年三月十二日、鳥取縣米子町に生る。[illegible]小學校を中途退學し、一家と共に[illegible]に渡り、後大阪及び東京に流浪、[illegible]したこともあるが、[illegible]文學、語學を修めた。詩集『[illegible]』『[illegible]』[illegible]

[illegible]年初めて詩壇に[illegible]きる等、[illegible]等のほかに評論感想集『[illegible]』等數多い。最近の業績としては評論集『[illegible]』及び『世界文學全集』中の『北歐三人集』ビョルンソン三篇、ラーゲルレフ二篇の譯、などを擧げることが出來る。

富田碎花 名は戒治郎。明治二十三年十一月盛岡市に生る。日本大學出身。詩歌の作多く、歌集『貧しき愛』詩集『末日頌』『地の子』『富田碎花詩集』『時代の手』『登高行』『手招く者』等の他に、『民主主義の方へ』『草の葉』の飜譯がある。

室生犀星 名は照道。ほかに魚眠洞の號がある。明治二十二年八月金澤千日町に生る。父に就いて經典を修めた以外學歷はないと云ふ。多くの詩作、俳句、小說、隨筆があり、詩集『抒情小曲集』『愛の詩集』『田舍の花』『星より來れる者』『忘春詩集』等の他『天馬の脚』をはじめ隨筆集、小說集が頗る多い。

萩原朔太郎 明治十九年十一月一日、群馬縣前橋市[illegible]町に生る。[illegible]高等學校[illegible]中途退學。曾て室生犀星等と感情詩社を結んで[illegible]『感情』を發行した。詩集『月に吠える』『青猫』『蝶を夢む』『新しき欲情』『純情小曲集』『萩原朔太郎詩集』等の他に、多くの感想、評論がある。

白鳥省吾 明治二十三年二月二十七日宮城縣栗原郡築館町にて生る。縣立築館中學を卒へ、大正二年早大英文科卒業。詩集『世界の一人』『大地の愛』『樂園の途上』『若き郷愁』『共生の旗』評論集『詩に徹する道』『民主的文藝の先驅』『現代詩の硏究』『長篇敍事詩 青春の地へ』その他、詩、童謠、童話等の作が多い。『地上樂園』を主宰す。

佐藤春夫 明治二十五年四月九日和歌山縣新宮町に生る。慶應義塾大學文學部中途退學。詩人として又小說家として知らる。詩集には『殉情詩集』『我が一九二二年』『佐藤春夫詩集』等がある。（小說家第二十九頁參照）

柳澤健 明治二十二年十一月會津若松に生る。東京帝國大學佛法科卒業。遞信省官吏、[illegible]朝日新聞記者を經て後、外遊一年餘。[illegible]在[illegible]大使館書記官として[illegible]

正十二年作詩發表、最近陽光を讃嘆した。「未來」「詩人」の同人。詩集「果樹園」「見殘しの夢」「柳澤健詩集」「詩論」「現代の詩及詩人」等の著がある。

西條八十 明治二十五年一月東京市牛込區拂方町に生る。早稻田大學英文科卒業後、東京帝國大學國文科に學ぶ。大正十三年四月、早稻田大學留學生として渡歐。曾て「未來」「假面」「聖盃」「詩王」等の同人、現に詩誌「愛誦」を主宰す。詩集「砂金」「靜かなる眉」「見知らぬ愛人」「蠟人形」「西條八十詩集」「彼女」「紫の明星」その他童謠集、譯詩集、散文集等の著書多し。目下早稻田大學文學部助教授。

日夏耿之介 本名は樋口國登。明治二十三年二月二十二日長野縣飯田町に生る。大正三年早大文科卒業。雜誌「假面」「詩人」の同人だつたことがある。定本日夏耿之介全詩集「「ワイルド詩集」「英國神祕詩鈔」「近代神祕主義」「明治大正詩史」などの著、譯書がある。早大文學部助教授。

堀口大學 明治二十五年一月八日東京本郷に生る。慶應義塾に學んだ。十四年間海外生活を送つてゐた。多くの詩及び飜譯があり、詩集としては「砂の枕」「昨日の花」「月光とピエロ」「水の面に書きて」「新しき小徑」「堀口大學詩集」飜譯には「小說 夜ひらく」「夜とざす」「三人女」「フィリップ短篇集」「詩集 失はれた寶玉」「月下の一群」その他がある。詩雜誌「パンテオン」同人。

福田正夫 明治二十六年三月神奈川縣小田原町に生る。鎌倉師範學校卒業、東京高等師範學校中途退學。大正十年まで小學校教師をしてゐた。雜誌「民衆」を主宰してゐたことがある。長篇小說「未墾地」二卷の外、詩集「哀樂兒」「詩集 世界の魂」「船出の唄」「長篇敍事詩 高原の處女」「戀の彷徨者」「嘆きの孔雀」「銀波の白百合」「輝ける薔薇」「幻の麗人」「破れ胡蝶」「空翔ける美女」などの著がある。

千家元麿 明治二十一年六月東京麹町に生る。府立第四中學校を經て慶應義塾大學に學んだ。かつて「テラコック」「生命の河」「愛の木」の同人。現在は詩誌「太陽樹」を編輯す。詩集「自分は見た」「虹」「麥と野天の光」等を始め多くの詩集がある。

百田宗治 明治二十六年一月二十五日大阪市西區新町に生る。學歷無し。曾て雜誌「表現」を發行した。詩集「夜の歌」「最初の一人」「一人と全體」「ぬかるみの街道」「百田宗治詩集」「新月」「靑い翼」「風車」「靜かなる時」「北風と薔薇」「何もない庭」「偶成詩集」「冬花帖」等の著がある。

佐藤惣之助 假名は大魚と云ふ。明治二十三年十二月神奈川縣川崎町砂子に生る。詩集「正義の兜」「華やかな散步」「琉球諸島風物詩集」等のほか、多くの散文詩、隨筆、紀行などがある。「詩の家」を主宰す。

現代日本漢詩集

序

王政維新後の若い日本は各方面の西洋文化摂取のため寧日なき有様であつた。これは僅かに一世紀の短い年月に以てして、よく西洋文化の数世紀分を摂取し得て、辛うじて漸く列強の中に列するを得たのである。

是において日本固有の文化如何を顧み、若しそれが荒廃したりとせば、これが再興を思はねばならぬ。若しまた荒廃してゐないとしたならばこれを西洋の文化に比して、よくその長を取り、短を捨てて我が文化の躍進を期することが、我々現代人の盡さねばならぬ責務ではあるまいか。それには先づ現代の日本固有文化は如何と顧みねばならぬ。こゝに日本固有の文化といふ、その意義や、甚だ廣汎である。今その廣汎なる文化の内より特に漢詩のみに就いて、考へて見たい。

詩や文章は嘗てスペンサーも云つてゐるやうに思想を甲から乙へと運搬する機械である。かくの如く詩文は思想運搬の機械と見れば、運搬の途中にてメリの立たぬがまづ目的にかなつた機械とせねばならぬ。若しそれがメリが立たずに運搬されて元量よりもより以上の效果を奏するものあらば、それは文情に適切なりと云はねばならぬ。[illegible]力[illegible]、人を[illegible]め、人を泣かしめ、[illegible]すべてにおいて、文章に優ること数等の上にある。[illegible]思想運搬の機械として詩を見るもすでに[illegible]の価きである。かう考へて見るとき、詩は[illegible]人の[illegible]文学として、[illegible]に片付けて[illegible]に行かぬ。これ吾人が現代日本文学全集中に漢詩の一巻を設けたる所以である。

さて詩壇の推移如何と顧みれば漢詩は大宝、大津皇子に始まりたる以来、幾千百の作者を出したれども、[illegible]以来物茂卿徂徠に至るまでは遺憾ながら漢詩らしき漢詩はなかつたと云ひたい。徂徠が大才を以て一代を指導して以来、茲に初めて漢詩を見るに至つたのである。徂徠の首唱した所謂古文辭に對しては、或は異論なきではないが、徂徠當時にあつての古文辭ほど當時の詩壇を改善するに效果のあつたものは斷じてない。若し徂徠を地下に喚起して春臺以下のことを語らば兒輩つひに乃公の志を知らずと哄笑することと想ふ。

古きを尋ねて新しきを知り、新しきを観て古きを憶ふ。吾人は今まさに新しきを観んとす。こゝにおいて明治大正両代における四十四名家の[illegible]を編[illegible]に[illegible]ことゝした。明治時代[illegible]本[illegible]云つたる時代、[illegible]あつたにもかゝはらず、漢詩に近代稀なる盛を極めた。そして作家も彬々として輩出した。只その詩風は清詩の[illegible]であつたので、[illegible]宗[illegible]といふやうな[illegible]流行を[illegible]めた。[illegible]その一方には[illegible]を[illegible]し、これに追従[illegible]作家[illegible]たが、いはゆる[illegible]自信[illegible]して大[illegible]を奈何ともすることが出来なかつたのである。次いで大正時代となれば明治時代の作家は漸く凋落したるばかりでなく、明治時代において欧化主義全盛の余弊として漢学なるものを高閣に束ねて顧みなかつた結果、[illegible]人たる素質を有する人の缺乏時代となつた。かゝる所へ、[illegible]人の出現を見るに至りたるも清詩流行の餘毒、たる脂粉塗澤の沈滞と同じくその餘毒たる支離病の外科施術に忙殺されて居るといふ實況であつた。一方漢學閑却の跡を承けたる大正時代は欧米において支那學研究の盛んなるに刺激せられて、こゝに又漢學復興の氣運を見るに至つた。我社が本集を斎書社會に薦むるはまさにその時機を得たるものと信ずる。

明治時代

副島蒼海詩

上陛下得作

日日把二書牘一進章。衣裳常惹御爐香。君王恩澤本深重。不レ敢放レ臣歸二水鄉一。

暇なたゞまつりごとの作　日々は[illegible]にてらす。[illegible]のおんたくもとしんぢう。あへて[illegible]の鄕にはなたず。

贈二奥州佐藤平次郎一

金華松島奧東風。自レ古風雲向レ北愁。日本中央碑字在。祇今誰識入二何州一。

奥州の佐藤[illegible]におくる　金華しようたう[illegible]のとう、いにしへよりふううん北に向つてうれふ。日本の中央ひじ在り。たゞ今まつかつ何の州に入る。



(副 島 伯 爵)

觀二岳飛書一

吾今獲レ見岳飛書。鐵筆昂昂[illegible]有餘。有宋朝廷公死後。赤心報國一人無。

がくひの書をみる　われ今見るをえたり岳飛のしよ。[illegible]有宋の朝廷公死して後。赤心はうこく一人なし。

題二朱文公幅一

人震氣震書亦震。壁上[illegible]耀二[illegible]星一。伊公不レ做二苟且事一。爲レ點爲レ句每丁寧。

しゆぶんこうのふくに題す　ひとれい氣れいしよ亦れい。壁上のさうふく[illegible]かゞやく。この公ならはずこうしよの事。點をつくり句をつくるつねに丁寧。

別二徐明府一

秋風吹レ老鬢毛斑。放二浪山川一未レ欲レ還。借問前程指二何地一。武昌漢口九江間。

じよめいふに別る　しうふう老を吹いてびんまう斑なり。さんせんに放浪して未だかへるを欲せず。もしぜんてい何の[illegible]ぶしやう漢口九江のかん。

楓橋

月落烏鳴霜滿レ天。楓橋夜泊[illegible]蕭然。兵戈破二[illegible]寒山寺一。無二復鐘聲到一客船一。

ふうけう　月おちからす鳴いて霜てんにみつ。[illegible]のやはくうたゝせうぜん。へいくわ破却すかんざんじ。またしようせいのかくせんに到るなし。

和二鐵兜山人南朝詩一

玉鈴響徹午[illegible]。古殿深[illegible]猶未レ消。翠蓋無レ旋春色暮。落花狼藉[illegible]南朝。

てつとう山人なんてうの詩にわす　ぎよくれい響きやんでひるせうれう。古[illegible]のしんしう[illegible]すゐがいかへる無く春色くる。落花は[illegible]ぜんてうを鎖す。

懷二伊藤春畝一

一從二君駕紫[illegible]歸一。無二復人[illegible]青板扉一。青石[illegible]頭春[illegible]。[illegible]

伊藤しゆんぽをおもふ　ひとたび君がしらんに[illegible]してかへりしより。また人の[illegible]はんせんに[illegible]するなし。青石だんとう[illegible]。

悼二金玉均一二首

一慟東風春有レ餘。落花[illegible]愁レ余。尤憐伍子走レ吳急。頗惜陳蕃謀レ國疎。

きんぎよくきんをいたむ　一どう東風春あまりあり。落花へう[illegible]おもひ[illegible]しむ。もつとも[illegible]走る急。すこぶる惜むちんばん國を謀ること疎なるを。

元衡一死[illegible]。白[illegible]橫行盜賊頻。[illegible]春二月。天涯魂魄不レ歸人。

げんかうの一死ことさんしん。[illegible]

櫻花[illegible]

[illegible]

一夕[illegible]人。江東美人[illegible]

韻一揮翮給一月一痕。

[illegible]しそうたいじん。らくするのしん。[illegible]いんりん。月一りん。

寄二國分青厓一用二其華嚴[illegible]歌原韻一

謫仙一去千年空。予嘗西游但見廬山秀出高巃嵸。白流直下三千尺。氣勢直與二日峰一雄。後人往往表二若使一。無三復氣魄回二旋穹一。青厓居士詞爲者。卓然與二古也一爭二英風一。今詠二華嚴瀑布歌一。陸離文情晴與レ濃。一二荒山拆一湖明。鷗鷺島嶼共所レ宮。稱備滿介觸懸崖。勢作二一川一始香垂。雪下競降久萬丈。流沫雰霏暗二碧松一。直見人間亘二到處一。雰二厥洪響一魑魅聾。百怪異獸豈度得。江海未レ得二齊崗洶一。猩猩幾年曾自造。雄鯨巨鰐誰來衝。馮夷河伯猶思作。蒼蠻何緣見二閣瀧一。還是小禽紛紛日中下。應レ教二夫子一吟情比二舅多一。端在二琢攻一。不レ爾焉得レ作二斯雄鬱奇偉璀燦之文字一。稱生慘擺空婆娑。我老近來多二漫興一。九秋清興思無レ窮。往往猶レ非レ試小詩一。豈向二君曹一多二奇工一。憶念昔年稍足レ論。常將二意氣一掃二長虹一。驅二獅掣レ牛不二曾厭一。腔血猶有二幾分紅一。以爲君句今驚レ人。衰年膽悸多二畏胸一。借問天下若レ君有二幾人一。是文中虎與二人中龍一。

[illegible]くせん一さよ千年むなし、われ嘗て西游ただ見る廬山し[illegible]なんするものぞ。[illegible]をみる。また氣ぜいのせんきうをめぐらす無し。[illegible]布歌を誦す。りくりたる文情せいとのうと。二荒山さ[illegible]にさらし、直ちに見れ人間いたるところ[illegible]おだやか[illegible]ほとゞまるをうれふ。たんしん何によつてかかくどうをなして吟情ひきよう多端たくこうに在らしむべし。まさに夫子をらずんばなんぞこの雄鬱奇偉さいさんの文字をなすを得ん。びせいさんた空しくとうとう。我れ老いて近來まんきよう多く、九秋せいから思ひきはまるなし。往々ひをつをみ小詩を試む。あに君がさうに向つて奇工をほこらんや。おもふ昔年やゝ論ずるに足る。常に意氣をもつて長虹をはらふ。獅を驅し牛をせいしてかつて厭はず。からけつ猶ほ餘分の紅あり。おもへらく君が句いま人を驚かす。すゐ年たんおそれてゐきよう多し。しやもんす天下君がごとき幾人か有る。是れ文中の虎と人中の龍と。

伊藤春畝詩

飲二某樓一

豪氣堂堂横二大空一。日東誰使二帝威隆一。高樓傾盡三杯酒。天下英雄在二眼中一。

ごうきだう\/大空に横たはる。につとうたれか帝威をしてさかんならしめん。高樓かたむけつくす三杯の[illegible]。天下の英雄がんちうにあり。

函館客樓作

一夜涼風起二海州一。滿天秋色入二唫眸一。優游詩

[illegible]

北海道巡遊中作[illegible]

東一看家仙根一[illegible]。北海人邊武昂頭。千古富嶺何日世。[illegible]

[illegible]

朝來不レ判雨晴風。一片紅雲横二半空一。風雨別橋停二馬望一。惠山遙在二有無中一。

てうらい判せず雨と風と。一片の紅雲はんくうによこたはる。風雨べつ[illegible]はいざまは[illegible]遙かに有無のうちにあり。

塞窓回想寒念時。滿天風露濕二征衣一。秋宵百狩山頭夢。尙向二黑龍江上一飛。

けん\/[illegible]なほ黑龍江じやうに向つてとぶ

醉題二馬關旗亭壁一

論レ文諸友皆黃土。識レ面美人多白頭。十五年前狂杜牧。西遊還上舊青樓。

醉つて馬關きていのへきに題す　文をろんずる諸ともみなくわうど。面をしる美人おほくは白頭。十五年ぜんのきやうとぼく、西遊またのぼるきうせいろう

奉レ命赴二歐洲一船過二蘇西運河一

紅海水連地中海。無邊沙漠望茫茫。誰將二偉

業ニ傳ニ千載ニ 一帶河山畫ニ二洲ニ

命を奉じて歐洲に赴きスエズ運河を過ぐ　こうかいの水はつらなる地中海。むへんの沙漠のぞみばう／＼。たれか偉業をもつて千歳につたふ。一帶のこうきと二洲につらず。

[illegible]昌寺看楓二首

清時不レ用問ニ桃源一 [illegible]河水赤紅葉村、漫擬風流狂杜牧。詩僚相對到ニ黄昏

須磨ぜんしやうじかんふう　せいじ用ひずたうげんを問ふことを。酒をたづさへて來りたづぬこうえふの村。まんに[illegible]ほく　せいそん相對してくわうこんにいたる。

聞道老僧移レ錫處。延文遺跡尚存留。滿山紅葉無ニ人掃一 風色蕭蕭古寺秋

聞くならく老僧しやくをうつすところ。えんぶんの遺跡なほそんりうす。滿山のこうえふ人はらふなく。ふうしよくせう／＼たり古寺のあき



（伊藤春畝）

自ニ清國ニ歸朝有レ作

解レ紛不レ用ニ干戈力一。談笑之間久締盟。萬里歸舟風浪靜。載ニ將春色一入ニ京城一。

せいこくより歸朝作あり　ふんを解くかんくわの力を用ひず。談笑のあひだ久ていめいす。萬里の歸舟ふうらう靜かに。春色をのせもつて京城に入る。

奉[illegible]命[illegible]視[illegible]球

六[illegible]旗[illegible]真色鮮。鵬程萬里駕ニ長風一。誰知軍國[illegible]古策。辛苦經營方寸中。

[illegible]旗[illegible]きうを遮[illegible]すくせいのもうこう旗色[illegible]ほうていばんりちやうふうに[illegible]す　たれか知らん軍國へんばらの策。辛苦けいえい方寸のうち。

南都懷古

不レ見宸宮鎖ニ碧空一 猶餘ニ王氣一興ニ山中。一千三百年前寺。春入ニ伽藍[illegible]樹中一

なんとくわいこ　見ずやきゆうきうのへきくうに鎖ゆるを。なほ王氣のあまりて山中に興[illegible]。一千三百年ぜんの寺。春はがらんしんじゆの中に入る。

京都作

老來豪氣易ニ消磨一 五十星霜夢裏過。欲レ向ニ東山一尋ニ往事一 荒墳纍纍故人多

きやうと作　らうらい豪氣せうまし易く。五十の星霜むりに過ぐ。東山に向つてわうじを尋ねんと欲すれば。くわうふんるゐ／＼として故人おほし。

二百三高地

久聞ニ二百三高地一 一萬八千埋ニ骨山一。今日登臨無ニ限感一 空看嶺上白雲還。

二百三高地　久しく聞く二百三高地　一萬八千ほねをうづむるの山。今日とうりん限りなきの感。空しくみるれいじやうはくうんのかへるを。

金澤別業作

風雲一擲逐ニ淵明一 荒逕空留落後英。隴畝秋高孤鶴擧。松林月上臥龍横。海村草色含レ霜白。山寺鐘聲醒レ夢清。緘默隨レ時哲人事。無端對レ酒發ニ吟情一

かなざはべつげふ作　ふううん一てきえんめいをおふ。くわうけい空しくとゞむらくごのえい。ろうほ秋たかくしてこかくあがり。しようりん月上りてぐわりよう横たはる。かいそんのさうしよくは霜をふくんで白く。さんじのしようせいは夢をさましめて清し。けんもく時にしたがふは哲人のこと。はしなく酒にたいして吟情をはつす。

滄浪閣偶成

詩志多年竟不レ酬。幽居單寄釣魚洲。心如ニ秋水一寒光潤。跡似ニ浮雲一去路悠。銀色横レ空西嶺雪。金波流レ月五湖舟。平生情緒何須レ解。曠古襟懷孰匹儔。

さうらうかくぐうせい　しし多年つひに酬いず。いうきよ單に寄すてうぎよしう。心はしうすゐのごとくかんくわうひろく。跡はふうんに似てきよろいう。銀色そらに横たはるせいれいの雪。きんぱ月をながすごこの舟。平生のじやうしよ何ぞかいするをもちひん。くわうこのきんくわいたれかひつちうぞ。

十月廿五日發ニ奉天一赴ニ哈爾賓一 汽車中作（絶筆）

萬里平原南滿洲。風光闊達一天秋。當年戰蹟留ニ餘憤一 更使ニ行人牽ニ暗愁一

十月二十五日奉天を發して哈爾賓におもむく汽車中の作　萬里へいげん南滿洲。ふうくわうくわつたつ一天の秋。當年の戰迹よふんをとどめ。さらにかうじんをしてあんしうをひかしむ。

小野湖山詩

寛永寺所見

不レ用二前桿斷一[illegible]化[illegible]心[illegible]香[illegible]　[illegible]過

寛永寺[illegible]路[illegible]傷[illegible]場

くわんえいじ所見　用ひずふうぜんまげてだんちやうするた、あらくわつゝがたくさうさうたけみす。くわんえい[illegible]んのみちたけいくわすれば、せんぶつぢやうははくぶつぢやうとなる。



（小野湖山）

天王寺所見

北郊山上暮鴉啼。早晩誰能免寄栖一笑名心終未レ止。暮碑猶競石高低。

てんわうじ所見　ほくばう山上ぼあなく。さうばん誰れかよくきせいを免れん。一せうすめいしん終に未だやます[illegible]ぼひ猶ほきそふ石のからてい。

題二森春濤蓮塘詩後一

千古香奩韓渥集。繼レ之次也竹枝詞。兩家以外推二妍妙一。一種森桁艷體詞。

森春濤れんたうしの後にだいす　千古かうれんかんあ

[illegible]

西山二首

名賢遺跡在二丘岡一。村[illegible]人[illegible]

閒[illegible]致[illegible]遺[illegible]白[illegible]

非[illegible]史[illegible]春秋功[illegible]念[illegible]圖[illegible]

西山赤[illegible]宋[illegible]歌[illegible]

せいざん二首　めいけんのゐせききうあに在り[illegible]けいうよとしてへいらに入る。ばうふく三間き[illegible]ち。ていた一ぺんおのづからせいは。道はしよくせつに於てあとゑんに非ず。史はしゆんじうたつぎてこう[illegible]るおほし。[illegible]れかおもはんだうだうそうこくのしゆ[illegible]せいざん亦さ[illegible]びの歌を唱へんとは。

飛[illegible]沖[illegible]雲[illegible]霄[illegible]濟[illegible]在レ瀾。且[illegible]將筆硯樂二餘年一

遂レ懷梅里先生傳　卜レ地桃源洞裡天。士習民風到レ今美。山花野草及レ時妍。的知家訓嚴然在。麟趾振振世出レ賢

飛んでうんせうにちらしひそみてふちに在り。且つひつけんをもつて餘年を楽しむ。くわいをのぶる梅里先生のでん。地をぼくすたうげんどうりの天。ししふみんぷう今に到つてよし。さんくわやさうも時におよびてけんなり[illegible]まさに知るかくんのげんぜんとして在るを[illegible]んしんしん世々けんを出す

華嚴瀑布歌

觀[illegible]之[illegible]、[illegible]人[illegible]、[illegible]石[illegible]觀瀑之亭二大添二風景一、晃山誠[illegible]諸子[illegible]一碑于其側一[illegible]此詩[illegible]之、

晃山勝[illegible]甲二天下一、華嚴瀑布冠二晃山一。偉哉造物工夫作二巖[illegible]一。更作二大湖一涵二其間一。湖缺[illegible]一隅二如二天缺一。水勢奔飛大瀑懸。一落千丈又

[illegible]

[illegible]年[illegible]

[illegible]

不[illegible]

仙[illegible]仙[illegible]

有[illegible]華[illegible]居[illegible]

けごんばくふのうた　くわうざんのしようがい天下に甲たり。けごんのばくふはくわうざんに冠たり。[illegible]なる[illegible]ぞうぶつのくふうがん[illegible]くたなし。[illegible]にたいこをなしこ[illegible]のかんにたたふ。こ[illegible]天の缺くるが如く。すい[illegible]ほんひたいばくかゝる。一らく千丈又[illegible]。どがう[illegible]おうごかしてらいこいてん[illegible]

[illegible]

[illegible]

氣天地こんこん[illegible]、[illegible]は[illegible]ちからうきようくの[illegible]ひ人[illegible]千[illegible]つくすが如し[illegible]へずらがくてんだいのしよう。だんじてうだいのしんたいくわん[illegible]たくせんゆけり仙才たゆ。[illegible]せんと[illegible]るはあとこうがん。[illegible]閒、帰こしよしうあり[illegible]ると。[illegible]く[illegible]に[illegible]あらず。

大沼枕山詩

十二宮祠傚二高青邱一[illegible]

十二巫山雲雨過。細腰[illegible]嫁、夢中神女原無レ害。絶勝人間造孽多。[illegible]

十二きうしかうせいきうのたいにならふ　十二ふさん[illegible]雨すぐ。細腰かんきやくよいくせい[illegible]中の神女もと害するなし。はなはだ勝る[illegible]のさ[illegible]けつ[illegible]に

湘山纔了又齊山。[illegible]華寰宇間。莫レ怪披

庭承寵少。至尊巡狩不曾開。至宮

湘山わづかに了りて又せいざん。疑々するくわくわんうのかん。怪しむなかれえき亡い寵をうくる少きを。至尊じゆんしゆ曾てかんならず。

嘗伏東朝百官興。四華展真瑞雲裏。武皇偃仰視將相。却拜仙官王母後。壽宮

はん一きを東朝に…… 武皇きよがう將相をみ。却つて仙官わうしとうぼの后に……

帝殿留賓夜不帰。酒酣散尽出雲扉。笙歌寒神衍昏暁。惟有西王獨自歸。壽宮

げふでんひんをとどめて夜とざさず。酒たけなはにしてしうんぴやうを出づ。しやうかせいり……。たゞ陳王のみひとり自つからむる有り。

笠渓山歌

常之野何茶茶。南渓穏武平如掌。惟看馬耳竇天高。直尖插雲幾千丈。不与他山一争秀偉。雄壓自是衆所讓。雙峰映立比麗娟。何止彭郎對姑山。女家爲四男峯凸。吾神相配亦偶然。行南行賞日暮作。翠翰瑶席有無間。别有兒孫互雨往。撲識羣嶺列其左。山嶺詩也入遊迹。登勢雖て東限。試讀千時岩易峯。白壁蒼崖真富岳。我来正逢秩夷實。漫山雪霞吉漠漠。陰雲寒晴竸鳥鳴。登石祭動気欲落。實也有待遣我游。冷風吹衣如乘鵠。

[illegible]

にざんして高く。せいせんくうにさしはさむ千丈。他山としうゐを爭はず。ゆうそんおのづから是れしうのゆづる所。さうほうえいりつしてれいけんをくらぶ。何ぞただにはうらうのこ……に對するのみならんや。によ……はあふをなしなんほうは……に……がくしん相配する偶然にあらず。かうらうかうらうんにちぼにおこる すゐゐえうせきいうむのあひだ。べつに兒孫の互ひにほさするあり。くわれいゐれい其の左に列し。よせいりようせん久こぐわ。てつさ千じうばうに入り。さんきやく遠く走りてべん嶽よち易からん。はくへきさうかいがれかさくは……我れ来りて正にあふ秋のさくばくたるに。まんざんのさうさんかうとしてばくばく。いんがく霽くらうしてちみうそぶき……くわいせきふ……う怒して落ちんと欲す。しんや待つあり我れをむかへてあそぶ。れいふうころもを吹いて鶴に乘るが如し。

森春濤詩



（森春濤）

岐阜竹枝二首

環郭皆山紫翠堆。夕陽人倚好樓臺。香魚欲上桃花落。三十六灘春水來。

ぎふちくし二首 くわくをめぐつてみな山しすゐうづたかし。せきやう人は倚るかうろうだい。かうぎよ上らんと欲してたうくわ落つ。三十六灘しゆんすゐ来る。

千絲柳色晩風柔。春動嘉川古渡頭。欲問美人南國信。片帆吹上九華舟。

千しの柳色ばんぷうにやわらかなり。春は動くらんせんのことう。美人なんごくの信を問はんと欲すれば。へんぱん吹きのぼすきうくわの舟。

送別二首

多度山光映片舟。鳴門潮勢激清秋。風帆不截別愁去。我潤濃州君淡州。

そうべつ二首 たどのさんくわうへんしうに映じ。めいもんのてうせい清秋にげきす。ふうはんはべつしうをたちて去らず。我れはのうしうにとゞまり君はたんしう。

秋色蒼茫水杳茫。半肩行李上歸航。海南親友應相待。伊豫松山是故郷。

しうしよくさうばうとして水えうばう。はんけんのかうり歸航にのぼる。かいなんの親友まさに相待つべし。伊豫の松山はこれ故郷。

四月一日作

桃花辭別太無頼。流水送春如等閑。今日重過江上路。子規啼斷鉄山。

四月一日さく たうくわ別れを經てはなはだぶらい。りうすゐ春を送つてとうかんなるが如し。今日かさねて過ぐ江上のみち。しき啼き斷にすうとの山。

聞鵑

水精花上月依微。着意聴時聞得稀。但是空山人寐後。雲埋老樹一聲[illegible]

けんを聞く すゐせいくわじやう月いび。意をつけてきく時聞きうる稀なり。ただ是れくうざんひといぬるの[illegible]

[illegible]巳七月[illegible]、贈レ此留二別東
[illegible]同好

白髪無レ黄何所レ之。湖楼置レ酒話二分離一。此行[illegible]今[illegible]、[illegible]竹枝[illegible]笑二[illegible]七十二[illegible]。秋[illegible]

[illegible]

樹[illegible]四首[illegible]

美人南国少二相知一。春在二傾欹嗅上枝一。臨レ水未レ曾逢二妬女一。築二[illegible]何必[illegible]封[illegible]。[illegible]客刊鶴[illegible]。林下月来童[illegible]。昨夜西渓看レ易龍。撚レ髭[illegible]半苦思レ詩。

ばいくわ四首てらおうほくのゐんを用ふ　美人南国さうち少く[illegible]春はきんたく[illegible]うの枝に在り。水に臨んでおたたちて[illegible]に逢はず。[illegible]を築いて何ぞかならずしもほういを遁けん。こへん客は到るかく鶴へるところ。りんか月は[illegible]の時。昨夜せいけい易をみこやみ。髭をようして翻然わんごろに詩を思ふ。

驟晴時節有二寒火一。欲レ問二佳人幽且妍一。應レ作二蟾宮[illegible]嫦女一。青[illegible]学二書仙一。[illegible]住深處屐将レ折。在二水一方一寒可レ宴。鼻観[illegible]白得。牧童遙示指頭禪。

しうけんの時節たちまち[illegible]の火　問はんと欲す佳人[illegible]らしけん。まさに作ぶべしせんきう薬をぬすむのが。あへてゆるさんやからあんしやらしよの仙。林[illegible]をとた

[illegible]にきまさにおれんとす[illegible]。[illegible]ぴくわんのめらさんなんぞ[illegible]ん。[illegible]

岡本黄石詩

関原

回首原頭下レ馬過。松風如レ聴大[illegible]。某丘某壑悉堪レ仰。最見勝軍山色多。

くびをめぐらし　からべをめぐらしてげんとう馬をくだりすぐ。しようふう聴くが如したいふうの[illegible]。某きう某がく悉く仰ぐにたへたり。もつとも見る勝軍さんしよくの多きを。

鳴門

詩筆何人千古高。詩神難レ得老遙豪。爭能以二我衰残力一、翻倒鳴門百尺濤。

しひつなんぴとか千古高き。しーん得がたく[illegible]いよがうぞ。いかでか能く我がすゐざんのちからを[illegible]ほんたうせんなると百尺のなみ。

新秋湖上

大火纔流白暦期、何来爽気満二江皐一。今朝試上二水西閣一、七十二峰秋色高。

しんしうこじやう　大火わづかにながれてはくれんかく。からいのさうきからからに満つ。こんてう試みにすいせい閣にのぼれば　七十二ほうしうしよく高し。

過二木南橋一有レ感　示二頼支峯一

芳草飛花已暮春。木南橋上弄二烏巾一。水明山紫依然在。涙墮山陽笛裏人。

[illegible]んたそばだ[illegible]すゐめいさんし依然として在り[illegible]つ山陽てきの[illegible]

石川丈山

一戦功成帰二旧閑一。[illegible]吟白雲間。[illegible]後[illegible]、[illegible]明[illegible]山

石川ぢやうざん　一せん功なつて一[illegible]をはくす。[illegible]うえうせいじやう白雲のかん。[illegible]またふすゐち[illegible]らん。あた[illegible]も似たり[illegible]明や[illegible]出でゐるに。

讀二開国始末一。贈二島田鳥山一

董狐直筆足レ驚レ人。豈是[illegible]常野史倫。舊主幽冤方洗雪。當年隠秘盡開陳。[illegible]如二雲霧忽然散一、即使二日月[illegible]更新一。五大洲中[illegible]千秋功業一精神。

かいこくしまつを読み。島田鳥山におくる　とうこのちよくひつ人を驚かすにたる。あに是れ[illegible]やしのりんならん。旧主のいうゑんまさにせんせつし。当年のいんぴことごとくかいちんす。たとへば雲霧のこつぜんとして散ずるが如く。すなはち日月をしてまたあらたに新ならしむ。五大洲ちう定めてでんぱす。千秋のこうげふ一の精神。

八十自壽三首[illegible]

世事由来等二幻塵一。優遊静養苦吟身。半生未レ獲二三千首一、百歳猶[illegible]二十春。野鶴風前清骨相。江梅雪裏古精神。原知天地無二常色一、閲二盡浮華一只貴レ眞。

八十自じゆ三首　世事由来げんぢんに等し。いういうしづかに養ふくぎんの身。半生いまだえず三千しゆ。百

義なほ[illegible]から ばいせつり古精神。もと知る天理せいしよくなきを。ふくわをさんじんして只しんを貴ぶ。

向山黄村詩

己巳元日

夢裡山河屬二一新一。身同二艸木一亦逢レ春。半弓昔地三間屋。乞二與梅花一作二主人一。

己巳元日　むりの山河いつしんにぞくす。身はさうもくと同じく亦はるにあふ。はんきうのたいちさんげんのをく。[illegible]

赤壁圖

孤舟[illegible]當年[illegible]風月多情客倚レ舷。莫レ道江山無二定主一。于レ今赤壁有二坡仙一。

せき[illegible]ふうげつたじやうかくげんに倚る。いふことなかれからざんていしゆ無しと。今に赤壁はせん有り。

[illegible]

一莖一花[illegible]。人間無[illegible]根[illegible]家三百年清氣。[illegible]

ていしよなんぼくらん　いちえふいつくわ描いてだんこん。人間どのはうこんをたくするなし。でうか三百年のせいき[illegible]

[illegible]山行[illegible]

[illegible]淡化二[illegible]。[illegible]

[illegible]はとうらに満ち響はし[illegible]

つ。そいあんたんとしてぢんしに化す。しらてんしせき雲すみの如く。寫す我がゐゐさんれいをこゆる時。

月下水仙二絶

凌波仙子翠雲裳。[illegible]誰向二此中一[illegible]洛[illegible]。銀鈎細字十三行。

[illegible]の中に向つて[illegible]字十三から。

水中仙子月中娥。翠佩黄冠[illegible]。流落人間無二此[illegible]。[illegible]

すゐちうのせんし月中のが。すゐはいくわうくわんはくぎよくか[illegible]らく人間このたい無し。ぐわづせいしきすてらおらは。

金閣寺

鹿苑荒涼鹿逕深。劫餘纔認舊山林。奇花怪石緊三[illegible]通。名書法寶藏二古今一。白髮遺[illegible]未レ忘レ世。黄金築閣亦何心。空留二遺像一兀無レ語。綠樹[illegible]生二晩陰一。

金閣寺　ろくゑんくわうりやうろくけい深く。こふよ[illegible]めてこつとして語なし。りよくじゆいんいんばんいんを生ず。

飲馬長城窟行

君去[illegible]馬長城窟。[illegible]只守[illegible]。妾守[illegible]閨一不[illegible]。夢魂[illegible]長城邊。長城萬里昔誰築。今日[illegible]兵下自天。[illegible]颯颯啾啾鬼哭聲。萬騎一敗爭遁逃。大半骨二我日本刀一。[illegible]憑レ誰[illegible]。寄語[illegible]慎莫レ思二妾心中苦一。只願將軍三[illegible]定二天山一。待君生入二玉門關一。

飲馬長城窟行　君さつて馬にみづかふ長城窟。ばてい[illegible]す。せき[illegible]はくうけい[illegible]らず。夢魂とびめぐる長城の邊。長城萬里むかし誰かきづく。今見る神兵の天より下るを。さくふう[illegible]吹いてさつさつ。颯々しうしうきこくまじはる。萬騎一敗あらそ[illegible]大半[illegible]日本刀[illegible]んぎん誰れにより寄語を傾はさん。つゝしんで妾が心中の苦を思ふ[illegible]。待つ君が生きてぎよくもんくわんに入るを。

長三洲詩

湖上秋晩

荷花菱葉不レ堪レ看。人倚二歌樓十二欄一。三日不レ來秋色老。繞レ湖衰柳夕陽寒。

湖上しうばん　かくわりようえふ看るにたへず。人はよるかろうの十二らん。三日來らざれば秋色老い。湖をめぐるすゐりう夕陽さむし。



【像　三　長】

殘菊

殘老一枝存未[illegible]。[illegible]

[illegible]

ざんきく[illegible]なほ人間に向つて腰を折るをはづるが如し。

日光祠

將軍[illegible]、[illegible]當[illegible]、[illegible]見
孫百年後、朱樓金殿䌫青山。

につくわう祠　將軍のしべうせんがんにとざす。そしつ當時ことこうくわん。かへつて兒孫百年の後に到り。しゆろうきんでん靑山をしらす。

都府樓

草間礎石曉烟殘。都府樓荒不記春。野老那
知憑弔意、拾來敗瓦賣行人

とふろう　さうかんのそせきげうえんのこる。とふろうは荒れて春を記せず。やらうなんぞひようてうの意を知らん。はいぐわを拾ひきたり行人にうる。

天津城晩望

草樹連天似昔。白河引帶抱城回。蒼茫
客思欲無際。七十二沽秋色來。

天津城ばんぼう　さうじゆ天につらなりてみな昔ににたり。はくが帶を引き城をいだいてめぐる。さうばうたる客思きいなからんと欲し　七十二こ秋色きたる

題畫

黃鸝枝上夕陽殘。榭底烟消一炷檀。[illegible]友已歸
棊響徹。隔簾花雨春寒。

畫に題す　くわうり枝上せきやう殘る。[illegible]ていけむり消ゆいつちうだん。りんいう已に歸り[illegible]やみ。

れんた雨二二花雨けいかんたうす。

雨中送春

濛濛絲雨黯黃昏。春與殘鶯共斷魂。花事
三春都似夢。家[illegible]無言。伴[illegible]詩句
忽來扗。待友車聲空過門。惜別年年人欲
老。怕看衣上酒留痕。

雨中はるを送る　[illegible]にるしうくわうこんをくらす。われざんあうと共にだんこん。くわじ三春すべて夢に似て。てんえんいつちう獨りげんなし。うれひに伴ふ詩句たちまち[illegible]。友を待つ[illegible]しく門をすぐ。別れを惜んで年年ひと老いんと欲し。[illegible]るをおそる衣上さけあとをとゞむるを。

矢土錦山詩

白河

都門早出向仙臺、路過青山紅葉間。好與二[illegible]
公一[illegible]詠、秋風吹老白河關。

白河　とも[illegible]く出でてせんくわんに向ふ。路はすく青山こうえふの間。よいかな[illegible]公ときうえいをかへす秋風吹きおゆ白河のせき。

春畝公招余與槐南　更游塔澤洗心
樓　席上次槐南詩韻二錄

花後春山綠欲勻。一溪水漲雨痕新。相公行
樂多佳話。例有才人與美人。

春畝公より槐南とをらつし、さらに塔ノ澤の洗心樓に游ぶ。席上槐南のしゐんにじす。くわごのしゆんざん綠ひとしからんと欲す。一けい水は漲りてうこん新なり。相公の[illegible]らく佳話多し。つねに才人と美人とあり。



[illegible]

鳴鶴先生將遊清國留別有詩次韻
送行日百

當年應是早聞名。歸臥山林過半生。海外
更爲探古使。大橋流柱是前程。

鳴鶴先生まさに[illegible]　[illegible]年[illegible]早く名を聞す。山林に[illegible]ぐわして半生をすごす。海外更にたんこの使となる。しんけうかんちうは是[illegible]てい。

骨[illegible]明[illegible]金[illegible]、[illegible]、自古二
吳多義俠一[illegible]君欲[illegible]一[illegible]來、

[illegible]けいけんの[illegible]。古より[illegible]君によつて[illegible]かん[illegible]欲[illegible]

笑看臨岐筆一枝、[illegible]詩、[illegible]
桂[illegible]高[illegible]。[illegible]碑、

笑みみるりんきの筆いつし[illegible]るの詩[illegible]けいやう[illegible]の碑。

天涯望斷故人舟。[illegible]燕[illegible]地[illegible]。揚子江頭
春似夢。一帆[illegible]雨入蘇州。

天涯ばう[illegible]の時[illegible]えんらいこう[illegible]のうれひ。やうすかうょう春夢に似たり。いつぱんのえんら蘸[illegible]

岩野[illegible]吉

已樹[illegible]雲嵐翠凝。空山有寺守孤燈。落花深積南朝恨。暮雨淒風吉野陵。

芳野くわいこ　らうじゅ雲をこめてらんすゐ凝る。くうざんてらありてこどうを守る。落花ふかく積むなんてうのうらみ。くうせいふうこていりよう。

末松青萍詩

西京

何來神女笑相招。玉露金風冷此宵。三十六峰明月好。有人高閣坐吹簫。

さいきやう　からいのしんによ笑うて相招く。ぎよくろきんぷう此の宵をいかん。三十六峰めいげつよく。人ありかうかく坐してせうを吹く。



(末松青萍)

人丸祠望淡路島

邊外雲[illegible]海面天、仙山宛在水中央。依稀帆影情無限。不弄歌人亦斷腸。

人丸の[illegible]淡路島を望む　えん[illegible]わいの[illegible]こ[illegible]長く。せんざんはゑんとして水の中央に在り。いき帆影じやう限りなし。[illegible]是れ[illegible]人ならざるも亦だんちやう。

欣欣女史騎馬來訪。有詩見似。戲次其韻

誰追秋色競幽妍。望入晴嵐氣欲仙。有女如花跨白馬。斜陽鞭影斷橋前。

欣々女史騎にのり來り訪ふ。詩ありしめさる。戲れにそのゐんにじす。誰れか秋色を追うていうけんを競ふ。望みはせいらんに入りて氣せんならんと欲す。女あり花の如く白馬にまたがる。斜陽べんえいだんけうの前。

十月三日隨鷗吟社第十三次大會。追次槐南湘南二家原唱韻二首

欲喚曾遊問碧空。何關柳綠與花紅。淺水白蘋秋似夢。玉人醉在畫樓中。

十月三日ずゐおうぎんしや第十三次大會。槐南湘南二家げんしやうの韻につゐじす　そいうをよんでへきくうに問はんと欲す。何ぞ關せんりうりよくとくわこうと。せんすゐはくひん秋ゆめに似たり。玉人は醉うてぐわろう中に在り。

衰楊殘菊一年年。人在天涯蓮葉船。記否當時行樂事。秋光倒瀉夢洲前。

すゐやう殘菊一ねんねん。人は在り天涯れんえふの船。記するや否や當時からくの事。しうくわう[illegible]むしうの前にみつ。

星社大會後三日。鼓東社中諸子一情見乎辭十四首[illegible]

舊盟諸友悉凄然。明治文物反[illegible]。休言白面缺清課。天下詩壇歸少年。

せいしや大會後三日　[illegible]社中諸子にじんす[illegible]じやう辭に[illegible]らはる十四首　[illegible]ふせん。明治の文物かへつてしんせん。[illegible]ふことをやめ白面せいれんを缺く、天下のしけん少年にきす。

楚楚其風淡淡情。心交何肯扶虛名。詩人最解箇中味。夢裡青山分外明。

そそたる其のふう淡淡たる情。心交なんぞあへて虛名をさしはさまん。詩人もつとも解すこちらのおもむき。むりのせいざんぶんぐわいに明かなり。

苦爲耽吟白髮催。忘憂未放[illegible]時杯。社中曾點錦山在。英氣猶衝星斗來。

ねんごろに吟にふけるが爲めにはくはつ催す。ばうゆう未だ放たずばうじのはい。社中かつてんすきんざんあり　えいき猶ほせいとをつき來る。

白璧微瑕世所歎。勁將奇字害毫端。春臺嘗爲徂徠惜。莫擬尋常白眼看。

はくへきのびか世の歎ずるところ。やゝもすれば奇字をもつてがうたんを害す。しゆんだい嘗てそらいの爲めに惜む。尋常はくがんのかんにぎするなかれ。

歸鄉詩 舊師佛山先生賦[illegible]

記得當年立雪場。分明[illegible]上佛山堂。詩之在外[illegible]。又有[illegible]源一昔最忘。淡入眞來清徹骨。酒澆[illegible]活枯腸。他年曾報先生志。且許[illegible]生今尚狂。

ききやう[illegible]佛山先生を訪ひ[illegible]い　記し得たり當年せつ[illegible]に立つを[illegible]めい佛山[illegible]に上るをみとむ[illegible]は[illegible]く[illegible]ある[illegible]て[illegible]れん。談は眞に入り來りてせいほねにてつし。酒はうれ[illegible]ちやう[illegible]ちかつて[illegible]ゆ[illegible]。且つ[illegible]せ[illegible]今なほきやうなるを

巖谷一六詩

雨中看二牡丹一

無賴青絲欺二曉寒一。佳人和レ淚倚二朱闌一。名花亦是[illegible]。會得[illegible]笑看。

[illegible]なみだに和してしゆらんに倚る。名花を[illegible]



（巖谷一六）

秋感絕句、次二井羽花南韻一

杜蘭香去跡如レ烟。聞說蓬萊別有レ天。手折二一斷腸花一朶一。斷腸人立佛龕前。

秋感ぜつく、[illegible]にはくわなんの韻に[illegible] とらん香さりて跡けむりの如し。聞くならくえうたい別に天ありと。手だんちやうの花いちだを折りて。だんちやうの人は立つぶつがんの前。

醉中漫題

不レ求二成佛一不レ求レ仙。結習[illegible]除翰墨緣。豈有二文章驚二海內一。聊[illegible]花賦月消二年年一。

[illegible]成佛をもとめず仙を求めず[illegible]けつしふ

[illegible]

[illegible]

字字千秋倚[illegible]

[illegible]

せいからのでんけんろくを[illegible] いつからの[illegible]むすんで[illegible] みうに[illegible]びんやいくわんけん

折レ梅寄レ人

凌レ霜臨レ雪又回レ春。折取[illegible]寄二故人一。紙帳銅鉼須二愛護一。一花一蕊一精神。

[illegible]

春畝相公夏島別墅賦レ此奉レ呈

樓閣亭臺新築成。別乾坤是小蓬瀛。天將二仙島一與二良相一。地賴二大臣一傳二勝名一。遠浦夕陽雲綺麗。遊空晴雪玉蓮明。悠然坐領二湖山樂一。好與二帝周一說二養生一。

春畝相公夏島のべつしよこれをふして奉呈 ろうかくていだい新築なる。べつけんこん是れ小ほうえい。天はせんたうをもつて良相にたまひ。地は大臣によりてしようめいを傳ふ。ゑんぽの夕陽かきうららか[illegible]えうくうの晴雪がくれん明らかなり。いうぜん[illegible]らりやうの樂み[illegible]よしさうしうと養生を[illegible]かん

絕筆

風月江山結二夙緣一。不レ希二成佛一不レ希レ仙。明朝思澤一何厚。游戲人間七十年。

[illegible]せらてうの思澤一に何ぞ厚き。いうぎの人間七十年。

森槐南詩

夜營[illegible]江二首

[illegible]

[illegible]

北固南徐東又西。[illegible]

[illegible]

他日[illegible]。揚州風月最相思。好[illegible]口斜陽酒。流水[illegible]

他日へんしうかへるあ[illegible] やうしうの風物もつともあひおもふ。好しおぎなばんけいこうしややうの酒。流水かんあばんいうし。

送二青厓山人之二河方第一軍幕一[illegible]

酒國三分意氣投。平生座嘯[illegible]。十隨大子山陽[illegible]。[illegible]壯詩人軍外游。馬革[illegible]行[illegible]地。[illegible]欲レ別月當レ樓。[illegible]江不[illegible]笑。

終合[illegible]是伸[illegible]

青厓山人さくはう第一軍ばくにおもむくを送る しゆこく三分意氣とうず。平生ざせう[illegible]

にしたがふ天子さんやうのがっ且つさらとす詩人さいぐ
わいのいう。ばかく□のから霜まんち。たらせい號れん
と欲して月ろうに當っ[illegible]
[illegible]

鬪鶴一□走□龍沙。只覺霜風捲□斜。傑衆城烏棲在□幕。紀十山中凍無家。旆旌夜岐臨關月。劍裂秋高絕塞車。酒盡□□□疑雪。貂裘吹□笛引梅花

りしやう一てきりようさ走る。只おぼゆさうふう斜ぶうた[illegible]うのうは空しくばくに在り。こつかいざんの雀はこゞゑて家なし。はいせい夜けうたりりんくわんの月。けんさく秋は高しぜつさいの車。しゆねつ[illegible]吹いてばいくわに到る。



（南 □ 翁）

歸舟一百韻

歸舟發□境。□絕呼□天。□日□□光彩。素練□風□。□□□□水。□作□□□。雲[illegible]此根□□□。[illegible]代[illegible]由[illegible]復[illegible]不□□。□[illegible]

綺廟誤密。翊贊臺階全。足迹三萬里。勳業四十年。丹衷誓許國。不□□滿顛。□府□典貴。始台實守傳。至尊常倚畀。萬品悉□陶甄。擁望夾□□。英姿□凌煙。始知衰職美。不□□周專。晩臨□韓國政。威惠交臨宜。遂資□調護力。欲奉□主權。□君社久屋。箕子封邈焉。李根一何弱。槿□朝李鮮。推レ誠置二人腹。感激豈莫レ愆。受其六尺託。敢數□兩巖仙。鴻業絕四海。琴張調五弦。彼民亦額手。國祚亦長延。奈何□高徒。妄擬□太子燕。烏頭與馬角。飛語嗟紛然。古來不曉事。臨□□千。□人遭自誤。君子須□實。□公懷咬何似。霽月光連娟。温額勉□言。若□遇可憐。扶□朝局略完。滄浪[illegible]大[illegible]頃[illegible]公也此[illegible]二百三丘頂。[illegible]千□鶴[illegible]白骨[illegible]沙田[illegible]殊死[illegible]指。忠[illegible]用□因非□[illegible]

□已。雖□聖所不□□。平和固□□甲。私忿運應□鋼。祭□記表志塔。公涕流潸潸。還酹□露殤墓。泣薦□詩一篇。[illegible]春天宵。桥木回□踏□。□原葬回丘。潭水中葉淀。正値□□□望□長白山。[illegible]前。東□站黃花坼。恰□公誕日。鵬壽車窗前。鴨綠直泝沿。我有□保□韓責。此其關與□鍵。松江□□□□。[illegible]萬中若□反□。鐵路一線□。□□□□□陸。何以□□喉咽。公□早了了。所□貫機關□先。[illegible]五□□□關。往觀□古宮□。繡桂□□□。由□武功坊入。大淸門東□。當中□□□。[illegible]日月懸□飛翔樹左右。[illegible]弓箭□故俗習□□敗。綺構亦□固。[illegible]結廟金□□。[illegible]法[illegible]黃□□。[illegible]又有□□□鼓。[illegible]營□[illegible]交[illegible]以來[illegible]公爲[illegible]行[illegible]行人[illegible]時見[illegible]

[illegible]公[illegible]引レ[illegible]、[illegible]
[illegible]
不レ在レ意。識兆讖洞玄。後事可二默察一。欲レ言
[illegible]實有二一
[illegible]三發後命中、裂帛天外
[illegible]。公[illegible]係
載。予命尤迍邅。從レ公六浮レ海。載レ筆懸レ非
レ椽。不レ測及二斯禍一。一丸貫二肩併一、遭レ難亦
同。[illegible]得。曰レ非二因緣一、與レ公不二同死一。隨
レ行容備[illegible]員、[illegible]紀[illegible]。[illegible]切[illegible]レ終レ編。

きしう一百ゐん　　露冷きはゝたれんす。どうぜつびんこんに呼び。雲日くわうさいくらく。たてう悲風ひろがへし。ぼつかいの水をけいほんし。そそいでばんろゐのれんをなす。満洲のやまうるほひあまねくす。此のうらみいづくんぞうづむべけん。さらに感してかのむせぶを聽き。熱血くわいちやうせんす。枕に伏してしばしば起たん[illegible]きうたつつみ一[illegible]には[illegible]にはうはい。からりようきうえんにさけび。神鬼共にさんたん。ふくさいほうけんより。天をささげて一柱による　公をことに不世のけん。びりんべうをみつよくきんだいか[illegible]くせき[illegible]萬甲[illegible]けふ四十年。たんちう函に許すをちかひ。しもてんに滿つるをさとらず。さくふけんてん貴く。姓名くわんうに傳ふ。しそん常にいひ。萬品たうけんにより。がばうしんきよくにはさむ。えいしりようえんに冠たり。始めて知るこんしよくの美。獨り伊周のぶん　せず。既にかんこくの致たか[illegible]ゐけいこ[illegible]にてうでの力をたすけて。ますます宗[illegible]の權をかたくす。だんくんしや久しくおくず。きしの封ばくたり。りこん一に何ぞじやくなる。きんろあしたに空しく鮮かなり。誠を推して人の腹に置き。感激めいあやをるなし。其の六せきのたく[illegible]うのたぎ[illegible]数へん　こうな四海をわたり。きんちやう五げんをとゝのふ。彼の民また手をひたひにし。たくそちやうえんを希ふ。いかんせんけいか

[illegible]こしてるゐ百千。人を誤りまたみづから誤る。君子すべからくこれをつつしむべし。公のおもひけうとして何にか倣ろ。せいげつくわうれんけん。運籌ぜんいうにつとめ。じやくはいの氣あはれむべし。てんをたすけて尼ほぼ完く。さうらうあきをこし。りくがふせいせうに人[illegible]しやたん[illegible]を沈む。黄金と白玉と。けんげきさうくわうとして連り。客子妓子の前。二龍けいくわんのいただき。てつまうがうそをけづり。どなうほけんをおほひ。露銀此の險をたのみ。しゆしくわえんを交へ。こうがくことごとく血をなかす　草木せいせん。泣きながら増むばんひこ。さくれつす千ようせん。さつりく耕作に代へ。白骨くわうしやのでん。此語今日にけんす。めんたかつ。[illegible]んとしやうにあきらかに。人皆ぎません。爭つてごふくわのうちにおつ。こんこんひえんに同じく。[illegible]雖もあらためざるところ。平和さうかふを固うす。しふんすべてまさにのぞくべし。裘志塔を祭りやみて。公のなんだ流れてせんくわん。またろしやうぼにそゝぎ。泣いて詩一篇をすゝむ。よ[illegible]くほくせいてんをくわいし。くわうげんまうとしてくわいご。こんすゐなかごろけいせん。正にこちようきうにあひ。え[illegible]黄花うゐは[illegible]く[illegible]公の[illegible]。しやうじゆしやさうの前。ひがし長白川を望めば。はうはくめぐりてゑんえん。満洲はつしやうの地。あふりよく直ちにせき[illegible]我にか[illegible]の[illegible]わんとけ[illegible]ち[illegible]萬里しやうを反すがごとく。鐵路一線ひく。りようだもし陸におこらば。何を以てこういんを防がん。公のむぬ早くむら[illegible]ぶ所きみんを制す[illegible]ちんをようす[illegible]にきすこぶるけんてん　往いてこきうけつをみ　しうちうくわいんを謀み、[illegible]功坊よ[illegible]たいせいもんの東へん、宮中[illegible]せいさんほさ日月かかる。ひしやう相左右す　さいさん百寶ならび、祖宗きらせんを重んず。故俗しやでんに習ひ。ていこう亦ここにかたく。えきせいなほくわめん。じゆんべうきんとうぼう。へいいくしゆひんを裝ひ。はふらうさうはいけん。くわうきうのまとふ有るを疑ふ。其の餘ていいき。らいかおよ[illegible]とうへん　久かんしうこ有り[illegible]たゝけば雷ゑんゑん。らしうをほうわうろうとなす。ぎりつふんえうを望み。せいねいゐしに接す。はらふつとしてうんぺいを思ひ。西ぶんさくかくに遊る。宿昔殊にすゐぜん。

西[illegible]せんほん有り。[illegible]しんせんを求むべし。おうべをかいて[illegible]のきをかしみ[illegible]すべからくはやおきべし、公ために[illegible]して笑ふ。なん[illegible]せんえんにとどめざろ。さうさうぼく[illegible]ばうこれへいけん。くわえ、こんしほん[illegible]をすぐ[illegible]行く行くはくせんをこ[illegible]宗[illegible]に近く。くわうばくせいせん[illegible]、行[illegible]はいに[illegible]り。時にきんあんせんを見、[illegible]にちやうしゆんけんに[illegible]じ、[illegible]くの案のえんにのぞむ。こへうがんしの子、しんせつひせんをすすむ。公ときに杯を引いて[illegible]ふ。[illegible]うゆにうつり。ぼくとつくらうしておだ暇あらず。[illegible]そくへんをわらふ。ただ此の[illegible]の念。けいけい内にみづむら[illegible]ゆ。[illegible]に[illegible]あらず。しきこう[illegible]かどうげんせん。後事せんりつすべし。[illegible]はんと[illegible]して[illegible]いたし、[illegible]しい[illegible]ハルビン市。[illegible]してんに[illegible]ひ。[illegible]として一か[illegible]ちさ[illegible]中　おつぱく天外のけん[illegible]し。公ゆいてぜいせんの如く。剣をおうむる[illegible]さい予が[illegible]もうほんてん、公に從つて六たび海に浮ぶ。筆をのせえんに[illegible]ざるをはず。[illegible]きこの[illegible]に及ばんとは。一丸けんぺいを貫き。[illegible]にあひ亦きに[illegible]す。因縁にあらずと[illegible]ふを得んや。公と同じく死せず。行に隨つこ[illegible]員に備ふ。[illegible]せ[illegible]。は[illegible]せつ[illegible]
[illegible]

本田種竹詩

岳陽樓道士胡松泉爲予供二筆硯一　[illegible]二
求題壁一。率成二一絶一。
烟波極浦渺生レ愁。見楚青蒼河漢秋。三十六
灣明月夕。朗吟飛上岳陽樓。

がくやうろうだうしこしようせん予の爲めにひつけんを供し。だいへきをきやうす。一[illegible]せいす。
[illegible]きよくほ、[illegible]として[illegible]うれひを生す　[illegible]せいさう河[illegible]の秋。三十六[illegible]めいげつの夕　らうぎんとび上るがくやうろう

九江客舍題壁

青衫我亦滯二天涯一。[illegible]風響二荻花一。月[illegible]

陽江上路。愁聞貧女撥二琵琶一。

きらからかくしやだいへき　せいさん我れ亦てんがいにとどまる。しつしつ秋風てきくわにひびき。月はくらしじんやう江上のみち。うれひ聞く貧女の琵琶をはつするを。

渡二青草湖一

微雨滄煙青草湖。巴陵西去晴帆孤。愁心欲下采二芙蓉一佩上。何處青山叫二鷓鴣一。

せいさうこを渡る　びうたんえん青草湖。はりよう西に去つてせうはん孤なり。しうしんふようをとりておびんと欲し。いづれの處の青山かしやこ叫ぶ。

三笠山

湖海飄零短褐身。悔抛二心力一作二詞人一。風流遙想秘書監。三笠山頭月一輪。

三笠山　湖海へうれいたんかつの身。悔ゆらくは心力をなげうちてしじんとなるを。風流はるかにおもふひしよかん。三笠さんとう月一輪。



(竹　輝　田　杉)

手向山

[illegible]手向山前。[illegible]女[illegible]。[illegible]
無人[illegible]古道一。[illegible]林[illegible]前[illegible]

たむけやま　ろうだいからげへきざんのくま。我れひとり風にのぞんでぢようを弔ふ。日くれて人のこだうをたづぬる無く。一林のかんえふうせい多し。

金華山十首[illegible]

東方岳鎮鬱岧嶢。閶闔陰晴自暮朝。日出海山諸怪滅。夜深觴豆百神朝。雲梯有レ路開二丹壁一。絳節無レ聲遍二碧霄一。一嘯振レ衣凌二絕頂一。天風吹レ髮亂飄蕭。

金華山十首　東方のがくちんうつとしててうげう。しやうかふいんせいおのづからぼてう。日出でてかいざんしよくわいめつし。夜深うしてしやうとう百神てうす。[illegible]。天風かみを吹いて亂れてへうせう

金山高處有二樓臺一。海闊天空一壯哉。霞表赤標懸二日月一。巖前紫電走二風雷一。九十九谿蒼茫合。八百八洲迤邐開。下瞰東溟杯勺小。高歌倚レ劍壓二徂徠一。

きんざん高き處ろうだいあり。かいくわつ天空一にさうなるかな。かへうのせきへう日月をかけ。がんぜんのしでんふうらいを走らす　九十九がくさうばう合し。八百八洲いりひらく。かかんすとうめいはいしやくの小なるを。高歌けんによつてそらいを壓す。

羽化直將レ[illegible]素[illegible]。拂衣星斗影闌干。天風浩蕩三千界。[illegible]十八[illegible]。[illegible]石棧[illegible]月[illegible]下二[illegible]壇一。山中[illegible]。宇[illegible]萬木寒。

[illegible]くわい十八だん。雲は冷やかにしてれいだせきくつにすみ。月あきらかにせんろうくえうだんを下り。山中はんや満らしていぬる無し。くらいれうれうばんぼく寒し。

登嶽二十一首[illegible]

東海茫茫龍從。高三萬丈壓二衡嵩一。燭龍銜レ日擁二桑曙一。石扇排レ雲開二閶闔風一。終古巨靈成二[illegible]一。諸天[illegible]怪散二鴻濛一。漢封唐[illegible]盡灰滅。維嶽居然神所レ宮。

とうがく二十一首　東海の茫蒼いきほひろうしよう。高さ三萬丈[illegible]をあつす。しよくりよう日をふくむはくさうのあかつき。せきせん雲をはいすしやうかふの風。[illegible]。かんほうたうぜんことごとくくわいめつ。これがくきよぜんたり神の宮とするところ。

振レ衣長嘯此峰頭。我欲レ吹レ簫馬二玉斗一。地擁二三邦一開二大麓一。天留二八柱一壯二神州一。山河積氣蒼茫合。日月滄溟[illegible]浮。十二萬年雲變滅。人間回レ首一蜉蝣。

衣をふるつてちやうせうす此のかうとう。我れせうを吹[illegible]。たいろくをひらき。天は八ちうをとどめて神州をさうと[illegible]。[illegible]一ふいう。

蒼蒼莽莽是何州。坐觀山根[illegible]高[illegible]。山人[illegible]中青未了。月[illegible]白初浮。横[illegible]不[illegible]天[illegible]十年。[illegible]。[illegible]十洲以外[illegible]

さうさうまうまうこれ何の州。へいしすさんこんとかい[illegible]いめんを[illegible]れてはく初めて浮ぶ。むへんのかうきせうか[illegible]まんせい[illegible]きうげんの底におこして。十洲以外この洲を[illegible]

野口寧齋詩

送槐南先生赴[illegible]島

居然詩筆壯[illegible]。此去更夢[illegible]。大聲連雲看不[illegible]。一聲[illegible]高秋。

槐南先生[illegible]島におもむくを送る　きよぜんしひつ泉州[illegible]いたら雲に連りてしんとして動かず。一聲のてうと高秋たいましむ。

辛卯除夕。祭詩乖雅集。次レ韻志レ感

大器成レ名固合レ遲。吾曹所レ願不レ過レ之。必傳文字今無レ幾。歲歲年年祭二惡詩一。

しんばうぢよせき[illegible]大器なを成すもとよりさにおそかるべし。ごそうの願ふところ[illegible]に過ぎず。ひつでんの文字今いくばくもなく。さいさいねんねん惡詩をまつる。

寄二槐南先生在一北京一

先生海之外。寄レ慨苦吟餘。蔚矣聖人國。壯哉天子居。若求二不死藥一。贈以未レ焚書。夢返二蓬萊島一。涼雲滿二太虛一。

槐南先生北京に在るに寄す　先生うみの外　がいを苦吟のよに寄す[illegible]すぐぎんのよ。うつたり聖人の國。さうなるかな天子のきよ。もし不死の藥を求めば。おくるに未だやけざるの書をもつてせん。夢はほうらいたうに返りて。涼雲たいきよに滿つ。

丁酉除日。得二湘南巴港書一。賦レ此寄レ懷

不レ見二湘君一七月餘。壯遊近日興何如。馬蹄[illegible]。[illegible]思[illegible]一旦。詩骨[illegible]化[illegible]。人生山下[illegible]多[illegible]。一[illegible]悲歌[illegible]。

ていいうぢよじつ。しやうなんはからの書を得。これをふして懷を寄す。湘君を見ざる七月餘。さういう近日[illegible]一曲の悲歌さい又のぞく。

送三海雲禪師之遊二清國一次二其留別韻一

樓船王濬鎖二滄波一。突騎頻誇曳落河。喬木百年空舊國。後庭一曲孰悲歌。曠原立レ馬碧燐聚。叢塚酹レ杯荒月過。知汝行行餘二感慨一。鵑聲七十二沽多。

かいせつ清國にさいいうするを送り。其のりうべつのゐんにじす。樓船のわう[illegible]きりにほころえいらくか。けうぼく百年むなしく舊國。こうてい一曲たれか悲歌。くわうげん馬を立て[illegible]んあつまる。そうちよう杯をそそいでくわうげつ過ぐ。知る汝ゆくゆくかんがいを餘し。けんせい七十二こに多きを。

送二松田學鷗赴一金州一

雪花亂點鶺鴒裘。脚底山河筆底收。版籍應レ添新鐵嶺。輿圖已壯古金州。蘆笳滿レ地嚴二戎馬一。雉堞連レ雲麗二戍樓一。千里從軍詩膽大。知君意氣壓二封侯一。

松田がくおう金州におもむくを送る　雪花らんてんす[illegible]きやくていの山河ひつていに收む。はんせきまさに添ふべし新てつれい。よとすでに壯とす古金州。ろか地に滿ちてじうばをげんにし。ちてふ雲につらなつてじゆろうをうららかならしむ。千里從軍したん大。知る君が意氣ほうこうをあつするを。

送二宇田滄溟歸一土佐一次二其留別韻一

[illegible]長安[illegible]。[illegible]骨自高價。[illegible]。[illegible]花[illegible]舞何奇。[illegible]中分[illegible]悲壯[illegible]。[illegible]萬[illegible]。

宇田さうめい土佐に歸るを送る。[illegible]

寄下懷同分[illegible]在中滿州上

露營[illegible]中聲[illegible]。想君詩就又銜レ杯。夢[illegible]來[illegible]女[illegible]開[illegible]。[illegible]。尙是千山雪一堆。

懷を[illegible]くぶせいが滿洲に在るに寄す[illegible]雪一たい。

秋月天放詩

無隣庵

幾度豐碑勒二大銘一。功成名遂孰相爭。一瓢泉

石磴[illegible]下[illegible]何[illegible]雲[illegible]。
むりんあん　幾たびかほうひたいめいをろくす。功な
り名とげて[illegible]一[illegible]の[illegible]石か[illegible]ぎよくを
たらし[illegible]

送三人上二函山一

函山此去路如何。佛[illegible]分二女羅一。百二古
關[illegible]到。亂[illegible]色逼レ人多。
人の函山に上るを送る　函山ここに去りて路いかん。
いあつたるらんよぢよらを分つ。百二のこくわん春未だ
到らず。乱紫のかんしよく人にせまりて多し。

石山寺

十月天[illegible]始飛。一林紅葉晩[illegible]。秋風寂寞
千年寺。何處青山弔二紫顏一
石山寺　十月天は寒うして霜はじめて飛ぶ。一林のこ
うえふ[illegible]秋風[illegible]千年の寺　いづれの
ところの青山にかしきを弔ふ。

梅

挺立氷霜[illegible]。[illegible]夢[illegible]。天[illegible]漫
從レ山發、不レ問[illegible]不レ吹。
梅　ていりつ[illegible]　わらふ他の
たら[illegible]　聞けず
しゆんぷう吹くや吹かずや。

天長節。[illegible]山[illegible]二首

溪山[illegible]吾車一[illegible]華一[illegible]
細[illegible]千[illegible]染出九重[illegible]。
[illegible]

爽氣西來秋欲レ寒。[illegible]夕陽山。霜楓未レ
必當二全色一。味在二濃紅淡一[illegible]間。
さうき西より來つて秋さむからんと欲す。ばうあいれい
[illegible]さうふうまだ必ずしも全色を賞せ
ず。あぢはひは花りのうこうたんりよくの間。

新宿禁苑侍二御宴一恭賦

鳳駕[illegible]曽。雨晴[illegible]道不レ揚レ塵。天音
寧曉傳二仙樂一。帝德懷柔會二大賓一。[illegible]鳥如レ呈
嬉笑色。[illegible]亦仰[illegible]仁。[illegible]班得レ拜[illegible]儀盛。
侍レ宴深[illegible]老臣身
しんじゆくきんゑん御宴に侍し。恭しくふす　ほうが
そんりんげんとして神のごとく。雨はれてちだうちりを
[illegible]。香に
[illegible]ごとしき
[illegible]のじん　ゑんぱん拜
するを得たりゐぎの盛んなるを。宴にじして深くらうき
うの身をはづ。

橋本蓉塘詩

次二春[illegible]絶句韻一三首録二

室如二方丈一[illegible]。[illegible]華一。吾愛
新詩如二[illegible]。[illegible]然指[illegible]花、
しゆんをうろんしぜつくのゐんに次す三首　室は方丈
のごとくせきとしてくわ無し。ぎんじさえんびんくわに
[illegible]こつぜん月を指し
忽ち花をねんす。
詩[illegible]從來[illegible]同。[illegible]有二[illegible]中一。一家[illegible]
[illegible]比、[illegible]是當年[illegible]翁、
しけつ從來ぐわけつに同じ。うらやむ君がせいちく胸中
に有るを。一家のめうけい誰れか比するにたへん。唯是
れ當年のせう[illegible]う

三[illegible]堂席上同賦

一庭殘雨滴二斜陽一。高捲二[illegible]一[illegible]涼一。別有
雲山供二畫本一。可レ無花竹帶二詩香一。文章只合
レ追二三李一。出處何妨[illegible]二四鄉一。愛此半邊無二長
物一。[illegible]然[illegible]伴二方牀一。
さんりだう席上どうふ　一庭のざんうしややうにした
たる。高く[illegible]あたりに有
り雲山のぐわほんにきようする。無かるべけんや花竹の
しかうをおぶる。文章ただまさに三李を追ふべし。しゆ
つしよ何ぞ妨げんしきやうを愛するを。愛す[illegible]へん
長物なく。せうぜんえいちんはうしやうに伴ふ。

題二蓮花水僊圖一二首

兩家高格借レ[illegible]評。至[illegible]知[illegible]兄　[illegible]月三
更描二小影一。[illegible]雲一片認二前生一。倚レ風立處[illegible]
衣薄。[illegible]水來時環[illegible]。鐵石心腸[illegible]
不レ妨共訂二歳寒盟一。
ばいくわすゐせんの圖にだいす　兩家のかうかく誰れ
[illegible]
[illegible]
前生をみとむ。風によりて立つところかういうすく。水
を渡りて來る時けいはいかろし。鐵石のしんちやうひよ
うせつのばう。さまたげず共にさいかんのめいをていす
るを。
[illegible]得[illegible]。不レ御二[illegible]自[illegible]。[illegible]
魂[illegible]女夢。[illegible]美人魂。[illegible]一片[illegible]
淡[illegible]三更[illegible]月村一。[illegible]多二[illegible]一。
歳寒心事共[illegible]。

ひょうさうあき一御たゝ渾身のたん、いんしをきこせすして品おのづから殊し。らくはあかつきにきよふ碑文のゆめ。らふはらは致す美人のこん。一片りようはのべつを借りもつて。[illegible]ねに三三から月をかくるの村に到る。[illegible]てならはんるんけいきとさきに。さいかんの心事ともになんなん。

大久保湘南詩

[illegible]潤亭即事

吳兒水調唱二歌頭一。澤國涉涼白露秋。偶有二[illegible]聲落二天半一。一簾疎雨夢二歸舟一。

[illegible]くわんらんていそくじ　ごじの水調かとうおせぶ。たくこく[illegible]秋。たまたま[illegible]の天半より落つるあり、一れんの[illegible]

馬入川

大山秋色莽蕭蕭。馬乳川光一道遙。聞說水源過二百里一。峡雲楼閣古猿橋。

ばにふがは　大山の秋色ばうとしてせうせう。ばにうのせんくわう一道はるかなり。きくならくすゐげん百里を過ぐ。けふうんさんらこゑんけう。

三條三嶋樓阻レ雨漫拈三首

曼靡哀艶促聲悲。越女風流唱二竹枝一。眉黛青山八十八。爲レ郞一寄二樂[illegible]詞一。

三條さんしうろう雨にそせられまんにねんす　まんせいあいえんそくせい悲しむ。ゑつぢよの風流ちくしをとなふ。びたいせいざん八十八。らうの爲めに一さいすやくしの詞。

長天青洗嫩涼通。静坐二南軒一聽二水蟲一。梧葉[illegible]。[illegible]月明中。

長天きよく[illegible]んりやう通ず。南けんにざして水蟲をきく。ごえふけんけんせうえふきよく。雲と一ぺきげつめいの中。

美人香草有二芬芳一。花[illegible]冥冥秋半粧。疑是[illegible]中影。[illegible]紅如レ水繡二瀟湘一。

美人かうさうふんぱう有り。花[illegible]めいめい秋はんしやう。くわうとして見るりさうふちうの影。さんかう水の如くせうしやうをぬく



（大久保湘南）

柳橋感レ舊

西風殘日柳蕭蕭。羅綺[illegible]生罷畫橋。小閣紅流粉黛水。一襟碧漾大江潮。蘋花采采來二何沚一。香草離離[illegible]二楚謠一。悵惆美人今不レ見。綠波亭角夕陽饒。

りうけうきうに感ず　西風ざんじつやなぎせうせう。ら[illegible]はりすえんぐわけう。せうかふ紅は流るふんたいの水。一きんへきはみなぎる大江の潮。ひんくわさいさいしやうしに來り。香草りりそえうに感ず。ちやうちやう美人いま見えず。綠波ていかく夕陽おほし

八百松樓小集。同二小崎藍川佐藤八石一。

分[illegible]

南渡[illegible]村樹[illegible]

[illegible]紅[illegible]。[illegible]人[illegible]

至。[illegible]

細作[illegible]

[illegible]　おうは[illegible]の三字を分ちてゐんとなす。韻を得たり。[illegible]夢の如くそういうをさす。[illegible]せきやうれんはんこう。春酒げんばうこうさやうの[illegible]、かふいりやうしすはくひんしう。泳人あたかも[illegible]とともに[illegible]る。じゆくきやうせんくのむくゆる無きをはづ。みやうにち千山けんへきを裂く。知る君がうんじはいくたびかからべをめぐらすを。

永坂石埭詩

丁字簾詩三首

[illegible]

丁字簾前是六朝。月明誰唤嬝兒簫。秋風吹落秦淮水。惆悵何人倚二畫橈一。

ていじれんし三首　ていじれん前これりくてう。月あきらかに誰れか喚ぶとうじのせう。秋風ふきおとすしんわいの水。ちうちやう何人かぐわだうに倚る。

青山如レ夢落二秋潮一。丁字簾前是六朝。寒[illegible]葉短。白門殘日易二蕭蕭一。

青山ゆめの如くしうてう落つ。ていじれん前これりくてう。[illegible]ふかは寒く、やうえふは短し。白門の殘日せうせうなり易し。

殘柳[illegible]舊板橋。棲鴉流水欲二魂銷一。阿男好

句無二人和一、丁字簾前是六朝。

ていりうさんさんとしてきうはんけう。せいあ流水こんせうせんと欲す。あなんの好句人の和するなく。ていじれん當これりくてう

笠置懷古

行宮遺址草蕭蕭。夢裏刀兵一劫銷。豈翅傷レ心是芳野。笠山風雨弔二南朝一。

かさぎくわいこ　あんぐうのゐし草せうせう。むりの刀兵一こふせうす。あにただ心をいたむる是れ芳野ならん。りふざんの風雨なんてうを弔ふ。

菅公像贊

烜赫文章萬古巣。和羹當日已全レ功。猶留數點梅花氣、宛在二天荒地老中一。

菅公像さん　けんかくたる文章萬古たつとし。わかう當日すでに功をまつたくす。なほ留む數點ばいくわの氣。ゑんとしてでんくわうちらうの中に在り。



（永坂石埭）

暮山夜月圖

澤人就去我無[illegible]、山響子今同自鶴一、滿地

月明寒レ似レ雪。夜深誰拜古陵花。

はうざんやげつの圖　いらじん散じつくしてせきとしてくわ無し。さんじゆ今にはくあすむ。滿地のげつめい雪よりも寒し、夜深うして誰れか拜すこりようの花。

墨水觀花

美人何在恨迢迢。詞裏芳魂不レ可レ招。腸斷吾妻橋北月。依依[illegible]影落二春潮一。

ぼくすゐくわんくわ　美人いづくに在るかうらみてうてう。しりのはうこん招くべからず。腸はたつあづまけうほくの月。いいたるくわんえい春潮に落つ。

戊戌五月八日。南中星岡雅集賦詩二錦山居山碧堂竹隱諸君及列位吟正一

時局眞憐二朱[illegible]叢基一、莫レ數二下レ子故遲遲一。惜他伏櫪[illegible]空老。看到二吞舟魚亦奇一。把レ臂劇談當世務。挂[illegible]細聽惜春詞。一簾吹レ落星岡雨。瘦竹何嫌是子規。

ぼらじゆつ五月八日。うちう星ケ岡がしふ賦して錦山居山碧堂竹隱諸君及び列位のぎんせいに[illegible]。時局まことにあはれむ[illegible]。ちちたらしむるなかれ。惜む他のふくれきき空しく老ゆるを。みて[illegible]に到る[illegible]。だんす當世のつとめ。ざんをねんしてこまかに聽くせきしゆんの詞。一簾りよくを吹くせいかうの雨。れつちく何の嫌ぞこれしき。

北條鷗所詩

歸竹山人將レ遊二松島一

〔紺〕碧松色蔓二吟身一、下有二[illegible]濤洗二世塵一、羅鐵

相逢明月夕。可レ無二妙句感二河神一。

しはちくさんじんまさに松島に遊ばんとす　けんけんたる松色ぎんしんを[illegible]す。下にいりらのせぢんを洗ふあり。[illegible]ひむかふ明月の夕。無かるべけんや妙句のしやうしんを感ずるを。



（北條鷗所）

鎌倉光明館偶成

振二衣倚二高閣一、眼爲二海山一開。岸竹[illegible]白。亂松蕭寺青。重冥秋莽莽。一磬暮冷冷。縱目欲レ無レ際。孤鴻赴二杳冥一。

鎌倉光明館ぐうせい　衣をふるひかうかくによる。めかいさんの爲めにさむ。きよくがんしよたう白く。らんしようせうじ青し。ちうめい秋ばうばう。一けいくれにれいれい。しようもくさい無からんと欲し、ここうえうめいにおもむく。

送三九峯遊二陜中一

策レ馬[illegible]。[illegible]天入萬山一圍。老樹當二人面一。亂雲堅二馬頭一。宦遊[illegible]誰笑。[illegible]領[illegible]留。

九峯けふちうに遊ぶを送る　馬にむちうつけふちうの[illegible]。らん天は萬山に入りていう。らうじゆは人面にあたり。らん

らんさんとうにかゝり。くわんいらけんびつによる。陰たらおちてあらだいを沼めん。

山北[illegible]中[illegible]佐渡[illegible]作[illegible]

滄溟何[illegible]時[illegible]迎進
遊[illegible]前[illegible]漁
備[illegible]花[illegible]公[illegible]
上[illegible]

[illegible]げきりよ何の榮かかんをしるを得ん。笑[illegible]せふじのく[illegible]にす[illegible]うえらいうは舟車[illegible]いる[illegible]水さららぎよこきしづかに。梅花りんろくがくらん寒し。知る公がさうぜつさくいらのあと。衣上のたらこんへきいまだ乾かず。

木蘇岐山詩

自二七尾一抵二佐渡一舟中

扶桑倒景九光開。喚二出青山一渡レ水來。急挂二
一帆一催二去去一。先生歸處是蓬萊。

七尾より佐渡にいたる舟中　ふさうたうけいきうくわう開く。青山をよび出して水を渡り來る。急に一ぱんをかけてきよきよをうながす。先生歸る處これほうらい。

望二越中劒嶽一

三年一夢越中州。爲レ愛二名山一即滯留。何意
能濟三百曲。青螺相趁客隨レ舟。

越中のけんがくを望む　三年一むゑつちうの州。名山を愛する爲めに即ちたいりう。何ぞおもはんのうわん三百曲。せいら相ひおうてれんごろに舟に隨ふ。

四月二十日[illegible]花[illegible]寺一

[illegible]上[illegible]
[illegible]花[illegible]界[illegible]山色[illegible]
人[illegible]酒[illegible]
迹。不レ應二啼鳥漫催一レ歸。

[illegible]なかれ。雪を染むあうくわはうかいをよそほひ。紅をしんする山色しやきをゑがく。情は知るしようち人よく無くゝ大いに好ししうじやうさけ間を破る。てんがんはんくわ共にちんせき。まさにていてうみだりに歸を催すべからず

和二人晃山詩一

萬峯環合動二雲旂一想見乾坤入二指揮一廣武風
雲開二漢業一驪山松柏壯二秦威一氷霜大饗龍寒
蟄、風雨靈壇神夜歸。王霸廢興猶血食。至レ今
祠廟日光輝。

人のくわうざんしに和す　ばんぽうくわいがふらんきどうく。想ひ見るけんこんしきに入るを。くわうぶの風雲かんげふを開き。りざんのしようはくしんゐを壯とす。氷霜たいがくりよう寒くちつし。風雨れいだんかみよる歸る。わうはのはいこうなほけつしよく。今に至りてしべう日光かがやく。

森川竹磎詩

病中偶題

一炷沈香一桁簾。年年三月病厭厭。可レ憐夜
夜瀟瀟雨。聽向二枕邊一愁更添。

病中ぐうだい　一しゆつちんかう一かうれん。年々三月病えんえん。憐むべし夜々せうせうの雨。きいてちんぺんに向ひてうれひさらに添ふ。

清明

水邊[illegible]人行。[illegible]
玉[illegible]去[illegible]花椎柳作二清明一

せいめい　[illegible]

[illegible]詩二首

黄鳥數[illegible]百舌[illegible]不[illegible]
操播二爲能事一姿[illegible]風[illegible]
曰レ韓曰レ杜竟何如。一笑諸君不レ讀レ書。石上
有レ詩能繋レ井。詩成扛鼎絶[illegible]餘。

ろんし二首　くわうてう聲を收めて百舌は吟す。しゆらつざつ音を成さず。いたづらにしんしやをもつてのうじとなさんとす。しちふうしんしよのたづぬるなし。かんと曰ひとと曰ふつひにいかん。一笑諸君しよを讀まず。せきじやう詩有りよく井をほる　詩は成る[illegible]いぜつびんの餘

秋日詠懷十首二録

秋風自レ西來。颯然吹二萬木一木葉鳴有レ聲。
悲哉氣森肅。閨婦掩レ鏡啼。游子望レ鄉哭。天
地一荒涼。何處著二我屋一

しうじつえいくわい十首　しうふう西より來る。さつぜん萬木を吹く　ぼくえふ鳴りて聲あり。かなしいかなきしんしゆく。けいふ鏡をおほうてなき。いうし郷を望んでなく。天地一くわうりやう。何れのところにか我がをくをつけん。

揖御跡絲絲。樹有實歸渡。荷花敗亭亭。上有晴蜓立。[illegible]未湖雪乾。芳殘不可拾。感此眼前物。流年一何急。

やうりうそにしてしした り。前にかんせんのなくあり。かえふ敗れてていこい。上にせいこいの立つあり。飛び[illegible]此[illegible]

小室屈山詩

雙潟紀行二十絶録六

秋風又上短長亭。忽覺紅塵夢欲醒。朝出二郊門一先快意。淨塵掠レ面萬山青。

[illegible] 秋風又のぼるたんちやうてい。忽[illegible]めさめんと欲す。あしたにかうもん[illegible]山あ[illegible]

一潭毎遇二一紆回。[illegible]白雲天畫開。[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]へきたんこうじゆ[illegible]つくわんたひらき。[illegible]

[illegible]秋風

來必羨鱸膾。上二[illegible]香魚一尺肥。

宿をかりて來りてたゝくはくはんひ。やたう何の處からを買うて歸る。秋風いまだ必しもろくわいをうらやます。あみに上る香魚一尺こゆ。

石底游魚水淸冷。奇巖[illegible]綴樹[illegible]。如今無二復柳州筆一。勝境誰傳小石潭。

石底のいうぎよ[illegible]あつむ。きがん[illegible]つして樹さんさん。じよこんまた柳州の筆なく。しようきやう誰か傳へんせうせきたん

冥濛不レ辨道西東。日暮深山萬籟空。濕透二征衣一重二於雨一。登登已入白雲中。

めいもうべんぜず道の西東。にちぼ深山ばんらいむなしく。しつは征衣にとほりて雨よりも重く。とうとう已に入る白雲の中。

芝山寓居秋晩漫吟十[illegible]

昨夜宿初至。秋寒透二挾衣一。世途[illegible]苦。時事是耶非。竹[illegible]紅[illegible]。[illegible]城南栖亦好。[illegible]

しざんぐうきよしうばんまんぎん　さくやしゆく初めて至り。しうかんけうゐに透る。せいときんと苦と。じじ是か非か。竹はへだつこうぢんのはく。[illegible]はうづむはく[illegible]

[illegible]花有レ宅。分食[illegible]如兒。[illegible]世[illegible]。忘[illegible]

[illegible]何[illegible]。[illegible]

しやうゐきぢんき少く　さいひつゐえふしげし。ふゆを渡るはな室に有り。食を分つくは兒の如し。[illegible]

[illegible]

已ニ秋日。薇城[illegible]閣雅集。席上賦レ此似二諸同人一

偶然斯夕會二名流一。意氣[illegible]前[illegible]。如レ水銀河宜二淺夜一。無レ雲[illegible]落近二中秋一。風霜入レ筆有二公等一。詩酒[illegible]。自笑十年狂未レ滅。高歌酬興又登樓。

きがいしうじつ。びじやうしつかくがしふ。席上これをふして諸同人にしめす　ぐうぜんこの夕めいりうを會し。意氣そんぜん一すゐむくゆ。水の如き銀河はせんやに宜しく。雲なき[illegible]中秋に近し。ふうさう筆に入るは公等有り。[illegible]いまだすみなおがちう。みづから[illegible]ふ十年きやうわらだけんぜず。[illegible]かんきようべとうろう。

大正時代

國分青厓詩

山中歎

問レ余山中栖幾年。世間甲子如二雲煙一。采レ藥歸來日猶早。獨聽二松風一石上眠。

山中の歎　われに問ふ山中にすむこと幾年ぞと。世間の甲子うんえんの如く、薬をとつてきらい日なほ早く ひとり松風をきいて石上にねむる。



（國分青厓）

溪上辭

溪上老人仙客爲。爲レ余一唱溪上辭。門外清流二三里。乘レ月泛レ舟從レ所レ之。

けいじやうのじ　溪上の老人せんかくのし。余が爲めに一唱すけいじやうのじ。門外のせいりう二三里。月にじようじ舟をうかべてゆく所に從ふ。

望二立山一

夢見二名山一四十年。[illegible]只[illegible]天開日出[illegible]立[illegible]仙在二我前一。

[illegible]

讀二十八家詩鈔一[illegible]

李杜雄才靈性同。白如二鸞鳳一甫如レ龍。二公一代誰比レ肩。七絕千年亦角レ鋒。樂府風神多二興象一。史臣論斷兼二雍容一。清朝只有曾文正。特筆何推二兩大宗一。

十八家しせうを讀む　りとの雄才れいせいおなじ。白はらんぽうのごとくほは龍のごとし。二公一代たれかかるゐたます。七ぜつ千年またほうたかくす。がくふの風神きようざう多く。ししんのろんだんせいようしゆくたり。清朝ただそぶんせいあり。特筆ひとしくりやうたいそうたおす

七絕清新被二管絃一。有唐冠冕李青蓮。二王同曲豈其匹。一杜變華唯並レ肩。紀レ事連章多レ所レ祖。論レ詩創體早開レ先。後來無レ識二選詩一者。纔摘落花三五篇。

七絕せいしんくわんげんに被らす。有唐のくわんべんはりせいれん。二王どうきよく豈そのひつならんや。一とへんせい唯かたをならぶ。事を紀すれん[illegible]やう祖とする所多く。詩を論ずるさうたいはやく先を開く。[illegible]詩をしるなきもの。わづかにつむ落花三五へん。

[illegible]

十八家詩[illegible]。[illegible]門。[illegible]古[illegible]。[illegible]斷在[illegible]信苦心存。[illegible]世追レ流欲レ失レ源。

十八家詩たれかこまかにろんぜん。[illegible]門なし。[illegible]

次二韵高島九峯長門峽歌三十二首一

山水之美多在レ源。巖石競レ秀湍水奔。金櫻玉井甲已熟。龍川箱峽人所レ論。長門奇勝丹青上。武夷九曲想二仙蹤一。今歲我遊西九州。千里回レ轅一尋訪。驚嘆先渉丁字川。絕壁攀レ騰終華レ巓。瀬者碧潭點青潭。深林遠谷聽吟傳。北海老人夙遊覽。驛使五丁路鋪レ輪。道是

巖壑中天下一。爲展溪藤大筆染。勝區仙境洵難得。紛紜月旦我何識。但喜天地鍾秀靈。直壁上龍作子閣。

青島の峯なかとけふかにじゐんす三十二首　山水の美多くみなもとに在り。がんがき秀をきそひたんするはしろ　きんあら玉みゝ[illegible]じゆくすりようせんきけふ人の[illegible]するところ。長門のきしようは丹青の上。ぶいの九曲けんしやうをおもふ。こんさい我れ西九州に遊び千里ゑんをめぐらしていちじんはう。きやうこん先づわたる丁字の川。ぜつぺききしがたくつひにむちをすつ。あつまる者は[illegible]かな[illegible]ばく　深林するこくゑんぎんつたふ。北海老人つとにいうらん。五丁をくしして路けんをけづる。いふこのがんがく天下に甲たり。叙めいけいとうなの[illegible]大筆をむ　しようくわんきやうまことに得がたし　ふんうんたる月旦我れ何をしらん　ただ喜ぶ天地しうれいをあつめ。しんさいとこしへにちよう[illegible]子の閣

天造之奇何武源。一水直劈千山奔。怪石獅蹲巨竿腹。深潭紺碧人未論。九軍曾住水源上。遙望南天臥雲嶂。直書北海古風流。披荊拂棘屢尋訪。頼有菁莪占岡川。丹青一幅寫奇峭。千峰萬壑森列玉。奇景長與奇筆傳。此境久不言人識。[illegible]藩保障天險。清明今日[illegible]國。三神高嶂聳染。交章固兩相得。兄弟親愛世人識。秀靈山川生異才。長門紋壯長門國。

[illegible]しる。くわいせきしそん世をれにみる。しんたんこんぺき[illegible]ろかに青天を望んでうんしやうをふす。ぐわをよくする北海もと風流。けいをひらききよくを拂ひしばしばじんはうす。らいしおかし山岡川に遊び、丹青一ぷく先づべんをつく。せんしんばんこつしんとして玉をけづり。きけいとこしへに奇筆とともに傳ふ。このきやう久しく人のみる[illegible]ゆるさず　はうはんのほしやう天險をひす。せいめい今日始めていう[illegible]らく　うんえんばんがく筆をむるにたへ。文章とぐわふたつながら相得て。兄弟美をくらぶ世人しる。しうれいの山川いさいを生じ。ちやうもんけふは壯とすながとの國。

北海讀勝如探源。開之使人疾聲奔萬金闢祕長門峽。按圖據書反覆論。瀟傷遠發武川上。幾曲屏風列奇嶂。絕壁崩崖危欲崩。古來只知樵者訪。褰裳左涉生雲川。奇峰迸出如筍攢。噴淵水黑不知底。猿猱轗轕雲際傳。金剛勝槩昨遊覽。千峰萬峰路更險。此地雖小秀相匹。可惜騷人筆未染。北海風流世難得。我已探討一斑識。敢做臥遊宋少文。明春重踏雲煙國。

北海しようをよむことげんをさぐるごとく　之を開いて人をしてしつじゆはしらしむ。萬金ひをひらくちやうもんけふ。圖をあんじふによりてはんぷく論ず。らんしやうは遠く武川のほとりに發す。いくきよくのびやうぶきしやうを列し。ぜつぺきせうがい危うしてくづれんと欲す。古來ただ[illegible]とく。あんえん水黑くしてていを知らず。ゑんばくだうたふとして雲際につたふ。こんがうのしようがい昨いう[illegible]ろす。[illegible]てふまんうんえんの國。

岩溪裳川詩

芳山

[illegible]後六

百年花又落。南山日暮一聲鐘。

はうざん　たんせい長くゐようをおもふにたる。ざようのれい[illegible]はな又おち。南山にちぼ一聲のかね

墨江

風流遠矣一千年。若有人兮春水天。春水白鷗多古意。一千年在白鷗前。

ぼくかう　ふうりう遠し一千年。人有るがごとししゆんすゐのてん。春水はくおう古意おほし　一千年ははくおうの前にあり。

春帆樓

韓公上疏策屯兵。自古王師唯有征。此地繁華歌吹海。春帆樓是受降城。

しゆんぱんろう　かんこうそをたてまつつてとんぺいをさくす。いにしへより王師ただ征あり。此地はんくわかすゐのかい　春帆樓は是れじゆからじやう。



(岩　溪　裳　川)

十八樓

曾上[illegible]川烏東舟。漁[illegible]照水下中流。詞傳十七[illegible]翁句。一色風烟十八樓。

十八樓　かつて[illegible]らんせんうきの舟。[illegible]傳[illegible]せせをちの句。一色

ふうえん十八櫻。

[illegible]門樓

峡門百尺[illegible]。[illegible]心。此[illegible]

[illegible]

[illegible]

山[illegible]

[illegible]けふもん百尺天をさしはさんでふか[illegible]初めてうかがふざうくわの心。この地ふ[illegible]きうがうにきようし。かの都人士はたうりんをところむ。はんくわ[illegible]くぎよりようのくつ。[illegible]きはひろがへるくわんかくの林。しらなきそひ流を[illegible]ふがんがくの状。さんやうは[illegible]山いん[illegible]

桃山陵

中興英主出。偃武三千歳、揚レ威百萬兵、[illegible]。日仄[illegible]、[illegible]草色。虚殿只松聲、片月瞻弓影。臣心表二心誠一。

もゝやまりよう　ちうこう英主は出で。やうてき又ちようけい。しやうぶ三千歳。ゐゐあぐ百萬の兵。ていこりよう去つて遠く。しゆろうすゞめふくみ成る。日はかたむき[illegible]れいしようむなしく草色。きよでん只しようせい。へんげつきうえいおち。臣心しんせいを表す。

高野竹隱詩

探梅二首

涓涓流水坼二芹芽一。野竹春寒日未レ斜。一路東

風字兩[illegible]、[illegible]梅花一。

[illegible]

[illegible]

一[illegible]、[illegible]人来、小[illegible]

有二[illegible]、[illegible]。

[illegible]

倚竹荒寒[illegible]一枝、[illegible]支持、[illegible]心[illegible]段[illegible]、[illegible]。

竹によりてくわうかんわづかに一枝。わうしやすゐしうともに支持す。きよしん此の段[illegible]さにあひゆづるべし、ふうこつ天然したい奇なり。

種竹山人書來。約同游月瀨一、率賦

爲レ答二首

冷落廣文詩不レ娥。故人[illegible]賦醉吟歌。書來新訂觀梅約、也怕花嘲瘦更多。

種竹山人の書來る。月が瀬にどうゆうを約し。そつふ答を爲す　れいらくくわうぶん詩がならず。こじん誰れかふすゐしの歌。しよ來つてあらたにていすくわんばいの約。またおそるくわてうさう更らに多きを。

賭得小紅低唱情。新詩還要播絲繩。相思遠道春如レ夢。人與梅花待二月圓一。

せうこうをとし得て低唱をあはれむ　新詩また要す[illegible]しぜん。さうし遠くいふ春ゆめの如しと。人はばいくわと月のまろきを待つ。

秋鵲和二服部擔風韻一

惜レ別當初恨二子規一。重聽鴛レ汝費二猜疑一。獨

[illegible]心[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

なきらためていじをたづねん。ひとただ[illegible]まさにゐみじかかるべし、予[illegible]げんじつ[illegible]きを見る、こうえうくわんさい[illegible]のうち、[illegible]ぶんよしてこしを[illegible]。

落合東郭詩

觀二[illegible]竹一[illegible]

數竿細レ[illegible]、[illegible]。南[illegible]明遊二叡賞一。[illegible]湖州一。

[illegible]の秋。南[illegible]しよくは明らかにして[illegible]

[illegible]

驚囀[illegible]枝向二曉光一、梅華細レ[illegible]二高[illegible]一。[illegible]吟佇立[illegible]階畔。飽聽東風第一春。

きんゑんに梅をみる　あうは高枝にてんじてしよくわうに向ふ。ばいくわ雪のごとくきうしやうをようす。びぎんちよりつすゑうかいのはん。あくまできく東風の第一から。

絶句

龍梅當日[illegible]レ[illegible]レ[illegible]。日斷湘南烟水間。[illegible]有二

侍臣餘二[illegible]眞一夢中昨夜拜二天顏一

絶句　りようぜん當日よぢがたきをいかんせん。もくだんすしやらなん[illegible]水のかん。なほ侍臣のているゐをあま[illegible]有り[illegible]

三角浦[illegible]二首

中山萬王國。[illegible]揭レ[illegible]、織有民宜レ貢。懸弓[illegible]有レ[illegible]、青[illegible]依二[illegible]草一。赤木映二蒼溟一。最是竹枝曲。月明[illegible]客聽。

[illegible]ちうざんきう王國。[illegible]しよくふ民よろしくこうすべし。[illegible]ふなんぢが[illegible]れいをあぐ。けんきうべうにれい有り。どくじやまんさうに依り。赤木さうめいにえいず。最もこれちくしの曲。げつめいこかくきく。

除夜寓直應制

殿角望二星斗一。九重知二[illegible]深一。待レ春除夜直。忠[illegible]侍臣心。書[illegible]。[illegible]竹[illegible]。不[illegible]守レ歲。[illegible]有二清音一。

[illegible]でんかく星斗を望めば。[illegible]春を待つぢよやのちよく。[illegible]るじしんの心。ぐわしよくうめ二だ。えうか[illegible]



[illegible]

葉山離宮卽事

開自二離宮一[illegible]。春風此日晴。[illegible]烟[illegible]絹島一、殘雪[illegible]二天城一。採レ藥仙人意。隨レ[illegible]海客情。昨宵[illegible]底。夢聽雨來聲。

はやまりきうそくじ　しづかにりきうより望めば。春[illegible]この日晴る。けいえんゑのしまにこめ。ざんせつあまぎをようす。くすりをとる仙人の意。おうにしたがふ海客の情。さくせうれんぱくの底。夢[illegible]くきく雨來るの聲。

有樹篇

有二樹在二山曲一。天然出群姿。[illegible]凌レ宵立。清陰早生レ芝。白雲宿二其杪一、黃鵠巢二其枝一。斧斤不二敢入一。樵者神二視之一。一朝天赫怒。霹靂震二四維一。魑魅時出沒。日月光明虧。助レ勢更何物。風伯與二雨師一。暴力何可レ敵。彼樹遂不レ支。埋沒深[illegible]。[illegible]自持。乾然[illegible]梁質。[illegible]眞堪レ悲。[illegible]百年後。忽爲二人所一レ知。採掘長幾丈。剝落失二[illegible]皮一。形[illegible]不レ完。神骨允在レ茲。[illegible]棄。今日[illegible]奇一。其[illegible]不レ立。[illegible]能[illegible]知[illegible]。更[illegible]造物意明晦自有レ時。

[illegible]樹のさん[illegible]有り。天然し[illegible]つ[illegible]ちくちくとしてせうをしのいで立つ。せ[illegible]いん[illegible]にしを生ず。白雲[illegible]其の[illegible]にすく[illegible]。ふきんあへて入らず。せうしや之れをしん[illegible]一てう天かくどし。へきれき四ゐにふるふ。ちみ[illegible]しゆつぼつし。日月くわうみやうかく。せいを助くるは更らになにものぞ。ふうはくとうし[illegible]はうりよく何んぞ敵すべけん。彼のじゆ遂にさゝへず。まいぼつして深くたうくわいす。くせつ獨りみづからぢし。きつぜんとしてとうりやうのしつ。てんぱいまことに悲しむにたへたり。豈はからんや百年ののち。たちまち人の知るところとなる。さいくつす長いくぢやう。はくらくしてさうひを失ふ。形體はまつたからずとはいへども。神骨まこと[illegible]こゝに在り。[illegible]ちんきと稱せられ。其のもといやしくも立たざれば。いづくんぞ能くかくの如きをえん。更らにさとるざうぶつの意。めいくわいおのづから時あり。

長尾雨山詩

題畫四首

朝看二白雲起一、夕看二白雲還一。白雲自來去。幽人意更閒。

だいぐわ　あしたにはくうんの起るをみ、ゆふべに白雲のかへるをみる。白雲おのづからきよす。いうじん意さらにかんなり。



（長尾雨山）

美人梳レ[illegible]。小立[illegible]二[illegible]。日[illegible]竹情然有レ所レ思。

美人さうをくしけづりやめ。小立してさゐをかゝぐ。日ぼ[illegible]ちくをみる。せうぜんとして思ふ所有り。

春山[illegible]雨過。[illegible]有二[illegible]一。[illegible]去。

雲[illegible]未レ歸。

[illegible]たにちやうざんを荷うて去り。雲ふかうして既にいまだ歸らず。

常[illegible]竹崎島絶。 行[illegible]。 [illegible]秋雲冷。 臨

門秀[illegible]峰。

[illegible] 秋雲ひやゝかに。門にのぞんで一峰ひいづ。

朝鮮

三韓昔[illegible]。 在昔作二藩臣一。 玉帛輸二朝貢一。 梯

航來二使人一。 江山幾更レ主。 黎庶再歸レ仁。 聖

澤無二今古一。 恩濡雨露均。

[illegible]かんはむかし[illegible]はんしんとなる。ぎよくはくてうこうをいたし[illegible]ていかう使人こきたる。かうざんいくたびか主をかふ。れいしよふたゝびじんに歸す。せいたく今古なく。恩はうるほうて雨露ひとし。

與二青厓竹隱仙坡鐵石一西山吟集分韻得二

櫻字一

故人京國酒。 緬緬十年情。 數里春郊路。 西山

看二早櫻一。 林深煙欲レ合。 花發雨猶明。 此會

難二多値一。 唯當二積傑傾一

青厓竹隱仙坡鐵石と西山吟集[illegible]を得たり
故人けいこくの酒。めんめん十年のじやう。數里しゆんかうの路。西山さうあうをみる。はやし深うして煙がつせんと欲し。花ひらいて雨は猶ほあきらか。此の會多くあひがたし。唯まさにせきを傾くべし。

太白山人歌。 送二國分子美赴二臺灣總督

招遊一

太白山人太白精。 自言太白山下生。 謫落人間

[illegible]。 山人[illegible]。 七十[illegible]

[illegible]八[illegible]。 [illegible]

嶽。 長歎似レ奏二鈞天之仙樂一。 山鬼相顧驚。 鼈

獻二夜光璞一。 揮レ手御レ風回。 豪氣横[illegible]何

卓犖。 督憲邦迎拱二上賓一。 欲レ聽詩教化二蠻民一

致二君堯舜一使二風[illegible]一。 [illegible]獨[illegible]忠臣一。 我

於二子美一徑信二詩人非二閒人一。

たいはく山人の[illegible]國分子美[illegible]におくる
太白山人はたいはくの精。みづから言ふ太白山下に生ると。たくらく人間[illegible]南のさいかうがく。ちやうせうきんてんのせんがくを奏するに似たり。さんき相かへりみて驚く。ひざまづいて[illegible]君をげうしゆんに致してふうがによる。あに獨りこうきの忠臣たるのみならんや。我は子美に於てますます詩人のかんじんに非ざることを信ず。

佐藤六石詩

酬二國分青厓見レ寄二首

來似二清風一去似レ煙。 不レ知羽化是何年。 山人

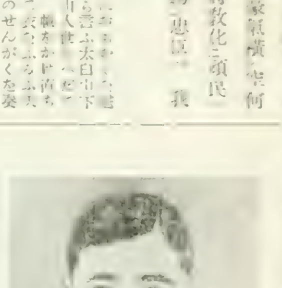
夙有二神人相一。 太白縦レ胸爛爛然。

國分青厓の寄せられたるにむくゆ　來るは清風に似て去るはけむりに似たり。知らずうくわは是れ何年。山人つとに神人のさうあり。たいはく胸につらたつてらんらんぜんたり

手捫二星斗一蹴二雲煙一。 快事可レ忘登レ嶽年。 皆

[illegible]

[illegible]かくに[illegible]るのとし。みないふ[illegible]らんかくと共にへらせ[illegible]



[illegible]

奉レ送二桂公赴一歐亞一

滿帆大旭出二海東一。 照見[illegible]第一功。 志在二

四方一魚水合。 槎非二八月一漢河通。 羽毛變滅

雲霄際。 尊俎折衝談笑中。 昨日[illegible]

拂レ衣萬里駕二長風一。

桂公歐亞におもむくを送る [illegible]うち。さくじつ余におくるどくしよの句。衣を拂つて萬里ちやうふうにがす。

奉レ祝二[illegible]畝相公一三首

樞機贊畫密二經綸一。 志在二平和一先二[illegible]一。 割據

三分小二天下一。 至誠一貫合二神人一。 當時諸葛未

レ興レ漢。 是日荊軻已入レ秦。 聞說九重勞二軫

念一。 蘭臺捧レ詔日逡巡。

存歛相公をばんしたてまつる　すうきさんくわくしてけいし[illegible]ぜんしんを焦にす。かつきよ三分天下を小とす。しせい一くわん神人にがつす。當時のしよかつ未だかんをおこさず。この日けいかすでにしんに入る。聞くならく九重しんねんをらうし。らんたいふをほうじて且つしゆんじゆんす。

觀レ死如レ歸笑噱然。眞成回レ首即神仙。山河帶礪東西域。開濟調和五十年。儒雅風流推ニ獨步一。功名日月仰ニ後懸一。遺容也見七生志。尙著ニ衣冠一朝ニ九天一。

しをみること帰するが如く笑つてあぜん。しんせい首をめぐらせば即ちしんせん。山河たいれい東西のゐき。ていたいてうわ五十年。じゆが風流どくほをおし。功名日月さうけんをあふぐ。ゐようまた見る七生のし。なほいくわんをつけて九天に朝す。

桂湖村詩

送ニ田邊君碧堂游ニ禹域一十四首

燕北江南去路[illegible]。吟秋況[illegible]一長[illegible]。歸來定合ニ[illegible]囊中一。[illegible]使[illegible]公分[illegible]一

[illegible]はるかなり。吟秋しようをとつて一ちやうさす。きらい[illegible]を分つ。

漢代樓[illegible]王氣京。[illegible]車[illegible]去向[illegible]。黃沙落日[illegible]西[illegible]。[illegible]波下[illegible]

[illegible]

[illegible]日[illegible]河不復回。哀寰杳

松山下路。太宗曾策ニ六龍一來。

かんしゆのれいじやく聖源ひらく。運はゆいてれうがまたかへらず。せきばくきやうしよう山下の路。太宗かつてりくりようにむちうつて來る。

闘[illegible]草平散ニ馬群一。行人[illegible]記ニ此[illegible]明軍一。瀋陽日暮風沙起。[illegible]人化作ニ寒雲一。

いうさくげんへい馬群は散ず。行人きす此の明軍をくつがへすを。ゆくわん日暮ふうさ起り。飛んでろりように入つてそくうんとなる。

聖祖威靈震ニ袞[illegible]一。閑[illegible]對後事問關。逢ニ著宮人一君莫レ問。當時[illegible]落ニ人間一。

[illegible]のゐれいしやうばんにふるひ、閑閑ごふご事かんくわん。宮人にほうちやくして君問ふことなかれ。當時のはうかんは人間におつ。

天子蒙塵聞ニ禁閣一。誰看內監侍ニ丹扉一。御慶曾煥承光殿。[illegible]肆今陳繡蟒衣。

天子もうぢんきんゐをひつす。誰れかないかんのたんぴにらうじふをみん。ぎよてん曾ててんすしようくわうでん。[illegible]しやうし今ちんずしうばうの衣。



(桂湖村)

英[illegible]宮[illegible]寒天[illegible]濟。重向ニ金陵一訪ニ古京一。莫レ[illegible]江南一曲。祇今[illegible]是[illegible]。

[illegible]きんりようにむかつて古京をとふ。和するなかれあいかうなんの一曲。ただいま[illegible]れか見れゆらんせい

翠華南幸紀ニ東乾一。莫[illegible]臣[illegible]有ニ沈[illegible]一。[illegible]去試看[illegible]武士。無ニ人解ニ道勒一碑年一。

すゐくわ南にみゆきしてかうけんを紀す。じひつしんれうしんせんあり。君は去つて[illegible]みにみよ[illegible]の上、人のひをろくするの年をかいだうする無し。

行傍ニ青山一入ニ建康一。六朝遺事使ニ君傷一。秋蕪何處[illegible]章殿。不レ見梅花戀ニ[illegible]陽一。

行いて青山にそうてけんかうに入る。りくてうのゐじ君をしていたましむ。しうぶ何れのところかがんしやうでん。見ず梅花のじゆやうを[illegible]ふを

一聲鐘動景陽樓。芳樂宮殘著ニ王鉤一。今日君過ニ住麗地一。石城寒柳暮[illegible]然。

一聲かねは動くけいやうろう。はうがくのきうひんぎよくこうを著く。今日君は[illegible]寒柳ぼあうれふ。

秣陵城廓碧雲深。天[illegible]依然王氣沈。欲レ遣ニ愁心一隨ニ逝水一。子[illegible]今[illegible]帶[illegible]音一。

まつりようのじやうくわくへきうんは深し。てんざんいぜんとして王氣は沈む。しうしんをやつてせいすゐにしたがはしめんと欲す。今に[illegible]ゆ[illegible]音をおぶ。

楚[illegible]荊陵秋欲レ深。[illegible]怨恨[illegible]。君山蒼翠無ニ朝暮一。湘水清冷自古今。

そしよくれいりよう秋深からんと欲す。くわうがゑんこん誰れとたづねん。君山のさうすゐてうぼ無く。しやうすゐ清冷としておのづから古今

掌中[illegible]角一[illegible]中。[illegible]上[illegible]大[illegible]。男[illegible]白雲三十幅。[illegible]千里[illegible]天風。

しやうちうのりんかく一きの中[illegible]に上

つて大空をふむ。つんざき取る白雲の三十ふく。わが爲めに千里天涯にたくせよ。

齋藤[illegible]分限。[illegible]方[illegible]
笹有[illegible]州[illegible]
[illegible]

[illegible]新田大作調午一

終南[illegible]。一個吹[illegible]作持[illegible]
[illegible]。長見神州九鼎安。

しようを新田大作のたんごを祝ふ　終南のしんしはつ[illegible]えうふんをさらたらし盡し。長く見る神州きうていの安きを。

福井學圃詩

四月七日游二上野一

櫻雲漠漠圍二金仙一。[illegible]地[illegible]陵帶二暖烟一。猶展滿山春藹藹。百花生後佛生前。

四月七日上野にあそぶ　あううんばくばくとして金仙をかこむ。[illegible]えんを帶ぶ。くんげき滿山はるあいあいたり。百花の生後佛生の前。

花氣

花氣濛濛柳色迷。惱レ人春困與二秋齊一。[illegible]雲不二整搦一箏半。一任鶯兒盡二意啼一。

くわき　くわきもうもう柳色まよふ。人をなやますのしゆんこん秋とひとし。くわんらん勢へすきらをとりて擧す。一任すあうじの意をつくして啼くに。

花落

花落東西南北[illegible]。[illegible]作一年別。明日[illegible]已時。

[illegible]

望二磐梯山一

十六長槍安在哉。猪湖淼淼秋空開。丹[illegible]久[illegible]谷神死。磐梯山色青崔嵬。

ばんたいざんを望む　十六の長槍いづれに在るかな。ちよこべうべうとしてしうくうに開く。たんえん久しくせうしてこくじんは死し。ばんたいの山色せいさいくわい。

被酒

青錢且擬買二陽春一。擊筑高歌被レ酒身。不レ趁朱門粱肉臭。蓆天席地一詩人。

ひしゆ　青錢かつぎすやうしゆんを買ふに。げきちく高歌さけをかふむるの身。おはず朱門りやうにくのしうを。ばくてん席地の一詩人。

飯森山白虎隊墓

飯山連二瀧澤一。林嶂莽迤邐。鶴城其前開。百雉可二俯視一。天風吹二老松一。日夜濤聲起。緬想戊辰年。維新定二國是一。會藩東北雄。順逆或誤レ旨。錦旗向二奥羽一。連衡勢危矣。榮榮十九人。紅顏眞壯士。臨レ陣不レ顧レ身。主家運正否。望レ火知二城陷一。決然屠腹死。成敗何須論。[illegible]

[illegible]定む。くわいはんは東北の雄、じゆんぎやく或はしを誤る。きんき奥羽に向ふ。れんかうせいきほひ危し。さんさん[illegible]十九人。[illegible]りみず、主家の運まさに否なり。火を望んで城のおちいるを知り、決然としてとふくして死す。せいばい何ぞ論ずるをもちひん。非のれつ靑史をてらす。後人くちうをあはれみ。香火まことにゆゑあり。我れ來りてたいひをはらへば。秋氣くわんまうのうち、らんせんのこゑ雨の如く[illegible]

土居香國詩

北越紀行絕句[illegible]

萬樹喬松繞[illegible]峯　山樓雪後有二餘清一。溫湯一浴梅花從。半臂添來立二月明一。

ほくゑつ[illegible]雪。さんろう雪後よせい有り。をんたう一浴して梅花は[illegible]けん[illegible]いに立つ。

攀岸石丈異二其容一。雲似二有衣一時一重。誰奉二南宮袖中者一。東方作二此最奇峯一。

[illegible]似に時に一たようす。誰れか南宮しうちうの者ならば[illegible]一東方このさいきの峯をつくる。

鐵路盤桓山勢分。摩レ天淺[illegible]氣忻忻。岳頭山腹烟吞吐。蒸作二信中朝暮雲一。

還路ばんくわんとしてさんせい分る。天をますするのせんがく氣きんきん。がくてん山腹けむりどんとし。むして信中[illegible]

北[illegible]塚

北[illegible]殘碑字未磨。[illegible]縁傳唱竹枝歌。都門兒女[illegible]情種。一路春風香花多。

ひよくづか　ひよくのざんぴ字いまだまさず。めうえんでんしやうすちくしの歌。ともんの兒女しんじやうのたね。一路の春風にかうくわ多し



（圓香居士）

芳山懷古 二首

來拜行宮櫻已殘。[illegible]臣只有[illegible]闌干。一從零落當龍袖。[illegible]使下[illegible]花[illegible]。[illegible]火千年[illegible]。[illegible]三代[illegible]。[illegible]傳心事[illegible]付[illegible]裏。

はうざんくわいこ　[illegible]んかんたるあり。ひとたびれいらくりようしうをうるほしてより。つひに名花をしてほうらんを迎へしむ。こうくわ千年でんかくをあまし。[illegible]うん三代いくわんをとどむ。なんてう限り無ししやうしんの事。ていけんにふよしてどんりよく寒し。

[illegible]當[illegible]國[illegible]、[illegible]山[illegible]、[illegible]面[illegible]

[illegible]同心可慨。床頭拔劍事堪嗟。髮梳如意寺前柳。涙滴延元陵下花。定後老僧留我語。松風吹月上袈裟。

當年のきうけつはぼんわらの家。らいきよの山雲するくわをまもる。ひめんしをこくして心がいすべく。しやうとう劍をあんじて事さするにたへたり。髮はくしけづるによいじぜんの柳。涙はおつえんげんりようかの花。でいごの老僧我をとどめて語る。松風月を吹いてけさに上ると。

高島九峯詩

日韓新協約成、賦呈伊藤大使

大觀亭上望天衢。四顧峯巒接遠蕪。看取東方新雨露。雞林草木亦來蘇。

につかんしんけふやく成り。ふして伊藤大使に呈す　たいくわんていじやうてんくを望めば。四このほうらんゑんぶに接す。かんしゆす東方のしんうろ。けいりんの草木また蘇りそす。

十月廿六日。電音報春畝公薨于哈[illegible]。賦九絕以哭之二首

慘澹雲容天亦悲。九重震悼降哀詞。梁摧柱折狂飈裏。不死英魂護帝基。

十月廿六日。でんいん春畝公のハルピンにこうずるを報ず。九絕をふして以て之をこくす　さんたんたるうんよう天また悲しみ。九重しんたうあいしをくだす。はりくだけ柱折るきやうへうのうち。不死のえいこんていきをまもる。

胸[illegible]育[illegible]林[illegible]裏。[illegible]依然鬱[illegible]南山[illegible]、[illegible]長[illegible]公。

けいりんをくいくしてせいちうにそひ。おんゐならびあまねくしてしようせいたかし。依然らつうつたり南山のすゐ。さつきうたる[illegible]風[illegible]公をおもふ

畫燭芳尊清夜分。捲簾高閣倚微醺。興來落墨霜縑上。文采風流亦絕群。

ぐわしよくはうそん清夜わかたる。れんをまいて高閣びくんによる。きよう來つてすみをさうけんのうへに落せば。ぶんさい風流またぜつぐん。

送山縣大將奉使赴露國

烏山殘雪暮雲多。[illegible]戰當年血作河。聞道那翁狼狽地。征車直入莫斯科。

山[illegible]ざんの[illegible]多く[illegible]なをうらばいの地。[illegible]

京都

酒醒危樓月未昇。鴨[illegible]一抹夜煙凝。沙流閃閃欄干外。半落春星半落燈。

京都　酒さめてきろう月いまだのぼらず。[illegible]一[illegible]夜[illegible]ばなかば春星を[illegible]なかばともしびをおとす

游[illegible]絕句

峽裏奇觀[illegible]久聞。[illegible]紀[illegible]特超群。始知萬[illegible]煙雲色。結作[illegible]一篇[illegible]文。

いうけふぜつく　けふりのきくわん我れ久しく聞く。[illegible]紀事とくにてうぐん。始めて知るばんがく煙雲のいろ。結んで一篇さうまうの文をなすを。

鹿兒島

百二[illegible]。[illegible]門[illegible]。當年悲[illegible]

[illegible]一曲中。

鬼界島　百二とじやうほうする空しく。ぎよとう影はみだる海門のかぜ。當年ひきうりんりの氣。とどめ一ぴは一曲のうちに在り。

結城蓄堂詩

赤壁

烏鵲南飛昔戰場。何人釃レ酒憶二周郎一。功名不レ若文章力。風月江山無盡藏。

うじやく南に飛ぶせんぢやう。何人か酒をしたみてしうらうを憶ふ。功名はしかず文章の力に。風月からざんむじんざう。

烏江廟

美人英傑共千秋。芳草離離滿二古邱一。父老於レ今傷二往事一。烏江廟下水東流。

美人えいけつ共に千秋。芳草りりとしてこきうに滿つ。父老いまに於てわうじをいたみ。うかうべうかみづ東にながる。

芳山懷古二首

江山半壁屬旌旄。運去中興奈二帝謨一。腸斷南朝歌一闋。至レ今人唱白頭烏。

江山はんぺきほうきはこ。運は去つてちうこうていぼをいかにせん。はらわたはたつ南朝の歌一けつ。今に至りて人はとなふ白頭のう。

皇陵劍氣北衝レ天。殉國忠臣志永傳。血痕化作二櫻花色一。猶護二南朝一六百年。

くわうりようのけんききた天をつく。じゆんこくの忠臣志ながく傳はる、けつこん化してあうくわの色となり、[illegible]



(東陵畫像)

哭二吉海闇島先生一

儒林舊風質。合輔棟梁材。思人二風雲一壯。氣衝二河漢一來。青天霏二曉雪一。大地隱二春雷一。名在二麒麟閣一。英魂不レ可レ回。

吉海闇島先生をこくす　じゆりんらんほうのしつ。たいほとうりやうの材。思人は風雲に入つてさう。氣はかんかをついて來る。青天はうせつひたり。大地しゆんらいいんたり。名はりんきかくに在り。えいこんかへす可からず

金陵懷古二首

龍盤虎踞帝王州。六代興亡何處求。征虜亭荒餘二舊蹟一。後庭花唱起二新愁一。殘陽疎雨南朝寺。老樹屯雲北極樓。兒弔臨レ風多二涕淚一。不レ堪江上一回レ頭。

きんりようくわいこ　りようばんこきよ帝王州。六代のこうばう何れのところにか求めん。せいりよていは荒れてきうせきを餘し。こうていくわはしんしうを起す。ざんやうそう雨南朝の寺。老樹そううん北極のろう。ひようてう風にのぞんでているゐ多く。たへず江上ひとたびかうべをめぐらすに。

[illegible]

くただからうれひにくわんす、[illegible]はいるゐのとうら石頭をめぐる。せん[illegible]ゆるいたみ。しよりようの區出しようしう暗し

石田東陵詩

[illegible]

漸向二吾心一逢二晴晴一。欣然何日下[illegible]行。[illegible]啼鳥莫レ猜レ我。[illegible]

[illegible]

嘉木

嘉木拔從二數林裡一。移栽二院庭一則二要業一。圃以二微功一助二化工一。小園所レ悦無二私理一。

かぼく　かぼくは拔いてすうりんのうちよりす。移してけいていにうゑ[illegible]。圃はいささかびこうを以てくわこうを助け。小園よろこぶ所しは無きか。

梅花三首

天下偉觀何在哉。花中丈夫唯有レ君。倫當二氷雪一無二難色一。敢立二風前一笑口開。

嵩花三百　天下の[illegible]あるかな　くわちらの丈夫はただ君あり。あくまで氷雪に當つてなんしよく[illegible]に立ちて[illegible]く

儘守其歲暮。昔人詩師只心則。甘髮凄

飯飲寒水。欲賦梅花一樣楚辭。

[illegible]のむ。梅花をふしてそじにつがんと欲す。

欲寫風神言不給。幾回搔首花前立。頼

當憐我梅閒慳　今被梅花笑吟澁

ふうじんをうつさんと欲して言たらず。いくたびか首をかいて花前に立つ。はしやられんさいす梅のかいけん。いま梅花にぎんしふを笑はる。

淵源

淵源無所養、淵堺稍與閉、何必際道路、然後曰窮民。

えんげん　えんげん養ふところ無ければ。こけつす精[illegible]みんといはん。



（石田東陵）

貧苦

貧不厭其苦、貧不可其苦、其[illegible]不[illegible]其[illegible]其

蘇一士莫厭其貧。

ばくく　ばくは其のにがきをいとはず。れらは其のからき[illegible]いとはず[illegible]士は其の貧たいとふなかれ。

白蟻

白蟻蝕梁柱。外見不可知。堂堂六尺士。腹中已爛糜。

はくぎ　はくぎ[illegible]むしばむ。外見知るべからず。だうだうたる六尺の士。[illegible]すでにらんびす

反柴芝歌

莫莫高山。深谷逶迤。曄曄紫芝。可以療饑。我皇在上。萬世保釐。穆穆明德。民知所歸。嵩南漫谷。要在其衰。富貴而放心。不若貧賤而偷志。

はんししか　ばくばくたる高山。深谷ゐい。えふえふたるしし。以てきを療すべし。我が皇かみに在りて。萬世ほりす。ぼくぼくたるめいとく。民きする所を知らう。べうがんこく。要はへいぎにあり。ふうきにして心を放つは。ひんせんにして志をたふとぶにしかず。

仙臺

仙臺開甲少年日。好入西山一勝逑。太白絕頂臨萬巖。幽山古寺慳尋慧。陽東京華幾星霜。生長兒女戲春夢。蠻然眠食忘爲客。入夢青山猶故鄕。

仙臺[illegible]つりつたのぼる。たいはくのぜつてんまうさうに臨み。ばんざんの古寺せうしつをようこぶ。けつらいけいくわいくせいさう。生長の兒女吾がかたはらにたはむる。然りと雖もみんしよく客となるを忘れ。夢に入るの青山なほ故鄕のごとし。

田邊碧堂詩

奈良

芳草萋萋輦路空。朱衣何處跨青驄。南都自是春愁境。花落宮鶯塔雨中。

奈良　芳草せいせいとしてれんろ空し。しゆい何れの[illegible]

登牧放浪之南京

婷南江南第幾州。六朝山色夕陽愁。故人三月懸帆去。春浪桃花日本舟。

まき[illegible]えん[illegible]

池亭觀雨

西天銀竹亂漾積。清涼忽自池中生。上珠小珠飛不止。荷葉荷花一齊鳴。

ちてい雨をみる　西天の銀竹とんでじうわう。しんりやうたちまち池中より生ず。たいしゆせうしゆとんでやまず。かえふかくわ一せいに鳴る。

萬里長城二首

萬關北鎖古幽州。清高風沙萬里秋。不上長城一看落日。誰知天地有神州。

ばんりちやうじやう　ゆうくわん北にくわくすこいうしう。かうかうたるふうしやさくさつよし。長城に上つて落日をみず。誰れか知らん天地にひしうあるを。

西[illegible]

雄始皇帝。長城徒自限二中州一。

[illegible]自ら中州をかぎる。

赴二臺灣一舟中[illegible]

南天[illegible]一舸如
行[illegible]上。夜潮打[illegible]星鋩。

臺灣におもむく舟中　南天よもにはれてえんぴたたつ。ばいけつ光はのぼるかいかくの衣。一か行くが如しぎんかんの上。[illegible]

秦人採レ藥入二東海一。余亦懸レ帆興不レ孤。天上月明天下水。蒼茫何處是方壺。

しんじん藥をとりて東海に入り。余も亦帆をかけてきよう孤ならず。天上はげつめい天下は水。さうばう何れの處かこれはうこ。

從二大倉鶴彥男之二南洋一二首

赤道南南更南。乘レ風萬里欲二[illegible]帆一。君行二炎海一邀二明月一。月色如レ[illegible]上二白衫一。

大倉鶴彥男の南洋にゆくに從ふ　赤道[illegible]南更らに南。風にじようじて萬里ひはんせんと欲す。君はえんかいに行きて明月をむかへ月色[illegible]の如くはくさんにとる。

觀測寰球緯與レ經。按レ職海客度二滄溟一。天南雲盡波濤大。拂落檣頭十字星。

くわんそくすくわんきうゐとけいと。てつをあんじてかいようさうめいをわたる。天南雲盡きてひたうは大に。拂ひ落すしやうとう十字の星。

月夜踰二箱根一

風露摯レ秋湖水寒。芙蓉倒レ影蘸二雲鬟一。青天王女擎二明月一[illegible]

げつやはこねをこゆ　ふうろ秋をいましめて湖水さむし。ふよう影をさかしまにしてうんくわんをひたす。青天の王女めいげつをさゝげ。我が高歌を照して夜くわんをわたらしむ。



（田邊碧堂）

吉野懷古三首

南朝天子中興非。晏二駕春山一竟不レ歸。後六百年臣甫拜。御陵月黑有二鵑飛一。

吉野くわいこ　南朝の天子ちうこうけず。春山にあんがしてつひに歸らず。のち六百年臣はじめて拜す。ごりよう月黑くしてけんの飛ぶあり。

鐵馬蕭條玉帳空。捷書不レ復到二行宮一。白雲曾此閉二神器一。一角南山殘照中。

鐵馬せうでうとしてぎよくちやう空し。せふしよまたあんぐうに到らず。白雲かつてこゝに神器をひつす。一角の南山ざんせうの中。

白雲冷鎖古行宮。陵樹蕭蕭日暮風。自レ絕二南朝一經略跡。春山只在二落花中一。

白雲ひやゝかにとざすこあんぐう。りようじゆせうせうとして日暮の風。南朝らんろのあとを絕ちてより。春山ただ落花の中にあり。

[illegible]

然有二此作一

聞[illegible]

[illegible]

[illegible]たひろがへすを。ぎよくふきんわん人聲に到る。[illegible]ようきうゐんにかはつて泣くに似たり。あいだく秋臣五十げん。

丁卯十一月到二北京一口占

中原秋盡未レ收レ兵。[illegible]萬馬行。[illegible]太平關氣象。長[illegible]入二燕京一。

ちうげん秋つきて未だ兵をおさめず。せいはい雲に迷つて萬馬ゆく。[illegible]り我れたいへいかんきしやう。ちやうさんくわんたいえんけいに入る。

青山春望

遲日東風御柳斜。青青千樓欲レ藏レ鴉。行人晚傍二宮墻一望。諸路無レ塵只落花。

ちじつ東風ぎよりうなゝめ。せいせいせんるあたざうせんと欲す。行人晩にきうしやうにそうて望めば。れんろちり無く只らくくわ。

上夢香詩

後樂園謁二東齊廟一

名園控二北灤一。平林帶二陽坡一。上有二東齊廟一。喬木蒙二烟蘿一。虞夏重二禪讓一。周武漫干戈。叩

レ馬諫ニ無道一。采レ薇養ニ詩歌一。其人雖ニ餓死一。風節永不レ磨。首陽昔作レ記。關西義氣多。千秋有ニ靈泉一。清且湛ニ層阿一。

こうら、えんいせいのへうにさつす　名湯ほくれきに[illegible]らぶみだりにかんくわ。馬をたゝいて無道をいさめ。びをとつてからかた發す。その人がしすといへども。風節[illegible]千秋よぼあり。清風がんあにそゝぐ。

拜ニ明治神宮一

白木廟宮淨。神靈安照臨。乾坤皇業大。雨露聖慈深。南面安ニ東海一。蒼生一赤心。予來階下跪。感謝涙霑襟。

[illegible]にせうりんす。けんこんくわうげふ大に。うろせいじ深し。南面東海にやすんじ。さうせい一赤心。しらい階下にひざまづき。かんげき涙えりをうるほす。



（雷　[illegible]　[illegible]）

川中島

落日川中島。昔花戰古情。採見同レ世間。總制江守。殘月雨刀猷。[illegible]林[illegible]馬等。琴右黄槐將。街レ霧斫ニ牙營一。

川中島　らくじつ川中島　さらばうらんこの情、そんこ[illegible]きげつ[illegible]くわうの[illegible]はうとしてみる[illegible]

富嶽

雲霞天造峰。日月自然燈。湯飲金銀水。飢噉玲瓏氷。

ふがく　うんか[illegible]のみね。じつげつ自然の燈。かつしては飲む金銀の水。うゑてはかむれいろうの氷。

聞レ鵑

一鳴山雲裂。再鳴山月沈。山人久離レ國。涙啼不レ如レ歸

けんを聞く　一なけば山雲さけ、ふたゝび鳴けば山月しづむ。山人久しく國をはなれ。涙はなく歸るにしかず。

岡崎春石詩

送ニ人歸一レ山

君本塵外客。高志誰能如。一朝拂レ衣去。浩然歸ニ舊廬一。千秋名山裏。可ニ以藏ニ著書一。

人の山に歸るを送る　君はもとぢんぐわいの客　高志誰れかよくしかん。一てう衣をはらつて去る。かうぜんとしてきうろに歸る。せんしう名山のうち。以てちよしよを藏すべし。

[illegible]採薇圖

周王一旦戰ニ干戈一。澤及ニ蒼生一雨露多。猶有ニ人間有ニ義士一。首山共唱採薇歌。

いせいさいびの圖　しうわう一旦かんくわをたたかひ。たくはさうせいに及んでうろ多し。なほ人間の義士を存するあり。首山に共に[illegible]のうた

桃源圖

數家雞犬避レ秦時。洞口春風白日遲。萬樹桃花紅レ似レ火。咸陽焦土不ニ曾知一。

たうげんの圖　數家のけいけんしんをさくるの時。どうこうの春風白日おそし。萬樹たうくわ火よりもくれなゐ。かんやうのせうどかつて知らず。



（岡　崎　春　石）

詠レ石

石丈如ニ人衣冠帶一。奇形怪狀[illegible]。千秋[illegible]得眞堅德。曾歷ニ南宮趙拜來一。

石をえいず　[illegible]

贈[illegible]一首

[illegible]ニ雨[illegible]。[illegible]胸中[illegible]日月。筆底快ニ風濤一。漁[illegible]名久。所南持[illegible]。心取[illegible]一夕[illegible]

こいそかんにおくろ　さうさうの鬓をけみすと雖も。なほ意氣のおちなるをあます。きようちう日月をかけ。筆底ふうたうたさしはさむ。ぎようちう名をあらはす久しく[illegible]を得るを。一夕じゆんらうにゑふ。

東游何限意。萬里再乘レ槎。老境文章貴。危時出處全。乾坤空俯仰。風月且留連。誰最能容レ我。從レ今爲レ執レ鞭。

とういう何かぎるの意。萬里ふたゝび槎にじようす。らうきやう文章たふとく。きじしゆつしよ全し。けんこん空しくふぎやうし。風月且つりうれんす。たれかよく我れをいれ、今より[illegible]

醉臥二松下一

長松百尺凌二蒼穹一。龍影夭矯明月中。醉倚二白石一解レ衣臥。夜半颯颯生二清風一。屑若滿レ地不レ知レ暑。冷露如レ珠滴二絺綌一。鈞天廣樂夢中聞。恍惚身游帝之所。

醉うて松下にぐわす　ちやうしよう百尺さうきうをしのぎ。りようえいえうけう明月のうち。ゑうて白石によつてをときてぐわす　夜半[illegible]として清風を生ず。そうたい地にみちてしよを知らず。れいろたまの如くちちよにしたゝる。[illegible]のくわうがくむちうに聞き。くわうこつ身は[illegible]帝の所

阪本蘋園詩

燕京

鴻寶長存祕府名。乾隆御筆最鮮明。古香滿レ殿掃難レ盡。觀止二文華一至二武英一。

えんけい　こうはう長く存すひふの名。けんりうのぎよひつ最もせんめい。こかう殿にみちてとるもつきがたく。みてぶんくわとりぶえいに至る。



(阪本蘋園)

濟南

大明湖上返舟遲。澤國風煙多レ所レ思。隻手久持清社稷。綠蒲青柳李公祠。

さいなん　大明湖上へんしうおそく。たくこくのふうえん思ふところ多し。せきしゆ久しくぢすせいのしやしよく。りよくほせいりうりこうのし

奉天

北來天子震二遐威一。末運何知歎二式微一。白馬空留二承レ寵夢一。寢宮金碧帶二殘暉一。

奉天　北米の天子えいゐをふるふ。まつうん何ぞ知らんしきびを歎ぜん。白馬むなしくとゞむちようをうくるの夢。しんきうのきんぺきざんきを帶ぶ

旅順

黃金白玉兩嶙峋。山色曾經レ隨二戰塵一。一擧壯哉沈レ艇計。七生詩句有二軍神一。

旅順　わうごん白玉ふたつながらりんじゆん。山色かつてせんぢんにおつるをへたり。一きよ壯なるかなていを沈むるの計。七生のしく軍神あり

京城

南山松樹[illegible]。[illegible]。只恨[illegible]。夕陽人[illegible]。

けいじやう　南山のしようじゆ[illegible]。[illegible]ことり萬世にたる。只うらむだんきしやうくるなく。せきやう人を呼ぶこからい。

平壤

一帶長江是大同。波撑百尺[illegible]。[illegible]。玄武門頭旭日紅。

へいじやう　一たいの長江はこれ大[illegible]んぶもんとうきよくじつくれなゐ。

臺北

祠樹蒼蒼[illegible]。[illegible]何[illegible]。大威一震妖氛散。星斗光寒古劍潭。

たいほく　しじゆうそうとしてすゐらんをこめ。[illegible]。せいと光りは寒しこけんたん

新高山

山口新高二帝所一在。[illegible]萬古[illegible]。[illegible]環レ攏如二臣隸一。只許獄蓮呼二弟兄一

[illegible]ころ。れいゐ萬古さうえいをちんす。ぐんぽうふもとをめぐつてしんれいの如く。たゞ許すがくれんの弟兄と呼ぶことを

臺南

一片丹心寄二劍鋩一。手扶二社稷一起二南疆一。風雲

意氣今猶憶。三百年前古部王。

たいなん　一片の丹心けんばうに寄す。手にしやしよくをたすけてなんきやうた起す。[illegible]いき今なほ憶ふ。三百年前のこぐんわう。

高雄

[illegible]撼上[illegible]。[illegible]入手中[illegible]。[illegible]今日無二滄[illegible]。旗鼓二山相對開。

高雄　りやうらい吹きうごかすろうじやうのしよく。ばんか流れて入る手中のはい。しよう[illegible]んけい無く。きこの二山あひ對して開く。

久保天隨詩

積芳山懷古四首

如意輪堂白[illegible]間。[illegible]山花[illegible]年陰生。[illegible]條異代[illegible]王[illegible]。[illegible]向[illegible]下行。

ざくはうざんくわいこ　によいりんだうはくあ[illegible]らかな[illegible]。[illegible]だいじやうわうのがい。みたびえんげんりようかに向つて行く。



久保天隨

六[illegible]。[illegible]西鳥東魚[illegible]一[illegible]。[illegible]。

いくわんせうじ幾年かとゞまる。たいきふしんてい一様のうれひ。西鳥東魚みなしんに應す。君王なにごとかびこらたちようす。

[illegible]清。[illegible]月遂。石角[illegible]不皆花向。[illegible]水可[illegible]。

えんぜんまん[illegible]たらわむ[illegible]はるかな[illegible]石角[illegible]の如くみな花に向ひ[illegible]きなノこうに[illegible]。

御牀按レ劍死猶[illegible]。黑夜空山會[illegible]神。萬古[illegible]壇[illegible]想像[illegible]當初[illegible]不[illegible]。

ぎよしやう[illegible]あんして死なほいかる　こくや空山きしんを會す。萬[illegible]のゐれいさうざうするにたへたり。當初[illegible]。

耶馬溪二首

松風[illegible]水[illegible]。[illegible]色[illegible]照[illegible]高下[illegible]有[illegible]。

[illegible]うらんざん高下の路。一けんの[illegible]きせう有り。

[illegible]千峰。雲木[illegible]。[illegible]峯二天半一。斷猿聲在二倒生松一。

からていさくしゆつす幾千峰。雲木さうさうとしてばんあいこまやかなり。仰ぎ見るきぶん天半にそびゆるを。だんゑんの聲たうせいの松にあり。

川瀬十律[illegible]

[illegible]花[illegible]。[illegible]。

[illegible]身[illegible]。[illegible]山前[illegible]。好風吹過有二餘薰一。

つきがせ十りつ　はんくわ[illegible]ノはくいんらん。ゑんこんたるくわうり竹をへだて聞く。何の影かめいり[illegible]。

一片[illegible]不[illegible]成。[illegible]横。[illegible]二[illegible]。[illegible]流水[illegible]晴香[illegible]。[illegible]浮[illegible]高下[illegible]花自在行。

一片のえんこんゑがけども成らず。はなはだ[illegible]れむそし[illegible]かつてひようさうにたへてせいじやうを全くす。流水のけいけう暗香わたり。だんしようれいじはくゐん生ず。くわうぜん身は化すらふの蝶。かうか花たうがつて自在に行く。

[illegible]角[illegible]。[illegible]月[illegible]。[illegible]花香[illegible]作[illegible]。[illegible]骨相。三更添得[illegible]精神[illegible]如レ水消盡。

[illegible]。

えんかくのしやしはなはだ人に可なり。まさにいうしよ[illegible]當るを。たゞいふ花香うごいて春をなす。[illegible]立あましみる仙のこつさう。三からそへえたり月の精神。せうかん水の如く消きえつくし。ばくち詩情いさゝか一新。

遍レ地横斜花影重。靜看明月上二前峰一。作二將[illegible]。[illegible]。

レ羅レ笛、忽聞[illegible]變[illegible]久[illegible]鐘。歸來一[illegible]醉初醒。夢與二瑤臺仙子一逢。

ゆめにあをねきわらしや花影かさなる。静かにみる明月のぜんぼうに上るを。はちはくけいざんの氣をあはせもつて。ゑがき出すれいろう氷雪のかたち。かくのごときの夜[illegible]すべからく[illegible]をみむ、[illegible]たるによつて又かねを聞く。かへり來つて一すゐねむり初めておだやか。夢にえうだいせんしと逢ふ。

服部擔風詩

野間懷古

海門終古怒濤聲。嗚咽[illegible]恨未レ平。墳上木刀苔若レ鋪。松陰魂魄螢留レ名。恩讐已誤君臣分。骨肉總爲二兄弟爭一。碧血池邊行客涙。飛花滿地又傷レ情。

野間くわいこ　海門しうこどたうの聲　をえつひせうしやうにしてうらみいまだ平らかならず。ふんじやうの木刀こけをしくがごとく、しようゐんのこんぱくほたるに名を留む。おんしう已にあやまる君臣の分　骨肉すべて兄弟のあらそひをなす。へきけつちへん行客のなみだ。飛花まんち又情をいたむ

酒旗　錄一

向レ人似レ勸レ換二金貂一。平遠江山幾處飄。隊二去花梢一非二犢鼻一。襯二將草色一合二裙腰一。隔レ村定有二牧童指一。描レ黛可レ無二壚女邀一。更記樊川詩句好。樓臺煙雨古南朝。

しゆき　人に向つてすゝむるに似たりきんてうにかふるを。平遠の江山いくしよかひるがへる。花梢をばくしよるとくびにあらず。草色をしんしめつてくんえうに合す。村をへだてて定めてぼくどうの指す有らん。たいを[illegible]更に記すはんせん詩句の好きを。ろうだい煙雨こなんてう。



（服部擔風）

書事　錄一

文苑風雲[illegible]未レ閑。後庭玉樹唱歌哀。議臣自破黃粱夢。同[illegible]甘露災。俳[illegible]刑徒作レ傳。始知牛李總非レ才。但[illegible]遊樂。尚有二意[illegible]斗魁一

[illegible]しみ。なほざんさうのとくわいを射るあり。

歳暮詠懷　錄一

男兒隨レ地隱二蒿萊一。暮景飛騰雨雪催。世局眞同騎レ虎勢。廟廊誰是問レ牛才。讀書萬卷眼猶肉。刻楮三年心未レ灰。廣廈杜陵何限感。天寒雁語有二餘哀一。

さいぼえいくわい　男兒地におちてからいにかくる。暮景ひとう雨雪もよほし。世局しんにおなじ虎にのるの勢ひ。[illegible]牛を問ふのさい。[illegible]肉。こくちよ三年心いまだ灰ならず。くわうかとりよう何かぎるの感。天寒うしてがんごよあい有り。

田邊松坡詩

恭賦大典禮紀盛事十二章

春殿奉二神器一。紫宸修二典儀一。[illegible]日月瑞雲旗。[illegible]南榮上二壽[illegible]一。[illegible]階下趨。億兆賞二大典一。

とうきよくたいてん[illegible]十二章　しゆんでん神器を奉じ。ししんてんぎを修む。ひきらうきうのぢやう。日月ずゐうんの旗。ほざめいせうたせんす。南榮じゆしをたてまつる。すうこ階下に迎り。よきやうてんがいにふるふ。

作歌雅正氣。臨御大嘗宮。[illegible]道中二人寺一。[illegible]新勞二平射一[illegible]高神所レ格。[illegible]界有何豐。仍有レ煇二庭燎一。殘更曉色通。

しようか雅まさにをさまり。りんぎよすたいじやうきう。[illegible]たかなる。なほていれうを照らすれうあり。ざんかうげうしよく通ず。

楓菊夜光麗。山川瑞氣清。舞姫飄二采袖一。[illegible]老醉二朱[illegible]一。詩宜レ吐二雅正一。心但學二葵傾一。寒儒荷二恩賚一。笑[illegible]賜二酬榮一。

ふうきくかくわうらうゝかに。山川すゐき清し。ぶきは さいしふをひるがへし　はんらうはしゆくわらにゑふ。詩よろしくはせいをはくべし。心たゞきけいをまなぶ。かんじゆおんらいをになふ　なんぞたゞしほり[illegible]みなからんや。

華山樺山大將輓詩

際會風雲早著ㇾ果、雲動高閣畫[illegible]、孤城

扼得紫溟賊、一戰收來黃海權。英蕃忠赤心向

ㇾ日。[illegible]神機略膽同ㇾ天。將軍老去仍憂ㇾ國、

遺恨沈痾竟不ㇾ痊。

くわざん樺山大將ばんし　風雲にさいくわいし早くべんたつけ。ほうくんからかくりようえんにゑがく。孤城やくし得たりしめいの賊。一戰をさめかる黃海のけん。[illegible]同じ。將軍老い去りてなほ國を憂ふ。ゐこんちんあつひにいえず。

業[illegible]湘南[illegible]荷[illegible]寵榮[illegible]。[illegible]荷幾度任二相業[illegible]、邊荒

施政長垂ㇾ績。[illegible]披瀝[illegible]表[illegible]經[illegible]。[illegible]清風

邀ㇾ客[illegible]。青山白[illegible]藁[illegible]忽[illegible]計[illegible]疑

[illegible]。[illegible]

病をしやらなんに養うてちようえいをになひ。あんばい[illegible]れ。すうえきれんばん來だえいをとかす。らうけつ清風[illegible]まちひふを僻へてなほ夢かとうたがひ。きつたんもにはしりてはくしばしば驚く。



（樺山大將）

磯野秋渚詩

蘭亭會[illegible]五首

[illegible]脩竹對二群賢一、把ㇾ酒猶思舊永和。癸丑春

風周廿六、年[illegible]大[illegible]執尤多。

らんていくわいざつせい　せいたんしらちくぐんがに對す。酒をとつてなほ思ふきらえいわ。きちらの春風しう廿六、[illegible]

風流丈[illegible]珠[illegible]。[illegible]意[illegible]求[illegible]紙一時。贏得老

[illegible]好、英雄此段太情癡。

風流おやら[illegible]ことに奇なり。こくいひとへにけんしたもとむるの[illegible]のなんはなは[illegible]

[illegible]何[illegible]廿八行、當[illegible]重[illegible]文皇一。可憐一

片[illegible]光、

[illegible]らん廿八行。せんわの[illegible]かれん一片ちらざんの石[illegible]

[illegible]心[illegible]圓[illegible]

[illegible]寶[illegible]



（磯野秋渚）

ぼくくわうはどくこの[illegible]よりえ。ばつび十三しんけい[illegible]す。しこのげうしやらただしやらかん。でんとう直ちに[illegible]

[illegible]餘[illegible]古[illegible]河南[illegible]、[illegible]底[illegible]

亭何所ㇾ見、一生低首只開[illegible]。

さうゆのちようくがうばうをかうす。ぼつかい河南おのおのばうをかゞやかす。あやしむくわてい何の見るところぞ。一生低首するは只かいわう。

秋荷

憶曾[illegible]客[illegible]十里[illegible]赤黄、[illegible]女舟

歸波汎汎。[illegible]王宮[illegible]月蒼蒼。[illegible]才聽

ㇾ雨。粉[illegible]銀[illegible]不ㇾ貯ㇾ香。湖水湖雲渺然闊、

那邊秋夢[illegible]

しらか　憶ふむかしさらかく集りてしやらと爲す。十[illegible]香を貯へず。湖水湖雲べうぜんとしてひろし。いづれの邊にか秋夢ゑんあうをおほふ。

井土靈山詩

[illegible]

孔子終不ㇾ知二石鼓一。韓[illegible]猶乳。[illegible]

[illegible]光陸離。[illegible]何足ㇾ數。

[illegible]り。しんてんかんれい何ぞ數ふるに足らん

自我作[illegible]八[illegible]

一[illegible]吾[illegible]詩　[illegible]

我れ[illegible]

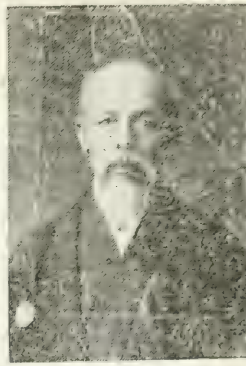
[illegible]

井家妙[illegible]見二千古一　[illegible]　[illegible]

[illegible]

君が家のめうほくは千古にたる　[illegible]

[illegible]



（井上靈山）

都下諸名流返飲於松世高君於精養軒。

予亦列席上賦呈

前賢墨寶天下奇。珍襲不レ許二人私。石渠寶笈今安在。帝王祕玩彼一時。顔君[illegible]崎歴落士。排レ席[illegible]中[illegible]積水一。招レ客披レ發公[illegible]中。[illegible]觀者皆[illegible]觀止矣。鐵網珊瑚相鉤連。一括今古二千年。遺[illegible]晉公[illegible]。龍跳虎臥[illegible]眼前。就中道場[illegible]出[illegible]。[illegible]逸品[illegible]絕代。君不レ見曹衣出レ水吳帶當レ風。對レ此只恨視難レ再。此夕把レ酒勞二遠來一。人生爲レ歡能幾回。

[illegible]

[illegible]の[illegible]君を[illegible]に[illegible]。前賢のぼくはうは天下の寄。ちん[illegible]さず一人のわたくしする[illegible]

[illegible]きらくの[illegible]らくこうしよの中[illegible]

[illegible]こーまうさんご[illegible]ようてうこく

[illegible]ちやうしゆつさい

[illegible]せらる　君見ずやそ

[illegible]に對しただうらむ

[illegible]の夕酒をとつて遠來をねぎ

[illegible]能く幾回ぞ。はう、わいめいし

[illegible]ゆをけん[illegible]のはい。

上村賣劍詩

戊辰歲晚偶[illegible]十二首[illegible]

紛爭[illegible]恐[illegible]　[illegible]襟　[illegible]何人用二[illegible]。[illegible]翻[illegible]不レ定　英雄兒女[illegible]

[illegible]ふんさう[illegible]

[illegible]

[illegible]

開道江湖[illegible]盜賊　歲[illegible]我心[illegible]。安得排レ雲招二月來一。梅花無レ影夜如レ墨。

いふならく江湖たうぞく[illegible]歲[illegible]心いたむ　いづくんぞ[illegible]はいし月を招き來らむ　梅花かげ無くして[illegible]すみの如し

湖海無二人倒一[illegible]迎一　行雲流水託二餘生一　燈前獨夜覆レ棋笑。低手[illegible]强項名、

こかい人のげきをたふして迎ふ[illegible]く。かううん流水よせいをたくす。とうぜんどくやきをおほらて笑ふ。てい

[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]



（上村賣劍）

公修門還任[illegible]　[illegible]門[illegible]節高、奈法[illegible]悲人思[illegible]　[illegible]生死安二天命一　老以二功名一付二[illegible]　[illegible]中流[illegible]不レ見二[illegible]門松柏[illegible]風霜一。

公よあんけいはうから[illegible]せいめい[illegible]としして[illegible]たかし[illegible]しん思[illegible]にたくす[illegible]生死[illegible]老いて功名を以てじさうにふす。しちう中[illegible]菜[illegible]のしようはくふうたうさつたり。

現代日本漢詩家小傳

副島蒼海　名は種臣、蒼海と號す。肥前佐賀の人。『蒼海遺稿』『蒼海全集』の著あり。年五十にして漸く詩を賦するに至りしと雖も我詩壇に於ける獨特の一體たり。『答黃翔甫』の古詩中に「五十武吟魂」の句あり、以て之を證するに足る。

伊藤春畝　名は博文、春畝は號なり。長州の人。詩集に『藤公詩存』あり。

小野湖山　名は長愿、字は侗翁、湖山と號す。近江彦根の人、文化十一年生る。『湖山樓百律』『湖山近稿』『湖山近稿續集』等の著あり。

大沼枕山　名は厚、字は子壽、枕山、又默々堂と號す。東京の人、文政元年生る。『枕山詩鈔』三卷、『枕山詩鈔續集』三卷、『歷代詠史百律』の著あり。

森春濤　名は魯直、字は希黄、春濤と號す。尾張の人。著に『春濤集』『清三家絕句』等あり。

岡本黃石　名は迪、字は吉甫、黃石と號す。近江の人。『黃石齋集』あり。

向山黃村　名は榮、字は欣夫、黃村と號す。東京の人。詩集あり。

長三洲　名は炗、字は世章、三洲と號す。豐後の人。著に『三洲居士集』あり。

矢土錦山　名は勝之、字は實夫、錦山と號す。伊勢松坂の人。『錦山遺稿』の著あり。

末松青萍　名は謙澄、字は受卿、青萍と號す。豐後の人。安政二年を以て生る。著に『青萍集』あり。

巖谷一六　名は修、字は誠卿、一六又は古梅と號せり。近江水口の人。『一六遺稿』の著あり。

森槐南　名は大來、字は公泰、槐南は其號、通稱泰二郎。尾張名古屋の人。其著に『槐南集』『玉溪生詩講義』『杜詩講義』『李詩講義』『韓詩講義』等あり。

本田種竹　名は秀、字は實卿、種竹と號す。通稱幸之助。阿波德島の人。『田舍懷古詩』の著あり。

野口寧齋　名は式、字は貫卿、寧齋と號す。肥前の人。「百花欄」を刊行し、『大纛餘光』その他詩に關する數種の著あり。

秋月天放　名は新、字は大思、天放と號す。豐前の人。『知雨樓詩存』の著あり。

橋本蓉塘　名は寧、字は靜甫、蓉塘と號す。京都の人。『蓉塘詩鈔』の著あり。

大久保湘南　名は達、字は雋吉、湘南と號す。佐渡相川の人。明治三十七年隨鷗吟社を創立し、『隨鷗集』を刊行したり。

永坂石埭　名は周、字は希莊、通稱周二、石埭と號す。尾張名古屋の人。詩集は之を印行せず。松島、松江、岡山等に詩碑を建つ。

北條鷗所　名は直、字は方大、鷗所と號す。東京の人。

木蘇岐山　名は牧、岐山と號す。富山の人。

森川竹磎　名は鍵、字は雲卿、竹磎と號す。通稱鍵藏。東京の人。著に『夢餘稿』あり。

小室屈山　名は重弘、字は毅卿。下野宇都宮の人。

國分青厓　名は高胤、字は子美、青厓と號し、又別に太白山人と號す。仙臺の人。安政四年を以て生る。詩篇の多き古今の第一人なれども、肯て詩集を刊行せず。

岩溪裳川　名は晉、字は士讓、裳川と號す。丹波福知山儒臣の裔にして、安政二年江戸に生る。

高野竹隠 名は[illegible]雄、竹隠はその號、尾張名古屋の人。

落合東郭 名は為誠、字は士[illegible]、東郭と號す、又青樹居士、[illegible]と號す。『東郭集』[illegible]本の人。慶應二年に生る。

長尾雨山 名は甲、字は子生、[illegible]雨山居士と號し、又石隠[illegible]といふ。元治元年を以て讃岐高松に生る。

佐藤六石 名は寛、字は公綽、六石と號す。越後の人。大正六年土居香國の跡を繼いで隨鷗吟社の主宰となる。著に『六石山房詩文鈔』その他數種あり。

桂湖村 字は[illegible]、湖村と號す、通稱は五十郎。越後の人。著に『歴代漢詩評釋』『漢籍解題』あり、本朝の分に支那文學に關する大著あり。

福井學圃 名は繁、字は公[illegible]、學圃と號す。東京の人。門人等『學圃遺稿』を上梓せり。

土居香國 名は通豫、字は士順、香國と號す。土佐佐川の人。森槐南に繼いで隨鷗吟社の主幹たり。自作の詩集數種の著あり。

高島九峯 名は張、字は張甫、九峯と號す。通稱張輔。長門萩の人。弘化三年を以て生る。著に『九峯詩鈔』あり。

結城蓄堂 名は琢、蓄堂はその號。但馬の人。明治元年を以て生る。著に『和漢名詩鈔』あり、[illegible]「詩林」を發行、今[illegible]。

石田東陵 名は羊一郎、東陵と號す。仙臺の人。慶應元年を以て生る。著に『[illegible]』あり、未刊のものに『[illegible]詩集』あり。

田邊碧堂 名は華、字は秋穀、通稱は為三郎、碧堂はその號なり。備中の人。元治元年を以て生る。著書に『碧堂絶句』『凌滄集』等あり。

上夢香 名は眞行、字は大道、夢香と號し、又聞樂主人といふ。山城の人。嘉永四年を以て生る。

岡崎春石 名は壯、字は以中、春石と號す。東京の人。明治元年を以て生る。

阪本蘋園 名は彦之助、字は利卿、蘋園と號す。尾張の人。

久保天隨 名は得二、天隨はその號なり。家は世々信州高遠藩内藤氏に事ふ。東京に生る。その著に『秋碧吟廬詩鈔』十二卷あり。その他讃州、關西、樺域、[illegible]、滄溶等の諸游草あり。本國の分には『禹域游草』『樺太游草』等あり。尚詩に關する著書には『唐詩選新釋』『李太白集』『高青邱集』等あり。

服部擔風 名は轍、字は子雲、擔風はその號、[illegible]

田邊松坡 名は新之助、字は[illegible]、松坡と號す、又[illegible]。肥前唐津の人。文久[illegible]年を以て生る。著に『明十家詩選』あり。

磯野秋渚 名は惟秋、字は[illegible]、秋渚はその號、又夕陽山人の別號あり。伊賀の人。文久二年を以て生る。

井土靈山 名は經重、字は子常、靈山と號す。磐城相馬の人。安政六年生る。著に李太白、杜少陵、白樂天、蘇東坡等の選註あり。尚詩作に關する數種の著あり。

上村賣劍 名は篤、字は雨之、[illegible]、賣劍と號し、又別に馬骨といふ。大正四年[illegible]を創立して文字[illegible]を發行しつゝあり、著に『賣劍詩草』『詞偶大成』あり。

明治大正詩史概觀

北原白秋

明治大正漢詩史概觀

井土靈山

明治大正詩史概觀

序言

この文の意圖するところは明治大正詩史の概觀である。で、極めて簡潔であるを要する。考證や批判の微細を盡すには私はあまりに私の頁を吝に與へられた。私はただ大局を觀、骨格のみをつかんで、平易に公平に解說するより外はない。然し、さて之を實行に移すとなると、なかなかの困難をおぼえる。筆者自身がこの期の詩人の一人であるといふことも深く憚られるが、この六十年間に於ける近代日本の詩と詩人の業績とを通覽するにあまりに其處には目まぐるしい變遷があり、あまりにその渦卷が耀かしく激しい、急調を極めてゐる。

何れにせよ、ともかくも私は私の在るべき觀點に正しく立ちたいと思ふ。

1 日本詩歌の特性

言靈の幸ふ國

日本民族の祖先たる神々が高く持した思想の一つはその祖國を以て、我自ら言靈の幸ふ國と誇擧したことであつた。この言靈の思想は崇敬に値する。以來數千年、事實に於て我が民族はこの言靈の思想をその言語表現の精神とした。

この日本民族は本質的にその獨特な日本の言語を基準し、整齊し、練成し來つたが、また、時に應じて他を攝取し同化することに頗る聰明であつた。今日に於てもまだその綜合なり統一なりの道途にあると見てよい。原始的單純と近代性複雜とを兼ね備へて、しかもまた東西の文化を圓かに渾融しつつあるこの民族の性情と理解力とは、世界に於ける中つ國としての好地位とともに優に惠まれたる未來を翹望せしめる。藝文について、殊にまたその眞髓とする詩歌について一考する時、この感は一入に輝きを增す。

はこれを措いて、[illegible]に就いての[illegible]でも、[illegible]に置きるであらう。

日本詩歌の本質的律格

[illegible]こうであるごとく、日本の[illegible]。[illegible]ない。

片歌・旋頭歌・短歌・長歌・佛足石歌・催馬樂・神樂・今樣・小唄・近世の俗謠等、記紀萬葉以來の數多の詩形を[illegible]時に、しかも發生すべき原因があり、變化すべき當然の過程があつたことと思へる。しかも日本の詩としての本質的韻律、格調、律格は概して日本のものであり、一貫して之等の基調を爲すものは五音七音の組み合せであつた。

曲とともに存在した歌謠より獨立して、全く第一義の詩としての發達を遂げた抒情の短歌（五七五七七の三十一音）、或は同じく短歌の一體として別に象徴の詩風を完成した俳句（五七五の十七音）について觀ても、根本としての律格は五音七音であることが判かれる。

徳川期俚謡の謡調形式とも見るべき二十六音型(七七七五)についてみてもやはり同断であると言へよう。

細かに吟味すれば、之等の五音七音は何れも二音三音の連鎖であり、二音三音の連鎖はまた時によつて四音六音八音の歌謡律を成す。しかも此等の五音七音と之等とが長短錯綜して所謂謡格に入つて格を出で、格を出でて格の精神を離れぬところにかの近世の小唄、俚謡、童謡の或る自由律があつた。かうした自由律が或は日本の詩歌としての自由律ではなからうかと思へる。[illegible]成つてない以上は、日本の詩が外國の詩の模倣でない以上は、日本の自由詩が日本の詩である以上は。

その流動性について

日本詩歌の偉大は言語の微妙なる連鎖にあり、その妙は調子の流動性廻轉にある。漢詩や西詩のことを押韻法にあまりに意識して行ふ時に[illegible]却つて害を成す。本質的表現ではないからである。ただ單純なる短詩形にあつて[illegible]として自然する時にのみ生きる。しかしさうした傾向に歌謡の流動性以外には[illegible]めて困難であらう。

その調子について

片歌の原始的五七五調に始まつて、五七調の莊重に進んだ和歌は、萬葉より古今に移つておのづからな七五調の輕快を樂しみ、遂には新古今の幽玄體をもこの中に盛するに到つた。

一方、俳諧は長詩句として和讃は幾分の雜調より愈々七五の整調に入り、七五調四句のいろは歌(空海作と言はれてゐる)より、それと同形式の、或はその、連作的な今様の歌曲がまた發生した。

のみならず、七五調の連續體は物語(たとへば平家物語の重衡東下りの條)、近世の稗史(たとへば馬琴物、春水物)、浄瑠璃(たとへば近松物)、俗曲、端唄俚謡等にまで及んで哀々綿々たる主調を成した。

提唱された新しかつた明治の草創期の新體詩もまたほとんどこれを主調を採り、時としては五七の音調を擬したに過ぎなかつたことは全くあはれに嘆笑すべきものであつた。傳統の根強さであつた。

古典と新風

之を否定し、或は之に從へば、舊套を脱して清新の詞藻を當代の言葉言律、或は更に新様の形式を以て表現しようとする藝術上の新造はいつの時代にも見受けるところであつて、あながち明治詩の新體に於ける提唱にのみ限らない。萬葉、古今、今様、新古今、遙かに降つて近世の俳句、正岡派の短歌に到るまで、今日より見て既にゆかしき古典となつた詩歌も、その時代にあつては何れもがまた新來たる新風でないものはなかつた。

思ふに眞にそれらの先人は眞に古典の美を學び、傳統を尊び、[illegible]、[illegible]の徳と革新の要求とがよく調和してゐた。たしなみが深かつたのである。之に較べると、明治詩の發生は貧弱で、何等の優れた藝術的素質もなかつた。その提唱者であり實行家であつた諸家は詩人ならぬ學者であつた故に、意氣のみ壯んではあつたが、才華之に伴はなかつた。

ただ將來は翹望した。

未來に、遙かに、新しい藝術を、未來の大詩人を。

かくして日本詩歌の黎明の上に[illegible]らしい新風が芽ぐんで來た。

此の後十年、[illegible]、新體詩[illegible]しつつ、新しい時代の[illegible]

てきたあまりに性急なる歪曲の弊害は今や西[illegible]として左傍に散文化しつゝある。慨嘆すべきであり、憂慮すべきことである。

2 新體詩以前

邪宗門と詩

南蠻船の來航と紅毛人の渡來とは近世日本への一つの新らしい衝激であつた。邪宗門切支丹の東漸は[illegible]泰西文化の移植となつたが、ここに醸した奇異とすべきことは文獻として散見する僅かの俳諧以外殆とさしたる影響も我が詩歌の上に來さなかつたことである。蘭學はもとよりであるが、姉妹藝術たる繪畫に於ては江漢、田善の銅版畫を誘致し、北齋廣重等の浮世繪にも彼の骨法は明かに攝取されたに拘らず、當時の歌人・俳人の中に一の洋風詩體をも採つて行つた者がなかつたことは遺憾であつた。それは徳川期三百年の禁壓主義に甚しく禍され、漢學の奬勵と國學の復興とに遮られて遂に何の爲すところなくて畢つた。博覧の史家新井白石すらも單純の詩人ではなかつたし、一代の奇才平賀源内も上田敏ほどの西詩の愛慕者ではなかつたら。元祿の芭蕉さへが談林の俗俳を産し、[illegible]を詩人として遇し、東洋の象徴的な完成をしたとはいへ、蘭人花見の風俗を句にしたくらゐで、詩形についてはただ和歌の一體を變へたに過ぎなかつた。[illegible]とも見られる文化文政時代に[illegible]は現れなかつた。[illegible]の當時たらずとも、少くとも徳川の[illegible]に詩の上に[illegible]が行はれたならば、蓋しその後の日本詩歌の[illegible]根は光彩陸離たるものがあつたらうと思はれる。[illegible]典籍に、[illegible]、明治四十年代より、最近に至つて盛んに南蠻物の流行を見ることに於一感慨切に深いものがある。

ただ、長崎の畫家、俳[illegible]保物品などの[illegible]に西洋の紋様と日本の古雅とを融和せしめたものはあつた。

蕪村の新體

天明の俳人蕪村にかの『春風馬堤曲』以外ただ一つの新體の詩らしいものがあつた。和歌にあらず俳句にもあらぬ連體一篇の詩句であつた。

北壽老仙をいたむ

君あしたに去ぬ、ゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる。
君をおもうて岡のへに行きつ遊ぶ、をか
のべ何ぞかくかなしき
蒲公の黄に薺のしろう咲たる、見る人ぞ
なき。
雉子のあるか、ひたなきに鳴を聞ば、
友ありき、河をへだてゝ住にき。
へげのけぶりのはと打ちれば、西吹風は
げしくて、小竹原眞すげはら
のがるべきかたぞなき
友ありき河をへだてゝ住にき。けふは
ほろゝともなかぬ
君あしたに去ぬ、ゆふべのこころ千々に
何ぞはるかなる。
我庵のあみだ佛、ともし火もものせず、花
もまゐらせず、すご／＼と彳める、今
宵はことにたふとき。

長崎餘響

長崎勤番の武士がありのすさびに物した長崎への道中歌、たとへば逸名氏の筑後柳河出の橋より出發した七五調の連綿體なども、やはり在來調であり、別に西詩の趣を移したものではなかつた。

ただ、『後の夢路日記』の作者中島廣足が文化六年の夏に長崎に赴いた時、通詞[illegible]に囑

されて直譯したといふ阿蘭陀國風詩、『やよひのふたつのみは[illegible]とするに足りよう。

後年勝海舟にも「Loofden Heer!」と傍書した譯詩「思ひやつれし君」といふのがあつたさうである。但し之等の[illegible]は五七の長歌であつた。然しながら發生期の新體詩の技巧に比すれば遙かにすぐれてゐた。(勝海舟の件、日夏耿之介君の調査に據る。)

景樹、曙覽の新派

德川の末期に於ける新派和歌の特長は當代の語彙と動律、或は[illegible]な感覺とを以て整調し新裝しようとすることにあつた。これとても三十一音の定型を固守した上のことであつた。然しながら、確かに彼等は新派としての精神に立ち、舊套の表現を脱したものゝごとくであつた。ことに桂園派の歌風は寧ろその墮落した追隨者のそれらを飛び越えて、後の明治詩の手法に多大の影響をさへ與へたのである。

黒船來る

ペルリの黒船の來航はまさしく第一の紅毛禍であつた。一世を震撼し、尊王攘夷の志士は四方に起つて、[illegible]川幕府の倒壞となり、急激に[illegible]展開して、ここに明治維新の黎明が來た。そうしてまた所謂文明開化の極端な物質的歐風崇拜時代が後を繼いだ。

この間にも何らかの詩的波動が、既に儀禮と戲弄との對照に過ぎなくなつて了つてゐた和歌・俳句・漢詩の舊體を脱してかの新體への綠とともにしんしんと滿ち來りつゝあつたことは疑ふべくもなかつた。

「世界國盡し」

明治の二年に福澤諭吉の『世界國盡し』が上刊された。然しながら詩といふべくはあまりに無味粗雜であつた。單に七五調の地理歷史の書であつた。ただ、その平俗な現代語による表現手法は後來の新體詩に少なからぬ暗示を與へた點に於て或先驅としての價値は認められる。

その發端

世界はひろし萬國はおほしといへど、大凡五に分けし名目は亞細亞、阿非利加、歐羅巴、北と南の亞米利加に堺かぎりて五大洲、大洋洲は別に又南の島の名稱なり。土地の風俗人情も處變れば品かはる其樣を知らざるは人の人たる甲斐もなし、云々。

『小學唱歌集』

『小學唱歌集』は文部省音樂取調掛伊澤修二の編にかかる。明治十四年十一月に第一篇が發行され、十六年の三月に第二篇、十七年の三月に第三篇が出た。主として泰西の樂曲を選んで、之に添ふるに譯詞或は古典の今樣體、若くは新に歌詞をととのへ、專ら兒童の唱歌用たらしめんとした。「螢の光」「春の彌生」「奈良の都」などがさうである。

然しながら、之等はまだ新體詩以前のものであり、以外のものであつた。

3 新體詩生る

新體詩の發生

「泰西之詩。隨世而變。故今之詩。用今之語。周到精緻。使人感動不倦。於是乎又曰。古之和歌。不足取也。何不作新體詩乎。」(巽軒居士、井上哲次郎)

「頃者同志一二名ト相謀リ、我邦人ノ從來平常ノ語ヲ用ヒテ詩歌ヲ作ルコト少ナキヲ嘆ジ、西洋ノ風ニ模倣シテ一種新體ノ詩ヲ作リ出セリ。但シ今成ル所ハ西洋ノ習ニ係ル

モノ多シ。」（尚今居士、矢田部[illegible]）

「人の[illegible]らんとする時は、[illegible]國の、西洋四面の字を以[illegible]すも、我等が組に至りては、[illegible]別なく、和漢西洋ごちやまぜて、人に分るが第一と、人に分ると自分極め、易く、書くのが[illegible]ツの[illegible]一、」（山[illegible]、外山正一）

右三人の銘[illegible]の提唱に因つて、その合著「新體詩抄」が世に謂ふ新體詩なるものの發生第一聲を擧げた。明治十五年の七月であつた。

彼等はこの自覺に立つた。さうして新詩に對するよき理解を示した。

「明治ノ歌ハ明治ノ歌ナルベシ、古歌ナルベカラズ、日本ノ詩ハ日本ノ詩ナルベシ、漢詩ナルベカラズ、是レ新體ノ詩ノ作ル所ナリ。」（巽軒居士）

「方今ノ學者ハ詩ノ賦スレバ漢語ノ用ヒ、歌ヲ作レバ古語ノ援キ、平常ノ言語ハ鄙ト爲シ、俗ト稱シテ之ヲ採ラズ、是レ謬見ト爲サザルヲ得ンヤ。……余以爲ク宜ク平常ノ語ヲ少シク折衷シ、以テ稍新體ノ詩歌ヲ作リ、充分ニ吾人ノ心ニ感ズル所ヲ吐露スベキナリ。」（尚今居士）

その凡例の要點を拔いて見よう。

一、[illegible]是レ[illegible]歌ニテハ之ヲ詩ト云ヒ、[illegible]トスベシ、[illegible]歌ト詩トヲ[illegible]スルノ名[illegible]ヲ聞カズ、此書ニ載スル所ハ詩ニアラズ、歌ニアラズ、而シテ之ヲ詩ト云フハ、泰西ノポエトリート云フ語ヲ[illegible]、詩ト[illegible]稱スルノ名ニ當ツルノミ、古ヨリイハユル詩ニアラザルナリ。

一、和歌ノ長キ者ハ、其體或ハ五七、或ハ七五ナリ、而シテ此書ニ載スル所モ亦七五ナリ、七五ハ七五ト雖モ、古ノ法則ニ拘ハル者ニアラズ、且ツ夫レ此外種々ノ新體ヲ求メント欲ス、故ニ之ヲ新體ト稱スルナリ。

一、此書中ノ詩歌皆句ト節トヲ分チテ書キタルハ、西洋ノ詩集ノ例ニ傚ヘルナリ。

*

彼等はかくして詩の意義を西洋の「ポエトリ」にまで延め、その表現にもかの句と節との連鎖、段格等につき西詩の書式を大いに採らうとした。然しながら、調はやはり日本舊來の七五であつた。新體であり古の法則に拘はる者にあらずとは爲したが、拘はるべくまたあまりに古典の技法に通じなかつた。創作上の素養も淺く、野性であり、措辭も蕪雜なれば言ふところも[illegible]、[illegible]ても、作品として[illegible]不完全なものであつた。

彼等自身、甚だ新しい自覺には立ちながら、その詩作上に於ける自信は怪しかつた。

「是ヲ以テ[illegible]、[illegible]精心ヲ盡シトスル所ナレドモ、妄ヲ加ヘ、他人ハ之ヲ奇怪不[illegible][illegible]ノコトヲ[illegible]セントコトヲ。」

と言つたのはあながち謙遜言のみではなかつた。西詩に對してはまた

「其句調高尚ニシテ、韻ヲ踏ムモノアリ、皆[illegible]ザルモノアリ、[illegible]ナルモノアリ、[illegible]ルモノアリ、其言[illegible]ズ。」（以上尚今居士）

と讃賞しつつ、遂にはかの律韻自在の長詩を提出し得ずして、僅に一個の[illegible]を以て[illegible]長に[illegible]するに過ぎなかつた。因つて知るべしである。

巽軒も亦之と吁嗟を同じた。

「余輩ニ新體ノ詩ヲ作ラント欲セシト雖モ、其[illegible]ノ[illegible]ナラザルヲ慮リ、先ヅ和漢古今ノ詩歌文章ヲ學ビ、ソレヨリ漸次ニ新體ヲ作ルノ路ノ爲サントシケルニ、」

この顧慮は正しかつた。然しながら革新者の熱意は一に早急である。

余思フニ古今ノ時ハ[illegible]、[illegible]ズ、凡ソ[illegible]ノ詩ノ[illegible]ハ、[illegible]ニ出ツ[illegible]、[illegible]

「若シ夫レ押韻ノ[illegible]、用語ノ格等ハ[illegible]ニ改[illegible]良スベキノミ」

この言もまたあながち自[illegible]のみではなかつた。

この巽軒が初めにその詩に命ずるに古來の長歌流新體の名を以てし、その後、新體詩の稱呼に決定さしたことも、自ら這個の心理を示してゐる。

尚今はまたその才能の不適をよく自認した。

「安ゾ知ラン…或ハ大家ノ出ヅルアリテ其流義ナルヲ善トシテ一層ノ工夫ヲ加ヘ、更ニ人心ヲ感ゼシメ、鬼神ヲ泣カシムルノ詩ヲ賦シ出ス[illegible]ザル（[illegible]）ンコトヲ。」

これが[illegible]の[illegible]大なる[illegible]死に在つて、かの草創期の言にひ[illegible]して見よ、潤に今昔の感に堪へないものがあらう。

*

この「新體詩抄」に收むるもの、譯詩十三、創作六、合せて十九篇、譯詩にはブルウムフキールドの「[illegible]兵士歸鄕」テニソンの「輕騎隊進撃」（巽軒）ロングフェローの「人生の詩」、チャールス・キングスレーの「[illegible]」、[illegible]ウルゼーの詩」以上ゝ山、カムプベルの「英國海軍」グレーの「墳上感懷」（參照）テニソンの「船將の詩」ロングフェローの「兒童の詩」以上尚今等を蒐め、[illegible]、ゝ山は沙翁の「ヘンリー第四世」中の一段を、また尚今と同じく「ハムレット」中の一段、かの有名な "To be or not to be" の條を個々に採つて訳譯した。

ハムレット中の一段（之[illegible]冒頭）

死ぬるが増か生くるが増か、
思案をするはここぞかし
つたなき運の情なく
うきめからきめ重なるも
堪へ忍ぶが男兒ぞよ、
又もおもへばさはあらで
[illegible]そのことに[illegible]つなき
[illegible]の[illegible]を結ぶをあきらめて、
死して[illegible]の[illegible]それぞれと
からきくるしき世の中を
さらりと去つて消えゆくも
[illegible]にあらぬか。（[illegible]）

[illegible]

なからふべきか[illegible]するか、
妄の思案のしどころぞ、
運命いかにつたなきも
これに堪ふるが丈夫か、
又さはあらで[illegible]よりも
猶き逆恨に手向ひて
之を晴らすがもののふか、
どうも心に落ちかぬる。（尚今）

創作には「拔刀隊の歌」「社會學の原理に題す」以上ゝ山、「勸學の歌」「鎌倉大佛に詣でて感あり」「春夏秋冬の詩」以上尚今、「玉の緒の歌」（巽軒）がある。

「拔刀隊の歌」は當時の兒童走卒もよく歌つた[illegible]の[illegible]は當軍[illegible]はといふ[illegible]の[illegible]を吟じた最初のものである。

社會學の原理に題す（ゝ山）

宇宙の事は彼此の
別を論ぜず諸共に
尺に[illegible]る[illegible]
規律のなきはあらぬかし
微かに見ゆる星とても
動くは共に引力と
云へる力のある故ぞ
[illegible]中[illegible]、

テニソンの「[illegible]」が[illegible]された。一[illegible]なり、[illegible]、ならびて[illegible]。

新體詩の[illegible]はその後人にとつては寧ろ遅きに過ぎたが、[illegible]また非常に早[illegible]した。然し、平語を以て西洋の詩風を移行しようとした三人の意図は少くとも認められてよい。逍遙の「小説神髄」「書生氣質」よりは三四年の先行である。

「新體詩歌」

いち早くまた雁行して上梓されたのが竹内節の「新體詩歌」第一集第二集である。翌年にその第三第四が出、十六年にその合卷本が出た。この集には「新體詩抄」の諸詩章に加ふるに、小室屈山の「自由の歌」「外交の歌」の新曲があり、平野次郎の「芭蕉歌」「月照の入水を悼む」があるかと思へば、佐久間象山の「[illegible]」の長歌反歌や藤田東湖の長歌があり、平家物語の「俊基朝臣の東下り」から俗曲の「長恨歌」「西行」「小督」などが交り、冒頭から久、甚しく永く世の傳唱するところとなつた「建武の昔正成は」の「櫻井驛遺訓」の歌、「抑も熊谷直實は」の歌などが混淆して、ここに索然たる草創期の錯綜圖を織り出してゐる。中にも[illegible]「[illegible]」は後人を[illegible]と[illegible]した[illegible]

思ひ出[illegible]ただ直、
しかのみならず[illegible]心[illegible]
[illegible]たてしたくれ合
時計の[illegible]早くたち
[illegible]に[illegible]る針の位置
歳はすぐとも業とせず、
なきは即ち無能無智
鈍く歩へ、氣をたもち
よき働きを爲せる後
長しし[illegible]はんこの命

日本語系の特性を知らぬこの押韻の自在とかは過ぎて却つて日本語の詩歌表現として不自在ならしめてゐる。唯、屈山の「自由の歌」

「天には自由の鬼となり
地には自由の人たらん
自由よ自由、やよ自由
なんぢとわれとその仲は
天地自然の約束ぞ（以下略、本文參照）

こそは、自由民權に熱狂した當時の全社會思想を歌つて、血湧き肉躍るの概があつた。成人も兒童も叫んで唱つた。――天には自由の鬼となり、地には自由の人たらん――[illegible]人は[illegible]の[illegible]や[illegible]あつたのである。ここに[illegible]しい[illegible]時に、[illegible]回顧の[illegible]がそのまま實際として[illegible]に行はれたのである。

明治新體詩歌選

二十年初刊本「明治新體詩歌選」も内容は[illegible]と同斷であつた。吟唱用として編纂されたのである。この本では初めて金泥の輪廓の内に[illegible]色した城の櫓と兒童遊戯圖のある石版刷の表紙を用ひた。俗樂向きである。插畫には英國軍艦の圖、兒童體操の圖、朝顔に寄せて學童を勵ます圖、熊本籠城の圖などがあつて、今でも好事家の興味を牽いてゐる。

4 次いで來るもの

初頭の個人詩集『十二の石塚』

時は進む。十八年十月、初めて純然たる創作としての個人詩集が現れた。湯淺半月の『十二の石塚』が是れである。舊約「士師記」のエホデの故事に據り、猶太はエリコ城の民話を味じ

た長篇の敍事詩であつた。傳統的な五七調の長歌形式ではあり、韻律も緩く、些か張力は弱かつたが、少くともその行文の典麗と品位の高さとは從前の平俗な譯詩類を超ゆること數等であつた。しかも全一味の清雅異香を流露したものであつた。すがすがしい新體詩の紫の曙が漸くにこのうら若い基督教徒からその幽かな風と光とを戰がして來た。

ここに背かれるのは、作者の半月が、萬葉・古今、或は山家・金槐雨集に關心を持つ一方に於て、景樹の『桂園一枝』の讀者であり、その門末の一人であつたことである。景樹の近世調が直文以後の優婉體にも滲透した清新性については深く考ふべきである。

湯淺半月は同志社英學校を出た後、宗門の讚美歌編集にも關係したが、その著書には『半月集』(三十五年)『雅歌』(大正十二年)等がある。

『新體詞選』

十九年の四月には山田武太郎(美妙)編輯の『新體詞選』が刊行された。詩と言はず詞とした點は注目すべきである。收むるところ美妙(樵耕・蛙船)紅葉(緑山逸史)九華(姓は丸岡、延春亭、梅のやかほる)三者の創作詩十篇、一様に七五調の、時には俗に崩した外形であり、内容にも鮮新を缺いだ、さして價値あるものではなかつた。ただ紅葉の「書生歌」は珍とすべく、美妙の「戰景大和魂」は或は當時の激越調とも見るべきであらうか。後者は爾後普く喧傳唱歌されたあの「敵は幾萬」である。——敵は幾萬ありとても、すべて烏合の勢なるぞ、烏合の勢にあらずとも、味方に正しき道理あり。邪はそれ正に勝ち難く……

『孝女白菊の歌』

その翌年、又もや青年子女の感傷を煽つた落合直文の『孝女白菊の歌』が咲き明つた。巽軒の漢詩を譯して一躍傳唱の女王となつたあの白菊である。

哀々たるその曲節、あの長篇敍事詩の七五調、

阿蘇の山里秋ふけて、
眺め淋しき夕まぐれ、
いづこの寺の鐘ならむ、
諸行無常と告げわたる。(以下略・本文參照)

この直文の新聲は清楚であり、生彩があつた。來るべき時代の文章をも暗示してゐた。素養ある國文學者としての詩技はかくして『新體詩抄』の粗鑛を熔爐し純銀とし寶とした。次いで直文は明治の國文を正し、新派和歌の祖となつた。

S・S・Sの角笛

清爽なるS・S・Sの角笛は吹き鳴らされた。明治の二十二年である。森鷗外、落合直文、井上通泰、市村瓚次郎、小金井君子等のS・S・S(新聲社)同人こそは好學にして氣鋭の新人達であつた。彼等はその二月の『國民之友』に合同の譯詩集『於母影』を發表した。藝術の薫り高く、聲韻專へに正しく清らかにして、曾て見ぬ均整と同様の巧緻とに人を驚かしたものであつた。日本に於ける初めての好譯詩であつた。ただ惜しむところはよくも手際に洗ひ澄まされた水中の眞砂とは見えながら、是等にはかの春の若菜の土壤より萌えあがる本然の情緒と意慾とに缺くるものがあつた。藤村詩との差がここにある。然しながらその君子の譯したミニヨンの歌を讀めば香ひはレモンの花とこそき、響はミルテの風のやうに閑かに流れゆくものを感じさせた。一夜、ヨセフ・キクトル・フォン・シェッフェルの詩を讀む傍らより、つぎつぎに直文が譯して行つたといふ「笛の音」のすずしさは。怪しくもまた、マンフレッドの一節の重々しくも

艶はし、清きの花を。
ともしびに顔をばいまひとたびそへてむ
それと深いみるまでたちたなると思は
ず(略)

ああ、花子よ、
わかれてにしもあらなくに
なにかくおつるたみだぞも
ふみくだかれしはなさうび
よはなれのみのうきよかは

この『於母影』の中には、マンフッド、その他を漢詩に譯したのもあった。漢詩を和譯したのもある。

青邱子

青邱が身は、いややせに痩せにたれども
その昔、
五雲閣下にすまひけむ、詩を賦せしのば
るる。(略)

世説に言ふ、鷗外等はこれによって得た稿料五十金を以て、雑誌しがらみ草紙發行の資に當てた。

一朶の狂雲

ここに詩人としての最初の詩人らしい情熱に身を燬き盡して、現るるや忽ちに滅び去つた者もあった。[illegible]中西梅花[illegible]人である。名は幹男、彼は讀賣新聞[illegible]を驚かすかと思へば、或ひはまた奇々と[illegible]世間に漂泊したといふ。[illegible]し、當には寛容にして温然よく人の愛顧を受けた。『新體梅花詩集』(二十四年三月)はその詩集である。稀觀本であって今日容易に手に入らない。長篇九十九の曲[illegible]、自ら稱するところ無かった。[illegible]に富み、悲しいほどの純一[illegible]、時として稚氣にも見えた。もとより[illegible]巧拙に關心しなかったかも知れぬ。

蕭々露(その冒頭)

くさ葉のへ、[illegible]、いさ
な佗みあからみて、ほやりほやりと吹きき
たる、ぬるみし夏のほこり風、さすがに
聽るかる顔も耳もあふられて茎もしほれ、
花かしげに行く田舍道。

あの激越な自由詩の作者にして、このほやりほやりがあった。惜しまれた人であった。

後の美妙

『新體詞選』の美妙はまたその四年後に『新調韻文青年唱歌集』を編んだ。彼は竟に婦人雑誌『[illegible]』[illegible]この中に[illegible]であった。[illegible]ずには[illegible]した彼は[illegible]野心[illegible]た、それは『[illegible]』[illegible]の日[illegible]いと[illegible]試作にまざまざと見ることが出來る。[illegible]日本[illegible]の國民唱歌までも[illegible]に揚げたり、[illegible]詩を書いたりしたことは[illegible]むに足りない。大方は[illegible]であったが、[illegible]時に先つたものもあった。[illegible]『青年唱歌集』は[illegible]當時[illegible]て重要な高い位置を占めたもので[illegible]ない。[illegible]の河井酔茗、その[illegible]花[illegible]『鐘の音』の[illegible]がこの中に[illegible]されたことは興味深く見られよう。[illegible]運動にはこの時既に無名の青年子女も加ってゐたのだ。

大和田建樹

いつの世にも、藝苑のみとはいはず、時流に先んずるが故に苦しみ多き殉情者と、之に乘じ

て後より巧みに[illegible]才者との二種である。[illegible]狂死し、[illegible]創造者に[illegible]も一方には已れに先[illegible]無くとも[illegible]つて時を得た人に大和田建樹がある。建樹は[illegible]新體詩歌の流行に乘じて、いち早く『[illegible]學生歌』(十九年)を出し、『明治唱歌』(廿二年)を編み、また自作の[illegible]『いさり火』(同年)を梓に上した。次いでまた詩人の傳を添へた泰西名家の譯詩集『[illegible]名家詩集』(三巻)(廿七年)を世に送った。[illegible]撰し、[illegible]は乏しかったが、譯[illegible]意識に於て、いくらか[illegible]を考へてゐた。漸く讀まれた時期であらう。この外、彼は續々に通俗[illegible]、[illegible]的の學校唱歌を作り、後年大學派に[illegible]にも流行すればまた同じくその國內に[illegible]、民衆[illegible]の常習的詩工として[illegible]く[illegible]に到った。しかもかの外國を紹介するに努めた[illegible]に[illegible]その[illegible]を帶びた。花ならば[illegible]をせであった。

草創期詩壇の情勢

新體詩草創時代は[illegible]に至る、この間に、年と共に[illegible]、年月人の[illegible]、[illegible]出版の[illegible]、[illegible]、[illegible]んで、[illegible]に[illegible]を明かにしつつ、ここに第一段の幕を閉ぢた。

*

宮崎湖處子の『歸省』(廿三年)鷗外の『水沫集』北村透谷の『蓬萊曲』(廿四年)、半月の『天地初發』(廿六年)『透谷集』(廿七年)が出たのもこの中期である。[illegible]としての『歸省』は[illegible]詩を挿んで、實質の[illegible]を見せ、『水沫集』は『於母影』の譯詩章を加へて、高雅[illegible]の文藻を誇り、『天地初發』は太古にして太新、[illegible]よく整って、三齣に成る[illegible]の長[illegible]は[illegible]ましくも[illegible]交々であった。

湖處子の『ウォルヅウォルス』、『[illegible]』、高木[illegible]作の『ゲーテ』、『評傳詩』、[illegible]の譯詩『スコットの『湖上の美人』もこの間に出た。鷗外の[illegible]詩學』と出た。

*

[illegible]の『[illegible]』の『日本韻文に對する[illegible]主義』(日本韻文論)、石橋忍月、内田不知庵、[illegible]の反駁、大西操山の『詩歌論』、[illegible]と『[illegible]』に就て『鷗外の『日本韻文論』、批判、[illegible]の[illegible]議は[illegible]『國民之友』その他に發表され、山路愛山の『[illegible]』は又、植村正久の[illegible]となり、遂には透谷の自殺に[illegible]った。

三十年には『[illegible]文學』に[illegible]の根本[illegible]變』其他諸家[illegible]、『太陽』の高山樗牛は[illegible]派詩人[illegible]を提げて[illegible]に敢然挑戰した。

紹介には、二十五年の交、『哲學會雜誌』に夏目漱石が「平等主義の代表者ウォルト・ホイットマンの詩に就て」を講說した。ホイットマン紹介の初めであらう。かの『草の葉』の民衆詩人が[illegible]ったのはこの年であった。大正詩壇に於ける同系の民衆運動はその後二十餘年にして漸く緒に就いたのである。

殊に目を[illegible]たしめたものは、文學界同人、[illegible]木、秋骨、孤蝶、藤村等の泰西詩文の翻譯、紹介であった。[illegible]、[illegible]、[illegible]しく、つぎつぎに海の彼方の古[illegible]新[illegible]を傳へて一時人の詩心をそそった。

*

詩と[illegible]を[illegible]は『國民之友』、『[illegible]女』『しがらみ草紙』、『女學雜誌』、『[illegible]』、『日本評論』その他があった。

創刊された重なる雜誌は二十四年に『早稻田文學』、二十六年に『文學界』、二十八年に『帝國文學』があった。この三派の[illegible]狀態は文學史家の興味ある[illegible]であらねばならぬ。殊にまた[illegible]に[illegible]を持つ[illegible]の運動が[illegible]

に世界に雄健たる紅霞を結はしたが、綠野天來、三木天遊は早稻田文學に、北村透谷、星野天知、島崎藤村、馬場孤蝶、戶川殘花、戶川秋骨、平田禿木、後れて田山花袋、上田敏（柳村）は文學界に、西文系、美文韻文流の塩井雨江、武島羽衣、大町桂月は帝國文學に（建樹も之に屬しよう）國木田獨歩、矢崎嵯峨の家、田山花袋、松岡國男、宮崎湖處子、太田玉茗は抒情詩同人に、將來ある新進も亦之等の諸派に認められ、また他に進出し初めた。河井醉茗、岩野泡鳴、蒲原有明、平木白星、杉谷代水、兒玉花外、伊良子清白、横瀨寶湖（後の夜雨）等がその尤なるものである。

青少年詩人の一團、文庫派の擡頭もこの頃である。郎ち、醉茗、清白、夜雨の外に小島烏水、瀧澤秋曉、山崎紫紅その他がここに據つた。

萩の家の直文は淺香社を結んで、明治の新短歌を興し、正岡子規立ち、佐佐木信綱動き、直文門の與謝野鐵幹朝鮮より歸來意氣軒昂として虎と劍とを歌ひ、同門、猪之吉、薫園、柴舟、躬治等も大いに爲すあらんとした。

*

中期を過ぎて現れた作には巽軒の「比沼山の歌」等には[illegible]「[illegible]草」[illegible]文化[illegible]人[illegible]情詩、天遊・八木[illegible]の後に[illegible]て日本[illegible]第一[illegible]來た。

*

軍歌の盛んに起つたのもこの頃であつた。日清戰爭の副産である。たとへば佐佐木信綱の「勇敢なる水兵」は「煙も見えず雲もなく」であり、加藤義清の「喇叭の響」は「渡るに易き安城の」であることは今日の中年者以上にとつて誰しも懷舊の情に絶えないところであらう。その他「膺てや懲せや清國を、旭にかゞやく日の丸の旗、ひらめくみ國の軍艦」もよく思ひ及べ。

透谷再說

曾ては「楚囚の詩」を恥ぢて破り、『蓬萊曲』に荒々しく悩んだ透谷は、文學界結合の翌年に内省の極遂に自らを殺した。二十七歳の短生涯であつた。彼は詩人であつた。激しく熱し、鋭く光つて、この人生圏から消え去つた一人であつた。悲慘な死を遂げた事は梅花と一轍ではあるけれども、前者は飄逸の骨にして零落し、後

[illegible]（6）[illegible]詩人自ら[illegible]（7）[illegible]熱意は不[illegible]、熱意は[illegible]なり。——熱意は[illegible]を生ず。（4）詩人は[illegible]なり。（5）[illegible]世を[illegible]己れを獻ぐるなり。（3）罪悪なき者あり、虛無黨が[illegible]を[illegible]に自ら其に殉じて硝煙の中に露と消ゆるの趣味を稽せばいざ知らむ、現社界と、明日は、幾千年の過去より幾千年の未來に至るべき人間の大不調子是なり。（7）天地の運流いつを以て極みとはするならむ。（8）我は天と地の間を逗ひめぐる一遊漢なり。（9）死の刺は我が後に來りて我を促へり。死は近づけり。然れども此の時の死は生よりも樂しきなり。我が生ける間の一眠よりも今ま死する際の薄闇は我にとりてありが

たし。暗黒！　暗黒！　我が行くところは
闇も知らず、光もなき眠りの一種なるかも、
「眠りならば夢の一つも見ざる眠りにてあ
れよ。おさらばおさらばなり。(10)」

彼の僅かな詩の中で「雙蝶のわかれ」には如何ともすべからざる命運の定まりが沈鬱な律調で歌はれてゐる。透谷の影は藤村にしみじみと投げられた。藤村には透谷の記憶の方へどうかすると振り向きがちの姿が見えた。

*

透谷の文章は眞摯激烈の英氣で貫いてはゐたが、この種のものとして陥り易い語彙の生硬と漢文調の古臭とを脱するには至らなかつた。(この點は高山樗牛とても同じであつた。)寧ろ「文學界」の[illegible]異常清新の思想感情を[illegible]闊達な和文の語脈に移し植ゑた先木、柳村、秋骨、藤村等に却つてこの若い魂の輝きが見えた。まことにこの「文學界」によつて日本の新しい文[illegible]の典麗な母國ともなるべき[illegible]の香草芬々たる間に行はれた。加へて他の同人の業績も讃へられてよい。

「東西南北」と「天地玄黄」

一與謝野鐵幹とは如何なる人ぞ、其の詩集「東西南北」に散見するところの題目、若くは風味に據りて撰る時は、渠は嘗て朝鮮政府の聘に應じ、學部衙門の教官として日本語の教授を擔當し、其國の權官兪吉濬、趙義淵の人々と結託し、日清風雲の際、自ら奮つて韓政府のため畫策斡旋したる志士なるが如し。その「東西南北」は其平素題味の作、朝鮮にありて、故國に歸りて詠ずるもの、從軍諸作、雜什等、短歌新體詩數百を輯めたるもの、名けて東西南北といふ所以は、其風味する所の景物、日韓兩國之天地に亙るの故を以てなるか。―國民之友・八面樓主人はその評言の冒頭にかう紹介した。この集は三十年一月の販である。義淵の題字を初め、巽軒、直文、鷗外、[illegible]、義象、小中村、正臣、[illegible]、子規、信綱等とりどりの序文序歌を羅列し、寄するに[illegible]の新體詩見本を以てした[illegible]を[illegible]正直正太夫・緑雨の[illegible]までが收められた。小冊子ではあつたがこれのみにても世を驚かした。鐵幹は自ら序して言つた。「小生の詩は、短歌にせよ、新體詩にせよ、誰を崇拜するにもあらず、誰の糟粕を嘗むるものにもあらず、言はば、小生の詩は、即ち小生の詩に御座候ふ。」「小生は、今を以て世に立つ者にあらず」云々。之等の言葉、[illegible]を起した。八面樓は「斯の如きの語は往々にして太だしき謙遜より出でたるにあらずんば、太だしき傲慢より出づ」と疑ひ、「鐵幹既に自我を立つ、後の悔を生ぜずんば幸なり。」と叱した。また或者は「抱負見るべし、勇氣愛すべし」と賞し、又或者は「氣障らしき[illegible]振り」と眉を顰め、極度の反感者は内容より序文の方更に見るべしと爲した。その内容についても毀譽交々であつた。その貶する者は露骨、生硬、蕪雜、亂調、不規律、輕浮、匹夫の勇、無謀、[illegible]の新體詩とし、その賞しとする者は[illegible]激切なり、斬新奇抜なり、[illegible]なり、革命の血なりと爲した。結局その代表的なる一面は次の評言に見られよう。「……彼は又豪壯雄大を欲び、頻に虎、太刀、[illegible]、血等の語を用ふれども、その想[illegible]は淺薄にして、徒に外見の[illegible]を飾り、[illegible]を免かれず。[illegible]には、其[illegible]を[illegible]し、[illegible]女子の[illegible]なきを[illegible]云々[illegible]の[illegible]に、[illegible]の如き[illegible]作家[illegible]れたるを喜ぶ、從來の[illegible]なる[illegible]を[illegible]し、[illegible]の[illegible]を建設せんには必ず多少の[illegible]を要することと[illegible]の際に[illegible]て多少の[illegible]を[illegible]と同じ。かくの如き[illegible]の[illegible]と[illegible]との中に[illegible]の[illegible]は[illegible]

た次の集『天地玄黄』（[illegible]）[illegible]
た。當時、單行詩集としてこれほど氣を負つ[illegible]
ものは無く、對社會性を帶びたものは曾て無か
つたと言つてよい。この意味から之[illegible]詩歌[illegible]
は重視される。

「抒情詩」の諸星

民友社派の小詞華集『抒情詩』は『天地玄黄』
に遅るること四ケ月、同じ年の四月に刊行され
た。獨歩（哲夫）、國男、花袋、玉茗、嵯峨の屋
人（小むろ）、八百吉（湖處子）の詩を輯めてゐる。
この詞華集は春の夜の微かな一つの星座のやう
に今なほその稚い感情の朧氣と微光とを投げ
かけてゐる。その序に於て、獨歩は[illegible]の自由
なるを説き、「七五五七の調も可、漢詩直譯體
も可、俗歌體も可。」たりとしてゐる。而して用
ゆる漢語の範圍の廣きを主張し、「枕詞も場
合に由りては大に可。」とし、其外形は散文ら
しく見ゆるも、隱々の中必ず節あり、調あり、
詠嘆あり」とし、「此確信によりて『山林に自由存
す』を歌ひぬ」と揚言してゐる。この點、後の自
由詩説に一脈の繋りがある。花袋は時の新詩
壇の荒涼たるを詩徒の素質無き罪と
して斷じ、詩作の根據となるべき日本古來の和
[illegible]句の[illegible]に[illegible]
[illegible]、自ら[illegible]たる主[illegible]を[illegible]
七[illegible]を取るものの一人たり」としてゐる。七五・
五七調のみに執するは偏狹であるが、その根據
説につきては十分の理がありよき自由を示して
ゐる。玉茗も同じく五言七言を根本とし、一[illegible]
國の韻文は調のみにして平仄韻脚を必要なき
事、整調を第一とし、「國語を講究して和歌俳
諧の調を味ひ、俚歌俗謠を資とすべき」を力説
してゐる。小むろは虚實の妙を、湖處子は[illegible]
されたる詩の素朴性につき、自ら「予の詩卷は
野なり。予が詩を讀む者は即ち野に出でたる
なり。」とし、美服者を見んと欲せば[illegible]宮に往け
との聖語を引き、「予が詩は風に動かさるる蘆に
だも適はざらんことを恐るるものなり。」と破し
た。國男はひたすらに謙讓してゐる。中でも獨
歩はその所説の如く自由に諸體を試みた。

驚異

ゆめと見る／＼はかなくも
なほ驚かぬ此こころ
吹けや北風此ゆめを
うてやいかづち此こころ。
をののき立ちてあめつちの
[illegible]見る時は
[illegible]ままに
其時あれども[illegible]く

山林に自由存す（その第一節）

山林に自由存す
われ此句を吟じて血のわくを覺ゆ
嗚呼山林に自由存す
いかなればわれ山林をみすてし

沖の小島

沖の小島に雲雀があがる
雲雀すむなら畑がある
畑があるなら人がすむ
人がすむなら戀がある

獨坐

夜ふけて燈前獨り坐す
哀思悠々堪ゆべからず
眼底涙あり落つるにまかす
天外雲ありわれを招く

小むろにはまだ戲作者風の名殘があるが、他
の四人には總じて温柔な、また清新な[illegible]をたたへた
哀情が香つてゐる。殊に國男のほのぼのとした
少年の純情詩には未だ汚れに染まぬうぶな[illegible]
鳥の持つ内に籠つたほの温みを感ぜしめる。
或は藤村の先縱を成したものではないか。い

や、もつと純情であるかも知れぬ。

君が園生の花つばら
をりて亂れていつしかなく
みやこの塵にまじるなり
都の市にたつなりを
何いぶせしと厭ひけん
うるはしき君が住むやども
みやこの中にあるものを(『都の塵』の冒頭)

愛慕されたものだといふ。

5 新抒情詩時代の四星

新抒情詩時代

ここに假りに新抒情詩時代と做すのは藤村の『若菜集』出現の前後より有明の『春鳥集』敏の『海潮音』による象徴詩の勃興前までの約十年間を指すのであるが、この期は恰も百花の如く匂ひ、新鮮情の浪漫精神に溢れた。されば故に常の國に於けるが如く、その精華については說くに巨細を盡し難い、要は簡明正しきを得なければならない。

島崎藤村

明治新體詩の第一期を經て、新抒情詩時代の標幟、島崎藤村の處女詩集『若菜集』は明治三十年八月、若菜の地に大きな翅をひろげたクリーム色の胡蝶を描いた不折の裝幀に成る表紙と、同じく寫眞版の插畫數葉とに飾られて若々しく江湖に見えた。芬香は紙の白らまで匂つた。

「遂に、新しき詩歌の時は來りぬ。そはうつくしき曙のごとくなりき。あるものは古の預言者の如く叫び、あるものは西の詩人のごとくに呼ばはり、いづれも明光と新聲と空想とに醉へるがごとくなりき。

うらわかき想像は長き眠りより覺めて、民俗の言葉を飾れり。傳説はふたゝびよみがへりぬ。自然はふたゝび新しき色を帶びぬ。

明光はまのあたりなる生と死とを照らせり、過去の壯大と衰頽とを照らせり。

新しきうたびとの群の多くは、たゞ穆實なる青年なりき。その藝術は幼稚なりき、不完全なりき、されどまた僞りも飾りもなかりき。青春のいのちはかれらの口唇にあふれ、感激の涙はかれらの頰をつたひしなり。こゝろみに思へ、清新橫溢なる思潮は幾多の青年をして殆ど寢食を忘れしめたるを。また思へ、近代の悲哀と煩悶とは幾多の青年をして狂せしめたるを。われも拙き身を忘れて、この新しきうたびとの聲に和しぬ。(以下略)

この處ましやかに水々しい、後の『藤村詩集』の序の言葉はとりもなほさずその當時の思潮を語るものであつた。彼は思つた。

「生命は力なり。力は聲なり。聲は言葉なり。新しき言葉はすなはち新しき生涯なり。」

作らず、飾らず、情感とこしへに若く、清新の聲調に、合せて優婉なる近代の姿態をととのへ、平語を我が氣息の香韻に活かして、敢て戯作することなく、まして奇矯の佛趣にも墮せず、たゞ素直に殉情の信を流露した。抒情詩の主要價値がこの素直なる自然の流露にありとすれば藤村の初期の詩のごときは蓋し上乘のものであらう。且、かく稚く幼なりとは言つても、かかる純なる聲の抒情詩はあらゆる複雜期の詩風の源泉であり、心の故郷でなくて何であらう。如何なる時代にも愛慕され瞻仰されるところのよき素性がこの集にはあつた。

中に收めた詩は凡て五十一篇、[illegible]

一年間の所作に[illegible]時のである。

「おえふ」「おきぬ」「おさよ」「おくめ」「おつた」「おきく」(頭韻)の名にとるとりどりの女ごころを描いて、それぞれに清純な情波に托ましたこれら若い詩人はまた、[illegible]の[illegible]お夏清十郎に戀とたばしる愛情の消息をふそり、「[illegible]」の梅川と忠兵衛には佩に匂ふ梅花の油をときあかして、後の有明の江戸紫風の詩「夏祭」の先蹤を成した。その豊艶なる紫の燕子花と[illegible]の花鳥圖はまた清白の「夏日孔雀の賦」にもその描寫の描法を傳へた。「初戀」の稚氣、「哀歌」の傷心、「天馬」の奔放なる、殊に秋風の歌」「深林の逍遙」の清興幽韻は未聞の傑品であった。

＊

第二集としての詩文集「一葉舟」はその翌年の六月に刊行された。文を主にしたその中の五篇の詩は前集に比し目だつて感銘の稀薄を思はせる。「鷲の歌」「白磁花瓶賦」等が光つてゐる。

＊

『夏草』(三十一年刊)の中の新作は漁夫の生活を歌つた「新潮」や、農夫を詠じた「農夫」の問答體詩篇であるが、夏の日の情熱は漸くその衰色を、沈潜の正調に現し初めた。寧ろその表現を七五調以外に複雑せしむべきであつたら。この内熱は凝つて力を[illegible]めた。この[illegible]は實は早きに過ぎた[illegible]であつた[illegible]見[illegible]よりすれば新しい思想の萌芽[illegible]であつた。ただ、[illegible]下の巻の少女の詩、

　ゆきてとらへよ、大空の
　雲にかくるゝ子兎を

の八[illegible]一篇のもつに生氣ある童心の躍動が見られ、[illegible]の[illegible]の別離の初めての[illegible]に「若菜集」「一葉舟」系の情緒が更に深められて見えた。

＊

藤村の四つの詩集の最後の集『落梅集』(三十四年八月刊)にも愈々時より別れ青春より離れて、静かに人生の中に歩み入る虔ましい後ろ影が眺められる。眼は現實に、心はひたすらら寂びて、たとひ壯年の歌を歌ひ、胸より胸に愛憐のわななきは傳へても、それは老いふかい觀想と[illegible]の莊重味とから、香り高かるべき藝の魅力は燃え立たなかつた。その中で「常盤樹」の破調が思想的ではあるが雄々しく優れ、「椰子の實」の憂に流離の新しさも痛感された。「響りんりん鈴りんりん」の清しさ、「鳥なき里」の童謡味、ことに「小諸なる古城のほとり」と唱ひ出した「千曲川旅情」の遊子吟はその典型的の作として終りを完うした。青春あながち芳ばしからず、老嫗必ずしも醜ましくはないが、いや、境涯老いて愈々神采の奕々たるべきであるが、藤村の[illegible]は[illegible]定へ[illegible]て了つた。それは現實を[illegible]の行きがかりであつたかも知れぬ。[illegible]その[illegible]の[illegible]、[illegible]の[illegible]にして、[illegible]の[illegible]を凝らしたのであつたら[illegible]に[illegible]の[illegible]と[illegible]次第に衰失しつつあつたのではあるまいか。以來[illegible]の[illegible]に[illegible]と、[illegible]な[illegible]とを以てその[illegible]小説の上に増大された。

土井晩翠

藤村と、一時は詩壇の雙璧として稱へられた土井晩翠は、赤門の出身であった。その處女詩集『天地有情』は『夏草』より遅るること四ヶ月、三十二年四月に上梓された。その[illegible]篇の大多數は既に「帝國文學」「反省雜誌」等に發表されたものである。

晩翠は敢て理想を夢みる人、彼は詩の理想を歌ひ、詩人を歌ひ、萬有を讃へ、天地の靈と道を信じ、星と花とに塵外の清淨性を慕ひ、月に戀を聯想し、墓上の花には人生と神業とを忍び、暮鐘に天地の有情を夢みては時劫の永遠

と小兒の思無邪とに聽いた、時には史上の英雄に思慕を寄せ、治亂興亡の果無なさに愁嘆の涙をそそいだ。その中でも長篇の「星落秋風五丈原」は諸葛孔明を咏じて追懐の曲切々聽くべきものがあり、好んで青年の吟ずるところとなつた。感傷的にして單純なその抒情詩の「星と花」は又青年を憧憬する可憐な少女をも喜ばせた。

天地有情の夕まぐれ
わが驕慢の夢さめて

かうした「夕の思」の一節なども、その閑雅にして静寂たる内容とは反對に、行軍中の中學生等の軍歌として加はつて豪快に合唱された。調に據るのである。その漢語調の表現は又特殊の魅力を以て時流に投じた。夥しく漢語を用ゐた彼の勢調上、表現技巧は往々内部の眞を逸し、無しではまた生硬の譏を爲した。しかもその成功したものにはおのづからに磊々の響があり、清亮の響があつた。

『曉鐘』(三十四年五月刊)の中では「萬里長城の歌」「雁」が有名である。他にも「黒龍江上の悲劇」「寄賢之歌」等の長篇詩はあるが、感興往々の餘は、彼自ら彼の最上級の天賦と漢音の高調とに眩惑されて了つて、その缺所とする觀念的感興と行文の放肆とに氣づかなかつたらしい。事の一の異色の響きは要約された短詩の「おほいなる手のかげ」(曉鐘)にあらう。

第三集『東海遊子吟』はその長所ならぬ一面を愈々複雑化し混濁せしめたに止まつた。

然しながら、晩翠も藤村に肩随つて現れていい人であり、時代も求めたものを與へられたのである。

薄田泣菫

藤村、晩翠の併立に次いで、詩壇はまた泣菫と有明とに興味ふかい其後の對照者を見出した。ただ別格の晩翠を除く三詩人には日本詩歌の傳統としての本流の繋りが因縁的にかの秋夜星座の圖に見るがごとき金の直線を感ぜしめた。

泣菫の處女詩集『暮笛集』の上梓は三十一年の十一月、即ち「夏草」の翌年であつて、「天地有情」とは同年の版であつた。

キーツを愛慕したといふこの新詩人の多感にして才思、奔逸の趣ある、「若菜集」の措辭に比して些か陵は薄いかと思はせたが、彼にもまさる近代の閃く藻飾が朱に紫に入り交つた。その語感にも措辭にも韻律にも明を誇つた一種の清新味はその獨自の素質に根差して時人を蠱惑する何ものかがあつた。その漢語と雅言との意識的交錯については、時には何の謂かと世の評者をして怪しましめ、「一聽官の訓練發達未だ足らず、恐らく樂耳を具く人なるべし」、宜しくその訓練を計れとの好意的忠告をも敢てせしめた。しかも當日はほぼ藤村に併行する詩人として一致したやうである。思ふに耳敏き雅言の驅使にも既に來るべき古典的風格の大成は豫感されたのである。なほ中に收めた七五調長篇の「尼が紅」や、「古鏡賦」「村娘」等は佳品として目されたものであつたが、此の集の特徴と見るべきは、「山雀」以下十九篇の寧ろ絶句體八六調の試成であつた。

長鬣風ある放れ駒の
牝馬の遠目に狂ふごとく
胸の熱情一つによりて
春の日ひねもす君を思ふ(「山雀」の冒頭)

第二詩集『ゆく春』(三十四年十月刊)に移ると、從來の八六調の一體は「望郷」「夏の自然」等の香りよき果情となり、七四の新調、或はそれらの交錯調にも、艶かな何ならぬ風情と突然とを匂はして來た。この種のものに「沙翁がうたへる歌」

華鬘に盛れる木苺に
香爐の煙の這ゆるに、
重く落ちて行くの
たださびを生めぬ（その前）

「一夕の歌―夕に岡に立ちて一夕となりぬ」「依蘭」等の作品がある。殊に「故郷の賦」「新公の賦」は優れてゐた。前者は藤村の「白磁花瓶の賦」の後を承け、後者は啄木あたりにその遺響を傳へた。集中の白眉は七五の「石彫獅子の賦」であらう。藤村の「鶏」と清白の「夏日孔雀の賦」との中継となるものであった。「南畝の人」では藤村に見るごとき農夫生活の平和と苦悶と悲哀とを歌はうとして單に小引で止み、英杜戦争に義憤を發したあゝ杜國の長詩篇は對社會的感覺に鋭き才人の一面をいち早く明かにして却ってその本性に非らざる理由で非難された。然し、後年の聰明なる新聞記者たり才機縦横の『茶話』の著者たるより推せばあながち怪しむべきでなかったかも知れぬ。だが、この傾向はその後彼の詩には一切姿を消した。なほ他の「一巖頭に立ちて」等については、あまりに取り澄ます詩人意識を衒耀なりと見られた事もあった。何れにしても泣菫の名の示すごとき時代にあってそぞろに詩魂を磨き、象牙の白塔に籠る情想人の思案は夏は日に立ったであらう。彼は類型に倣いて歌はず、想はず、天命の言を法と思ふものゝと歌ってゐる。

*

『二十五絃』（三十九年五月刊）には三種の傾向が交錯してゐる。

一つはゆく春の「夕の歌」と同じ系列のもので、「二月の一夜」「五月の一夜」「翡翠の賦」「霜月の一日」「霜月の一夕」「神無月の一夜」「神無月の一日」などである。その内容精神とするところは、「夕の歌」などのそれらより次第に進んで自然法術の禮讃となり、圓かな佛の慈悲光に和魂のいみじき悦びを揺らめかすやうになった。その巧みに融和された古語の薫りは、柔かでたゆげな調の吐息と相俟って、雅びやかな心のときめきを感じさせた。ここには青春の情熱が漸く衰へ初めた世の中年の詩人に来るべき沈静典雅なる宗教的情操の密醸が行はれつつあった。技巧の圓熟につれて徐々にその生彩は失はれつつもあったと見るがよからう。

二つにはかの藤村の「常盤樹の歌」とよき對照たる「公孫樹下に立ちて」（三十四年作）を機縁として開かれた「雷神の歌」より「金剛山の歌」「天馳使の歌」に至る三十六年代の長篇叙事詩の創成である。

ああ日は彼方伊太利の
七つの丘の古跡や、
圓き柱に照りはえて、
石床しろき回廊の
きざはしの隅に悄ぐらせる
青地襤褸の□を見ん、
月を經て來む降誕祭
市の榮華を夢みつつ
ほくそ笑する□や射む

を冒頭にする「公孫樹下に立ちて」を記憶する人々は如何にかの當時に愛誦吟唱したか、思ふて感懐の新たなるを覚えるものがあらう。「雷神の歌」は京都加茂神社の傳説に結び、「金剛山の歌」にはその山の高邁嚴肅なる暁色の大觀を讃仰し、「天馳使の歌」は、伊弉諾伊弉冊尊の黄泉つ比良坂の傳説と、橋立傳説と、比治山の羽衣の傳説とを結び合せて、永遠の女性の慈悲を歌った」と自ら言ってゐる雄大にして絢爛に入るたる一大篇たる。古語、新造語入り亂れて自在縦横なる彫技の渾成は前代未聞の事であり、一代の古典的詩人としての大をその風格としたものであった。秋はまさしく泣菫の時代となった。越えて三年、役の小角の女神結縛の傳説に

アイスヒュロスのプロメシュウス緊縛とを聯想綜合して成つた一篇[illegible]の構造と規模の壯とは恐らく叙事を散文にゆづつた今後に於ては少くとも詩として現れぬであらう。またこの種の徹したる古典と卓抜なる修辭とは容易に後を繼がしめないであらう。この詩人はこの「葛城の神」をその詩の最高峯に輝かして、自らは遂に詩筆を去つてしまつた。思ふに別種の長篇を試すには或は七五調以外に變化を求むべきであつたではなからうか。それとも時の象徴詩の影響にその行くところを迷つたか、倦じたかであらう。

また近世の[illegible]體を取り入れた「草にならば炎のくさに」の「戀ごころ」「さりやな、戀のたはむれ、よしやなの、戀のわた」「やれ、やれ、やれた、ゆくりなの花賣女」或は待心、海女、紅椿等を歌つた實際のことうた等である。この種のものは自然「白羊宮」(四十?年刊)の中にも見え、後の童謡[illegible](四十一年刊)にも影響を流した。それらは古典と口語の柔みある[illegible]つたものであつた。何れかただ現代には疎く、あまりに古典しすぎて、その内なる本當の生を[illegible]であつた。歌調はやはり時代は時代[illegible]

に亘るであらう。泣菫の象徴風の詩については、後に説くことがあらう。

蒲原有明

やさしきこころのうちに愛のひそむは森のみどり葉がくれに鳥のすむに似たりといふなるに、このはかなき草わかばのかげにはいまだ夢さそふにほひもなきがごとく、わが調に慣れぬ瞳のおもひは色をも彩をもたしあへぬをいかにせむ(處女詩集「草わかば」の自序)

このいみじき「草わかば」の語感はさながらこの詩人がら若くして求めた近代の感覺と思念とを暗示する。かの若菜や草笛の語に比較して見よ、ここにこそ新趣の五月は香り、官能の觸角が動く。

その初め、二十七八年の交、同人誌「落穂雙紙」に掲げたといふ時の一つ[illegible]は期らず、尾崎紅葉の庇護によつて初めてその[illegible]「讀賣新聞」(三十一年)懸賞[illegible]に寄せた。當時有明も年少にして亦古典のよさを知る徒の一人であつた。殊に學んだ英語を通して、[illegible]、ブラウニング、中にもロセッティの[illegible]、心理的な[illegible]は

その詩を耽讀した若者に影響するところが尠くなかつた。

「草わかば」の主調は主として蕪村より流れ來て草にせせらぐ七五の調べであつた。

手にふれたまふことなかれ
うれしき君とおもへども
まだうらわかき野の花は
熱き情の日にたへじ(「をとめごころ」の初聯)

然し乍ら、世にも夢見る浪漫的な人の熱想が彼には深く蔵められてあつた。彼を一概に情熱の詩人に非ずとする或る評者の言葉は誤つてゐる。彼の情熱はあまりに[illegible]ることを自らたしなめつつ、匂として蒸すものの心を心としたかのやうに思はれた。

かなたに消ゆる世のかけの
みだれはここにをまりに
青野花草日にとくる
白銀の音に似たりけり([illegible]の一節)

或は

わがなやみ君がよろこび
わが[illegible]は君が[illegible]の花
白[illegible]の[illegible]を君は
小男鹿の鈴子ぞわれに([illegible]の一節)

この[illegible]抒情詩の[illegible]はなみなみと思へぬ。

果然その後の象徴詩にその片々の韻紋が、色と響き光と匂つて、命の音のゆらぎとなり、月夜歎鳥を走る寂寥の音の林となつた。

卑賤の微なる卑賤の身の
かくもはてなき歎きにして
獨りあやふく眼ある
そのおもひこそ悲しけれ

といふ「牡蠣の殼」、

苦吟あやめもわかぬ時
靈光頭を射るごとく
闇よはじめ汝を見て
心竊かに驚きぬ

といふ「可怜小汀」に見る靈性の芽生、

菱の實とるは誰が子ぞや
くろかみ風にみだれたる　（原作の引歌）

その母郷九州の旅にては、「菱の實採るは誰が子ぞや」と眺め入つたが、

あやしむなかれわれはたゞ
なさけのかげを慕ふのみ
さながらわれは若樹の
枝に來て鳴く小鳥のみ

つつましくかく歌ひとどめた青春の好もしい氣品はまた心ある人の胸を影の匂の水陽炎の輻射光のやうに搏つて燃えた。

*

「獨絃哀歌」こそは草わかばの香氣より出で、更に細みの靈性の切々音であつた。それ行きと行きは離れ離く嗣聞の響のごとく聲を注ぎつつ、また燃き伏しつつ、怪しくも幽かな靈性の光と匂とを綴り合せた。

あだならまし
道なき低き林のながきかげに
君とまよひつ歌こそなほ響かめ、
歌ふは胸の火高く燃ゆるがため、
迷ふは世の途倦みて行くによるか。

星影夜天の宿にかゞやけども
時劫の激浪刻む柱見えず
ましてや靡へ起き伏す靈の野のみ、
沁み入るさびしさいかで人傳へむ。
（原作、其二聯まで）

ロセッティの示唆に孕まれたといふこの清新體のソネット型は泣菫の絶句と對照して、より撓りがありより響が刻み、より觸たく、又、よりつややかであつた。立ち罩むる靄の中の色めく陰影までが何かあえかな愛慕のよすがとなつた。

盡きせぬ「愛」の花草讃めたたへて
[illegible]につとめに[illegible]
と心の[illegible]を日毎に捧ぐる一なる[illegible]、
[illegible]はふらさ[illegible]に[illegible]、
をみこは[illegible]きわかれを[illegible]なげく、
あまりに[illegible]ききさき[illegible]に[illegible]たり[illegible]

と歎く「[illegible]のおもへる」

――[illegible]たき人よ、この時[illegible]しこを[illegible]
「[illegible]の[illegible]しほし[illegible]きて
[illegible]ふがごとく、君は[illegible]きぬ。

の[illegible]の中なる一の花の「[illegible]は過ぎぬ」、或は「[illegible]」の[illegible]に[illegible]る[illegible]の枝に無常を[illegible]した[illegible]流轉。

或る人々の間には泣菫にも優して、豐かに深い想念の密藏を讃へしめたその詩であつたが、ただ日夏耿之介も責めたごとく、後の「有明集」に於ける之等の、または他の詩章の句々の改作は却つて訝かしいものの多々と失望とを感ぜしめたやうであつた。初の感興の、生色ある語韻の、内律の、新魔力が、隨所に理念の過ぎたる老巧の、齒のなき口中音と衰化されて了つた。たとへば前掲の原作と比較して見よう。

つきせぬ慈悲のめぐみを讃めたたへて、
苦惱の畑のつとめに、なほも、行かむ。

題までが、苦惱の畑のつとめ、となつた。理栄

圓の語感にこそ近代味も新鮮性も吹く。
少女は無きなみだに、こゑも顫へ、
なりては泣きわかれを惜しみかこつ、
あまりに痛きささやき、霜のごとも。
「手と顫へ」であればこそ餘情もあり、「痛きささやき」とささやきが沁みる。前にこゑと言ひ後にささやきと承くる、却つて痛きひびきを減殺する。「ごと」もの語尾は似たりの語韻に如かない。

此の集にまた見落してならぬ特徴の一つがあつた。それは、「落葉林の冬の日に」や「靈鳥の歌」「佐太大神」等に見る複韻の成功であつた。之等の二篇は何れも光つた自琢品であつた。

落葉林の冬の日に

落葉林の冬の日に、
さいかし樹
さなりさいかし
その實は、梢いと高く、風にとわけり。
(その初聯、○印複韻)

靈鳥の歌

風の手あらば笛をとり、力をこめよ。
枝の節ならば弦を彈けかし。
ああ、とは問はで、
何處よりか來し、かの鳥、と。
(その四聯)

佐太大神

こころ愁ひあれば根佐加比比賣、
しじに涙垂れて、惑ひ、もとほり、
天なる神魂、うつ海の窟に
喚かへば、聲あり、——
「暗きかも、暗きかも、
ああ、暗きかも、この窟」(その四聯)

この集以後、「春鳥集」までの三年の間に有明の詩苑に於ける象徴の風韻は愈々深みと香炎とを帯びて、三十五六年時代の泣菫と雙璧の妙光を成した。さうして次の時期には日本象徴詩の先覺たり詩宗たる彼自身を輝かした。

6 新抒情詩壇の星座圖

近代星座の發見まで

新抒情詩時代の四大星が二星づつ相對して、輝き去り、輝き來つた間にも、稍傍流とも見らるべき環狀星雲や、水流の銀河をさへも淺宵月夜のごとく耀らした太白星や、重星、遊星、螢光星、或は白孔雀尾の彗星、燦爛たる諸星宿に成る詩壇の星座圖は、おのづから相集り、相牽引して、時と共に新星の湧出が現前されつつあつた。しかも未だ發見されざる近代星座の或らかな所は當父母所生の肉眼の遙かな彼方にあつた。

星學に言ふ。星座は大膽なる象徴の藝術であると。かの新抒情詩界の重なる星座と諸星の運行につき些か展望を樂しまう。

a 新進詩人の搖籃「文庫」

「文庫」派の一團

河井醉茗は「文庫」詩壇の師兄として、時には保姆役としてその一團の中心に在つた。「文庫」はその前身「少年文庫」(二十二年)その前身の「少年園」(十九年創刊)を遡上の幼稚な星雲として進化し來つたものであつた。横瀬夜雨出現以前のまだ深い曉靄と微光との中を運行しつつ、單純な少年の感傷と詩魂とにいち早く一點の燭光を點じたが、その燭光の運行はそれはあまりに幽かであつた。「文庫」としての光色が認識されたのは改題新刊した二十八年の八月以來のことである。「文庫」は常に青年として青年詩人の搖籃として確保守的な恋愛と永遠の詩の純愛とに觸つてゐた。かの新抒情詩統一の前期より、與謝野鐵幹の新詩社の「明星」全盛期、所謂星菫時代にもその後の象徴詩勃興期に交つても、「文庫」はやはり新進詩人の登龍門として光つてゐた。然し、稍その傍流の位置に在つた。

名流とも隔てなかつた。

「文庫」派は一方の新運動を開いて謳はれた詩派といふでもなかつた。ただおのづからにして時の選者たる醉茗の周圍に集つた同好の少青年達の尊敬景慕に外ならぬ。この「文庫」より出生した主なる詩文人を列記すれば、醉茗、横瀬夜雨、伊良子清白、小島烏水、瀧澤秋曉、千葉江東(鐵華)、塚原伏龍、久保田山百合、後の島木赤彦(久保田柿人)、五十嵐白蓮、鮫島大浪、山崎紫紅、小松原春子(沼田うつぼ)、水野葉舟、一色白浪(胡川)、清水橋村、やや遅れて小牧暮潮、溝口白羊が出で、更にその末期三十六七年の頃には澤村胡夷、北原白秋、原田ゆづる(譲二)、人見東明、長田秀雄(赤髪鬼)等の新進が興つた。有本芳水、三木露風、萩原朔太郎(美棹)等の名も詩歌の投書中に見えた。三十七年の交には三谷蘆華、吉田常夏、中村星湖、秋庭露花(俊彦)、安成二郎、川路柳虹の徒も參加した。この一派の殘餘は四十年二月、「文庫」の改造に際し、獨立して新に醉茗と共に詩草社を興しその雜誌『詩人』に據つた。

文庫調について

ここで所謂「**文度調**」の典型なるものについて輕蔑して全く顧みもせず、向の新體なるものには詩が定めたのでもない。醉茗を中にしておのづからさうなつたのである。詩としても古の詩風である。その詩作は、分析く整然として、傾き傳との淸新な自然の詠嘆といふよりは何かの思ひつきで轉換する技巧的傾向があり、漢詩の絶句のやうでもある。内容の香氣はやや低いを帶かした田園味が多く、時には感傷に墮ち、時とれば古臭で常凡となる。近代の熱情と感覺とからは疎く、ハイカラではない。是れを強ひて泰西に求むればウォーヅウォスの田園詩風にでも通ふものかと思はれる。然し當時の浮華な明星の淸新體に對し、悠々獨特の詩風を以て、世の質樸な青年の詩魂を生育し開發した點は業績の見るべきものがあつた。そのすぐれた正調は今日の日夏耿之介、西條八十等の意外のところにまで遺響を好愛され、傳承されてゐる。

河井醉茗

さて、河井醉茗は二十四年の夏既に美妙の「青年唱歌集」に「花散る里の弱法師」「鐘の音」の詩二篇を採錄されたといふ。その後『少年文學』の投書家たる機緣によつて後の「文庫」の詩の選者に呼ばれた。その處女詩集『無弦弓』の公刊は三十三年に及ぶことも僅かに兩年、尚お明治三十四年一月であつた。次いで「霧の海」以下詩集十三篇と共に小曲十六篇を收めてゐる。その詩風は溫雅にして平明、典雅にして自然、清朗にして爽涼である。

　世のかなしき子なれども
　さすが產毛を撫でし時、
　あまりに胸の清ければ
　親といふにも憚りし。（「こぞやうし」の第三節）

失つた吾が子を悼むにこの純性、このうぶな純情、その人その詩であらう。彼は大正末刊行の「醉茗詩集」に序して「自然は私の觀る神祕であつた。自然に有つてゐる奇蹟と、驚異と、神祕とを見て無條件に享受しようとした。山岳の如き嚴肅、平和の如き柔和、大海の如き自由、青日の如き寬容、河川の如き流動、それらを巨細に體驗して我が情感に盛らうと思つた。」と言つてゐる。然しながら此の詩人には眞に自然の神に參入するほどの精緻な直覺的觀照、一念の凝視、主觀の白熱、それらに徹し盡さぬ何かの弛緩があるのでないか。この點より見れば清白の冷嚴、夜雨の人間意力と熱流とが正しく是れに近い。唯、「私は單純に自己の體驗を自然化しようとさへ試みた。」といふ言葉はその

僞人に最もふさはしい樹の呼吸であるやうに感じられる。淡々として常に若く、昂らず、矜らず、自由に時世と移ってゆく聰明と無停滯とが人をして飽かしめない所以であらう。

＊

[illegible]ただす[illegible]匠が
字の上につくられて
朝狹霧の晴れゆけば
寶珠を天に捧げ持ち
里に聳ゆる五重塔（「[illegible]の[illegible]」）

この日本的閑靜とよき均整とは恐らく醉茗詩の典型を成すものであらう。その第二集「塔影」（三十八年刊）には、この他「落葉を焚く歌」「行く春」「海邊に立ちて」（文庫「靈芝」）等の作がある。その後の詩集としては、「[illegible]影」（三十八年）「玉蟲」（三十九年）「霧」（四十三年）がある。以來口語詩の勃興につれてその詩風が一變した。その詩「[illegible]」（全集參照）は[illegible]としては過渡的の作品である。

横瀨夜雨

世に筑波根詩人として知られた横瀨夜雨はその詩哀婉、痛切、纏綿惻々として人に迫るものがある。「[illegible]作[illegible]も佛も」（『文庫』第一卷）[illegible]は[illegible]に[illegible]若[illegible]擁[illegible]するところとなり[illegible]と慘苦の吟情と野趣ある田園哀歌を絕たなかった。年少、不治の病身であり、ただ眼前咫尺の自然を坐して樂しむ外に何の興趣も見出し得なかった彼が、專ら詩に生き詩友の純愛に生きようとしたことはあまりに凄涼な日常であったらう。彼の友鳥水の所謂單情粗心、或は稚童に似たる感情を洩らすことなしとしなかったが、恐らく文庫派中彼が詩のごとく眞率なる人間苦を生血を以て詩に織りなした者は一人もなかったと言っていい。

夜雨は獨學であり、たまたま醉茗、清白等の交友を得て、日夕、四方鬱悶の氣を詩に晴らすのみであった故、その詩風は必ずしも暢達流麗とは言へなかった。古調であり、野の聲であり、土俗的でもあった。何も彼もが筑波を對照として[illegible]ふすべなき香炎の美に詩魂を惱ますのみであった。それにしても陰濕の中に情癡があり、幽暗の裡に艷色の紅を宿した彼の詩品は時に却って簡朴を離して彫琢の煩はしい傾きもあった。然し夜雨としての獨自の個性は嚴として彼以外に無いのである。

その處女詩集「夕月」は三十二年末の刊である。中にも珍らしく繁茂なのは「雉子よ」である。

[illegible]こそ[illegible]べれ[illegible]日さす
みなみの岡に巢守りして
稀には空に獵らてど
ただすに草にかへる鳥
雉子よ

ゆふべは山のみほとより
光眞青なる天國の
大野に行けとすかせども
地の草をのみ戀ふる鳥
雉子よ

きつれ色せるつゆはらの
中に巢をくむ鳥なれば
しけみに莊嚴の尾を曳きて
あづまの野には出入るか
雉子よ

ただ俚謠風を加味した、おすゞ（[illegible]）は最初文庫（第九卷第六號）に揭げられ、「夕月」に入れる際に改刪し、その後更に訂正洗練した。この作は日本近代民謠史の初期の傑作となるものである。

第二集「花守」（三十八年）第三集「二十八宿」（四十年）何れも夜雨の詩風を代表するものであるが、作品としては前者に「夕の光」「[illegible]宮」（[illegible]）「人[illegible]故妻を逐はれて」（上同）伊[illegible]「それたいこ」（上同）

「富士を仰ぐ（三）」—「無弦弓」後者に「雲に山ありき（三）」雪燈籠（四）夕雲「君が[illegible]けり」がある。

騰波の淡海も赤彼の空想を縦にせしめた寶湖であつた。

筑波も暮れぬ野も暮れぬ
唄も暮れぬる藻刈船、
携へる棹を操りて
行くべき方も暮れにけり（「沼にて」の第二節）

伊良子清白

清白はこの派の中での高材である。才藻も豊かに規模も大きく見えた。横瀬利根丸（夜雨）より先に輝造の名を以て「少年文庫」に現れ、後すずしろのやの雅號を以て「文庫」に投じ、四十年に至る發表數凡そ百五十篇、その名ある長篇詩に「海の聲」「山の聲」「南の家北の家」がある。其著『孔雀船』には是等の一節、或は終篇のみを收めて「海の聲」或は「華燭賦」とした。他の長篇に同派の詩華集「詩美幽韻」に採錄した「巖間の白百合」がある。中に「大蟹小蟹」の童謠がある。この一篇も童謠史の文獻として貴重なるものの一つである。抜いて見よう。

大蟹小蟹、谷の小川におりてきて
甲はぬかれず、ぬかれにならず、
横に這うたお器量でござる
なして下され、すぐな道、
どうせうぞいな、
泡もふかれず、めもたてられず
瀧は千丈、船は盥
岸の椰子の木ねいろとすれば
波が洗うてゆりおこすゆりおこす
おこすのがとんと面白う御座る
椰子おやなし
口に善悪ない大蟹小蟹、
發矢とあたる
椰子の實で
大事な甲をわつたけな
われたと思うたらぬけたげた
大きな甲は石になれ
小さな甲は貝になれ

是等の全創作より「漂泊」以下僅かに通計十九篇を嚴選して、梓に上したのが、その唯に一冊の詩集『**孔雀船**』（三十九年五月）であつて、既に當代の稀覯書として、店頭に見ること甚だ尠い。

まことに『孔雀船』は明治の名詩集の一つであらう。その「夏日孔雀賦」「安乘の稚子」は藤村泣菫のこの種の物に劣らず、「月光日光」、「[illegible]」「行雲の田[illegible]」（或、[illegible]）は共に[illegible]と[illegible]の詩人[illegible]に[illegible]、[illegible]の[illegible]、[illegible]山間[illegible]自他、[illegible]に[illegible]。若しくは漂泊の一篇に於ては[illegible]の原義をはなれて自ら[illegible]たる[illegible]に[illegible]ふるところあらむとしたかに見えた。

清白はその後詩壇を[illegible]して、久しく志摩の漁村に在る、彼の詩の良きものは[illegible]にして叢[illegible]、[illegible]いやしくも[illegible]、[illegible]苦心の跡歴然たるものがあり、虚[illegible]にして[illegible]に冷[illegible]してゐる。

二つの詞華集

文庫派の詞華集として些か見るべきは中でも二つの詞華集「詩美幽韻」（十[illegible]）「青海波」（三十八）であらう。前集にはすずしろのやの長篇「巖間の白百合」を卷頭にし、夜雨、醉茗等十五名の作を蒐め、後集には時の新進北原白秋の長篇「全都覺醒賦」を開卷に新舊五十八名の詩を收めおのづから「文庫」詩苑の鳥瞰圖を成すものであつた。

『文庫』末期の新進

『青海波』の前半に名を連ぬるその「文庫」末期

の新道の中にあつて、當時の高踏作を代表した者に北原白秋があり、系統を保持した者に澤村胡夷があつた。白秋は三十七年、短歌の投稿より詩に轉じて、一春湯朝詩その他を試み、その四月の上京前、長篇「林下の默想」を寄せて稍自信を得、翌年一月より四月に亙り同じく長篇「全都覺醒賦」「海徐夢路」「繪草紙店」等を矢繼早に發表した。韻文界の鏡花現れたり等の同記者の誇張的讚辭と共に、その第一歩の進出は些か華やかではあつたが、詩そのものは他の評家の所謂美辭麗句の羅列に過ぎなかつた。その處女詩集「邪宗門」に是等の一も採らなかつた所以は自ら深く嫌厭したのである。之に反して胡夷の作は、「壇の浦」（[illegible]）を初めその作るところの詩、見識とまり、その神格端正にして既に一家の風格があつた。白秋はただ詩技について、その將來の或種を兆知せしめたといふだけで、間も無く、文庫を去つて了つた。

當時の新人でその文名を成した人に長田秀雄、人見東明、原田みづる、服部嘉香、遅れて川路柳虹等があり、中町の人に富田みつほ、水野葉舟、一色白浪、前川、清水橘村、小林愛雄、溝口白羊等があつた。

なほ「ここは御國を何百里」といふ軍歌「戰友」の作者眞下飛泉もこの一群の中の人であつた。

ト　星と菫の「明星」派

與謝野鐵幹

詩壇年表に曰く、「明治三十三年、與謝野鐵幹、新詩社を起し、雜誌『明星』を創刊す。」

初めはあのささやかな新聞體の『明星』が明治の三十年代を通じて、日本短歌の未曾有の革命を遂げ、新抒情詩時代の機運に聰くも乘じて早くも詩歌壇の一大勢力を張り、星菫派の王國として四方に君臨するやうにならうとは誰しも思ひ及ばぬことであつたらう。

この新詩社興隆の前年明治新體詩草創の三元老の中矢田部良吉は四十九で溺死し、この年同じく外山正一が五十三で白玉樓中の人となつた。大西操山も逝き、翌年『世界國盡し』の福澤諭吉も腦溢血に罹つて死んだ。越えて三十五年その好敵手正岡子規が逝き、師の落合直文が逝き、高山樗牛が逝つた。さうして二年前の三十一年に『文學界』が廢刊し、『國民之友』が廢刊した。

當時、藤村漸く老い、泣菫の擡頭と共に大阪より『よしあし草』『小天地』が發行され、東西相呼應するの秋が來たのである。

天下はまさしく鐵幹に歸した。殊に一世の山獨、晶子の出現は『明星』を銀河系の光耀燦爛たる星座圖たらしめ、近代の芬香馥郁たる新歌苑林風景たらしめた。

詩と戀愛の時代、星と菫の浪漫精神がさながら熱風のごとく、猩紅熱のごとく、季節の空想と情熱とを吹きまくつた。世界の『青春』が亦彼等を祝福した。

ありとある架空の戀愛は天上の星斗を以て照明され、机上の悲哀は薔薇の雨華を以て裝飾された。さうして鐵幹の虎と劍とにもいつしか脂粉の香が漂つて來た。

この時に當つて天下の俊秀才媛は翕然として新詩社に集まり、清怨瀟洒の新風はまた興つて短歌革命の先驅に交響し、讚嘆として開展してゆく『明星』の新容は雜誌界にも詩歌界にも驚目の光彩を輝かした。

以來鷗外、敏、孤雁來り援け、泣菫、有明稿を寄せ、呼應して共に來る同人その他には栗島狹衣、谷活東、山本露葉、小林天眠、高須梅溪、山川登美子、增田雅子、川上櫻翠、前田林外、水野葉舟、高村碎雨光太郎、相馬御風、平出露花その他があつた。

全く時を得たのである。

明治の新詩は誰が興したか、之に答へて他だと言ひ得る者は鐵幹の外に一人もあるまいとは鷗外の推獎であるが、之は正に否めないであらう。鐵幹の一人だけの業績はこの明治の短歌革新にある。志氣、新味、自然、[illegible]して[illegible]て近代の絢爛たる浪漫精神を探索し、生々[illegible]たる躍進をも爲し得たのである。之に比して大正歌壇の先人として業績以上に過信され偶像化された俳人子規のごときは寧ろ短歌界に於ては勢力微弱であり嫉妬焦燥の埒内にあつた。何をして「鐵幹是なれば子規非なり子規非なれば鐵幹是なり。」と叫ばしめたか。容易に這個の情勢は觀取されるであらう。思ふに實質問題以上に影響の社會性と濃度とを檢索し、新運動の精神、業績につき深く廣く考慮すべきは史家の良心に外ならない。大正歌壇人の偏執と誤識と私心の多くは顰蹙されてよい。

鐵幹を中心にする『明星』の業績は主として短歌に繫つたが詩に於ても新抒情詩時代の後期より象徵詩の勃興期にかけて、常に最高の權威たり、詩の統一的王國を成した新人風景は實に空前の盛觀であつた。

この間に當年の鐵幹も氣を負ふことに於ては後日までも片鱗に光らしたが、その詩風は周圍の情勢と共に、詩材にも詩作にも實感に轉化しつつあつた。

「鐵幹子」

然し乍ら、「鐵幹子」（三十四年三月刊）に收錄された詩歌の大作當時は、鐵幹もまた天地玄黄の情勢を持續した。

「天才よ狂熱と
寶藥の名には聞き飽きた
ここも先生藥籠の底に
丸くひかるは那個の藥」
これかこれか
譯して實はうぬぼれの
えいと原語は忘れてそろ（今様詩人）

或は

劍銘

佛きたらんか佛を斬らん
祖師きたらんか祖師を斬らん
わが手わが心二なし
敵はよくのがれんや

朱鞘七尺
ぬけば露たる
銘は誰れぞ
備前[illegible]
未だ[illegible]に[illegible]
ひッさげて[illegible]
かの[illegible]
たんぞ爾く多辯たる

この劍銘の稚氣も「人を戀ふる歌」になると殺伐たる單の壯士風の疎狂も餘裕哀情に緩和されて來たのが見える。この詩はその時代色を帶つて、感激し易い青年の心胸を捉つた。

妻をめとらば才たけて
顏うるはしくなさけある
友をえらばば書を讀んで
六分の俠氣四分の熱（その冒頭）

その後、彼の覇氣はなかなか去らなかつた。寧ろ性格に因するであらう。「日本を去るの歌」が一例である。覇氣の弱つた時はまた變態として白眼の冷嘲で現れた。短歌にも「鴉の雨」その他の中にも散見する。

敍事詩試作

家門は平氏、地は平安、
時は平治ぞ、天に謝せ

この「源九郎義經」の冒頭に落筆したのは鐵幹

定まつた。かくして新詩社同人の連作長篇敍事詩の試みが三十六年の一月より『明星』を飾つた。その後は『日星の幻境』がこれを承け、三に棒術の『初陣』が續いた。而して交々に連唱したのは、鐵幹と清水晶子の『鳴鐘』が最後に他を壓した。

次の『日本武尊』の連作の合同作者山崎紫紅、平野弔影、萬里、前田翠溪、大井蒼梧、晶子、相馬御風、川上櫻翠、茅野蕭々、鐵幹等であつた。

この敍事詩の提唱は詩壇に影響することが多大であつた。尚ほ後の機會に再説しよう。

鐵幹、晶子の作は合著『毒草』（三十七年五月）に之等を收めた。『[illegible]集』『紫』とこの『毒草』によつて世評は毀譽と褒貶した。晶子は日露戰役當時人間愛の立場から『君死にたまふことなかれ』の詩を軍國主義者たちに投げつけた。

泡鳴、林外、白星については『白百合』の項に述べる。

後期明星派の新人

前期明星の浪漫精神は前文の系統より出でて、新詩人の雲集、明星の新作を凌ぎ、佐佐木信綱の新派、子規の寫生派を壓して、一時天下を風靡し、新派和歌即新詩社の短歌時代を現出し、晶子の名聲は紫女清女よりも高く、この派の隆盛、「新詩社の歌人ならずば歌人にあらず。」とさへ矜持させた。開花期は窪田空穗、水野葉舟、相馬御風の脱退後も高村光太郎、吉井勇、玉野花子、平野萬里、茅野蕭々の新進一夜百首歌の競詠に鎬を削り、後には鷗外之に應じ、北原白秋また詩作の餘に象徵詩風の新短歌を制作し、クロ、ホルム、苦味丁幾、電信等近代の新感覺をも之に移さんとした。

ただ詩に於ては、十三年、泡鳴、林外、御風等の退社後は眤近なる社外の詩家、敏、泣菫、有明、鷗外等の來援を俟つて、輻射的にその光輝を自己に聚め、中央集權の榮譽を獨占したが、三十七八年の交には社内より啄木出で、萬里、蕭々出で、白秋出で、木下杢太郎、長田秀雄出でて、華々しき浪漫精神を高揚し、新抒情詩より象徵詩の新運動に參與したが、三十九年白秋、杢太郎、秀雄の連袂退社以來、散文界の自然主義勃興の機運にまた煽られて遂に四十一年の五月にその百號に至つて廢刊することになつた。

その後に來つたものが『スバル』であつた。

その後期の詩壇については次章に再説する。

石川啄木

啄木は極めて早熟の詩人であつた。二十歳すでに一卷の詩集『あこがれ』（三十八年五月）を公刊して世を驚かした。年少もとより詩魂定まらず、その作るところの多くは先進泣菫、有明の模倣であつた。あまりに巧みな模倣、若しこの兩者の詩を讀むことなくして初めて啄木の詩に接したならば誰しもその流麗自在なる天稟の才筆に感嘆するであらう。それほど彼は器用なる將來ある技巧の持主であつた。後年の悲しき玩具に於けるかの意識して破壞し、また放擲した一見蕪雜な短歌の作者とは殆んど別人の觀があるを以て、彼の短歌のみを知る人は多くは彼の本質に思を致さぬのである。彼は本來の技巧家であつた。かの三行歌の新風も破壞的も實は技巧家としての彼の悲しき玩具遊びであつたのである。あれは彼の技巧である。彼を單に一微の眞率者、社會革命者、無技巧の詩人とのみ信ずる人には此言は或は意外ときこえるであらう。然し乍ら彼は、新短歌の如何に明星派であり、大部分は所謂生活派ではなく、才人の氣であり、白秋の官能派の域にも近かつたかは、雜誌『明星』なり『スバル』なりを繙し、歌集を精細に見れば了解されるであらう。ただ詩に於

ず、[illegible]た年少[illegible]文學にかつて[illegible]し[illegible]に、[illegible]星』誌上に[illegible]た[illegible]を見て[illegible]に心裕の[illegible]といふことを知れ[illegible]の詩技の[illegible]とい[illegible]躍進とが、ほぼ推察できることと思ふ。[illegible]外は彼の素質に或は[illegible]、有明以上の將來を賭けた。然し彼は詩に[illegible]は遂に酉直に留まり、一家の風格を樹つるに至らずして亡んだ。若し彼が早世しなかつたならば、短歌も眞の潮成に進み、詩に於ても或は元に還り更に獨自の境地にまで鍛錬しぬいたかも知れぬ。さうしてかの革命的社會歌人の今日の盛名などは皮肉にも彼の頭上に冠せられずじまひになつたかも知れぬ。寧ろ背反者としてプロレタリア歌人の陣から或は石を投じられたであらう。白秋が『桐の花』の小完成歌調を自己革命の一端として根柢から破壞した歌集『雲母集』の當時に若し卒然として死に往つたならば或は異端、無法者、或は技巧拙劣者として、また革命者として或は啄木のごとき名を遺したかそれも知れない。興味ある問題である。それほど啄木は稀な詩技の要處を自得してゐた。ただ眞の底光りの技巧にまでは沈潜しずに表面のみを流れた。年少止むを得なかつたであらう。

○[illegible]合の十[illegible]人

『白百合』同人

『白百合』は明星を脱退したる岩野泡鳴、前田林外、相馬御風の合同發行の雜誌である。三十六年十一月創刊した。三十八年六月に同志の一人泡鳴が脱退し、この雜誌は四十一年二月に遂に廢刊した。事業の重なるものは寧ろ民謠の蒐集にあつた。之等の民謠はその後林外編として出版せられた。『日本民謠全集』(四十年三月)『日本民謠全集續編』(四十年十一月)二卷である。

岩野泡鳴

泡鳴は特殊人である。縱橫無盡にその行爲に、自己主張の眞率と逆行とに寧ろ滑稽を感ぜしめた。その評論や詩作に於て彼がごとく個性を暴露したものはあるまい。彼は後に自然主義を一の自我主義として、自己の非道德、排感情的態度の代辯となし、自然主義的表象主義的詩を作つたり、又「神秘的半獸主義」を提唱し、靈元一元論、感情自然論に走したが、その作るところの詩は、彼が一々に自己推奬をし、口角泡を飛ばして揚言するほどの價値は無かつた。

[illegible]眞の活[illegible]は『白百合』脱退後にある。十[illegible]代の彼の詩集に『露じも』(三十四年七月)『夕潮』(三十七年十月)『悲戀悲歌』(三十八年六月)『海堡技師』(三十八年十月)『泡鳴詩集』(三十九年十一月)がある。

彼の書いた『新體詩史』では彼泡鳴はまさしく驢馬に跨つた偉大なドン・キホーテである。

前田林外

林外は星菫派の一人として新詩社の浪漫運動に參加し、常に極彩色の詩閣を築構した。後に『白百合』に移つても同じく豐麗な架空と美の謎語と、夢の熱鬧と、鬱々たる悩氣、幻感とに滿ちた諸作を發表した。果して彼に眞の眞紅の六感の觸角があつたか疑はれる。新感覺の鮮かさもである。言葉のみの熱帶地に[illegible]無き極樂鳥を飼つたのは彼である。(冷汗)然しまた驕慢に過ぎたとは言つても彼がごとき光と香りと熱とを厭はしいほど他に飽滿を強ひた詩はそれまでに無かつたと言つてよい。中にも『夏花少女』は尤なるものである。

彼の詩集に『夏花少女』(三十八年三月)『花妻』(三十九年六月)、曩に言つた民謠集の一、二卷がある。

相馬御風

彼は主として短歌と評論とを書いてゐたからである。詩にさしたる作は無かつた。四十一年に『御風詩集』を出した。

d その他の諸星

高安月郊

月郊は『文學界』にも寄書し、教養あり氣品ある、閑雅清寧の詩人である。殊に抒情詩を書き、敍事詩「胡蝶軍」を書き、樂劇「後の羽衣」を物し、戲曲「嵯峨野の露」を公にし、重盛、道灌、文覺の三連關詩、公曉、幸村、中齋等の悲壯な史詩を綴じた。集に『夜濤集』(三十三年十一月)『春雪集』(三十六年)『ねざめぐさ』(三十九年)がある。一閑人ではあり、泣菫とも友とし善かつたが、惜しくは顯れなかつた。世とともに押し移るにはあまりに潔しかつた人のやうである。韻律精進の心と力とが作はなかつたか、日常に低徊して過ぎたかであらう。

大鵬の賦は成りにけり
相州の花咲きにけり
牡丹の中に太眞の
ゑみより動く春の風

池泉亭に露散りて
赤き氷は池に傾け
光とどむる明星の
一ひら折る一枚に消さめぬ

この「青邁」の初節はいかにもめでたいものである。ただ、後に至つて破綻が來る。持久力が弱いか、天稟か、性癖によるか。「落瓦の賦」(「文服」)にもこの弊が見える。なほ、「一花童娘」のやうな近世歌謠風の作もある。

平木白星

白星の詩は背廣の壯士を思はせる。覇氣横溢、衒氣に騒ぎ、詩魂は乾燥して調律粗硬、「日本國歌」を歌ひ、「亞細亞」を、「西伯利亞」を歌ひ、「全地球をのべて」慨慨し、一望北の歌に日露親和を唱へ、「塵生の詩」に天職を嘔つて、而も語に香氣無く、句に潤ひ無く、頗る索然たるものである。寧ろ却つて「織おり唄」(「文服」)の野調に如上の詩篇に求められない本質的のものが認められる。或は彼は彼自身の眞の稟性について誤認してゐた。彼には夙く「アメリカ彦造」の詩があり、後には『心中お小夜新三』(三十五年、「片袖第三集」)『日本國歌』(三十六年)『七つ星』(三十七年)『耶蘇の戀』(三十八年)『釋迦』(敍事詩 三十九年)『平和』劇詩(四十五年)の著がある。

兒玉花外

花外は『社會主義詩集』を出して發賣禁止をされた日本最初の詩人である。理由は治安妨害、三十六年のことである。彼は三十年に初めて林外等と『獨立雜誌』に詩を發表した。以來風のごとく突として鳴り、火のごとく燃えた。彼の詩風は鐵幹の劍氣にもあらず白星の覇氣とも違ふ。粗笨であり、雜であり、時に市井の俗、浪花節にもまがふ。が、よき眞率と稚氣がある。邪念が少い。その熱狂の語聲と酒興の豪語調とは人をしてそぞろに微笑せしめる。そこに彼の本來の詩人としてのよい稟性があるのでないか。

『花外詩集』は三十七年二月の版である。後『天風魔帆』を出した、四十年一月。

窪田うつぼ

『まひる野』(三十八年九月刊)のうつぼの詩はその歌と共に當時の優れたるものの一つであつた。其調は五七の音であつて、時流とは離れて静かに思ひ入るやうな、考へぶかく、實に即して、よい寫生をした。

青一色、稲田のうへに
ひるがへる白きものあり
夏の日を避けかねて
陽炎と化す[illegible]、
[illegible]たる[illegible]ともまがひて
一つところ去らぬを見れば、
こや春の、花さく朝に
生れにしやさし蝶たる。

見に過ぎつ、二時ありて
前のところ歸りも來れば
なほ居るよ、同じき蝶の
えも去らず[illegible]りつつ
日に燃ゆる紅き翅を
われはふと怖いだきぬ。（「夏の蝶」）

その他の詩に「順禮」「枇杷」「うたかひ」「いけにへ」等の作品がある。

尾上柴舟

柴舟には詩集『ハイネの詩』がある。この詩集は、異國情緒の清新な内容を優婉な日本の七五調に移し和らげたものである。寧ろかの熱き戀慕を雅びに過ぎるくらゐ時として弱めてはゐるが、句々流麗で可憐である。當時の青年子女の愛誦詩集にもなつた。

人の夜[illegible]
さき殘りたる花もなし
心ともなくわが居れば
愛のおもひにまたたりぬ

いつその花ぞわがむねに
堪へぬ思をおこさする
なくね絶えてぬ[illegible]は
そは白百合と告げぬべし（「春の夜風」）

小山内薫

彼には詩集『小野のわかれ』（三十八年）散文詩集『夢見草』（三十九年）がある。『小野のわかれ』の詩には後年の彼に見出しえない青年の清新なる情操がある。當時ひそかにその詩を誦した知識者のサークルがあつた。

野口米次郎

ヨネ・ノグチは寧ろホーキン・ミラアの愛弟子として、獨立するやその未知の東洋味ある故を以て英米にその名を發見された。早くより本國の騷壇にも詩を寄せたことがあつた。その最初の詩集『Seen and Unseen』は三十年八月の刊行である。[illegible]

[illegible]

三十九年六月、[illegible]

[illegible]る。[illegible]日本の詩人に[illegible]、有明、[illegible]、[illegible]、[illegible]、白星、[illegible]

[illegible]

[illegible]は三十九年十二月、『[illegible]』が出た。敏、薫、泡鳴、月郊、[illegible]、ハンスマン等の詩を收めた。[illegible]し、大正四年に至つて、別に[illegible]陀羅』を出した。有明、露風、白秋、[illegible]譯者、[illegible]

7　象徴詩勃興と口語詩運動

此期の概觀

新抒情詩時代の後期に[illegible]初頭である。時恰も日露[illegible]に當り、[illegible]上にも高潮した國民感情の激さは遂に[illegible]上にも及んで、[illegible]流一時に興り、香芬相薫じ、百花相競ふの壯觀を現出した。例へば三十

八年のごときを詩史年表を修するも左記の重要詩集が頻出した。

泣菫の『二十五絃』、上田敏の『海潮音』、有明の『春鳥集』、啄木の『あこがれ』、林外の『夏花少女』、[illegible]の『[illegible]影』、白星の『耶蘇の戀』、泡鳴の『[illegible]學技師』、夜雨の『花守』、薫園の『小野のわかれ』、うつぼの『まひる野』、太田みつほのや、山百合合著の『山上湖上』、ヨネ・ノグチの『夏雲』、露伴の『心のあと』『出廬』、逍遙の『新曲かぐや姫』その他。

詞華集としては新詩社女流の『戀ごろも』、文庫派詩人の『青海波』その他

更に前年に溯ると、藤村詩集、鉄幹、晶子の『毒草』、泡鳴の『夕潮』、白星の『七つ星』、『花外詩集』、逍遙の『新曲浦島』その他があり、翌年には泣菫の『白羊宮』、清白の『孔雀船』、晩翠の『東海遊子吟』、林外の『[illegible]』、白星の『[illegible]』、[illegible]の『[illegible]旗手』がある

以來、新抒情詩作の延長、象徴詩の移植に加へて、自然主義の來襲、オスカア・ワイルドの藝術至上主義の流行、口語自由詩の運動、官能感覺の興味、[illegible]趣味の流行、新東京風物と江戸情緒との交歡、[illegible]の頽廢、「パンの會」の結成、[illegible]の研究、[illegible]等々入り亂れて、詩壇にはまさに[illegible]期が來た。

從つて詩壇は沸騰し、各派の詩社相結束し、雜誌の創刊亦相繼いだ。

かくして明治末四十五年に至る、夜雨の『二十八宿』、林外の『うた日記』、[illegible]の『[illegible]畔の悲歌』、雨情の『朝花夜花』(以上四十年)、『有明集』、泡鳴の『闇の盃盤』等が現れ、遂に白秋の『邪宗門』、露風の『廢園』が進出した。更にまたその翌年、白秋は抒情小曲集『思ひ出』を、露風は『寂しき曙』を再び世に問うて、局面一轉、明治は大正と改元したのである。

白秋、露風その他新進の擡頭は明治末にあつた。然し作ら寧ろ大正詩壇の先驅を成すものと見られてゐる。ここに日本詩壇第三のエポックは劃されたのである。

ロ　象徴詩の勃興と影響

【海潮音】

上田敏の『海潮音』は三十八年十月の刊行である。主に佛蘭西象徴派の新詩が邦語の名譯として傳へられた。尤もその譯業は一の詩集として纏められる數年前より、『明星』その他に發表せられた。故に、日本詩壇への影響はその[illegible]以前より[illegible]かだつたと言はねばならぬ。有明の『春鳥集』中の象徴詩創作の時期も同期である。

柳村敏は大學卒業以來餘香深く雅致高き流麗の文章を以て、[illegible]に泰西の藝文を論じ、新聲を傳へ、紹介之を努めて倦まなかつた。このら若くして沈默した詩魂めでたき學匠の存在は新日本の藝壇の爲めにどれだけの潤澤と光芒とを與へたか知れぬ。かのダンテ・アリギエリの神曲、サッフォの斷章、ロセッティの詩篇といはず、早くもボオドレエル・ヹルレエヌの縹緲たる絶唱を見出し、[illegible]詩派はマアテルリンク、ロオデンバッハ、ヹルハアレンの[illegible]出を讃へ、[illegible]のあこがれには[illegible]・[illegible]人の憐みを嗅ぎ、[illegible]の象徴詩原義を探つては之を東方に移し植ゑた功績は彼の數ある著書の中ただ一巻の『[illegible]』をのみ繙讀しても了解できるであらう。

『海潮音』の名譯であることは衆口の一致するところである。彼の彫心鏤骨の譯述は寧ろ創作の苦業であつた。殊に異邦詩文の美を和語の雅醇に移し、[illegible]を韻律と色彩の薫りを紙上に燻きこめた作業は前代には見ず、大正昭和を通じても後を繼ぐものは現れぬ。近代詩壇の[illegible]はまさしくこの人である。

「一卷中收むる所の詩五十七篇、作者二十九人、伊太利亞に三人、英吉利に四人、獨逸に七人、プロヴァンスに一人、而して佛蘭西には十四人の多きに達し、詩の高踏派と今の象徴派とに屬する者其大部を占む」とある。高踏派のその當時の影響は時の大家をはじめ、新進の詩人の間に[illegible]ましい[illegible]と[illegible]とを[illegible]つた。

＊

「詩に象徴を用ゐること、必ずしも近代の創意には非らず、これ或は山嶽と共に舊るきものならむ。然れども之を作詩の中心とし本義として故らに標榜する所あるは、蓋し二十年來の佛蘭西新詩を以て嚆矢とす。近代の佛詩は高踏派の名篇に於て發展の極に達し、彫心鏤骨の技巧實に燦爛の美を恣にす。今茲に一轉機を生ぜずんばあらざるなり。マラルメ、ヴェルレェヌの名家之に觀る所ありて、清新の機運を促成し、終に象徴を唱へ、自由詩形を說けり。譯者は今の日本詩壇に對て、專ら之に則れと云ふ者にあらず、素性の然らしむる所か、譯者の同情は寧ろ高踏派の上に在り、はたまたダンヌンチオ、オオバネルの詩に注けり。然れども又徒らに晦澁と奇怪と[illegible]象徴派を攻むる者に同ぜず。[illegible]、今、[illegible]に[illegible]にあらずや。[illegible]たる者[illegible]るもあり、[illegible]蹊路を[illegible]きたる[illegible]野に[illegible]て、之に[illegible]折を[illegible]むる明徴の往を[illegible]む者は[illegible]ざるは惜なり」

「日本詩壇に於ける象徴派の[illegible]、日なほ淺く、作未だ多からざるに當つて、既に早く詩壇の一隅に[illegible]々の声を[illegible]者あり。象徴派の詩人を目して徒らに神經の鋭きに傲る者なりと非議する評家よ。[illegible]の[illegible]こそ寧ろ過渡の微候を言したらずや。[illegible]だ新聲の聲を味ひ功を收めざるに先ちて、早く其[illegible]に戰慄するものは誰ぞ。」

この序言には因由するところがあつた。既に彼が移植した佛蘭西象徴詩風の一事に對して、當時には之に[illegible]する沒理解の異論が生じ、甲論乙駁の喧騷[illegible]が醸されてゐたのである。

＊

即ち片山孤村の獨逸象徴詩を紹介した「神經質の文學」、之に對する伊吹[illegible]人浩々歌客の漢詩六義の比興こそ象徴詩なりとの東洋藝術の眞精神論、長谷川天溪の表象主義の文學、中島孤島のトルストイ、ノルダウ說を借りて象徴[illegible]

[illegible]

＊

[illegible]

「各或は見を異にすべく、要は只其[illegible]心状を喚起するに在りとす。例へば[illegible]を[illegible]するに當て讀者は種々の[illegible]むべき自由を有す。此詩を讀で人生に[illegible]して解するか、日く、凡俗の大衆は[illegible]し、法利賽の徒に虛僞の生を營みて、[illegible]識の沼に[illegible]うつ、名を賤め、はた[illegible]代を無らむとすなり。唯、縹緲たる理想の白[illegible]は[illegible]風[illegible]に羽[illegible]きて、久方の天を[illegible]い、[illegible]は落ちて、骨[illegible]の白[illegible]にも[illegible]ふ[illegible]面に映りぬ。之を[illegible]むとして[illegible]ず。[illegible]世のものならざればなりと。されどこれ只一の解釋たるに過ぎず、或は意を[illegible]くし

て詩に一身の運を寄するも可ならむ。肉體の欲に饜きて、とこしへに精神の愛に飢ゑたる放縱生活の悲愁ここに湛へられ、或は空想の泡沫に歸するを哀みて、眞理の捉へ難きに憧がるる哲人の愁思もほのめかさる。云々」

鷺の歌（エルハアレン）

ほのぐらき黃金隱沼、
骨蓬の白くさけるに、
靜かなる鷺の羽風は
徐に影を落しぬ。

水の面に影は漂ひ、
廣ごりて、ころもに似たり。
天なるや、鳥の通路、
羽ばたきの音もたえだえ。

漁子のいと賢しらに
淸らなる網をうてども、
空翔ける奇しき翼の
おとなひをゆめだにしらず。

また知らず日に夜をつぎて
溝のうち泥土の底
鬱憂の網に待つもの
久方の光に飛ぶを。

*

彼はまたステファンヌ・マラルメの所説詩をその詩「嘆息」の後に掲げて深切に詩壇に教へた。

「物象を靜觀して、これが喚起したる幻想の裡自ら心象の飛揚する時は歌成る。さきの「高踏派」の詩人は、物の全般を採りて之を示したり。かるが故に、其詩、幽妙を虧き、人をして宛然自ら創作する如き享樂無からしむ。それ物象を明示するは詩興四分の三を沒却するものなり。讀詩の妙は漸々遲々たる推度の裡に存す。暗示は即ちこれ幻想に非らずや。這般幽玄の運用を象徵と名づく。一の心狀を示さむが爲、徐に物象を喚起し、或は之を逆まに、一の物象を採りて、闡明數番の後これより、一の心狀を脫離せしむる事これたり。」

*

「海潮音」に譯出し、一に[illegible]するところのものは、序言にいふごとく、象徵詩にのみは限らない。又その影響に於ても叙上の外ポウル・ヴェルレエヌ、シャルル・ボウドレエル、ジォルジュ・ロウデンバッハ、アンリ・ドウ・レニエ、アルベエル・サマン、ジャン・モレアス等の新聲のみが詩壇を潤したのではない。不盡無覺の莊嚴境を思慕するルコント・ドウ・リイルの「眞晝」「大饑餓」、ホセ・マリヤ・デ・エレディヤの「珊瑚礁」等の高踏派、或は英のロバアト・ブラウニング、ダンテ・ゲブリエル・ロセッティ、その妹クリスティナその他の譯詩も、光芒は風を起し、波紋を投げた。その中で小抒情短曲の寶玉とも名づけたものが、却つて又世の人の愛唱措かざるものとなつた。

山のあなた（カアル・ブッセ）

山のあなたの空遠く
「幸」住むと人のいふ。
噫、われひとと求めゆきて、
涙さしぐみかへりきぬ。
山のあなたになほ遠く
「幸」住むと人のいふ。

わすれなぐさ（ヰルヘルム・アレント）

ながれのきしのひともとは、
みそらのいろのみづあさぎ、
なみ、ことごとく、くちづけし
はた、ことごとく、わすれゆく。

故國（テオドル・オオバネル）

小島でさへも皆は戀し、
まして生れの[illegible]、
[illegible]

『春鳥集』

「[illegible]」とする[illegible]かつた蒲原有明に[illegible]『春鳥集』[illegible]の自序に何と言つたか。

＊

「視聴等の諸官能は常に鮮かならざるべからず。作意を[illegible]さるべからず。然らずば明暗花鳥、神經の外、踏轍の外、あるは[illegible]の[illegible]、遂に文字なからむとす。[illegible]自然を詠ずるは我を詠ずるなり。[illegible]自然は[illegible]の苑にして、我は[illegible]の[illegible]の如きか。「自然」は死骸の皮にあらざれば、徒に[illegible]を敷き、「我」はまた冷然たる他者の眼にあらざれば決して空漠の思を容れず。『われ』に生き、『自然』に棲みて、[illegible]の[illegible]はやがて天の苑に入らむとするなり。視聴等はまた相交錯して、近代人の情念に雑り、ここに銀光の音あり、ここに嚠喨の色あり。心音といふ心声といふと雖も、[illegible]の香味を[illegible]に感ずることあり。[illegible]を[illegible]して[illegible]作とい[illegible]の[illegible]を組みさせるもの[illegible]なしむか。[illegible]時ともしては五官[illegible]を[illegible]に埋もれし古銅の花[illegible]に匂ふ響きを覺ゆることあり。[illegible]を[illegible]に碧と成して美を識ることあり。一花を辨ぜずして[illegible]を作るは謬れり。[illegible]に[illegible]して愛の[illegible]光を愛させさるも亦謬れり」

まさしく象徴の提唱ではないか。

＊

上田敏は象徴詩を移植したが、蒲原有明は之を唱道すると共に直に自ら之を作り實行した。この點から有明は日本象徴詩の祖である。

その初期の代表作「朽葉」（[illegible]）を見るに、夜明の河岸の風景、その濁り川に映る、流るる、匂ふ、光る、息づく、音たつる様々の彩色と交錯する感覺の香韻のそれらを描いて、またそれらの心象の動きを象徴した。この作は貴重とされ、又は晦澁とされたが、缺點は結句に「白壁――これやわが胸か。」といふ[illegible]を添へたことであつた。さう云ひ盡して了つては[illegible]して、折角の[illegible]詩[illegible]が[illegible]されなかつた[illegible]を[illegible]つて、この說明句を成したかも知れない。

この初めを成した[illegible]の[illegible]は後に斷然改訂された。改作[illegible]の[illegible]の苦心を[illegible]たか。惜しみきれない[illegible]である。

[illegible]

流るるよ、ああ、瓜の皮、
核子、[illegible]、――[illegible]、
いきふきもすか、霧はまた
をりをりふかき香をとざし、
消えては[illegible]朽ちゆけり。

第一改作

流るるよ、ああ、瓜の皮、
核子、瓣わら、――さかみづき、
いきふき消すか、霧はまた、
をりをり、あをき香をくゆし、
滅えなづみつつ朽ちゆきぬ

第二改作

見よ、流るるは瓜の皮、
核子、塵芥、柿屑、
滅えもなづめる[illegible]

何を求めるか[illegible]
感興の生氣は消え、修辭を選び、ただ露はに乾いて、索然たるものになつた。何が故に「消えては青く行ちゆけり」の新感覺を消さねばならないであらうか。その他かゝる例は二三に留らない。

*

『春鳥集』は『獨絃哀歌』の延長と見るべき「海の幸」その他と「初ケ曲」「鏡祭」の敍事詩と象徴味の深い「五月靄」その他がある。「五月靄」は當時晦澁の譏があつたが、この詩の改作は、贅物を除き去つて、すつきりと純粹になつた。

ともあれ、『春鳥集』は傑れた詩集であつた。而して一層に有明の地位を確たる遙かな星座の高處に据ゑた。

『白羊宮』

「薄田泣菫氏作『白羊宮』出づ。日は今の白羊宮に位する時、天地開闢せりと傳ふるに據りしものか。卒てたる近作數篇のほか、諸雜誌に散見して、余が未だ精讀せざる作多し。「おほはく海の角の音」は、今の西詩壇の象徴詩人中、令名嘖々たるHenri de Régnierの詩を讀む心地あらしめ、「冬の月」「雲傍子」等、各節の第四行をはたと六音に止めて、情熱更に烈しきを感ぜしめたるは、古希臘サッフォの餘韻たる可し。余がさきに激賞したる『望郷の歌』は素よりなれど、新に見たる『くちづけ』「白すみれ」「寂寥」「海のほとり」等は、余が趣味にとりて頗ぶる面白き作なり。」

この文章はその年（三十九年）主として雜誌『藝文』（敏、孤蝶等によつて一月創刊）の「鏡影錄」（九）に上田敏の書いた推獎の一節である。

『白羊宮』（三十九年五月）の中にはまた、同じ鏡影錄（一〇）に同じ筆者が莚子の言葉を極めて褒め讃へた（十四）

わが故郷は、日の光蟬の小河にうはぬるみ、
在木の枝に色鳥の咏め暢する日ながさを

に初まり、

かなたへ、君といざかへらまし

と結んだ九行一聯と、同韻の他の三聯、通じて一篇四聯の望郷の歌を收めてあつた。

「今日、詩壇の一奇とす可きは、新詩の著るしき進境に對して、所謂新詩の多數が、何等の品隣を試み得可き趣味と學殖とを有せざる事實なり。（十一）不思議なる世なり、詩人反つて學殖に富めり。薄田泣菫氏は此の學殖ある詩人の一例たるか。語彙の豐富にして、殊に中古軍記類に散見したる語を驅使することの巧なるは、詩壇第一人なるのみか、西歐詩文の蘊蓄も頗ぶる深きが如し。其處女作にはキイツ愛讀の跡あり。『暮笛集』中の一篇がエルギリウスの第一牧歌に類する如く、近時の作、「大和にしあらましかば」はブラウニングの同じ體に相似し、新年の「太陽」に寄せたる作「望郷の歌」はミニヨンの歌に通ひて、而も大に日本の趣味を發揮したる所面白し。

櫂の音ゆるに漕ぎかへる山櫻會の若人と
か、

瑞木のかげの戀がたり（第一聯）
葉びろ柏は手だゆげに風にふらるる初夏を
葉洩りの日かげ散斑なる小林の下道
に（第三聯）

も心はくかぎりなれど、第三節第四節の沈靜なるこそ、新らしき日本に生ひいでし隻るき花なれ。」

まさしく…(Oh, to be in England)…

このブラウニングの絶唱を想ひ浮べながら

ああ、大和にしあらましかば、
今、神無月、

と歌ひ出た、典雅にして静粛、古風にして荘[illegible]趣、その官感の香りゆたかなる奈良朝の詩[illegible]その集には載つた。

聖ここに之を忍び、御精進を思ひ、天つ阿摩の[illegible]悲に心を寄するこの詩人はまたやはり『二十五絃』のすぐれた楽手ではあつたが、この人もまた象徴の幽玄體に參しずには、海潮の響に伴奏されなかつた。

この傾向はかの「鷺の歌」と逝ずる「鳰の浮め」一篇の匂を聴いても、或は首肯けるであらう。ただ、ともすると觀念的、比喩的象徴に、直感の乏しく理義のみ詩技のみ閑かな作意の興が見え初めた。「わがゆく海」(本文参照)「笛の音」などもさうであつた。この抗し難い爛熟の衰へと、近代人の、詳ひとに發した妖艶自然のごときは遂に彼自身の痼疾となつた。

『白羊宮』のいみじきは又、却つて「白すみれ」「夕とどろき」たとへの小曲にあつた。

夕とどろき(泣菫)

新月さしぬ、物の香の
ほのかに薫る五月野に
夢かのわたり、都邊の
夕とどろきに聞きとれば、
[illegible]
[illegible]
[illegible]
あまた夜にこそ[illegible]。

日は往きて消えつ。今もはた
かすかに残るおもひでの、
何とは知らず、夕ごゑを
吾かのままにさしぐみぬ。

ただ之を藤村の「おえふ」(本文参照)と比べて見よ、ここにはあまりに刷毛の跡をとどめぬ油繪のごとく、その繭たさは天平の牧童のごときに於て、明治の情思とも思へぬ語感の古さがあらう。この傾向はその歌謠體の、さつさ、いよこの「小雀女」(本文参照)にも、三の百合にも見えよう。

ともあれ、白羊宮に泣菫は完成した、さうして、當時第一位の詩星の座に大きく光つた。『有明集』の出づるまでは。

この比較

日ざかり(泣菫)

季は夏たか、
日ぞ照る、
日ざしは[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
涸きたちぬ。

牧の小野には、
並木立、
腕だるげに
葉を垂れつ。
青ぶくれなる
水錆沼は、
めまぐろしさに、
息だえぬ。
雲のひとひら、
たよたよと
喘ぎゆきて、
ありなしに、
やがては消えつ。
濃青なる
空や虚たる
夢ならし。

水の面の水澁に
氣をぬるみ、
蠑螈は泥に
くぐり入り、
蟾蜍土の香に
息むせて、
蛇はおそみ蹴、
葉がくれに。

なべての上に、
高照らす
つよき呵責や
あな嚴し、
惱なき魂の
けだかさは、
げに水晶の
目なるかし。

[illegible]
[illegible]
[illegible]
むかひゐてこころぞ[illegible]。

何事の起るともなく、
何ものかひそめるけはひ、
執ふかきちからは、やをら、
重き世をまろかし移す。

窓の外につづく草土手、
きりぎりす[illegible]に[illegible]、
それも今、はたと聲絶え、
薄ぐもる日は蒸し淀む。

ややありて[illegible]が[illegible]を[illegible]く
[illegible]
ほろほろに[illegible]ける[illegible]は
ひとしきり[illegible]をすべりぬ。

たまさきに[illegible]は、池の
[illegible]むるむ[illegible]よりわたり、
山[illegible]の[illegible]に[illegible]、——
朽ちてゆく「時」のなきがら。

何事の[illegible]もなし[illegible]、
[illegible]
眼のあたり[illegible]けてこそゆけ
[illegible]、——[illegible]

同じく『海潮音』の影響を受け、孟夏白日の[illegible]であり、[illegible]であり、秀作であつて、而もこの[illegible]の上の[illegible]は何から來る。有明のこの感覺こそは彼をして始めて近代詩の父たらしめた標識ではなかつたか。

年少新進の徒が、そろつて[illegible]した方向のハンドルは果して泣堇より有明へであつたではないか。

[illegible]

五月の運轉手

少年詩人啄木は才藻早熟の人ではあつたが、近代の感覺人ではなかつた。彼は[illegible]の反抗心と社會主義思想の洗禮とで後には實質以上の革新的戰士として[illegible]された。[illegible]として近代早[illegible]の人であつたかどうか[illegible]。[illegible]ハンドルを[illegible]した[illegible]より有明へ[illegible]

異母腹の兄弟

一[illegible]にしてまた[illegible]野口[illegible]に、[illegible]の[illegible]を以て、[illegible]に[illegible]子の[illegible]を[illegible]、[illegible]名のごとく蕭々たる[illegible]野に[illegible]興度を[illegible]

觸よく似つてゐた。一は温泉と、一は園、一は街、血縁同じくして、しかも母胎の兄弟であつたか。

二人の火星人

この二人の新來者、本當彼等は火星人であつたか。それは知らない。然したしかに彼等北原白秋、長田秀雄、木下杢太郎は早き浪漫の延長であつた。明星にとつては異様新異の外來人であつた。

白秋は、文庫の軸弔と幸福とに倦厭たると共に自己の美辭麗句詩をも一洗した。而して詩についての知見が初めて表に現れた三十九年春の作品「おもひで」の數篇を以て『明星』誌上へ飛躍した。この幼時の追憶を歌つた『おもひで』の詩は後の抒情小曲集『おもひで』の根本を成すものである。南方地熱の氣棄に芽ばえた新感覺の萌芽には他日の象徴作家たる本質の色彩も或はひそんでゐたであらう。彼はまた先進の光耀と樂音とに多々恵まれた者の一人であつた。彼、朱の阿蘭陀帆船の舵機は目まぐるしく動いた。彼は海潮音の新航路に於て危ふく有明の黒船に衝突しようとした。彼はさながら熱病菌圖のごとき水脈の銀線を行くところに亂描した。佛蘭西印象派の手法も采つた。多作した。

たかも目に立つたであらう。然し、新鮮さもとよりよ目を[illegible]思想の深[illegible]ある者でもなかつたらう。然し彼の肉體[illegible]の感覺に思想無しと見るのも早計であらう、その音躍く蜜蜂の巣箱が單に感覺の巣箱でないかぎりは。

長田秀雄（幽浚鬼と稱した）は若きに似ず、グロテスクな一種の構成派であつた。深沈と狙ひ、工みて構成した。後に近代劇を書き、劇團の指導者ともなつた素地は既に黒く光つてゐた。

醫科大學生であり、洋畫のアマチュアであり、美、殊に近代趣味の探究者であつた太田正雄（木下杢太郎）はその初め、新橋ステーション改札口とプラットホーム女性風景を詩に描いて、無殘なる犠牲と最勝の精の讃歎を檢鏡し、又、蛙の彷徨に悲しむダッケルタップルの微妙煩雜音を聽かせようとした。

雲と旗の風景

若く、手の大なる彫刻家にして、秀抜なる短歌作者、高村砕雨（光太郎）は、その頃、巴里に在り、雲煙の彼方に在つた。

「酒ほがひ」と戀の幻想的密獵者、吉井勇はかの雲と旗との海港を豪放に大跨に歩き去るマドロス」縫いて、時折りその故しらぬ感傷にその身を委いた。

水彩畫家

淡々として明らかなのは水彩畫家、石井柏亭であつた。

[illegible]にかぶらたわゝに積みて
水門をくゞるはし舟
[illegible]が好みの小笠
白衣曳きぞわづらふ
[illegible]禮の足のほとりに
鳴く蟲の音もかれがれ。

與謝野子は之を評して「白耳義新詩人の作に接する思あらしむ。」と讃へた。

新市井風物詩

この群星環の恒星、自らひそかに文珠たり、又、然あるかに見えた鷗外は、智識廣大の學匠ではあつたが、情思奔放の性ではなかつた。この明治の文珠は淡々と、又は彼の言ふ「[illegible]新に二單語に印象強く」「節奏には大膽なる跨を用ゐ」また俗語を用ゐて、路上目睹の新市井風物を寫生した。かの電車の窓硝子にふりかゝつては消える雨の「雫」、「臭くつて食はれませ

んや」の大川端調「都鳥」、竿頭に昇りては落つる輕業の子の鵙の速贄」、

にび色の川淀水の
渦卷に、雌か、雄か、白鳥
游ぶ。こやさすらひ人の
ふりし日の風流の記念。

舟人よ、あの鳥を見よ。
「はあ、ありやあかごめでがさあ。」
氣ぢかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」（「都鳥」の後聯）

この影響は、殊に與謝野寛にも及び、新人にも響いた。彼等は新奇でさへあれば爭つて取りついた。

邪宗門詩風の曙

四十年の夏、新詩社同人の寛、萬里、勇、正雄、白秋は九州旅行の途次長崎に一泊し、天草に渡り、大江村のカトリックの寺院に目の青い教父と語つた。この旅行から何を彼等は齎らしたか。浪漫的のほしいままな夢想者であつた新人、彼等は我ならぬ現實ならぬ空を空とし、旅を夢とし、陶醉した。中にも北原白秋は「天草雅歌」（[illegible]）を、「邪宗門」の「鵠」を、正雄は「黒船」を、また長崎ぶりを、その阿蘭陀船の朱の幻想の帆と較せて、ほほういほほういと歸つて來た。

鵠（白秋）

わかうどなゆめ近よりそ、
かのゆくは邪宗の鵠、
日のうちに七度八度
潮あび羽搏すといふ
伴天連の秘の少女ぞ。
地になびく髪には蘆薈、
嘴にまたあかき實を塗る
淫らなる島にしあれば、
絶えず、その眞白羽ひろげ
芳香の水したたらす。
されば、子なゆめ近よりそ。
視よ、持つは毒か、華か、
さならずば實の無花果か、
兎にもあれ、かれこそ魔法。
わかうどなゆめ近よりそ

黒船（正雄）

人もこよ、黒船くる、
いとくろく鳥に似たる。
あら天主、蠻なる人も
皆見し、帆も[illegible]。
このあまき葡萄の島に
無花果のゑらげる丘に
何見ると千里鏡見る
懷疑の北國人は。

8　制約破壞と口語自由詩

明治の定型律

明治詩壇に於て傳統より繼承し、また清新體として創成し來つた種々の定型は年とともに愈々均整完美しつつ、寧ろその重壓に堪へざらむとする、または薫染、早くも倦厭たらむとする傾向が見え出して來た。今、それらの定型律の種々相を檢べて見よう。

藤村（七五）

こひしきままに家を出で
ここの岸よりかの岸へ
越えましものと來て見れば
千鳥鳴くなり夕まぐれ。

藤村（五七）

吾戀は河邊に生ひて
根を浸す柳の樹なり
枝延びて緑なすまで
生命をぞ水に吸ふなる。

藤村（六七）

しづかにてらせる月のひかりの
などか絶間なくものおもはする
[illegible]はたくとも
[illegible]に忍び入るたり

泣菫（一六、泣菫絶句調）

[illegible]を弾くなかれ、
往にし日はあるこの夕暮、
おもむきある哉、彼浮けて
舟人河瀬に響くさせり。

泣菫（一一）

霜月ずゑのはなしさ、
日も夕ばえぬ浦まや、
かなた渚々はづれに、
夕づつ仰ぐかかりぬ。

泣菫（六九）

[illegible]き珠は失せぬかなに
懸想の[illegible]狭かりや、
左、胸の上におき、
右、やはらかに抱きよる。

有明（一一三）

よろこびぬ、倦みぬ、
争ひぬ、厭きぬ。
生命の根白く

光の宮こそにほへ。

有明（三三、四三）

肉は、靈は
二つのちから。

有明（三三、三四）

生は、死はよ、
眞偽の寶石。

有明（三三、三四）

研きいづれ
摩尼の金剛。

泡鳴（三三、四、彼の所謂十音詩）

みやこ 遠く 立ちいで
歸り來てし ふるさと、
ふるき ことの 思ひで
愛に 忍ぶ 橋あと。

有明（五四）

人の世はいつしか
たそがれぬ、花どき
香に滿ちし世も、今、
たそがれぬ靜かに。

有明（四、四九、四、四五）

よろこび、
あふるる、それか、君、
彼方を

[illegible]

有明（[illegible]）

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

有明（[illegible]）

光の[illegible]
ゆらゆらに顯はるる
まひろく、はた青き
皐月の空のもと、

上田敏（[illegible]）

あなあはれ、そのふかき、夕暮悲し、
あなあはれ、あすゆゑに、夕暮苦し、
あなあはれ、身のゆゑ、、夕暮重し。

白秋（[illegible]）

わが仔犢よ、いざともに野にいでて
歌はまし、水牛の角を吹け、
視よ、すでに、美果實あからみて
田にはまた足穗垂れ、風のまに
山鳩のこゑきこゆ、角を吹け。

有明（四七六、[illegible]調）

わが、この胸の池水、一日にほひ、
「おもひ」は凝りて蓮華と生ひたち咲く

[illegible]に往けよ、この岸、かの水際に、
[illegible]ふかき「いのち」の香をば求めよ。

佛蘭西高踏派の詩を譯したる「海潮音」の瑰麗纖はまた泣菫、有明、その他新進の好んで取るところであつた。莊嚴にして均整、典雅にして又流麗であつた。

上田敏（五七五七、一行）

草の媚びし姿、靡なす情のまざし、
照る月の飽かざるおもわ、孔雀にも似たる濡羽、
蹙れて顰める眉は、音無しの漣なせど、
あな悲し、君は宿らず、美しき物の一つに。

上田敏（七五七五、一七）

無邊の大や無量海、底ひも知らぬ深淵は
運命の國、寂光土、また譬ふべし、炫耀郷。
墳塋にして、はた伽藍、赫灼として幽遠の
大荒原の縱横を、あら、萬眼の魚鱗や。

上田敏（五七五、七五、交錯體）

ヂャンュに在りと傳ふる寶山の
紫磨黄金やわが物と遠く、求むる
[illegible]には[illegible]けりな、時津風、
西の世界の不思議なるこの荒磯に。

有明（七五七、五七　交錯體）

智慧の相者は我を見て今日し語らく、
汝が眉目ぞ、こは兆悪しく日昃る、
心弱くも人を戀ふおもひの空の
雲、疾風、襲はぬさきに遁れよと、

歌謠としての口語發想

歌謠の本質上、歌謠としての口語發想は當然のことであつて、上代より近代に至る古謠、俚謠、童謠、小唄等は總てがさうであつた。明治の詩人にこの歌謠體の若干を作した者に梅花、美妙、緑雨がある、鷗外、子規、鏡花、月郊、鐵幹、泡鳴がある。藤村、夜雨、清白、白星、林外がある。また有明にも稀に一二はあつた。二十五絃以來の泣菫はまた新に寧ろ古雅た近世の歌謠體を幾つか發表した。然し、何れも主として歌謠としての口語發想であつた。ただ僅かに獨歩がその詩に進んで口語を采り入れようとした。「[illegible]の小田に雲雀があがる」（[illegible]）とあるが、それもつまりは民謠として見るべきであつた。「白玉姫」の泣菫はその純粹な歌謠體以外にも未だ之を試みようとして無理な矛盾を敢てした。

[illegible]の子の若えさながら、
木下路、足なみ輕に
おりて來た草刈むすめ、
日盛りの濕ひ得たさに。（その第三聯）

口語の「こ」は用ゐた。然しこの詩は全然雅語脈の整調表現であつた。殊に「若え」「濕ひ」のごとき耳遠い雅語を以て口語詩を成さうとする意圖は本來に於て誤つてゐた。

鷗外の「都鳥」も口語は採用した。然し船頭には思ひきり日常語で答へさせたが、船中の客には文語を以て問はした。珍問答である。時代混淆である。重複するが拔く。

舟人よ、あの鳥を見よ。
「はあ、あれは鷗でがさあ。」
氣だかきにおぢぬさま見よ。
「臭くつて食はれませんや。」

鐵幹等の新詩社同人も之に倣つて、[illegible]即興の「大佛さま」「[illegible]」等に盛んに俗語を響かせた。然し面白がりに插入したのみで、地の文章は文語[illegible]であつた。それならば、先例は近世の稗史、淨瑠璃にいくらもあるであらう

「大佛さまを拜ませて
下さんせや」と、田舍もの
老人づれの一列は、

竹矢来して「御普請」と
高札たてた札の口、
羊のやうに肩を擦る。（その一節）

札を讀んで行く人る
言葉二重の不思議なる
御門の中は[illegible]、
「拜まれません」「見えねえや」
「あれがお鼻か」「いやお肩」
「暗いことかな、なあまいだあ。」

林外に「きき耳たてて」がある。

「コン畜生、畜生奴、
よくもよく——いゝ、ちやんなんかの妾、
親の恥、又親類の恥
第一はこの姉の恥ぞよ、
思ひ知れ」たたく音
ぶつ音、わめく音
ドタバタ／＼と二階より
「姉だつて妾、妹に
意見はあるまい——さあ殺せ」
「てまいまだほざくか、いゝ、ちやん妾」
たたく音、わめく聲、
「わしはお稲さん、てまへのは
なんだ、ちやんではないか、
わかーよなし」

「言文一致詩」先聲

四十年七月、河井醉茗の主催し創刊した詩草社の同人誌「詩人」第二號に於て、森川葵村は「言文一致詩」につき第一聲をあげた。

「江戸ぶりの俗謠詩を今更作るのは、近松時代の淨瑠璃を今更作り出すと同じ。明治の人なら明治を歌つてこそ明治の詩人である。」(1)

「他の調を以て明治の香ある俗謠詩を作らむとするに今のやうな作では困る。昔から固くるしい和歌が田植唄に歌はれたことはきかず、さるに依つて茲に言文一致の詩を要求するのである。自分の言ふ言文一致體とは……今日の散文家が書いてゐる言文一致明治の香ある文體を以て詩とするのである。吾人はこれを言文一致詩といふ。」(2)

「吾が言ふ言文一致詩では、散文と同じくなりはせぬか。否、其處が詩人の技倆で、我々が持つてゐる感情に調子があることの知れてゐる。」疑念無用(3)

而して彼は泣菫、雨情、夜雨の俗謠體を難じ、[illegible]を継け
てゐる。これ等[illegible]

口語譯詩

[illegible]に加つて[illegible]

リヒアルト・デエメルの詩[illegible]

[illegible]まで、[illegible]
さあ大[illegible]
[illegible]沈黙した、[illegible]
お前は皆こんな何處へ行くんだらう、
[illegible]格子戸の明りに[illegible]
[illegible]聞こえる。

リリエンクローンの詩

銀行家ハノッサ。主人は銀行に行つた。
よし、召使は外に出た。殘るは小間使一匹。
「今晩。お出で。八時によ。淋しいわ。」
我は往つた。主人の室へ、戀[illegible]
ソファの上。嵐の如く、又さまし[illegible]、又
恥も無く、
キスはキスを呼ぶ。「アー[illegible]して[illegible]
つて。」
柔音と硬音。
朝。別離。夜の客は出てゆく。
歸り路は長い。ホー、はてなソテよ。

第一烽火

口語詩に於ける第一の烽火は醉茗の主宰する詩草社の同人、弱冠川路柳虹によつて發せられた。「詩人」の四十年九月號に載つた「塵溜」の外三篇であつた。ここに初めて詩歌解放運動の烽火が揚つたのである。

塵溜

隣の家の穀倉の裏手に
臭い塵溜が蒸されたにほひ、
塵溜のうちのわな〳〵
いろ〳〵の芥のくさみ、
梅雨晴れの夕をながれ
漂つて、空はかつかと爛れてる。

塵溜のうちには動く稻の蟲、
浮蛾の卵、また土を食む蚯蚓らが
頭を擡げ、徳利壜の虧片や
紙のきれはしが腐れ蒸されて、
小さい蚊は喚きながらに飛んでゆく。（下略）

彼は續々とその試作を發表した。

その反響

果然、反響は詩界に起つた。世詩香服部嘉香の「言文一致の詩」（四十年十月「詩人」第五號）、島村抱月の「現代の詩」（同年十一月號）が是である。拔抄して見よう。

嘉香説

「吾人は言文一致詩を可能とするものである。而して其の可能には或る範圍と程度とを要求する。」（1）

「感情をビビットリーに表はさんには、勿論修飾を脱するを要するも、それが爲めに散文を直ちに用ひ、語法語調をも之に入るるには、只情緒を拘束するか若くは下落せしむるか、又は印象を卑俗ならしめて滑稽に墜つるを免れぬ結果を生ずる。純朴はあり質實はあり、幽玄、偉大、熱烈、高渾の思想は之を歌ひ盡すに不可能である。」（2）

「上田敏氏の「ちやるめら」與謝野鐵幹氏の「小さき唄」及び横瀬夜雨氏の「お才」「やれだいこ」の如きは吾人が言文一致詩として諸氏の努力せらるべき方面と信ずる。」「言文一致詩を以ては田園詩、市井詩、自然詩、即ち俚歌童謠的のものか、又は端唄、俗曲的のものを範圍とする。」（3）

抱月説

「僕たちが日本の新體詩を讀んで先づ感ずるのは、其の直接でない事、即ちディレクトネス、スレイトネスが缺けてゐる點である。之は眞直に實際生活に接してゐない。」（1）

「キップリングの如きは形式に於ても思想に於ても現實の生活に指を染めかけた。」「アメリカのホイットマンが矢張形式内容共に切實に現生活に觸れんとする傾向を有した。」（2）

「直接たり得んが爲めに、何等かの手段によつて言葉と語法のクラシシズムを破ることが根本の問題である。」「即ち民衆に歸る詩。――現今二三人の人の試むる民謠體の詩は矢張一種のクラシシズムで、古民謠の模倣とか、一部分を潤色して現今の言葉で綴るとかいふの類で、決して僕の意味する方面の努力はない。」（3）

「形式上のクラシシズムを破るの一法は、いかなる形に於てか言文一致となる必要がある。」（4）

瞭然として抱月は先にあつた。

御風の提案と彼等の作品

御風は詩界に於ける自然主義を主張し、而して「詩界の根本的革新」（「早稻田文學」四十一年三月號）

について左の三つの[illegible]を提出した。
「詩の用語は口語たるべし。」「雅言を以て自己の抱懷を歌ふと言ふ習慣は絕對的に破壞すべき事だ。」雅言は形式的制約を破壞せよといふのである。(1)
「第二の要求は詩調である。」「絕對的に自由たる情緒主觀さながらのリズムである。」用語のみ口語に變つても舊來の詩調の制約ある限り不可である。破壞せよといふのである。(2)
第三は「行」と「聯」との制約破壞である。」用語のみ口語たり、調の自由を得ても行數の制約ある以上不可である。故に行及聯の絕對的自由を要求する。(3)
この提案を果して彼の試作が裏書したか。したとは云へよう。然し價値に於ては否であつた。
彼と露風とはその作品を五月號に發表した。「瘦犬」及び「暗い扉」である。

瘦犬

燒きつくやうに日が照る
黃色い埃が立つて空氣は咽せるやうに乾いて居る、
むきみ屋の前に毛の拔けた瘦犬が居る、
赤い舌をペロ〳〵出して何か頻りと舐め
ずつと居る、
あゝ嫌だ。
ジロリと俺の顏を見た
ヤ! 步き出した
ヤ! 蹤いて來る、蹤いてくる。
右へ曲ると右へ
左へ折れると左へ
急げば急ぎやがる
あゝ厭な奴だ、氣味の惡い奴だ。(以下略)

暗い扉　(露風)

暗い扉が閉ぢられてある
その前で盲目どもがわい〳〵噪ぐ
まつくらな室だ。

どんどんと一人が叩く
するとまた二人が叩く
今度はみんな寄つてどんどんと
割れるほど叩きだす。
「をかしな扉だ」
「まつくらな扉だ」
「開けてくれ」
と叫く。(以下略)

[illegible]
た。「詩歌を侮蔑せんが爲に作られた」と思つた當時の評言は道理であつた。之を觀て思ふに、かの意氣のみ壯にして內容に表現に品格無き[illegible]騷であつた新體詩草創期と酷似してゐよう。
茲に思ふことは、この急進的新人が、大正期に於ては良寛禮讃の唯一人であり、その[illegible]調の歌風に傾倒し、彼自身も、境涯の良寛を模しつつ、閑寂しつつある事である。その[illegible]に於ても書に於ても學びつつある。曾て[illegible]壞した如上の三制約を尊重しつつ、而もこの時、時代は詩歌の制約破壞に向つて、急速に轉回しつつあつた。風と鳥とは[illegible]げた。

その翌年

感覺の瞬時　(柳虹)

……
……
キチ、キチ、キチ、キチ、キチ、
キチリ、キチリ、
リ、リ、リリリ・リリリ、
リリリ、

リ、

リ、

リリリ、

……

……

露が草に沁みる

星は涼しく笑つてた——

風——

置目川の渦む音……(以下略)

　黒風のあとの海岸

白——

明るい海のにほひ、

濁つた貝の静かさ、

白——晝——新らしい墓標……

塵立て——いすゝな

掻き搜つたさゝな穴、

灰——香木——

蘆草のにほひ。

白——

岸と波とのしづかさ。

——忘却——夢——

苦悶の影——

白——(以下略)

9　頽唐思想と異國情調

泡鳴を批判す

好漢、岩野泡鳴は言ふ。彼は彼自身を語つて暴りにして無邪、寛々にして滑稽、深刻に見えて案外單純であつた。

「二十六年に、岩野泡鳴の『十字架の影』が雜誌世界に出た。當時は一種に厭世と懐疑の思想が弥まつてゐたから、それを脱しようとした作だ。(1)

『蓬が島』(二十九年)は當時の理想なき哲學者、宗教家、或は紳士淑女を諷刺したものだ。

その一節——

宇宙の　森羅萬象、天籟河嶽、
蓮華に　怒號す、風はしも
あまつ大空を　かけりかける
おなら　なるかも　とこしへに
かけなく、香なく、恥ぢなく
はばかりもなし　と　自由自在。

作者は之が爲めに耶蘇教徒から不敬虔といふ、教育家達から野蠻、冷酷、無禮だといふ反感を受けた。(2)

「同年(二十九年)五月、泡鳴の劇詩的長詩『霞かの渡し』(三百三十行)を早稻田文學に載つた。之はベクリンの畫風の樣に、凄惨なうちに多少の滑稽趣味があつた作だ。(3)

「泡鳴は嫌世大過人に於て幾分書いた。そのうち『秋の蜻蛉』の構想はシェレーの『雲雀』に似るところもあるが、後者は高い憧憬を歌はうとしたに反して、前者は深い嫌惡を反映しようとした。これは泡鳴當時の冥想的物色を發揮してゐるだらう。(4)

「同年(…)、泡鳴の[illegible]に[illegible]、[illegible]に、[illegible]と[illegible]人の[illegible]に憤怒とを歌つた作だ。」(5)

「泡鳴は三十二年[illegible]人に『亡兒の[illegible]』を出してから、[illegible]的に[illegible]めにない[illegible]を[illegible]る樣になり……(6)

「當時泡鳴は叙事的[illegible]から進んで、[illegible]ず全くのロマンチク主義に[illegible]入つ

た。(7)

「新体、泡鳴氏に至つて[illegible]をもとに発刊された雑誌「白百合」は、その当時、わが国詩壇の官能的耽美派を代表したものだ。(8)

泡鳴は同三十六年から大に復活して来たので……かの注意を引いた「[illegible]島」(三十七)に在つては、初めて詩界に紹介した八七調を供したのである。渠はこの時からして実想的思念が、情熱的に燃えて来たのだ。この詩は古来の伝説をもとにして、多少テニスンの「ロータスイーター」に得たところがあるらしく、熱帯の一孤島に、生々の理想、孤独となりて……暫時の安逸、安息、無理想、無何有に労れも果てた女性ばかりの島民の運命を描写した物だ。(9)

「三十七年になつてから、泡鳴は白百合に於いて「ああ世の羈絆」といふ短曲を出した。渠が世紀末的・デカダン傾向を最もよく示した作だ。」(10)

「渠は浅薄な文芸中心主義の流行を脱して、孤独無変化の永劫を嘆く、「嫦娥の恨」に八八、八七の交互調を用ゐた。(11)

「海妖」「破船」に於ては、微妙な新調七六調を渠に[illegible]し、ずつと後の象徴詩の[illegible]な ことを知らしめた。

その一節――(今昔[illegible])

嘆きも　どよめく　海の音の
照りし　いはほの　上に　すわり、
沈む　ゆふ日の　光を　見れば
ひとり　わが身の　かげぞ薄き。

その「悪魔主義」に至つては、殆ど病的産物だと云はれたが、また幻怪奇異の想、詩人の夢にだも入らざりしところといはれた。泡鳴は之によつて美学従来の規範を脱し、独自の神秘境を拓いて、醜の醜なる物をも厭はぬ気を示したのだ。」(12)

「泡鳴は、また、同年の初めに、白百合に於いて「高塒の霊台」を出し、三百(?)の高塒を霊化して世の文明を呪はした。(13)

「渠は……その第三詩集の巻頭に、「三界独白」(二百八十行)の深刻な恋愛詩を完うした。永貞なるべき天主教徒の比丘尼が、神父と禁ぜられた恋を為し、その結果たる分神を神にも見せずて闇に遣り、苦悩懊悩の末、現世から地獄に迷ひ、また天上界に登るのが骨子となつてゐる。偏りロマンチクな行き方ではあるが、大い悲痛の動脈が貫徹してゐて、渠は之を以て[illegible]認められたのだ。渠はそれまで理想はあつても、情熱に乏しいと云はれてゐたが、之が為めに激したか、この長篇……を以て、全くロマンチク派、乃ち、情熱派の仲間となつてしまつた。之は渠には意外なことで、渠は天上の恋を歌つても、一たび且つ寂しみ涌きぞ来る人欲の根底を忘れなかつた[illegible]で、痛苦悽愴たる神秘を攫ふ現実部理想の[illegible]に入り、(14)

「人肉狂宴」は……、[illegible]ない[illegible]的熱語で、戦争に関する痛切な[illegible]詩だ。(15)

「泡鳴のは豊富な想像と思想とになやまされて、却つて自意識を失ひ、詩品直截、単純陳腐なる欠点ありといはれたが、詩界に於て理想の詩人として最も深刻活躍の才を示した。(16)

「且つ、其長篇並に多くの小曲に於て無言、罪悪、殺人、姦通、顛倒、暗瞭、地獄、苦悶等、すべて世の顧みなかつた暗黒方面に筆を染めて、純粋の苦悶詩なるものを初めたのは、渠の記憶すべき功績だ。(17)

「渠は当時流行の形式的表象主義を離れ

て、刹那的苦悶と生命とを抱いて、つひに之が爲めに「自然主義的表象詩」を唱道するに至つたのだ。(18)

同年（三十九年）舊宗教、舊哲學、舊美學を打破する爲めに作つて、單行本として出した「神秘的半獸主義」(19)

惡疾 つひに
却つて なつかしく、
こころは 溶けて
をみなの 身に添ひぬ（「つらとづ貝」）

兄は その顔 振り向けて
若き 血しほ ぞ 亂れける――
口づけ したる者の
父の ひとみに 燃えて 見ゆ（「朱いにじみ」）

白む 伏し目に 夢の かをり、
ゆるむ 微笑、花も 開く。（「春曉」）

[illegible]葉 頷いて 息を 漏らし
小[illegible]を をのゝく 胸は 緊し。（「行く春」）

くゆらす [illegible]の
中より 見え來る、
くちびる 燃えて
ひとみ を 濡らす 人。（「夢遊のくゆり香」）

こゝはも われ を 獄に つなぎ、
[illegible]は [illegible]も 燃えて のぼる。（「闇の吾盤」）

から思ひ切つた肉感的デカダン思想を緻密な音律に彫刻して歌つてゐるのは、現代の詩人中には泡鳴一人であるのだ。」(20)

冗漫を許せ、この拔萃はそのまま泡鳴評になるからだ。

彼の「自然主義表象論」の信條はたの八である。

一、宗教的形式の脫却
二、懷疑と煩悶
三、神話と自然との燃燒流化
四、刹那的性慾の發現
五、心熱
六、新法語と新用語
七、思想と技巧との純化
八、新リズム

この所論は又片上天弦伸の「詩歌の根本疑惑」（四十六年早稻田文學）をも呼び起した。

「……、……、……、……、複雜にし、變化無限なる所謂主觀の反應を、如何にして一定の形式の中に收めらる、而して其の感興の表現に遺憾無きを得るか。……吾等の疑ひは實にこの相拮抗せんとするこの二者の調和抱擁が幾何の度までも遺憾無く行はれ得るかといふに在る。……詩歌はその根本の性質に於て、終に相逢はざるべき二者の相抱擁せんとする甲斐なき力を豫想するものではないか。」

御風の「詩歌の根本的改革」が出たのもこの後である。詩壇は多事となつた。

「スバル」の一群

象徵詩の移植と共に佛蘭西頽唐派の思想が官能交錯の幻法を以て、若き日本の詩壇を魅了した事はかの白毛船の段々帆の羽ばたきよりも甚しかつた。自然主義の潮流に合流して、内襲ィ破、舊慣破壞の叫びをあげ、悲哀は近代の幻滅にまつて愈々白日の下に暴露された。

この二つの思想は、奇異にも日本詩壇に於ては合流して、オスカア・ワイルド等の驕者にして輕妙の美をも標榜する藝術至上の傾向となり、また感覺と趣味の詩風となつた。

四十一年早春、與謝野寬の宣言した反自然主義の標榜より、引いてはまた種々の意見の相違より同人杢太郎、白秋、秀雄、勇が連袂退社が誘致された。

同年十一月、「明星」は遂に滿百號を刊して、自ら廢刊した。

翌年一月、東大鐵幹の星をとつて名とした雜誌「スバル」が創刊された。鷗外を中心とし

て、鉄幹、晶子を後の下に、山田寛花の吉井勇し、同人として蘭果、啄木、萬里、勇の各詩社白系あり、外部よりは杢太郎、白秋、秀雄等また、之に参加して活躍した。

「スバル」は耽美的な新文学の英才谷崎潤一郎を小説に發見し、詩に於ては竹友藻風、出野青燈等を堂々たる果実の中から呼んだ。

二月、既に全力の「有明集」が上梓され、四月には表紙の、扉に南蛮寺鐘の全管の銘をうち、柏亭の描いた熱帯の更紗画を作いだ白秋の処女詩集「邪宗門」が出版された。

「有明集」攻撃

近代詩の祖にして、當時の第一流たる蒲原有明は、年齢三十を超ゆる事僅かに、而も詩技漸熟して既に清澄老成の風があつた。「若菜集」の藤村は永遠に青春にして純に、「白羊宮」及び叙事詩「葛城の神」の詩人泣菫は幽雅にして自在の大才ではあつたが、明治の全期を通じて最も近代傾向の薫習深く、萬法に照應し、常に象徴詩林の首座に在つた詩宗はおそらくこの人であらう。泣菫の詩漸く観念化し、藤村の未だ実幕に拙んでざる間に、独り高く宿る彼であつた。

その「有明集」は彼をまた象徴する彼の最高かな成熟期であつて、いささか理智と技巧に走り、悪の華を意味し、又は官能の陶酔を喜び、影響し過ぎたかも知れぬ。然し乍ら、この詩人のごとく、日本語の音韻を磨き、微妙の響と色とを幽玄のごとく生かして綴られた名篇は有明詩集以来曾て無かつたと言つてよい。

その有明詩の完美と定型の均斉とに、第一の石を投じたのは親しく口語詩の急先鋒相馬御風であつた。

御風は一言にして破した。

「一体日本の所謂新體詩を完成してその極致を示したものは有明氏である。而して……吾人が有明集を讀んで感じた所は、有明氏が所謂新體詩の最後の勝利者である事と、更に全く新らしい詩の起るべき時期に至つたといふことである。（四十二年「早稲田文学」）

「交錯複雑なる現代人の感傷が歴史によつて定められたる形式の制約に對して苦しき矛盾の悩みを二重にする、強く鋭き自意識の責め木がある。……詩歌に形式はある、しかし形式に制約はない。人間の情緒さたがらの形式、主観さながらの形式、これが即ち詩歌の形式である。……現代人は、詩歌に於ても亦一切の邪念を排して、我れ、そのものを言葉に言ふべきである、そこに新しい詩が生まれ、個性の躍動があらう。自然に自由に自己中心の詩をとらへたその形式こそ、まことの詩の形式ではないか。……今日の我等の詩が口語で、又は自然主義と共に或は象徴主義と共に、も、徒らに模倣的に囚はれたる形式の中に立つて一帝に囚へられつつあるのでないか。……わが國現代の詩と見ては根本的に自己を偽り欺いて苦しきながら、また足らぬながらに作詩をつづけてあるのではあるまいか……」

而してかの詩界の根本的革命となり、亂掻蕪雑な口語自由詩の擡頭となつたのである。

思ふに、形式の美徳はその中に切に参入周悟した人にして初めて知る。苦験に徹せず皮相にして批評の者には遂に緑なき完成であらう。萬法攝理あり、人間法則あり、詩魂夢に消ゆと雖も遂つて人身に宿る。たとへ詩の制約を破壊したればとて蹄に絶對の自由は得られるものではない。破壊したその事がまた新らしき制約を我から作る事ではないか。結局は不自由の中に入る。不自由に大自在を知る人にして初めて格外にも遊べるのである。方丈の維摩である。

その氣魂である。ただ詩形に固定して浮すなきは存ふべく、時に我々は形式を稱へるはよい。詩の美も散文詩と異するは形式の美にあり韻にあることは知らねばならない。言はずとも當今の境涯人御風には微かに理解されるであらう。若氣の早まりであつた。

續いて、第一の行を出版した一冊は松原至文、萩白明、福田夕咲、加藤介春、人見東明であつた。その「自明集」の合評は「文庫」(四十一年二月一日號)に載つた。

美しい夢だ、夢幻だ。花の香を嗅ぐやうな非現實感だ、自作の心持も空想的憧憬にあつて、強ひて象徴の香氣を纏つたものだ。技巧の爲めの技巧だ、近代的でない、痛切でない。かうした幼稚な詩篇であつた。

これ等の詩篇の當時の詩壇を不快ならしめた事と思ふ。またさうした自心境の創作にも満足せなかつたとも思ふ。併し、これ等は少くとも詩人の詩品の世に出てる標識をほはえた。

自明集は大正十一年頃自明詩集の一頁、一自由像の類になかる書いてゐる。

ここに集めた創作は、自明集、理行自由、その日大正四年を出すまで、詩行を經て、それが九月に亙るまで、凡そ八年間に亙つてゐる。その期間は新しい詩壇に於て少からぬ動搖を生じ、一面詩壇の盛んであつた時代である。新主張の標幟は、象徴の解放といふことであつた。暮鳥もこの時「自明集」が出た。自然「自明集」は新主張に對する犠牲に上げられた觀を呈した。今思ふと「自明集」は不思議にも時代の思想の轉機の上に立たされたものである。わたくしはそれを惜むものでは決してない。わたくしは今日その打撃の恩惠を感謝せねばならぬと思つてゐるのであるが、その當時わたくしは生死の大患に罹り、その後五六年に亙つて、肉體の衰弱と共に精神的には自暴自棄的の苦悩を經驗したのである。幸にも詩にも詩歌的放蕩運動は一般に勢を増した。それは最初相馬御風氏の議論や川路柳虹氏の詩作に依つて端を發したので、殊に川路氏の口語詩は詩非常に氏が出してあられた詩人の上で發表されたのであるが、強烈な外光の下で種々雑多な色と音とを交互反映する諸々の印象的の試作なぞを見て、わたくしは密かに新藝術が生れたと思つた。韻律の拘束のある(日本語の)詩に對して拘束といはるべきほどのものではなかつたが、[illegible]に對して、その拘束を[illegible]詩は寧ろ詩人の方にあるのであらう。」と提議するものだと思つた。併しその當時も今日も、自由詩の第一の興味は口語を用ゐるといふ點にあるのであらう。さうした影響はわたくしにも漸く現はれて來た。今ここに「自畫像」の標題の下に集めた八年間の所作はわたくしの肉體の衰弱と心の動搖と懊惱とを示すもののみである。」

―パンの會 時代

「邪宗門」新派調を創つた北原白秋はその當時、木下杢太郎と長崎は史上に見、郷土に憧つた異國邪宗の文化に憧憬し狂奔した。その思慕はまた遂に佛蘭西趣味、或は印象派の色彩に眩惑し、內部の感熱に喘ぎ、縮法の技術風景に陶醉し、靈魂の意氣を美しみ、詩に歌にまた官能の解放を求め、彼はまたその同好の友、杢太郎等と雜誌「屋上庭園」を發行した。その異國情調の憧憬はまた彼等に後の文學の一つたる「パンの會」の狂飈時代をまで惹き起した。

「パンの會」は四十一年、當時の石井柏亭、山本鼎、森田恒友、倉田白羊等の「方寸」同人と木下杢太郎の交歡の會に成つたものであつた。當時の東京

は古い江戸と新東京との二重奏によつて、少くとも異國的情緒を塗りこまれた、新しいパンの會は江戸情調的異國情調的憧憬の産物であつた。

その頃、白秋は一の邪宗門徒であると共に、幼時の長崎趣味の追憶に、南蠻趣味の小さな情に沈湎し、また樹の花とカステラの新鮮さに綠色のエメロウドの光澤を愛し、また東京の金と青との景物の中に我が感官の管絃樂團を指揮し、充奮し、或は近代の芥子の花色の小唄を連彈した。

かうして骨牌の女王を表紙にした小型の抒情小曲集『思ひ出』(四十四年)が成り、詩集『東京景物詩』其他歌集『桐の花』の草稿をまとめあげた。

杢太郎は未刊詩集『綠金暮春調』或は『食後の唄』(遅れて大正八年初版)戯曲「南蠻寺門前」を書き、秀雄は同じく戯曲「歡樂の鬼」を草した。これらの二つの劇は小山内薫の自由劇場に於てまた上演された。

＊

木下杢太郎について、その友白秋が、彼の詩集『食後の唄』の序にから書いてゐる。

彼は……其の官感の幻法から、不思議にも自ら意識せられない智慧と理義との保持者であつた。彼はこれら情趣の驚異者發見者ではあつたが、彼自らを決してその蠱毒の爲めに役する痴愚と溺没とを敢て爲さなかつた。おお、此の七寶燦爛たる不可思議國の風光の中に在つて、常に黙々として手に太き洋杖を握りつつ徘徊する長身黒服の異相者、彼木下杢太郎の濃顔を見よ。

彼は種々の舶來品——それは珍奇なる多種多樣のエチケッテ、南蠻の異聞、ギヤマン、香料、異酒、奇鳥、更紗の類——を吾徒の間に齎らした。のみならず、彼はまた絶えず、その特殊な紅毛舶來の感覺を以て、新樣の日本、油繪の江戸、銅版の長崎、メッサの小土佐、薄荷酒中の槍さび、西班牙外套の花の昇菊を發見し諦聽した。あまつさへ彼は、清親の錦繪の中に所謂文明開化のモンマルトルの酒舖を漁り、紅提灯と紙の櫻のかげに、かの阿蘭陀のラベイカ彈きの如く、椅子の上にロチの女を乘せ、而してしみじみと夜の三味線を爪ぐらせた。

彼は比類稀な詩境の發見者であつた。だが惜しい事にはあまりにその效果を整理爲ようとしなかつた。彼の逐次の新發見は殆ど目まぐるしいばかりであつた。彼はただ前へ前へと前進するばかりであつた。だから彼の背後には、常に纏まらない興趣の雜駁は、寶石の儘に、瓦は瓦の儘にただ燦々と取り散らされてあつた。

たとへて云へば、彼は驕奢と敏智とに燃えつつた珍卓奇木の間を、蒼白く、一羽の斑猫の光の如く、それからそれへと花粉にまみれてまた未見の新世界へと飛び去つて了ふのであつた。だが、彼は佛蘭西近代詩苑に於ける鬼才ラムボオの如く、驚くべき官感的發見者であり、同じくその收集家で無かつたとしても、それは却て彼の詩人としての獨自性、優秀性を證左するものに外ならぬ。

再び云ふ。世にも奇異なるはわが友木下杢太郎の若き日の行跡であつた。彼はまことに秘密境の憧憬者であり、最も進んだ美の探検者ではあつたが、遂に彼自身は邪宗の法皇に六年の長日月を奉仕して遂に清淨な一個の童貞として老いて了つた支倉六右衞門の如く、結局謹嚴な淨身の童貞として、彼は彼自らの青春の初期を空にして了つた。

闡明にして柑子實る異國趣味の海港に生れ、西域文明の教養と官感とを修練し來つた彼が如き青年と、もともと長崎の近海に生れ、かの阿蘭陀藝術の餘香に直接感染して育つた邪宗系のトンカジョン予が如きとが、その當時、一見して共鳴し感激し歡喜し合つた事は當然であつた。予等は無論互に刺戟し合ひ影響し合ひ、熱狂し合つた。

予等が狂飇時代はかくして豪華であつた。Panの盛宴はかくしてその驕奢の絶頂に達した。

*

その頃、永井荷風は佛蘭西から歸朝し、その好譯『珊瑚集』(出版は大正二年)の詩章を詩界に贈つた。

『三田文學』が創刊された。『スバル』と『屋上庭園』と、かくして同色の三派は團欒し、「パンの會」を中にして、時の騷壇の最も藝術的なる清新なる歡會を、その青春と共に乾杯した。

荷風と同じく前後して歸朝した高村光太郎も、之等頽唐の「心」の放蕩者の中に大きな手と高い脊と、氣品ある微笑とを以て入つて來た。

彼も亦人道的趣味的藝術放蕩の中に耽溺した。

彼は後に追憶して書いてゐる。

「青春の爆發といふものは見さかひの無いものだ。若さといふものの一致だけでどんな違つた人達をも融合せしめる。パンの會當時の思出はなつかしい。いつでも微笑を以て思ひ出す。本質のまるで別な人間達が集まつて、よくも語りよくも飮んだものだ。自己の青春で何もかも自分のものにしてしまつてゐたのだ。銘々が自己の内から迸る強烈な光で互に照らし合つてゐたのだ。いつ思ひ出しても滑稽なほど無邪氣な、燃えさかる性善物語ばかりだ。あの頃、萬事遲蒔な私は外國から歸つて來て、はじめて本當の青春の無鐵砲が内に目ざめた。其が時代的に或る契合點を持つてゐた。前からあつたパンの會に引きずり込まれたのは自然の事であつた。細かい事は大抵忘れた。又忘れてもいいのだ。通り抜けて來た事は私にとつて一つの本能の陶冶になつた。其が貴い。

爆發は爆發だ。爆發してしまふと、あとはもつと眞摯な問題が目をさます。人生のもつと奧の大事なものが幾層倍の強さで、活動し始める。パンの會は自然と退屈なものになつてしまつてお仕舞になつた。私を其の情緒から救つて、私の本然に立返らせたのは智惠子との戀愛であつた。私が私になつたのは其からの事である。」

光太郎も盛んに詩を作つた。口語の殊によき自由詩も。

無論その頃は白秋も杢太郎も以前の定型の象徴詩のみを守つてゐなかつた。大膽と思はれるほどの口語の自由詩を書いた。

「朱欒」

四十四年末、藝術の香氣を香氣とし、交響の清新を清新とする雜誌『朱欒』が白秋編輯の下に創刊された。

その翌年の六月、『朱欒』は白秋、露風の合著詩集『忽忘草』を出した。露風はその前年から白秋と知つた。

彼の詩集『廢園』は『邪宗門』に雁行して世に現れた。『廢園』は和色の表紙で、いかにも若き時代の露風を思はせるものがあつた。次いで彼は象徴の氣韻漸く閑かにして、青き雪のごとく澄みつつある詩集『寂しき曙』を編んだ。

露風の名は『忽忘草』に定まつた。

その『忽忘草』に載せた彼の詩、「現身」その他は早くも東洋的象徴詩人としての完成に近い

彼の宿命をなすものであつた。彼の[illegible]
[illegible]
る皆の[illegible]を成した。

＊

四十五年初夏、白秋は[illegible]の[illegible]に移つた。[illegible]光と[illegible]の[illegible]とは彼を[illegible]代[illegible]宗門の不可思議[illegible]から、[illegible]して、生々[illegible]とした自然の呼吸を彼に吹き込んだ。

水天を隔てて、小笠原の[illegible]たる日光風景が、彼の方へ、彼の方へ[illegible]を照り返つた。彼は遂にまた[illegible]六百[illegible]をはるばると越えて小笠原へ渡つた。

10　大正時代

第[illegible]ふ、[illegible]の明治大正を[illegible]く明治篇を書き了へたのみで、[illegible]に約束の[illegible]数を超過し、更に[illegible]間[illegible]し、今は如何ともすべからざる[illegible]に立ち至つた。就いてはこの大正篇は改めて十分に執筆[illegible]するの機会を得たいと思ふ。[illegible]を乞ひたい。茲に[illegible]少々[illegible]いたものから、[illegible]、[illegible]、[illegible]、短歌自由詩に[illegible]するものをひと通り[illegible]することにした。

前期

新抒情詩時代に開花し、明治末期に[illegible]る頽唐の香気を病的にまで氾濫さした浪漫精神はいつとなくそれ自身にも疲労と倦怠とを感じ初めた。[illegible]生[illegible]。尤もあの[illegible]的な[illegible]り[illegible]に起つた新しい[illegible]であつた。人間の[illegible]を求め自然を[illegible]る[illegible]、[illegible]一味の[illegible]ずにはゐられなかつた。大正初[illegible]ともさうであつた。

[illegible]情も[illegible]が代表するトルストイ系の人道主義が、[illegible]にその初心の清[illegible]と[illegible]な[illegible]気とを以て入り込つて来たことも、一の救ひでもあり[illegible]でもあつた。

夢より現實に醒めて深切に自己をふり返るべき時が来た。そこにはパンの會の自然消滅があつた。

「小生は今疲労してあり、[illegible]に疲労せる小生の心には、[illegible]なる音調に[illegible]して[illegible]して[illegible]あり、凡この高尚なる美、[illegible]ある[illegible]、ファインなる[illegible]に對しては、嘗ては之を得んとあがき、今や到頭得難き境涯にありと思ふや、[illegible]の何むしろ[illegible]を生ずるに到るものあり。（中略）小生の如き思想並に身體の労働者には昔の[illegible]はすでに不相應のものと相成候か。小生の今の状態よりいへば[illegible]して[illegible]この[illegible]なる世界に走らずんば、[illegible]

その[illegible]、[illegible]に[illegible]で、[illegible]も[illegible]者として[illegible]な心[illegible]、[illegible]として[illegible]を[illegible][illegible]と[illegible]たと[illegible]つて[illegible]な[illegible]した。

冬よ
[illegible]に来い、[illegible]に来い
[illegible]はその力、冬は[illegible]。

しく[illegible]れ、つを[illegible]
[illegible]を出せ、[illegible]である、
[illegible]のやうな冬が来た。

[illegible]して、無[illegible]なる[illegible]者の[illegible]は遂にかの[illegible]の[illegible]に[illegible]められた。[illegible]と同じ[illegible]リーチに[illegible]息するに至つた。その後にいよいよ彼は[illegible]した。多く彼の[illegible]は大正期の最も[illegible]した[illegible]集の中の一つであらう。

白秋とても若き日の[illegible]夢から既に[illegible]、[illegible]き醒めた時期にあつた。彼は大正の前期に於て、主として短歌に[illegible]心し、また散文に赴いたが、先の『桐の花』（二年六月[illegible]刊）から、『アルス』（四年[illegible]月創刊）を通じて、室生犀星、萩原朔太郎、山村暮鳥、大手拓次等の[illegible]が[illegible]出し、[illegible]したので

ある。中にも[illegible]にして眞率なる、熱鬱しても烈々たる、朔太郎の極めて獨自なる神經性鋭感と最も近代的なる靑白き心靈の美は、その『感情』一派の[illegible]たる雙璧であつた。暮鳥は、聖三稜玻璃[illegible]、折次はまた日本に無き頽氣と[illegible]術とを『[illegible]の葉』に息吹かした。他の詩境には、柳虹の明にして進取的なる、一貫して自由詩の[illegible]を主張の徹底に努め、加藤介春は暗く獨自に、『太陽の子』福士幸次郎は寡作にして樸茂に、[illegible]精神に人生の堅實性を求むる者に白鳥省吾、百田宗治があり、富田正夫はまた『[illegible]』によつて一躍新人の聲名を獲得した。『[illegible]』の日夏耿之介また高く[illegible]立して、[illegible]ク建築と稱する、矜驕にしてまた深沈たる[illegible]的文字の詩境に一世を睥睨し、西條八十は[illegible]のごとく[illegible]、堀口大學は[illegible]快暢達にして當に泰西の[illegible]を[illegible]へ、『秋刀魚の歌』の[illegible]は[illegible]婉に、[illegible]は典雅にしてなほ若き感情を[illegible]、[illegible]花は[illegible]は遊宕に、健、『[illegible]』はまた[illegible]の好紳士詩を作つた。『[illegible]』の人道[illegible]純よりは天眞にして感覺鮮新なる千家元麿[illegible]、秋[illegible]の[illegible]之[illegible]は[illegible]、いつもかはら[illegible]の人に[illegible]、[illegible]としては内藤鋠策があり、正富汪洋があつた。

『有明集』後、この時期に於ける有明の詩術も決して[illegible]したものではなかつた。何と云つても一流の重厭は堂々たるものであつた。ただ後期に入つてしばらく作が絶えた。他の大家には與謝野寛の『梛の葉』夫人晶子の小詩品共に稍過ぎる程才氣奔逸の若さを見せ、米次郎初めて日本詩の散文詩風の詩篇に活躍し、醉茗また淡々としてその自由詩體に向つた。

若し夫れ、三木露風に至つては、まさしく彼はこの期に[illegible]の信條とする象徵詩人としての一人の完成を示した。その業績については正し[illegible]へらるべきであらう。彼は『白き手の獵人』に於て[illegible]心の域に入り『幻の田園』に於ては更に沈潛の度を增し、東洋の新らしい簡素と藝術[illegible]とを[illegible]切に象徵した。ただ官能交錯の[illegible]を[illegible]にして象徵を說くことは偏執であらう。彼の『[illegible]象徵詩集』中の觀想の精確に於ては[illegible]袋[illegible]當時の詩品が最も高く、その後の[illegible]の[illegible]に至つては遂にその絕頂に達したと言へる。

總じてこの前期より次第に濃厚の度を增して[illegible]は[illegible]的[illegible]に立つ[illegible]と[illegible]人の[illegible]である。ホイツトマン、カアペンタア[illegible]その他、[illegible]譯講演等が盛んに詩の季節と光との中で[illegible]をあげた。

後期

大正六年に日本詩人の綜合的團體である詩話會が創立された。翌々八年にその會より年刊の『詞華集』日本詩集』の第一卷が出版された。十年にはこの會から連袂脫會した露風、耿之介、八十、藻風、蕭々、允大學及白秋等に依つて、新たに新詩會が興された。新詩會はまた直にその詞華集『現代詩集』の第一輯を出版した。この時から日本の詩壇の混亂期が始まつたと云つていい。

詩と散文との甚しい混淆を來したのもこの前後からであつた。形式としての自由詩も、つまる所、詩の洗練されたるリズムの美德に俟たるべきに係らず、單に行を分けた散文としての放漫を一向に恥としたくなつた。デモクラシーの思想が詩話會に滿ち[illegible]がつたための混亂は詩の上のみでなく、正しい詩に對する尊敬と理解とは失はれ、[illegible]たる[illegible]の爲めの[illegible]と[illegible][illegible]に行[illegible]、[illegible]として[illegible]

デリカシイの如きは甚しく侮蔑され、詩の技法も表現上の節調も捨て、散文以下の惡文を以て詩と稱する者が續々と年々[illegible]の徒に現れるに至つて、いよいよ一般の詩壇が惡化し、混亂したのである。純正叙情派、印象派、象徴派、神秘派、影象派、民衆派、新民衆派、未來派、表現派、ダダ派入り亂れて、遂に收拾すべくもなかつた。然しながら反詩話會の氣勢が四方に起つて、實力ある新人も漸く擡頭しかけて來たのも事實であつた。かくして何らかの正しい詩への還元、破壞後の新らしい建設の氣運が底深く動き初めたとも思はれた。この詩壇の激しい渦卷はいつになつたら沈潜した、しかも照光の燦爛たる一つの水面に歸るべきであらうか。

*

だが、詩話會も十五年十一月に遂に解散した。

兎もあれ、大正末期乃至現在に於て、活躍した、またしつつある詩家の名を舉ぐれば、如上の外、佐藤春夫、山宮允、藤森秀夫、佐藤清、福原清、尾崎喜八、大木篤夫、井上康文、中西悟道、多田不二、陶山篤太郎、[illegible]、吉田一穗、[illegible]、[illegible]、[illegible]、岡本潤、萩原恭次郎、深尾須磨子等である。

11 民謠略史

民謠の傳統と意義

本來、民謠は民族の歌謠である。云ふまでもなくその時代々々に於ける民俗固有の、しかもなほ普遍的な生活感情を表現することに民謠の眞率性と素朴性とがある。民謠の歌詞と形體とは常に時代に順應し、その眞髓に於ては古今を通じて一貫した民族の精神を精神としてゐる。この不易性と流行相との渾融、この最も顯著な渾融にこそ、民謠の特徴は光る。しかも民謠の表現は簡潔である。

*

民謠は民族共通の聲である。この故に個の叫びも民衆に浸潤する。民衆全體のものとなり、山野の聲となり、海洋の響となる。無論一々の歌謠に一々の作者はあつた。然しながら、遂には民衆全體の中にその影を沒して了つた。その個の聲は民衆の聲として揚つた。また民衆全體によつて[illegible]、時として[illegible]て來た。[illegible]にある。

*

民謠の興るところ必ず民[illegible]謠の淵源も遙かに神代にあり、[illegible]の文化に徴し、近くは室町時代[illegible]時に、如何に我が日本民族が、又如何に[illegible]にして民族的であつたか、また如何に[illegible]て郷土的土俗的であつたか、思半ばに過ぎるものがあらう。

嚴密に云へば民謠はその生れるところに、俗謠、三絃音樂に伴ふ各種の唄ひもの、或は小唄、琴曲等とはその性質を異にしてゐる。極めて純正なる土俗の野調であるからである。この民衆と郷土との聲であつた日本の民謠も明治時代以來多くはその地方色と野調とを失つて行つた。俗謠化があまりにその處女性を穢して來た。あまりにめまぐるしい文化、あまりに頽廢にして深刻な近代の物質生活、あまりにまた矯激な渡來思想の餘殃から、また交通機關の四通八達とから、民謠そのものの精神も傳統もいつとなく攪亂され、俗化され、墮落させられつつ衰へて來た。今にして本來の面目を保つ民謠の正調は極めて稀なる狀態にある。

明治の創作民謠

明治の二十四年に中西梅花の「蒲のとまや」等が「國民之友」に發表された。新體詩人の民謠風の創作はこれらが最も早いものであらう。然し「蒲のとまや」は純然たる民謠ではなかつた。小唄に近いものであつた。山田美妙の「蒙古襲來」も當時に成つた。之は少くとも民謠的ではある。だが軍歌との混淆である。而も他にはまだ民謠作を見ない樣である。齋藤緑雨は小唄或は端唄のにほひが強い。正岡子規にもその後に二三の俚謠作があつた。俚謠の傳統を知つて之に擬したものであつた。但し、その「內地雜居の歌」は品質ともに俗謠の俗調に過ぎなかつた。面白がりの氣まぐれの餘技と見ていい。森鷗外には日露戰役の時初めて[illegible]の作があつた。これこそ英傑のありのすさびであらう。

明治の三十年代、凡そその十年に亙つて、日本の詩壇には文庫派の詩が盛んに行はれた。その間に夜雨の「お才」が出、郷土的な民謠調を流行せしめた。この「お才」は新民謠發達の上に極めて注目さるべきものである。以來文庫派には民俗に材を取り、また田園の風景に[illegible]したものが一の色となつた。平井晩村等が之を後に承けた。然し晩村等の民謠或は子守唄と稱するものの多くは因へられた俳諧風の新體詩であつて、自覺された民謠とも童謠とも見えなかつた。後から大正の六年に筒井菫坡等と出版した民謠集『茶摘唄』所載の民謠は殆んど前記のものである。ただ中には純然たる口謠或は童謠と見るべき僅少な作品があつた。但しその內容に於ては格別新鮮な感覺も思想も聲調も見えなかつた。

その他、かの明治の三十年代に、詩作の傍ら、時として民謠の創作に漸次熱意を示して來た人に高安月郊、平木白星、前田林外、薄田泣菫、岩野泡鳴等があつた。蒐集、研究、評論等も目に立つて來た。中にも林外の民謠體は、時の詩壇の空氣深く、出格高く、寧ろ近世風の小唄に遡るところがあつた。泡鳴を纏めた古風の節ではあつたが、新時代の[illegible]ではなかつた。當時の詩壇として時に[illegible]泣菫と並び稱せられた蒲原有明は一篇の「不智少女」を残した。その一篇は今日に至るまで作者にも忘れられてゐた珍品である。民謠の中[illegible]としての感覺は既に新しく光つてゐた。なほ彼は後に新しい詩を公にした。[illegible]その內容は象徴の聲調こそは民謠であつたが、[illegible]象徴味の深い詩であつた。

個の民謠集に至つては明治三十八年三月に出版された野口雨情の『枯草』を以て嚆矢とする由である。だが、彼の民謠はただにその片鱗を示して未だ世に顯れなかつた。

北原白秋には、三十七八年の頃、文庫に發表した幾多の詩篇の中に田園の俳味に、傳說土俗等を交へたその一派の新聲を遺つたものを發見する。それらの詩には今日に於ける童謠、民謠の作家としての萌生はあつても、然し純然たる民謠とには及ばなかつた。童に讀ませたものの一篇は、後にパンの會の[illegible]となつたもので、どうにか形を成した彼の最も古い初めての作の一つであつた。明治四十一年の初夏の頃であつた。後に「思ひ出」及び「東京景物詩」等に收められた小唄民謠等の作がある。四十二年の九月に小唄「片戀」、また大正の三年、相州三崎居住中に「城ケ島の雨」、その他小唄に歌曲した短唱をも提唱、發表した。三十一、二の短歌體より何らかの蟬聲を意圖したものである。その後葛飾の紫烟草舎時代に[illegible]等を作つた。

それと同時期、或は前後して、小唄民謠の創作を時に公にした人々に、[illegible]、木下杢太郎、吉井勇、川路柳虹、前田夕暮、[illegible]つた平井晩村等があつた。

詩人の作に成る童謡がむしろ作者の[illegible]流行を來したのは大正の初頭に露西亜のトルストイの「復活」中に松井須磨子によつて歌はれた島村抱月、相馬御風合作の「カチューシャの唄」に因を發した。次で同じく藝術座の「生ける屍」の劇中の唄として大正六年の北原白秋の作、さすらひの唄その他「カルメン」劇中の色々の俗謡小唄の類が引續いた。低調のものではあつたが、詩人の歌謡が民衆の中に傳播し流行すること著しかつたために、童謡民謡の爾後の勃興に或は幸したかも知れぬ。或はまた禍したかも知れぬ。後に雨情の船頭唄「枯れ薄」が震災前の世を盛んに騒がせたことは周知の事實である。

大正期

まさしく時は大正に入つて新民謡の氣勢が昂つて來た。一つには七年七月童話童謡雜誌「赤い鳥」の創刊によつて以來自覺の上に立つた新童謡の作家の簇出雲のごとく、その童謡の普及日に隆んにして、新時代の民謡も愈々確實性を帯びて來つつ、蒐集、研究、論戰もまた愈々に詩壇的となつた。この期に於て白秋の作も最も多かつた。雨情も民謡童謡に復活した。彼は

それは[illegible]の何ものを問はず創作の[illegible]した。

[illegible]童謡においても、[illegible]新たに[illegible]民謡を大に興り、その[illegible]詩人音樂家に提唱して、[illegible]にまき彼等の民謡をなして、土地の[illegible]、民心の商れを抑へつつある。ただ提るべきは之に處する詩人音樂家の良心問題である。

12 新童謡の興隆

童謡と境涯

童謡は童心童語の歌謡である。而もまた純粋なる藝術價値をその價値とするところに、初めて眞の童謡の香氣と生彩が保たれるであらう。

童謡も詩の中の一つの道である。この道を正しく自覺し正しく稚く行ふ者にこそ眞の童謡詩人としての境涯が定まるであらう。

この境涯の童心に常住するといふことは容易ではない。詩人としての寧ろ最奥處の生活であるとさへ思はれる。

童謡の傳統

由來、日本童謡の淵源は極めて古い。上古に

[illegible]ら、[illegible]神話の上に[illegible]しても、[illegible]いものである。[illegible]て、[illegible]た、[illegible]多くに含んでゐた。[illegible]ものがある。この故に成人の或る童謡を成すに當つて、おのづからにその[illegible]を童子の口唱に託したものと見られる。更にも何にも流行唄にはおかなかつた。かうして[illegible]にも吟傳されたものであらう。眞純なる童子の歌謡は爾後に起つた。而もこれは民謡の興隆に連れて發生した自然現象でないことはない。從つて成人の作るところも少からず兒童に與へられた。而も何れもが、この傾向を除いては作者未詳のものであつた。童謡或は民謡の本質から考へてもさうしたものかと思はれる。

童謡が童謡として歌はれた初期のそれらに就いては、記錄の上にもかなりの湮滅があることは昔はれる。ただ室町以降に於て散見し、徳川期に於て蒐集され、また盛んに流行もした自然童謡、歳時唄、遊戲唄、子守唄の如き、引き續いて明治の兒童にまでは田園に於ても市井に於て

も多々繼承されたものである。かうして大正の整理時代に入つたのである。

以上述べたものの歌詞は極めて率直であり、露骨であり、暗示性を潜めてゐる。成人の成すところのものは、徒れて戀愛に滿ち調律にも洗練はされてゐるものの、過ぎては猥雜な民謠の卑俗と淫風とに混淆するに到つて、遂には大人をして顰蹙させる、その種の多くが兒童の遊戲唄にも浸潤して來た。時には何等の藝術的香氣のない童謠、敎訓歌の如きを強ひても琴曲などに合はせずには與へられなかつたのも當然の成行であつたらう。

明治の小學唱歌

明治の小學教育は隆盛した當時の一面のみを見て、傳統ある正しいよい童謠をも排斥し去つた。さうして之に換へるに國土精神に不徹貫つた泰西の音樂と兒童の生活に一致しておまりに無頓な小學唱歌式の敎育を以てした。かうして兒童の生活はまさしく學校と家庭とに於いて分されて了つた。何等の連絡をも其處には見られなかつた。この教育方針ははたしかに過つてゐた。何故ならば日本の兒童は日本の兒童以外の何者でもないからである。祖國の由川を搖籃として育つべき我が民族の子弟が、ほしいままに祖國の傳統から隔離され、その當に直面してゐる鄕土から遊離されて、眞に自由に生き得る道とてある筈はないからである。ここに於いて大正の童謠復興は確かに意義ある開展を示した。從つてまた一般の藝術教育運動が世の兒童の爲めの光輝となり救ひとなつた。

尤も、小學唱歌以前に、兒童の讀物としての唱歌用のものは、これまでにないことはなかつた。然し、藝術作品としての香氣を缺き、低劣であつたことについて、それらは今日の童謠と同一に見るべきでない。若し童謠流行の機運に乘じて、それらも童謠と自稱し混入して却つて對俗關係に於いて宣傳これ努むる者があるならば、由々しき問題でないことはない。却つて、それらは小學唱歌よりも往々に下俗だからである。で、今は問題とすべきでない。

新童謠提唱の意義

傳統としてこの在來の童謠を承けて、その詩人としての本質の上から、明治末期にも二三の作家にその種の作が自然に流露した事はあつた。またかうした傳統の上に更に泰西の子守歌の詩風をも加味した作も試みた向はあつた。然し、一の重大なる運動として眞に詩人たちの自覺の上から發生した今日の童謠なるものは、大正の七年、雜誌「赤い鳥」の創刊を機として、たちまち北原白秋、西條八十、三木露風等によつて澎湃たる波濤をあげたそれであることは既に周知の事實である。この運動に暗示されて以來、復活すべき作者は復活し、新に立つ者は新にたつた。河井醉茗、野口雨情、濱田廣介、白鳥省吾等である。而もまた之に關として起つた兒童自由詩の開拓こそは童心初發の眞精神に兒童の感情の表現を引き戻した近來の大きな眞實運動であると信ずる。

その運動相

この藝術童謠の運動は數ケ年の間に豫想外の隆盛を成した。寧ろ眞實者には困惑と苦笑とをさへも齎らしめるほどの俗惡な流行とまでに墮ちんとしつつある。藝術兒童雜誌の盛行、童謠曲集の續々たる出版、童謠劇の公演、レコードの吹込、ラヂオの放送、遂には無理解な親達と商略者との結託とに依つて、眞の正しい藝術童謠をも偽りに汚濁し、眞の兒童自由詩の向上をも却つて徒に阻止しつつある。眞の運動者と無理解者の誤つた模倣と利用とは實に

心の思想をなして、互に作品の價値たらし
めむとしつつあるのである。換言すれば凡て醒く
る。大正の童謠運動にも既くも寂しいましか
現れ始めた。整頓すべきは最早しなければならない。
眞の價値ある童謠は何もなき本質の光輝を光輝
とするであらう。正しい方向も亦明らかになされる
であらう。降盛必ずしも發達ではなく、危險は必
ずしも危險ではないが、而も當意の無理解に依
る一大鐵槌が今はまさしく有名乃至は兒童自
由詩の上に下らむとしてゐる。低劣さと感傷
的少女詩の跳梁と一知半解の崇拜者の濫讀とに
半は因してゐるとも觀られるが、童謠作家自身
にも何かの責任はあらう。深く心を潜むべき秋
となつた。

童謠の道

この童謠の道こそはまた極めて至難事であると覺悟される。それは少くとも詩人がその年齡相當の詩を自身に成すよりも以上の心靈並びに感覺の洗練を要する。表現の素朴と無邪と單純化とを要する。而もまた考ふるに詩の凡てに流通するものは一である。其處にはまたおのづからな本質の開顯が成されるであらう。

ただ現代の童謠運動も漸く緒についたばかりであつて、在來の日本童謠を復興し整理する以上に、十分に矜るべき異常の進出は未だなされてゐないかも知れない。然し乍ら、幾許かの革新を整理の上に致してしたといふ歡びだけでも各人の努力はかなりに酬いられたといへよう。今後こそはこの日本童謠の傳統を傳統とし、精神を精神とした上での、而も時代の新風體をも自在に創造すべきであらう。

新童謠運動の今日まで

童謠は學校に家庭に、または音樂會に、ラヂオにレコードに、今や滔々として浸潤しつつある。この運動に從つて既に左記の件々が興隆した。

一、詩壇の諸家、有名なると無名なるとを問はず、忽ちこの新運動に共應して競ひ加はつた。

一、新進童謠作家が頻々として輩出した。

一、兒童自由詩の勃興。

一、『赤い鳥』以外に模倣雜誌の頻々とした刊行。

一、舊來の少年少女雜誌も亦、これに詩を載せて、漸く、在來の唱歌風の歌謠を棄てて、いよいよ新らしい童謠を歡迎し初めた。

一、各詩人の童謠集、各音樂家の童謠曲集の出版に加へて、遂には專門の童謠雜誌の刊行さへ相續いで起つた。

一、各新聞雜誌に於ける童謠或は兒童自作の自由詩流行。

一、日本各地の小學校に於ける兒童自由詩奬勵とその開發。

一、國定唱歌に對する童謠の代唱。これは漸次にその勝利を確實にした。

一、兒童自身の自由詩集發行。

等である。

13 兒童自由詩運動

新童謠勃興と共に、また目ざましく、それは豫期以外に目ざましく開花したものに兒童自由詩がある。この誘發指導は主として『赤い鳥』に於て行はれ、北原白秋が當初より常に之に當つた。嚴選、採錄、批評、十年に亙り、一年は一年と向上した。かくして日本の兒童は初めてその本質を發揮し、詩の何たるを自覺し、詩作の喜びを知つた。彼等兒童の世界はかくして詩の詩作、觀照を通じて、彼等自身の生活を愈々

されてゐる。

[illegible]してこの簡素[illegible]を模倣したに過ぎなかつた[illegible]

[illegible]詩形の[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]運動に[illegible]

[illegible]

[illegible]

[illegible]ホを受けないで

[illegible]

[illegible]

二年 [illegible]

六年 [illegible]

十四年

十一月、「小學唱歌集」文部省音樂取調掛[illegible]二編。

十五年

八月[illegible]一、矢田部良吉、

[illegible]

十六年

[illegible]

十七年

[illegible]

十八年

[illegible]

十九年

「[illegible]新體詩選」[illegible]

[illegible]

二十年

[illegible]

二十一年

「孝女白菊の歌」直文。

[illegible]、[illegible]多文庫[illegible]

[illegible]

二十二年

一月 [illegible]

[illegible]

二十三年

[illegible]

二十四年

[illegible]集」[illegible]

[illegible]

十月「[illegible]」[illegible]。
八月「[illegible]」(第二編)美妙。
[illegible]死す。
雜誌「早稻田文學」逍遙により創刊さる。

二十五年

落合直文[illegible]、その門下、鐵幹、[illegible]等始めて新派和歌運動を起す。

二十六年

十一月「[illegible]」湖處子。
雜誌「文學界」透谷、[illegible]、藤村、孤蝶、敏等により一月創刊。

二十七年

一月「[illegible]」[illegible]譯。
十月「透谷集」透谷。
「征清歌集」信綱。
十二月「魂迷月中刄」(劇詩)泡鳴。
この年、泡鳴の詩「女學雜誌」に現る。
醉茗、玉茗等の作品「少年文庫」に發表さる。

二十八年

萬年、樗牛等帝國文學會を起し、雜誌「帝國文學」を創刊す。
九月、有明の處女作「[illegible]」落穗雙紙に現る。

二十九年

三月「[illegible]」([illegible])[illegible]。
七月「東西南北」鐵幹。
十二月「月草」鷗外。
「花紅葉」雨江、桂月、羽衣。
巽軒の敍事詩「比沼山の歌」「帝國文學」及び「太陽」に發表さる。
雜誌「新小說」及び「[illegible]」創刊。

三十年

一月「天地玄黄」鐵幹。
三月「この花」新詩會編。
四月「抒情詩」嵯峨の家、獨歩、花袋、國男、玉茗、湖處子。
五月「かげ草」(譯詩)鷗外。
「松蟲鈴蟲」天遊、天來。
八月「若菜集」藤村。
野口米次郎最初の英詩集 "Seen and Unseen" 發行さる。

三十一年

六月「一葉舟」藤村。
十二月「夏草」藤村。
「黄菊白菊」桂月。
五月、雜誌「文學界」五十八號にて廢刊。
六月、雜誌「[illegible]」[illegible]廢刊す。
八月、[illegible]。
十月、[illegible]出づ。

三十二年

四月「天地有情」晩翠。
六月「[illegible]」[illegible]、露葉、枯柳。
十一月「暮笛集」泣菫。
「[illegible]」[illegible]。
十二月「[illegible]」[illegible]。
蒲原有明の「[illegible]」讀賣新聞、新年附錄に[illegible]によって[illegible]さる。
八月、[illegible]死す、年四十九。

三十三年

五月「わか草」[illegible]、[illegible]、花外。
七月「[illegible]」([illegible])[illegible]。
八月「[illegible]」[illegible]。
十二月「[illegible]」[illegible]。
二月、[illegible]によって大阪より雜誌「小天地」發行さる。
三月、外山正一死す、年五十三。
十一月、大西操山死す、年三十七。
四月、與謝野鐵幹、新詩社を起し、雜誌「明星」を出す。
九月、[illegible]、蒲原有明、[illegible]等によって月刊詩集「片袖」發刊さる。この「片袖」は袖の

形に右の點に圓みをつけてあつた。

三十四年

一月「無弦弓」酔茗。
三月「鐵幹子」鐵幹。
四月「むらさき」鐵幹。
五月「[illegible]」晩翠。
六月「[illegible]暗香疎影」雨江。
七月「小百合」[illegible]城。
「露じも」泡鳴。
八月「落梅集」藤村。
九月「[illegible]集」[illegible]、有明。
十月「ゆく春」泣菫。
十一月「ハイネの詩」柴舟譯。
十二月「[illegible]集」白星、秋曉、夜雨、[illegible]。
「みをつくし」敏譯。
「[illegible]」([illegible])敏譯。
雑誌「明星」の詩人を中心として高踏的戀愛詩流行す。世、星菫詩人と稱す。

三十五年

一月「草わかば」有明。
二月「[illegible]集」臥風。
「つゆ草」みづほのや。
三月「[illegible]」

十月「透谷全集(詩文)」透谷。
「新體詩歌作法」美妙。
十一月「半月集」半月。
十二月「うもれ木」鐵幹。
「玉匣兩浦島(詩劇)」鷗外。

三十六年

二月「日本國歌」白星。
四月「春雪集」月郊。
五月「獨絃哀歌」有明。
八月「社會主義詩集」花外。
九月「長宗我部信親(長詩)」鷗外。
「新韻集」臥城。
十月、新詩社を脱したる林外、泡鳴、御風等、新に東京純文社を組織し、十一月、雑誌「白百合」を發刊し、ロマンチック運動を始む。
當時の詩壇は敍事詩に始まり、情熱派の薄田泣菫クラシック趣味に冷え行くと同時に、蒲原有明從來のクラシック態度より轉じてシムボリック傾向に進み、岩野泡鳴は何時かロマンチシズムに感化されたる傾向を示す。(泡鳴記錄)

三十七年

一月「七つ星」白星。
二月「花外詩集」花外。
「萩の[illegible]」直文。
五月「毒草」鐵幹、晶子。
九月「藤村詩集」藤村。
十月「夕潮」泡鳴。
十一月「新曲浦島(劇)」逍遙。
十二月「歸朝の[illegible]([illegible])」米次郎。
石川啄木の名、この頃より顯はる。

三十八年

一月「戀衣」登美子、晶子、まさ子。
「山上[illegible]」[illegible]みづほのや、山百合、赤彦)。
「心の[illegible]」[illegible]露伴。
三月「夏花少女」林外。
五月「あこがれ」啄木。
「二十五絃」泣菫。
六月「[illegible]」泣菫。
「[illegible]」[illegible]。
七月「悲戀悲歌」泡鳴。
「[illegible]([illegible])」[illegible]。
「春鳥集」有明。
「夏[illegible]」[illegible]。
八月「[illegible]の[illegible]([illegible])」白星。
九月「小野のわかれ」薫。

[illegible]ン死。
十月「[illegible]」泡鳴。
十一月「[illegible]」、「[illegible]孃」逍遙。
十二月「[illegible]」[illegible]、「[illegible]」天隨。
「[illegible]」ヨネ・ノグチ。
「[illegible]の日本」ヨネ・ノグチとオー[illegible]・ミラアとの共著。
六月、岩野泡鳴、雜誌「白百合」を脫して盛んに詩作す。
蒲原有明、上田敏等、佛蘭西象徴派の詩の移植に努む。
詩壇の情勢、俄然一變して、象徴詩、全盛の一新時期を劃す。

三十九年
一月「ゆく雲」花外。
五月「白羊宮」泣菫。
「玉蟲」[illegible]。
「孔雀船」清白。
六月「東海遊子吟」晩翠。
「[illegible]草」[illegible]月[illegible]。
「花妻」[illegible]。

「[illegible]」[illegible]
「[illegible]」[illegible]
七月「あやめ草」(一)[illegible]
「花守日記」夜雨。
「あらゝぎ」[illegible]。
九月「穉遊」白星。
十月「さゝ笛」白羊。
十一月「[illegible]」[illegible]。
「泡鳴詩集」泡鳴。
「ゆめみ草」[illegible]。
十二月「[illegible]」(同[illegible])[illegible]
[illegible]、「[illegible]」「[illegible]苑」を[illegible]
蒲原有明、上田敏等により[illegible]
二、象徴派的詩風の影響[illegible]
「[illegible]文章世界」三月[illegible]
米次郎主唱の下に、四月、日[illegible]
人の合同成り、晩翠、泣菫、有明、林外、
泡鳴、花外、白星、醉茗、[illegible]、[illegible]、[illegible]、
露葉等のあやめ會組織さる
八月、敏「音樂新報」に民[illegible]の[illegible]
集の急務を主張す。
あやめ會に紛[illegible]、林外、花外、白星
等前後して[illegible]す。
雜誌「白百合」十一月[illegible]、第[illegible]民[illegible]と
して[illegible]、[illegible]に[illegible]、民[illegible]の[illegible]
しある。

四十年
一月「天[illegible]」[illegible]
「[illegible]の[illegible]」[illegible]
二月「二十八[illegible]」[illegible]
三月「[illegible]花夜曲」雨[illegible]
「日本民謠全集」林外。
九月「うた日記」鷗外。
十一月「日本民謠全集續編」林外。
十二月「新體詩作法」[illegible]
醉茗、夜雨を中心として、[illegible]の人[illegible]詩草社を結ぶ。
御風、東明、介春、露風、[illegible]等、早稻田詩社を起す。
雜誌「白百合」廢刊す。
六月、詩草社[illegible]「詩人」創刊さる、
九月、柳虹[illegible]、現代日本の自由詩[illegible]、之により詩壇の
新氣運漸く熟しきたる。
十月、薫園に[illegible]思潮[illegible]創刊。
十二月、泡鳴「[illegible]詩史」を、新思潮に連載しはじむ。
米次郎の有明、泡[illegible]等に關する英文評論

「詩人」に發表さる。

四十一年

一月　「都市詩集」([illegible]) 臥城。
　　　「有明集」有明。
四月　「[illegible]の盃盤」[illegible]鳴。
五月　「[illegible]蓮華」[illegible]紅。
六月　「御風詩集」御風。
十月　「新自然主義」(評) 泡鳴。

一月、白秋、正雄、秀雄、勇、新詩社を連袂退社す。

雜誌「新思潮」二月號限り廢刊す。

口語的自由詩なる御風の「痩犬」、露風の「暗い扉」出で、泡鳴、嘉香、[illegible]等その是非を論ず。

雜誌「詩人」廢刊さる。

八月、[illegible]、林外、花外、臥城、露葉、醉茗等、都會詩社を結び、都會詩を發表す。

十一月、雜誌「明星」百號を以て廢刊さる。

四十二年

三月　「邪宗門」白秋。
九月　「廢園」露風。

一月、鷗外を中心に舊新詩社同人、寛、晶子、萬里、啄木、勇、露花により雜誌「スバル」創刊さる。杢太郎、白秋、秀雄等外部より聲援す。

五月、東明、介春、夕咲、朽葉等により自由詩社成立。月刊詩集「自然と印象」發刊さる。

十月、白秋、正雄、秀雄等により雜誌「屋上庭園」發刊さる。

四十三年

五月　「霧」醉茗。
七月　「檞の葉」寛。
九月　「路傍の花」柳虹。
十一月　「寂しき曙」露風。

雜誌「屋上庭園」風俗壞亂にて禁止さる。

三月、牧水を中心に、詩歌雜誌「創作」發刊。

荷風の主幹にて雜誌「三田文學」創刊さる。

[illegible]及び美妙逝く。

十一月、雜誌「劇と詩」發刊さる。

四十四年

六月　「思ひ出」白秋。
　　　「夜の舞踏」東明。

[illegible]月、夕暮、白日社を起し、雜誌「詩歌」を發刊す。

[illegible]月、「新思潮」廢刊さる。

白秋、雜誌「朱欒」を創刊す。

四十五年

一月　「夜雨集」夜雨。
　　　「春の夢」夕咲。
四月　「平和」白星。
五月　「夜の葉」葵村。
七月　「夜」宗治。

四月、啄木逝く。

牧水、雜誌「自然」を創刊す。

「朱欒」六月號は、全紙を擧げ、白秋、露風の詩歌を輯錄し、詩集「勿忘草」として發行す。

15　敍事詩・劇詩略年表

敍事詩及び劇詩については、なほ書くべき多くがあつたが、事情上許されぬので、ここにその重要なる作品の略年表を揭げることにした。新體詩草創期の初頭より四十五年まで、明治年間の分である。

「十二の石塚」	(敍事)	半月。	十八年十月(單行本)
「孝女白菊の歌」	(敍事)	直文。	二十一年「東洋學藝雜誌」
「蓬萊曲」	(劇詩)	透谷。	二十四年(單行本)
「天地[illegible]發」	(敍事)	半月。	二十六年一月「國民之友」
「琵琶法師」	(劇詩)	藤村。	二十六年一月「文學界」
「魂迷月中劍」	(劇詩)	泡鳴。	二十七年「女學雜誌」

「朧夜の月」(叙事) 天籟。二十八年「早稲田文學」
「比沼山の歌」(叙事) [illegible]。二十九年「帝國文學」
「深山の美人」(叙事) 南江。二十九年「帝國文學」
「墨染櫻」(叙事) 狩衣。二十九年「帝國文學」
「馬前の夢」(叙事) 晩翠。三十一年「反省雜誌」
「星落秋風五丈原」(叙事) 晩翠。三十一年「帝國文學」
「嘉播の親」(叙事) 泡鳴。三十二年「學窓餘談」
「黒龍江上の悲劇」(叙事) 晩翠。三十三年「帝國文學」
「玉匣兩浦島」(劇詩) 鷗外。三十五年十二月(單行本)
「心中お小夜新七」(叙事) 白星。三十五年「片袖第三集」
「源九郎義經」(叙事) 新詩社同人 三十六年(本文參照)
「日本武尊」(叙事) 新詩社同人 三十六年(本文參照)
「雷神の歌」(叙事) 泣菫。三十六年「明星」
「金剛山の歌」(叙事) 泣菫。三十六年「新小說」
「國土創成賦」(叙事) 有明。三十六年「太陽」
「佐太大神」(叙事) 有明。三十六年「獨絃哀歌」
「新鶯曲」(叙事) 有明。三十六年「獨絃哀歌」
「豐太閤」(叙事) 泡鳴。三十六年「富寶新聞」
「鳴門姫」(叙事) 泡鳴。三十六年「白百合」
「地獄の卷」(劇詩) 紫紅。三十六年
「日蓮上人」(劇詩) 紫紅。三十六年(單行本)
「後の羽衣」(劇詩) 紫紅。三十六年(單行本)
「長曾我部信親」(叙事) 鷗外。三十六年(單行本)
「オルフォイス」(樂詩) 鷗外。三十六年(單行本)

「天馳使の歌」(叙事) 泣菫。三十七年十一月「新小說」
「魔出現」(叙事) 白星。三十七年「帝國文學」
「丸に井桁」(叙事) 白星。三十七年「明星」
「新曲浦島」(劇詩) 逍遙。三十七年十一月(單行本)
「鏽斧」(叙事) 有明。三十八年一月「明星」
「遺る曲」(叙事) 有明。三十八年「春鳥集」
「姫が曲」(叙事) 有明。三十八年「春鳥集」
「人肉狂賣」(象徴詩的劇詩) 泡鳴。三十八年「太陽」
「海堡技師」(劇詩) 泡鳴。三十八年(單行本)
「かぐや姫」(劇詩) 逍遙。三十八年(單行本)
「脫走兵」(叙事) 泡鳴。三十八年「夕潮」(單行本)
「耶蘇の戀」(劇詩) 白星。三十八年八月(單行本)
「黄金鱗」(叙事) 泡鳴。三十九年一月「太陽」
「葛城の神」(叙事) 泣菫。三十九年七月「早稲田文學」
「釋迦」(叙事) 白星。三十九年十月(單行本)
「史詩近藤重藏」(叙事) 白羊。三十九年十一月(單行本)
「人魚の海」(叙事) 有明。四十年一月「太陽」
「平和」(劇詩) 白星。四十五年四月(單行本)

16 大正詩書及詩史略年表

二年

四月 「珊瑚集」荷風譯。
五月 「三人の處女」莫鳥。
七月 「啄木遺稿」啄木、「東京景物詩」白秋、
「祈禱」[illegible]。
九月 「白き手の獵人」露風。
十一月 「獨[illegible]詩集」[illegible]。
十二月 「どんたく」夢二。
「露風詩集」露風。
六月、雜誌「朱欒」廢刊す。

三年

一月 「夏より秋へ」晶子。
四月 「獄中哀歌」介春。
「太陽の子」幸次郎。
五月 「西灘より」佐藤清。
「かなたの空」柳虹。
六月 「世界の一人」省吾。
九月 「眞珠抄」白秋。
「俚謠集」文部省文藝委員會編、
十月 「道程」光太郎。
十一月 「りらの花」寛。
十二月 「白金の獨樂」白秋。
「果樹園」健。
「戀心」東明。
「透谷全集」透谷。
二月、露風、柳虹、嘉香、[illegible]良、[illegible]、[illegible]、八十

等相集り、未來社より季刊詩集「未來」第一輯を出版す。

この頃より詩に民主的精神の必要なることを高潮しその論議各誌に現る。

四年

一月「浮彫」藻風。

二月「透谷全集」藤村、禿木、天知、秋骨編。

三月「戀のしやれかうべ」泡鳴。

「マンダラ」マンダラ詩社。

四月「末日頌」碎花。

「明治詩歌選」新潮社編。

五月「鬱金草」藻風編。

六月「最初の一人」宗治。

七月「幻の田園」露風。

八月「鴉と雨」寛。

九月「沙羅の木」鷗外。

十月「日本詩歌論」米次郎。

十一月「良心」露風。

十二月「聖三稜玻璃」暮鳥。

「小夜曲」夢二。

柳澤健「輓近の詩壇を論ず」を「文章世界」に發表す。

十二月二十日、平木白星四十歳を以て逝く。

五年

一月「正義の兜」惣之助。

「農民の言葉」正夫。

二月「天華詩集」省吾。

三月「民主主義の方へ」碎花譯。

五月「舞ごろも」晶子。

七月「雪と花火」白秋。

九月「一人と全體」宗治。

犀星、朔太郎等によつて、六月、雜誌「感情」發刊さる。

敏、京都に於いて逝く、年四十。

藤村、フランスより歸朝す。

耿之介、碎花、健、省吾、八十、允等によつて十二月、雜誌「詩人」發刊さる。

六年

一月「旅人」芳水。

二月「月に吠える」朔太郎。

十月「狂へる歌」惣之助。

十二月「轉身の頌」耿之介。

「子守唄」泣菫。

「靈魂の秋」春月。

朔太郎「文章世界」五月號に、「露風一派の詩を追放せよ」を發表し、世の注目を惹く。

八月二日、柯葉、白楊（共に二十九歳）犬吠崎君ケ濱附近に一[illegible]死す。

十一月、詩話會成る。

七年

一月「愛の詩集」犀星。

三月「ふるさと」芳水。

四月「昨日の花」大學譯。

五月「自分は見た」允。

七月「ダンテ神曲」敏譯。

九月「啄木選集」（詩歌）啄木。

「抒情小曲集」犀星。

十月「月郊詩集」月郊。

「感傷の春」春月。

「勝利」柳虹。

「ぬかるみの街道」宗治。

十一月「風は草木にさゝやいた」暮鳥。

「詩文研究」允。

十二月「海港」柳澤、熊田、北村合著。

三重吉「赤い鳥」を發刊し、童謠の創始につとめ、白秋、八十の童謠、世間の注視を惹く。

八年

一月「月光とピエロ」大學。

二月「ハイネ詩集」春月譯。

三月「地の子」碎花。

四月「日本詩集」詩話會

「泰西名詩名譯集」春月譯。
「[illegible]」[illegible]人。
「[illegible]」[illegible]。
四月 「流れの[illegible]」[illegible]。
「日本象徴詩集」[illegible]社編。
「第二愛の詩集」犀星。
「[illegible]」[illegible]。
「ゲエテ詩集」[illegible]譯。
五月 「蛙」鷗外。
「ホイットマン詩集」省吾譯。
「曙光」晩翠。
「愛と音樂」佐藤清。
六月 「大地の愛」省吾。
「都會と田園」雨情。
「はつ戀」柳虹。
「砂金」八十。
七月 「啄木全集」(詩歌) 啄木。
九月 「白秋小唄集」白秋。
十月 「晩翠詩集」晩翠。
「こけもゝ」秀夫。
「トンボの眼玉」(童謡集) 白秋。
「聖水盤」[illegible]子。
「童謡」節三編。
十二月 「春月小曲集」春月。

[illegible]「[illegible]」[illegible]以下同十二號まで詩を載す。

九年
一月 「食後の唄」杢太郎。
「白孔雀」八十譯。
「[illegible]」[illegible]。
二月 「わすれなぐさ」白秋。
「惱める森林」不二。
「感情同人詩集」犀星編。
三月 「幻の日に」省吾。
「詩聖ゲエテ」昌樹。
「雀の生活」白秋。
四月 「トラウベル詩集」正夫譯。
「哀樂兒」(詩) 正夫。
六月 「展望」幸次郎。
「靜かなる眉」八十。
「天馬の道に」晩翠。
「韻律と獨語」春聲。
「香炎華」矢部季。
「槐多の歌へる」槐多。
「ハイネ全集」春月譯。
「日本現代名詩集」康文編。
七月 「日本詩集」詩話會。

「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]詩集」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]譯。
「[illegible]の愛」[illegible]。
八月 「[illegible]」[illegible]。
「寂しき都會」犀星。
「[illegible]詩集」白秋。
九月 「[illegible]」[illegible]。
「牧神詩集」牧神會編。
「憧憬の[illegible]」省吾。
「漱石全集」(漢詩を收む) 漱石。
「水の[illegible]に書きて」大學。
「私の花環」春月譯。
「百田宗治詩集」宗治。
「現代詩集」耿之介編。
十月 「生と戀」露風。
「[illegible]」[illegible]、佐藤共著。
「牧羊神」敏。
十一月 「失はれた寶玉」大學譯。
「正午の果實」初雄。
「豐麗な花」汪洋。
「[illegible]間の幻影」露風。
十二月 「草の葉」[illegible]花譯。
「滿月の川」惣之助。

[illegible]

五月、[illegible]、[illegible]四十八號を以て[illegible]く。

十年

一月、「[illegible]」八十。
「白秋詩集第二卷」白秋。
「見なれざる人」[illegible]。

二月、「樂園」[illegible]。
「別後(詩集)」雨情。
「不思議な影像」[illegible]清。
「現代佛蘭西詩集」[illegible]譯。
「[illegible]詩人[illegible]」[illegible]會編　島崎藤
[illegible]

三月、「[illegible]」[illegible]。

四月、「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]。

五月、「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]。

六月、「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]。

「放浪者の詩」逸枝。
「十五夜お月さん(詩集)」雨情。
「黑衣聖母」耿之介。
「日本詩集」詩話會。
「日本民謠名作集」雨情、史光編。

七月、「サマン選集」大學譯。
「洗心雜話」白秋。

十月、「小唄」敏編。
「明るい時」光太郎譯。
「日本童謠選集」八十、勉編。

十一月、「愛のゆくへ」東明。
「ホヰットマン詩集」武郎譯。

十二月、「[illegible]月」宗治。
「深紅の人」惣之助。
「合掌の春」健。
「世界の魂」正夫。
「曙の聲」柳虹。
「三重國籍者の詩」米次郎。
「雪の[illegible]」八十。
「[illegible](詩集)」露風。
「[illegible]碎花詩集」碎花。
「[illegible]」白秋譯。

二月、[illegible]五十年祝賀の會、[illegible]會によって[illegible]、[illegible]「現代詩人選集」發刊さる。

三月、白秋、耿之介、八十、允、藻風等、詩話會を脱し、別に新詩會を起す。
新詩會編、「現代詩集」第一輯出づ。
寛、晶子、荷風外五氏により、十一月、雜誌「明星」復活さる。
平戸廉吉「日本未來派運動第一回宣言」の第一聲を擧げ、日本最初の未來派詩人を以て立つ。

十一年

一月、「愛の歌」藤村。
「汪洋新詩集」汪洋。
「泰西社會詩人詩集」豐彦、一夫、碎花、宗治、省吾、正夫共譯。
「日本社會詩人詩集」同前編。

二月、「見知らぬ愛人」八十。
「美想曲」逸枝。
「靑い翼」宗治。
「星より來れる者」犀星。

三月、「[illegible]」[illegible]。
「[illegible]の歌」正夫。
「室生犀星詩集」犀星。
「日本詩集[illegible]」詩話會編。

四月、「[illegible]」[illegible]。

五月
「日本の笛」白秋。
「[illegible]一つ落つ」米次郎。
「新しき欲情」朔太郎。
「新しき小徑」大學。
「軽やかな散歩」惣之助。
「赤彦童謡集」赤彦。
「忘れた額」治郎。
「空と樹木」喜八。
「沈黙の血潮」米次郎。
「蠟人形」八十。
「英國神秘詩抄」耿之介譯。

六月
「象徴詩集」露風。
「[illegible]めの園」春月。
「萬物の世界」(譯詩) 暮鳥。
「共生の旗」省吾。
「信仰の曙」露風。
「有明詩集」有明。
「高原の處女」(譯詩) 正夫。
「祭の笛」(童謡) 白秋。
「田舎の花」犀星。
「豫言」柳虹。

七月
「午前の愛撫」健。
「夜の河」元麿。
「月夜の園」大學。

八月
「温室の花」柳虹。
「季節の馬車」惣之助。
「青き樹かげ」露風。
「若き郷愁」省吾。
「時代人の[illegible]」[illegible]。
「[illegible]人」[illegible]。
「觀相の秋」白秋。
「月光微[illegible]」白秋。
「初冬の星」白秋。
「落葉松」白秋。

九月
「月に[illegible]」[illegible]、高橋[illegible]。

十月
「風車」[illegible]。
「歩む人」[illegible]。

十一月
「琉球諸島風物詩集」惣之助。
「夢の小函」(童謡) 白秋。
「螢と菖蒲」(童謡) 白秋。
「こんこん小山」(童謡) 白秋。
「朝立つ虹」(童謡) 白秋。
「城ケ島の雨」(小唄) 白秋。
「朱欒の港」([illegible]) 白秋。
「英詩選集」[illegible]。

十二月
「愛慕」省吾。
「古風な月」耿之介。
「眞紅の溜息」須磨子。

「一生に[illegible]一[illegible]」[illegible]
四月、柳虹・[illegible]八[illegible]で[illegible]派とその[illegible]を[illegible]白秋、[illegible]主[illegible]の下に、[illegible]「[illegible]」[illegible]

十二年
一月
「上田敏詩集」敏。
「[illegible]集」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]郎。
「[illegible]」[illegible]。

二月
「[illegible]集」[illegible]。
「雪にかへ[illegible]」[illegible]。
「[illegible]の序曲」春月。
「ダダイスト新吉の詩」辻潤編。
「我一九二二年」春夫。
「樹木」[illegible]。
「[illegible]西詩[illegible]」[illegible]。

三月
「バーンス詩集」春月譯。
「ワイルド詩[illegible]」[illegible]譯。

四月
「最後の[illegible]」米次郎。
「海の詩集」佐藤清。
「散華樂」勝五郎。

五月
「砂上の夢」雨情。
「我が子を見よ」米次郎。

「[illegible]」[illegible]。
「日本詩集」詩話會。
「遠きばら」大學。
「純愛詩集」春月。

六月 「水墨集」白秋。
「ポオ全詩集」佐藤一英譯。
「夢心地」春月。

七月 「颶風の眼」惣之助。
「こがね蟲」光晴。
「蝶を夢む」朔太郎。

十一月 「災禍の上に」詩話會編。
「花咲爺さん」（童話）白秋。

九月一日、東京大震災のため、雜誌は殆んど休刊し、「詩と音樂」「詩聖」十一月より廢刊す。

十一月、詩話會は、宗治、省吾、柳虹共編の下に、詩壇四十八家の震災に關する詩を集錄せし「震災記念詩集・災禍の上に」を出版し、その收入を以て罹災せる詩人救濟の費に充つ。

十三年

三月 「火山灰」勝五郎。
「地上に[illegible]」春月。
「現代抒情詩選」白[illegible]。

四月 「神秘思想と近代的評論集」耿之助。

五月 「[illegible]と螢」惣之助。
「日本詩集」詩話會。
「ヨネ・ノグチ代表詩」米次郎。
「西條八十童謡全集」八十。
「高層雲の下」喜八。
「火星」啓。
「世界童謡集」八十、まさる共譯。

六月 「青い眼の人形」（童謡集）雨情。
「日本詩集」左翼戰線詞華集。
「あしの葉」白秋。
「海の瞳」正夫。

七月 「隣人」英治。
「白秋童謡集」白秋。
「雨情民謡百篇」雨情。

八月 「光の獻詞」勝太郎。
「水を歩みて」惣之助。
「花遍路」[illegible]堂。
「[illegible]」[illegible]風譯。
「嘆きの孔雀」正夫。

九月 「銅牌」篤太郎。
「眞夏の星」元麿。
「爽かな空」丈二。
「現代詩の研究」省吾。

十月 「[illegible]人の子」正夫。
「現代抒情小曲[illegible]」八十。
「月の出」福原清。
「詩壇の散歩」耿之助。

十一月 「[illegible]」[illegible]春月。

十二月八日、暮鳥、常陸磯濱に逝く、年四十一。

十四年

一月 「世界の民衆に」汪洋。

二月 「風、光、木の葉」正夫。
「明治大正詩選」詩話會。
「筑波の白百合」正夫。

三月 「春の詩（[illegible]）」省吾。
「[illegible]」[illegible]子。

四月 「上田敏詩集」敏。
「啄木詩集」啄木。
「はつ戀」（小曲）柳虹。
「自然の[illegible]み」春月。
「日本詩集」詩話會。
「詩岳に登る」允。

五月 「季節の窓」白秋。

六月 「死の島の美女」正夫。
「幻想詩[illegible]」正夫。
「[illegible]地へ」（[illegible]）省吾。

七月「日本童謠集」童謠詩人會。
「よしきり」(童謠) 暮鳥。
「小鳥と花」廣介。
「白秋詩集」(一) 白秋。
八月「純情小曲集」朔太郎。
八月「ハイネ小曲集」春月。
九月「月下の一群」大學譯。
十月「一人の畑より」汪洋。
「情熱の壼」正夫。
十一月「日本現代詩選」白秋、柳虹、露風共編。
「新しき欲情」朔太郎。
十二月「表象抒情詩」米次郎。
「千家元麿詩集」元麿。
「動物詩集」大學譯。
「青空を見る」省吾。
「日本童謠集」(一九二五年版)出版さる。
河井醉茗生誕五十年記念の祝賀會及び講演會、築地小劇場、上野精養軒に於て行はれ、白秋、露風、柳虹共編に成るその祝賀記念出版「現代日本詩選」、河井氏に獻呈さる。

十五年

一月「夢見草」(小曲) 正夫。
二月「眼と眼」介春。
「砂の枕」大學。
三月「北[illegible]と[illegible]」[illegible]。
「[illegible]」[illegible]人。
「夜の[illegible]」不二。
四月「巴里小[illegible]」八十。
「日本詩集」詩話會。
五月「幻の巨人」(詩集) 正夫。
「野茨の道」省吾。
六月「からたちの花」(童謠集) 白秋。
「螢の燈臺」(新謠集) 雨情。
「詩學雜考」峰人。
七月「おさんだいしよさま」(民謠集) 雨情。
「風景は動く」白秋。
「神と人」露風。
「日本童謠集」童謠詩人會編。
「戀愛詩人」米次郎。
「自然禮讃」米次郎。
八月「月夜の牡丹」暮鳥。
「兵隊」大鹿卓。
「夏草」元麿。
九月「象の子」(童謠集) 白秋。
「秋に見る夢」篤夫。
「第二表象抒情詩」米次郎。
十月「現代民謠選集」[illegible]編。
「お月さま」(童謠) 露風。
「三富朽葉詩集」[illegible]。
「日本民[illegible]」[illegible]。
「黒い[illegible]」[illegible]。
十一月「[illegible]」[illegible]之介。
「[illegible]の[illegible]」吉田一穗。
「三木露風詩集」露風。
「彼女」八十。
「情熱詩集」惣之助。
「水の流浪」光晴。
五月、故山村暮鳥の詩碑、水戸大洗海岸に建立さる。
七月、藤村の詩碑、信州小諸に建立さる。
十月、詩話會解散す。
十一月、白秋により雜誌「近代風景」創刊さる。

北原白秋

明治大正漢詩史概觀

僞唐詩時代

岸田吟香は曾て日本に於けるあらゆる詩集を支那の碩學兪曲園に送り、曲園はその詩集類を材料として『東瀛詩選』と題する厖然たる大詩集を選びそれを刊行した。これが支那において出版された日本の詩選の嚆矢であるが、その書中に次の如く云つて居る。

東國之詩。至二徂徠一而一變。蓋徂徠提二倡古學一。而服南郭又從而張レ之。於レ是家有二滄溟之集一。人抱二弇洲之書一。爭唱二盛唐一。洋々乎盛矣哉。

曲園この言の如く、日本の詩は徂徠に至りて一變したることは事實である。かく一變とは云ふものゝ實はその以前の日本の詩は露骨に云へば大體物になつて居らぬといふ方であつた。徂徠出でゝ明代の李王(李は李攀龍、字は于鱗、滄溟と號し、王は王世貞、字は元美、鳳州と號し、晩に弇洲山人と號す)の詩を鼓吹し、天下翕然として風靡した。徂徠は明の七才子その他の詩を選び『唐後詩』と題する詩集をも出版した。この『唐後詩』といふ意味は、唐以後には詩はない、その之あるは只明代ばかりであると云ふのである。何は兎もあれ識見と學問とを以て一代を壓倒しつゝある徂徠大先生の宣明なれば當時の學者詩人は一齊に雷同して了つた。

然るに茲に意外千萬なるは徂徠の門下から一大謀叛者が現れ出た。勿論それは徂徠の死後であるが、兎に角門下から謀叛者が現れ出た。それは誰れあらう、太宰春臺である。春臺は徂徠の門下において經術には太宰春臺あり、文章には服部南郭ありと稱せられた程の人である。春臺は『文論』『詩論』の二書を著しこれを公にして、徂徠が奉じて以て金科玉條とした李王二家の詩文を排擊して木葉微塵に攻擊粉碎し去り、最後に次の如く云つて居る。

嗚呼。向使下徂徠先生不レ死十年上、必見二明詩之可一レ厭。不二復好一レ之。純非下敢逆二先師一而立中異說上。吾愚偶見下明詩之大異中於唐詩上故也。

つまり徂徠先生がもう十年生きて居られたなら明詩と唐詩とは大に異つて居ることを知り、明詩の厭ふべきものであることを悟られたであらうといふのである。

世人、中にも蘐園一派(徂徠の學派)は驚異の目を以て春臺のこの意見を眺めたが、春臺の明詩攻擊も一理窟あるので、暫らくは五里霧中に陷つた形であつた。

僞宋詩時代

斯かるところへ山本北山は明詩は僞唐詩であると喝破し、學ぶべきは宋詩であるといふことを唱へ出した。而して服部南郭などの盛んに推奨した『唐詩選』も僞物であると論じた。それ等の詳細は北山の著した『孝經樓詩話』だとか、『作詩志彀』だとかいふ書中に八ケましく論ぜられてある。

今その『唐詩選』が僞物で、明詩は僞詩であるといふ北山の言分はどんなことであつたかを知らうとする人々の爲めに『孝經樓詩話』中にある一二節を左に摘まんで見よう。

彼の邦にては『唐詩選』をば市井の賈人利を貪る者、李于鱗の名をかりて僞作せるものと片付けて學者は曾つて取りあはず、只鄕

[illegible]に致ゆることと見し、[illegible]と雖も偉大なるを知らず、[illegible]詩作の規模とするもの今に[illegible]ず。

右の如く云つて居るが、「[illegible]」の巻頭に掲げてある[illegible]の序文であるが、確かに攀龍の文章であつて、「古今詩刪」の序文であるといふのである。それから明詩は偽詩であるといふ點に就いては左の如く「孝經樓詩話」に云つて居る。

明の詩人、多く盛唐を口實とし、句々雷同、篇々一律、その殊に甚しきものは李[illegible]、李于鱗にあり、その極致たゞ盛唐の口拍子よきものを模擬剽竊するまでなり、これを名けて偽詩といふ、すべて偽詩に眩惑するものは生涯詩の眞趣を知らず。

山本北山はずつと右の如くに徂徠一派の鼓吹した明詩を攻撃して、新たに宋詩を鼓吹したのである。かくて明詩は衰亡して宋詩の時代となつた。

宋詩の擡頭は何人の力であつたかと云へば山本北山の力であつた。そのことは北山自身の書いた「[illegible]」の序文にも左の如く見えて居る。

[illegible]

それから、北山の詩話には左の如く云つて[illegible]

[illegible]

菊池五山は右のやうに、偽唐詩は亡びたが、更に又偽宋詩が現れ來たのはどうしたものだと云つて居る。偽唐詩に代りて新たに擡頭した宋詩をかくの如く偽宋詩と云つたのは、五山の[illegible]ジャレとして片付ける譯には行かぬ。當時少しく識見ある人はかく思うたに相違ない。その實例として見るべきは柴野栗山や[illegible]などの諸文あれども茲には略す。

明治時代

明治時代の詩の天下は一括して云へば宋の天下であつて、その前半は[illegible]の天下、その後半大部分は[illegible]の天下であつたといふべきである。

詩風の上から明治時代は宋詩であつたか、それとも明詩であつたかと云へば、宋明を更に降る[illegible]

[illegible]

たが、春濤のこの□□□□□□詩壇に□□□□□に效果があつたとは思はれぬ。

星社の勃興

青厓、種竹、黴香三人の發意で、一大吟社を興さうではないかといふ計畫が出た。その旨意は舊來の老詩人はもはや我々の相手にするには足らぬ、新進の人々のみを以て吟社を組織し、詩壇に一生面を開かんといふのであつた。それより槐南一派に交渉したるに槐南もこれに賛同して、門下を率ゐて參加することに決まり、かくて星が岡茶寮に詩會を開き「星社」と命名した。而して槐南は春濤以來の門下もあることとなればこの吟社の主盟といふことに推し立てた。當初の會員は三十名位あつたさうである。そして每次の詩會で詩を作り、それを當時の新聞の文藝欄に掲載したので中々目覺ましきものであつた。星社の精神からしては各家の詩作などは國民新聞に見るのみで、老詩人側は甚だ振はなかつたと評すべき有樣であつた。この星社は確かに明治の詩壇を動かした大なる原動力であつたのである。□って星社には面白き作品もあるが、今はそれに及ぶ暇がないから他日に譲つて置く、

青厓の出現

明治中頃のことであつたが、三條公は日光の別莊に詩人連を招待されたことがある。その時、公は森槐南を通じて國分青厓を招待された。その時列席の面々は嚴谷一六、矢土錦山、森槐南、國分青厓の四名で外に久保楓谷（此の人は公の祕書）都合五名であつた。この時、三條公の是等詩人に對する應接ぶりは嚴谷以下はお役人にて公から見れば召使同樣だが、獨り青厓はお役人でないので別つて貰い、主賓として上席に据ゑられ諸君よりも先に御盃を賜ふといふ按排で、槐南はビリコケに置かれ家來同樣であつたので當人にも餘り面白くなかつたと想像される。この招待の折に青厓の作つた「風雨觀華嚴瀑布歌」と題する長篇の古詩がある。その詩が數日後の日本新聞に揭げられた。副島蒼海伯は新聞にこの詩を一讀して大に感服されたと見え、幾日かの後にその次韻一篇を作り、それを東見の詩人たる青厓のもとへ贈られた。青厓は蒼海のこの次韻に更々と歎息を加へて二日本新聞に掲出した。青厓のこの詩篇は長いから略してその末の方に在る一節を言つて居る。

吾觀二近世人之詩一。非レ不レ佳非レ不レ工。只欠伸精神。絶無三有生氣一也。公此篇一氣呵成。□□□□。但□讀青邱白。□□自嘆。二十□□□。可□□□□。□□拜讀。

有に言ふところの□□□靑邱白□□に是れ眞に傳來の詩風を□□したるものなることは何人にもそれと推せられる。青厓は□□の詩人下に取りては隱然たる一敵國と見ねばなるまい。

一方青厓の側を見れば□□に□□を負ふところの蒼海伯の次韻を得たるのみならず、その次韻の詩中にいふところの詩句は青厓をして九鼎大呂よりも重からしめた。蒼海のその篇の詩句一二を摘み出せば左の如きものがある。

青厓居士□□者。□□自也□英風。

これは青厓の□□□を□□ものである

借問天下□□有□人。是又中□□二人中

龍。

これは青厓は□□□詩人としてえらいばかりではない、その人物もえらい人であるぞといふのである。

當時□□□□□□□□にあるや、□□□□之の字□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□□に□□たる後、□□□□□□□□□□□□□日暮

の喧嘩に關係するに至つた。偶[illegible]に依りて[illegible][illegible]ぶ[illegible]を合して[illegible]をもかかる槐南に擁擁せられたのは是等の關係からである。元もあれ、[illegible]は此の時分まで[illegible]といふ時事新報の新體詩を募めた人として知られたに過ぎなかつたが、[illegible]の事あつて始めて青厓の詩名は世に知られたのである。

詩人の喧嘩

明治二十九年頃と思ふが、[illegible]聞に詩人の喧嘩といふ見出しの記事が出た。その切拔きは左の如くである。

又しても詩人の喧嘩、と申しては長屋の喧嘩にあらねば濫りに出刃庖丁を持つて横合から飛び出ることと見られ。先づ騒ぎを丹田に落ちつけて緒のあらましを聴くべし。頃は明治二十九年の一月、新玉の年立ち代りて四方靜かに枝も鳴らさぬ平家詩人の御代太平と思ひの外、俊寛等一味の者共窃に鹿ケ谷の山莊に會してより〳〵に謀叛の相談を凝らし由注進する者ありしにぞ、さてこそゆゝしき大事なれ、捨て置くべきにあらずとて、平家の御大將は狼狽一方ならず、絶間なく間者を入れて敵の樣子を探らせ、猶は流行、人の心に[illegible]き事立てゝ心を配る所に、[illegible]れたるより現るゝはなくさすがの新詩に[illegible]々に現れ來ることぞ是非なけれ、之を如何にといふに、青厓山人主謀となり、[illegible]南人[illegible]の[illegible]・[illegible]の詩人をかたらひて、[illegible]會を名とし今年一月小石川雀鵲ケ谷の[illegible]田場に會したるがそも〳〵謀叛の始まりと聞えし、さて人々も大方に集まりしかば青厓は[illegible]一喝徐ろに轡を撫でて言ふやう、今日[illegible]の主旨は[illegible]も知らるゝ如く我々が組織する星社といふものはありながら槐南一派の勢力強くして星社は槐南が率ゐ居るが如く世人に思はるゝこと殘念の至りなり、されば我々はこゝに同志を糾合して、大吟社を起し、星社を敲き潰し併せて槐南方を押へつけギウの音も出ぬやうにしてやりたしと思ふなり。諸君の高慮如何と言へば皆々手を拍つて此の企に賛成し連判状に迄加はりければ、青厓を總大將と推し山房の主人を兵糧方と定めて、後は[illegible]行はや興に入りて瓶子は平氏などとさゞめき笑ひける、此地指ケ谷なれば之を鹿ケ谷に擬し且つ鹿谷の音、六國に通ずる故之を六國糾合と名づけけるとかや。（下略）

右の記事は[illegible]二十九年[illegible]の事柄であつたが、[illegible]は、青厓[illegible]竹と槐南との[illegible]に見れば、お互に[illegible]の[illegible]で[illegible]學上どれ程緣するところがあるか判らぬ。右の記事に對照すべき事柄は下文を見て了解せらるゝであらう。

及予詩一出、槐南[illegible]、[illegible]塗澤太甚。[illegible]情何在。呼予已下[illegible]宣出其萬一。又何有於塗澤哉。予因[illegible]槐南曰。足下既言可以銘[illegible]、槐南復[illegible]曰、圖[illegible]、[illegible]大興六國糾合之[illegible]、[illegible]自保。固非強[illegible]、[illegible]艶耶。[illegible]吟[illegible]爲知己、[illegible]拖、無不備至。[illegible]日[illegible]南、乃備包藏禍心、合八鶴是[illegible]庸愚、何可不自防乎。予於是乎始知槐南前詩之所爲、而驗其居心之狹曲也。予答書曰。青厓游戲時。諸家所評隲、僕不能無異辭、更將細論之。是僕高厓之素也。不意此事有市出三虎之訛、若糾合六國誓則頭顱云云。固是道聽塗說之言、幸勿深勞意。僕平生與足下友善。豈有他心哉。但其稱古攻文。僕所不辭。黨詞

伐異。僕所[illegible]下少陵同宗。（下略）

石は穩竹が試[illegible]中[illegible]せたものであつて、前勝に[illegible]た[illegible]事中[illegible]圖糾合の事柄もそれと推せらるゝであらう。能く以上の諸文を讀んで見る[illegible]も全く[illegible]方のないことでもないやうだ[illegible]し大體[illegible]南の疑心暗鬼であつた。[illegible]南[illegible]の如き詩を作つたのはその時のことだ。

人皆欲レ殺[illegible]　始信吾生是謫仙。玉
不レ言桃花[illegible]在二草堂前

大正時代

大正の詩壇は[illegible]の天下であることは詩人も知つて居る[illegible]以前の[illegible]を識つて居る人から見ると[illegible]に不可思議である。なぜなれば以前の[illegible]は添削[illegible]でも容易なことで見てくれる人ではなかつた。然るに大正時代となつて、[illegible]といふ風に變つても出來て、[illegible]はかゝさず[illegible]る。香雨[illegible]る。[illegible]が、これ[illegible]それに與つた[illegible]、[illegible]社、雨社が興り、外に雅友會といふ田舍から送り來る詩を[illegible]てやる吟會がある。是等の吟社は每月一回[illegible]會を開いて[illegible]に添削を乞うて居るのであるが、一社少くとも十二三人はあるであらう、そしてそれ等の連中は少くとも二首位の作詩を持つて來る、中には十首も慾張つて來る人もある、さうすると一吟社で少くとも三十首は添削してやらねばなるまい、それが六社あるとすれば全體として百八十首程添削する計算となる。から見て來ると青厓翁が今の詩壇に對する[illegible]あたりと賞讚の辭を贈らざるを得ぬ。扨それが實際に如何程の功能ありやといふに至りては大なる疑問であつて、[illegible]などは久しき以前から「今の詩壇は青厓を荷馬車の馬の如く虐待して居る」といふ意見であつて、斷じて大詩人を遇する所以でないと思ふ。

話が思はず脫線したが、話戻りて、曾て詩を添削したことのない先生が、右様の虐待をさへ自ら甘んずるに至つたのはそも[illegible]のそゝのかすところであつたか、それを[illegible]簡單に語つて見よう。

大正[illegible]年と[illegible]ふが、[illegible]は[illegible]を[illegible]して、[illegible]に[illegible]ところあり、[illegible]添削を[illegible]ひたい云々。すると青厓は笑つて曰く、君の方は絕句は乃公よりも上手ではないか、只[illegible]を云つてくれといふのならそれは面白いから御相談にのつても苦しうない……[illegible]公の張良に[illegible]するが如き安排だ。かくてその日は別れた。ところが意外にも青厓は[illegible]の宅へ出掛けて行つた。そして[illegible]まづ[illegible]をどんなに惡く云つても怒るまいなと念を押[illegible]、斯くて碧堂が平生得意がつて居た例の七絕を縱橫に[illegible]排しそれぞれの理由を付した「碧堂絕句」の一冊を碧堂に示した。碧堂これを見て愕然としたが、こゝは一つ張良となるべきところだナと怜悧にも如何にも〳〵と平伏して、愈々教をなふこととなつた。それから直ぐに添削とまでは參らぬ。又その次の日かには青先生又やつて來た。今度は藤井竹外の絕句をこれまた縱橫に朱筆を加へたのを碧堂に示して曰く、君の絕句は竹外の絕句よりは上等だ、大に勉強し給へと激勵し、それから[illegible]、[illegible]軒などを[illegible]人にて會[illegible]することとなり、それより[illegible]學[illegible]、[illegible]の[illegible]人[illegible]ることとなつて、[illegible]、メチャメチャに[illegible]した。[illegible]は[illegible]メだ、もう[illegible]を[illegible]するに至つた。

こんな曲折を經て、始めてこの三人が詠社を興した。それが抑も青厓出山の動機となつて、今日の如く終に詩壇の荷馬車馬をさへ辭せざるに至つたのである。奇なるかな青厓の出山や。

蒼海系の詩人

明治大正兩時代は我國において詩想の最高潮に達した時代であると吾輩は論斷する。顧れば享保年代以後は徂徠の僞唐詩行はれ、それから六十年程經て天明年代以來は山本北山一派の僞宋詩行はれ、その後八十餘年にして明治年代となり、森春濤一派の淸詩時代となつた。しかしこの淸詩時代の一角に副島蒼海は漢魏を高唱した。而してこの高唱に和したる者は、曰く國分青厓、曰く桂湖村、曰く石田東陵の三家である。かくの如き高き標榜は我國に詩ありて以來、未だ嘗て見ざるところである。

明治大正の三絶

昔は東都三絶、九州三絶、芳野三絶といふものがあつて、今日に至るまで世の中から忘れられずに傳唱されて居る。吾輩は今新たに明治大正兩時代の三絶を選定して茲に掲げ置く。若しも讀者の贊同を得て廣く傳誦さるゝやうなことになれば光榮の至りである。

明治三絶

鳴雁枯蘆天欲レ霜。烏江暮色正茫茫。
沛公孫子今予在。最レ憐中流弔二項王一。
右副島蒼海[illegible]

環郭皆山紫翠堆、夕陽人倚好樓臺。
香魚欲レ上桃花落。三十六灣春水來、
右森春濤岐阜竹枝

柳暗花明長短亭。片風絲雨記二曾經一。
美人山下萋萋草。吹二上征袍一舊様青。
右本田種竹美人山下口占

大正三絶

開昔天皇按レ劍崩。時無二李郭一奈二龍興一。
南朝天地臣生晩。風雨空山謁二御陵一
右國分青厓芳野懷古

西風斷角動二邊秋一。草白雲黃寒日愁。
底事英雄始皇帝。長城徒自限二中州一。
右田邊碧堂萬里長城

浮雲直北接二三陸一。亂水正南趨二兩毛一。
何草不レ黃風浩浩。平原落日馬嘶高。
右久保天隨那須野

結論

以上吾輩が敍し來つたところを一括すれば、明詩を[illegible]あ[illegible]山、寄[illegible]れを[illegible]茶[illegible]ぎぬ。徂徠、北山、[illegible]この[illegible]を[illegible]して[illegible]何に[illegible]詩學は[illegible]じて大家の音でない。

是等の跡を承けて[illegible]起した[illegible]人は如何、その特[illegible]は、左の一首にて看取することが出來る。

論詩寄似井上[illegible]山　　太白山人

言レ志稱レ詩三百篇　無邪[illegible]
漢唐極盛溯源[illegible]　李杜[illegible]
獨主二性靈一何太易　[illegible]
正葩眞傳溫敦旨　文字初應二不朽傳一

これに據りて見れば漢唐を標則とし、更に唐においては李杜を兩宗とするものであるといふことが出來よう。而して淸詩の性靈とか神韻とかいふのは左樣無造作には參らぬといふのであらう。如何にも神韻派の空疎、性靈派の卑俗は免れざるところである。李杜は確かに兩宗とするに足る特色を有つて居る。李は才力、杜は學力、一は不用意に成り、一は刻苦に出づ。

一は天馬空を行き、一は部伍整然、一は老嫗の如く、一は孔孟の如し。一は法なきが如く、一は法度森然、一は天仙の語を爲し、一は聖賢の語を爲す。一は豪語を爲し、一は寒乞の語を爲す。一は醉うて死し、一は饑ゑて終る。これ程特色の何人の目にも明白なるものはあるまい。今これを揭げて兩大宗とする。神韻と性靈とを以てするに孰れぞや。

青厓の持論はかくの如しとして、扨その出山以後如何と問はゞ、僞唐詩、僞宋詩の餘毒と戰はざるべからず、淸詩の殘粉剩香を拭ひ去らざるべからず、まづ以てこの二つが可なりの仕事である。しかのみならず、詩を學ぶ人達の素質が明治年代よりも低下して居る。これは西學心醉の結果として漢學を高閣に束ねたる餘響である。それに加ふるに、天才的人物は殆ど絶無である。その多くは凡くらである。これを農業に譬へて云へば、土地が膏腴でなく天候も亦良好でない。それが大正の詩壇であつた。かくては老農も復これを奈何ともすることが出來ぬといふが實況であらねばならぬ。故に青厓出山後の詩壇は前代淸詩時代の殘粉剩香を拭ひ去つた位のものである。但し、これは中央詩壇のことで田舍向はずつと後れた風が今を遺つて居るも知れず。

こゝに一寸附加へるのは支那のことである。漢詩の祖國たる支那においては詩は已に亡びたと云はれる。それは詩學を以て一代の泰斗と呼ばれたる森槐南は、嘗て支那から歸りたゞに作つた「戊戌歲晚雙芝仙館剪燭命席上作歌」といふ古詩の中に曰く、「憶昨海外觀風還。禹域詩荒堪二嗟嘆一。徒工二弄雪嘲風辭一。問二其根器一歎如レ啞一と。これ明かに支那にて詩の亡びたことを道破したのである。槐南の宗旨とするところは已に讀者の知らるゝ如く、漢魏にあらず、唐宋にあらず、元明にあらず、淸朝である。その標榜は一番低いところであつた。一番標榜の低い先生の眼に映じたところで、已に詩が亡びたと云はれるに至つては、支那の詩は如何に廢れなものであるかといふことが察せらる。されども槐南が、それ程徹底した詩眼を有つて居たかどうかも考へて見ねばなるまい。しかし左様なる暇がないから槐南の說を大割引して聽くとして、兎もかく支那の詩は衰微したらしい。それは西洋學の侵入とか、戰爭とか色々な原因でそんな有様になつたものと想はれる。それでも流石に文字の國として古書も多く、新書も續々として出で、遺老もあれば遺風もあつて、一概に槐南のいふ如く[illegible]といふのは早計であると思ふ。

青厓の明治大正[illegible]は前段を以て見たりとする。こゝに稿を了へるに臨み、一言の忠言を今の詩[illegible]と思ふ。乞ふ、詩壇の諸君、青厓の一言を[illegible]、諸君が青厓詩人を[illegible]するは[illegible]である。試みに諸君に問はん、「青厓をして一代の師たらしむると、百代の師たらしむるとは孰れぞ」諸君は必ず答ふるであらう、「百代の師たらしむるに若かず」と。然らば[illegible]聲社、[illegible]詩を學ぶ正法でないか[illegible]て自今以後[illegible]めよ。これ[illegible]をして百代の師たらしむる所以である。[illegible]以て百代の師たる[illegible]と語とは、[illegible]せよ。

井 土 靈 山

昭和四年四月十二日印刷
昭和四年四月十五日發行

現代日本文學全集 第三十七篇



著者代表 島崎藤村

編輯兼發行者 山本実
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地

印刷者 杉山愛二
東京市牛込區市ヶ谷加賀町一ノ十二

發兌
東京市芝區愛宕下町四丁目六番地
改造社
振替東京 八四
電話芝(43)

株式會社秀英舎印刷

改造社